

---

# 魔族の掟

ベイカーベイカー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔族の掟

### 【Nコード】

N6851T

### 【作者名】

ベイカーベイカー

### 【あらすじ】

その一：偉大なる魔王陛下に絶対の忠誠と服従を誓い、その眷属として御方の為に死するまで戦うこと。  
その二：魔王陛下の復活と新たなる魔王陛下の誕生の日が来ることを常に祈り、日々の研鑽を忘れずに己を鍛え上げること。  
その三：魔王陛下の宿敵たる人間を根絶やしすべく尽くすこと。  
その四：以上を遵守すること。

魔族代表『マスターロード』。

ようこそ、人間。ここは地獄である。  
ここは、力のみが全てである。

## プロローグ

「お前なんか死んじゃまえ！！！」

そう罵倒されるような人生を歩んできた。

後悔はしていないか、と問われれば、後悔はしていない。  
なぜなら、俺はあいつらが大好きだからだ。

親も、兄弟も、自分を嘲笑うクラスメイト達も、この世の人間全て  
が大好きだからだ。

学校にも通わなくなってもう久しい。  
親の暴力ももうこりこりだった。

俺は家を出て、東京の繁華街を歩く。  
人ごみの中に流されるように、俺は歩く。

「本日、警視庁は昨日自宅にて殺害された辻本氏の息子である、現

在行方不明である辻本命を重要参考人として指名手配することを決定しました。」  
ビルに設置されている巨大なモニターには俺の顔が映っている。

そつだ、嫌に現実味がないと思ったけど、俺、人を殺しちゃったんだ。

しかも実の親である。

今自分は歩いているのではなく、逃げているのだ。

逃げている……？

何から？

現実からは逃れられないではないか。

未だに包丁を父親に突き刺したときの感触が忘れられない。

そつ、これは現実なのだ。

決して逃れることは出来ない。

だが、分かっているても、『それでも』に頼るのが人間だ。  
俺もそんなつまらない人間の一人だった。

俺は、更に逃げた。



今日の寝床は東京湾の倉庫が立ち並ぶ場所。

たまたま誰も利用していないところに入り込んで、夜の寒さを凌ぐ。

死にたくなるほど惨めだった。

しかし、ふと思う。俺など生きてどうするのだと。

そんな自嘲に薄笑いを浮かべていると、なにやら話し声が聞こえてきた。

複数の人間の気配・・・追っ手か!?

そう思つて倉庫の隙間から覗き見るに、どうやらそれは違つようだった。

ある意味、警察より厄介かもしれない連中だった。

「(裏取引・・・!?)」

いかにもマフィアつて感じにスーツを着こなした男達が、俺には分からない国の言葉で話をしていた。

取引相手は見えなかったが、直感的にヤバイと俺は感じた。

俺は急いでその場を離れようと、その場から立ち去るため立ち上がった。

が、それは出来なかった。

「何をしている。」

どこか日本語とは違う言語なのに、確かにそう言われた。

背筋が凍るなんて体験、後先これだけであると願う暇もなかった。

俺は即座に引きずり出された。

殺気立つっつてというのがこういう自分が殺されるなんて状況に陥って初めて理解できた。

スーツの男達が拳銃を構えて、俺に銃口を向けたのがうつぶせにされた状況でも分かった。

どうでもいいことになるかもしれないが、この連中の取引相手は俺を引きずり出したこの男らしい。

妙に古めかしい様相のローブで顔まで隠して素顔は見えないが、たった一人でこの物騒な連中と相對している。他に仲間は居ないようだ。

それにしても、さっきこいつはこの連中と話していたのにいつの間  
に俺の背後に回りこんだのだろうか。



かちゃ、と銃口が俺に向けられる。  
本当にどうでもいいことを考えてしまった。  
走馬灯になるような思い出なんてない。

何で俺がこんな目に遭わないといけないのか。  
やっぱり、人間なんて大嫌いだ。  
もう、人間の居ないどこかにいつてしまいたかった。

そうして、俺はギロチンを落とされる死刑囚のような気分でただ恐れるしかなかった。

だが、その直後、マフィアの仲間らしき男が怒鳴りながら倉庫の中に入ってきた。  
なにやら焦っているらしい。

それを聞いて取引相手の男は舌打ちしたのが聞こえた。

そして、ドガン！！ と、爆音が聞こえた。

何が起こったのか、分からずに居る俺のすぐ近くでも爆音が聞こえた。  
スタングレネードか何かかかもしれないが、そんなものが投げられた音はしなかった。

何より、それには衝撃が伴った。

俺は勿論、周囲のマフィアみたいな奴らも成す術無くなぎ倒された。

「いたツ……なにが……」

どうにかして目を開けて何が起こったか確認しようとするのと、「ごろん」と俺の横に小箱が転がっていた。

それは連中が取引しようとしていたものなのだろう、連中の持っていた木箱が倒れて中の緩衝材が零れ落ちている。

「なんだ、これ……」

それは一見してただの小箱だった。

だが、不思議な魅力があつて俺は思わずそれを手に取ってしまった。

蓋も無い手に収まる程度の大きさ、奇妙な文様が刻まれており、どういふものなのかも分からない。

こんな状況なのに俺はこの木箱に魅入られたように眺めていると、だっただっだ、と十人以上の足音が聞こえてきた。その足音の正体はすぐに判明した。

いつの時代だと思わず言いたくなるような、板金鎧……フルプレートのアーマーに身を包んだ一団だった。そいつらは両手に物々しい鈍器と思われる鉄棍を持っていた。まさに時代錯誤の騎士といった風体だった。

マフィア達は咄嗟に拳銃で応戦するが、その重厚な鎧は拳銃弾など弾き返し、頭から思いつきり鉄棍で殴られて叩き伏せられた。

瞬く間にマフィアはそんな鎧の一団に制圧されていく。

そして、その中の一人と思わしき女性用の鎧を着た者が、血の塗れた剣を携え俺に近づいてきた。

「く、来るなあ!!!」

思わず俺は、その剣で真つ二つに斬られる自分を想像してしまった。そう思ったのは連中が板金鎧だけでなく、頭にも鋼鉄のヘルムを被っ  
つていて表情が見えないのも一因だ。

殺される、と思ったのだ。

その時である。

「ッ!?」

手にしていた小箱が、淡く青っぽい色に輝いたのである。

驚いたように鎧姿の騎士は俺に手を伸ばした。  
しかし、それは届かない。

そして、

俺の意識は消失した。

## 第一話 ここは地獄

泥に浸かるようなまどろみが俺を支配している。

目を開けるのも億劫で、そんな気分が覚醒を阻害する。  
このまま永遠に睡魔に心を委ね、怠惰を貪りたかった。

それも、耳障りな音が阻害する。  
そして痛覚。

「……………あッー!!」  
俺は強制的に目覚めさせられた。

「……………」  
目を開けると、そこには爬虫類の顔が目の前に有った。  
それはトカゲに近いが、良く見るとまったく違うし、角のような物  
まで頭部には生えている。

全体を見渡せば、それはヒト型であり、両足を持ち立っていた。  
一言で言うと、化け物だった。

「な、なんだ、お前!？」

俺がそう叫ぶと、化け物はトカゲの顔を無理やり笑わせたような表情を浮かべて踵を返した。

そしてそのまま、人間には決して発音できないだろう言葉で何かを叫んだ。

すると、ぞろぞろと周囲の民家らしき場所からまたもや化け物が現れたのである。

その種類も多種多様で、一目ではどんな奴らが居るのかは全容を把握できない。

恐怖より、まず困惑の方が先に訪れた。

ここはどこなのか、この化け物どもは何なのか、

俺は呆然とする他なかったのだ。

例え何か出来たとしても、今の俺は両手を縛られ爪先立ちになるくらいにまで吊るされていたのだ。

何か出来たとは到底思えない。

最初のトカゲの化け物が特に背の高い褐色肌のごつごつした外見の鬼みtainな化け物と言葉を交わす。

すると、化け物の中から下半身が蛇、上半身が老婆の姿をした怪物が目の前に出てきた。  
まるで物語に出てくるラミアそのものだった。

トカゲの化け物が俺を拘束していた縄を解き、背中を押した。  
軽く押したつもりなのだろうが、その力は強く俺は前のめりになっ  
て這い蹲る。

そして、ゴテゴテの装飾で着飾った老婆のラミアは俺の目の前に銀  
色の指輪のようなものを投げつけた。  
思わずラミアを見上げると、自身の指で指輪をつけるジェスチャー  
をしてみせた。

訳も分からない俺だったが、トカゲの化け物が訳の分からない言葉を  
を投げ掛けてくる。

俺は反射的にその指輪を指に嵌めた。  
そうしないと身の危険があると感じたのだ。

「さて、それでこいつに人間に良く似た猿じゃ言葉は通じるはずだ  
がねえ・・・？」  
こちらの様子を窺うようにラミアはそんなことを言った。

不思議な感覚だった。  
相手は確かに人外の言葉を話しているのに、その意味が俺に伝わっ  
てくるのだ。

この指輪の所為だろうか。

「どうやら伝わっているみたいですよ、流石はラミアの一族にその人有りと言われた御方だ。」

「いひひひ、当然さね。」

トカゲの化け物の言葉にラミアは口元を歪めて笑った。

このラミアの上半身は人間に見たいでも、顔は蛙みたいにのっぺりとしてとても親近感なんて沸くはずも無い。

「さて、人間。どういう目的でここに侵入してきた？」

褐色の鬼が俺に詰め寄ってまさに鬼気迫る表情で問うてきた。

「止めないか、どうせそいつは何も知らんよ。」

「婆さん、どういうことだ？」

「連中にしちやあ魔力が薄い、仮に連中の同類だとしてもそいつがこんなハイレベルなマジックアイテムを持っている理由がない。それになにより連中はとても合理的だ。こんなわけの分からんことをするかね？」

「確かに……。」

「あたしや偶然迷い込んだ迷い子だと思っね。どちらにせよ、不幸なことには変わりやせんだろうが。」

ラミアの婆さんは俺があの時手にしていた小箱を持って褐色の鬼を諭した。

「それにこいつはどうやら任意に転移できるほど便利な代物じゃな



さそうだね。限りなく白さ。とりあえずこいつは“代表”に引き渡すってことになるかね？」

「ならこちらで預かって良いかな？ 人間に興味があるんだ。」

「好きにするといいさ。」

トカゲ人間の嬉しそうな声にどうでも良さそうにラミアの婆さんは返した。

「くれぐれも逃がすなよ。」

「逃げてどうにかなるとお思いで？」

トカゲ人間の返答に、ふっと鼻を鳴らしたように褐色肌の鬼は踵を返した。

彼が手を叩くと、今まで野次馬としてこちらを囲んでいた化け物たちが散り散りに去っていった。

そして、俺はこのトカゲ人間と二人きりになってしまった。

「さあ、じゃあ早速僕の家に来てもらうか………おや？」

トカゲ人間が俺の方を振り返ることに、俺はとっくの昔にこの化け物の巣窟から逃げ出していたのだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

.....

俺は走った。

そんなに大きな集落ではないのか、簡単に化け物の巣を突破することは出来た。

その先には深い森で、向こう側が見えないほど木々に満ちていた。

時刻は夜なのか真つ暗であり、夜の森は非常に危険である。

しかし、あんな化け物がいるところに居るよりずっとマシだ。

「あいつら、絶対俺を喰う気だ!!」

心臓がバクバクと恐怖で悲鳴を挙げている。

全速力で走っているせいもあるが、今は恐怖の方が断然大きいと断言できる。

あんな異常な空間に放り込まれば、誰だって逃げ出したくなるのは当然だ。

俺はあんな状況で平静で入られるほど狂っちゃいない。

「んが!」

暗い森の中だけあってか、俺は何か堅いものに正面衝突してしまった。

「いつてえ……」  
その痛みから俺は思わず尻餅を突いてしまう。

「くそッ……こんな時に……。」  
俺はぶつかった物を避けて通ろうとそれが何か確認しようとして、  
違和感に気づいた。

「なんだ……これ……」  
てつきり木にでもぶつかったのかと思った。こんな暗い場所だ。

しかしそれは、“壁”だった。  
無色透明で、それに両手で触れば、俺はパントマイムでもしているかのように見えるだろう。

奥は周囲と同じように暗い森が続いていると言っているのに、

「そこから先は、“無い”よ。」  
振り返れば、あのトカゲ人間が悠然と歩いてきた。

「俺に、な、何をしやがった、魔法か何かか!!」

「魔法と言えば、魔法なのかもね。」

普段なら自分でも正気を疑うような言葉だが、相手は肩を竦めるだけだった。

「ここは円形の形状をしていてね、直径は百キロ、高さ千メートル。僕らは“箱庭の園”と呼んでいる。

だからその先は本当に無いんだよ。本当なら味気ない白亜色の壁が広がってるばかりなんだけど、景観は大事だからね。」

聞いてもいないことをこのトカゲ野郎はべらべらと喋る。

考えてみれば向こうの言葉が分かるが、こちらの言葉が通じるとは限らないと言うのに思わず怒鳴ってしまった。

「……ここはいつたいたいどこなんだ……?」

そんな自分が馬鹿らしくなって冷静になったは良いが、そんな風に俺はおもむろに問うてしまった。

「今言っただじやないか、君はここがどこかと問われたら地球だと答えるのかい?」

「ここは、地球なのか……?」

てつきりどこかの異世界に飛ばされたのかと思った。

だからトカゲ野郎の小ばかにしたような態度なんて気にならなかった。

「しかし、てつきり無口な人間かと思つてたけど、回りを観察する冷静さはあるんだね。」

普通、人間に限らずこういう異常事態に陥つたら少なからず錯乱したりするはずなんだけど。」

しかしこちらの言葉も問題なく通じるようで、彼は俺にもギリギリ笑みを浮かべていると分かる表情を浮かべている。

しかも腹立たしいことに、今逃げ出した相手を目の前にしていると言うのに、そんなことまるで気にして居ないといった風体だった。

いやむしろ、こちらのことを完全に馬鹿にしているのだ、こいつはその視線は、人間に例えるなら大人が幼少の子供の悪戯を眺めるような、そんな取るに足らない事実を見ているような……。

「……混乱は、してる……。今でも自分の頭の中が整理できてない。」

「当然だよ、じゃなかつたら狂人だ。」

だけど無謀と蛮勇は同義だと覚えておくといい。人間の取り柄はちんけなその頭に詰まった知恵だけなんだから。」

そう言つて、トカゲ野郎は周囲に目を向けた。

そして、ぞくりと、その時俺は闇の中から視線を感じた。

ひとつやふたつではない、無数にだ。

その視線は互いに牽制をし合っているのか、ある種の均衡を保っていた。

それはなぜか、  
愚かな獲物を狩ろうと狙っているから  
だ。

その愚かな獲物とは？

俺だ。

改めて、服の中が汗で気持ち悪くなるのと同時に喉の奥が渴いてい  
くような事実だった。

闇の中に、何かが居る。

それもこのトカゲ野郎のように話の出来るような理性的な連中じゃ  
ないのは直感と本能で理解できた。

そう思うと、さっきの言葉も皮肉にしか聞こえない。

「この時期は魔獣も出るから気をつけたほうがいい。

魔獣はわかるかい？ 魔物の変異種や上位種だ。小さくて三メートル  
から大きくて十メートル以上の化け物さ。」

「俺からすればお前みたいなトカゲ野郎も化け物だよ。」

調子に乗ってそんな憎まれ口を叩くと、俺は急に浮遊感に襲われた。

「う、うあああああああああつあああ！……！！……！！……！！」

投げられたのだと地面に叩き付けられたから気づいたときには、周

罅には獣のような唸り声に囲まれていた。

俺は恐怖から情けなく悲鳴を挙げることしか出来なかった。

「おい人間、訂正しろ。」

トカゲ野郎が今までと打って変わって急に冷徹に聞こえる声色で言った。

そうこうしているうちに、周囲の唸り声の包囲網は徐々に縮まってきた。

「僕は誇り高き竜の化身の一族のドレイク。

お前のような取るに足らない人間が、こともあるくに奴隷のリザードマンと同列に扱って良いと思ってるのかい？

魔物の餌になりたくなかったら訂正しろ、今すぐにだよ、下等生物。

「まるで教師が優しく教え子に教え諭すような口調であった。

内容は酷く残虐なものであったが。

「わ、分かった、悪かった！！ 訂正する、訂正するから！！」

「二度目は無いからね？」

トカゲ野郎・・・もとい、ドレイクは俺の周囲の魔物を蹴り上げながら近づいてきた。

魔物は力の差を感じ取ったのか、ドレイクから蜘蛛の子を散らすよ





「くそ・・・くそお・・・」

俺は押し込まれたドレイクの家の中で悔しさに震えていた。

引きずられた時に出来た擦り傷がジンジンと痛む。

それが自分の情けなさを責めているようでお悔しかった。

そこで、がたツ、と音がして、全身が震え上がった。

扉の方を見ると、緑色の肌を持った醜悪な大男が窮屈そうにドアを潜って室内に入ってきた。

「な、なんだよ・・・」

「・・・・・・メシ。」

無口なのかそれとも会話する気がないのか、そいつは手に持ったお盆にスプーンとスプーらしきものが乗ったものを俺に差し出してきた。

そのスープは紫色の液体でぐつぐつと沸騰して湯気が出ており、目玉みたいな物まで浮いている。

「こ、こんなもん喰えるか!」

魔女の釜の底みたいなスープに、俺は差し出されたお盆を振り払った。

床にスロープがぶちまけられる。その中には得体の知れない物体や幾つもあった。

ジロリ、と大男が俺を見やった。

「な、なんだよ……」

「……」

しかし、その緑肌の大男は俺を一瞥しただけで何も言わず、雑巾を持ってきて掃除し終わるとそのまま去っていつてしまった。

「くそ……なんで俺はこんな目に……」

部屋の隅で膝を抱えるようにして震えるしかない俺。

だけど、助けてほしいとは思わなかった。

俺なんかがいっただい誰に助けを求めると言っただろうか。

人間なんかに助けを求めるくらいなら、このままあの化け物のどもに喰われた方がマシだ。

「うう……くそ……くそ……くそ……」

そして俺は、そのまま恐怖に脅えるように泥のように眠った。



## 第二話 箱庭の園

「オークの彼に聞いたよ。

ダメじゃないか、食べ物で粗末にしちゃ。最近食糧不足なんだから。

「翌日になって俺が目を覚ますと、テーブルの横の椅子に座って本を読みながら黒いパンのようなものを齧っているドレイクがいた。」

昨日は暗くてよく見えなかったが、ここは書斎らしかった。

それほど大きな部屋ではないが、壁の代わりに本棚があると思うくらい所狭しと本が敷き詰められている。

「……これはッ」

そして、その中に日本語の本があった。

夏目漱石著、『心』の初版だ。

本の価値は分からないが、これは中々手に入らない代物ではないのか？

「本当に、ここは地球だったのか……。」

「へえ、文字は読めるんだ。中々のコレクションだろう？」

僕の父親の集めた奴を少しばかり拝借したものばかりだね。」  
「いまだ異世界かどこかに連れて来られたと思っていた俺は、どこか泣きたくなくなるほどの安心感が去来したのだ。」  
「だからドレイクという言葉なんて耳に入らなかつた。」

「ここは・・・どこなんだ？」  
改めて、俺はドレイクに問うた。

「だから、ここは“箱庭の園”さ。僕ら魔族はそう呼んでいる。」  
「魔族・・・。」  
その言葉が彼ら化け物全体を称している言葉だと容易に想像でき、それを裏付けるような意味が脳裏に伝わってくる。

「場所は世界地図で太平洋の経度180度、緯度45度くらいに位置する、三十層からなる巨大な建造物さ。」

日本語が読めるってことは、君は外の人間なんだろう？  
ならば君から見ればこの場所は異世界から約千年もの昔、この世界に移住してきた人間の魔術師が支配する場所、だね。」

「人間の・・・魔術師？ ここには人間が居るのか！？」  
「居るには居るよ。十五層より上にだけど、そこから下は我々魔族の領域だ。ちなみにここは第二層。」

「そんな・・・。」  
そんな話を聞かされて、改めてここは化け物しか居ないと言つことが理解できた。理解させられてしまう。

「・・・だけど、そんな建造物なんて俺は今まで聞いたこと無いぞ。」

「当然だよ。魔術師たちは自分達の存在を秘匿しているんだから。」

「どうしたって・・・そんな自分達を隠すんだ・・・。」

「魔術師どもの使う魔術は神秘性が重要だからさ。」

君は飢えている時にパンを恵まれば感謝するだろうが、それが毎日続けばいずれその感謝を忘れてしまう。魔術師の魔術も同じ理屈さ。

大勢に知られ広まれば、その神秘性が失われてしまうだろう？

だから彼らは歴史の裏側に隠れて潜んでいる。

まあ、外の世界の歴史を見れば、裏で魔術師どもがどれだけえげげないことをしてきたのか想像に難くないけどね。」

ばん、とドレイクは本を閉じて俺に向き合った。

「僕は外の世界に興味があつてね。君に色々と話聞きたいと思つていたんだ。」

「何でだよ、自分達で行けば良いじゃないか・・・。」

そう言つてから、俺はこいつらの存在も昨日初めて知ったことを思い出した。

「残念ながら、この“箱庭の園”の主権を持つているのは人間の魔術師なんだよ。僕らは現在争つていないだけで、敵対しているんだ。外に出してもらえないはずがないだろう？」

「・・・」

「“代表”はいずれ外に進出するって嘯いているけど、どう考えてもこの調子じゃあ僕が死んでも達成するのは無理だ。」

陛下が現れない限りね、と呟くようにドレイクは付け足した。

「だから君に外はどんな風になつていいのか教えてほしいんだ。大陸が七つ有り、巨大な海と呼ばれる塩っぱい水溜りがあるんだろう？」

「その前に、俺はどうなるんだ・・・？」  
今聞いた話では、彼らは人間と敵対しているようだ。  
それを聞くまでどうしても不安が拭えない。

「さあ？ それは“代表”次第じゃないかな。」

「代表つて・・・お前らのか？」

「そう、僕ら魔族の代表交渉役。」

この“箱庭の園”を支配している魔術師のトップはその前身の組織から『盟主』と呼ばれているんだけどね、代表はその『盟主』の配下である十一人の最高峰の魔術師が居るんだけど、その十一人の一人に数えられるくらいの強大な魔術師さ。

お陰で僕ら魔族からの人気はすこぶる悪い。人間に媚売って力を手に入れたつて揶揄されているくらいさ。」

「でも、交渉役なんだろ・・・？ ひどいことはされないよな・・・？」

「君は“代表”のことを大使かなんかと勘違いしてるんじゃないかな？」

ドレイクはテーブルに肘を立てて頬杖を突きながら笑う。

「“代表”の主な役割は、人間の供給だよ。」

「・・・え？」

俺にはこいつが何を言っているのか分からなかった。

「要は上から人間を攫ったり、買ってきたりするのさ。儀式に使ったり食料にしたりと、用途は色々だけど。」  
あまりにも当然のように言う彼に、俺は体の震えを抑えることはできなかつた。

「僕らからしたら人間なんか脆くて労働力なんかにしないし、色々な技能を持つてる人間を趣味で飼ったりしている有力者もいるけどね。」

ああ、そうそう。一昔前に人間を薬で壊して慰み者にして遊ぶのが流行ったなあ。君は技能なんて無さそうだから多分それかさっきの奴かのどつちかだと思うよ。」

「じよ・冗談じゃないッ!!」  
改めて、こいつらは人間とはかけ離れた価値観を持っていることを俺は確信した。

このままだと確実に殺される、と思った。

「魔族の中で生きていくには、四つの要素が必要さ。

“代表”のような公的な機関で力を保障された“権力”。

長く生き、力や知恵を溜め込んで年功序列の中で力を得る“年齢”。  
生まれながらにして強さを約束された“種族”。

そして、何よりも必要なのは、何事にも変えがたき絶対なる“力”  
そのものさ。」

ドレイクは言う。



「君は、この中でどれを持っているんだい？  
その中のどれも持っていない君には、生きている価値なんて無いの  
さ。」

ただ餌になり、喰われ、強者の糧となりその存在の意義を見出すし  
かないってことだよ。」  
残酷な現実を突きつけて、言うのだ。

俺は昨日の夜、魔物に囲まれた時の恐怖を思い出した。  
あの時、俺は何も出来なかった。

恐怖に脅え、震えて叫びながら助けを請うことしか出来なかった。

「俺は・・・死んだ方がいいのかな・・・？」  
気付いた時には、俺はそんなことを泣きながら問っていた。

その時初めて、そのドレイクはニヤついた笑み以外の表情を見せた。

汚物を見るような、侮蔑の表情だった。

「自ら生きようとしなない生物が、どうして生きる必要が有ろうか。  
君達人間は下手な知恵を得た故に、とても愚かしい。  
簡単な話じゃないか、死にたくないなら、どんな手を使ってでも生

きるのが“動物”だろう？

なぜ人間は難しく考えて、それで賢しくなつたつもりになるのか理解できないよ。己は全ての肯定者だろう？ 自分を自分で裏切つてどうするのさ。」

「そんなの・・・力を持った奴の意見じゃないか。」

「当然だろ？ 力の無い奴の話なんて誰が聞くんだい？

力の無い奴の意見なんてこの世には無いのさ。ただ握りつぶされ、消えていだけなんだから。」

この場所に、人間の倫理や正論なんて通用しない。

己を貫き通すだけの力が無ければ、ただの栄養源として朽ちるだけなのだ。

この生まれながらの強者は、それを良く知っている。

「今日の昼には、君を“代表”に引き渡すための役人が来る。

役人っていうのは建前で、“代表”の私兵だけだね。『盟主』は個人的な戦力の保有を禁止しているからね。まあ、人間の理屈だけだけど“代表”は一応体面でそういう形を取っている。そして夜には“代表”と会うことができるだろう。自分の運命はその時に占うと良い。」

そして侮蔑の表情のまま、ドレイクは立ち上がって去っていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それと入れ替わるように、昨日の緑肌の大男が入ってきた。

ドレイクの奴が言うにはオークらしい。

俺も知っている、RPGでもお馴染みの敵役の種族だ。

全身は毛だらけだが深くは無く、顔は鼻が豚のように上がっておりかなりの強面である。

そいつは今日も両手でお盆を持っており、その上にはドレイクの奴も食べていた黒いパンのような物体が皿の上に乗せられていた。

「ラミアノオババ様カラ、コレナラ、ニンゲン、喰エル、聞イタ・  
」  
オークはそう言って皿を俺の目の前に置いた。

「ダカラ、食イ物、粗末ニ、スルナ・・・。イラナイナラ、ソコニ置イテオケ。」  
知能が高い種族ではないのか、伝わってくる言葉のニュアンスやイメージは片言である。  
そして、そのままオークは踵を返した。

「お、おい・・・。」  
俺は思わず、そいつを引き止めるような言葉を投げ掛けてしまった。

「・・・・・。」  
そいつは、何も言わずに首だけをこちらに向けてきた。

「・・・・・。昨日は、悪かった・・・。」  
そして、自然とそんな言葉が俺から出た。

オークはその言葉を理解したのかしていないのか、そのまま部屋からのっそりとした足取りで出て行ってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の腹もそろそろ限界だった。

しばらく何も喰っていない気がして、黒いパンみたいなものを掴んで口に運んだ。

まず、硬かった。

保存を前提にしているのか、水分が殆ど無くばさばさしてすぐに口の中の唾液がなくなってしまうた。

ドレイクの奴は軽々と噛み切っていたが、そもその基礎的な筋力が彼我とはまるで違う。

だが、美味かった。

空腹は最高のスパイスとよく言ったもので、世界中のパン職人に失礼かもしれないが、今まで食べたどのパンよりも美味しかった。

泣きたくなくなるほど美味かった。

こんな境遇に陥って、初めて心が休まった瞬間だった。

そう思うと、自然とまた涙が出た。

俺はそんなに涙もろい人間では無かった筈だ。

だけど、悔しさとか、憎しみ以外で、人間らしい感情で本当に久しぶりの涙だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あまりの慣れない硬さに一時間は悪戦苦闘しながら黒パンのようなものを食いきった。

顎が痛くなったのは言うまでもない。

向こう一年分くらいの回数は噛んだと思うくらい噛んだ。

そして、俺はこれからどうすれば良いか考えた。

昼には役人が来て引き取りにくるとドレイクは言っていた。

恐れ入るほどの情報伝達のスピードだ。

相手の対応も早く、彼らの言う“代表”はかなり優秀なのだと窺える。

なぜ俺はこんな目に遭っているのか。

彼らにとって、それは俺が人間だから、という理由で十分なのだろう。

RPGのお約束の如く、連中は人間を眼の敵にしていた。実際に価値観が相容れていないのだから、幾度となく衝突し戦ったのだと容易に想像もつく。

「どうしようか……」  
考えるときに周囲を窺ってしまうのが俺の癖である。

「ん……？」  
ふと、その時一瞬だけ、ある本のタイトルが目に入った。

本当に一瞬だったので、どこにそれがあるのかは完全に見失ってしまった。  
どんな本なのかは分からない、だが、確かにそれは俺にも読める文字だった。

この書齋には日本語で書かれている書物なんてさっきの『心』くらいなもの、圧倒的に外国の書物が多い。  
当然、俺は日本語以外に文字は読めない。中学高校の英語の成績もさっぱりだった。  
その中で、ひとときわ印象に残り目を引いた本があったのだ。

だが、もう一度じっくりと見渡せば、その本はあっさりと見つかった。

『パンドラの書』。

俺には読めないはずの言語で、そう書かれていた。

その得体の知れない本を、俺は自然と手に取って開いていた。

お札のようなもので封がされていたが、俺が手にした時にはジュッと燃え尽きてしまった。

見開きの白紙のページには、一文だけこう添えられていた。

我が知識、真に欲する者のみに託すものなり。W・F著。

次のページ。

あのおぞましき魔族に対抗すべく、彼らに対する知識を我が知る限りの全てをここに記す。願わくは、一人間として人類の敵対者たる魔族の根絶を真摯に祈るものである。我が先見はこの書を執る者を困難に満ちた宿命があると予見する。この書に選ばれた我が友よ、この出会いは偶然ではない。絶望に満ちた道を歩む者よ、どうか我が知識が、貴殿の絶望の片隅に残った希望であらんことを願う。

そう締めくくられたあまりにも短い序文から先は、まったく言うて良いほどの白紙だった。

最後まで無心でページをめくると、そのままパン、と本を閉じた。

「ふうう……」

それだけで、本当に本を一冊読んだような充足感に満ちた。

「あれ……？」

だが、そこで俺は我に返ったように手元に残ったその本を見下ろした。

「え？」

そして、その異常に気づいた。

言葉では理解できないだろうが、ありのままその現象を語ると、次の通りだ。

ずるずる、と文字が這い出しているのである。

閉じた本のページとページの合間から、ずるずると無数に溢れ出るように這い出してきたのだ！！



「ああああ、ああああああああああ！！！！！」  
ホラー映画のような現象に直面し、俺は叫ぶしかなかった。

その這いずる文字は、俺の肌に触れると皮膚の下に潜り込んでだんだんと頭に向かってどんどんと向かってくるのだ。

手から本を放そうにも、まるで接着剤や半田ごてなどで溶接されたようにぴったりとくっついて離れない。

「あが、ががががああが、あががががががががが！！！！」  
そして、その文字は俺の脳みそに侵入するように入ってくる。

その異様な感触を、言葉や文字にすることは不可能だ。

だが、自分の記憶に無理矢理無数の文字を差し込まれ、文章として組み立てられるようなその現象を、熱のようだ俺は表現する。

熱した鉄で脳みそに文字を刻まれるような、気が狂いそうな熱である。

「いぎぎぎあああがが、やめ、も、やめてくれ！！」  
俺は、床に転がってのた打ち回ることしか出来なかった。

どれだけ乱暴に転がって暴れても、その本は決して俺の手から離れない。

どれだけ時間が経っただろうか、悪夢は終わった頃には、俺は力尽

きて何も考えられない廃人寸前になっていた。

だが、狂うことは許されなかった。  
頭の一角に、あの不可思議な文字が何千もの列を成して占拠している。

その知識を活用するまで、決して死ぬことは許さないと主張するよ  
うにジグジグと頭痛をこんな状況に関わらず鮮明に感じられた。

「面白いなあ……。」  
ふと、あのドレイクが俺を見下ろして笑っているのが見えた。  
あれだけの叫び声を挙げて、むしろ駆けつけて来ない方がおかしい  
だろう。

俺が悶え苦しんでいるさまをずっと見下ろしていたのだろう。

「君は死ぬことすら許されないらしい。  
人間の神様の言葉を借りれば、“運命”ってやつだろうね。」  
ドレイクは、いつの間にか俺の手から離れていたあの本を手に取り  
うとした。

しかし、一瞬のスパークが走ると、その本はドレイクを拒絶するよ  
うに地面に落ちていた。

「もはや手に取ることすら受け付けないか。この魔導書は君を完全

に主人と認めたようだ。」

「……ま、……どう……しょ？」

「魔術の知識を記した書物さ。誰にも読めなかった理由が分かったよ。それは人間専用だったんだね。」

地面に落ちた魔導書は最初の序文が書かれたページが開かれていた。

まるで、ドレイクに己の意思を示すかのように。

「決めたよ。僕は君を飼うことにした。」

喜んでいいよー。普通なら僕は君の皮を剥いで中身をくり出して、臓物を引き抜き、僕らの神に捧げるところだったんだから。」

ドレイクはケラケラと笑う。

『検索』、242ページ。

俺の脳裏に列挙する文字列から、一部が浮かび上がる。

種族：ドレイク                   カテゴリー：獣人・竜種

性格：極めて凶暴               危険度：S                   友好性：皆無

特徴：

非常に強大な上級魔族。魔族最強の種族の一角である。

その恐ろしさは竜が人の形にまで縮小したと理解すればよい。

性格は極めて残酷で、冷徹、そして冷酷である。

人類に対する姿勢は古来より敵対を貫いており、彼らが人間に敗北することはドレイクの社会で死を意味するほど嫌悪を示している。全身を覆う鱗は鉄より硬く、刃物はまったく効果を成さない。

その身体能力は、小さな分だけ凝縮されており、下級の竜種などより遙かに恐ろしい。

生命力は並外れており、頭と心臓を潰すまで安心できない。

寿命は三百年から四百年。竜種の中では短い方だが、その分他の竜種より繁殖力に優れている。あくまで比較的にはあるが。

そして、真に恐ろしいのは、彼らの扱う強力な精霊魔術である。

竜は古来より、自然災害・即ち天災を象徴しており、自然を操る精霊魔術との親和性は抜群である。

彼らの己の進化を自分達の信仰する竜神のお陰であると信じており、その竜神はドレイクを人間に模して作ったと伝えられている。

その際、竜神は人間の中身を全て取り除き、自分の子孫の竜を詰めたとされ、それによって彼らは高い知性を身に付けたといわれている。

その伝承から、人間を信奉する竜神に捧げることで力を得られるとされている。

当然、生け贄にされる人間は肉や骨は勿論、臓物を全て生きたまま抜き取られて殺されてしまう。

基本的に己の領地からは離れることは少ないが、出会えばまず間違いないく殺しにくるだろう。

つまり、なにが言いたいかと言うと、さっさと逃げろ。

そんな文章が脳裏に浮かび上がる。

どうやら、俺が想像していた以上の化け物だったらしい。

「役人は適当に僕が誤魔化しておくよ。殺したって言えばそれで済むしね。

僕はね、魔術師になりたいのさ。いずれ人間の住む階層に行ったりしたいのさ、だから僕は君に、人間用の名前を名乗っておこうか。」  
そんなことを笑顔で言うのだ。この化け物は。

「僕はクラウンと名乗ろう。本名は人間には発音できないからね。ドレイクの癖に魔術師に憧れる道化にして、いずれ族長の冠を頂く男さ。」

このドレイク・・・改め、クラウンは野心に満ちた瞳をしていた。それについての情報も脳裏に浮かぶ。

ドレイクの社会は集落を作って一塊に住まう。

彼のように単独で辺境に住んでいるドレイクはまず居ない。

このドレイクが俺を殺さなかったのは、単にこいつが変人だからなのだろう。

「期待させてもらおうよ、人間。君の可能性を。」

「俺にも・・・名前はある・・・」

「興味ないよ。人間はここに君一人しか居ないんだから。人間で十分だ。」

「じゃあ、ドレイクもここに一人しか居ないんだ、お前もドレイクで十分だよな？」

大分頭を占拠する知識が馴染んできたのか、もう軽口を言えるほど余裕が出てきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし、その軽口は酷く彼のプライドを刺激したらしく、一気に不機嫌そうな表情になった。

「本当に、面白いね。君って言う人間は。」

これから退屈しそうにないよ、いいよ、名乗れよ人間。」

「辻本、命だ。」

「メイ？ 犬みたいな名前だね。まあ、これから犬みたいに飼われるんだから、丁度良いかもしれないけど。」

「ふざけるな・・・俺は人間だ。」

「そうだね、でもあまり粹がると痛い目みるのは自分だってことを覚えておくといい。僕は寛大だけど、他はそうじゃないからね。」

それは自分の物が他人に壊されるのが嫌ってだけなのだろう、こいつにとっては。

「・・・・・・・・分かった。」

非常に不服だが、こいつは命の恩人である。

形式はどうあれ助けしてくれると言ったのだから、とりあえずは言うことを聞いておくことにした。それこそ天地が引っくり返っても勝

てないほどの化け物のようだし。逆らって寿命を縮めることもない。

「素直でよろしい。」

「じゃあ、メイ。早速だけど、外の世界について教えてもらおうか。」

「今日は勘弁してくれ、頭痛いんだ……。」

「ふむふむ、まあ話なんていつでも出来る。魔導書の知識なんて、それみたいに特別製じゃなきゃ気が狂ってもおかしくない。今日はここに居てもらうけど、明日からは外を自由に歩いて構わないよ。君はもう、魔族の一員なんだからね。」

「人間のプライドを捨てた覚えはないけどな。」

「じゃあ、魔物に食われるかい？」

「……もういいよ、何でも。」

まだ頭が痛むせいか、なんだか話すのが面倒になった。

「まあ、明日、ラミアの婆さまにご挨拶に伺うことになるからね。あの御方は宮殿で“代表”の魔術のご指導をしていたほどの方だ。この僕もご指導を賜っている。隠居の身では有るが、魔術師にそんなものは関係ないからね。覚悟しておいたほうがいいよ。」  
そして最後に不穏な言葉を投げ掛けて、クラウンは立ち去っていった。





### 第三話 力の行方

「そろそろ来る頃だと思っていたよ。」  
いひひひひ、とラミアの婆さんは俺らを見て笑った。

『検索』、196ページ。

種族：ラミア      カテゴリ：混成種・蛇類

性格：比較的温厚      危険度：B      友好性：高い

特徴：

下半身が蛇と人間の上半身を持つ上級魔族。

高い魔力を持ち、上級種には強力な魔眼を持つ種族もいる。

寿命は150年から200年ほどで、ヒトと動物の混成種族としては普通である。

人間の血や子供を好み、浚っては監禁して自ら“飼育”することもある。

その事実を含めても、人間との関係は（一方的にだが）良好に近い。その感性は人間に近いのか、時には人間に化けて愛を交わしたりもする。当然ながら、大抵悲恋で終わる。

検証の結果、人間との繁殖は可能のようで、純粹の人間として生まれる確率は二割、ラミアとして誕生する確率が六割、残りは混血の人間として生まれるようである。

蛇は世界各地に古くから伝承に残っており、自身を触媒とした強力な呪術は非常に脅威である。

蛇は竜と何かと関連性が多く、ドレイク族との友好が確認されている。

魔眼などの邪視に対抗する手段は『邪視』の項目を参照すべし。

と、基本的な情報が文字として浮かび上がってくる。

早朝クラウンと共に彼の家を出て近くに居を構えるラミアの婆さんの家に俺たちはやって来た。

どうやらこの辺はかなりの隅っこらしい。

近くに“壁”があるのだから、隅の隅もいいところだが。

昨日、クラウンは本当にやってきた役人を誤魔化した・・・というより、黙らした。

と言っても、俺が出るわけにもいかず、話を聞いたただけだが。

対応に出たのは、リザードマンだったらしい。

リザードマンとは、ドレイク族の奴隷と言つか、完全に支配されている連中らしく、クラウンの奴が出ただけでへこへこして引き下が

ったとのこと。

「流石は、全て承知ですか。」

「伊達に長生きしてるわけじゃないからねえ。」

種族からして傲慢なクラウンの奴も敬うくらいこのラミアの婆さんは凄い人物らしい。  
まったく俺には実感できないが。

「お前さんがこの場所に飛んできたのは偶然かと思ってたけど、どうやらそうじゃないみたいだねえ・・・」

「・・・どういう事ですか・・・？」

俺が問うと、ラミアの婆さんは薄暗い部屋の中で、イヒヒヒ、と笑った。

「ちょちょい、と占ったのさ。お前さんが手にした魔導書と、この小箱。実は創った人間は同じなのさ。」

「・・・え？」

俺は脳裏に刻まれた魔導書の文字列の最初のページを『検索』する。一晩寝たら、この文字列は完全に俺の知識として定着し、簡単に引き出せるようになった。結構不思議な感覚である。

あの頭がおかしくなるような熱も、知恵熱の一種なのだろう。あの情報を無理やり絶対忘れられないように脳みそに刻んだのだ、そりゃあ痛くもなる。

「・・・W・F・・・？」

冒頭のページに添えられた一文の、そう著作者の名が有った。

「恐れ多い名さ。この世で最も恐るべき魔術師にして、人間の英雄  
現在存在するあらゆる魔術に精通し、その全てに影響を与え、この  
“箱庭の園”を牛耳る魔術師の師でもある。

私如きがその名を口にするのも憚れる。彼は我々魔族を憎んでいる  
からね。」

しかしそんなことはどうでも良さそうに、彼女はそう言った。

「人は彼を『黒の君』と呼ぶ。我らの通り名は彼の怒りを買うだろ  
うから、お前もそのように覚えておけば良いだろうねえ。」

「・・・はい。」

俺は、その言葉に頷いた。

「ではひとつ、お前さん確認しておきたいことがある。」

「・・・なんででしょうか？」

蛇の胴体を縄のように束ねてその上に腰掛けるラミアの婆さんは思  
ったより小さい。

しかし、その迫力はドレイク族のクラウンにも匹敵する。

彼が年功を魔族の中で生きるのに必要な力と言ったのも納得できる  
というものだ。

「お前さんは、これからはどうしたいんだい？」

「え・・・？」

「その魔導書はお前さんに完璧な力を与えてくれるだろうよ。ただどそれを使う目的がなければそれは宝の持ち腐れよ。」

人間として我々魔族と戦うか？ それとも魔王陛下の威光に服従し我ら魔族に属するか・・・？ お前は何をどうしたい？」

「俺は・・・。」

何も考えていなかった。

俺は、クラウンから借り受けると言う形で貰った魔導書『パンドラの書』に目を落とした。

ただ死にたくないと言うことに必死で、偶然この魔導書に出会ってクラウンの気まぐれで命を拾ったようなものだ。

「偶然だと、思っかい？」

「え・・・？」

まるで俺の心を読んだように、ラミアの婆さんはイヒヒヒと笑う。

「かの『黒の君』は、完璧な永久機関を作成することに成功し、己の製作した魔具の全てにそれを反映し、世界にばら撒いた。中には一つで世界のバランスを破壊しかねないほどの代物も有ると言う。その魔導書だけでもただでさえ衰退気味の我ら魔族の勢力を一気に撃滅させるだけの力が有りかねない。いや、有るだろう。」

なれば、この老骨は死力を尽くして陛下の為にお前さんが力をつける前に殺さねばなるまい。故郷にはひ孫まで居ることだしね。」

しかし、その魔導書の防衛機能が内蔵された魔力を尽きるまでお前を守るだろう。あらゆる意味で、完璧なのだよ、その魔導書は。」

「……お前さんは、選択が許されているのさ。  
人間のまま死ぬまで戦うか、魔族に服して殉じるか。」  
語り部のように婆さんは語る。

「その魔導書には、人間の魂が材料として使われている。装丁に人の皮が使われているなんて、それに比べればまだ可愛いものさ。それが所有者として適した人間か自ら選別する。そして、どれだけ離れようとも、本当に必要とする者の手に渡るようになっていく。故に、聞くまでもないことだがねえ。……お前さんは、どうしたい？」

「……俺は……。」  
俺は人間のためになんか戦って魔族を如何こうしたり、魔族や魔王陛下とやらの為に戦ったりなんてしたいとも思っていない。

そんな確たる意志もない俺に、そんな崇高な魔導書とやらが俺を持ち主として指名すること自体がおかしい。

俺はこの魔導書に何を求めているのか、それすらもあやふやなのだ。

「……どうやら、本気で分かっているようだねえ。」  
俺の顔色を窺って、ラミアの婆さんはそう呟いた。

「どうせ運命がお前さんの安寧を許さんよ。遅かれ早かれ、どうするか決めることになるだろうねえ。」

「……クラウン、お前さんが見届けな。こいつがどういう選択をするのか、をね。」

「ええ、こんなに興味深い人間は初めてですから。非常に、楽しみです。」

「それと、“代表”に遣いを。こんな事態じゃ・・・、情勢が動くを見た。」

竜神様から何かしらのお告げを受けているかもしれぬ。」

「それはそれは・・・生け贄の儀式はまだ先ですよ。」

クラウンが生け贄の儀式と言っただけで俺は背筋が震えそうになった。

ラミア族はドレイク族と交友があるだけあって、ラミア族もドレイク族が崇拜する竜神を信仰している者も多いという情報が知識から浮かび上がる。

このラミアの婆さんも、その竜神様とやらを信仰していてもおかしくはないのだ。

「時勢が荒れているからねえ、最後の陛下が倒されて千年余り。陛下に頼らず決起すべしと騒ぐ馬鹿が増えていると聞く。」

四代目魔王陛下の時代はこちらが人類の数を上回っていたと言っのに敗北を記したと言っことを忘れているのさ。」

そう簡単に勝てる相手なら陛下も“代表”も苦労しない。今は雌伏の時なのじゃ。時が満まで待たねば、勝てる戦も勝てぬからな。」

「歯がゆいですねえ・・・。」

「魔族と人類、お互い喰い争いながら決着は着かない。」

そういう仕組みなのだから仕方が無い。だからこそ、この大事な時期に我々の決定的な敗北は許されぬのじゃよ。」

「ええ・・・。」

クラウンは目を伏せて頷いた。

そして、彼は振り返って俺の方に向き直った。

「さて、メイ。次はオーガロードの旦那に挨拶に行くよ。」  
俺は誰だそれ、とは言わなかった。

「ご丁寧に俺の頭に植え付けられた魔導書の知識には文字ばかりだと言うのに挿絵まである。」

それによると、最初に凄んできた褐色肌の鬼のような奴だと一致した。

あの時は暗かったから良く見えなかったが、結構毛深い体をしているようだ。

それ以外は寸胴っぽい外見と歪んだような顔以外は人間に近い。

「あのでかい奴だろ？ どうしてあいつに？」

「でかいと言っても、いつも食事を運んできてくれるオークと大体同じくらいだ。」

「ドレイク族のクラウンは俺と同じくらいの身長なのに。種族によって結構ばらつきがあるようだ。」

「彼は第一層にある宮殿から派遣された騎士・・・つまり、この辺の領主さ。」

「本来なら魔王陛下がおわす宮殿なんだけど、千年もの空席から“不在宮”と揶揄されているけどね。」

「今は“代表”が取り仕切っているけど、統治が満足に行き届いていないとは言えないね。陛下以外に黙って従う連中ばかりじゃないし。見えないところで略奪なんか横行してるって聞くよ。」

「魔族同士でか？」

「普通、大きな町でもなければ、同種族同士じゃないと仲間だと思わない連中ばかりだよ。」



ここは結構多種族が暮らしてるけど、はみ出し者が行き着いた端っこなんだよ。」

「なるほど……。」

それを纏められる魔王陛下とやらはどんな存在なのかと思っってしまった。

そして、その騎士のところに行くために集落の中心を歩くことになる。

何種族もの魔族によって人通りもそれなりに多く、露天や店屋も結構あるのに活気というものはまるでなかった。

自分達が自分達の必要なことをして、それで終わり。

人類も言えた義理ではないが、魔族も協調性は皆無のようだ。

ただ淡々と生きているだけに思えるのは、俺もそんな人間だからだろうか。

魔族も一般人に相当する生産者もいる筈なのだから、そんなはずはないだろうが。

もつと皆が皆、戦闘種族みたいに闘いの準備をしているイメージを抱いていたが、今思うと失礼な話である。

『パンドラの書』には、100種類以上の魔族が記録されているが、既にその四割が絶滅していると出ている。

そして、人間と同等かそれ以上の知能を持つ”上級魔族“は全体の

数から一割、”下級魔族“が残りの九割の数を占めている、と書には出ている。

魔族同士で争いが絶えないのは、恐らくそれが理由だろう。

学校などの教育機関なんて無さそうだし、基本的に知性が低かったり、そもそも会話できるほどの知能がなかったりするのだろう。

・・・おっと、会話できないような連中は、“魔物”と区別されているようだ。

そしてクラウンが言っていたように、魔物の変異種や上級種が“魔獣”と称されるらしい。

分類の仕方はこれで十分だ。

そんな風に自分の物ではない知識を整理し、己の物にする作業を行う。

そうでもしていないと、じろじろと魔族の連中の視線が気になって仕方がない。

「あ、忘れてた。」

すると、突然ぽんと手を打ってクラウンが言った。

なにが、と俺が言う前に、ガシャン、と俺の首に何か嵌められた。

「当面は僕の召使いつて感じで。嫌なら奴隷でも良いけど。」

「召使いで良い・・・」

「とりあえずはそれで、この村で君を害そうとするやつは僕の敵と

みなされる。なにせ、君は僕の所有物という扱いだからね。」  
魔族はかなりガチガチの縦社会であり、上位種の機嫌一つで下は簡単に首を落とされることも良くあることらしい。  
その点、ドレイクに逆らおうなんて種族は同族の上位種くらいだろう。

そして、昨日は面白いオモチャを手に入れたと吹聴しまくっていたとクラウンは言っていたし、そう言う事なのだろう、と俺は納得することにしておいた。

人間にも黒人や白人がいるように、同種族にも何種類か居るようだ。ただ、魔族は人間と違い明確に上位関係あり、段階的に特徴や能力が違うようだ。通常種、上位種、最上位種、という感じに。

そして、これから会うのはオーガ族のロード種ということになる。  
“ロード”はその種族の最も希少で強大な最上位種のことである。  
種族によっては呼び方も違うので、結構面倒である。

それで、そのオーガロードは村の中心に近いそれなりに立派な屋敷を構えていた。  
この集落は村と言っても日本のように木造ではなく、魔族の家はむき出しの石をレンガのように切り出して積み上げたローマ建築に似ている。

それにしてもここだけは大きな塀も付いているし、周囲の民家より数段上である。

「いざとなつたら民間人を避難させる場所だからね。騎士様も大変だろうね。最近大変だから、色々と気を揉むだろうし。」  
それについてクラウンに問うとそんな答えが返ってきた。

「最近物騒だとか言ってたけど、そんなにか？」

「オーガ族の種族性に合わないからねえ、色々と考えるのは。」  
ふふふ、とクラウンは笑う。実際にはぎゃーぎゃーと怪獣のような声だが。

中に入ると、オーガス（オーガの女性形）の夫人が出迎えてくれた。人間の俺から見ても結構美人である。日本では鬼と訳され伝えられるオーガ族は容姿が比較的に人間に近いからだろうか。

日本では鬼は禍々しく描かれているが、旦那と違って女性は違うらしい。俺が知らないだけかもしれないが。

「待たせたな。」

そして、領主のオーガロードが入ってきた。

『検索』、189ページ。

種族：オーガ（ロード：最上位種）    カテゴリ：人型・怪異

性格：極めて凶暴    危険度：A    友好性：皆無

特徴：

基本的なことは通常種のオーガ族と変更はない。詳しくは『オーガ』の項目を参照。

ただ、知性が下位種族より高く、人間には及ばないもののそれなりに複雑なことを考えるくらい知能を持っている。このロード種に限っては上級魔族に分類できる。

戦闘能力は極めて高く、数もそれなりに多いので魔王の軍勢ではトール族に並んで主力である。

鎧などで完全武装した人間を素手で軽く殴り殺せるくらいの怪力を持ち、厚さ十五センチの鉄板を片手で曲げるほどである。

彼らは人間を倒すことを己の武勇の証明だと思っており、人間を見かけたのならまず間違いないで襲ってくる。

己の戦いに誇りを持っているのか、特に一対一を好み、向かってくる相手は正々堂々と戦い、逃げる相手には捕まえてから残虐に殺す。

知性は高くなっているけども、単純なのは変わらない。

複雑な思考を避ける傾向にあり、力押しが目立つ。

しかし、その力押しが単純で強力であり厄介極まりない。

正面からの戦闘は出来る限り避けた方が良さそう。失敗して怒らせると手が付けられなくなるので、引き際を弁えることを留意すべし。

という知識を再確認し、俺はオーガロードの騎士を見据えた。

こうしてみるとかなり迫力がある。

オーガロードの騎士は明らかに不機嫌そうに俺を睨んだ後、クラウ

ンにその視線を滑らせた。

「そつちから来るとはいい心がけだ。役人から聞いたぞ、この変人め。」

「やっぱり聞いてたかい？」

「当然だろう、横暴をそう簡単に許すようでは政府などいらん。」

「政府なんて呼べるほど上等じゃないでしょ、結局は暴力なんだから。」

「だが、我々魔族にも道理はある。お前のやったことはそこの盗賊と変わらんよ。」

「おいおい、誇り高きドレイクの僕を言うに事欠いて盗賊だって？ 飄々と受け答えていたクラウンも、その一言で眉を顰めた。」

「当然だ。宮殿へ引き渡すはずの人間を横から掠め取ったのだからな。」

「人間の二匹二匹、どうってことないでしょ。」

「ああ、だからお前の顔を立てて金で解決することにした。」

「わお、とそれにはクラウンにも驚いたようだった。」

「我々の住む十階層以下の人間の数は厳格に管理されているのは知っているな？」

「だから取引が合ったと言う事実を打ちたて、それを認識させることにした。」

「随分と強引な裏技だねえ・・・。」

「道理を立てただけだ。実質賄賂にも近いが、これで向こうの帳簿にはこの階層に居る人間の数にプラス1されるわけだ。」

過程が変わるだけで結果は同じ。お前が人間の買い付けに行つてそれがお前の手に渡るなら、その手間を省いたと言うことになる。合理的だ。」

感謝して欲しいな、とふんぞり返って不機嫌そうにオーガロートの騎士は言う。

「………いったいどれくらい掛かった？」

「人間の相場に、横紙破りの追加分、俺への手間賃を含めて、これだけになるな。」

あらかじめ用意していたのか、彼は領収書らしき物をクラウンに突きつけた。

「一年は遊べるね……まあ、僕が稼ぐわけじゃないから良いけど。」

「え!？」

「誰がただで助けてやるなんて言ったかい？」

僕は君の主人だし餌代くらいは面倒見るけど、それ以外は知らないよ。そもそもそんな大金持っているわけじゃないし。」

「あんに少しでも恩を感じた俺が馬鹿だったよ……。」

俺は落胆と同時に頭痛がぶり返す気分だった。

しかもこいつら、さつきから俺のことをそれだとか、餌代だとか、完全にモノ扱いである。

「しかし、これで君も完全に魔族として認識されたわけだ。もう君は人類じゃない、人間という種族の魔族さ。」

「………そんなんで良いのかよ……。」

「今は絶滅したエルフ族も、魔王陛下に服従し、砂漠に領地を与えられ長い年月と共に褐色の肌を得てダークエルフと称されるようになった。」

つまり、陛下の懐は広いのさ。人間の一匹ぐらい引き入れても問題は無いぞ。」

魔族も案外いい加減であるようだ。

これでは『パンドラの書』を編纂するために魔族の生態を調べた『黒の君』が可哀想である。

「まあ、それも良いけど。」

俺は溜息を吐きながら呟いた。

「おやおや、君は人類の一員としての誇りはないのかい？」

「今の人類に誇りを持てるほど俺は隣人を愛していないさ。」

興味深そうに訊いて来るクラウンに適当に返しておく、オーガロードの騎士が咳払いをした。

「お前は色々と村の為に働いてくれているから俺が立て替えておいたが、ちゃんと返してもらうぞ。良いな？」

「それはもちろん、返すのはこっちの人間だけだ。」

「ちよつと待てよ、俺にお金を返す当てなんてないぞ。」

当然の事ながら俺は魔族の金は勿論、働き口すらない。

それでどうやって金を返せと言うのか。

「君には力があるだろう？ いや、まだ予定だけだ。」

「人間など出来ることなど高が知れている。全く無駄な買い物をしたな。」

「……ああ、それといつものをこの場所の頼むぞ。」

そう言って地図らしきものをクラウンに渡すと、オーガロードの騎士は、用事は終わったと踵を返して部屋から出て行った。

俺のことなんてまるで意に介していないようだった。



『パンドラの書』の知識を見る限り、魔族の人間に対する対応なんてそんなもんだらうとは思っけど。

「うーん、それじゃあ、僕の用事を済ませたら今日は帰ろう。」

「……次はどこだ？」

「今騎士殿に頼まれた用事を済ませないとね。」

どうせ君も暇だろうから付き合ってもらおうと思っけど。」

「好きで暇なんじゃねーよ。」

「それは悪かった。だけど僕ら魔族の力を知っておくいい機会だと思っよ？」

「……はいはい。」

どうせ自分には拒否権なんてないのだから、適当に頷いておいた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「恐れ入ったかい？」

「……ああ、恐れ入った。」

俺は思わず頷くしかなかった。

あの後向かったのは村の外れである。  
畑が広がっていることから、農地であるのはすぐに分かった。

目的地にはいつも食事を届けてくれるオークが居た。  
どうやら彼は農夫らしく、カボチャくらいの大きさのジャガイモみたいな作物を収穫していた。

と言っても、収穫はもう殆ど終わっているようで、うず高く詰まれた作物が荷台に積まれていた。  
残っているのは蔓だらけ畑である。

それをクラウンは、

「ふん。」

と、蹴り上げただけで土が盛り上がり津波のように畑の向こうまで一気に掘り返してしまったのである。

しかも、結構太かった蔓も一つも見当たらない。後は向こうに積みあがった土を元に戻せば次の作物を植えることができるだろう。  
まあ、連作するかどうかは知らないが。

「こんな感じで旦那の依頼を受けて僕は食いつないでいるのさ。  
だけど、こんなのは準備運動だよ。この間なんて川の治水作業を一人でやったんだからね。」

「普通に平和利用でそっちの方が俺は驚いたけどな。」  
どうしても先行するイメージというものがあるので、そんな感想を  
思わず俺は述べてしまった。

「僕らは年中人間を襲ってるわけじゃないさ、そもそも住み分けて  
いるんだからそうそう争いごとなんて起きないよ。」

「そりゃあ、そうだけどさ……。」

「まあ、毎日のように無意味に殺しあってる人間の考えそんなこと  
だよな。」

クラウンの嫌味に、俺は反論する気も起きなかった。

すると、その時、カンカン、と金だらいを打ち鳴らすような音が聞  
こえた。

「盗賊だああああ!!!」

そして、そんな叫び声が農地に響いたのである。

## 第四話 たった六秒の初戦闘

盗賊が出たと言う声に、俺は音の鳴っている櫓を探した。

近くにはない、遠くに建っている櫓が小さく見えるだけだ。そして、畑から逃げようと走る魔族が何人か見える。

「丁度いい、君が倒しなよ。」

「え!？」

突然のクラウンの物言いに、俺は目を見開く。

「あのくらいの相手なら小手調べ・・・倒せないようならさっさと死んだほうがマシってくらいの雑魚だね。」  
クラウンの目には盗賊が見えるのか、畑の向こう側を指差してそう言った。

俺の目には小さな土ぼこりしか幾つか有るようにしか見えない。

「それより、向こうにもいるっぽいけど大丈夫なのか？」

「騎士の旦那が何の為にいるかと思っっているんだい？ 警備兵くらい居るよ。」

そんなことより自分の心配した方がいいと思うけどねえ。僕は手伝わないし。」

そんなことを言っている合間にも、土ぼこりは近づいてくる。

「僕が居たら話しにならないだろうから、近くで見てるよ。」

君が本当に選ばれた人間なら、どうにかできる筈だ。」

「お、おい!!」

さっさと村の方に帰ろうとするクラウンを追おうとするが、彼に手が触れる寸前でまるで幽霊のように消えてしまった。

「俺がしたことあるのなんて・・・せいぜい路地裏の喧嘩ぐらいで・・・。」

「おいおい、なんだあ?」

「おい、こいつ人間じゃねえか?」

そんな声と共に振り返れば、犬のような顔をした二足歩行の化け物が、人が乗れるくらいの大きさの黒い犬に乗っているのが見えた。

数は5組。

『検索』、69ページ。

種族：コボルト      カテゴリ：獣人・妖精種

性格：臆病で残酷      危険度：C      友好性：皆無

特徴：

ゴブリンに並んで魔族の主な労働階級である下級魔族。

二足歩行した犬のような外見をしている。

主に坑夫として優秀であり、魔族の保有する鉱脈に行けばその辺り

に集落を作っているので、ほぼ確実に行くわす。特筆すべきは、優れた冶金技術を持っており、基本的に手先が器用であることである。

魔族の一般的な武器防具の殆ど彼らが生産しているといわれている。ゴブリンと同様に下級魔族では知性は高く、独自の文化を持っている。

能力としては魔族の平均から劣るが、集団で行動するため割と厄介である。

妖精種だが、人工物を多用するため精霊魔術の類は衰退したのか使えない。

他の獣人と同じように、同系の魔物を使役する場合がある。彼らは犬型の獣人なので、ブラックドックなどが一般的である。そうなると危険度はBにまで上がるので注意。

出てきた情報は、自分が最悪の状況に置かれていると言う結果を俺に知らせるものだった。

連中の騎乗している犬はブラックドックというらしい。

魔族の知識はあるのに魔物の知識はコボルトの項目に名前ぐらいしかない。

魔族も魔物も、どっちも魔王陛下とやらの配下には変わらないのに、随分と極端だ。

ここまで全く無いと、意図して魔物については記述しなかったと思えるくらいだ。

「どうするよ?」

「頭の上に連れてけばいいだろ、奪っちゃえば全部一緒だ。」

「だなだな。」

と、勝手なことを言うコボルトどもの手には、鉄で補強された木製の棍棒が握られている。

誰一人として剣など武器は持っていない。

こいつら、剣や槍を扱うのに熟練が必要なを知っている。

より扱いやすい打撃武器で棍棒という選択は素人が下手な武器を持つより賢いだろう。

冶金技術が高いと言うだけあって、その辺は弁えているのだろう。

逆を言えば、こいつらはそれほど戦いなれている訳じゃないってことだ。

ここは奇襲で何とか1体は仕留めたい。

そんな冷徹な考えが俺の頭に浮かぶ。

『提案』 対軍魔術の使用を推奨、最も適した魔術は『天の竜巻』と判断しました。

頭の中に規則正しく並ぶ文字の中から単語が浮かび上がり、そのように文章を構成し、そう俺に示唆してくる。

なんと言う親切設計。

本当に『パンドラの書』には意思があるようだ。  
人間の魂が材料に使われているのは本当なのかもしれない。

何でもいいから任せると俺が念じ返すと、更なる文章が脳内に浮かび上がる。

『却下』 術者の技量不足から『天の竜巻』をキャンセルしました。

「(え、ええええええええええ!!!)」  
期待させておいて出来ないだど!? しかもそれは俺のせいだど!!  
なんてふざけた魔導書だ。

そうイライラしていると、次の文章が形作られる。

『提案』 魔導書の最適化を提案。本書は術者の技量や思考パターンに合わせて魔術的なバックアップを行います。最適化を行いますか? イエス/ノー?

「(イエス、イエス、いえーす!!!)」  
俺が逃げ腰なのと武器も持っていないことを確認すると、「コボルトどもはマッドドッグから降りて俺に近づいてきた。  
縄を持っていることから縛り上げて売り飛ばそうと言っ算段だろう。  
人間はそれなりに高く売れるようだし。」



五体全員俺に近づいてくるわけではなく、三体は周囲にばらけて戦利品の作物を物色している。  
俺にとっては願ってもない展開だが……。

『報告』 現在所有者のパースナリティーを分析、最適化中です。  
現在45% 終了予想時間：あと20秒。

残念ながら二十秒後には俺は組み敷かれて両手に縄を縛られ転がされたまま足を縛られているだろうと言う光景がありありと予想できた。

「（そう言えば、ラミアの婆さんは防衛機能がどうたらこうたら言っただな、それで何とかならないか!?!）」  
俺が魔導書に問いかけると、こう返答が来た。

『不可』 最適化されなければ使用不可能。 本書に設定されている防衛機能は最低限の生命維持です。

「（は？ どういうことだよ。）」  
俺は少しでも時間を稼ごうと、じりじりと後退りながらコボルトどもと距離を取ろうと悪あがきをする。

『回答』 所有者の生命レベルが本書の設定する最低ライン

に触れた場合、本書は設定に従い無作為に座標転移を行い、三十日間の生命維持を行います。その間、回復や生存の見込みや救援がなければ、一定期間後に生命維持を放棄し、本書は次なる継承者を求め転移致します。つまり、見捨てます。

「……………ふざけんなよツ、そこは何とかしろよ!!」  
ラミアの婆さんめ、これのどこが完璧な魔導書だ!!」  
冷たすぎる対応に俺のイライラは頂点である。

『反論』 本書は完璧です。それは本書と我が創造主に対する侮辱と受け取ってよろしいでしょうか？

何でけんか腰なんだよ、本のくせに……。  
俺が何かを言う前に、魔導書は俺の頭の中の文字を動かして文章を作る。

『定義』 本書の目的は知識の伝達と継承、その使用にあります。その目的が達成され続ける限り、我が創造主の意向に反していても問題はありませんが、それが不可能と判断されるのならば、  
・あなたは、不要なのです。

「(はつきりと……………要らないと言いやがったな、このクソブツク……………!」

この魔導書は、本当に目的のためにしか存在していないのだ。

製作者の性格が窺い知れる様な自分勝手さだ。

勝手に持ち主に選んで、勝手に焼けるような痛みで知識を植え付け、それで使えなければ要らないだと、冗談じゃない。

「（結局、お前も“人間”なのかよッ！！）」  
だったら、そんな本は俺も要らない。

この魔導書を投げつけてやろうかと思ったその時である。

「フオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

うず高く積まれた作物の陰に隠れていたオークが、突然飛び出して作物を物色しようとしていたコボルトの一匹を殴り飛ばした。

こいつらは鼻が利きそうなものだが、幸いここはさつきクラウンの奴が掘り返して土臭さが充満している。そして今日は風も無い。

こんな箱庭の中で風があるかどうかは知らんが、頭上には人口太陽が見えるし、きっと雨風もあるんだろう。

「ばか、逃げるよ！！」

そいつはいつも俺に食事を届けてくれるオークだ。

クラウンとはどういう関係かは、知らないが、何かしらの利害関係なのだろう。

しかし、それを言うには俺との対応は明らかにそれを超えていた。  
この場所に来て初めて人間という枠で俺を見なかった奴だ。

何とか助けてやりたいが、俺にはどうすることも出来ない。  
それに、相手は武器も持っているのだ。

「オ、オレノ、オレノ野菜二手ヲダスナアア!!!」  
しかし、俺はコボルトの奴が真横に吹っ飛ぶのを見て、何だか大丈夫そうに思えた。

しかも、何だか戦い慣れているようにも見える。

『検索』、59ページ。

種族：オーク    カテゴリ：人型・怪異  
性格：凶暴    危険度：B    友好性：皆無

特徴：

繁殖力が高く、数の割に魔族の平均以上の戦闘力を持ち、魔王の軍に多くの兵士を輩出している下級魔族。

同名の海生魔獣が居るが、関連性は不明。

体格は人間よりやや大きく、緑色の肌をしており、豚のような鼻が特徴だが、彼らの起源に豚は全く関係していない。

知能は低く、辛うじて言語を扱える程度である。

思考が単純で、上位種族の理不尽な命令もただ愚直にやり続けるな

ど、頭はそこまで良くない模様。恐らく、優遇や不遇の概念が無いと思われる。

それだけに暴れるとずっと暴れ続ける。

同族が仲間を押さえつける光景を筆者は度々目に出ている。力が強く、非戦闘時には強力な労働力となっているようだ。

反面、そう言った文化性を得られず育ったオークは凶暴であり、魔族も襲うので疎まれ、駆除されることもある。

・・・どうやら、俺の杞憂らしい。

あのオークの奴は俺よりずっと強いに違いない。

『報告』 最適化が完了しました。マイマスター。あなたは正式に私の所有者です。

「うれしかねーよ。」

コボルト達がオークに気を取られ、俺を捕まえようとしていた二匹も仲間の応援へ向かったお陰で、そんな言葉を言えるくらい余裕は出来た。

しかし、オークの奴が強いと言っても、多勢に無勢。

武器を持っているのと無手では全く違うし、何よりコボルトの奴らはすばしっこく、オークの奴は翻弄され始めている。

このままではマズイのは目に見えている。

「おい、魔導書。何とかする方法を教えろ。」  
俺は手にした魔導書を見下ろし、睨みつけながらそう言った。

『提案』 敵勢力の対処に最も適した魔術を選択      ル  
ーンによる強化魔術とメインウエポンによる近接戦闘を推奨。  
メインウエポン 対魔族用に具備されている魔剣『ケラウノ  
ス』の使用を推奨。

「俺、剣なんか使ったことないぞ!!」

『返答』 本書のバックアップは完璧です。魔剣『ケラウノ  
ス』、顕現を開始します。

次の瞬間の俺の右手にはずっしりとした重みが現れた。

しかし、俺の右手にはまだ針金で作ったような型しか見えない。

だが、それは徐々に肉付けがなされ、完全に姿を現した。

それは、長剣であった。  
刀身の中心が羽のように十字の刃が伸びており、芸術的なセンスが  
窺える。

そして、魔導書から俺の全身に這うように文字が広がる。肌の上を這いずり回るような感覚が広がり、むず痒い。

それが全身に広がると、青っぽい光を発し始めた。

この光は、あの時俺が手にした小箱も発していた光だ。

その光こそ、魔力。

万物の力の根源、第五元素である。

魔導書の著者は嘯く。

この力を完全に使いこなせれば、全能の神にも成りうる。

事実、俺の体は重力に縛られているのが嘘のように軽くなった。俺の体は羽毛のように軽く、羽が生えたようにどこまでも飛んでいけそうだった。

俺は跳躍する。

コボルトまでの距離は軽く二十メートルはあった。

しかし、そんな距離など、俺は軽く踏み込むだけで踏破する。

孤軍奮闘し、今まで敵を引き付けてくれていたオークを助ける。

『補助』 記録してある戦闘経験を反映。適格化します。

次の瞬間、全身の文字が脈打つ。  
頭の中に俺ではない誰かの記憶が流れ込み、俺は無意識に左手に魔剣を持ち替える。

重心、間合い、剣の振り方、全てが初めから知っていたかのような動きで俺はコボルトを背中から切り伏せた。

魔剣の一撃は、斬撃だけでなく斬り付けた瞬間に雷光が走り、ダメ押しの追撃を掛ける。

当然、即死である。

完璧にまでに相手の命を奪い、絶命させ、滅ぼす。  
ただそれだけを追求した、魔剣だ。

「おし、次ぎッ！！」  
そして、俺が次のコボルトに狙いを定める。

『警告』 直ちに戦闘を終了し、十分な休息を取ってください。  
い。

「はあ！？ この状況で何を言ってるんだ！！」  
構わず俺はもう一匹のコボルトを斬り付ける。  
あのすばしっこかったコボルト共も、突然の奇襲に対応できず、俺の逆襲の第二撃を受ける。



俺に気を取られたもう一匹のコボルトが、オークに殴り飛ばされる。そして、最後に残ったもう一匹は、不利を悟ったのか、ブラックドックに向かって走り出す。

俺は手にしている魔剣をコボルトの背に投げ付けると、吸い寄せられるように簡単に命中し、串刺しにして絶命させた。

「ははは、なんだ、簡単じゃないか・・・」  
そう、簡単だった。あまりにも簡単すぎた。

『強制』 ただちに全術式を解除。これより本書の使用を二十四時間禁止致します。

「は？ 何を言って」  
ぶち、と何かが千切れる音がした。

ぶち、ぶち、と続けて何かが千切れる音がした。  
どこから？

「え・・・？」  
まるで、俺は壊れた人形のように頭から地面に突っ伏した。  
ここが耕されてやわらかい土でなかったら、頭から血を流していた

かもしれない。

だが、それ以前に俺は両腕から、両足から、血がだくだくと流れていた。

腹も千切れそうほど痛い。

未だに筋肉が千切れる音が鳴り止まない。  
痛すぎて全く何が痛いのか分からない。

「あーらー！。初めてなのに無理しちゃって……。」  
すると、クラウンの笑い声が聞こえてきた。

「これは……なんで……」  
「君ら人間は、あんな風に動くように出来ているのかい？  
使ったこともない強化魔術をいきなり際限なく使うからこうなるんだ。」

普通は少しずつならしてからつかうもんだよ、そうじゃないと体が追いつかないじゃないか。君は人間なんだから、人間を超えることは出来ないんだよ？」

当たり前のことを、当たり前のように、クラウンは言った。

そう、人間は二十メートルを一瞬で跳躍なんてしない。  
使ったこともない剣でコボルトを両断なんて出来ない。  
重量のある剣を投げて一撃でコボルトを刺し殺したりなんて、出来ない。

条理を逸したのだから、その反動は当然のように俺に牙を剥く。

『警告』 現在マスターがあん状態での予測戦闘可能時間は、二秒です。

魔導書が、残酷なまでの真実を突きつける。

「にびよう・・・？」

その三倍は動いた。

たった六秒動いただけで、この有様である。

もつと強い相手だったら？

多分、俺は全身から血を垂れ流して出血死、あるいはショック死していただろう。

「人間は上手い事を言った。

深淵を覗くと言うことは、深淵を覗かれると言うことである。

魔術を研鑽することは、人間を辞めることに等しいのさ。まあ、全くの素人である君にこれは酷なことだろうけれど。」

そう言いながら、クラウンは青っぽい光を俺に差し向ける。

それだけで筋肉が千切れる音は止み、少しずつ痛みが引いてきた。

「い、いたたたたた、痛い、痛い、痛い、痛iiiiiiiiiiiiiiiiiiii

「！！！！！！」  
だが、それは正常な感覚を取り戻すと言うことである。

『補助』 過剰な痛みを感知、痛覚を解除します。

すぐに魔導書が対応してくれたが、その完璧なまでの対応に、俺は心の底で恐怖を感じていた。

「痛い・・・痛いよぉ・・・」  
俺は、また涙を流していた。

『疑問』 マスター、痛覚は遮断しました。不備がありましたでしょうか？

魔導書が問う。

だが、人を道具扱いするこいつには分からないだろう。

この痛さを、こいつは絶対に理解できないだろう。

「ねえ、人間。君はこの痛みを乗り越えられるかな？  
超えてくれないと面白くないけどね、それに僕は超えると信じている。」

勝手なことを、クラウンは言いながら笑っている。

俺が今日使った六秒を全部当てても到底勝てそうにない化け物は、俺を見下して笑っている。

俺は、早くも心が折れそうだった。

だが、その時、ふわりと俺の体は浮いた。オークが俺の体を背負ってくれたのだ。

「オレノ名八、ギインギ。オマエ、仲間。タスカツタ、アリガトウ。オマエノ、名八？」  
オークは・・・オークのギインギはそう言った。

「・・・メイ、だ。人間の、メイだ。」  
「ソウ、カ。イイ名ダ。メイ、オマエハ、仲間ダ。」  
「・・・ああ。」

ギインギの言葉は、なんら特別な言葉ではなかった。

詩人のような風情のあるような言葉でも、偉い政治家のような知性溢れる言葉でもない。ただ単純に、俺を認めてくれただけだった。

俺には、今まで一度も掛けてもらったことのない言葉だった。

「じゃあ、今日は帰ろうか。」

メイ、今日も君は僕の期待を裏切らなかった。

ねえメイ、僕は本当に君が手に入れる力がどのようなものになるの

か、楽しみにしているんだよう？」  
帰りの道中、クラウンはいつにもまして口の紐が緩かった。  
軽く俺が血塗れに成るのを知ってて放置したくせに。

もう、こいつはこづい奴だと諦めることにした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

さて、第二層でメイがひいひい言いながら頑張って生きている頃である。

場所は変わってほぼ正反対に位置する、第二十八層。

そのこの階層の実に四分の一を占めるのは、その中心に聳え立つ大聖堂。

常に聖歌が鳴り止まないそこは、正しく聖域である。

その中にある一室に、“管区長室”という部屋がある。

今まさにそこに入ろうと俯く、まだ少女と女性と中間と言つべき女

が一人居た。

今日、彼女はその部屋の主に呼び出されたのだ。

修道服を纏った彼女は、当然その大聖堂に住む修道士である。ここには彼女のほかに一万人近い修道士が住んでいる。

第二層の地獄みたいな化け物の巣窟では当然なく、大理石で惜しみなく整備された道や美しい庭園が広がり、幾つモノ教会が一定の法則に則って置かれている。

こんこん、と彼女はドアをノックする。

入れ、と威厳に満ちた声が、彼女の入室を促す。

「失礼します。」

彼女が入室すると、その部屋の主たる男が目に入った。声と同じように外見も威厳に満ちている。

彼の背にある壁には、真っ赤に染められた十字の紋章が掲げられている。

それが示すのは、彼らが神を仰ぎ、矛盾と共に戦う騎士の組織ということである。

テンプル騎士団を起源に持つ、唯一無二の奇跡の保有者を己の神と定めながら、その奇跡を預かり行使すると言つ異端である、修道士にして戦闘魔術師の集団。

魔女狩りの時代を超え、今も尚、神に逆らつ邪悪な異端者を摘発し、裁きに掛けんとする彼らを、聖堂騎士団・・・通称、“パラディン

”と恐れられている。

彼はその本拠地であるこの大聖堂で管区長を務めるナンバースリー、要は騎士団で三番目に偉いと覚えておけばいい。

名を、ジュリアス。通称、マスター（管区長）・ジュリアスと呼ばれている。

「騎士エクレシア、失態を犯したらしいな。」

「わたくしはもう、騎士では有りません。剣は捨てました。」

「そう簡単に捨てられては困るのだよ、お前ほどの逸材がな。」

それに、先ほどお前の処分が決まったのだからな。」

「いかような処分でも。主の科す試練なら、今まで幾つも乗り越えてまいりました。」

しかし、この度の極東日本での任務・・・異教徒の逃亡、回収予定の魔具の喪失に、あまつさえ一般人を巻き込んでしまいました。私には剣を持つ資格など無いのです。」

「ふん、少々・・・いや、真面目すぎるくらいがあるとは聞いていたが、これは相当だな。世捨て人ではないのだぞ、特に、我々はな。」

「含みのある言い方でジュリアスは言うてから、笑みを浮かべた。」

聖職者に相応しくない、しかし、ある意味聖職者に相応しい、同情と哀れみの笑みである。

「本当にこれを人に科す試練なのだとしたら、私は主が随分と冷酷になったものだと思うがね。いやいや、敬虔でないものには元から冷酷か。」

「マスター・ジュリアス。そのような言葉は慎んでください。」

「おっと、失礼。」



それより昨夜、神託があつたのだ。我らが『カーディナル』よりな。  
その言葉に、俯いていた彼女・・エクレシアも顔を上げて驚いた。

「主が、直接私に試練を課するのですか!？」

おお、と感極まったようにエクレシアは跪いて、涙ぐみながら両手を組んだ。

「所詮は魔術さ。下らない下らないただの魔術。愚かな人の業ではない。

しかし、主の声には変わらないと言うことさ。主の足に縋るしかない、我々人間とは本当に愚かな存在だよな。」  
ジュリアスが失笑を浮かべる。

『カーディナル』とは、彼らの首領。

魔族が称する“箱庭の園”を支配する『盟主』と、十一人の偉大なる魔術師の一人。

一つの文明の魔術を極めた十一人を、魔術師は知識の伝道する者の証として、“魔導師”の称号を持ってそう呼ばれる。

魔族の“代表”もその一角だ。

「曰く、魔族が乱れる、と。

あれだけ大規模の儀式をして聞こえるのがこれだけだ。笑わせるよな。

そこで、『騎士総長』（グランドマスター）の召集の元、各管区長が集められ、会議が行われた結果、その混乱に乗じて布教を進める

と言う結果に至った。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エクレシアは、一瞬何を言われたのか分からなかった。

「それは、真ですか？」

「俺も自分が正気かと疑いたいね、しかし、我々の正気は主が保障してくれているのだよ。全く、残念なことにな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その言いも寄れぬジュリアスの言葉に、エクレシアはなんと声を掛ければいいのか分からなかった。

「お前には、十字架を背負ってもらうことになるな。」

今回の布教の相手は、言葉や習慣、肌の色が違うとかいうレベルの相手ではない。隣人どころか、別の惑星まで離れているといっても過言ではない。

金に汚いとユダヤ教はブラックジョークに例えられるが、我々は信者に汚いと言われるのだろうか。」

エクレシアには、ジュリアスが怒っているのか、悲しんでいるのか、それとも既存の感情を表しているのか分からなかった。

それほどまでに今回の一件は方向性が逸脱していたのだ。

「知つての通り、魔族は手ごわいぞ。それも、お前一人で行くのだ。これはまさに聖人の苦行だよ。お前は伝説になるだろうな、そしてそんな苦行を言い渡した私も、歴史書に残るだろう。」

はつきりと言うが、誰も期待していない。『カーディナル』一人が推し進めて決めたようなものだ。

いくらお前がジャンヌダルク以来の逸材だからと言って、この仕打

「ちは主を恨むなと言っても仕方が無いほどだ。」

「嬉しいです。マスター・ジュリアス。」

「そこまでわたくしを心配なさってくださるのですね。」

「……お前は、野たれ死ぬんだ。」

別に全くお前と同じ顔をした別人がこの大聖堂の門を叩いたとしても、我々は友愛と親愛を持って迎えるだろう。それを忘れるなよ。」

「はい。」

「もう行け、俺はお前のような信仰に酔ったような人間が嫌いなんだ。」

「はい。」

エクレシアは頷くと、十字を切って踵を返した。

「待て、お前は剣を捨てたのだろう。では代わりの剣が必要だ。」

「……選別だ、聖遺物が仕込まれた聖剣だ。持っていけ。」  
ジュリアスは腰の剣を鞘ごと抜くと、それをエクレシアに投げ付けた。

彼女は、振り返ることなく手を後ろにやるだけで受け取った。

「お前に主の導きがあらんことを。」

「ええ、マスター・ジュリアス。貴方にも。」

斯くして、また一人、地獄を訪れる人間が増えた。



## 第五話 魔族の信念

「おや、もう大丈夫なのかい？」  
俺がクラウンの部屋に入ると、こいつはテーブル一杯の食べ物や次々と口に運びながらそう言った。

「なんとかな・・・」  
まさかこいつがこんなに大食いだとは知らなかった。  
と、思ったら、これは種族性らしい。ドレイクは変温動物なので、人間のように大量にエネルギーを必要とするようだ。具体的には、俺たちの三倍くらいは。

食糧不足がどうのこうの言っていたのに、こいつは俺よりずっと消費しているのかよ。

「二日間は寝たきりだっただろう？ 体の動きに支障は無いかい？」  
「おかげさまでな。お前のアドバイスも役に立ったよ。」  
「だろう？」  
ニヤニヤしながらクラウンはドヤ顔を決めやがった。むかつく。

盗賊の襲撃の後、俺はクラウンの家の床に寝かされ、そのまま休養を取った。

クラウンはあの後ラミアの婆さんのところに行って知恵を借りてきたらしい。

この魔導書の防衛機能の設定はデフォルトであり、後から何通りか自由に設定できるとのこと。

それで治癒の魔術を魔導書の側から使用するように命令をしたのである。

それで俺が魔術を使ったら意味が無いと思われるが、実はこの魔導書、魔導書自体が独立しており、それ本体が非常に優秀な魔術師に匹敵する。

だったら魔導書だけでも良いじゃないかという話になるが、魔導書は所詮本であると言う。

本は本に過ぎないが、俺はそれに使われるただの出力装置に過ぎないのだ。

「魔術の才能や行使には、魂が必要だと考えられている。

その制御に精神が必要であり、最終的に魔術師は己の肉体を捨てることも厭わないと言う。連中は“完璧”な不老不死を目指しているからね、肉体なんて便利なだけの重石過ぎないだろう。

その究極の形がその魔導書なんだろうね。彼らは知識の喪失を極端に恐れる。そのためならそんな姿になっても厭わない。」

「どうしてだ・・・？」

「君は、自分が信じて行っていたことが否定されたらどうする？」

そうだと信じてずつと愚直に行ってきたことを間違いだと否定されたら、それはとても惨めなことじゃないかな？

それを守るためなら、きつと命を捨てるに値することなんだよ。」

俺には理解できない話だった。

「そりゃあ、君には何も無いからね。」

俺の考えを理解しているとでも言うように、クラウンは嘲るように言った。

「ばあ様にお礼くらい言ってきたよ。」

僕も用事があるから、これを食ったらそっちに行くからね。」

「ああ……」

俺は、反論する言葉すら持ち合わせていなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

俺は近所のラミアの婆さんの館にやって来た。

館と言っても、テントに近い。

紫色の布で作られており、それが連なって何部屋かに分かれている。

「婆さん、婆さん、居るかーい？」

俺は入り口から声を張り上げて言ったが、返事は返ってこなかった。

「あれ、留守か・・・？」

困ったなあ、と俺は頭を掻いた。

近所だし礼くらいはいつでも言えるが、それが逆に消化不良にも似た不快感があるのだ。

仕方ないから帰ろうかと思い、踵を返したところで、後ろからは「い、と言う声が聞こえた。

「ん？」

婆さんの声にしては気だるく甘ったるい若い感じの声だった。

俺が振り返ると、丁度館の入り口の幕が丁度開くところだった。

「あれ？ あんた誰？」

顔だけを覗かせてこちらを窺うそいつは、人間・・・に似た何かだった。頭に角があるし。

「ん？ んんん？」

そいつは俺の顔を凝視すると、ずんずんと近づいてきた。

背中には蝙蝠の翼のようなものが見える。やはり、人間ではなかった。

肌は色白というより病的に白く、それがむしる儚ささえ演出してみせるほど美しく、女性らしい豊かな肉体を持つ化け物だった。



種族：夢魔      カテゴリ：人型・悪魔属  
性格：普通      危険度：D      友好性：友好

特徴：

通称、淫魔と呼ばれる非常に有名な上級魔族。  
男性名はインキュバス、女性名はサキュバス。共に異性の人間を魅了することに特化した能力を持っている。

容姿は人間に近く、外見を誤魔化して異性の人間に近づいて、繁殖の為に性交をされると言われている。

事実彼らの種族の男女同士では繁殖するのは出来ないようで、最も都合の良い人間種を苗床に利用している。

当然知性も知能も人間並みであり、完成も人のそれに近い。  
見つけたらまず殺しに掛かる魔族では非常に珍しい種族である。悪魔属の魔族ならこの種族に限った話ではないが。

淫乱なイメージが先行するが、それは事実ではない。

彼らには繁殖期が定期的であり、その場合にのみ強烈な性衝動に襲われ、人間を夜這いしたりするようだ。

普段は人間社会に潜み、敵対者の目を掻い潜り、全く人間と同じように暮らしている。悪魔とは、日常のどこにでも潜んでいるという良い例である。特に娼婦はいい隠れ蓑になったと言っ。

魔族にも珍しい飛行能力を有しており、魔力も高く独自の秘術を有しており、夢の中に潜んだり完全に人間に化けたりと、能力は多彩。

ちなみに、生殖に成功した場合、生まれる子供はほぼ確実に夢魔の子である。

魔族相手とはいえ、もう少し人間も頑張ってほしいところである。

すぐさま魔導書の知識が検索され、その正体を看破した。

「うそ、人間だぁ・・・こんなところに居るなんて珍しいねえ。」  
それは確かにイメージ通りの獲物を見つけた目というより、物珍しさと言った様子で俺を見ている夢魔。  
本当にそれだけなのに、男心をくすぐる甘ったるい声である。

「あんたは、ラミアの婆さんの知り合いか？」  
自分でも体温が上がっていくのが分かるくらい心臓が鼓動している。  
こんな気持ちは幼い頃の初恋以来である。

『警告』 軽度の『魅了』に精神を侵食されています。レジストしますか？ イエス/ノー？

危険性は薄いからか、魔導書が警告程度に呼びかけをしている。  
俺はすぐにイエスと返した。

人間に化けている時ならいざしらず、本性を現している間は常に彼女らは異性を虜にしようとしているのだ。油断はならないからこそ悪魔なのだろう。

徐々に心臓の鼓動が収まって行くのを感じる。

記憶の奥底で錆付いていた恋心はやはりまやかしだったようで、何だかやるせない気分になってきた。

「ああ、私はここで師匠の下働きをしてる弟子よ。」

「師匠・・・？ 婆さんの？」

「なに？ 悪いの？」

その声は寝起きなのか、この夢魔は非常に眠たそうである。

「いや、婆さんに弟子が居たなんて初耳なんぞな。」

「私だつてこんなところに人間が居るなんて初耳よ・・・。」

私は昨日町から帰ってきたばかりだからねえ、はわあ・・・眠い。「あくびを一つに目をごしごしと腕で擦る夢魔。」

「あのババア、人が帰ってきたばかりだつていうのに儀式なんか真夜中に手伝わせて・・・。」

いくら私達の本番が夜だからって、“本番”がなければ寝るのは私達も同じなんだつてね・・・。」

こんな下品な言葉を聞いたら、まやかしでも恋心を刺激された自分が情けなくなつた俺であつた・・・。」

「誰がババアだつて？」

「ひゃい！！！」

噂をすればなんとやら、ラミアの婆さんが森の方からによるによると地面を這いながらやって来た。

眠そうにしていた夢魔も今までのだらけた態度が嘘のように背筋が

ピンとなっている。

「お前さんは秘薬の調合をしてな、釜を焦がしたりしたら承知しないよ。」

「わ、分かりました!！」

慌てて館に戻る夢魔はどこか滑稽で、思わず俺は笑ってしまった。

「それで、何のようだい？ まさか朝の挨拶なんてする間柄じゃないんだから。」

「ええ、まあ。クラウンの奴が婆さんに色々教わったから礼を言いに行けって。」

こうして立っていると小柄なラミアの婆さんも蛇の胴体は結構大きく見える。

「ふむふむ、気にすることはないよ。しかし、年上を敬うのはいい心がけだねえ。」

「あ、それと、これも返さないよ。」

俺は最初に受け取った銀の指輪を婆さんに返した。

「ふーん、すぐに応用するなんて、一丁前に魔術師の真似事かい？」  
婆さんは指輪を受け取ると、そんな風に皮肉げに笑って見せた。

この指輪には、共通認識の魔術という奴が掛かっている。  
それは言葉からお互いの知識から共通する部分を補い補完し、通じ合うようにする魔術であるそうだ。

つまり、お互いの知識の限り何を言っているか分かるようになる魔

術なのだ。

だからオークのギィンギとの会話は片言に聞こえるのだ。

しかし、その指輪は魔族用であり、人間用の魔導書が勝手にやっつけてくれるのもう必要ないのだ。

お互い通じ合っているように見えても、お互いの知識から割り食い違いが起こりやすいのが欠点であり、これまでも何度かクラウンとの意思疎通の際に感嘆符を頭上に浮かべたものである。

「どうにか使いこなせてみないといけませんからね。」  
だからそんな皮肉にも真面目に返すしかない。

「一つ、忠告しておいてやるよ。」

魔術の世界は完全に才能が物を言う、全くの無駄とは言わないが、努力なんて才能の前には塵芥に等しい。

その点、お前さんには才能は十分だろう。魔導書に選ばれるくらいだからねえ。

だけど、命の遣り合いじゃあ、才能だけなんてというのは何の役にも立たない。重要なのは経験だからねえ。

おととい、お前さんは失敗をしたそうだが、それは前提が足りなかったんだよ。普通、魔術師は何年も掛けて魔術を扱えるようになるもんさ。

その魔導書も、当然その前提を踏まえる工程を示してくれるだろうさ。そうでなければお前さんのような一般人の手に渡る意味が無いからねえ。

今すぐには言わないが、そのうちそれなりには扱えるようになるだろうね。」

「……ご指導、ありがとうございます。」

「ひっひっひ……あたしも隠居が長いせいかな、説教臭くなっち

まったのかねえ。」  
によるによると館に帰っていく婆さんの背中を見て、俺は何となくクラウンの言っていたことが分かった気がした。

敵になるかもしれない相手に助言するのは、自分の道を信じているからなのだ。

己の積んだ研鑽が正しいと、信じているからだ。

それは、アイデンティティと呼ばれる物なのだろう。

・・・俺には、無い物だ。

・・・  
・・・  
・・・

クラウンの奴と合流して、俺はオーガロードの騎士の下へ向かう。

先日の盗賊被害で戦果を上げたから、その報告に向かうのだ。  
聞いた話によると、盗賊は同時多発的に複数の箇所から村を襲撃したらしい。

俺が居た場所もそのひとつだったようだ。

「正直驚いたよ、その変人が見込んだだけ程度はあると言ったところか。」

「だろ？ こいつにこの村の戦力の一員として加わってもらえばいい。戦果に応じて借金を減算するって感じで。」

「いいだろう。だが我らも年中戦っているわけでもない。警邏にも加わってもらおうぞ。それではいつ返しきるか分からぬし、次はあっさり死ぬかもしれないからな。」

「そうだね、それでいいと思うよ。でもそっちの警備兵が納得するならだけど。」

「人間が加わった程度で文句を言うような輩などは所詮その程度よ、それを見定めるいい機会と言えるかも知れぬだろう？」

「ふーん、そうかい。」

「おい、クラウン……。」  
なんか勝手に話が進むので、俺はクラウンの袖を引っ張った。

「忘れたのか、俺が戦えるのは……。」

「大丈夫、契約は来月からさ。それまでに何とかすればいい。」  
クラウンは有無も言わせない様子だ。

魔族の暦は知らないが、課題は山積みである。

「おい人間。名前は何だ。」

すると、こちらなんて目もくれなかったオーガロートの騎士が突然話しかけてきた。

「俺の名前は・・・メイです。」

「メイ、か。これからお前を雇うのだから当然俺も名乗っておく必要があるな。俺の名は、ゴルゴガン。」

我が領民の財産と命を守ってくれたことを感謝する。これからも魔王陛下の為に良く働くように。」

全く感謝していないように聞こえる声色だが、多分感謝しているのは本当だろう。

じゃなかったら彼ら強大な魔族が簡単に人間に礼を言ったりしないだろう。

「こ、こちらこそ、よろしくお願いします。」

とりあえず、上司になる人なので頭を下げておいた。

「覚えておけ、メイ。魔族はどれだけ力を示せるかが全てだ。」

貴様が敵の前に屈しても、誰もその屍を拾う者は居ない。そうやって我らは存在してきた。貴様もここで生きるなら、そのように成るしかないのだよ。」

俺の頭上に投げ掛けられたその言葉は、とてもとても重かった。

それが彼の信念なのか、俺には理解できないのだろうか。





## 第六話 魔族の町へ

「やあ、調子はどうだい？」

そんな声と共に、俺が今居る部屋に光が差し込んだ。

クラウンが作成した急造の地下暗室である。

俺の部屋だ。安物の木のベッドと申し訳程度のテーブルが置いてあるだけの、寝るだけの部屋だ。

普段、俺は上に居るのでそれでも問題ないが、今日は違った。

「ああ、感覚は掴めてきた・・・。」

「そりゃあ身を持って一度は流れた力だ。それくらいは短時間で出来て当然だろうね。」

俺がやっているのは、暗室での瞑想だった。

瞑想と言っても、ただ座って目を瞑るだけではない。

全身にあると言う魔力の流れを感じ取り、操るためにずっと感覚を研ぎ澄ませているのだ。

だが、その段階はもう終わっている。

俺には全身を脈打って巡る力のラインが感じられるようになった。

それは血に含まれる魔力だという。  
血には通常限界まで使用できる魔力の数倍の量が含まれており、体内では心臓と共に最も魔力が濃い部分である。

「このお香は効いたろう？」

「・・・ああ・・・」

俺は今、夢見心地だ。

クラウンが持ってきた小さな香炉で焚いているお香のお陰だ。  
数種類のハーブと毒キノコで調合されている、と自作したらしいクラウンが嬉しそうに教えてくれた。

毒性があると聞いて最初は躊躇ったが、魔導書にも伝統的なウィッチクラフトだと言われては、とりあえず試すしかない。  
結果は劇的であった。

それまでクラウンや魔導書と相談して行うことを決めて数日何も変化しなかった瞑想の効果がすぐに現れたのだから。

「魔術を扱うに置いて最も邪魔なのは、常識だ。

これは出来ない、こんなのは無理だ、そんな固定概念が最も邪魔なんだよ。

君の中にある常識が、魔力なんて未だ信じられないと言う思いがどこかにあり、それが邪魔していたからうまくいかなかったんだ。

ただどうして幻覚作用のあるお香を使ってその常識を曖昧にすることで、君の認識力を手助けしたって寸法さ。」

クラウンはそう語る。

そう、あれだけ馬鹿げた動きが出来た魔術というものを、未だ俺は良く分かっていなかった。

クラウンは楽しそうに理論を語ってくれるが、よく分からない理屈を「ごたごたと並べられるだけにしか聞こえなかった。」

そこでこの手段である。

確かにこれは深淵を覗きこむような手段である。何度かこの世に居てはいけないモノも見えてしまった程だ。

「これで魔術を使う基礎段階は終了だ。後は実践だね。」

「これだけで・・・いいのか？」

「本来なら小さい頃から馬鹿みたいな量の知識を詰め込んで、理論を体で覚えさせられるそうだけど、君にはそれは必要ないだろう？」  
確かに、知識は無理矢理植えつけられたし、やり方は全部魔導書がサポートしてくれる。

そんな便利な代物だけあって、魔術師の間ではこのような魔導書は万難を排してでも手に入れる価値があると言う。  
それこそ、人を殺してでも。

「あとは普段から軽い魔術を継続して使用したりして徐々に慣らしていくといい。一週間もすれば魔力がそれを君の体に定着させ、比べ物にならないくらい君の体は丈夫になっているだろう。これは僕ら魔族のやり方だけどね。それでもまだ基礎の基礎だ。」  
「・・・わかった。」

「簡単に言っただけど、結構大変だよ？」

勿論、魔導書のサポートは切ってるね。常に集中しないといけないか

ら。

ああ、集中力は大事だよ。魔術の強度は大体これで決まるからね。これがダメだと簡単にレジストされたり、最悪の場合は術の発動すらしない。」

「ああ・・・」

クラウンの言葉が頭に浸透する。

そういう力のある言葉だとはすぐに理解できた。

「で、話はそれだけか？」

こいつが俺の状況が心配ってだけで俺の様子を見に来るなんてありえない。

きつと他に用事があるのだろう。

「そうそう、忘れるところだったよ。」

いろいろと入用になってね。君がそれを済ませたら町に出ようと思っただんだ。君も行くかい？ 興味くらいあるだろう？」

「ああ・・・そうだな。」

魔族の町というのは、確かに興味がある。

人間以外の知的生命体がひとつの文明を形成しているのだ。

よほどの出不精でないかぎり、一度は見てみたいと思うだろう。

「まあ、つまらないところだけど。」

おい。自分で誘っておいてそれが。

「ついでに騎士の旦那にいろいろと頼まれちゃってさあ。

こんな辺境だと町にしかない必要な物もあるからね。行商人とかも来るんだけど、時期が外れちゃったみたいでね。」

「まさか俺に荷物持ちをさせる気か？」

人間は労働力にもならないって言っていたのはそつちだろ？」

「ああ、だからオークの彼を借りられた。」

当然のようにクラウンはそう言った。

この間知ったが、オークのギンギはゴルゴガンの旦那の部下らしい。

人間で言うと屯田兵みたいな感じなのだろうか。普段はこの村の開拓や農作と警備を行い、有事の際には戦力になる兵士。

土地の限られているこの“箱庭の園”には、魔物と魔獣が跋扈する村の外の開拓は急務であるとされているようだ。

ギンギを普段見かけないのはその為だ。村の郊外の農地で魔物と戦いながら開拓や農作業をしているようだ。

で、こいつはそんな彼を使用人みたいに扱っている。

料理を自分でしないクラウンはギンギにその辺を全部頼んでいるらしい。当然食費や手間賃は払っているようだ。

「じゃあ、昼には出発するんで、用意があるならしておいてね。」

「俺が用意を必要とするほど物を持っていると思うか？」

「それもそうだね。」

話はそれで終わりと、クラウンは踵を返して部屋から出て行った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「これ、本当に大丈夫なのか？」

「平気だ、ヨク、訓練サレテル。」

オークのギィンギはクラウンの家の前に荷馬車の用意をしながらそう言った。

しかし、それを引こうとしているのは馬ではなく、この間コボルトが連れていたブラックドックだった。

聞けば先日の戦果の褒賞として与えられたのだと言う。

扱い方もこの集落に住むコボルトにちゃんと教わったらしい。

イヌぞりは人間の間でも優秀な移動手段であり、犬と同じ重量を運ぶことができると言われているからその辺は心配していない。

普通の犬の二倍大きさはあるブラックドックが五匹も居るのだから、これだけでかなりの物資や人員を輸送できるだろう。

コボルトの危険度跳ね上げる要員だけではあるようだ。

しかし、訓練されている魔物とは言え、どうしても苦手意識は拭えない。

だってこいつら、普通に俺くらいなら丸呑みしてしまいそうなくらい大きいんだから……。

ただでさえ訓練された大型犬は人間より強いと言う話を聞いたことがあるくらいなのだから、これくらいでかかったら多分俺くらいなんかじゃきつと太刀打ちなんてできないだろう。

「ちよつと、その人間。」

この場で人間は俺だけなので振り返ると、この間の夢魔が立っていた。

「町に行くんでしょ？ これ師匠から買ってきてほしいもの。」

「あ、ああ……。」

ラミアの婆さんから言われたら断れないから思わず彼女の差し出したメモを受け取ってしまったが、それは俺が決めていいことなのだろうか……。

「おいおいおいおい。お前この間町に行ってきたばかりだろう？

何でまたすぐに必要なものが出てくるんだい？」

すると、クラウンが家から出てきて俺からメモを奪い取った。

「なんだ、殆どお前の私物じゃないか。」

「ちッ」

明らかに夢魔の奴が舌打ちしたのが分かった。

当然俺より耳のいいクラウンにも聞こえているだろう。



「仕方ないじゃない、師匠は余計なものを置くの嫌うし。」

「仮にも魔術師の端くれが俗にまみれてどうするのさ。」

まったく、何でお前なんかはあ様の弟子なんだろうね。」

そんな嫌味な台詞を言われ、夢魔は憎憎しげにクラウンを睨んだ。

しかし、ドレイク相手に文句を言おうとは思わないのか、黙ったままである。

「そんなに手間じゃないだろ。そんなに大したものじゃないなら別に良いんじゃないのか？」

何だか空気が悪くなったので俺は一応フォローすることにした。

「あら人間。話が分かるじゃない。」

「俺は人間って名前じゃない。メイだ。」

「そうなの？　じゃあ、メイ。私はサイリス。頼んだわよ。」

まだオーケーとも言っていないのに、夢魔のサイリスは投げキッスと共に去って行ってしまった。

「君が処理しろよ……。」

「……わかった。」

クラウンの冷たい視線と共にメモを押し付けられ、俺は頷くしか出来なかった。今のは間が悪かった。

幸いメモの内容は香水とか女子が好みそうな小物ばかりでかさばるような物ではなかったのが救いだ。

「しかし、君はああいうゲテモノが好みなのかい？　あんなのどの番いに成りたいなんて、全く、人間の趣味は分からないね。」

「ああいうのが好きって奴もいるだろうけど、俺はピンと来ないな。」

「信じられないね。」

俺もお前の感性もイマイチ把握できないと、とまでは言わなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

クラウンは第二層の中心部にある町には丸一日掛かると言っていたが、なんと翌日の朝には着いてしまった。

ブラックドックが予想以上に持久性と走破性に優れ、一晩中整備もされていらない道を走り続けていても全く疲れた様子を見せないのだ。

こっちはがたがた揺れる荷馬車の上で吐きそうだったのに、クラウンも御者をしているギインギも一晩中揺られているのに涼しい顔をしている。お陰で眠れてない。たしかに、こいつらが基準なら人間なんて労働力にすらならないだろう。

根本的にこいつらとは違うのだと理解できた。

まあ、帰りはそうもいかないだろう。荷物もあるだろうし、移動に時間も掛かれば魔物にだって襲われるだろう。

今回は運が良かったと、ギインギも言っていた。

普通なら護衛を付けて集団で行くのだろうが、クラウンの存在は少数での買出しを可能にするのだろう。

それくらいドレイクは強大な種族なのだ。実感は微妙だが。

町は城壁に囲まれていた。

その周りは水掘りがあり、魔物の進入を防ぐ工夫がなされている。

町に入るための橋を兼用した門を渡ると、門番をしていたオークの兵士に呼び止められた。

どうやら、出入りを管理しているらしい。

門の内部の事務所に人数などを伝えると、通つてよいとお通しがあつたのでその通りにする。

クラウンはつまらないと言っていたが、町の中は中心地に向かうに従い、かなりの賑わいを見せていた。

てっきり町のように活気がないのだと思っていたので、意外だった。

ここでは魔族が人間を連れているのが珍しくないのか、俺がクラウンやギンギと歩いていても誰も気にも留めない。

そういう意味では気楽である。

「オレハ、頼マレタ物、買ツテクル。」

適当なところに宿を取って荷物や荷馬車を置き、ブラックドック達を預けて町に出ると、ギンギの奴はさっさと買い付けに行ってしまった。

「じゃあ、適当にどこか回ろうか。」

そしてこいつはそれを当然のようにギンギの奴に任せやがった。

「おい、手伝わなくて良いのか？」

「彼は何度も買い付けに来てる。僕より勝手は分かってるさ。道中の護衛は僕、それ以外は彼。役割分担、適材適所って奴さ。」

居ても邪魔になるだけだろう俺が言っても仕方ないが、こいつはやっぱり全く気にしていない。

こいつに何を言っても面倒だから、もうそれでいい気がした。

「何か名所とかあるのか？」

「名所ねえ、強いていうなら上層と下層に向かう施設があるって所かな？」

「それって名所なのか？」

「名所だよ、下層は“不在宮”の正面玄関に直接繋がっている。

他にも第一層には僕達ドレイクの聖地である御霊山がある。他にも語りきれないほど色々あってね。

上層との中間地点であるこの第二層には人が集まる。だからその周辺は毎日のように大賑わいで物流も盛んさ。毎日馬鹿騒ぎしてる。」

「なるほど・・・」

道理で宿も多いわけだ。

俺たちはとりあえず中心部に向かうことにした。

そろそろ人通りもかなり多くなり、様々な魔族が行きかっている。

「とりあえずサイリスの頼まれ物だけでも買っておくか・・・」  
メモを預かっているのは俺だけだし。

「困ったな、君を一人にすると浚ってくれというようなものだ。」

すぐそこには奴隷市もあるし、人間が居てもおかしくは無いしね。」

「奴隷市なんてあるのか・・・。」

「あれ？ 興味ある？ やっぱり番いは同じ人間の方がいいもんね。」

君が気に入ったので安かったら買ってあげるよ、なんて笑えないことを言うクラウン。

「よし、さつさとつまらない用事は終わらせてそっちに行こうか。」  
こいつの中ではもう奴隷市に行くことは決定事項のようだった。

こいつは自分と同じ人間が売られていく様を俺にどう見ると言うのか。

それとも、自分の境遇を目に焼き付けるとでも言いたいのだろうか。

俺は、複雑な心境のまま付いていくことしかできないのだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おや、なにやら騒がしいねえ。」  
サイリスも頼まれごとの買い物済ましてクラウンに付いていくと、  
彼がそんなことを呟いた。

「そうなのか？」

俺には全く他の喧騒と見分けが付かない。

相変わらず魔族の密度は三メートル先が見えないくらいだ。

「ここからじゃ見えないな。ちょっとこっちに行こう。」

「ん？」

クラウンに手を引っ張られて路地裏に連れて行かれると、急に跳躍して近くの屋根の上に引っ張り上げられた。

「うおっ……つとと……一言くらい言えよ。」

バランスを崩さないように何とか踏みとどまると、俺は既に屋根の端で下を見下ろしているクラウンの元に向かう。

「へえ……面白いことになってるなあ。」

クラウンはそう言っただけで喧騒の奥を指を刺した。

そこは、ぽっかりとドーナツ型のように人の居ない輪が出来ていた。その中心に、一塊になっている集団が居た……。それは……。

「人間!？」

そう、まるで魔族に追い詰められて四面楚歌の状態で、人間が一塊に集まっていたのだ。

少なく見積もっても百人は居る。

「もしかして、あれは全部奴隷か？」

「多分そうだろうね、ここに人間が居る理由なんて攫われて連れて来られるくらいだろうからね。」

「……じゃあ、なんで捕まえないんだ？ 普通檻に入れたり鎖で繋いだりするもんだろう？」

だと言うのに、魔族に囲まれている以外は奴隷の人間達はほぼ自由の身だ。

よく見れば首輪や足輪を付けられている者も居るが、鎖が根元から断ち切られている。

「その原因は、多分あれさ。」  
クラウンが指先を動かす。

そこには、無人の輪の中にまるで魔族を遮るように両手を広げて仁王立ちをする人間が見えた。

まるで奴隷と同じようにみすばらしい格好で全身を隠しているため、どんな人間かは見えないが、覇気みたいなものは伝わってくる。

それはとても侵しがたい何かで、それが魔族の進入を躊躇わせているのだろう。

「……いったい、どういう状況だ？」

「うーん……どうやら、あの人間が奴隷の解放を訴えているみたいだね。」

耳のいいクラウンがそんな情報を拾ってくる。

「それでこう着状態……。馬鹿だねえ、そんなことしても余計酷い目に遭わされるだけだつて言うのに。」

「……………ああ、そうだな。」

「奴隷に許される自由は、優しいご主人様に行き会うことを願うことだけだつて言うのに。ねえ？」

「お前は自分が優しいと思っっているのかよ？」

「え、こんなに優しい魔族はそうそういないよ？」

俺は新手のジョークだと思ふことにしてシニカルに笑つて見せた。

「うーん、それにしても、無辜の民の為に無心で尽くす……。そんな人間、本当に居るんだねえ。救世主でも気取っているのかな？これで奇跡の一つでも起こして見せたら、まるで聖人だね。」

「おい、クラウン。そういう奴はな、人間つて言わないんだよ。俺は他人事のようにそう言った。」

事実、俺には全く関係の無いことなのだ。

「ただ、ただどなぜか、それがとても悔しかった。それが愚行でも、そんなことを実行してしまえるあの人間がどこか羨ましかったのかもしれない。」

「おっと、事態が進展するようだよ。」

「え？」

「“代表”のお出ました。」

クラウンは顎をしゃくつて見せた。

そこには、竜が居た。



俺の知識が通用するなら、あれは翼竜。ワイバーンと呼ばれる竜だ。

そして、ブラックドックを駆るのが犬の姿をしたコボルトなら、竜を駆る魔族は一つしかない。

「あ、あー。これで言葉は通じるか、人間？」

まるで人間のような声で、その“代表”と呼ばれる魔族は言った。

魔族代表交渉役。

そう、称される魔族は、ドレイクだった。

『検索』、246ページ。

種族：ドレイク（ロード：最上位種） カテゴリー：獣人・幻想種

性格：最悪 危険度SS 友好性：余地無し

特徴：

ドレイクの最上位種族。魔族の支配階級であり、同属以外にも数多の種族を支配している。

魔王の為に集団的かつ勢力的に活動し、日々暗躍と蹂躪を企てている、人類種の宿敵である。

ロード種は魔族でもトップを貫くだけの実力と能力を持てるドレイク族から選ばれるエリートであり、根本的にはドレイクとは変わらない。

しかし、彼らは強力な竜神の加護を受けることが許されており、並

みのドレイクとすら一線を描すほどの怪物である。

このドレイクロードが率いるドレイクのワイバーン部隊は城を容易く陥落させる悪夢として語り継がれており、筆者も辛酸を舐めさせられた。

下手をすればエンシエントドラゴンに匹敵する強敵であり、討伐には決戦を挑む覚悟で行うように。

性格は前述の通り最悪であり、傲慢で常に人間を見下している。人間を残虐に殺す様を眺めて楽しんでいる節すら見受けられる。

知能は人間よりも高く、魔族には珍しく謀略で相手を貶めたりもする。

遭遇すること事態は魔王でも現れない限りほぼ無いが、もし集団以下で出会ったのなら死を覚悟してもらうほかない。

連中に関しては筆者でも情報が不足している。幸い、連中は自己顕示欲が大きいので、後手に回っても体勢を立て直す時間はある場合が多い。

万全の準備を期して、決戦に臨んでもらいたい。

「ドレイクの・・・ロード種!？」

浮かび上がる知識だけでも身震いするほどの化け物だと分かる。

事実、あれほど密集していた魔族の群れがぞわぞわと波紋のように引いていく。

「」機嫌麗しゅう、お嬢さん。

私はドレイク族の族長を勤め、魔族の代表交渉役を担う者だ。

皆は私を『マスターロード』と呼ぶ。」

空中のワイバーンから降り立ち、魔族の前に立ちはだかる人間の前に躍り出た。

威厳だとか、畏怖だとか、そういうものではない。

圧倒的な存在感がそこにあった。まるで、巨大な竜を目の前にしているような、圧倒的で絶望的なほど強大な存在だ。

「あらゆる種の頂点と嘯きますか。」

そして、竜の顎に飲まれかけていると言う状況にも等しいのに、彼に相対する人間は一步も引かなかった。

「そうやって、あなたは自分以外の全てを見下すのですか？」  
「ぶわッ、と風が吹いて、その人間のぼろ布が剥がれ落ちる。」

まだ俺と同じくらいの、金髪の若い女だった。



## 第七話 『マスターロード』

エクレシアが最低限の荷物を持って大聖堂のある第二十八層から降りて向かったのは、第十層である。

魔族の言う“箱庭の園”で人間が住んでいるのは第十五層までだ。そこから先は分類上魔族ながら人間と中立的な存在である“亜人”が緩衝材のように住んでおり、第十層からは本格的に魔族が跋扈している。

第十層から第五層までは下級魔族が多く住んでおり、それより下層は上級魔族が住む魔の領域である。

人間が普通に行けるのは、第十一層まで。

それ以降は公的な庇護がなければ、人間なんて歩けないような魔物魔獣魔族の三重の地獄である。

魔族の領地を歩くことを人間が許されるには、魔族代表の許可が必要だ。

ちなみに、そんな許可が下りた試しなんて当然無い。人間と魔族、争っていないだけの冷戦状態。

テーブルの水面下では激しい蹴りあい押し合いが続いている。

千年の雌伏から勢力を拡大に転じたい魔族に、それを何とか押し留めている人類の構図である。だが、お互いに戦って戦力を削りたくない。だから争っていないだけなのだ。

そしてお互いに付け入る隙を見せないこう着状態が続いている。

階層昇降用の魔方陣がある施設自体は警備があっても、それでどこに行くかまでは問われない。

第二十八層からそのまま第十一層まで直行し、そこに住む亜人の商人にお金を渡してエクレシアは荷物にまぎれて魔の第十層に足を踏み入れた。

その時の亜人の商人の表情は驚愕を通り越して係わり合いにならないといった様子だったのをエクレシアは覚えている。

だが、金払いの良かった（教会の払いである）からか、彼女の押しが強かったからか、最終的には了承させた。

あとは彼女の持ち前の度胸と信仰心にて最高クラスの魔術師でも近づこうなんて考えない第一層の宮殿に向かったのである。

そこで正式に代表交渉役に布教の許可を貰おうとしたのである。律儀な女である。

これが人間の魔術師の常識なら、相手の領地に入ったのならその領主に挨拶に行くのは礼儀だが、彼女は本気でそれが通用すると思っていたのである。

ここの“代表”も魔導師の一人であり、自分の首領と同じ枠組みに

納まっているのだからそれも無理からぬことであるが。

「“代表”に会わせて下さい。」

「帰れ。」

しかし、中庭と表エントランスは観光地として開放されている魔王不在の宮殿と言えども、受付をしていたラミアの女性はそんなエクレシアを笑顔で門前払いしたのだ。既に門の内側ではあるが。

「どうしても用事があるのです。」

「アポがなければお会いさせることはできません。どうせ“代表”は暇しているでしょうが、規則ですからダメなのです。」

「そこを何とか、大事なことなのです。」

「ダメなものはダメなのです。」

「……実はここにとびきりの……」

「賄賂もダメです。」

仕方ない、最終手段とばかりにエクレシアが覚悟を決めた時。

「どうかしましたか？ 何か問題でも？」

「ああ、秘書官。ちよつと困ったお客様が……」

受付の反応から後ろに振り返ったエクレシアは、ギョツとした。

ねじれた角を持つ黒山羊の顔をした魔族だったのだ。

「あ、ああああ、悪魔!？」

「人の顔を見ていきなり悪魔とは失礼な。いえ、確かに悪魔属です」

がね。」

妙にインテリ風なその黒山羊の魔族は溜息を吐きながら掛けている黒メガネの位置を直した。

「その程度の精神感応で誤魔化せるとお思いですか？」

「!？」

その言葉にエクレシアは距離を取って腰の剣に手を掛けた。

今まで彼女がこんな魔族の巣窟どころか本拠地のど真ん中に居て平気だったのは、そういう偽装の魔術を使っていたからなのだ。

昔から人の心を動かしてきた教会は、その神聖な魔術の裏に対集団用の催眠や心理を利用する魔術が多々あるのだ。それは最早、黒魔術呼ばれても仕方が無いくらいに。

しかしこの魔族はそれをあっさりと見破った。只者ではない。

「およしなさい。争いなど無意味です。この場は引きなさい、余計な詮索もしません。すぐに引き返すのならば、黙っていきましょう。」  
暴力的で野蛮なイメージしかなかったエクレシアは、その知的な魔族の対応に一瞬逡巡した。

「悪魔の言葉を信じるでも？」

「ではどこに疑う要素があるのか言ってみなさい。私があなたの正体を叫べばよろしいか？ 帰りなさい。ここは人間の居るべきところではない。」

エクレシアには、それはとても真摯な言葉に感じられた。

己の使命を全うする者のみが出来る、純粹な瞳であった。



「……信じましょう。」  
だから、エクレシアは服の下にある胸元の十字架のペンダントを握り締めて頷いた。

そして、そのまま何も言わずに踵を返して彼女は宮殿から歩き去った。

後ろから襲われるとか、罠だとか、そんなことはこれっぽっちも考えなかった。彼女が己の信仰心に従って信じたのだから、疑う余地などなかった。

教会には嘘を見抜く（と信じられている）魔術も伝わっているが、協会の歴史から当然血塗られている魔術であるそれを使う気にもなれなかった。

結局、行き場を失ったエクレシアが第二層に流れ着くまで、何事も無かったかのように魔王不在の宮殿は観光客で賑わっていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「これからどうしましょう……」  
とりあえず、近場の宿を借りてエクレシアは一息ついた。

そうは言っても、やることは一つである。

エクレシアは道中の本屋で購入した参考書をテーブルの上に置いた。  
どっさりと辞書並みに厚いそれは軽く五冊はあった。

「まずは古代竜族語から……。」  
彼女が開いたのは、『馬鹿な人間にも分かる古き竜の言葉』という  
タイトルの参考書である。  
タイトルからして魔族向けの代物だった。

彼女は無心になってじっくり時間を掛けてそれを読み進める。  
アルファベットに当てはめても発音できない言葉の数々を、何とか  
真似てみるが、お隣さんから苦情が来てしまったので止めた。

魔族の使っている文字は共通なので一度覚えてしまったので苦労は  
無いが、人間が覚えきるには魔族の言語はかなり多かった。  
布教の第一歩はまず現地にて言葉と習慣を覚えることである。

そこは共通認識の魔術を使えば万事解決なのだが、彼女達はそんな  
不遜なことはしない。  
聖書にはバベルという高すぎる塔を作り神に戒められた話が語られ  
ている。万能の言葉など彼女にとって不徳なのである。

だから真面目に一つ一つの言語を覚えようと頑張っているのである。涙ぐましい努力であるが。

しかもこれは騎士団全体の方針のため、彼女が勝手に破るわけには行かない。

「あー……」

母国語と英語とフランス語と出張したときに現地で覚えた片言の日本語だけでも心が折れかけたエクレスシアは、勿論二冊目の参考書を開いたところで力尽きていた。

「まだ、まだです。まあ諦めるような時間じゃありません。

これは主の試練なのです。主は人の乗り越えられない試練は与えないのです!!」

そうやって自分に喝を入れて再度奮起したエクレスシアは取り憑かれたように参考書を読みふけるのであった。

マスター・ジュリアスが苦行だと言った理由も痛感しているエクレスシアであった。

言語の壁の次は、文化の壁である。

魔族全般は魔王を崇拝している。

独自に神を崇めている種族も居るが、大抵はその魔王の存在がネックなのだ。

人間を創造したのが神ならば、魔族を創造したのは彼らの崇拝する魔王の初代であると考えられている。

初代魔王が何らかの理由で退陣し、それから五百年周期で新たな魔王が誕生し、討伐され、復活し、隠れ、誕生を繰り返したと異世界

での歴史書には書かれている。

その異世界が滅び、魔族諸とも人類がこの世界に逃げ伸びて以来約千年。新たな魔王は誕生することなく沈黙を守ったままである。今は創造主の後継者が不在という絶好の機会なのである。更には魔王に対する不信感も各地で募ってきていると言う。

魔族が乱れる。

主の言葉の理由は恐らくそこにあるとエクレシアは考える。

それで現政権を打ち倒す勢力でも現れたりしたら、魔族は暴走し多くの犠牲者を出して双方に大きな打撃を与えることだろう。それだけは許されない。

「私の使命は、一刻も早く魔族に神の教えを説き、争いを事前に収めること。主はその為に私をこの地に遣えたのです。」  
己の大儀を確認し、早くも折れかけた二度目の心を再び奮起を促す。

「信じるものに不可能は無い、と主は仰られた。今の私に、不可能はあああないいいいいいい！！！！」

「だからうるせえつつつてるんだろっが！！！！」  
そしてすぐに隣から怒鳴り声が聞こえる。  
言葉は分からないが怒っていると言うことだけは分かるエクレシアであった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

エクレシアはそのまま数日間滞在し、何とかある程度の知識を詰め込んで知恵熱にうなされること一日、だいぶ体調が良くなり起き上がると外がいつもより騒がしいことに彼女は気づいた。  
今日で別の階層に行こうと考えていた彼女は持ち物を纏めて、チエックアウトをしに部屋を出た。

『何かありましたか？』

エクレシアはそう竜の言葉で書かれたメモを持って、この宿の女将を務めるリザードマンを掴まえて問うた。

「ああ、今日は人間を仕入れる日でね、それで賑わっているのさ。」  
すると、言葉を発していないのに伝わったのである。  
最初は不審そうにしていた女将もここ数日でそれにも慣れたのか、すぐに答えてくれた。

古代竜族語はリザードマンやドレイクなどの爬虫類系の魔族に広く用いられている言語である。エクレシアに発音は出来ないため特殊な伝達方法になってしまっているが、伝わっているので問題は無い。

念話を代表するテレパシーな会話手段はオーケーなのだが、それだ

言語の壁に引つかかるのでこんな風に四苦八苦会話している。

「人間を・・・仕入れる？」

エクレシアは続けて『どういことですか？』と竜の言語でメモを書き、それを魔術で伝えると、知らないのかい、と女将は不思議そうに顔をした。

「そろそろ搬入される時間だねえ。」

今日はここひと月の人間狩りの成果がある日だよ。“代表”の人間狩り部隊が奴隷商に卸されて連れて来られるのさ。ほら、窓に見えるだろう。」

言われて、エクレシアは窓を見た。

そこには、手枷を嵌められ、足枷は一本の長い鎖で身動きが取れないように大勢がムカデのように連なって歩かされている人間の行列が見えた。

皆がみすばらしい服装で、顔やむき出しの手足には暴行の痕さえ見える。

そして、その表情は絶望の二文字が浮かんでいた。

考えるより先に体が動いていた、という言葉の意味をこの時にエクレシアは初めて知った。

過程は覚えていないが、剣を抜いたところからまるで記憶に無い。気がつけば、鎖や手枷を全て断ち切り、奴隷を守っていた魔族の兵士を薙ぎ倒していたのだ。

一応これから教えを広めようとする相手である、手加減は出来ていたのか、致命傷を与える一撃は無かったと思う。

そして、冷静になった時には四面楚歌。

振るえ、脅える百人近い人間を背に、彼女は一人魔族の間に立っていた。

魔族もまだ混乱しているのだろう、理論上じゃなくても百人を一人で防衛するのは不可能であり、獅子奮迅の奮闘を見せたエクレシアに立ち向かうのを躊躇っている。

と言うより、ここに居るのは殆どが非戦闘員ばかりであったのが幸いだった。

兵隊が騒ぎを聞きつけてきたらここは地獄絵図になるだろう。

それまで、彼女は時間稼ぎに魔術の術式を構築し、奴隷となった人々を守るために結界を張った。

そして、大声で張り上げて言った。

「この様な心も体も切り売りするようなことがあってはならない！！私は彼らの解放を求めるツ！！この様な横暴、神が赦すとお思いか！！」

伝わっているかどうかは問題ではない。

聞かれなければ、誰とも通じない。

耳を貸す者が居なければ、どんな崇高な教えも馬の耳に念仏なのだ。教会は相手を振り向かせるために、時に暴力を手段として選んできた。愚かなことである。神の言葉一つで戦争にすらなったことすらもある。

「（ならば、これは私の聖戦である。）」  
かつて聖人と呼ばれた数々の聖職者の多くはその行いを理解されず、心無い者たちに処刑されてきた。  
そこには様々な奇跡が逸話として残っているが、それはこの際関係ない。

「（私は、誰にも理解されずとも戦おう。我が行いは必ず主に届く  
のだから。）」  
結界が展開される。

様子を窺っただけだった魔族に明らかに躊躇いの様子が見て取れた。

私は両手を躊躇い無く広げて、魔族との間に立ちはだかる。

「さあ、ここは聖域。この両手より先は、神のおわす領域である。神の怒りに触れることを恐れぬ者よ、我こそはと踏み込むが良い。主に代わって人類に仇なす悪を成敗しよう。」  
エクレシアはそう適当に口上を述べて、周囲の状況を確認する。

結界の効果はちゃんと出ているようだ。  
集団心理を利用した結界だ。



誰も自分の行いは正しいと思っている。

本来は一定範囲に近づくことに良心の呵責を訴えるような者を置き、集団の悪から身を守るための魔術である。

そして、場の空気が伝染し、誰もが手を出せない神聖な空間を形成・  
・・するように見せる魔術である。

その心の隙間を突いた魔術で、追い詰めているつもりが逆に自分たちの良心を人質にされていると言う割と卑怯な代物である。

この瞬間、大勢の魔族はたった一人の小娘に手玉に取られていたのだ。  
だ。

だが、それだけでは事態は解決しない。  
時間を稼いでさっさと逃げる為の魔術なのだから。

「（だけど、流石にこの人数を救うには、それこそ主の奇跡でも起きない限り不可能・・・私はどうすれば・・・）」  
神の奇跡を扱い、異教徒と戦ってきた彼女だから分かるのだ。

祈るだけでは主は助けしてくれないのだと。

しかし、残念ながらにらみ合いが続くだけである。

こう着状態が続き、はったりもそろそろ限界に来そうになったその時である。

ばさばさ、と巨大な鳥が羽ばたくような音が聞こえた。

「あ、あー。これで言葉は通じるか、人間？」

見上げれば、青い鱗のワイバーンに、人型の怪物が乗っていた。

それが、私の目の前に降り立つ。

「ご機嫌麗しゅう、お嬢さん。

私はドレイク族の族長を勤め、魔族の代表交渉役を担う者だ。

皆は私を『マスターロード』と呼ぶ。」

それは、奇しくも最初に面会を求めようとした人物だった。

「あらゆる種の頂点と嘯きますか。……そうやってあなたは、自分以外の全てを見下すのですか？」

強い風が吹く。

いつそののまま、預言者エリヤのように竜巻で連れ去ってほしいとすら思う状況である。

「事実だよ。お嬢さん。

それより、私に名乗らせておいて自分は他人の批判かな？」

「……」

「いや、いいさ別に。どうせ本名が聞けるとは思っていないからな。お前、教会の人間だろう？ 洗礼名のところだけでも良いから言うてみる。」

「失礼、『マスターロード』。私の名はエクレシア。

出来れば公式の場で御顔を拝謁したかったです。」

流石は政治的な意味を含めても人間を押しつけて“魔導師”の位に居る魔族である。隠し事は出来ないか、とエクレシアは悟った。

「畏まるなよ。少しも敬っていないのは分かっているんだ。

あの女・・・『カーディナル』のように開き直ってくれたほうが嬉しいね。まあ、あの女はすこし憤みを覚えたほうが良いと思うがね。まるで男を立てると言うことを知らないようだ。交渉の席では何度も煮え湯を飲まされている。だからこの場はすこし意趣返ししてやるから覚悟しろ。」

仰々しい肩書きを持っている割にフランクで子供っぽい言い方であった。

「・・・・・・・・・・」

「ああ、このことは当然『カーディナル』に講義させてもらうが、問題になどしないから安心するといい。

悔恨など引きずるものではないしな。我々魔族としても、魔王陛下が不在の今、人類とことを構える理由なんて全く無いのだよ。この場で起きた問題はこの場で全て終わらせる。それで良いな？」  
まるでマニュアルでもあるような対応である。

ええ、とエクレシアは頷いた。

頷くだけでも慎重にならなければならない。

相手は悪魔さえ跪かせるドレイクの長だ。

いったい裏でどんな悪魔的な呪いや契約の準備を進めているとも限らない。

エクレシアがそんなことを考えていると、周りの魔族から一斉にブーイングが飛んだ。

傍から見れば今の対応は『マスターロード』が下手に出たように見えるのかもしれないとエクレシアは思った。魔族の連中はそれが気に入らないようである。

そんな中でも『マスターロード』はさすが為政者をしているだけあって、涼しい顔をしている。

「ははは、  
黙れ下種ども。」

『マスターロード』は涼しい顔のまま、適当に腕を振るった。

それだけまるで巨人になぎ倒されたかのように無数の魔族が宙に舞った。

一瞬で場に静寂が戻った。

「私からすればお前らも、人間も同じなのだよ。下等生物の分際で私に意見するな。私のやり方に文句があるならば掛かって来い。」  
当然、魔族最強の男に逆らう者など居なかった。

「暴力による抑圧で、貴方は本当に支配したつもりで居る・・・寂しい人ですね、貴方は。」

「私は人間とは違うのだよ。寂しいとかで柔な感情で精神が揺らいだりはしないのだ。そもそも私は現状にとっても満足している。」  
どこまでが本気か分からない笑みを浮かべ、『マスターロード』はそう言った。

「偉大なる竜の化身、『マスターロード』。  
貴方に誇りがあるのなら、今すぐにこの者たちを開放しなさい。」  
「開放しても良いが、その言い方だとその後のことがまったく考えられていないなあ。私が開放したとしてすぐに捕まえるとは思われないかね？」  
彼は馬鹿にしたように笑った。

「彼らを人間の住む土地へ解放なさい。」  
「い、や、だ、ね。」  
今度はニヤニヤとした笑みを浮かべ、『マスターロード』はまるでソファーにでも座るように虚空に腰掛けながら言った。

「お前、私がどんな役割を持っているのか分かっているのか？  
交渉役だよ、交渉役。譲歩や約束を取り付けるにはそれなりの対価が要るのさ。等価交換はこの世の原則だろう？」  
「何の罪もない民草を刈り取ることがこの世の原則と仰るのですか？」  
「ほう？ 本当に何の罪も無い、と？」  
「当然でしょう、そうですよね。」  
エクレシアが頷いて、同意を求めるように背後の人々を向いた。

しかし、誰一人彼女と目を合わせようとしない人間は居なかった。

「え……どうして……？」

「と……どこでお前、どうやってここまでやってきた？」

この私の許可も無く、どうやってここまで進入してきたと訊いている。」

「……まさか。」

エクレシア自身、決して褒められた方法でここまで来たのは承知だが、仕方が無いと割り切っているし、相手もそれは承知だろう。

なぜ、そんな暗黙のうちに終わった話を蒸し返すのか、答えは簡単である。

「そう、そいつらは殆どが魔術師だ。」

まさか労働力にするために農民でも浚つて来ると思っただか？

教会の人間であるお前にビジネスの話は釈迦に説法だが、物には付加価値つてもものある。何の技能の無い人間を連れてきてもつまらないからな。

そう、こいつらはな、全て魔族の領域侵犯を犯した人間なのさ。」

がらながら、とエクレシアは足元を崩されたような気分だった。

「お互いの領域に侵入した場合の取り決めは『盟主』となされている。」

曰く、お互いがお互いの領域に入った者は好きにして良い。これは両者の間で決まった正当な権利なのだよ。

ところで、お前はこれが見える？」

いきなり脈絡もなく話題を変えて、『マスターロード』は己の立派な角を指差した。

「つの……です。」

「違う、魔術の材料だよ。では、これは何に見える？」

『マスターロード』は己のサファイアのような美しい鱗を一枚剥が

して、エクレシアに突きつけた。

「うるこ、です……。」

「違う、魔術の材料だ。では、ここにある我が心臓、お前には何に見える？」

「……。魔術の、触媒……。」

「そつだよッ！！」

いきなり怒鳴り声を挙げた『マスターロード』に、エクレシアは体が竦んだ。

「お互い様なんだよ、人間の小娘。」

我らは人間を狩り、お前達は我々の一部が欲しい。

そもそも、『盟主』がこの“箱庭の園”に我らを強制的に集めたのも、使用できる魔術が失われないようにするためだ。失われていく一方の魔術の相伝と相続、そして保存を目的とした組織の本部がここにある。全て、お前ら人間の都合なんだよ。

ありがた迷惑とはこのことだ、我らは魔王陛下の眠る異世界の土地で朽ちるならそれでも構わなかったと言うのに。元々四代目魔王陛下の眠る場所だったこの“箱庭の園”を占拠したお前たちは、陛下の遺産を奪い取った厚顔無恥な墓荒らしにも等しい。

その挙句、勝手に我々を下層部に押し込んで、その上、魔術の触媒となる材料を得たいたと？

はははは、親の顔を見てみたいとはこの事をいうのなら、私はお前達を創造した神の顔を見てみたいな。さぞ、立派な顔をしているんだろうよ。」

『マスターロード』の言葉の端々から、溢れんばかりの憎しみ滲み出ていた。

「お前達、そこにいる人間は全てこの私が買った。そしてお前達にそのままそっくりくりくれてやる。」

お前達の好きなように鬪り、辱め、犯し、痛めつけ、殺せ。」

その直後、今まで黙って聞いていた魔族たちが一斉に歓喜の声を挙げた。

「貴方は……ッ!!!!」

「小娘、私に意見するならせめて神域の境地に辿り着いてから言うのだな。」

まあ、最も、この場から生きて帰れたらの話になるが。」

「貴方は、人に理解がある魔族だと聞き及んでいました、なのに、なのに!!!」

「お前の耳は節穴か？」

確かに私には人間の友人がいる。尊敬すらしているほどの人間だ。だが、そいつは私が同格と認めた唯一の存在だからだ。他とは違うのだ。」

「私が、私が犠牲になりますから、どうか彼らだけでも……。」

「聞けない相談だよ。その代わり、約束通りこの場で起きたことは全て解決したことにしてやる。お前の仲間には迷惑にはならんだろう。」

「私の、私の仲間は、そんなことを望んでいない!!!!」

「もういい、お前黙れよ。」

もう飽きたと言わんばかりの『マスターロード』の態度だと言うのに、エクレシアは恐怖で凍り付いた。

まるで、竜の舌で舐められたように全身に悪寒が走り、汗が全身か



ら際限なく流れ出す、種の根源に刻まれた恐怖。  
今まで信じ習ってきた神の言葉も、この絶対的な化け物を前にした  
らまるで落としてしまったかのように浮かび上がらない。

ただ、ぱくぱくと、口が開閉するだけだった。

そして、魔族の歓喜が収まり、あとは『マスターロード』の許しを  
待つだけとなった。

静寂に、ようやくエクレシアに声が戻った。

「あなたは……」

「んん？」

「キリストは刑死の際に、己を嘲笑った全ての人間を許そうと祈り  
ました。」

曰く、彼らは自分が何をしているのか知らないだけなのだ。

「ただ、貴方は理解しているのでしょうか？ これからどれだけ残酷  
なことをしようとしているのか！？」

エクレシアは両目に涙を溜めてそう訴えた。

まるでこの状況でまだ希望が残っていると信じようとしているかの  
ように。

「……お前、本当に分かかっていないな。」

初代魔王陛下の名はこの世界では表現することが出来なかった、だ  
から最も近い存在である聖書の悪魔が当てはめられた。

シャイターン、そしてサタンとな。我々ドレイクの崇拜する竜神も  
この世界に来た際に、聖書の赤い竜にすり替えられた。それもどち  
らも同一存在として見られているから都合が良かったのだらう。

これは『教化』という魔術の手法だ。己の崇拜する神を最も近い

形として認識しやすくする為の、な。

お前達もドルイドの崇拜している神を自分達と同じだと言わせただらう？ そう珍しいことではない。

つまり、我々は先天的にサタニストなのだよ。

お前のような聖職者の言葉を受け入れる余地なんて、初めから無いのさ。」

絶望を突きつけるように、『マスターロード』はそう告げる。

「……………そういうことだったのですね、マスター・ジュリアス。

」

どうして厳格で知られる彼がそこまで同情的だったのか、エクレスシアは始めて理解した。

困難だとか、そういう問題ではない。

魔王不在だからどうにかなるとか、それ以前の話なのだ。

根本的に不可能なのだ。彼らに神の言葉を伝えるのは。

彼らを受け入れると言うことは、己の教義を否定するのと同義だからだ。

魔術師は、己を否定することは出来ない。

それは彼女も、彼女が居た騎士団も同じである。

つまり、彼女は、嵌められたのだ、仲間に。

「跪きなさい、あなた方の罪は、私が背負います。」  
その時初めて、エクレシアは殉教者の気持ちになれた。

だから彼女は振り返り、恐怖に震える人間たちにそう告げた。

その時の光景は、まさしく聖人を前にして信仰心が芽生えた聖書の中のような光景だったと、目の前で見ていた『マスターロード』は後に『カーディナル』に語った。

彼女の表情を見た人間が、次々と跪いて両手を組んだのである。

そして、エクレシアは剣を抜いた。

「まさか……おい、お前達、殺れ!!」  
彼女が何をするか察した『マスターロード』は、今か今かと待ち構えていた魔族にゴーサインを出した。

大挙して魔族の軍勢が人間に殺到する。

「術式『聖ヒルデガルドの幻視空間』を発動。」

エクレシアは、剣を振り上げ、目の前に居る人間たちに振り下ろした。

その一撃は無慈悲なまでに命を刈り取る。

彼女の扱える中で最も強力な魔術は、百人以上の人間を一撃で絶命させた。その現象を説明するには明らかに時間が短すぎた。

苦痛もなく、恐怖もなく、彼らは本当に一瞬で絶命し、燃え尽きた。

まさしく天使のように、エクレシアはその虐殺を行った。

魔族たちには、百人以上の人間が、まるで奇跡、いや神罰のように消失したように見えただろう。

「神よ、あとは全て貴方に委ねます。」

そして、血すら付かなかった聖なる剣を抱いて、大粒の涙を流しながら魔族の軍勢に押しつぶされるのを待った。

だが、彼女の信じる神はそれ赦さなかった。

「もーらい、っと。」  
いつの間にかクラウンが、『マスターロード』の乗っていたワイバーンに騎乗し、エクレシアを掻つ攫っていったのである。

「オヤジー！！　そこに居る人間“全員”を買って僕らにくれたんだよね！！　じゃあこの人間は僕が貰うよ！！！！」

「おまえ、ばかじゃねーのー！！」  
ちなみに、翼竜の背にしがみ付いている人間も一人居た。

ほんの一瞬の出来事に、さしも『マスターロード』も反応する頃にはワイバーンは城壁の近くまで小さくなっていた。

しかし、すぐにワイバーンだけ帰ってくる。

そして、

「あの、どら息子・・・勝手に人の蔵書を持ち出しておいて、どこに行つてやがった！！！！」

呆気に取られていた『マスターロード』の怒声が響いた。

「一族を追放したのは貴方ではないですか、『マスターロード』。」

「馬鹿かお前は、息子の行方を心配しない親がどこにいる！！」

いつの間にか背後に控えていた黒山羊の秘書官に彼は怒鳴りつける。

「今日は帰りましょう。そろそろ仕事が舞い込む時間です。十分楽

しんだのでしょうか？ 聖堂騎士団にも講義をしなければなりませんし。」

「あ、ああ・・・全く、あの飄々さは誰に似たのか・・・。」  
頭を痛そうにして抱える『マスターロード』に、秘書官も肩を竦めるしかできなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「あつははははははは、最高のショーだったねえ、次はいつやるのかな？」

「そんなこと平気で言えるお前の神経を疑うよ。」  
俺は今日も振り回されてばかりだった。

でもまあ、ワイバーンに乗れるって言う貴重な体験が出来たからよしとしよう。いやあ、やっぱり翼竜は良いよな。男心をくすぐると言うか。

ギインギの奴はさつさと仕事を終えるからあの後すぐに帰り道である。  
なんと言うトンぼ返りなのだろうか。

宿も取つたのだから、てつきり一泊はするのかと思つたが、俺の都合なんてお構い無しのようにだ。まあ、俺に都合なんて疲れたから休みたいだけなんだけれど。

「いやあ、サイリスの奴の頼みごとなんて嫌だつたけど、たまには良いこともあるもんだねえ。面白いおもちゃも手に入つたし。

ああ、勿論それは君の番いにしても良いよ。雄だけつてもあれだつたから、丁度良かったよ。あははははは。」

「あつちの方のドレイクはまともそうだったのに、何でこいつはこうなのかね。」

本当にこいつは変人なんだろう。

こいつからはドレイクの凄さが全く感じられない。

「フーか、こいつ邪魔なんだけど。」

現在ギインギが操る荷馬車の八割が荷物で埋まっている。

で、もう一割がクラウンの奴が搔つ攫つてきた女。

残り一割の後部に俺とクラウンの奴が詰めて座っている。

彼女は気を失つており、仕方なく寝せているから場所を食っている。

「いいじゃないか。君も好きにしていんだよ？」

「冗談じゃない。お前あれを見たら、一瞬で百人以上消えたんだぜ

？」

「ああ、まるで天使だね。」

「あれのどこが天使だよ……。」

「君が思っている天使とは現実は違つてことさ。」

どうでもいい話である。

「ん……ん……んう？」

すると、その時、彼女に意識が戻ってきたのか、目を瞬かせている。

「おや、お目覚めだよ。」

「お、おい……暴れたら、お前が何とかしろよ。」

「大丈夫さ、今の彼女は多分君より役に立たないから。」

「はぁ？ どういうことだよ。」

クラウンに真意を尋ねようと思うたら、ふと、彼女がぱちちりとこちらを見つめてきているのが分かった。

「な、なんだよ……寝ぼけてるのか……って」

そう言ったら、彼女がずいっと近づいてきて、両手を俺の頬を掴んだ。

「この顔……この声……、覚えています、覚えていますよ。」  
ぶるぶる、とその手は震えて、下に落ちた。

「おお、神よ……これも、試練だと仰るのですか……？」  
そして、再び力尽きたように彼女は気を失った。

「なんだよ、いったい……。」  
困惑する俺を、クラウンはただ楽しそうに眺めているだけだった。





## 第八話 鬼と悪魔

「おいクラウン、また面倒なのを拾ったそうじゃないか。」  
ラミアの婆さんは刺激臭漂うキセルを啜えながらそう言った。

明らかに煙草ではないからか、外で吸っているので家から出てきたクラウンが彼女に捉まった。

「おや、お耳が早い。」

「歳食ったからって耳が遠くなるのはまだ先さ。しかも聖職者なんだから？」

サイリスの奴、ついにお前を怒らせたから連れて来た何て思って、退治されないかと震えていたよ。いやあ、可笑しかった。」

「確かにあれの鬱陶しさには迷惑していますが、なにもぶち飛ばすまでではないですからね。」

「イヒヒヒ、領主の旦那も頭が痛くなることだろうよ。」

きっちり首輪はつけておくことだね。うちの魔術は異端になるだろうから。口を出されちゃ困るのさ。」

「ちゃんと旦那には埋め合わせはしておきますよ。」

それより、ここだけの話ですが、どうやらそいつ、エクレシアといふんですけどね、メイの奴に関わりがあるようで。なにやら因縁を感じますねえ………」

「ほう……？」

「詳しいことは分かりませんがね。あの小箱、そのエクレシアも関わっているそう。運命の悪戯ってやつでしょうかねえ。」

「さあねえ、だが、何かが起こるんだろうよ。そんな予感がするさね。」

「とりあえず、僕は面白ければそれでいいんですけどね。」

そう言っつて、クラウンは上機嫌そうに鼻歌を歌いながら歩いていってしまっつた。

「それが嵐でなけりゃあ、良いんだけどね。」

この“箱庭の園”は、理想的な四季と環境が維持され、運営されている。

だから嵐なんて一度も起きたことなど無い。当然彼女も、嵐がどんなものかは知らない。

だが、これから何かが起こるなら、魔族の誰もが経験したことがないような事なのではないのだろうか、そう思うのだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おい、クラウンの奴は外に追い出したぞ。」

「すみません……。どうも今、彼が居ると、体が震えて……」  
無理も無い話である。

俺だってあんな間近でドレイクロードの殺気に当てられたら、多分  
一生のトラウマになるだろう。

今はまだあれから村に帰ってクラウンの家に戻り、お互いの事情を  
軽く確認しただけの段階だ。

俺が分かっているのは彼女がエクレシアと名乗ったこと。

俺がこの村に飛ばされた時にあの場に居たこと。

彼女が語ったのはそれぐらいである。

それで、彼女の要望で俺と話がしたいからクラウンはちょっと席を  
外してほしい、と言って彼が出て行ったのが現状。

俺は、何やら運命みたいなものを感じてしまった。  
神様なんて信じていないが、その存在を思わず肯定してしまいそう  
なほどの巡り会わせだと思った。

「随分と辛い目にあったようですね。」  
エクレシアが口を開いた。

椅子に座っている彼女は、今にもそこから落ちた様子で、  
くらいやつれている様に見える。

「あんたほどじゃないさ。」

「これくらい、何ともありません。私の正気は神が保証してくれています。それがある限り、私が狂うことはありません……が。」  
エクレシアは背筋がゾツとするくらい儂く微笑んだ。

「今回は少々、堪えましたね。」

これは、最初の任務で邪教徒とは言え、人を斬った時以来です。」

「いつもあんなことしているのか？」

「この世に蔓延る邪悪を討ち滅ぼすために。」  
一切の躊躇いもなく彼女も断言した。

「貴方は親しく話していましたが、あの魔族に貴方は隷属しているのですか？」

「あれでも命の恩人だからな。一応文句は無い。」

「よかった、酷い事はされていないんですね。」

俺は、自分の心配しろよ、と言いたかった。とてもじゃないが、どつちが健康そうに見えるかなんて言われたら、間違いなくエクレシアを選ぶ人間は居ないだろう。

「本当なら、今すぐにでも地上に送り届けたいのですが、……私の力不足を許してください。」

「俺が……地上に……？」

それは実に当たり前の言葉なのに、俺は呆気に取られてしまった。

「いや、いいよ。俺は人間社会よりこっちの方が楽だから。」

「そんなはずはありません。人の営みは人の中で行われるべきなのです。」

価値観も言葉も習慣も違う彼らに、貴方が馴染めるはずがありません。

ん。」

それは、確かに正論である。

「確かに、未だにあのクラウンの奴は人間だったら頭イカレた奴確定だし、普通に働こうと思ってても人間からして魔族の連中はまず基礎能力から段違いで俺に価値なんてまるで見出さなかった。」  
彼女の言うことは俺も痛感している。

言われるまでもないことだ。

「ならば、貴方は帰るべきです。」

貴方にも、貴方を思う友人や家族が居るはずです。」

「いや、居ないよ、そんなやつ。友達なんていなかったし、母親はクソな親父のせいで出て行った、そんな親父も……。」

「そうですか……。」

口ごもった俺のことを察してか、エクレシアは頷いた。

「でしたら、教会に保護を求めれば良いでしょう。」

今回のようなことに巻き込まれた人を助けるために色々と助けて下さる方がたくさん居ます。」

「だから、いいんだよ、俺には。」

人が信じられないなんて、俺は彼女には言えなかった。

「拒む必要はありません。」

貴方の国ではかつて狂った信仰によって悲劇が起こったのは知っています。それによる偏見が国中に広がっていることも承知しています。

みな慈愛に溢れた厳しくも優しい人たちばかりです。」

「俺だってあんたらが地下鉄に毒物をばら撒く連中と違うのは分か

ってるぞ。

「だけど、そういうことじゃないんだよ、俺が言いたいのは……。俺は、どうしても躊躇ってしまった。」

あれだけの人を殺しても、まるで穢れなく清廉に潔白と言った精神の持ち主が、もしかしたら怖かったのかも知れない。」

「では、なぜ？」

「……これは懺悔だけど、聞いてくれるか？」

「我が名はエクレシア。その意味はギリシヤ語で、教会。」

私は、生き、歩き、話す、教会そのものです。ここには神が居られます。神を前に、人は皆、平等です。どうぞ、言いなさい。」

「俺は、神様なんて信じてないんだけど、良いのか？」

「貴方は私を信じて告解してくれるのでしょうか？ ならば、貴方の心にも神は居られます。その事実の前には些細なことです。」

それはつたないが、精一杯覚えただろう日本語であった。

まるで異世界の言語の中に居る俺には、とても安心できる言葉だった。

「俺は、人を殺した。実の父親だ。」

「……」

エクレシアは何も言わなかった。驚くどころか、眉一つ動かさなかった。

「あの時あの場所であんなところに居たのも、逃げていたからなんだよ。だから、あの国に俺が帰る場所なんてないんだ。あんたが言

う優しさを受け取る権利もない。そんな俺は、人間じゃなくて魔族で良いんだ。」

「確かに、古来より親を殺すと言うことは最悪に近い罪悪です。ですが、貴方はそれを後悔している。貴方は償うことを放棄するのですか？」

「ごめんな、俺はな、後悔はしてるが、悪いことをしたとは思ってはいないんだ。」

一度クラウンにこの話をしたら、あいつ、『子を養わない親に生きる価値なんてないじゃないか、殺して当然』だなんて言うんだ。

俺はそれに納得しちまったんだ。人を殺して、平気にいるんだ。そんな俺は、まるで鬼じゃないか。だから鬼の俺は、魔族で良いんだ。

それは、我ながら酷い言い方だと思った。

泣く泣くあんな虐殺をした彼女を前にしてそんな言葉を平気で言えるのだから、やはり俺は鬼なのだろう。

「では、私は悪魔ですね。」

エクレシアは、柔らかな笑みを浮かべるだけだった。

本当に、神様が彼女の心を守っているが如く、鉄壁の笑みと精神だった。

「あんと俺は違うだろう。あんたは人間を信じてるじゃないか。」

「いいえ、私が信じているのは神様ですよ。私は、その言葉に従っている……いえ、縋っているだけです。」

今、私はどうすればいいのか分からないのです。私が布教活動のためにこの地に来たのはさつき言った通りですが、私は魔族というものを全く理解していません。ですが、私の上司達はそれを理解したうえでこの地に私を向かわせたのです。私は何かを成せと



言われたのではなく、仲間に死ねと言われたのです。ですが、それはきつと私如きに察せぬお考えもあるのでしょうか。」

俺は、生まれて初めて純粋な言葉に身震いした。

彼女は、仲間に裏切られたのに、それをどうでも良いように言うのだ。

いや、裏切られてなお、仲間を信じているのだ。

そこには俺には分からぬ信頼があるのかもしれない。やっぱり宗教は俺なんかには理解できる代物ではないようだ。

「しかし、神はそこで貴方に行き会わせた。

これは、天の思し召しに違いありません。お願いですから、私に貴方を救わせてください。そうしなければ、私は私分からなくなる。」

ああ、と俺はその言葉で納得した。

彼女は笑みを浮かべているのではない。

笑っていないと、自分が自分でいられないのだ。

本当に、壊れる寸前の、悲しみの感情で破裂しそうな心なのだ。

だから俺を利用して、無理やり気を紛らわせようとしているのだ。

「なあ、あんたはもしここで俺がいなかったら、・・・どうするんだ？」

「分かりません。それが分からないからお願いしているのです。」

「悪い、今のお前の言葉じゃ、俺の心には響かないよ。」

お前は神様の言葉を言ってるだけだよ、お前の言いたいお前の言葉じゃないと、俺はお前に何かを頼んだりできない。」

それは、ある意味さっきの言葉より彼女には残酷に響いただろう。

やはり、彼女はこの世の終わりみたいなお表情になってしまった。

「そんな、お願いです、私に貴方を助けさせてください。」  
抑揚すらない、機械的な言葉だった。

「そんなんじゃない、他の魔族の連中にもきつとお前の言葉は届かない。あいつらはいつらなりに信念を持って生きている。どんなに素晴らしい言葉でも、言わされているだけのお前の言葉なんて誰にも届かない。」

きつとお前じゃ、事実を理解しなくても同じ結果になったと思う。」  
「……酷いことを言うんですね。私はこれしか知らないと言っのに。」

「ああ。」  
本当に、酷いことを言ったと思う。

だって、それは彼女の人生を否定する言葉だから。魔術師が死ぬほど恐れている言葉だったのだから。

俺は、死に体の一人の魔術師に止めを刺したのかもしれない。

「良いでしょう、貴方が終焉なら、私はそれに従います。なぜならあの時、私は貴方を救えなかったのですから。」

「お前には無理だよ。俺はお前みたいな立派な人間が大嫌いなんだ。」

「

そして、止めを刺した理由は、ただの嫉妬だ。

本当に、みっともない。

「それでも私は、貴方を人間として愛しましょう。」

「……やっぱり、お前なんか大嫌いだ。」

こいつの心は、とっくに壊れているのかもしれない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「彼女、打ちのめされていたよ。君も結構魔族っぽくなったねえ。」  
あれから居づらくなって俺を外で時間を潰していると、クラウンが  
にやにやしながら近づいてきた。

「どうせ聞いてたんだろ。あの状況でお前が盗み聞きして無い理由  
がない。」

「ありゃ、バレちゃったよ。君も鋭くなったね。」  
カマを掛けたら凶星だったよこの野郎。」

俺たちは歩きながら話を始めた。

「俺は、どうすればよかつたんだろうな。」

「そんなの、僕が知るわけ無いじゃないか。まあ、従順になるならそれでも構わないけど、少しぐらい反抗してくれないと面白くないな。」

「なんだ、反抗してほしいのか？」

「冗談だよ。」

冗談だといいながら、君に何が出来ると目が語っているのは明白だった。

「しかし、ああいう綺麗なのをぶっ壊すのってとても楽しいよね、興奮しそうだ。」

「俺に同意を求めるなよ、この変態。」

「なんだよ、君だって気に入らなかつたみたいじゃないか。」

せっかく番いになると思ったのに、とふざけたことを言うクラウン。

「でもまあ、あれで終わるならそれまでって事じゃないの？」

人間社会については詳しくないけど、魔術師ってそんなもんだよ。

もしかしたら、これが彼女の信仰する神様が与えた試練なのかもしれない。

「人間を百人殺させた上にお前に捕まって服従させられることか？  
どんだけ厳しいんだよ、神様って。」

「それだけ期待されているのかもね。あと君からの仕打ちも入れ忘れるなよ。」

「悪かつた悪かつた。確かに止め刺したのは俺だよ。」

「もしかして、後悔しているのかい？」

「……まさか。」  
俺はクラウンから顔を逸らしてそう言った。

「君も分かりやすいよね。まあ、そんなことはどうでもいいや。それよりオーガロードの旦那から依頼があつたんだ。」

「今度はどうしたんだ。」

「盗賊の討伐さ。近隣の村々で多発してるらしい。」

それで、その村々と連携して周囲を大搜索、アジトを見つけ次第殲滅する流れだ。」

「おいおい、それで村の守りが薄くなつたら本末転倒だろ。」

魔族は基本力押しらしいが、敵の位置が分からないから炙り出しするしかないのは仕方が無いが、そこは少し考えれば色々と何とかできるだろうに。」

「まあ、お偉いさんの見栄が半分だろうけどね。」

肉を切らせて骨を絶つぐらいの気概じゃないとね、魔族はやっていけないよ。」

そういう訳で、僕は少しの間留守にするから、ちゃんと留守番しててね。」

「お、俺は付いていなくて良いのか？」

「流石に乱戦になるかもしれない状況で君を連れて行ける訳ないじゃないか。」

来週明けには君も実戦投入だからね、それまでに何とか動き回れるくらいにはなっておかないと、今の調子じゃ、君すぐに死んじやうよ。」

「……分かってるよ。」

「ああ、そうだ、彼女に指導でも頼めば？」

見たところあれは魔族の中でもかなり通用する実力はあるね。」

「冗談はよせよ。今更どんな面して頼めっていうんだよ。」

俺だって、流石にそこまで俺は恥知らずではない。

「じゃあ、僕がお願いしとくよ。よろしくね？」

「え？」

振り返ると、エクレシアが居た。一メートルくらい離れたところである。

全く足音がしなかった……。ここら辺は砂利道だと言うのに。まるで幽霊みいだった。危うく声を挙げるところだった。

「君が僕ら魔族にこれからどういう感情を抱こうが、僕は知っちゃこっちゃないし、これからどうするか何かはもっとうでも良い。だけど、重要なことが一つある。君らは僕を楽しませないといけないことだ。」

僕はね、君らがうらやましいのさ。初代魔王陛下は、眷属たる僕ら魔族に独創性や芸術性をお与えにならなかった。

人間よりずっと長い時間を掛けて一つの文明として機能するようになってきたくらいなんだからね。

だから、僕は君らに興味があるんだ。楽しみなんだよ、君らがどうなるのか。そのためには、こんなところで死んでもらっちゃ困るんだ。」

まるで夢を語る子供のようにはしゃぎながら、クラウンは言った。

「もしかしたら、私たちと魔族は共存できるのかもしれないね。」  
「共存、だって？」

ふと、エクレシアが呟いた言葉に、クラウンは驚いたようにそう言

った。

「あなた方二人を見ていたら、そう思えてきます。」

「おいおい、ついには目と耳まで駄目になったか？」

どこをどう見たらこいつと仲良くしているように見えるのだろうか、この女には。

「それ、面白いかもね。我々魔族は人間との交流を一切断つて来た、それはなぜか、創造主がお互いに敵同士だからさ。」

「ただ、それって、とても下らないことだよ。この“箱庭の園”の外では人間が思い思いの文化や文明を築いていると聞く。」

「初代魔王陛下が何を思い我々を創造なさったかは伝えられていないが、僕はね、一つ確信を持っているんだ。」

「きつと、陛下も人間にあこがれていたのさ。僕ら魔族には人間を模したと思われる種族が沢山いるんだからね。」

「そう考えると、もしかしたら共存は可能かもしれない。」

「おいおい……。」  
冗談だろう、と言う前に、マシンガンみたいにクラウンは次の言葉を紡ぐ。

「決めた決めたきーめた。僕は人間との共存を目指そう。やっぱり人間の発想には驚かされるよ。こんなこと、考えたこともなかったよ。」

「おいおい、いいのかよ、それ……。」

「別に人間と仲良くしちゃいけないなんて法律はないよ。」

「お互いにこれまで理由も分からず殺し合いが続いてきただけなんだから。肝心の陛下も千年も不在のまま。だったら、そろそろお互いの関係を見直す時期としては丁度いいんじゃないのかな？」

「……………おい。」  
俺は何と言っているのか分からなかった。

「と、言うわけで、僕らはこれから共存を目指す同志だ。」

「おい、じゃあついに俺も奴隷扱いから開放か。」

「んなわけないじゃん、君はお金返すまで奴隷兼同志だよ。細かいことは僕が帰ってから煮詰めるとして、後は頼んだよ!!!」

「このやる……」

馬鹿みたいに上機嫌な笑い声を上げながら走り去っていくクラウンに、何だか俺も怒る気も失せた。

「あいつには振り回されてばかりだ。」

どうせ、俺もまた振り回されるんだろうなあ……。」

何だかあいつの勢いには勝てない気がする。

俺は溜息と共に肩が下がっていくのを感じていた。

「共存……既存の関係ではなく、新たな関係を築けば、或いは……。」

「まさか、あんたまであいつの気まぐれに感化されたんじゃないだろうな?」

そうなると最悪である。

俺が思うにエクレスシアは考えたら突っ走るタイプだ。変に方向性を与えたらとんでもないことになりそうな気がする。

「分かりません、私はどうしたいのか分からないのです。」

あの恐ろしい竜の化身を思い出すだけで、思いつきで出た言葉など



吹き飛ばされてしまうのです。

私は私が信じてきたことをしようすればするほど、自分の心が折れていく音が聞こえるのです。……これが、試練なのでしょうか。

「

「非常な試練を与えるのがお前の神なのか？」

「主は神が人に耐えられない試練を与えないと仰いました。そして、その試練を超えられる者にのみ与える、と。本当に私にその器があるのでしょうか……。」

「そんなの、俺が知るか。」

「もしかしたら、試練を受けているのは私ではなく、貴方なのでは？」

え、と思わず俺はエクレシアの方を見てしまった。

「そう思うなら、この一連の出来事に彼が中心に居るのも納得がきます。」

もしかして、魔族が乱れると言うのは……まさか……。」

「おい、なにぶつくさ言ってるんだよ。」

俯いてぶつぶつと何かを呟くエクレシアに、俺は何か嫌な予感を覚えた。

「メイさん、やはり貴方が指し示してください。」

お願いです、私はどうすればいいのでしょうか!？」

「だから、俺が知るかよッ!！」

「これは神の言葉ではなく、私の言葉です!！」

「だったらお前の好きにすればいいだろ!！」

鬼気迫る表情で追いかけてくるので、俺は何だか知らないが逃げることにした。

さっきまで死にそうだったのに物凄いバイタリティである。女って分かん。

「では!!」

ジャキ、といつの間にか目の前に瞬間移動して地面に剣を突き刺しやがったこの女!!

「貴方に付いて行く事にしましょう。」

これも神の思召しです。必ず、私はやり遂げて見せます。」

「やっぱり、俺はお前みたいなのが嫌いだ……。」

何か目的が出来た途端に元気になりやがって、お前に自分なんかなくせに。」

自分の言葉が、自分に突き刺さる。

もしかしたら、これは同属嫌悪なのかもしれない。

俺にだって、何も無い。

「それくらい、これから探せばいいのです。」  
「ただ、清々しい笑みでエクレシアは言うのだ。」

この女は俺にとって眩しすぎる。  
きっと彼女は、これからも犠牲を悔やみ、嘆き、しかし躊躇わず、  
恐れないのだろう。

やっぱり、俺には無いものを持っている。

その上、鏡に映したように、俺の醜さが浮き彫りになるようで、怖

かったのだ。

人間なんて、やっぱり大嫌いだ。  
この世に、俺なんて奴が居るから。

大嫌いだ。

## 第九話 囚われた心

「神の声を聞いた、だと？」

その日、騎士ジュリアスは大聖堂の廊下でばったりと出会った己の上司であり旧知である“騎士総長”の言葉に、目を見開いて驚愕した。

「まさか、それは本当なのですか？」

「飽くまで、当人の証言だがな。」

「……………」

“騎士総長”の難しい表情に、ジュリアスも表情を曇めた。

「今では彼女も覚えていないだろう。なにせ、声を聞いたのは胎児の頃だと言う。幼児は母親の胎内の記憶を六歳頃まで覚えていると言うが、それまでにそのことを彼女が口にしたのだと言う。教わってもいない難しい言葉でな。」

「…………長年私も神に仕えてきたが、本当にそんなことが起こりうるのですか？」

「不遜だぞ、ジュリアス。」

「失敬。ですが、神は偶像であるから意味があるのです。この世の終わりまで姿を現さず、己の死まで会うことすらできないから尊いと私は考えています。」

勿論、主の教えは信じていますが、…………まさか…………」

まるで聖人のような、と彼は言ったがそれではまるで聖人そのものである。

「それを聞いた母親が教会へ駆け込み、その神父がたまたま身内でこちらに連絡が行き、まだ幼児である彼女は我々が引き取ることになった。」

神の声を聞いたと言う事実はともかく、彼女の才能は本物だった。

『カーディナル』は“本物”だと確認したようだが、真偽は定かとは誰も言えんよ。」

「世が世なら異端審問は免れませぬね。」

「ああ、だが、今思えば悪いことをした。両親の家が貧しかったとは言え、彼女を引き取る際にこちらは生活の保障を条件にした。」

しかしそれは殆ど己の子を売り渡したようなものだ。そして、我々のしていることはどう取り繕っても人殺し。親も子も、どちらにとっても辛いだろう。」

「騎士総長殿、貴方がそれを言うては士気に関わりませぬ。」

我々は邪悪な儀式や魔術で人々を害し、悪へと導く輩を倒し、正義の為に戦っているのですから。」

「だが、事実だよ。我々に天国に行く権利があると思うか？」

我々にできることは、この地上を悪意から守り、『カーディナル』の理想の為に尽くすことだ。それが神の為に成ると信じてな。」

「それを決めるのは、それこそ神のみです。」

「そうであつてほしいな。」

“騎士総長”はそう言つてため息を吐いた。

戦闘になれば獅子奮迅の活躍で比類なき活躍をすると言う彼も、もはや戦い疲れ老いた獅子に過ぎないのだろう。

見た目はジュリアスと同じくらいの壮年の男だが、魔術により若さを保ち、実質何百年も戦い続けている老兵だ。それは、聖書の聖人にも匹敵する苦行だろう。

「では、なぜエクレスシアに魔族の地へ向かわせたのです？  
ただの布教が目的なら、もっと適任の宣教師がいるでしょうに。」  
あんな布教のイロハも知らないだろう小娘に何が出来るとまでは言  
わないが、もっと実績のある百戦錬磨の人材がこの大聖堂にはいる  
のだ。  
ならなぜ、確実性の薄い彼女にそんな大役を任せたのか。

彼女は別に奇跡を発揮したわけでもなく、ただの信心深い騎士の一  
人でしかないのだから。

「それは『カーディナル』に聞くしかないだろう。あの御方のお考  
えは時々常識や常道を超越している。こういうことは考えたくはな  
いが……」

「まさか、『カーディナル』が自分の地位を脅かすかもしれない存  
在である彼女を死に追いやろうと……？」

「それこそまさかだろう。あの御方の代わりなど、それこそ神の代  
弁者でも成りえないのは我々も承知しているだろう？」

それに、あの御方は人を心の底から愛している。それを私は何より  
も知っている。神の意思でその声が聞こえないからと言って、嫉妬  
に狂うようならば、それは神の意思を否定し、己の信仰心の否定し  
たことに他ならない。そんな愚かな御方ではない。」

「では、何を考えたくないのですか……？」

「………忘れろ、所詮は杞憂だ。」

“騎士総長”はそう言って、先に早足で歩いて行ってしまった。

「いずれは、お前にこの席を譲ろうと思っている。」

『カーディナル』もお前のような騎士を持って誇りに思うだろう。」「ははは、ご冗談を。我々の騎士団長は貴方だけですよ。」「……それに、私は人間として生きて死にたいのです。」「

そして二人は分かれ道に差し掛かり、その場で二人は各々用がある左右の道へと別れた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「さあ、どこからでも打ち込んでください。私を殺す気でどうぞ。」「エクレシアはどこからか調達してきた二メートル近い木の棒の先に大きめの石を縄で嚴重に括り付けたお粗末な武器を振り回し、俺に向かってそう言った。

「なんだ、その変なのは。」「ハルバードの代わりです。私、剣よりこちらの方が得意なので。」「どういう力をしているのか、或いは魔術によるものなのだろうか、片手で扱いにくそうなハルバードもどきを振り回す。」「

「白兵戦の主力が昔から長柄の武器だつては聞いたことはあるが、

それ本当に扱えるのか？」

「ええ、我が騎士団の主兵装はハルバードやメイスが殆どで、剣は近接戦での防御や十字架と見立てた“杖”として扱います。

剣の扱いは熟練が必要ですからね。これはハルバードとは少々勝手は違いますが、貴方相手なら許容範囲でしょう。」

「おい、俺はその程度の相手つてことかよ。」

「事実ではないですか？ 私は十年以上昔から神の御業を学び、三年近い実戦経験があります。ぬるま湯に浸かりきった国の人間の付け焼刃でどうにかなるとでも？」

それは事実だ。全くの事実だが、なんか普段と対応が全く違う気がするのは気のせいだろうか。

なんと言うか、目が違う。

「慢心は捨てなさい。実力が全てです。神に力を与えられて突然急に強くなるなんてことはまずないと思いなさい。強力な魔具を手に入れ、力に溺れた拳句、己の魔力が暴走し自滅した魔術師を何人も見えています。分不相応の力は破滅しか齎さないのです。」

「あ、ああ・・・」

色々な感情を我慢して稽古をつけてもらおうと思ったならこれである。

「魔術は己の才能とそれに伴う実力、それが無ければ己が覗く深淵へと墜ちてしまうのです。そこは肝に銘じておい下さい。」

「もう体験済みだよ・・・。」

「では、生き残れたことに神に感謝を。なるべく実戦に即した形式で訓練を行います。絶えぬ集中力、適切な判断力、そして何より己の積み上げた実力が必要です。お互いに怪我を覚悟で打ち合いを行い、極限の状況を出来る限り再現します。故に、容赦はしません。」



こいつ、もしかしたらすごく厄介な奴なのかもしれない、そんな気がする俺であった。

あほみたいに純粋な奴なのだから、自分の言ったことは当然守っているに違いない。多分こいつはかなり格下の俺相手でも絶対に慢心とかしないだろう。

「(・・・魔導書、ちなみに俺がこいつと戦って勝つ確率は?)」

『回答』 本書の惜しめないサポートを加味して、なんとマスターの勝率はポーカーの初期配置でストレートフラッシュを出すくらいもあります。

「(まるで高いような言い方じゃねえか!!)」

『回答』 当初のサポートが無ければ、マスターの勝率はポーカーの初期配置でロイヤルストレートフラッシュを二回連続で出す程度です。

「(・・・俺が悪かったよ。)」  
パーセントに直すのも嫌になるくらいの勝率だった。

『忠告』 本書は対魔術師戦闘を重視していませんので、適切な情報支援は最低限しかできません。マスターには彼女の教えは重要だと判断します。

「分かったよ、・・・『ケラウノス』を。」

『了承』 魔剣『ケラウノス』の顕現を開始します。

すぐに俺の右手に魔剣の重みが現れる。

瞬く間に魔剣がこの世に完全に出現した。

「情報体からのマテリアライズ（物質化）は本来ならそれだけでも高等魔術です。せめてそれで意表を突くぐらいはやってのけなさい。」

「・・・悪かったな、実力不足で。」

「この世には、そこまで至ることの出来ない魔術師が半数以上もいるのです。いじける前に研鑽を積み、その力に相応しい人間になるのです。」

なんか、ムカツとした。ムカツと。

まるで子ども扱いだ。

大人と子供以上に実力差はあるのは分かっている。だが、もっと言い方って物があるだろうが。

「行くぞー!!」

「行くぞと言って仕掛けてくる敵が居ますかッ!!」

俺が魔剣を構えて一歩踏み出す頃には、もうエクレシアは突撃体勢に入っていた。

相手は長柄の武器なので少しでも有利な位置に行こうと薙ぎ払いに注意しながら接近しようとするが、エクレシアの取った行動はサイドステップからのタックルだった。

「ん、がはッ!?!」

「格上相手に正面から挑んでどうするのです!?!」

そのまま突き放されて、すぐに弧を描いて飛んできたハルバードもどきの一撃を貰った。

俺はその衝撃で地面を二転三転と転がってしまった。

「いき、なり・・・フェイントかよ!?!」

「武器にばかり目が行っているのがバレバレです。当然の反撃だと思いなさい。」

勿論、俺の抗議なんて聞き入れられるはずもなく、エクレシアはハルバードもどきを振り上げて迫ってくる。

何とか起き上がって防ごうと試みるも、上半身が起き上がる前に振り下ろしてきた。

ぶつかり合う魔剣とハルバードもどき。

「う、ぐぐ・・・」

不利な体勢で押し込まれ、徐々にと言うには早すぎる早さで押し負けていく。

「体内の魔力が乱れています。身体の強化が散漫になっている証拠ですよ。」

「初めての訓練で何を求めてんだよ、お前は!?!」

「敵にそんな言い訳が通用しますかッ!?!」

「ぐげッ!?!」

罅迫り合いを一方的に放棄し、腹を思いつきり蹴り上げられ、俺はボールのように地面をバウンドしながら再び転がる。

「私が戦った敵はもつと卑怯でした。

おぞましい行為により成る邪悪で冒瀆的な魔術を繰り、時には善人のように振る舞い言葉巧みに隙を窺い、時には一般人を盾のように扱い、教団で習う礼節や礼儀が成立することなんて一度もありませんでした。

相手に事情があるにしても、戦ってねじ伏せるまで、まともに会話なんて出来ないのです。私が居たのはそういう場所です。」

「崇高な教えを説いておいて、やってることは結局は力かよ……

」

「私たちの行う異端審問は同じ聖職者にも疎まれる仕事でした。信用できるのは同じ命令を受けた仲間だけだったのです。己の身を守るためにそれは仕方の無いことだったのでしょうか。

それでも昔に比べて事前に殺害の許可が下りることは滅多になくなくなつたそうです。

我々の目的は飽くまで罪人の改心であり、殺すことではないのですから。」

こう本職の口から語られると、随分と自分のイメージとは違っていたんだなあ、とは思つた。

だが実際、彼女の戦意を受けると、そこに甘さなんて介在していないのだろう。

彼女はこちらが立ち上がるのをそんなことを語りながら待っていてくれたようで、俺が魔剣を構える頃には雄弁だった口も閉ざされた。

「ひとつ、妥協を許しましょう。」

「え・・・？」

「魔導書による体内の魔力制御を許可します。せめて戦闘にだけでも集中できなければ、上達も何もありません。魔術の扱いや魔力の制御はそこから徐々に体で覚えておけばいいのですから。」

「・・・わかった。」

俺はすぐに魔導書に体内の魔力の制御を命じた。

ほぼ停滞していた俺の体を巡る魔力が血流に沿って循環を始める。悔しいが、魔導書の行う魔力の制御は俺が自分でやるより数倍上手い。

これだけで動きが劇的に違ってくるのだから信じられないだろう。

魔力の正しい循環は俺の身体能力を生理的限界にまで引き上げる。この間はそれ以上にまで強化したからあんな目に遭ったのだ。

これくらいなら・・・まあ、翌日に筋肉痛ぐらいで済む。

「では、もう少し容赦しなくしますので、御覚悟を。」

「・・・お手柔らかに頼む。」

当然ながら、しこたま蹴られ殴られぶっ飛ばされたのは言うまでもない。

・・・  
・・・  
・・・

「もう痛むところはありますか？」

「ああ、これで悔しさも消えてくれれば完璧だ。」

魔力の強化がなければ骨が二桁は折れるくらいは散々打ちのめされた後、エクレスシアは俺に治癒魔術を掛けてくれている。

クラウンなんかよりずっと効果的らしく、瞬く間に痛みが引いていく。

逆に屈辱感は二次関数的に上昇しているが。

「誰もが最初は素人なのです。貴方は才能が許されているのですから、絶え間ぬ努力で実を結ばなければなりません。この世には、それが許されない人たちがいるのですから。」

「さっきの修羅のような気配はどこにやら。」

「いかにも私は慈愛が溢れていますよー、みたいな雰囲気復活している。」

「俺もお前みたいになれるのかい？」

「本当に強大な魔術師は、血筋から厳選されるそうです。何代も何代も、最果ての真理へ到達するために。」

その点、私は市井の出なので。この才能も神に許されたものだと日々感謝を忘れてはいけません。ですから、可能な限り、己を研鑽しているのです。

貴方もきつと同じですよ。」

「立派だな、俺には真似できないよ。」

「別に真似をする必要はありませんよ。他者を見て己を省みればいいのです。」

「それが出来れば、苦勞はしないさ……。」

「……貴方には愛が足りないようですね。」

「は？」

いきなり何を言い出すんだこいつは。

「人を慈しむ心ですよ。」

なるほど、確かに足りないだろう。そもそもそんな物は無いのだから。

「まさかお前、俺に好かれたとか思ってるの？」

「いけませんか？　だって大嫌いな人間と共にいるのは苦痛でしょう？」

「よくわかっていないじゃないか。実際苦痛を与えてくれるからな。」

治癒が終わったら速やかに目の前から消えてくれると助かる。」

「道は長そうですね……。こういう言い方はあまりしたくはないのですが、貴方は性格がねじれている。」

「聖職者は素直に悪口も言えないのか？」

「ではハッキリと言いましょつか。私は貴方みたいな性格の人間を見てみると虫唾が走るのです。悪の道に堕ちた人たちは皆自分勝手でした。だから一刻も早く矯正しなければならぬと思っています。」

「なんだよ、お互い様じゃないか。」

結局、人間なんてこんなものである。

「一緒になさらないでください。私は貴方みたいに半端ではないのです。」

「何だと？」

その言葉が、的確に俺のことを突いていたからか、俺は無性に腹が立ってエクレシアの胸倉を掴んだ。

「暴力に訴えますか？ よろしいでしょう。好きなだけ殴ると良いでしょう。」

ですが、貴方が、貴方如きが、私に傷つけられればの話となりますが。」

その時、初めて、エクレシアは俺に慈愛以外の表情を見せた。

明らかかな、嘲りである。

「お前・・・そんな顔できるんだな。かわいいよ。ぐちゃぐちゃにしてやりたいくらいには。それがお前の本性か？」

「表裏の無い人間なんて、居ないでしょう？」

私は自分が愚かな人間だと自覚しているのですよ。だから無心であるように努めている。そういう意味では、貴方は本当に私の心を乱してくれる。」

「良かったよ。俺は今までお前は人間じゃないと思ってた。」

だから本当に良かった。安心したんだ。お前はやっぱり俺の大嫌いな人間だ。」

「貴方も本当に罪深い人です。」

私もそうですが、貴方も自分のしたことを忘れたとは言いませんよね？

罪の報いは、死です。そして、そのまま罪に奴隷のように囚われる。ほら、今の貴方のように。」

俺は、この時、初めて女を殴った。

仰け反りすらしなかった。



「どうしましたか？」

嘲りながら、俺の大嫌いな人間は言うのだ。

もう一度殴った。

まるで殴ったと言う事実すら無いとでも言うように、手応えすらなかった。

お前の手なんて届きすらしないとでも言わんばかりに。

もう一度殴った。

当然、届かない。当たっているはずなのに、空振りしているようだ。

もう一度殴った。

本当に自分が何をしているのか分からなくなるように思えてきた。

もう一度殴った。

もう一度、もう一度、もう一度。結果は変わらない。

「ほら、貴方は奴隷だ。いつまでもそうやって、罪を重ねる奴隷だ。」

「うるさい、うるさい!!! 殴らせろ、殴らせろよ!!!」

「ええ、だから私は両頬を差し出しているでしょう？」

好きなだけ殴ればよろしい。気が済むまで、己の愚かさや無力さを噛み締めればいい。」

「くそ、くそッ、くそッ!!!」

酷使で腕が痛くなるほど殴っても、まるで雲を殴るように手応えが

無い。

いつの間にか、俺は力尽きて地面に大の字で倒れこんでいた。あれから俺がどれくらい無益な行為を続けていたか分からない。それでも彼女は何も言わずにこちらを見てくるのだ。

慈愛も、嘲りも無く、ただじつとこちらの瞳を覗いてくるのだ。

ただそれだけなのに、俺の本性を見透かされているようで、涙が出てきた。

俺は、本当に弱い人間だった……。

そんな俺が彼女の瞳に映り、無言のうちに見せ付ける。

「もう、許してくれ……そんな目で、俺を見るなよ。」

「悔い改めましたか？」

「悪かった、俺が悪かったから、もう許してくれよ……」

「私は何もしていませんよ。」

「違う、違うんだ……。」

俺は上手く言葉を伝えられなかった。まるで別の次元を隔てているように。

「いや、そうじゃない。」

俺が彼女にどうやって言葉を伝えればいいか知らないのだ。

次第に俺は、何を言って良いのか分からず、ただ口が開閉するだけ

になつてしまつていた。  
とても滑稽な自分が、彼女の瞳に映つて嫌になる。

だが、その時彼女は両目を閉じて、俺の首の後ろに両手を回した。  
抱きしめられているのだと、何秒かして気づいた。

「貴方の心に鬼が住んでいるのなら、私が退治しましょう。人は人としてしか生きられないのです。貴方が鬼にだなんて、とても可笑しな話なのですよ。」

神に誓つて、私は貴方の罪を赦しましょう。代わりに貴方も私の贖罪を背負うのを手伝ってください。

私のは貴方と違い少々重たいですが、まあ貴方にはそれくらいの試練は必要でしょう。」

「……俺は、変わるかなあ……。」

「努力なさい。神とて貴方の意思を捻じ曲げることは出来ないのですから。」

「……ああ。」

もしかしたら、俺はもう一度人を信じられるかもしれない。

少なくとも、彼女だけは信じれると思つた。

「き、きゃー！！　こんな昼間から、しかもお外でするなんて……人間って、す、進んでるのね……。」  
ふと、黄色い声が出た方を辿ると、サイリスが顔を真っ赤にしてこ

ちらを見ていた。

ちなみに傍から見れば地面に転がっている俺にエクレシアが折り重なっているから、見ようによってそう見えるかもしれない。

更に付け加えるなら、ここはクラウンの家の前なので、ご近所さんのサイリスが居ても全く不思議じゃない。

「いや、これは」

「人の心に巢食い邪悪な姦淫を唆す悪魔め、純粋な人の営みを汚すと言っのか、・・・許すまじ、成敗！！」

ジャキン、と飛び上がりながら腰に帯びていた剣を引き抜いたエクレシアが、サイリスに飛び掛った。

「え、ええええ！！ な、なんでええ！！ 私悪いことしてないのにい

！！！！」

「地獄へ帰れええええええ！！！！」

逃げ回るサイリスと、それを追っかけるエクレシア。

そんな二人を見ていると、なんだか自然と笑いがこみ上げてきた。

人と魔族の共存・・・そんな夢を見るのも、良いかもしれないなあ。



## 第十話 電光天罰

「だいぶ形になってきましたね。」

「はあ・・・はあ・・・本当か？」

あれから二日間ぼこられ続け、ようやくエクレスシアからそんなお言葉を貰えた。

まだクラウンの奴は帰ってきていない。

気が重いとまでは言わないが、居ないなら居ないで気が楽である。

箱庭のような場所とは言えかなり広い。まだ時間は掛かるだろう。

「ええ、これで熟練もしていない武器で挑もうと言う考えはもう無いでしょう？」

「そりゃあ、俺とあんたじゃ経験とか、違うからな・・・」

「はい。今までの稽古は貴方に武器の扱いでは絶対に私に勝てないことを教える為です。それと魔力制御の感覚も掴めてきましたか？」

「ああ、そっちの方も何とか。」  
訓練中はずっと魔導書が体内の魔力の循環を勝手にやってくれている。

いくら俺が下手でも、それはスポーツなどのプロの人間が俺の体を借りて競技をしているようなもので、どんな風に体を動かしているのか分かるのは当然で、俺にも何とか感覚が掴めるようになってき

た。

これは言葉で説明できるようなものではないので、直接彼女に教わるよりは有効な手段だったのかもしれない。

「では、そろそろ魔術を絡めた魔術戦闘の実践へと移ります。ここからが本番ですよ。」

「お、おう……。」

ぎしぎし痛む全身に鞭打ち、俺は何とか立ち上がる。

「ところで、貴方は私に勝とうと思うならば、どうすればよろしいと思いますか？」

「え……？」

唐突にそんなことを言われても分かるわけがない。

そもそも、実力差がありすぎてそんなビジョンが浮かばないのだ。

「相性のいい魔術を、的確な状況で運用すれば、たとえ格上の相手でも勝てるようになります。この相性がとても重要でしてね、どんなに強い魔術師でも相性が悪いとどうしても勝てない場合があるんですよ。だから最終的に魔術師はどんな状況にも対応できるように汎用的に落ち着くそうです。」

「ふーん、じゃあ、俺も相性がいい魔術を使えばあんたに勝てるのか？」

「いえ、多分無理です。」

「なんだよ……。」

期待を持たせておいてなんと言う肩透かし。

「私の扱う魔術の体系は汎用性に特化しておりまして、弱点が無いのが特徴なのです。」

「あ、そうかい。」

「言っただじやないですか。最終的に魔術師は己の弱点を埋めるようにしたり、或いは隠したりします。例え弱点があつたとしても、貴方に教えるわけ無いじゃないですか。」

「そりゃあそうである。」

『補足』 彼女の扱う魔術の体系は“神聖白魔術”であり、

対黒魔術に特化しているだけでなく、その魔術は汎用的で隙の無い完成度が高い魔術体系です。しかし、大魔術以上は集団での運用を前提としており、個人の火力が低い傾向にあります。一対一ならやられる前に高威力の魔術で押し切る必要があります。

魔導書ナイス。初めて役に立ったんじゃないかこいつ。

「そう言えばドレイクも精霊魔術を使うとかなんとか、あれにも弱点とかあるのか？」

「私の知る限り、無いですね。あれは最も原始的で強力な魔術体系の一つですから。術者が人間なら使用する者を選ぶくらいで、人間よりずっと自然に近い存在であるドレイクは生まれた時から高い適正があると思われれますから。普通にやり会ったら私でも苦労しそうです。」

「おい、弱点の話はどうなったんだ・・・。」

「それは主に黒魔術が主流だからです。使う魔術が弱点そのものなんて良くあることです。その点、貴方の使う魔術も少々使い勝手が悪いタイプです。」



「ええッ？」

俺は思わずそんな間抜けな声を出してしまった。

「ギリシヤ系統の魔術だと思うのですが違いますか？」

「え、・・・いや、どうなんだ？」

『回答』 完全に見抜かれています。経験の差は歴然でしょう。

「・・・分かるもんなのか？」

「ええ、ある程度熟練すると、使われた魔術の術式が見えるようになりすから。その傾向で大体は。」

「・・・それ、普通の人間の技術だよな？」

「こればかりは感覚なので、教えるのは無理です。」

それは俺も魔力制御を言葉で説明するのは無理なので、そう言われてしまつてはどうにもならない。

「じゃあ、雑談は終わりにして訓練を再開」

「お、おい、ちゃんと最後まで教えてくれよ！！ どう使い勝手が悪いんだー！！」

「うーん・・・どうしましょうか。ギリシヤ魔術は冗談ですまない場合がありますので、ちゃんと教えるべきなんでしょうが・・・。」

「な、なんだよ、それ・・・怖いこと言うなよ・・・。」

「まあ、魔術というのはどれも少なからず危険は伴う代物なので。エクレシヤは笑顔で言った。満面の笑みで言いやがった。

こいつ絶対俺がびびってるの見て楽しんでやがる。

「う、恨むぞこのやろう・・・」

「ではこうしましょう。どの道、貴方の技量ではそんな危険な魔術なんて扱えないでしょうから。」

「俺は一度酷い目にあっただんどぞ!？」

「ええ、全身の筋肉が引き千切れたそうですね。ですが、そんなのは危険のうちに入りません。それぐらいには魔術は危険です。」

「俺・・・挫けそうだよ。」

「すみません、少し意地悪でしたね。では、講義はクラウンさんが帰ってきてからにしましょう。私だけの見地で物を言うには危険ですから。」

「やめてくれよ、これ絶対それまでに何か起こるパターンだからそれ!!--」

「・・・ありえますね。ギリシア魔術ってそういう代物ですから。」

「ちょ、こわッ!!--」

結局、そんな感じのやり取りが結局昼まで続き、本格的な訓練は午後からとなった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「では攻撃性魔術を使用した実戦的な訓練となりますが、いきなり

は無理でしょうから、貴方の持っている魔剣の力で良いでしょう。」  
「これか？」  
午後になって訓練が再開される。

俺は顕現済みの魔剣『ケラウノス』を見下ろした。

「ケラウノス、というのはギリシアの主神ゼウスの別名であり、彼の持つ武器であり、雷そのものです。恐らくその魔剣はそれがモチーフになっているでしょう。」

恐らく雷を発生させる術式くらいは組み込まれているはずですが。」

「ああ、一度使ったときに電撃が出たな。」

「ではそれで。魔力を込めれば自動的に発動するでしょう。感覚は、自分の魔力の流れを手に集めて流し込む感じで。」

「こ、こっか？」

一度やったことがあるので、それと同じ要領でやってみる。

「あ。」

しかし、何かに気づいたエクレスシアが何か言う前に、ドカン、と魔剣から特大の雷が放出され、目の前に大穴が空いた。

「……………もう少し抑えてください。」  
そして確実に雷の直撃コースに居たはずのエクレスシアはピンピンしている。

「なんでお前は無事なんだよ……………」

「神の御力ですよ。それより、まさかとは思いますが、狙ってやったのですか？」

「そんなわけないだろ!!!」

初めて使ったときは人口雷くらいの小さなものだったのに、今は自然現象で起こる雷よりずっとヤバかった。

「もっと調整が必要ですね。」

そんなに際限なく垂れ流せばすぐに息切れしてしまいます。」

「あー、うん、そうだな・・・。」

なんか今ので一気にどっと疲れたような感じがする。

「魔力は生命エネルギーです。限界を超えて使用すると寿命が減ります。」

「え、マジで!?!」

「マジです。しかし、そこは普段から自分の頭が勝手にリミッターを掛けているので滅多にそんなことはありませんが、疲れるのは事実です。」

魔力の回復には休憩や睡眠が一番ですね。リラックスしていると更によろしいです。」

「なるほど。覚えておく。」

「では、そろそろ始めましょうか。」

穴が空いてしまったので、俺たちは場所を少し横にずらして距離を開けて相対する。

「今までと違い、私は魔術を絡めて攻撃しますので、当たったら痛いじゃ済みません。最初ですから狙いは甘くしますが、一応気をつけてください。」

「了解……。」

「飽くまでどんな感じか確かめるためにやりますが、出来る限りそちらも応戦してください。出来れば魔剣の出力の調整も。」

「注文の多いこつて……。」

だがそれは全てこなさなければいけないことだ。

俺は魔剣を構えて、様子を窺う。

一度このタイミングで強襲されたもんだから、警戒は怠らない。

「しかし……どこまで手加減すれば良いでしょうか。」

うーん、やはり、捕縛目的の非殺傷用の戦い方で良いでしょう。」

すると、エクレシアはハルバードもどきからこの間コボルトが使っていたような棍棒を彼女用に調整したメイスを持ってきた。

と言つても先端部分である柄頭が無く、鉄で補強されているとは言え中は木製なので重量もそこまでなく、ちよつとした棒みたいなものである。

長さも六十センチから八十センチくらい。彼女の持っている剣より少し短いくらいである。

そんなメイスもどきろ片手で持ち、エクレシアは構えを取った。

さて、どうでようかと感覚を研ぎ澄ませたその時である。

「た、たーいへーんよー!!」

ばっさばっさ、と蝙蝠のような翼をはためかせたサイリスが上空から声を掛けてきた。

「いったい何でしょうか？」

「一応彼女と和解したらしいが、エクレシアの声はちょっと硬い。」

「敗走した盗賊たちが落ち延びてきたのよ！！ それも結構多い！！  
連中、この村を占拠して立てこもるつもりよ。残った警備兵が応戦  
してるけど、殆どが出てくるから少しでも人手が欲しいのよ！！ 手  
伝って！！」

「なんですって!?!」

「ほーら、言わんこつちや無い。」

俺が危惧してた通り、防備を薄くしたら裏目に出てしまったようだ。  
このまま最悪の事態に発展するかもしれない。

「しかし、本当に何か起こっちゃうとはなあ。」

さて、俺は何とかしに行きたいが・・・どうするよ、師匠。いきな  
りの実戦は危険だつていうなら大人しくするぜ？」

「・・・本当ならそうしたいところですが、そうも言っていられ  
る状況ではないでしょう。私がサポートしますから、私から離れな  
いでくださいね？」

「了解。」

エクレシアは住人の命を優先するようだ。まあ、当然だろう。

魔族の連中は魔力で強化された俺より丈夫な奴らばかりだが、それ  
でも死人が出ないわけでもない。基本的にその分力が強い奴らばか  
りだからだ。

「じゃあ、私は師匠から住民の避難誘導をしろって言われてるから

「！！」

俺たちの参戦を確認すると、サイリスはそう言ってすぐに飛び去ってしまった。

すぐに俺たちも現場へ向かう。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「野郎ども持ちこたえろ！！ 最低でも騎士の旦那の屋敷に避難が済むまではなんとしても守り切るんだ！！ 籠城を決め込めばいずれ旦那やクラウン様も帰ってくる！！ 今だけは耐え忍べ！！！」  
現場の指揮を取っているらしいまだ若いだろウリザードマンが必死に士気を向上しようと叫んでいる。

こちらの手勢はだいたい二十数名ほど。しかも、お世辞にも戦闘慣れしているとは言いがたい。  
対して、敵勢は倍近いようだ。

敵は既に村内に進入を許してはいるが、即席のバリケードなどを敷いてこちらにも布陣できており、それ以上の進入はされてはいないようだ。

どうやら村外で敵の足止めを行い、バリケードなどの防備を準備し

てから徐々に後退したらしく、半数以上が手傷を負っている。

こちらに地の利があり、防戦だから何とか戦えているようなものである。

現状、こちらが弓や投石などで応戦しているからか、向こうも突撃してきたりと積極的な戦闘を展開してこない。

こちらの人数が少ないのは当然ばれており、こちらの弾薬が尽きるのを待っているのかもしれない。

「くそッ、こっちは補給をする人員も惜しいっていうのに・・・」  
苛立ちを隠せないリザードマン。

盗賊の目的は当然ながら略奪であり、割りあわない戦闘はしない。言うなれば、効果的でも被害が大きいなら積極的に戦いなんて挑んでこない。

相手は盗賊なんだから勇猛さを期待するなんて馬鹿馬鹿しいものだが、物量で押されても結局は勝ち目が無いので痛し痒しと言ったところだ。

こちらも向こうも構成は下級魔族ばかりであるので、基本一歩兵が一歩兵分の仕事しか出来ないと考えればいい。

下級魔族は質より量、上級魔族は量より質なのだ。基本的に。

更に単体で一気に戦況を変えられる種族となれば、本当に一握りなのだ。

「現場を取り仕切っているのは貴方ですね？」



「あ？・・・人間？」

俺とエクレシアがそのリザードマンの元に向かうと、相当イライラしている様子でこちらを睨んできた。

『検索』、72ページ

種族：リザードマン    カテゴリ：獣人

性格：攻撃的    危険度：B    友好性：低い

特徴：

二足歩行すると言うトカゲまたはワニなどの姿をした下級魔族。

知能はあるが、人間より高くは無い。

繁殖力も高く、集団で行動する機会が多いが、連中の縄張りに入り込まなければ襲われることはあんまりない。

それ以外の場合だと、ドレイク族の配下として登場するのは有名であり、何の脈絡も無くこいつらが現れたらドレイク族が裏で必ずと言って良いほど関わっている。

俊敏で力も強く、全身を覆う鱗は強固であり、集団で襲ってくることもかなり厄介な兵士階級の種族である。

うーん、せめて一ページは埋めたいけど、こいつらって書くことあんまりないんだよねえ。特にこれといったエピソードとか由来とか無いし。

あ、そうそう、一応人間との交流を持っていたこともあるって話しはきいたことあるね。

案外話の分かる連中なのかもね。

「……せめて口調くらい最後まで統一して欲しかったのは俺だけだろうか。」

「あー、あれね、クラウン様が言ってた……あれ？ 二匹だったっけ？」

「俺は……俺らはゴルゴガンの旦那からいざとなったら戦うように言われてる。何かすることはあるか？」

「ねーよ。人間なんか頼むことなんざ。あんたらが喰われちまったりしたら俺がクラウン様に首落とされるんだ。さつさと旦那の屋敷に避難しろ。」

リザードマンは迷惑そうにそう言った。

「さつさと避難しろってよ。」

俺は宗教上の理由で共通認識の魔術を使おうとしないエクレスシアの為に要約して教えてやった。

それでも俺が仲介になって教えるのはいいらしい。

なんと言つか、俺にはこいつの良し悪しの基準が分からない。別に誰も見てないんだからいいだろうに。……ああ、こいつの場合神様が見てるのか。

「ええ、彼の言葉は少し分かります。しかし困りましたね。流石に勝手なことをするわけにはいきませんかからね。」

「そうだな。」

たとえ俺はともかく、エクレシアはその原始的な武器ばかり持つ集団では傷ひとつ付けられまい。だが、もしここで俺たちが突っ込めば、このリザードマンは保身から焦って突撃を命じるかもしれない。この物量差でそれはマズイ。

「おい、後方支援に徹すれば良いだろう？ あんたの近くに居れば安全だろ？」

「ち、この野郎・・・覚えておけよ。」  
忌々しそうにリザードマンが睨みつけてくる。

思ったとおり、プライドが高いようだ。

こいつだけでなく、魔族の戦士は同様の傾向が見受けられる。

つまり、お前強いから近くに居れば安心できるだろ、と言われたらノーと言えない。だってこいつらを証明するのは己の強さなのだから。

それを否定したら、自分が無能だと言っているようなものだ。

「分かったよ、邪魔だけはするなよ。撤退する時にはちゃんと従え、良いな？」

「ああ。それでいいか？」

案の定了承したので、俺はエクレシアに確認を取る。

こいつは誇り高い戦士かもしれないが、あんまり指揮官には向いていないかもしれない。役に立たないと思うなら本気で追い返すはずだからだ。

「この場の指揮官は彼です。無茶な命令でもありませんし、現状も

戦術的に間違っているわけでもない。従わない理由はありません。」  
エクレシアも頷いた。

この間の一件もあるし我先にと突っ込みそんな性格をしてそうだが、ちゃんと軍隊としての思慮もあるようだ。まあ、そうでなければ団体行動なんて出来ないだろうし、そういう訓練もしているのだろう。

「で、使える武器はなんだ、弓か？」

「魔術だ。雷撃が使える、目くらまし位にはなるだろう？」

「ふむ・・・確かにな。」

この不利のこう着状態を脱却すべく、出来るなら攻勢に転じたいリザードマンは、攻撃と防御優先の天秤の間で揺れているようだ。

「よし、とりあえずやってみる。効果がありそうなら突撃だ。」

「え、いいのかよ。数じゃ負けてるだろ？」

「野戦ならな。地の利はこちらにある、この辺では住宅が密集しているから乱戦での参加人数でも制限できる。あとは技量で俺たちが負けるはずが無い。元々まとまりのある連中じゃない、中まで攻め込まれれば瓦解し、逃げる可能性も高い。分の悪くない賭けだ。」  
まあ、言っていることはそこまで間違っではないだろう。俺の兵法なんて学は無いが。

「私が先制しますから、貴方は雷撃で追撃してください。いいですか？」

「了解。」

俺はエクレシアの言葉に頷いた。

「善良な民から略奪し、あまつさえ命を奪うあなた方に神に代わっ

て罰を与えましょう。そんなあなた方には、この罰が相応しい。」  
エクレシアは両目を閉じて祈りを捧げた。

すると、上空から真っ赤に燃える何かが敵勢の中に落ちてきた。

蛇だ。

真っ赤に燃える蛇が、盗賊の体に巻き付いて焼き殺し、首に噛み付いて噛み殺す。

実体が無いのか、刃もすり抜けるそれは高速で飛来するもんだから、一瞬で盗賊側が大混乱に陥った。

『検索』 旧約聖書に登場する“青銅の蛇”の伝承を基にした魔術であると認識。高い追尾性のある高熱量体で攻撃する伝承どおり虐殺用の魔術です。

「ぎゃ、虐殺つて……神様つてこえー……」

「他者を害し、己を省みない者には当然の罰です。それより、早くあなたも追撃してください。波紋は大きいほど良い。」

「りよ、了解……」

戦時のエクレシアは全く容赦が無い。

こういう時のこいつには逆らわないようにしましょう。

ぶつちやけ、エクレシアの燃える蛇だけで殆ど目の前の敵は大混乱の分裂状態寸前だが、更に追い討ちを掛けなければならない。

さっき試したときは考えなしに魔力を注ぎ込んだが、今回はしっか

りと調整を試みる。

「どのくらいがいいと思う?」

『回答』 およそ200MP程度でよろしいかと。

「MPって、ゲームかよ。」

『回答』 魔力量を表す正式な単位です。ちなみにマジックパワーの略です。

「なんの捻りもねーのな。」

それが大体どれ位の量なのか魔導書が指し示してくれるので、急いで体内の魔力を集中させ、魔剣にその量を込めてみせる。

すると、さっきのように暴発せず、充填された魔力が魔剣に内蔵された術式や回路が浮かび上がり、青っぽい淡い光が漏れ出してくる。

「これでも喰らえ!!」

使い方は分かっている。誰にも教わらずとも知っていた。俺は雷撃の魔剣を振るう。

充填された魔力が雷撃へと変換され、切っ先から迸る。

それが敵勢の前線へと直撃し、爆発を起こす。たったそれだけで半壊状態だった敵勢の大半がバラバラになったようだ。

さっきの無茶な魔力を込めたときよりずっと効果的であった。

「なにしてんだよ、さつさと行けよ!!」

「あ、ああ……。野郎ども、一気に突撃、敵を殲滅するぞ!!!」  
俺たちの魔術に呆けていたリガードマンに叱咤すると、彼は鬨を上げて自ら率先して瓦解した敵に突っ込んで行った。おい、お前指揮官だろ。

しかし指揮官自らが勇猛だったのが今回は上手く作用したようだ。バリケードに隠れていた味方が次々と追従していく。

「おやおや、どうやらあたしの出番は無さそうだね。」  
振り返ると、何やらその辺の家よりでかいライオンの石像に乗ったラミアの婆さんがキセルを加えてやってきた。

「……ウイツカン!?!」

「はあ、これだから聖職者は嫌いなんだよ。」  
反射的に剣を抜いたエクレシアに、ライオンの石像の頭上から見下ろす婆さんは溜息を吐いた。

「今はお互い争うときじゃないだろう?」

少なくともあたしゃ慎ましく生きてるんだ、討伐される謂れは無いよ。」

「……何だか分からんけど、ラミアの婆さんには世話になってるんだ。エクレシア、止めてくれ。」

「……ええ、分かりました。あなたがそう言うなら。」

エクレシアはしぶしぶと言った様子で剣を収めた。

「しかし、彼女の甘言を鵜呑みにしてはいけません。あれは魔女です。」

「ああ、そういうことなのね。」

そりゃあ、こいつにとって魔女とかは忌むべき天敵なんだろうけど……。

「その話は後にしようぜ、どうやら向こうも終わったみたいだ。俺が向こうを見ると、どうやら盗賊どもは逃亡を図ったらしい。現在追撃に嬉々として向かっているリザードマン達が見える。が、燃える蛇が連中を焼き殺す方が早いだろう。やっぱり神様って怖い。」

「さあ、今日はもう帰ろうぜ。」

今日は魔力を結構使った、早く眠ってしまいたい俺であった。





## 第十一話 魔術師襲来！！

「なあ、お前さんはどう思うよ？」

「妙、かなあ？」

「妙だよなあ、俺もだ。」

二人は、皆と呼ぶにはお粗末な石造建造物の中にあるある一室に居た。

オーガロートのゴルゴガンと、ドレイクのクラウンである。

ここは最近巷を騒がせている盗賊団のアジトである。

主に下級魔族で構成されており、その数は数百にも及んでいた。

下級魔族は数だけは居るので、毎年あぶれ者が結集して盗賊に身をやつすなんて毎年のようにある話である。今回もそれが例年より少しばかり多かった程度の認識だったのだが、二人は妙なことを感じていた。

「これ、さつき見たよな。これも、これも、これも。」

「うん、見たねえ。これもこれもこれも。」

二人が居るのは、この盗賊団のボスだと嘯いていたトロールの部屋である。

しかし、その彼は馬鹿みたいな力で引き裂かれたように全身がぐちゃぐちゃになつて潰れていた。彼の側近だった十数名も同様である。二人が通つてきた道も同様になつていゝる。

外は静寂で満ちており、逃げた残党の討伐へと残りの兵隊は向かつていゝる。

二人が妙だと感じたのは、盗賊の連中が着ていた鎧などの防具、剣などの武器である。

「鏡合わせみたいに全く同じだね。

重さも同じだ。多分ミリグラム単位で同じだと思つよ。」

「そんなのありうるのか？」

クラウンは両手に二振りの剣を持って見比べる。

全く同じなのだ、その二振りだけでなく、外で戦つていた盗賊の奴らも、武器防具が全くの統一がなされていた。

剣なら剣、鎧なら鎧で、全く同じ規格で出来ていゝるのだ。

それもどれかが作りが甘いとかが全くない。完璧にまで同一の物体だった。

それだけでも妙なのに、盗賊如きが隅々まで武装を行き届けるなんて、妙を通り越して怪奇現象にも等しい。

なぜなら、武器はともかく防具を買う金が有つたら略奪なんてしないのだ。

これではまるで軍隊である。

「さあ、コボルトの職人なら出来るかもだけど、そういう奴らは気が難しいからこんな安売りみたいな真似はしないでだろうからね。」  
「さつき掴まえた部下のコボルトに聞いたが、こんなのは不可能だつて言われたぞ。」

「ふーん、やつぱりそうなのかい。」  
そこまでの情報を統合し、クラウンはある可能性へと思に至る。

「まるで、人間が手を貸したみたいだね。」  
「なんだつて？」  
冗談みたいな口調でクラウンが言ったのは、確証も無いし可能性が低いからだ。

「メイの居た国では、全く同じ物を大量に作ってコストを下げたりするんだつて。機械とかを使って製造工程での無駄を省いたりしたりしてね。」

「機械つて、力の弱い下級魔族が重い物を運ぶために使うあれだろ？」

「いや、人間の機械は発達しているらしくてね、命令された行動を延々と繰り返すゴーレムみたいな感じなんだとか。

需要と供給を満たすためにそんなことを考えるなんて、人間って面白いよね。」

「だが、それはないだろ。ここ人間は魔術で物を作る。大量のものを作って常時供給なんてできやしないからな。

外との交流なんて無いに等しいとも聞いた。仮にそれが可能だとしても、人間が魔族の領域に踏み入れられるはずがない。魔族と人間との間に商売なんて成り立たないんだ。」

「亜人の連中を通すしかないからね、関税とか考えると、折角コストを下げててもそこで値上がりするから結局は同じことだし。意味が無い。」

二人はそんな会話をしながら、盗賊の首領だったトロールを見た。

「こいつから話を聞ければ良かったんだけどねー、いやー、弱すぎてぶっ殺しちゃったから全く聞けなかったよ。これだから下級魔族は嫌なんだ。」

「命乞いをしたこいつらを嬉々としていたぶったのはお前だろう。」

まあ、助けるつもりなどもとより無いが。」

ちなみに、魔族に捕虜とかそういう概念は無い。掴まったら即処刑である。」

「……一応、このことは“代表”に伝えておくか。」

「そうしておいた方が良くもね。これはちよつと妙だから。」

それに、何者かが裏でこの連中に手を貸していたのは事実だろうか。」

ゴルゴガンの対応に、クラウンは頷いた。

「いや、僕が行こう。」

「なに？」

「いやだから、僕が直接“代表”に報告しようと思ってね。ついでに探りを入れようと思う。今回の一軒は、不思議だったね、で済ませるには少しきな臭い。」

「だが良いのか？ あれなんだろう・・・？ その。」

「旦那には感謝してるよ。僕を匿ってるなんて知れたら、首が飛ばされてもおかしくないからね。僕ら一族のプライドは高い。追放さ

れた身で、どこかでのうのうと生きるなんて許されないのさ。」

「そういうことを言っているんじゃない。お前が色々と思うことがあるから俺はお前を匿うことを決めた。いや、お前は強い。強いから匿うのを決めた。強い奴を亡くすのは惜しい。理由なんてそれで十分だ。だが、お前はそれで良いのかと訊いているのだ。」

「武人だねえ、旦那は。あんな美人の奥さんを貰えたのも納得だよ。ただどね、旦那。僕にも理想が出来たのさ。いつまでも向き合えないのは失礼つてもものさ。それに、逃げるのは僕の性にはあわない。」

「……良いだろう。」

クラウンの表情に何かを感じたのか、ゴルゴガンは重々しく頷いた。「戦いも終わった。一度余所の村の長に挨拶を終えたらすぐに我らの村に帰還し、そこですぐに報告の文章を書く。お前はそれを“不在宮”に届ける。当然、俺の名を出してな。そこを忘れるな。」

「分かっているさ。一応、何か有っても旦那には迷惑が掛からないようにはするようにするつもりさ。ああ、それと……」

「ああ、わかっている。」

「旦那……ありがとう。」

「お前が礼を言うのだと？ 明日は嵐でも来るのかね。」

ゴルゴガンは、豪快に笑ってクラウンと共にその場を後にした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

現在時刻、盗賊を撃退したその日の夜である。

「う、うええ・・・気持ち悪い。」

結局あの後帰ることも許されず、あのリザードマン達に戦勝の宴に付き合わされて飲んだことも無い酒を飲まされ（未成年という意味で）、そのまま真夜中まで時間は経過した。

あのリザードマンも結構気のいい奴であった。

どうやらリザードマンは強い奴には一定の敬意を示すらしい。

あいつは根っからの戦士のようだ。

当然ながらエクレスシアも同席していた。ありがちな悪酔いをするような奴ではなかったが、結構飲まされて酔い潰された。今は彼女を負っている。正直、これを理由にして帰ると言い出さなければきつと朝まで付き合わされたことだろう。

「うーん・・・メイさん、ふしだらな行為はゆるしませんよー・・・  
ぐー。」

「こいつの中で俺はどういう認識なんだよ、おい。」  
聞きたくも無い寝言を聞かされながら、俺たちは帰路に付く。  
背中感触であるが、正直ふしだらな感情を抱くほど無い。何がとはまで言わない。

「あら、メイじゃない。」

ふと、途中でサイリスと遭遇した。  
なにやら周囲をキョロキョロと見渡している。

「どうかしたのか？」

「うん、なんか怪しい奴を見かけたから、探しているのよ。」

「・・・魔族にも怪しいとか怪しくないとかあるのか。」

俺から見たらどいつもこいつも怪しい連中には違いない。

「むしろお前の方が怪しいぞ。こんなところでキョロキョロして・・・」

「え、ホント？」

何か琴線にでも触れたのか、サイリスは酷くショックを受けたような表情をした。

「わ、悪かった、そんなに怪しくないから、な？」

種族が妖魔だから夜に立っていると、そういう風に間違われたりするのだろう。

俺は彼女を慰めようと一歩前に出ると、ぴくん、とエクレシアが動いた。

「ん？」

「・・・悪魔の気配がします・・・。」

ゆらり、と幽鬼のように俺の背中からエクレシアは離れて、サイリスを見据えた。かなり目が据わっている。これはマズイかもしれない。



「お、おい、エクレシア、別に何もされてないからな？ な？」  
「そ、そうよ！！ サキユバスだって男を選ぶ権利は有るのよ！！」  
とりあえず俺が彼女の両肩を掴んでいきなりサイリスを斬りかからない様に位置取る。

「メイさん。」

「は、はいいい！？」

しかし、エクレシアに逆に俺の両肩を掴まれ、変な声が出てしまっただってこいつ、目が怖いんだもん。戦闘時とか訓練の時みたいに！！

「今すぐ、結婚しましょう。」

「え、あ、は？」

何を言ってるんだこいつ。マジで酔ってやがる。

「淫行を免がれんために、男はおのおの其の妻を持ち、女はおの其の夫を有つべし、と。聖書にも書いてあります。」

これ以上、悪魔の好きにはさせませんとも。貴方はいかにも優柔不断そうな顔をしていますし、そこに付け込まれることもあるかもしれません。だから私が貴方を守りましょう！！！！」

「悪かったな優柔不断そうな顔をしてて！！」

こいつ、バケツでも持ってきて水でもぶっかけてやろうか。

「つーか、俺はまだ結婚できる年じゃねーよ！！」

「私は今年で十九です、私は平気です。」

「お前年上だったのかよ、っていうか、愛を説いてるくせに愛の無

い結婚を勧めてくるんじゃないよ!!!」

「愛していますとも、貴方がどんなダメな人間でも私は愛しましょう。でないとな誰が貴方みたいな捻くれた性格最悪の人を愛すと言うのですか!!!」

「酔ってるからって言うって良いことと悪いことあんだぞこの野郎!!!」

涙ぐみながら本気でそんなことを言いやがるこの女。

酔っ払いに正論なんて通用しないは良く分かっているのに、ちくしよー。

「さあ、誓いのキスを・・・」

「どこまで過程をすっ飛ばしてんだこいつ・・・」

じりじりと掴んだ肩を引き寄せて迫ってくるエクレシア。こいつ、何でこんなに力強いんだよ・・・そして女に負ける俺って・・・。

「ちょ、サイリス、助け・・・って、いねえし!!!」

振り返れば無情にも助けてやろうとしたサイリスは影も形も見受けられなかった。

こ、ことうなったら・・・。

「(魔導書!!! 何でも良いから助ける!!!)」

『拒否』 このまま彼女の愛を受け入れ、本書を継承する子

を産んでもらうことを推奨。本書の存在目的は知識の継承と伝達であるのです。彼女との交配で次世代の子の才能は有望と推測されま  
す。推奨。推奨。推奨。

「燃やすぞ、このクソブツクうう!!!」  
全く助ける気も無い魔導書に俺はそんな叫びを上げた。

『回答』 その場合、本書は設定された防衛機能により敵性勢力を完全排除します。よろしいでしょうか？

ちなみにこの魔導書は使わせないだけで、こいつ自体が俺よりずっとヤバイ魔術を扱えるらしい。つまり、この魔導書と喧嘩したら絶対負ける。  
女に力で負け、魔導書には屈し、これで泣きたくなければ男ではない。

もう、最後の手段である。

「あ————!! あんなところでサイリスの奴が男を誘ってる——!!」  
「なんですって————!!」  
こいつが単純で助かった。

あっさりと俺が指差した明後日の方向に突っ走るエクレスシア。  
これでは助けた意味はないっばいが、俺を見捨てたあいつに同情の余地はない。

もう俺はあいつを放っておいて帰る事にした。  
今日は疲れたし、眠くて死にそうである。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おい、エクレシアー。」

「……………」

翌日、彼女に用意された部屋のドアを叩くが、返事は返ってこない。どうやら酔っていた時のことを覚えているらしく、今朝からこんな調子である。

「今日は一日中祈りを捧げます。自主的に訓練をしておいてください。」

「あ、ああ……………」

ギインギは戦地だし、今日まで食事を作ってくれていたエクレシアがこれでは、家に居ても食事にはありつけないだろう。

一応クラウンの奴が生活費を置いておいてくれるので、そこから食事代を拝借して何か食いにいくことにした。

「おい、人間!!!」

「ん、ああ、お前か。」

道中呼び止められたので振り返ると、軽装のリザードマンが近づいてきた。

昨日のあいつだ。どうやら警備で巡回しているらしい。向こうにペアの魔族が見える。

「なんか、怪しい奴が出歩いているって話が何人からも寄せられているから気を付ける。クラウン様や旦那達が帰ってくるまでは油断できないからな。」

「ああ、分かった。巡回ご苦労さん。何か有ったら伝えるわ。」  
言うことだけ言って彼は仕事に戻っていった。

どうやら本当に不審者が居るらしい。

昨日サイリスが見かけたと言っていた奴だろうか。

「ん？」

適当に人間でも食える食べ物を露天で買い、適当な場所に座って食っている、目の端になにやら怪しい人影が見えた。

「なんだあれ……。」

本当に見るからに怪しい人影だった。

ぼろきれの様なローブを頭からすっぽりと被り、全身を隠している。見るからに私は怪しいですよと主張しているような奴だった。

そして、なにやら建物の影から露天や店屋がある方をちらちらと見ては、手元にある紙に何かを書きとめている様子だった。

そんでもって、巡回の警備兵がやってくると、急いで身を隠した・

・これは、怪しすぎる。本気で隠れる気があるのか小一時間問い詰めた。

俺はさっさと飯を口に押し込み飲み込むと、とりあえずそいつに近づく事にした。

と、思ったら、もう用は済んだのかさっさと身を翻してその場を去ろうとする。

ここは通報するべきところだろうが、思い切って俺はその不審者を追跡することにした。本当に思い切ったことである。

不審者は商店街から住宅地に向かったようだ。こっそり後から付いていくと……。

「それで尾行したつもりならちゃんちゃら可笑しいわね。」  
後ろから首筋に見せ付けるように折り畳みナイフが押し当てられていた。

「……あれで隠れているつもりだったのか？」  
「だって、隠れるつもりなんてなかったもの。」  
ああそうかい。

そこで、ふと気づく。



だが、俺はそのまま振り返って、顕現した魔剣を逆にその目の前に突きつけてやった。

しかしそいつの驚きは一瞬で口笛を吹いておどけて見せた。

「なるほど、同業ね。同じタイプという意味で同業かどうかは知らないけど。」

「とりあえず突き出すが良いか？ 負い目が無いなら良いだろ？」

「あなた、人間のくせに魔族に与するのね。裏切り者と罵ればいいかしら、売国奴・いえ、売種奴と言うべきかしら。」

「少なくともお前さんの仲間になった覚えは無い。」

「私もあなたみたいな頭の悪そうな人間を仲間だとは思いたくは無いわね。」

ああ言えばこう言う、こいつも自分は頭が良いと思っている奴に違いない。

「とりあえず、名前は？」

「そうね、じゃあくロムとでも名乗っておきましょうか。鉄鉱石のあれよ。」

「本名言いやがれアホ。」

「アホはあなたじゃない？ 魔術師に本名聞いて名乗る馬鹿は居ないわ。古代中国において武将とか名前以外に字を持ってた理由と同じよ。本名は知られると呪いを用意に掛けられるの。それを避けるため昔から魔術師は本名以外に名前を持っているものなのよ。」

まさか知らないとは言わないわよね、まさかモグリじゃないんだから？」

「知ってるさ。」

当然、初耳である。



「ああ、モグリなのね。最近はあなたみたなのが増えて私みたいな正当な魔術師が困ってるのよ。だってあなた達の無知の所為で私まで同列に思われちゃうものね。無知が許されるのはただの人間だけよ。」

「じゃあ、あんたも覚えておくんだな。」

「ここは魔族の土地だ、人間が入っちゃいけないんだよ。」

「あなたも馬鹿な人間ね。目の前の人間の實力が分からないの？ 大体の魔術師は私より弱いからこう言っておけば大抵は大丈夫なんだけど、あなたはどうかしら？」

「試してみるか？」

「じゃあ先人からの教訓を一つ、あなたに与えましょう。」  
そう言つて、その女はあろうことか抜き身の剣を掴んだのだ。

日本刀のように鋭くは無いとは言え、結構な切れ味を誇るこの魔剣をである。

「あなた、動ける？」

「は？・・・あれ？」

動けなかった。首から下が小指一本動けなかった。

「ホント、馬鹿ねえ。さつさと斬り殺せばいいものを。私の無駄話になんて乗るから私の術に掛かるよ。ここまで馬鹿だと可愛らしさすら感じるわね。」

「この、やる・・・」

徐々に首や舌先まで動かなくなる。すぐに視線すらも固定されてしまった。

「じゃあねー。お馬鹿クン。私は調査で忙しいの。あなたのおままごとに付き合うほど暇じゃないのよ。悔しかったら掴まえてみなさい。多分数日は調査でここに居るとは思うから。あなた程度の人間に私を掴まえることができるのなら、ね。」

そう言つてクロムと名乗つた女はひらひらと手を振つて俺の前から去つていった。

『補助』 拘束術式解説します。

「初めからそうしろよ。」

そして、今頃になつて魔導書が俺に掛けられた魔術を打ち消した。

『回答』 相手の施術が巧妙で感知できませんでした。どんな魔術か、不明です。相手の実力が未知数である以上、本書の存在は秘匿すべきであると判断しました。

「くそ、本当に役に立たないな、お前。」

『回答』 特に敵意は無かったので、戦闘行為そのものが無意味と判断しました。しかし、これだけは言えるでしょう。

「なんだよ。」

『回答』 マスターより彼女の方が遥かに優れた魔術師だと言つことです。本書を使用する方法は二通り存在します。本書が使用者として選ぶか、本書を無理やり制御下に置き、支配するかです。

彼女は後者が出来る魔術師だと判断できます。

「……………それって、すごいことか？」

『回答』 言葉を尽くしてまで回答する必要性を感じられませんか。

そう、言うまでもないことである。

「なんだってんだ、畜生。」  
何なんだよあの女は。ふざけやがって。

絶対にとっ掴まえてやる。

しかし、その日は一日中探したが、あの女は見つけられなかった。



## 第十二話 黒魔術と黒い硝煙

「なるほど、弁護の仕様が無いほど迂闊な真似をしましたね。」

「うぐう……。」

翌日の朝、朝食の席で昨日の事をエクレシアに話したら手厳しい一言を頂いた。

ちなみに一昨日の夜のことは無かったことになっていようである。そのことを尋ねようとしたすごい顔をして睨まれた。こええよ。

「今回は運が良かったようなものですが、そのような幸運が何度も続くとは思わないでください。神は自分の幸運に甘えるものには微笑みませんよ、幸運とは神が我々人間に与えるものなのですから。」

「説法はいいよ、俺が強くなれば良いだけの話だ。」

詰め所の連中にはちゃんと伝えたが、その女は怪しげな術を使った。どこまで効果があるかは分からんね。」

「では私の出番ですね。人を惑わす輩を野放しには出来ませんからね。」

「給料も出ないのによくやるよな、お前も。」

「私の報酬は人々の笑顔と幸福ですから。」

「本気でそう思っているなら、俺はお前が怖いよ。」

「それは私を通じて神を畏れているからですよ。」

いい兆候です。神を畏れ敬い、祈りを捧げれば必ずそれは届くでしょう。」

その内こいつ、後光でも出るんじゃないかなるか。

「しかし、呪術対策を全く忘れていたのは私も迂闊の謗りを免れませぬね。」

魔術師の攻撃手段は大抵が呪術による遠隔攻撃ですから。」

「呪術って、炎とか雷とか、一般的な攻撃魔法みたいなイメージでいいのか？」

「ええ、その通りですが、そんな正直に攻撃してくれる輩ばかりじゃないのです。」

目に見えない搦め手で攻めてくる間接的な攻撃も多いですから。場合によっては、姿すら現さないで一方的に攻撃してくることもあります。」

なるほど、俺はその搦め手にまんまと引っかかったわけである。

「とりあえず、今日から一緒に祈りましょう。」

「はあ？　なんでそうなる。」

「神に邪悪な魔術から守っていて頂くのです。神から加護を受けて呪術から身を守るのは基本ですよ。どこまで守れるかは己の信仰心に依存しますが。」

「神様つつたつてもなあ……。」

イマイチ実感がわかないものである。

「ではギリシアの神に祈りますか？　ギリシア神話を礎にした魔術を使うあなたには最適ですが、アトバイスは全く出来ませんよ？」

「……いや、じゃあ、そっちの神様でいいや。」

ギリシア神話の神様ってどうも信者を守ってくれそうなイメージが湧かない。

魔術にイメージは大事だと言うから、多分ギリシアの神様に祈っても加護を得るとか無理なんだろうな。

「でもそれって神様掛け持ちするってことだよな、いいのかそれって？」

「合理主義の魔術師が本気で神様を信仰する連中ばかりだと思いませんか？

二つや三つの魔術の体系を掛け持ちするのは基本ですよ。本格的な力が必要としないなら術式や様式などを真似るだけで大抵の魔術は発動できますから。」

「魔術って結構大雑把なんだな・・・。」

「その魔術の定義からして明確化がなされていませんからね。」

人それぞれなんですよ、自分にとって魔術とはどういうものなのかはね。」

そういうものらしい。

エクレシアも妙なところで大雑把なのはそう言う事なのかもしれない。

「とりあえず、これを貴方に差し上げましょう。」

そう言って、エクレシアは自分の首に掛けていた十字架のペンダントを俺に渡した。所謂、ロザリオである。

「神の加護が付与されているロザリオです。魔術の触媒としても扱えます。」

所詮は道具なので一定の効力しかありませんが、無意識以下の干渉には抵抗できるはずですよ。意識できるレベルなら貴方も違和感を覚

えるでしょうし、出来なくても魔導書が感知してくれるでしょう。」  
「いいのか？ 大事なものじゃないのか？」

少なくとも俺がこいつを外しているエクレシアの姿を見たことが無い。

「母から頂いたものなので大事といえば大事では有りますが、物に執着したことはありませんので。単純な触媒としての価値ならマスター・ジュリアスから借り受けたこの剣の方が何十倍もあります。だから私の代わりに貴方が大事にしてくれば良いです。」

「・・・責任重大だな。」

「ええ、失くしたりしたら、泣いちゃうかもしれません。」

「責任重大だな・・・。」

きつと責められるよりつらいだろう・・・。そしてこいつは絶対俺を責めたりはしないはずだ。・・・逆に辛いわ！！

「ところで、ロザリオってことはあんたの所はカトリックなのか？ 素人知識だが、確かロザリオはカトリックの宗徒が身に付けるものだったはず。中学か高校の頃に歴史を習った時にキリシタン繋がりでそんな知識を教えられた気がする。」

「いえ、うちは宗派としては独立しています。神や主の奇跡を魔術と行使する集団なんて異端ですから。どうせなら宗派に拘らず統合してしまえと言う感じで。神の言葉のために争うのは本末転倒で馬鹿馬鹿しいとは『カーディナル』のお言葉です。まあ、それは建前で、魔術として使える奇跡の幅は多いほうが良いですからね。」

しかし、主教である『カーディナル』がその名の通りバチカンの枢機卿として在籍していますから、カトリック系が強い感否めませ



んが。」

「ふーん。」

「昔はそれが理由で他と戦争したりもしたそう。結局は魔術師の総本山であるこの“箱庭”に本拠地を設置することになったようです。」

まあ、私たちの騎士団はテンブル騎士団がルーツとなるので、そもそもからして異端だと追われていた時期もあるのですよ。そんな辛い時期を乗り越えられたのも、全て『カーディナル』のお陰と言うべきでしょうね。」

「さつきから名前が出てるけど、その『カーディナル』ってすごい人なのか？」

熱く語ってくれる彼女には申し訳ないが、こいつら騎士団の歴史なんて興味なかった。

しかし、ふと気になったので訊いてみた。何かやたら押しているし。

「あの御方は魔族で言えば、『マスターロード』に当たる人物でしょうか。」

『盟主』により同じ“魔導師”の称号を頂いていますから。」

「ふーん、それもすごい称号だったりするの？」

「この総本山に十一人しか居ません。」

ひとつの文明の魔術を究めた者にしか得られない称号です。まあ、当然ですよ。『カーディナル』は我ら騎士団の設立から関わっていますから。」

そんな人の元で働ける自分はとても名誉だと言わんばかりの表情でエクレシアは満足げに頷いた。

「は？ おい待て、設立からって・・・俺の聴き間違いか？」

「いえ、間違っていますよ。第一回の十字軍の頃にはすでに生き

ていたと言つ話を聞いたことがあります。大体九百年は昔ですかね。」

「きゅ、九百年って・・・おいおい、冗談だろ。」  
「そんなの化け物じゃねえか。」

「しかしこの場所を統べる『盟主』は少なくともその二倍は生きておられるはずですよ。確か、異世界で十一代目の魔王との戦いに参加したと聞いたこともありますから。」

「俺って、まさか予想以上にとんでもないところに居るのか・・・？」

「ちなみに、貴方の持っている魔導書の著者はその『盟主』の師匠だと言われています。ちなみに存命していますよ、悪魔で噂ですが、軽く三千歳は超えているんじゃないでしょうか？」

復活した四代目の魔王と戦ったと聞いていますし。」

「頭痛くなってきた・・・。」

「それだけ次元の違う方々だと言つことでしょう。私にも想像がつかみません。」

俺だって想像したくも無い。

人間の魂で本を作るような頭のイカレた野郎の事なんて。

「さて、余計な話をしている暇はありませんでしたね。」

「すぐにでもその不審人物を探し出しますよ。見極めなければなりませんからね。」

「ああ、そうだな。」

俺は口ザリオを首に掛けて十字架を服の中に入れてみると、エクレスシアに追従して立ち上がった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「これ全部頂戴。幾らかしら？」

「はあ？ なににいつてんだい。あんたに全部売れるわけないじゃないか。」

「お金は払うって言うてるでしょ？」

「欲張りだねえ、帰えんな。」

「・・・・・・これだから下等生物は・・・・。」  
即行で見つかった。

昨日見かけた商店街に行ったら、香辛料を売っている店の前で忌々しそうにしているのを見つけた。  
どうやら欲しいものが買えなかったようである。

「おい！！！」

俺が近づいて呼び止めようとすると、彼女はこちらを一瞥しただけですぐその角を曲がった。

「って、いねえし。」

更に追おうとしたら綺麗さっぱり、誰一人としてその道には居なかった。

「これは手ごわい相手のようですね……。」  
後からやってきたエクレシアはそんな風に呟いた。

「堂々と俺たちの前に出やがって……。」

「軽い認識阻害の魔術を使っていたようですからね。分かっているならば彼女が居ることに違和感を覚えることがなくなるでしょう。」

現代まで魔術師の存在がおおっぴらになっ<sup>て</sup>いない理由の一つですね。」

「はん、便利だな。」

「昨日あなたがどれだけ探しても見つからないわけです。偽装の手段を変えたのですからその術中に嵌っていたと言っ<sup>て</sup>わけですね。」

「だけど、その前には普通に見かけたぜ。」

「誰にでも効く訳では有りませんからね。魔力抵抗能力の高い種族<sup>レジスト</sup>

には通用しないでしょうし、恐らく別の種類の魔術に切り替えて偽装したので貴方が見つけれなかったのでしょう。色々と手段はありますから。」

「なるほど、厄介だ……。」

「しかも今彼女の使っていた術式はうちの様式に似ています。先ほど彼女が求めていた香辛料からして、同業者では無いでしょうが、これは油断をすれば私も出し抜かれるかもしれません。」

「同業者？ 同じ魔術師だろう？」

「魔術師の業界では、自分と同じ体系や系統の魔術を使う魔術師を同業者と呼ぶのですよ。所謂、業界用語ですね。」

「そっ<sup>と</sup>いや、あいつもそんなことを言っ<sup>て</sup>たな。」

同じタイプがどうか言っ<sup>て</sup>いたのを俺は思い出した。

「では探しましょう。魔術を使うと必ず痕跡が残ります。」

まだ遠くへは行っていませんよ。早く周辺を搜索しましょう。」

「分かった。あの女絶対捕まえてやる……。」

「多分貴方には無理だと思いますけど。」

「なんでだよ。」  
そう言っただけが振り返ると、件のその女が口元を押さえて笑っていた。

「私の声マネ上手かった？」

「上手かったよこの野郎！！」

ぎゃぶ！！

とっ捕まえてやろうと飛び掛ろうとしたら、すり抜けて壁に顔面からぶつかってしまった。

「落ち着いてください、どこからか投射された映像でしょう。幻覚の類です。」

「早く言えよ……。」

だらだらとこぼれる鼻血を押さえながら俺は壁を支えに立ち上がった。

「丁度退屈な仕事で暇してたのよ、やっぱり何事も刺激がないと短い人生何事も詰まらないわよね。参加者も一人追加みただけだけど、私だけが追い回されるって言うのもフェアじゃないわね。貴方達が私を見つけるのをいつまでも梃子摺るなら、誰かがこうなります。」

バン、と幻影の女は弾け飛んだ。

まるで全身にダイナマイトでも仕込んでいたかのように。

「あっははははははは、おっかしい。じゃ、そう言う事で。」  
「待ちなさい！！」

しかし、エクレシアの呼びかけなんか聞くはずもなく、女の姿は完全に消えた。

「ふざけやがって……。」

「ええ、命を何だと思っているのでしょうか。」

「おい、魔導書、奴を探せないか？」

俺は魔導書に呼びかける。

『回答』 本書は対魔術師戦闘などは想定されておらず、彼女の偽装を暴く探査魔術は存在しません。

「ホント、肝心なところで使えないな、お前。」

「残念ながら私も探査魔術は得意ではないのですよ。まあ、これは昔から探査能力の低さは私たち騎士団の弱点ではありますが。」  
「こればかりは神様に祈っている暇なんて無い。」

「ちツ、しゃあねえ、ラミアの婆さんの知恵を借りるか。」

「では私は警備兵の皆さんに協力を呼びかけてきます。」

「分かった。」

そして、俺たちはお互いのやることを確認してすぐに走り出した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ちょ、ちよつとおく、この間見捨てたことは謝るからさあ。」

「何でこんなときに限って婆さんは森の中なんだよ!!」

「師匠じゃないと見つけられない薬草とかあるのよ。だからちよつと手を放しててば。」

「緊急事態なんだよ!!」

俺は婆さんの屋敷の前に箒で掃除をしていたサイリスを掴まえて、無理やり協力を要請しているところである。

しかし肝心のラミアの婆さんは行方は知らず。

森の中に居るらしいが、そこには多分俺には太刀打ちできない数の魔物が蔓延っており、きつと危険な割りに分の悪い賭けになるだろう。

「いったい何なのよ!」

「あー、なんというか、テロを起こそうとしてる奴がいるんだよ。

お前もこの間、怪しい奴を見かけたって言ってただろ? そいつなんだよ!!」

「なんですつてえ!? 冗談でしょ?」

サイリスは背中の蝙蝠っぱい羽をピンと伸ばしてそう言った。

驚いているらしい。

「冗談でこんなことを言うか、早くそいつを捕まえないと、無差別で爆破をするかもしれないんだよ。今は人手が足りなんだ!!」

「ホント、冗談じゃないわ・・・ちよつと、いいかしら。」

そう言つてサイリスは俺の額に手を当てる。

「うッ!?!」

「害意は無いから抵抗しないで。」

まるで脳みそに直接触れられたような感触に、俺は一瞬吐き気を覚えた。

多分、こいつは俺の記憶を覗いているのだ。

「なるほど、こいつね……。どうやら嘘じゃないみたいだし。

ホント、なんでこう面倒なことが次々と……。」

「それはこっちの台詞だよ。」

サイリスは納得してくれたようで、すぐ終わるからちよっと待って、と言って屋敷の中に入っていった。

「お待たせ。」

そして三十秒もせずサイリスは表に出てきた。

手にひし形の物体が紐に繋がっている代物を持っていた。

これは俺でも知っている。ダウジングに使うペンデュラムという奴だ。

「それって地下資源を見つげるための奴じゃなかったか？」

「これがただのペンデュラムな訳無いでしょ。地獄に住まう悪魔ども寄り代にしてその力を顕現させるために使うの。」

「マジかよ……。」

なるほど、魔女の弟子は魔女であるのか。

魔女は悪魔の力を使い邪悪な道へと人を墮落させるとかなんとかとエクレシアがあの後熱心に俺に言ってきたが、本当に悪魔の力を借りるようだ。

まあ、神様が居るなら悪魔も居るんだろうな。



そんなどうでもいい諦念を覚えながら、俺はサイリスが指を鳴らす音を聞いた。

すると、彼女の足元に円形の魔方陣が出現した。

円の内周に複雑すぎて読めない文字が刻まれており、更にその内側に円が一周。複数の五芒星や六芒星などが規則的に並んでいる。

「ちよつと、それ邪魔よ。そっちに行つてて。」

サイリスには俺の首元にあるロザリアが見えているのか、それを指差しながら彼女は睨んできた。

「ああ……。」

言われたとおり、俺は離れることにした。

「えーと、悪魔を呼ぶんだよな……？」

未だ実感みたいなものが湧かなかったので一応訊いてみた。

「ええ、名を挙げて朽ちた後、初代魔王陛下の身元に行くことを許された強大な悪魔を降霊するのよ。実体じゃないわ、たとえ本体を呼べたとしても、この世界では力を制限されてその辺の魔族と変わらない。」

まあ、そんな馬鹿げたことが出来る奴なんて今の世界に居ると思えないけれど。」

「やっぱりそう簡単に呼べたりはしないんだな。」

「そう簡単に呼べるなら日常的に都市が滅んでるわよ。」

「どうやら軽く都市を滅ぼせるような悪魔を呼ぶらしい。こっちも洒落にならない。」

「女探しなら本当はシュトリ当たりが良いんだけど、大貴公子なんてまだ契約段階で難航中だから、フォラスで何とかするしかないわね。」

サイリスは腰に帯びていた先端が水晶の短めの杖を手にして、もう一方の手にペンデュラムを差し出すように持った。

「《地獄の29の軍団を率いる偉大なる総裁よ。

その名はフォラス。我が名はサイリス。契約に従い、我が命を全うせよ。》」

その瞬間、一瞬だけ人間のような透き通った何かが現れ、彼女の持つペンデュラムに吸い込まれるように消えていった。

すると、命を持ったかのようにペンデュラムが勝手に浮かび上がったのだ。

今思えば、初めて魔術らしい魔術を見たかもしれないが、状況はそんな感慨に耽っている暇など無いのである。

「びんびん反応してるわ……あー、対価どうしよう。勝手に悪魔召還するなんて絶対に怒られるよこれ。」

「そのときは俺も謝ってやるよ、いいから今はあの女を捜すぞ!!」「もうこうなったら私も自棄よーッ!!」

サイリスは紐の端を持っているだけなのに、ペンデュラムの先にあるひし形の物体は独りである方向を向かおうとしている。

その先にあの女がいるらしい。

俺たちは、急いで駆け出した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「居たぞッ!!」

俺とサイリスは商店街を駆けていると、例の女の後姿を発見した。

「・・・いや、違う、あれはダミーよ!!」

しかしサイリスの持つペンデュラムは微妙に別の方向を指している。

そこで、俺はあの女が吹っ飛ぶ姿が脳裏に浮かび上がった。

「まさかッ!!」

俺はすぐにそいつの肩を掴んで、そのまま真上に投げ付けた。

「『ケラウノス』ッ!!」

俺はすぐに魔剣を顕現させ、雷撃でそれを撃ち抜いた。

すると、雷撃だけじゃ決して起こりえない規模の爆発が空中で起こ

った。

人間なら軽く十人は粉々にできるだろう。

「あの、野郎・・・!!」

「これは本格的に洒落にならないかもねえ。」

言いよの無い怒りがこみ上げてくる中、爆発に驚いて逃げ出す住人に対して近づいてくるサイリスが険しい表情で呟いた。

「街中にこんな仕掛けやがって、頭イカレてんじゃねえのか!!」

「高位の魔術師って性格破綻しているの多いって話を聞くけれど、まさかそういう感じ？ 人間って怖いわねえ。なに考えているのか分からないし。」

「ふざけやがって・・・。」

「まあ、そうでもない人間なんか魔術を極めるなんて無理なのかもね・・・ん?」

そこで、サイリスは何か気づいたかのように顔を上げた。

「メイ、あそこ!!」

「ん? あッ!!」

サイリスの指差した方には、にやにやとこちらを窺って笑っているあの女が居た!!

「待てこらああああ!!」

「あ、馬鹿!!」

速攻で一撃入れてやろうと、斬りかかると、嫌にあっさりと斬り捨てられた。

しかし、直後に目の前が真っ白になる。

そして、爆音、爆風。

「ッ、ハア・・・ハア・・・」

「馬鹿じゃないの！！ 何考え無しに突っ込んでるわけ！！」

咄嗟にサイリスが何らかの手段で守ってくれたようで、爆心地の目の前に居たのに俺とサイリスの周囲だけ爆風で黒く染まっていない。

俺は今、完璧に死を覚悟した。

本当に一瞬の出来事だったのに、走馬灯のように色々なことが巡ったのだ。

全身ががくがくと震えているし、馬鹿みたいに汗も流れている。

「お、おれ・・・いきてる・・・？」

「生きてる、生きてるからしっかりなさい！！」

「あ・・・ああ・・・。」

放心状態の俺をサイリスは何度も揺すり、現実へと呼び戻そうとしてくれる。

「さっさと捕まえてぶっ殺すわよ！！」

私たち魔族の縄張りに入り込んだこと後悔させてやるわ。」

「あ、ああ・・・。」

ようやく全身の震えも納まり、何とか立ち上がることが出来た。

サイリスも今で相当頭に来たようだ。

「魔族さんこちら、手の鳴る方へ〜」  
すると、あの女の声が聞こえてきた。

「あっち、多分本物よ!!!」  
向こうにあの女の姿が見えた、ペンデュラムも反応している。

「ほらほら、ボーっとしている暇はあるの？  
さーてさてさて、次はどこを爆発させようかしら。」  
「ただおちよくっているだけよ、挑発に乗らないで。  
冷静さを欠く魔術師に明日は無いわ。」

「ああ、分かってる。」  
流石に俺も冷静になれた。  
サイリスの言葉もちゃんと聞こえている。

「そう、じゃあほら。」  
と、そんなそっけない言葉で。

ずっと向こうの方で、爆音が響き、爆炎が立ち上ったのが見えた。

「ほら、次よ次。」  
笑いながら、彼女は次の爆発を起こした。

俺の隣には正真正銘の悪魔が居るが、俺はあの女こそが悪魔だと思えた。

少なくとも、同じ人間だとは思えなかった。

「お前、何をしてるか分かってるのか!!」

「何って、なにかしら?」

「何でそんな簡単にそんなことが出来るんだよ!!」

「なになに、正義でも説くつもり? じゃあ私は正義の味方ね。あははは!!」

「ふざけてるのはてめえの方だろ!!」

「人間のくせに魔族の味方するあんたと、人間の敵をぶち殺している私、どちらが正しいのかしらね。あとでネットでアンケートでもしてみようかしら?」

「ここは魔族の領域だッ、てめえが勝手なこととしていい理由はねえよ。」

「だから?」

それが何だと言わんばかりに、その女は首を傾げて見せた。

「私の法律は私が決めるのよ。私がしたいことをしたいようにして何が悪いの。」

だって私はそのための力が許されているんだから。文句あるなら、力づくで止めてみなさいよ。万物を支配できる私に逆らえるならね。言っておくけど、ここに来る途中で掴まるようなへボ魔術師と私を一緒にしないことね。きゃははは。」

まるで自分は世界の頂点にでも居るような言い方だった。

「なにあの女、すつごくムカつく。」

そのさまは同姓のサイリスからもかなり頭に来るようだ。

「愚かですね。自分の力に溺れ、自分を見失っている。」

「その声は・・・エクレシアか!!」

どう攻めるか考えていると、彼女の声が聞こえた。

「安心してください、爆発物はすべてこちらで処理しました。被害者は数名ほどでしたが、誰もが軽症に留まっています。」

「よくも俺たちの縄張りで好き勝手にしてくれやがったな。」  
すると、その時、エクレシアとあのリザードマンが俺たちの反対側、丁度挟み撃ちするように現れた。

そして、周囲には武装した警備兵達が包囲するように現れた。屋根の上には弓を構えた警備兵も居る。

「あらら、囲まれちゃった。」

だが、あの女はまるで臆していない様子だった。

「四面楚歌だな、どうする?」

「別に逃げるのは簡単だけど、うーん、暇だし、遊んであげても良いわよ?」

「てめえはそんなこと言える立場じゃねえんだよ、撃て!!」  
リザードマンの指令に弓を構えていた魔族が一斉に矢を放った。

「きゃー、怖い怖い。」

だが、まるで矢が自ら意思を持って逸れたかのように、十数本はあった全方位からの射撃は外れたのだ。



「的にはこうやって当てるのよ、覚えておきなさい。」  
たたたたたたん、とあの女はそんな音共にワンターンしただけで  
弓兵をすべて撃破してしまった。

「な、拳銃!？」

そう、その女は両手に回転式の、所謂リボルバー拳銃を持っていた  
のだ。

「やっぱりリボルバーは趣があって良いわよねー、拳銃はこれ以外  
認めないわ。」

硝煙をフツと吹き飛ばすと、その女は楽しそうに笑った。

「さ、踊りましょう?」

持っていた二丁のリボルバーを捨て、ロープの中から新しいリボル  
バーを二丁取り出して、最初にクロムと名乗った女は言ったのだ。



## 第十三話 ブラックトリガー

「人間の英知の前には魔族なんて時代遅れの幻想だっことを教えてあげるわ。」

くるくる、とガンマンを気取ってリボルバーを指で回しているクロムと名乗った女は言った。

「なにあれ？ 飛び道具？」

サイリスが困惑していることから魔族には拳銃なんて無いのだろう。

「人間の弓みたいなものだ、連射も出来るから射線に絶対入るなよ！！」

「わ、わかった！！」

とりあえず周囲にも聞こえるようにそう言ったが、一瞬で十二の的に命中せしめた腕にどこまで有効かは不明だ。

『分析』 相手の射撃能力から中距離戦は不利と判断します。  
『アキレスの盾』を展開し、接近戦を展開することを推奨。

「（同感だ。ビビッて下がってもしかたねえ。正面突破だ。）」  
今言われた魔術も一応何度か練習しているから使えるだろう。

エクレシアも同様の結論に達したのか、剣を抜いたまま突撃を刊行したようだ。

しかしクロムは踊るように両者に片方のリボルバーで照準を付けて発砲した。

たたたたたん、と六連射の銃撃を、俺は正面に展開された円形の障壁が阻む。

ギリギリ発動が間に合ったようだ。

拳銃弾程度では到底打ち破れない正面全域をカバーする強固なシールドバリアだ。

そのまま突撃を続けて近づくも、弾切れの拳銃を打ち捨てて装弾済みの拳銃を取り出す豪快な戦法であるニューヨークリロードで補充し、再び銃撃が飛来する。

「あれ？」

すると、拳銃程度では打ち破れるはずの無い障壁に輝が入っている。

『分析』 何らかの魔術的付与をされた銃弾のようです。最低でも銃身に加速術式や弾道補正の術式は付与されているものかと。

「そんなのありかよ!？」

「魔術師がただの拳銃を使ってどうするのよ。」

こちらが接近するまでも無く近づいてきたクロムが俺の目の前に二丁の拳銃を突きつけてそう言った。自分の武器の性能に気づき驚い

てもらって嬉しそうな表情である。

流石に二丁拳銃からの一二連射は伝説の盾を模した障壁でも耐え切れず、俺は防御が決壊する前に真横に跳んで回避した。

「そこ、だッ!？」

「おっそーい」

弾切れを狙って斬りかかるも、いつの間にか彼女が新しい拳銃を手にして発砲し、俺は振り下ろすはずだった魔剣の刀身に銃弾を当てて阻止したのだ。

アホみたいな芸当である。

そして仰け反るしか出来ない俺のわき腹に回し蹴りを喰らわすと、蹴り飛ばされる俺を尻目にそのまま接近してくるエクレスシアに銃撃を浴びせ牽制する。

「ああ、なるほど、幻術ね。把握把握。」

手ごたえのなさを感じたのか、彼女は舐めるように口の中で呪文を紡いだ。

「女は度胸と才覚と感ってね。」

もう既に目の前に迫っていたエクレスシアなど目もくれず、彼女の真横に向けて銃口を向けてそのまま発砲した。

すると、そこに見えていたはずのエクレスシアが消えうせ、炎で燃え上がる剣を振りかぶった彼女が射線上から現れた。

「相変わらずクソ硬い連中ね。」  
バックステップで攻撃を躲して至近距離での銃撃を浴びせても、エクレシアはビクともしない。

「神の御加護です!!」  
そう言いながらエクレシアは剣で薙ぎ払ったが、クロムは背後に跳躍して距離を取った。

「くうッ!!」  
そのまま追撃に走るが、いつの間にか足元に転がっていた手榴弾が爆発してエクレシアは思わず足を止めてしまった。

「逃がすか!!」  
リザードマンが手にしていたシミターを片手に、民家の壁を垂直に走って真上からクロムに斬りかかったのだ。

「わお、人間じゃ出来ない動きね。」  
距離を調整しながら動くクロムは彼に標準を合わせようと飛び退いた。

「させるか、クソ女!!」  
建物の影に隠れて呪文を紡いでいたサイリスが叫んだ。  
すると、クロムの足元に六芒星の魔方陣が浮かび上がったのである。

そこから、彼女の両足を掴む無数の手が出現したのだ。

「さっきの召還の対価はあんたに決定、地獄の悪魔に魂ごと喰われて死ね!!!」

「ふふふ。お粗末な術式。」

リザードマンの斬撃を片手に出現させた魔方陣の障壁で防ぐと、もう一方の手にある拳銃を捨てて自身のローブを引っ張った。

すると、彼女の足元に無数の小さなロザリオとやたら意匠の凝らされたガラス瓶が幾つも落ちたのだ。

ロザリオが悪魔の手に触れると爛れ焼け落ち、ガラス瓶が割れて中から出てきた液体に触れた悪魔の手は青っぱい粒子となって消えうせた。

「知り合いに腕のいい悪魔召喚師が居るのよ。いつ呪い殺されるかわからないから持ち歩いていた装備が役に立ったわ。」

そのままスナツプの利いた手でサイリスにロザリオを投擲した。

「あちツ、あっちち!!! うわーん、お肌が!!!」

別に剛速球であったわけでもないのに、それが腕に当たったサイリスはそこを押さえてのた打ち回ったのだ。

「敬う心の無い貴方が、神の力を騙るな!!!」

その際に体勢を立て直してきたエクレシアがリザードマンの剣を防いでいる魔方陣に燃える剣を叩き付けた。

「そう言えば最近、あんたみたいないけない聖職者に会ったわね。」

戦い方も結構似ているから、残念ながらしっかりと対処出来るのでーす。」

くるり、と防御の魔方陣が砕け散る前に身を翻して、ローブの中から取り出した銃身の短いショットガンをエクレシアのわき腹に当てた。

「この距離ならばバリアも神の加護も関係ないわよね？」

「ッ！！！」

悲鳴すら聞こえなかった。

明らかに違法改造のオンパレードと思われるショットガンはフルオートで多分八発は撃たれたと思う。

散弾の近距離射撃の衝撃はリザードマンを巻き込んで思いっきり吹っ飛ばされた。

「あはははははは、何で死なないの？ 生身の人間なら胴体が二つになってもおかしくないのに。ホント、あんたら騎士どもは硬さだけは褒めるに値するわね。」

楽しそうに手を叩いて、クロムは弾切れのショートバレルショットガンを捨てた。

流星のエクレシアも至近距離での衝撃は殺しきれなかったようで、失神している。

「うーん、内蔵はぐちゃぐちゃになってるわね、骨は何本折れたかしら？」

そんな彼女に止めを刺さず、足で直撃を食らった彼女のわき腹を踏



みつけるようにしながらそんなことを言い出した。

「う・ああ・ああ!!」

「ねえねえ、こんなになっても死ねないってどんな気分？ ほらほら、恨み言の一つでも言ってみなさいよ、きやはははははは!!」  
気を失っても痛みでうめき声を漏らすエクレシアの悲鳴を楽しんでいるかのように、クロムは笑う。

「いい加減に、しゃがれ!!」

エクレシアの零距离射撃に巻き込まれて吹っ飛ばされてリザードマンが漸く立ち上がって蛙のように跳躍してからの斬撃を繰り返す。

「魔族って頭悪いのかしらね、そんな原始的な攻撃通用すると思ってる?」

「俺のは、なッ!!」

ああ、とそれでクロムもりザードマンの一撃を障壁魔方陣で防ぎながら思い出しように呟いた。

「そう言えば居たわね貴方、すっかり忘れてたわ。」

「たった十数秒で俺のことを忘れてんじゃねーよ!!」

「目の前で仲間がやられているのに、何も出来ないあんたなんて覚えられない価値があると思う? 笑わせないでよ、あはははは!!」

クロムは俺の斬撃を跳躍して華麗に躲すと、置き土産に無数のピンの抜けた手榴弾をばら撒いていきやがった。

そして、その中心には、エクレシアが居る!!

だが、今から彼女を担いで逃げるには圧倒的に時間が足りない。  
もう手榴弾は地面に落ち、爆発寸前なのだから。

「（魔導書おおおおおおおおおおおおおお！！！！！！）」

『許諾』 防護術式『アイギス』を代理詠唱、術式の圧縮による超短縮発動。負荷はキツイですよ。

その直後、俺の中に凄まじい虚無感が襲われる。

大量に魔力を消費すると襲われる吐き気を超えたそれは、命の危険を訴える寸前だ。

爆音が聞こえる。

だが、爆風も熱も痛みも無かった。

俺の周囲全方位に展開される球状の防壁は、防御力なら先ほどの『アキレスの盾』よりずっと高い。ギリシア神話が誇る世界でも屈指の防御力を誇るイージスの盾の伝承を元にされているだけはある。その代わりに、燃費も非常に悪い。緊急避難に発動したもんだから更に悪い。俺の魔力の殆どをこっそり持っていかれた。もう動くのも辛い。

「助かったのか……。」

挟撃に失敗し、爆発範囲に居たりザードマンも無傷である。

「おい、魔導書・・・俺はどうなってもいい。  
今すぐにもあの女を、ぶっ殺したい。力を貸せ・・・。」

『許諾』 是も非も有らず。我が知識の全ては、すべて我が  
マスターの為に。

「お前もそんな可愛げのあることば言えたんだな。」  
そんな冗談っぽい言葉を言いながら、俺は薄く笑った。

「あらららー、よく生きてたわねー。今ので絶対死ぬと思ったの  
に。」

「笑っていられるのも今のうちだぞ、このクソ女。」

「じゃあ、本気にさせてみなさいよ。」

そんなへたれじゃそのちよろそうな女もなびかないわよ。」

「てめえが、こいつのことをとやかく言う資格はねえよ!!」

「ああそうなの。じゃあどこでその資格を得る試験があるか教えて  
貰えるかしら?」

クロムは嘲笑っている。

自分に刃が決して届かないと分かっているのだ。

実力の差は痛感している。

エクレシアも手も足も出ていないのだから。

だが、そんなことは関係ない。

俺は今すぐこの女を目の前から消し去ってやりたいんだ。

『分析』 彼女の戦闘における最も有効だと思われる魔術を選定。『トロイの木馬』が最適だと判断しました。

「（発動は任せる。）」  
すぐに了承の意が返ってきて、俺は魔剣を構える。

「馬鹿つて嫌よねー、馬鹿の一つ覚えってこのことかしら。」  
「脳天からかち割ってやるよ。」  
俺はクロムが二丁拳銃を構えるのと同時に走り出した。

「拳銃ならシングルアクションに限るだろうが……」  
「うわ、それ分かるわあ、でもそれじゃあ二丁拳銃できないじゃないかい。」  
俺は容赦なく銃撃を浴びせられる。

『アキレスの盾』を展開し、その犠牲と共にそのまま直進する。

「さよなら。」  
今度彼女が取り出したのは、先ほども使ったショートバレルショットガン。  
フルオートではら撒かれる散弾の雨を横っ飛びで避け、すぐに俺は最後の距離を詰める。

だが当然近づかせてはもらえない。

クロムは飛び退いて新たなショットガンを二丁取り出し、そのまま撃ち出した。

俺が居る方向とは見当違いな場所を。

「うおおおおおおお、『ケラウノス』ッ！！！」  
クロムが違和感を覚える前に、俺は魔剣に魔力を込めて投擲した。

「は？」

クロムは終始理解できなかっただろう。

何で自分の腹に俺の魔剣が突き刺さっているのか。  
そのまま、雷撃が迸る。

そして、彼女の絶叫と共に、この戦いは終止符を打ったのだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ふふふふ、これで死ねないんだから、私も大概よね。」  
俺が虚脱感に襲われるのを必死で堪えてクロムの元に歩み寄ると、  
そんな自嘲気味な声が聞こえた。

腹部を貫かれてまで、クロムは生きていた。

しかも明確な意識を持って。普通の人間なら朦朧としているか即死  
だろう。その上に雷撃まで喰らったのだ。フルオートの零距离シヨ  
ツトガンを喰らって生きているエクレシアもそうだが、こいつもと  
んと常識外れである。

「殺しなさい・・・体が動かないの。最低限の防護はできたけど、  
この有様じゃ、もう二度と魔術なんて使えない体になっているでし  
ょうね。」

「言われなくても・・・。」  
この状態で喋ること自体が奇跡に近いが、俺は情けを掛けたりなん  
かしない。

魔剣の柄に手を当て、そのまま僅かに残っているだろう魔力をかき  
集める。

もう殆ど空っぽに近いから、集めるのに時間が掛かってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたの？ ふふふ、まさか、同じ人間に手を掛けるのが怖い  
の？」

「そんな、わけ・・・。」

まるで俺の心を見抜いたかのように、クロムは嗤いながら言った。

そのとき初めてローブに隠れていた彼女の顔が見えた。  
エクレシアよりは年上だろう、成熟した若い女性であり、どこにでも居そうな茶髪の女だった。

「お止めなさい……。」

ふと、エクレシアの声がして俺は思わず振り返った。

そこには、リザードマンに肩を貸され、苦痛に顔を歪めながらも何とか歩いている彼女の姿があった。

「勝負は着きました。戦いは終わっています。」

これ以上、誰かが傷付くのは、私が許しません。」

「おいおい、いい加減にしろよ。こいつはお前を殺そうとしたんだぞ？」

これはもう、優しいとかそういうレベルの話じゃない。

慈愛に富んでいるとか、信仰心厚いとかでもない。もし本心でそれを言っているなら、異常だと俺は思った。

「理由はともかく、殺し合いをしていたのです。私たちは明確な意識を持って剣を抜いた。それは変わらないのです。殺そうとしたんです、殺されるのは当たり前なんですよ。」

「じゃあお前は、一方的に銃を向けられて抵抗するなど言っているのか!？」

「身を守るだけなら、殺そうとする必要ありません。それに、私は何も許すと言っているわけではないのです。ここは魔族の領地であり、この村を治める騎士殿の土地であるのです。」

であれば、彼によって厳正なる裁きを行い、然るべき罰を与えるべきです。」

「だけど……。」

「私の言っていることは、間違っていますか？」

「……分かったよ。けどお前らはそれで良いのか？」

俺はリザードマンに問いかけた。

「確かに俺たち魔族は捕虜を取らねえ、敵は見せしめに即処刑だ。しかし、この人間の姐さんがこいつを罪人だと言うなら、それは捕まえて裁きに掛けなければならねえな。」

だが、人間の兄さんよ、なにせ、今ここで一番強いのはこの人間の姐さんだ。」

だったら俺らはそれに従うまでだ。ゴルゴガンの旦那も、ここに最初に来たときに己の力を証明した。強者に従う、それが魔族の掟だ。」

「……なら、いいさ。」

それ以上、俺が言うことなんて無かった。

「馬鹿ねえ、私が逃げるとは思わないの？」

「逃げられるなら、逃げてみなさい。その体で逃げられるのならば。」

「ふふふ、貴方気に入ったわ。死んでも覚えておくから。」

最後にそいつは、ぞっとするような暗い喜悦の笑みを浮かべていた。

・  
・  
・  
・  
・



.....

「おい、大丈夫かよ？」

「ええ・・・平気とまでは言いませんが。」

二日後、俺は牢屋の中にぶち込まれているクロムの様子を見に行くことにした。

エクレシアも付いていく言って聞かないが、どう見ても元気とは言えそうにない。と言うかよく立てるよなこいつ。

昨日一日はずっと寝たきりで食事も喉を通らなかつたほどののに。

「おらおら腰抜けども、しっかり走れやー!!!」

途中、部下を引き連れて走っているリザードマンを見つけた。

先日の戦いで誰一人ビビッて加勢しなかつた部下に相当立腹していたし、この様子では特訓は当分続きそうである。

しかし、銃弾を受けた連中も普通に生きてたし、魔族の生命力は馬鹿みたいである。

「それにしたって、なんで今日に来いって言ってたんだろうな。」

そう、今日この時間までに来いとクロムの奴に言われたのだ。

面倒だが、絶対に来いと念を押されているので、何だか行かないといけない気がしたのだ。正直あいつはいけ好かないが。

「さあ、しかし、大体は想像付きますけれどね。」

「そうなのか？」

「私の知っている高位の魔術師は、もつと人間離れしているんですよ。致命傷を負ったとしても平気で動いたり、そもそも死ぬことが無意味だったり、そんな方々ばかりでした。」

「どんな魔窟だよこは。」

「所詮は死の条件が普通の人間と違うだけですよ。」

浅ましく、死にくくなるだけです。だから、彼女ほどの魔術師が肉体的な制約に縛られているのが不思議だったんです。」

「銃なんか使っちゃつがそんなにすごい魔術師かね。」

「私と貴方の才能を足しても及ばないでしょうね。普通、魔術師が戦闘で一度に扱える魔術の種類は五つまでと言われていますが、彼女はそれを幾つも超えていた。最低でも黒魔術やうちの魔術、ルーンや他にも色々。正直、同じ人間とは思えませんね。」

魔導書の補佐がある貴方には分からないでしょうが、方程式を解きながら戦うようなものなんですよ？」

「うへえ……。」

それは勘弁してほしい。俺の数学のセンスは壊滅的だ。

「彼女は紛れも無く天才ですよ。性格はともかく。」

正直なところを言えば、私は彼女を逃がしてあげたい。」

「……正気かよ？」

「私も魔術師ですからね、彼女ほどの魔術師を殺すのは惜しいと思うのですよ。」

教義とか思想とかに関係なく、ここは人間の英知が集約する場所ですから。」

仮に人を生き返らせる力を持つ聖人がいるとしますと、この場所は百の犠牲を払ってでもその方を守ってきたと言う感じでしょうか。」

「前々から思ってたけど、今なら言えるよ。お前ら、狂ってるよ。」

「ふふふ、そうですね。でも貴方も同じ穴のムジナですよ。

ギリシア神話の英雄達は最終的に不死を得たりします。貴方も、いずれそれが欲しくなる。それが魔術師です。

そんな欲がない人間を、魔導書は選ばないのですから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かに不老不死に魅力を感じないといえは嘘である。

そしてそれに限りなく近い人間が確かに存在していると言っただから、夢を見ないのなら人類ではないのかもしれない。

「私も、もつと神の身元に近づきたい。」

両手を組んでエクレシアはそう呟いた。

だが、俺は彼女のようにそんな求道を歩む自信が無かったのだ。

・・・・・・・・

「あら、遅かったわね。」

「ッ!？」

俺は、旦那の屋敷にある罪人の地下牢屋に収容されているクロムを見て絶句した。

エクレシアの治癒魔術で辛うじて一命は取り留めたはずの彼女は、  
現在見る影も無い。

顔はまるでひび割れた土偶のように乾いており、ベッドの上には乾いた砂のようなものが散乱している。

「やはり、あなたは錬金術師でしたか。」

「あら、初見で私の正体を見破ったのは貴方が始めてよ。」

「貴方の使う魔術は多彩でしたが、どれも汎用的で弱点の無いものばかり。専門としている魔術ではないと思いました。それに、決定的だったのは呪術に対する抵抗力の低さ。信仰する神の居ない錬金術の魔術体系の最大の弱点ですから。」

貴方はすぐに私の幻術は見破っても、対象の認識をずらすメイさんの幻術はすぐに見破れなかった。」

「ぱちぱちぱち、百点満点。」

それじゃあ私の正体も見当が付いているんでしょう？」

「……………ホムンクルス。」

それは、無学に等しい俺にでも知っている単語だった。

「そう、本来ならフラスコの中の命なのよ、私はね。だから、定期的に特殊な溶液に漬かってないと体が崩壊するの。だから私を裁ける奴なんてこの世に居ないの、ざまあみる。」

「わざわざそれを言うために呼んだのだろう、彼女は。」

実に楽しそうに、死の寸前だと言うのに、最後まで笑いながら言うのだ。

「やはり所詮、貴女にとって体なんて入れ物にしか過ぎませんか。ですが、もう貴女は終わりです。誰も貴女を裁くことができなくても、神が貴女を裁くでしょう。それにより私は貴女への憎しみや怒りを忘れましょう。」

「ふふふふ、おめでたい女ね。この体が、自分の命を永らえるためだけの入れ物だとも思ったの？」

「……違うのですか？」

「残念ながら違うのでーす。」

可笑しそうに可笑しそうに、鉄格子越しに彼女は嗤う。

「私が何て言われているか知っている？ 人呼んで、“ブラックトリガー”。」

私は撃鉄を上げ、黒い引き金に指を掛けて、弾丸を撃ちだす存在。

こんな辺境じゃ無理だけど、調べればこの名前くらい出てくるわ。」

「なにが、言いたいんだ？」

「もうね、引き金は引かれたって事よ。」

この私は朽ちるけど、私という存在はあなた達の中に残る。貴方達のこと、私の中に残る。放たれた弾丸のように、もう戻ることは無い。」

「詩でも聞かせたいのか？ 場違いだぜ。」

「ふふふふふふ……。」

それでも、不敵ニクロムは嗤うだけなのだ。

「また逢いに来る。」

「なに？」

「また、逢いに来るって言っているのよ。この体が朽ちても、絶対にまた貴方達に逢いに来る。私は必ず目の前に立ちはだかつて、貴

方達に銃口を向けて引き金に指を掛けるでしょう。  
だから覚えておきなさい。絶対に、また逢いに来る。  
なぜだろうか。」

確信を持って言える。

この女は、絶対にもう一度、俺の前に現れると。

その予感が、背筋の悪寒となって俺を震わせる。

「でもね、私は私だけなのよ。ここに居る私は、確かにここで終わるの。」

最後に、楽しかったわあ。・・・・・・ああそうだ、最後に、これを。」

クロムは、ぼろぼろと崩れ落ちる手で胸元にあった小さなプレートを俺に差し出した。

文字が書いてあるようだが、真っ黒に焦げて、何が書いてあるか読めない。

「これは、私の生きた証よ。私なんかに、殺されないでね？ 約束よ。」

彼女はそう言い残して、ポロツと胴体から砂の人形のように崩れ落ちた。

最後に残ったのは、ほんの小さな塊すらない砂漠の砂のように乾い

た粘土のような物体だけだった。

からん、とプレートが冷たい石の地面に落ちる。

「最後まで本当に勝手な奴だ。

勝手に現れ、勝手に暴れ、勝手なことを言って、勝手に死にやがった。」

俺は、何となくその金属製のプレートを拾い上げていた。

「でも、悲しい人でしたね。」

「そう言っただけのも、今のうちだけだと思っただけだね。」

そして、俺たちはすぐに地下牢屋を後にした。

また、逢いに来る。

クロムの声が、耳にこびり付いている。

彼女は、絶対にまた現れる。俺たちの前に。





## 第十四話 低迷の二人

「オヤジー、オヤジー、折角僕が訪ねてきたんだからちゃんと対応しやがれよー。」

「ドレイク様、困ります。“代表”はいま会談中です。」

「いつもは部下に仕事を押し付けてるオヤジが会談なんて嘘でしょ。」

「  
「会談は本当です！？ 大切なお客様だから誰も通すなど言われているんですから。」

クロムが暴れた数日後、クラウンは家にも帰らず報告書をオーガロイドのゴルゴガンに書いてもらうと、その足ですぐに第一層の“不在宮”にやってきていた。

しかし、ほぼ押し入りのように『マスターロード』に会おうとしても、受付をしていたラミアの女性に必死に押し留められている。

「クラウン様。ここは神聖な魔王の居城であります。場を弁えてくださいませ。」

「あ、秘書官！ー！」

涙目になっているラミアの受付嬢は、黒山羊の秘書官の登場に救いの主が現れたような表情になった。

「一度も腰を下ろされていない玉座でよくも居城なんて言えるね。」  
「言えますとも。本当に陛下の復活を待ちわびているのなら。」  
胸に手を当てて黒山羊の秘書官はクラウンにそう言い返した。

「頭だけのひ弱な種族が、僕に意見するかい？」  
「本当にそう思われるならお試しになられればよろしいかと。伊達で『マスターロード』の側近を勤めさせていただいている訳ではないのですから。」

柔らかな笑みを浮かべて秘書官はそう言った。  
物腰は柔らかだが、そこに隙は見当たらない。

「馬鹿馬鹿しい。雑魚を相手に向きになるほど僕は子供じゃない。  
とにかく、オヤジに会わせるよ。話があるんだ。」

「それについては既にお言葉を賜っています。  
曰く、貴様の顔なぞ見たくも無いわ、さっさと消えうせろどら息子、  
と。」

それでも無理やり押し通そうとするクラウンを秘書官は実際に言われただろつ伝言をそっくりな口調で言った。それだけで付き合いの長さが見て取れる。

「あのクソオヤジ……浮気がばれてお袋に頭上がらないくせに。」

「ともかく、お引取りください。預かった書類はしかと目を通して  
おきますので。」

「……もういい、あのクソオヤジ。」

せつかく僕から出向いてやったのに。ムカついた、帰る。」

「“代表”も素直ではありませんからね。」

お互い納得するには時間が掛かるのでしよう。」

苛立つクラウンを窘めるように秘書官はそう言った。

「ふん、絶対ギャフンって言わせてやる、覚悟しておけって言っておいてよ。」

「仰せのままに。」

「ああ後、どうせその書類見るのあんただろうから言っておくけど、その領主は全く僕とは関係ないから、それだけは覚えておけよ。忘れたらお前噛み殺すから。」

「承りました。」

「じゃあね!!」

そう言い捨てて、クラウンはどしどしと足音を立てながら帰って言った。

「騒がしいようですが、何かあったのでしょうか?」

「あのどら息子……いえ、何でもありません。」

件の『マスターロード』は、豪華なつくりになっている接客室のソファーに腰を下ろして、外で怒鳴っていたクラウンに頭を抱えていた。

「それより、本題へと入ろう。貴様の信念と実力は認めよう。」

しかし、『盟主』の紹介とは言え、私はあんたを簡単に信用するわけにはいかない。

我々は魔族であり、潜在的に人間は敵なのだから。簡単に我々の領域を歩かせるわけにはいかないのだよ。」

「そうですねか……。」

対談相手は、口元に手を当てて忍び笑いを浮かべた。

「何が可笑的い。」

「いえいえ、先日、私の友人が魔族に興味を示しまして、早速行って帰ってくるよ。私は止めたのですが、こんなものを持ってきたんですよ。」

そうやって、対談相手は懐から円錐状の尖った物体を取り出した。

『マスターロード』は、その物体の正体を一目で見破った。

それは、角である。それも、最下層周辺にしか居ない希少な竜種の物だ。

「貴様ツー!!」

「これで簡単に我々の領域を歩かせるわけにはいかないですよ？ふふ、笑わせてくれるって話ですよ。」

そう言った対談相手は、人間であった。

漆黒のローブに、栗色のセミロング。

顔は整っているが、美人というには何か足りない、そんな若い女だ。

そんな女が、魔族の暫定頂点に君臨している男を挑発したのだ。当然、胸倉を掴まれて宙に持ち上げられてしまった。

「あんまり舐めたマネをすると殺すぞ、人間の女。」

視線だけで小動物ぐらいは殺せそうな睨みでその女を見下ろしながら『マスターロード』は言った。

だが、その女はちつとも動じなかった。  
彼女は『マスターロード』でも見たことも無いようなどす黒く濁ったような瞳で、見つめ返すだけであった。

それでも体格差も歴然であり、普通ならその女には成す術などないだろう。

そのまま軽く壁に叩きつけられてもしたら、そのまま死んでしまいうまくないその女は華奢だ。

しかし、そうはならなかった。

「おいおい、人の女に手を出すなよ。」  
横から、『マスターロード』の腕を掴む手があったからだ。

「なんだ、貴様。」  
当然の反応である。なにせ、今までそこには誰も居なかったのだから。

「だからー、人の女に手を出すんじゃないよ。」  
派手な人間の姿をした男であった。  
真っ赤な服に金糸で意匠が凝らされており、首には悪趣味な首飾りに、両手には宝石が散りばめられた指輪が幾つも嵌められている。

どう見ても、悪い男に引っかけた女と成金なチンピラの構図である。

「この俺様が許可したんだから、いーんだよ。文句あんのか？」  
挑発に挑発を重ねるような言葉だった。

「……まさか。……これは、失礼した。」  
しかし、『マスターロード』は、その男の縦に割れた瞳孔を見つめると、ぱつと女を掴みあげていた手を離れた。

それは、驚いて思わず手を離してしまったと言う感じであった。

「先ほどの無礼は詫びさせてもらおう。改めて我々魔族は、貴殿を歓迎する。」  
さっきまでとはまったく真逆の態度で、プライドの塊のような『マスターロード』が恭しく一礼をしたのだ。

「魔術師リネン・サンセット殿。」  
そう呼ばれた人間の女は、にたにたと薄気味悪い笑みを浮かべているだけだった。

・・・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「俺が留守の間に色々とごたごたがあったようだが、漸く整理が出来た。

ひとまず今回の武勲に応じた配当を分配する。」  
ゴルゴガンの旦那が帰ってきて数日。

色々あって説明が面倒くさがったが、とりあえずここ数日は村の補修作業で手一杯だった。

クラウンの奴は急ぎの用とかで顔も見せずにどこかに行っちゃったし、俺も石材運びとか手伝わされて結構大変だった。

そしてその作業もあらかた終わり、今現在旦那の屋敷の庭に俺とエクレシアは呼び出されていた。  
どうやら褒美が出るらしい。

俺以外にも、旦那の部下も何十人も居るし、俺たちは隅っこで目立たなくたって居るだけである。

旦那の部下達は複数の種族による混成部隊であり、纏めるのも大変そうである。

最初は今回の盗賊討伐で武功を挙げた数名が何らかの階級に叙されたり、報奨金が出ていたりとか名前を呼ばれた連中は嬉しそうにしている。

どいつもこいつも見るからに屈強そうな連中である。

「次、盗賊の残党から村を守抜き、更には悪しき人間のテロリストから村を守ったりザードマンの“勇往”！！」  
次に旦那に呼ばれたのは、俺も知っているリザードマンのあいつだ。連中の名前は人間や人型の魔族には発音できないから意味だけが伝わってくる。  
多分名前負けとは無縁そんな奴である。

「それらの功績により貴君を今日より騎士に叙する。貴君には一小隊を任せる。それと呼びにくいから魔族共通の名を考えておけ。」

「有難き幸せです。」  
跪いて深々と礼をするリザードマン。

やっぱり旦那も連中の名前は呼びにくいらしい。  
そう言えば旦那もクラウンの奴の名前を呼んだことが一度もないのを俺は思い出した。

というか、あいつただの一卒兵だったのかよ。  
普通に部隊指揮をしていたから小隊長か何かかと思っただが。まあ、クロムの奴に尻込みしなかったのはあいつだけだったし、あの状況ではある意味当然の流れだったのかもしれない。

「次、人間の従士メイ。」

旦那がそう言うと、周囲の魔族たちが一斉に俺の方を向いた。  
俺かよ。……まさか俺が呼ばれるとは思わなかった。



ちなみに何で俺が従士なのかというと、身分が無いと面倒だからとエクレシアに弟子入りしたことになっている。あながち間違っていないから困る。

そしてエクレシアはちゃんと騎士の位を自分の組織で貰っている。教会は公的な機関だから証明にもなるし、後盾にはうってつけなのだ。

ちなみに、ここでのエクレシアの立場を説明すると面倒になるのでとりあえず彼女は騎士の位を得ていると言う事実だけを前面に押し出している。クラウンの奴がそれで旦那に納得させたようだ。周囲もそれで納得するんだから、魔族の連中の関心はその背後関係より強さの証明だけなのだろう。

まあ、こんなところで教会の権力が及ぶとは思えないし、ある意味正しいと言えるのかもしれない。

一応俺はクラウンの奴の奴隷扱いだ、魔族の社会じゃ主人が奴隷を取り立てるのはあんまり珍しいことではないらしい。とことん実力主義のようだ。

居心地の悪さを感じながらも、俺はゴルゴガンの旦那の前にまで来て跪いた。

そして旦那は、俺に対する褒賞を述べた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

.....

「借金ひと月分免除と少しの現金、入隊の任命と所属の辞令ですか。突然人間が入隊するよりは具合は良いですし、幸先は良いと思いますよ。」

褒賞の配分が終わり、帰り道にエクレシアは俺にそう言った。

「あの人数の前で借金があることをばらされる俺の身にもなれよ。」

「まあまあ、あと自由に出来る金銭を頂けたのも良かったですよ。」

基本的に騎士の身支度は自腹ですから。召集されたのに食料が配給だけだというのは辛いですよ、本当に。」

「いつの時代だよ、まったく。。。しかも配属先はあのリザードマンの所だし。」

エクレシアの表情は本当にどこか切実だった。普段から節制に徹している彼女が言うんだからマジで辛いんだろう。

それにあのリザードマンが上司だと思つと、一抹の不安が拭えない。

「今日から俺、あいつのこと隊長つて呼ぶんだぜ？」

「私が以前居た隊の隊長は殺人罪で投獄歴がありましたよ。人殺しが牢屋の中で信仰心に目覚めて自身を正当化するために騎士団に入ったと白い目で見られては居ましたが、私はすぐに真面目で心の優しい人だと分かりました。」

人間誰しも分かり合えるものですよ。そう嫌そうな顔をなさつてはダメです。」

「あいつは人間じゃなくて魔族だけだな。」

それに、あんたは関係ないからそんなこと言えるのさ。」

「しょうがないじゃありませんか。私には通常業務として果たさなければならぬ責務があるのですから。当然、有事にはちゃんと手伝いますから。」

「へいへい。人間の神様の言葉なんて魔族の連中がどこまで聞き入れるかね。」

「人間、誰しも分かり合えるものです。私は挫けません。」

「だから連中は魔族だって。」

こいつの間『マスターロード』に徹底的に打ちのめされたのにまるで懲りてない。

俺もそんな生き方をして見たいものである。

「お前の言葉は見つかったのか？」

「分かりません。」

エクレシアの言葉は前と変わらなかった。

「それでも私は立ち止まるわけにはいけません。あなたは暗闇に居るとして、状況が進展しないと分かっているとしても人間は立ち止まるなんてことは出来ないんですよ。」

「陽が昇るまで体力を温存するって考えはないのか？ 遭難時の鉄則だぜ？」

「だって、真つ暗闇ですよ？ その中にただ居るなんて怖いじゃないですか。」

「神様にでもお祈りしていればいいじゃないか。」

「自ら行動しないものに神は手を差し伸べてはくれません。」

「……お前って、ああ言えばこう言うのな。」

「口先千万、屁理屈婉曲拡大解釈はうちの専売特許ですよ？」

「ホント、お前もいい性格してるよ。」

絶対に真似したくない生き方である。

こいつの謙虚と誠実さの下にあるのは強かさか、結局女というのは神様のように男の幻想でしかないのである。これでその辺の女よりずっとマシだかと思うのだからこの世に救いはないのだろう。

「とりあえず、一人は確保できました。ここから徐々に広げていきます。」

「おい待て、俺はお前さんのところ仲間になった覚えはないぞ。」

「徐々に外堀から埋めていつの間にか仲間を引き入れる、うちの常套手段です。」

笑顔で言った。笑顔で言いやがったよこいつ。

「……良い事してると思ってる？」

「神の教えに帰依する、良い事ではないですか。」

そりゃあ聞く限りお前のところ神様の教えは良い事ばかり言ってるけどな。

「……まさか、まだうちをどこぞのカルト教団と同じと見ているのですか？」

「疑うのかよ？」

「それこそ、まさか。」

そして俺もこいつの対応に慣れたもんである。

「まあ、自爆テロなんてする連中よりずっと怖いってこと分かるが。」

「私はともかく、仲間を悪く言わないでください。」

そこで、初めてエクレシアは俺を睨んできた。

「お前はそれでいいのかよ……。」

「はい？」

「いや、こんな死地に送り込む奴らを何でそこまで信じられるのかな、って。」

言ってから、思わずアツと言ってしまった。

まさか本音を口に出してしまうとは思わなかった。

「……普段は冗談っぽく言うくせに。」

職業柄だろうが、ホントにこいつは人をよく見ている。

「信じていますよ。何が起これば信じないと言えましようか。」

同じ志を持ち、共に戦い、寝食を共にした仲間です。ずっと私はそこで暮らしていました。それこそ、実の親や兄弟と同じように……

「いえ、あなたにそれを理解しろと言うには酷な話ですか。」

「なんだよそれ、俺には親愛の情は無いって言いたいのか？」

「まさか、そんな人間は居ませんよ。だから私はあなたも信じています。」

「不思議だな、お前が言うのと途端にうわべだけの言葉に聞こえてくるよ。」

「それはあなたに信じる心が無いからですよ。」

彼女がそう言った途端に、俺は腹の底から笑いがこみ上げてきた。

「はははは、おいおい、どっちだよ。俺は人間なのか？ そうじゃないのか？」

「人間ですよ。」

「ハッキリしやがれよ。」  
ム力ついた。この上なくム力ついた。  
ちやらんぼらんだった俺のクソ親父と同じように、酒に酔ったように言ってることが定まらない。当然だ。こいつは、神に酔っているのだから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「泣くなよ。卑怯じゃないか。」

エクレシアは、何も言えずにただ涙を流していた。

女が泣いていて、その前に男が居るのなら、ほぼそいつが確実に悪い。これは真理だと思っている。

だから俺が悪いのだろう。別に彼女は悪くは無いのだから。

「神は全能です。故に神は全てにおいて慈悲深く、無慈悲であられる。」

神は機械のように完璧な偶像であられる。故に地上での救いは目に見えず、死後に導くためにある。だから我々は、少しでも地上の人々を目に見える形で救おう。

「・・・・・・・・我が騎士団の理念です。」

「・・・・・・・・」

「人は所詮俗物です。主として奇跡を起こせなければ、誰も主を信じなかった。」

私はそれが悔しい。正しい言葉が信じられない世界なんて、腐っている。」

「・・・・・・・・」

「人は最初、神が創造なされた時は完璧でありました。」

しかし、悪魔に唆され、地に堕ちた。私が完璧でないのは、私に悪魔が住んでいるからです。だから、あなたに正しく言葉を伝えられないのでしよう。」

「恥も無いのも完璧なのか。面白い冗談だ。」

「あなたはいつもそうやって茶化して、話を濁そうとする。」

ですが、私は諦めません。人と人とは分かり合えるのですから。」

「お前が目指してるのは、人じゃねえよ。」

時々、俺はこいつがどこを見ているのか分からなくなる。

前を見ているはずなのに、果てしない遠くを見ているような気がするのだ。

「分かりません、矮小な私には、何も。」

「それは、お互い様だ。」

或いは魔術師という連中は、そんな途方もない真理を追い求めているのかもしれない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「やあ、そんなに離れてないのになんだか久しぶりだね。」

翌日詰め所で警邏ルートの確認中に再び旦那の屋敷に呼び出される

と、クラウンの奴が居た。

「俺はお前の顔を見なくて清々したけどな。」

「ははは、そんなこと言っちゃって、寂しかったくせに。」

「そんなわけあるか。って言うか、一度帰ってきてたんなら顔くらい見せろよ。」

「はっはっは、メイは素直じゃないなあ。」

「それより、本題に入りましょう。」

先に来ていたエクレシアがさっさと話を進めようとそう言った。

俺もクラウンの下らない冗談に付き合うつもりも無い。何の用も無く旦那に呼び出されるはずも無い。

「旦那、何用ですか？」

「先日ここで暴れたと言うテロリストのことだ。」

すっかりテロリストという認識らしい。相当な愉快犯であったが。

「報告にあった犯人の所持していた武器だが、ものは違うが同質のものを俺とクラウンは見ている。」

「何ですって？」

「これを見てみなよ。」

脇にあったテーブルにはクロムの使っていた銃器がトレーに積み重ねられている。

クラウンはその横に置いてあった二振りの剣を手に取り俺に見せた。



「普通の剣じゃないのか？」

「普通の剣だよ。ただ、これを見てみなよ。」

クラウンはそう言つて二振りの剣と剣を打ち鳴らした。

すると、両方の剣が全く同じように高速で小刻みに振動し、崩壊した。

そして青っぱい 魔力をより文章的に表現するなら、瑠璃色の

光となつて消えうせた。

「……どうなつてるんだ？」

「魔力で構成された擬似的な物質だよ。今の二つは全くの同一の物体だった。だけど“同じ物”なんてこの世には二つは認められていないんだ。だから今のように消滅した。そういう法則なのさ。

今は意図的に両者のバランスを崩したけど、そこにある武器はそんなにあるのに矛盾として見られていない。どうやったのか僕にも想像ができない。」

「……錬金術つて奴じゃないのか？」

エクレシアはクロムを錬金術師だといつていた。

だったらそれも錬金術による代物だと言うことになるのではないのだろうか。

「何でもかんでも錬金術の一言で片付けられるほど便利な魔術じゃないさ。」

「ええ、戦闘向きではないですし、何より彼女は戦闘で錬金術そのものは使つてきませんでした。彼女にとって錬金術はあくまで研究分野なんですよ。」

それ以外はオマケなのでしょう、とエクレシアはそう言った。

「不可逆な物質を可逆的にサイクル出来る秘術とさえは良いのか、人間専用の魔術だから僕は詳しくないけれどね。むしろそっちの彼女の方が昔から錬金術師を摘発してきた存在なんだから僕より詳しいはずだ。」

クラウンはエクレシアを見ながらそう言った。

道理で、エクレシアはクロムの正体を看破できたわけだ。

「私も詳しいわけではありませんよ。しかし、魔力で物質を形成するのは危険極まりない。本当に彼女は卓越した魔術師だったのでしよう。」

「そんなに危険なのか？」

「魔力は精神に反応して変質するんですよ？」

鉄が急に火になって爆発したりしないという可能性は否定できないのです。それが全くないどころか、全てが完全に同質にして同一。

人間業じゃありませんね。」

「マジか・・・。」

馬鹿みたいにイカれて笑ってる印象しかないが、そんなにすごい奴だったのかあいつ。

「僕も一度で良いから会いたかったなあ。話をして心行くまで人間の文化について語り合いたかったよ。」

「で、そいつが今回の盗賊どもに手を貸した可能性が出てきた。」  
残念そうに肩を落とすクラウンを無視して、ゴルゴガンの旦那が口を開いた。

「本当ですか？」

「ああ、なんかきな臭いからお前達にも話を聞こうと思ってな。」

「話と言つても・・・話せるようなことは何も・・・。」

「はい。結局は見す見す死を許してしまいました。面目ありません。」

「エクレシアも気にしているのか、強張った表情でそう言った。」

「そうか、手間を取らせたな。下がって良いぞ。」

旦那もそこまで何か情報を得られるとは期待してはいなかったのか、あっさりと言った。

「ねえねえ、旦那。これ、僕が貰っていい？」

「好きにしろ。」

旦那はクロムの銃器そのものには興味が無いのか、欲しかったクラウンに簡単にそう言った。

「クラウン。それに弾は入ってないから、武器としては使い物にならないぞ。」

しかし、俺はクロムが二丁だけ拳銃を使わず打ち捨てたのを覚えていたので、それを回収の際に勝手にちよろまかしておいたのは内緒である。

「いいのさ。武器そのものに何種類もの加護が付与されている。」

僕らの操る精霊魔術じゃこうは行かない。精霊は万物に存在するけど、どうも人工物とは相性が悪いからねえ。

それに、武器として使えないんらどうにか溶かして違う武器にすればいいのさ、鉄には変わらないんだから。それが出来るか試す意味も含めてね。」

こいつの好奇心とたくましさはアインシュタインもビックリだろう。

「さて、同士二人よ。決起会でも始めようか。色々と考えておいたよ。」

そしてこいつはあのことをまだ本気で考えているらしかった。

「おい、俺はまだやることがあるんだが？」

「そんなの後回しだよ。じゃ、行こうか。」

クラウンに腕を掴まれて旦那の部屋から連れ出される俺とエクレシアは思わず顔を見合わせた。

彼女もどうすればいいのか分からなさそう表情。

しかしこいつに逆らうには力不足。

「とりあえず、話を聞きましょう。」

エクレシアはそう言った。

俺はそれに頷いた。

どうやら色々と考えているようだし、とりあえず付き合っただけでやることにした。



## 幕間 ある魔導師の会談

「ええい！！ 老、老は居ないか！！」  
「ずかずかと『マスターロード』は庭園に踏み入っていた。

ここは第二十八層の、大聖堂のほぼ反対側に位置する白亜の屋敷と庭園がある場所。  
人呼んで、“精霊宮”。

そこには絶滅危惧種や既に絶滅したとされる動植物が放し飼いにされており、時折それらを世話している人間が見える。

が、そんな中に彼がどしどし踏み入って行くもんだから、餌を貰っていた動物たちが脅えて蜘蛛の子を散らすように逃げ出してしまった。

その様子に餌を与えていた人間も不審にも思い、彼を見た瞬間硬直した。

「まままま、魔族が、この場所に何の用だ！！」  
「老を出せと言っている。早く取り次げ！！」  
不憫な青年である。まだまだ若いと言うのに、『マスターロード』の殺気を全面に浴びさせられている。

しかしである、その青年は腰に帯びていたヤドリギの杖を彼に向けた。当然がくがくぶるぶると震えている。

「ろろろ、老は、偉大なる御方だ。お、お前のような魔族に好きにさせるか!」

「ああ、すっかり忘れていた。私と老の関係は秘密裏だった。周囲にはバレているはずだったから忘れていたよ。あはははは、済まないな勇敢な青年。」

口では謝りながらも、『マスターロード』は一瞬でその青年の頭を驚?みにして引きずりながら歩き出した。

「は、放せ!!　じ、人類は!!　魔族に屈したりなぞしないぞ!」

「結構。いざ戦いになった時、やりがいがないでは詰まらないからな!」

豪快に笑いながら、『マスターロード』は屋敷に近づいていく。

「何事だ。」

騒ぎを聞きつけて、数人のローブ姿の男女を連れて現れたのは、いかにも悪そうなことを企んでいそうな中年の男であった。

「おお、老。勝手に入らせてもらっているぞ。」

「……せめて文章を通してから会談に臨みたかったな。」

「そう硬いことを言うな、我らの仲ではないか。」

「ち……お前達、このことは誰にも漏らすな。貴様も中に入れ。」  
頭を片腕で抱えると、中年の男は引き連れている部下と思わしき連

中にそう言い含ませた。

「邪魔するぞ、老。」

「その前にその手を放せ。」

老と呼ばれた男は、『マスターロード』が掴んでいる青年を指差してそう言った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「いきなり押しかけてくるとは、いったい何事だ。」

“精霊宮”の中庭にあるテラスにあるテーブルの横にある椅子に腰掛け、老と呼ばれた中年の男は言った。

彼は、通称『魔道老』。

誰も本名を知らないし、怖くて誰も聞こうともしない。

これでも精霊魔術の英知を極めた“魔導師”の一人であり、実質的権力は『盟主』の次にあるほどである。しかしその『盟主』を影から操っているとも噂されている物騒な男でもある。

「聞いてくれよ老、先ほど『カーディナル』との会談をしてきたのだ。」



「……なるほど、大体は読めたぞ。」  
妙に親しく話しかける『マスターロード』に、『魔道老』も慣れた様子だった。

「我々の協定関係は秘密裏だと言っただろう。周囲の誰にも悟られてはならない。」

「所詮は公然の秘密だろう。それなら結局はどうでもいい事だろう。」

「あんな、人間には体裁というものがある。外聞だよ、外聞。とりあえずぶん殴つてぶつ殺しておけば権威を守れる魔族と違って、人間は色々と難しいのだよ。」

「面倒だな。どうでも良いが。」

全く気にした風でもない『マスターロード』の態度に、あからさまに『魔道老』は溜息を吐いて見せた。

そして彼は話が長くなりそうだと悟ったのか、一度屋敷の中に引っ込んで、すぐに配膳台を押して戻ってきた。

がらがらと車輪に揺られる台の上には、六ホールほど多種多様色取り取りのケーキと紅茶のポットとカップが二セット置いてあった。

「今日は随分と多いな。作りすぎたのか？」

「平気で平らげるくせによく言う。私が作った物など誰も食わないからな。」

「ほう？　なぜだ。旨いのに。」

と、言いながら、既に八等分されているケーキを一切れを大きな口を開けて一口で飲み込む『マスターロード』。

「大方、毒でも盛られているとも思っているのだろう。だったら

「こんなあからさまな手段を取るかという話になるがな。」  
「ふん、毒などにやられる軟弱者など、お前の部下に必要か？」  
「確かにお前には既存の毒はどれも効かなかったな。」  
「そうだろう・・・おい待て、貴様今なんと言った？」  
「冗談だ。それで、いったい何があったのだ。」  
「疑わしそうな視線を投げ掛ける『マスターロード』を無視して、『魔道老』は彼がここに来た理由を話すように促した。」

「まあ、これを見る。」

そう言っつて、『マスターロード』は指を鳴らした。

すると、中庭に半透明の男女と魔族が現れた。

それは立体映像のようなものであった。

『おい、『カーディナル』。貴様の部下と思わしき小娘が我らの領域に侵入してきたぞ。これをどう釈明する。』

『さてねえ、何のことかさっぱりだね。』

その状況を再現しているのか、椅子に座っている人間の女と魔族がそんな会話を交わした。

片方は当然、魔族の代表として話し合いに応じている『マスターロード』。

もう片方の真っ赤な礼服の人間の女は、『カーディナル』。  
騎士総長を差し置き、パランディン聖堂騎士団達の首領として立つ魔術師である。

『仮にそうだとしても、そっちで勝手に処理すればいい話じゃない

かね？

その辺は『盟主』との取り決めで決まっているだろうに。』

『そういう問題を話しているのではない。私は抗議をしているのだ。その小娘はこちらの利益を損害させるような行為を行い、散々暴虐を働いてくれた。』

いったいどういう思惑があったのか。事と次第によっては相応の報いを覚悟していただきたいところだな。』

毅然とした態度の『マスターロード』に対して、『カーディナル』は彼の顔も見ずに明後日の方向を見やるとぼけている。

『で、その小娘とやらはどうしたんだい？』

『後一步のところまで逃がした。だから貴様のところに匿っているよ。うなら引渡しても願おうと思ってるね。』

『ほづほづ、残念ながら知らんね。それにしても、お前が目の前に居ながら逃がしたのかい。魔族の代表も大したことないんだね。』

『おい、なぜ貴様がそのことを知っている。』

『はて……？ お前さんがそう言ったんじゃないのかい？』

『おい書記官、私はそんなことは言っていない。そうだろう？』  
すぐに書記官を務めていた魔族から、はい、と肯定の言葉が返ってきた。

『おや、私の聞き間違いだったかい？』

『いいえ、『カーディナル』の仰るとおりですよ。』

しかし、『カーディナル』が引き連れていた騎士の書記官はそう言った。

『……なるほど、茶番だ。議事録まで都合の良いように改ざんするとは、相変わらず貴様らの積んできた歴史はろくでもない。』

『

『いいことを教えてやるう、魔族の代表。勝者が歴史を作るんだ。では常に歴史の勝者だった我々教会が歴史書を書いてきたのと同義では、歴史に何をどう書こうが我々の勝手と言う事だ。』  
とんでもない言い草だった。

『……書記官、今の発言を削除しておけ。』  
背後で護衛をしていた“騎士総長”が頭を抱えてそう言った。

『耄碌したかクソババア。貴様らの神は嘘をつくなどは言っていないかったか？』

『書記官、今の発言を削除して頂きたい。』  
そしてこっちにも頭を抱える黒山羊の秘書官が居た。

『生憎と、私も修行が足りなくてね。未熟な私はついつい間違った言葉を言ってしまうこともあるかもしれない。ただそれだけだよ。』

『素晴らしい信仰心だ、反吐が出るよ。貴様らには誠意というものは無いのだな。』

『誠意、だと？』

その言い方には『カーディナル』も頭に來たらしい。

『揃いも揃って悪魔属の魔族ばかり引き連れて、これ見よがしにこの神の家に堂々と入ってきた貴様らにどういった誠意を見せればいいのか、私は生憎と知らないねえ。』  
そう、『マスターロード』の護衛は、確かに俗に悪魔と呼ばれるような容姿をした連中ばかりであった。

『貴様らなぞ、魔王陛下が復活すれば三日でボンツだ!!!』

『おい、トカゲ頭。魔王に頼らなければ人類に手も足も出ない貴様

らが、何を偉そうに言っている。虎の威を借る狐とはこのことだ。それになんだ、ボンツて、もつと貴様にはボキャブラリーというのが無いのか。』

『……書記官、今の発言を削除。』

『寄りにもよつて、トカゲ、トカゲ頭だと!! 貴様、誇り高き我々ドレイク族を馬鹿にしているのか!! 所詮形のない神によるハリボテの権威にすぎる貴様らに言われたくはないわ。確かに実在し恩恵を与えてくれた魔王陛下と違って、お前達の神はなんと薄っぺらいことか。』

『……書記官、今の発言を削除してください。』

『薄っぺらい? 薄っぺらいだと!? 一度も人類に勝てなかったシヨボイ化け物の親玉が、我らが神と比較になるはずもなかつた!!!』

『……書記官、削除を。』

『慈悲だよ、慈悲。陛下が本気になれば貴様らなんぞ塵も残らんからな!! 悔しかったら召還でもなんでもして私の前に呼び寄せて見せろ!!』

『……書記官、削除……』

『崇高さというものをわかっていないようだな、クソ魔族。ぼんぼんとばら撒かないからいいのさ。有難みがなくなるからね、そういう意味では貴様らの魔王とやらも概念として薄っぺらいなあ!!』

『削除を!!』

『ついに魔王陛下まで愚弄するか貴様!! 幾万幾億と八つ裂きにしても足りないぞ、下等生物がツ!!』

『いいだろう、表へ出る。聖ゲオルギオスのように貴様の首を民衆の前に引きずり出して晒し者にしてからぶち殺してやるツ!!』

『もいい、双方取り押さえる!!』

『今日のごとは、お互いになかったことに!!』

最後に“騎士総長”と黒山羊の書記官の叫び声で、再現映像は締めくくられた。

「まったく、なぜあんな人間が人の上に立てるのか、甚だ疑問だ。  
・ ・ ・ おい、いつまで笑っている。」

「ふ ・ ・ ・ ふふ ・ ・ ・ ああ、すまない ・ ・ ・ ふふふ。」  
腹を押さえて『魔道老』は笑いを抑えようと堪えている。

「あのくらいはお互い日常茶飯事だろう。我々に共同体以上の秩序  
は無いのだからな。」

「もうムカついたからあの女ぶつ殺そう。お前もあの女嫌いだった  
だろう？ 一緒にぶつ殺す名誉をくれてやる。」

「いやいや、あれはお前が悪い。聖堂騎士団の本拠地に悪魔を連れ  
て行くなんて、『カーディナル』でなくとも怒るだろうよ。」

「こちらもどれだけ怒っているか示すためだ。止むを得んよ。」

「そうかそうか、お互い様か。『カーディナル』の思惑は知らんが、  
お前もいい意趣返しが出来ただろう、ここいらで溜飲を下げたほう  
がいい。流石にこれ以上は支障や実害が出るぞ。」

「お前がそういうのならそうなんだろうな。」

両手でがつかつとキーキを一切れずつ掴んで食いながら『マスター  
ロード』はいかにも不満そうにそう言った。

「まあいい、あの小娘にも問題にはしないと約束はしてやった。こ  
れ以上怒鳴り声を上げるのは大人気ないと言うものだろう。」

「十分問題になりかけていたぞ。」

「言いたいことも言えない関係の方が問題だろう。我々“魔導師”  
は『盟主』の下に対等なのだからな。」

「確かにそうだが、そんなことを言えるのは魔族のお前だけ ・ ・ ・

ではないな。」

『魔道老』は、同僚の濃い面子を思い浮かべて、思わずそう呟いてしまった。

あれだけ暴言を吐き合っていたが、『カーディナル』はまだ話が分かるほうである。“魔導師”は自分勝手など当たり前で、好き勝手行動しているのだ。

「そうそう、『盟主』と言えば、なにやら最近不穏な動きをしているな。」

「なんだと？」

紅茶をポットの注ぎ口から直接自分の口に注いでいる『マスターロード』が、訝しげに『魔道老』を見やった。

「先日、下級の魔術師ども反乱を起こしてな。それをどうも自ら煽った節がある。」

「なるほど。『盟主』は自分が無能だと言う話を流布するのが得意だからな。マッチポンプの腕は教会の連中とどっこいだ。」

「それを鎮圧して連中も、実は『盟主』直属の“処刑人”ではなくどこぞから沸いたやも知れん奴らだったのだ。」

「なに・・・？」

「どうもきな臭い。魔族もさっさと意思統一を図り、地盤を固めた方が良いだろう。」

「そう簡単に言ってくれるな。人間どもだって一度として意志を統一するどころか、完全な自由貿易すらまなっではいないのだからな。」

「それでも人間よりは圧倒的に楽だろう。人間はすぐに考え方を変えるからな。」

「そうだな。ところで、いつ『盟主』をぶち殺すのだ？ お前は「箱庭の園」の頂点に立ちたいのだろうか？」  
「お前は少し考え方を変えろ……。時を待てと三百年も前から言っておるだろうが。」  
「思いついたのならさっさと行動すべきだろうに。」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
「はあ、と『魔道老』は溜息を吐いた。

「前々から思っていたが、私と居るときは完全に考え事を私に全て投じているな。」

「当然だろう、頭がいい奴が物事の筋立てを立てるのは魔族でも同じだ。」

「それは『盟主』相手には迂闊だろう、少しは改めるのだな。まあ、すでに筒抜けだと思っではいるが。」

「お前が言うのならそうなのだろうな。」

「・・・・・・・・・・はあ。」

投げ遣りな『マスターロード』の態度に、『魔道老』も二度目の溜息を吐いた。

恐らく、思う存分愚痴を吐き出したから満足しているのだろう。単純な奴である、とまでは言わなかった。長い付き合いである。言っても無駄なのだ。

「用が済んだのならさっさと帰れ。」

「おう、今日の菓子も美味かったぞ、次はもつと用意して置けよ。」  
ちなみに六ホールあったケーキは全滅していた。『魔道老』が自分の皿に取り分けていた分もいつの間にか消えている。



「お前の食べっぷりには惚れ惚れするよ。」

「さて、そろそろ私もお暇しようか。」

たっぷり食って愚痴を言って満足したらしい『マスターロード』は、  
そう言って椅子から立ち上がった。

「あ、そうだ。」

しかし、すぐに何かを思い出したかのように彼はそう呟いた。

「今度は何だ？」

「息子が言うことを聞かないのだ、どうすればいいと思う？」

「……ちょっと待っている、昨日作り置きしておいた奴を持  
ってくる。」

すぐに『魔道老』は立ち上がり、屋敷の中に戻っていった。

「もういい、今日はとことん話し込むぞ。」

山盛りになったさまざまなバリエーションのクッキーのバスケット  
を幾つも持ってきて、『魔道老』はそう言った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「で、だ。私もそろそろドレイクの中では年だ。族長を引退しようとも思っている。だから息子にその座を渡そうと思っていたのに、あのどら息子はそれを蹴りやがったのだ。

……ああ、あの時は思わず追放だなんて言ってしまった。

私はどうすればいいだろうか……。」

「親の心子知らずとは言うが、逆もまた然りと言ったところか。」  
既にクツキー類は全滅し、次に登場したバケツ大のプリンの牙城を攻略しながら話している『マスターロード』だが、『魔道老』は仕事の書類に目を通しながら話半分に聞いている。

「私も人の親になったことはある。私は人の親には向かないと同時に思い知ったがね。」

「ほう、それは初耳だ。息子殿は息災か？」

「殺したよ。親も超えられない愚かな息子だった。大体、八百年は昔の話だ。」

世間話でもするように、『魔道老』はそう言った。

魔術師の師弟が師匠に挑むことは珍しいことではないどころか、伝統に近い。

そうやって彼らは魔術を受け継いできた。

「そう言えば、お前は親からはくれた人間どもを飼育しているのだったな。」

「飼育とは人聞きの悪い。弟子を取るなら孤児院を作って感受性の高い有望な子供を集めた方が効率的だからな。『カーディナル』もやっていることだ。」

「参考になるな。人間の柔軟性が羨ましいな。」

「私はお前の図太さが羨ましいよ。」

知性が高いことと頭がいいことは同一でないことを彼と居ると常々感じる『魔道老』であった。

そこで、ふと、書類に目を通していた『魔道老』の表情が硬くなる。

「どうした？」

「外の話だ。箱庭の中のお前には関係ない。」

「なんだ、つれないな盟友よ。地上進出を目論む我ら魔族に地上の話は無関係ではないのだよ。わかつたらさっさと教える。」

「はあ……。」

そんな尊大な態度に『魔道老』も溜息を吐くも、すぐに『マスターロード』に書類を差し出して見せた。

「なに、無知で愚かで身勝手な人間が、私を利用してしようとしているだけだ。」

私が環境保護団体などの支援をしているのを嗅ぎつけて寄付を願っていた。しかもこれは中々の組織的で手馴れた手口だ。普通なら私のところに来るまでに部下が選定され落とされている。」

「なんだ、お前はそんな下らないことまでやっていたのか、お互い自然法則を研究する身だろうに。何をしようとも今の人間どもには焼け石に水だと分かっているくせに。」

『マスターロード』が目を落とした書類には、『魔道老』が騙されそうになったことに気づくような要素は一つもない。

「地球温暖化の原因が二酸化炭素の所為だと言うなら、確かに熱した地球に水をかけた程度では無意味だろうな。これも自然の流れというならすぐに終息するだろう。人間の危機感も、所詮星の莫大な

時間からすれば風邪を引いた程度ですらない。」

「ははははは、それでは人間はウィルスとでも言うのか？」

「地上の原住民なぞ、そんなものだろう。どうせ百年も経てば勝手に人間は滅っていく。急激な繁栄は急激な滅びと同義だからな。□  
ーマもそうやって滅びた。」

『魔道老』は不快そうにそう言った。

この箱庭に住む魔術師は、地上の人間を原住民と蔑んでいる。

今現在の地上の現状を思えば、それも然もありませんと言ったところだと『マスターロード』は思っている。

「なるほど、そのときに人間を攻めれば簡単に勝てそうだな。」

「最初からそう言うているだろう。どこぞの馬鹿が余計なことをしてくれただから予定は早まりそうだがな。それでも百年は先だ。だからそれまでには少し腰を落ち着けると言っているのだ。」

「どこぞの馬鹿……？ ああ、科学に耽溺しているあの男か。六十年ほど前だったか？ 彼奴の見せた映像は衝撃的であったな。都市が一つ丸ごと消し飛んだあれ、なんと言ったか？」

「核爆弾だ。人間は地球を軽く十度滅ぼして余りあるほどそれを保有している。まるでソドムとゴモラの再演だ。聖書の時代は終わったと言うのにな。」

「ついに人間は神の力にまで手を出した。なんと欲深いことだろうか。」

では次は神の罰でも飛んできて地上の文明をことごとく破壊でもするのだろうか。バベルの塔のようにな。その内『カーディナル』聞いてみるか。」

人間の問題だからか、全く他人事のように笑いながら『マスターロード』は言った。

「或いは、もはや目も向けられぬほど人間は醜くなったか、だろうか。」

そして魔族に加担する男も、全く無関係のようにそう言った。

「とりあえず、この連中は皆殺しだ。加担者全員、一人残らず根絶やしだ。」

自らの故郷の問題を食い物にする輩など、生きる価値などない。「そう言った『魔道老』の瞳には、底知れない憎悪の光が宿っていた。」

「国単位で居るぞ、そんな連中は。」

「いずれ、滅ぼして見せるさ。そういう意味では、お前達のいう魔王に人間は支配されたほうがよほどマシだと言うことだろう。」

「前例がないわけではないがな、そこまで言うか。」

「ああ、どこまでも言うさ。そして盗み聞きをしているだろう『カーディナル』にもな。どうせ、聞いているんだろう?」

『魔道老』は悪人面を歪めて笑いながら言った。

「相変わらず、人間は面倒だな。」

『マスターロード』は、人間のことになるのとんと無関心だった。

ちなみにこの時点でバケツプリンの乗っていた皿はカラメルまで綺麗さっぱり消えていた。

「なに、盗み聞きはお互い様だ。それにそうやってお互い牽制し合っつて秩序を保っているのが、我々“魔導師”だろう?」

「まあな。だから私も敵の為に敵である人間と手を組んだ。」

「貴様の場合、人の菓子をかかりに来ただけだろうが。」

刺々しい『魔道老』の言葉も、『マスターロード』には蛙面に何とやら。

「違つぞ。少なくとも菓子子の代金分くらいは仕事の手伝いはしてやる。表ざたにはしたくない汚れ仕事をするには適した部下はたくさん居る。」

たとえばこいつらは動物愛護を訴えて貴様に近づいてきているのだから、獣人に殺されるのは本望だろう。それに獣の爪と牙によって殺されれば、原住民どもは犯人を探し様がないからな。」

「……そういうところでは頭が回るのな。」

「頼もしいだろう？　しかし、昔から思っていたのだが、なぜ人間は同属同士で殺し会つのだらうな。そんな蛮行は我ら魔族ですらないと言つのに。」

「さて、な。生きる為、とでも言っておこうか。」

「それでよくあそこまで繁栄できたものだ。正直理解が出来んよ。」

「それは私もだよ。」

『魔道老』はそう言った。どこかウンザリとしたように。

「それよりいい加減に帰れ、流石にもうストックはないぞ。」

「ん？　ああ、そう言えばそろそろ戻らねば秘書がうるさい。」

「あ、そうだ、ちよつと待て。」

いよいよ帰ろうと『マスターロード』がした時、『魔道老』は一度屋敷に戻ってすぐに帰ってきた。

そして、手に持っていた包みを突き出した。

「土産だ、部下どもとよろしく伝えて置けよ。」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「……………」  
昇降施設までの帰りの道中、妙なところにポツンと告解室が置かれているのが『マスターロード』には見えた。

「人間というのは本当に面倒だな。」  
「表立って仲良くするわけにはいかないからねえ、姿勢というものは大事なのだ。」  
『マスターロード』がその中に入ってそう言うと、反対側に入っている誰かがそう返した。

「体裁か、下らんな。」  
「体裁は大事だよ。周囲の反応がまるつきり違うからねえ。」  
すると、向こう側からタバコの臭いが漂ってきたのに、『マスターロード』は顔を顰めた。

「タバコは止める、お前達の神の前だろう。」  
「神様も文句があるなら何か言ってくるだろうさ。」

「ふん、そういう問題ではない。私の師匠がそれで体を壊して隠居する嵌めになった。お前がそれくらいでくたばるとは思えんが、不快だ。」

本当に聖職者なのか疑いたくなるような言葉だが、今更である。

「はいはい、わかりましたよー、と。」

「いったいどういふつもりなのだ、一目でお前の差し金だとは分かったが、流石にあれだけで意図だけは汲めんよ。お前は何がしたい、何が言いたい。」

「さて、ねえ……。」

「ふん、ご苦労なことだ。語る気がないことをわざわざ言い待っていたのか。」

「ただ言えることは、神の導きだと言うことだけさ。私も所詮神の僕に過ぎんからね。」

しかし、壁の向こうの誰かは『マスターロード』の嫌味もまるで意に介さない様子だ。

「とぼけてばかりして、それでよく信者が付いていくものだな。」

「私の仕事は実利を優先することだねえ、それ以外のことは誠実な騎士団の連中がやってくれている。私には過ぎたる神の僕たちだよ。」

「なるほど、道理で。お前は出資者や支援者という立場で騎士団を運営しているのか。そして騎士団が非難されれば彼らの行動は自分とは直接の関わりもないと、言えるわけだ。黒寸前のグレーだな。そうやって身代わりというより、自ら生け贄になるのか。まるで救世主だな。」

「私の枢機卿用の礼服は真っ赤な緋色だろう？」

これはね、私の血なんだよ。血を流してまで、という覚悟がここにある。お前さんたちにも、あるだろう？ そういう覚悟が。」



「当然だ、我らは魔王陛下の為に血肉の一片、粉骨碎身まで戦える。」  
「ならば我らは分かり合えなくとも、同じ世界には生きていられる。」  
「……博愛が過ぎたものがどうなったか、お前らの聖書には載っているだろうか？」  
「ならば、私は主のように何度でも復活しよう。我が理想の為に。」  
その言葉を聞き終えるまでもなく、『マスターロード』は告解室を出た。

「下らんな、下らんよ。『カーディナル』。  
我らは争い、殺しあってこそ映えるのだからな。……だろう？」  
振り返れば、そこには嘘のように何も存在しては居なかった。

## 第十五話 クラウンの思惑

「で、具体的な案はどうなんだよ？」

俺たちはクラウンの家に帰り、彼の話聞くことにした。

「それより、何で私がここに居るわけ？」

そしてなぜか関係ないサイリスまでいた。途中で掃除していたのを見かけたので無理やり連れてこられたのである。

「ちょっと意見を聞くこともあるかと思ってね。光栄の思えよ、僕らの決起会の初期メンバーに加えてやるから。」

「えー、私の拒否権って無いの？」

相変わらず他人のことを考えないクラウンはサイリスが嫌そうな顔をして何のそののである。

「諦めたら？」

「そんなー……。」

掃除終えないと師匠に怒られる、と俺にもサイリスが考えることが手に取るように分かった。分かりたくもなかったが。

「それでだ、具体的と言っても大雑把だけど良いかい？」

「いいも何も、聞かなくては判断できません。」  
エクレシアもクラウンにそう言って話を促した。

じゃあ、とコホンと咳払いしてクラウンは改めて話を始めた。

「まず、第五層の攻略を行い、その領主を屈服させ支配下に起きたい。」

「はあ!？」

俺やエクレシアが何か言う前に、サイリスが驚愕するように声を挙げた。

「あなた正気？ いったい何のために……。」

「人類と魔族の共存の為さ。それにはどうしても第五層の攻略は前提であり、絶対条件であると僕は思うね。」

「あんたおかしいわ……。」

力なく首を振ってサイリスは啞然とした表情でクラウンを見た。

「なぜいきなり攻め込むみたいな話になっているかはさておき、なんで第五層はそこまでお前が言うほど攻略する必要があるんだ？ なにか戦略的に重要な場所でも有るのか？」  
とりあえず俺はクラウンに質問してみた。

「良くぞ聞いてくれました、魔族だって当然一枚岩じゃない。あそこにはね、魔族でも“夜の眷属”と呼ばれる連中が巣食っている、そいつらの大ボスがヴァンパイアロードだからなのさ。」  
「なんですって!？」

クラウンの言葉に今度はエクレシアが声を挙げた。

「ヴァンパイアって・・・吸血鬼のことで良いんだよね？」

「そうだよ。しかもそこにいるのは“真祖”どころか“原生”の吸血鬼。故に『最も尊き血と夜の王』と呼ばれている。」

「すげー厨二ネームだな、それ。どういう意味があるんだそれは？」  
「この世界にいる魔族は異世界から移住してきた連中ばかりだとは言ったよね、けどそいつは違う。この地球原産の吸血鬼なのさ。だから“原生”。」

この地球のあらゆる吸血鬼伝説の起源であり、人々が認知される以前から存在していた怪異そのもの。もう一種の災害や現象と言っている。いい。」

聞くからにヤバそうな感じだ。

「大丈夫なのか、それ・・・。聞くからに強そうな感じがするんだが。」

「そりゃあ強いさ。ヴァンパイアロードと言えば魔族の支配階級。同じ血族のヴァンパイアは勿論、グールを初めとしたアンデッドや夢魔や悪魔、夜に活動する化け物たちの頂点だ。」

普通に戦ったらまず勝つ見込みなんて無い。更に“原生”ってのは不死身を越えた不死身でね。嵐を根本から消せないように、世界のルールでも変えない限り殺せないような化け物の中の化け物さ。」

この世に同じ“原生”は存在しない、故に『最も尊き血と夜の王』なのさ。」

「聞くからにちつとも勝てる気がしないんだが。」

「普通なら、ね。」

にやりと笑いながらクラウンは言った。

「それが二百年ほど前に、地上で吸血鬼狩りを生業にしているらしい吸血鬼の真祖とやり合って殺され、つい百年ほど前に転生して自身の城に引きこもっていると言う話だ。」

力の弱い今ならそれだけピンポイントで屈服させて部下をまるまるごっそり支配するって寸法さ。」

「なんつー皮算用……。つーか、吸血鬼狩りをしている吸血鬼とか、どっかで聞いたことある設定だなおい。」

「実際に居るんだから仕方が無いだろう。お陰でしばらく魔族の力関係とかのバランスが崩れてごたごたしていたけれど、“代表”がその混乱に乗じて頭角を現して一気にトップに躍り出たって言うのが今の魔族の現状って訳さ。」

「なるほど。」

「つてことは、そいつが倒されるまであの『マスターロード』も表立って立ち上がれないほどの化け物だったのかよ。正直想像もできない。」

「まあ、どうせ今じゃ大して部下なんて居ないだろうけど。でもそうじゃなければプライドも力も高い吸血鬼の王なんて屈服できない。」

「ま、実質的に必要なのはヴァンパイアロードと言うブランドだけだね。」

「大義名分つてやつか？ 台頭としちゃ十分かもしれんが。」

「いつの時代、どんな種族でも、説得力と正当性は非常に重要だ。特に僕らのやろうとしていることは陛下への不満をぶちまけるに等しい。少しでも権威や力は欲しいってことだよ。正当性なんかは後から付いてくるけどね。」

「ふーん、意外と言っていることはちゃんとしてて意外だな。」

「いや、十分イカしてるわよ。」

サイリスは吸血鬼の王に逆らうなんて考えただけでも恐ろしいのか、ぶるぶると震えている。

「まあ、本音を言うと、ヴァンパイアロードを一番に何とかしたい理由は、連中がどうあっても人間と仲良く出来ないからなんだけどね。」

「え？」

「かの『最も尊き血と夜の王』は、人間の抑止力となるべき存在だったと言われている。ところがこんな所に閉じ込められて、馬鹿みたいに人間は繁殖するのを許しているときている。」

そんなのを地上に出したら、共存どころじゃない。世界規模のバイオハザードになるだろうね。特に“原生”は概念の影響を受けやすいらしいから、比例して力も増すだろうから、一気に魔王陛下に匹敵するくらいヤバい化け物になる可能性もある。」

「えーと、つまり？」

内容はヤバイことは分かるが、こいつはいつも相手が知識を持っていること前提に話してくるから時々言っていることが分からなくなる。

「“原生”とは、幻想そのものなんだよ。吸血鬼の“原生”は、吸血鬼の幻想のそのもの。地上じゃ吸血鬼がどう伝わっているかは知らないけれど、そんなのが地上に出たらそれに応じて強くなるってことだよ。」

「そんなのが暴れたら魔族の風評はどん底だ。」

「……それは、まずいな。」

魔族の風評はともかく、今の時代でそれは本当にマズイ。

「地上じゃあ、吸血鬼は最悪の化け物として伝えられている。特に俺の国にいた国じゃ吸血鬼は、最も強い化け物はなにかと聞かれたら、必ず三つ以内には入るだろうくらいだ。」

「エクレシアはどう思う？」

俺は多分俺より吸血鬼について詳しいだろうエクレシアに意見を求めた。

「……我が騎士団は、吸血鬼との戦いの歴史でもあります。自然発生した吸血鬼は勿論、“伯爵”と呼ばれる吸血鬼殺しの真祖、それとは別にドラキュラと呼ばれ伝えられる災厄そのもの。」

アンデッドは存在するだけで不浄。死にながらこの世に存在することとは、神による救いを拒むと言うことでもありますから、見つけ次第倒し浄化しなければなりません。」

悪魔は、まあ悪さをする度にシバけばいいですが、アンデッドだけはダメです。和解の余地はなし。あれは害にしか成りえません。可能ならば可及的速やかに滅ぼすべき存在です。」

俺から見てアホみたいに人がいいエクレシアでさえこの物言いである。」

魔族との共存だけですら無理ゲーだが、吸血鬼と和解となるとゲームとして成立すらないのだろう。」

「メイの言うとおりならば、余計にその問題は早めに解決したいね。転生して百年程度ではどうにもならないだろうから、今はこの問題は置いておいても大丈夫だろうけど、不確定要素はなるべく排除したい。当面の目標はこれになるかな。」

「ヴァンパイアロードを味方にするのには賛成です。」

その存在はアンデッドに対する抑止力になる。人間に対して振るわ

れるはずの力を逆に利用してやりましょう。」  
エクレシアも分かりやすい目標に乗り気である。

「そして、第二目標。“代表”をなんとか納得させる。叩き潰しても。」

「あの『マスターロード』をですか・・・」  
一気にエクレシアの表情が曇った。分かりやすい女である。

「まあ、実際問題、戦って勝つのは無理だと思うよ。全盛期のヴァンパイアロード然り、“代表”然り。だって神様に最も近い領域にいる魔術師の一角なんだから。魔導師って言うのはそういう連中だからそれは民意で何とかする。“代表”も魔族全体から人間との共存を訴えられれば流石にどうしようもないだろうからね。」  
「なるほど、けどやっぱり町や村単位で支配してその領主とかと訴えるのか？」

そうになると、旦那もそうだけど魔族全体っての無理だと思うぞ。人間を倒すことに誇りを感じてるって奴も多いし。」  
「そうなるって逆に町や村単位で奪還されたら終わりだ。あの“代表”相手に力で解決できることは力でねじ伏せられてしまふ。だからそれが出来ない方法で何とか彼を動かせないか難しいところなんだよね。」

“代表”は力だけなら有り余ってるし、力を振るうことに関しては頭が回るから性質が悪い。普段はいい加減で部下任せのくせしてね。」

「やっぱり、ドレイク族の族長だけあってよく知ってるんだな。」

「え、ああ、そうだね。里に居た時は何度も話したことあるし。とりあえずそこが最大のネックになりそうだな。」

「難しいな。」



とりあえずマグマの中に特攻みたいな内容でなくて安心したと言っべきか。

「どっちにしても今すぐ出来るようなことじゃない。

少しづつ準備をしなくちゃならないと思うよ。」

「そうですね。簡単な話ではありません。」

「簡単どころか、魔族の基盤をひっくり返そうとしている話じゃない。」

馬鹿げてるわ、とサイリスはクラウンとエクレシアに向かってそう言った。

「うーん、出来れば“賢者”殿が“ハーミット”のどちらかに協力を取り付けられれば、今の不可能に近い現状を覆せるんだけどなあ……。」

「それって結局“代表”を説得するのとどっこいじゃない。」  
「難しそうに腕を組むクラウンに、サイリスは呆れたようにそう言った。」

「そいつらも権威ある魔族だったりするのかわ？」

「“賢者”殿は千年前に異世界にきたことで混乱にあつた魔族を束ねたダークエルフ族の最後の生き残りだよ。通称“砂漠の魔女”。嘗ての世界で、魔族の存亡を掛けて人類側である『盟主』に協力した実績がある。」

彼女の協力があれば説得力は軽く“代表”を凌駕するだろうね。」  
「えーと、アメリカに例えると今の大統領の前に、ジョージ・ワシントン辺りが出てくるようなもんだらうか。確かにそれはすごい説得力だらう。」

「ただ、問題は“賢者”殿がどこかの砂漠を根城にしておられることだ。

残念ながらこの“箱庭の園”に砂漠はないから、地上を探す必要がある。だけどそれは本末転倒って奴になるだろうね。」

「あー・・・そうだな。」

地上に進出し共存するためなのに、前提として地上に行かなければならない。確かに本末転倒である。

「あと、“ハーミット”はもはやジョーカーだね。協力が取り付けられたら、まず僕らの勝ちは確定。たぶん“代表”も逆らわないだろうね。」

「・・・どういうことだ？」

「そのままの意味さ。ハーミットとは、隠者の意。

即ち、退役した歴代の魔王陛下なんだよ。退役したといっても、その御力は未だ衰えず。今の空位に納まるなんて言い出したら、多分そのまま十四代目の魔王陛下として君臨なさるだろう存在だ。」

「え、歴代の魔王って、生きてるのかよ。」

「伝承に寄るならば、十三柱の中で半数は死んだとは伝えられていない。どうにも陛下の感性は人間に近いらしく、我々魔族を従え人と全面戦争になった方が稀なくらいだよ。

名を変えて別の代に納まっていなければ、最低でも三柱はご存命のはずだ。」

「なるほどねえ・・・」

確かにそれは切り札になるだろう。

だが、魔族の二人の反応を見る限り望み薄と言ったところだろうか。

「話だけなら、私も魔王の生き残りがいるとは聞いたことがあります

す。第二十九層には“終焉”と称された十三番目の魔王が氷漬けの封印が成されていると聞きました。」

エクレシアも顎に手を当てて何かを思索しながらそう言った。

「まあ、十三代目は無理だろうね。そこは『盟主』が住んでる階層だから。僕らには行く権利がない。初代陛下も魔界に引きこもって出てこないし。」

「初代陛下は人間には無関心と聞くから無理よ。そもそも人間との敵対関係を構築した御方じゃない、人間と共存したなんて言ったら、塵も残らないわ。」

とんでもない、とサイリスは首を横に振ってそう言った。

「なら、二代目の陛下になるかな。」

あの御方は芸術を愛しておられると聞く。と言う事は芸術性なんて皆無な魔族より人間の文化をよほど理解しておられるだろう。会うことさえ出来ればきつと共感なさってくれる筈だ。」

「それは本当なんですか？」

「それは私も初耳よ？ 二代目が生きてるなんて。」

それはエクレシアもサイリスも知らない様子だった。

「“代表”が会ったことがあると言うのを聞いたことがある。活動範囲は不明だけど、ご存命なのは確実だ。そして、今の時代の人間にやられるような御方でもない。」

十三柱居られた魔王陛下も、三代目までは事実上倒すのが不可能と言われていたほど別格な方々だ。だから三代目も或いは生きておられるかもしれない。」

「・・・ちなみに、魔王陛下ってどんぐらい強いんだ？」

そう言えばまだそれを聞いていなかった。

「確か、十一番目の魔王はユーラシア大陸ぐらいの大陸を真つ二つに割ったと『盟主』が語っていたと言う話を何かの本で読んだ記憶が……。」

「……え？」

俺はエクレシアが何を言っているのか分からなかった。

それはもはや何かが起こったという事象ではなく、事実だけのよう  
な気がするのだ。

つまり何が言いたいかと言うと、過程が想像できない。単に俺の想像力が貧相なだけかもしれないが。

「えーと、それで三代目までは別格なんだよな？ 十一代目で大陸を真つ二つにできるってくらいなの？」

「そうらしいよ。僕もそういう風に聞いたことがある。」

ちなみに『黒の君』が戦った四代目の魔王陛下は一夜にして二千万の軍勢を生み出したとか。それだけで当時の人間の人口超えてたらしいよ。そんな陛下を倒せるんだから、人間の英雄どもって底知れないよね。」

「……。」

『訂正』 一夜ではなく、七日で二千万です。我が創造主の記録によるとそう記されています。

魔導書がそう言ってくるが、俺はもうずっと昔に何か起こったかなんて考えるのを止めた。

一夜だろつが七日だろつが、二千万も増えるなら同じだろつが。た

だの伝承なら誇張だろうって言えるかもしれないが、実際に体験した連中が生きているんだから反論もできない。

「だからきつと二代目の陛下が本気で暴れたら、人類は三日も持たずに文明という文明なんて壊滅するだろうね。そういう意味では一度だけでも良いから会ってこれからもずっと大人しくしててくださって言わないとダメだね。」

「おいおい・・・冗談じゃないぞ。」

「大丈夫だよ、きつと。だって今の今まで人類は滅んで無いんだから。」

そんなクラウンの一言は、所詮人間の繁栄なんて薄氷の上でしかないと思ひ知った言葉だった。

「昔っからの追いかけてこき。魔王陛下が人類と戦いその文明を破壊し、人類の英雄が魔王陛下を倒し、魔王陛下が復活し、また英雄に倒され、新たに魔王陛下が誕生しては倒され、そういう循環の中で人類と魔族は生きてきた。」

“代表”は結果としてそれが人類と魔族の理想的な関係だと言っていたけれど。」

「殺し殺されの関係のどこが理想的なんだか。」

「繁栄と衰退は表裏一体だからね、早すぎる繁栄は早すぎる滅亡を招くのさ。」

そういう意味じゃ、人間は種として古代人にも劣る。でもね、どれだけ長く存続できていたかが大事だとは僕は思えないね。滅びはいずれ僕ら魔族にも訪れるんだから、それまで何が後世に残せたかが大事だと思うんだよね。」

「お前の言うことは、時々卓越してるよな。」

「何を言うんだい、まだ会話が出来ているじゃないか。」

まるで会話も出来ないような連中もいるような言い方である。

………居るんだろうなあ。

「失礼、失礼！！ クラウン様！！ 一大事でございます！！」  
するとその時、家の外からあのリザードマンの声が聞こえた。

「ああ？ 何事だい。」

面倒くさそうにクラウンは立ち上がって、玄関のドアを開けた。

そこには、平伏して地面に額を付けるほど頭を低くしたりザードマンがいた。

その前には帯刀しているシミターが置いてあり、見事な服従の姿勢であった。

「先ほど、中央区町から伝令が。」

捕獲に成功した第十二層で発生した魔獣がこの階層へと運ばれたものの、殺処分の寸前で脱走して周辺へと逃亡したと！！」

「わお。それは大変だ。生け捕りじゃなかったら手伝うよ。」

まあ、殺処分寸前だった魔獣なんて、言うまでもないか。」

「はッ、亜人の村を二つ食い潰し、退治せんと戦った人間の魔術師も十数名が戦死の末にやつとの捕獲に成功したほどだと！！」

上層の上級魔術師より早く処理できるこちらの輸送した結果だと思われませぬ。」

「まあ、そうだろうね。」

「我々は周囲の防備を固め、警戒を続けます。」

そして、そのメイにも召集が掛かりましたので、畏れながら私が、  
「あ、そうなの。昨日小隊長に出世したばかりなのに悪いね。」  
何やら楽しい話ではなさそうだ。

俺はエクレシアに目配りして、戦いの準備をすることにした。

「いえ、しかしながら、クラウン様にこの私たつてのお願いがありますー！」

「いいよ、言ってみな。」

「私には学が無いため、魔族共通の名をどう名乗ればいいのかわかりませぬ。」

どうかこの私めに知恵を授けて下さいませんか!？」

「ああ、そうだね。僕らの言葉つて他の種族には聞き取りにくいし種族によっては発音できなかったりするもんね。」

クラウンは納得したように頷いた。正直面倒くさそうである。

「じゃあ、適当にゲトリスクでいいんじゃないかな？ 適当な割には凝った名前にしたけど。」

「おお、何か強そうですね!！」

「たしかどっかの英雄の名前をもじったからね。人間のだけど。」  
適当でいいのか。まあ、隊長も喜んでるようだしいいか。

「多分フランス最初の英雄のことでしょう。」

「そうなのか？ 多分名前負けだな。」

そんなことを言いながら、俺とエクレシアは最低限の荷物を持って玄関に向かう。

「魔獣とか、最悪ね……。毎年のことだと割り切ってはいるけど。」  
「面倒くさそうにサイリスも呟いて立ち上がった。」

「そんなに頻繁に魔獣つてのは人を襲ったりするのかわ？」  
「まあ、見境無いからね。魔物つて私たち魔族と違って体内の魔力が不安定だから時々変異を起こして強かったり大きい固体とか出てくるのよねえ。」

「だから死体とかもちゃんと処理しないと魔力に還元されて残ったりしないのよ。だから素材集めとか面倒なのよね。」  
「確かにサイリスの言うとおり、エクレスシアの訓練で魔物退治を手伝った時には連中の死体はしばらくすると消えてた覚えがある。」

「魔獣つてそんなに強いのか？ 結構被害が出たみたいだが。」  
「平均的な魔術師が百人で同等つてところでしょうか。魔物の上位種としての魔獣は縄張りや分別がありますが、変異種の場合それがありますから、脅威としては魔族よりこちらの方が高いですよ。」

「なるほどな、それはマズイ。」  
「どうやらここでは魔獣は災害みたいなものらしい。」

「しかし、魔術師百人か……。時間があれば俺はいいところまでいけるとラミアの婆さんも太鼓判を押してくれているが、結局は新米には違いなしはまだまだ未熟だ。」

「クラウンもいるし、何とかなるのか……。？」



・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

さて、村の周辺では、旦那が陣頭指揮を執って魔物避けの柵を強化する作業に入っている。

魔物避けの柵だけでも土塀のような感じで十分大きいけど、流石に最低でも三メートル以上の魔獣を押し留めるには小さすぎるようだ。

この閉塞的な世界で魔族にとって木材や石材なども貴重なようで、こういった大きな防護柵のような建造物には土や粘土を固めて乾燥させたブロックのようなものを使うようだ。一言で言うなら焼かないレンガみたいである。

これが意外に固い。多分土塀のように何かか混ざっているのだろう。流石に鉄や石の壁よりは劣るが、無いよりはずっとマシである。

そんな感じで旦那を筆頭に魔族が約二百は居るだろうか。みんな総出で大忙しである。

これで村の大体五分の一、魔族の強みは種族だけで戦闘員に成れるところである。連中には本能で戦い方を知っているとかが言う奴らも多い。

いざとなれば人口の半数が戦いに出ることが出来るだろう。

そして、上空にはサイリスを初めとした飛行能力を持つ魔族が“天井”すれすれまで飛んで厳戒態勢を敷いている。

幸いこの村は外周の“壁”に沿って端にあるため、地形的に守りやすい場所だ。

逆に言えば戦略的な価値は無いとも言えるが、今はそんなことを気にする状況ではないのでまあいいだろう。

そして俺たちの隊は力の強い魔族というより、身軽で素早い魔族が二十名ほどで構成された斥候部隊に近いようだ。

確かに主力と思わしき部隊は見るからにゴツイ連中ばかりだった。適材適所で、魔族はその辺をきつちりと分けられている。

本日旦那に呼ばれる前にゲトリスク小隊長に仕事の確認した内容によると、警邏や村周辺の警備などを行うのが普段の業務だと言う。

そして今現在、村から少し離れた地点の警戒を行っている。

この辺りは平らな草原地帯だからずっと彼方には中央の町の城壁が見えるほど見晴らしが良い。

しかし少し先に行けば丘になっていて起伏が激しく、それを利用すれば隠れることも可能であり、それを利用した盗賊もよく現れると言う。

だからいくら見晴らしがよくても警戒は怠っては成らないのだ。

「隊長、四時の方向には異常なし。」

「了解した。とりあえずこの辺の異常はないか。」  
「どうやら偵察に行っていた俺の報告が最後だったらしい。」

リザードマンのゲトリスクは、次はどう動くか思案するように顎に手を当てた。

「ん……？ ちょっと、隊長、あれあれ！！」

ふと、同僚のガルダ族の女が翼と一体である腕を伸ばし、指を草原の方に向けた。

彼女は飛べるが伝令役として俺と同じ部隊にいる。

真っ赤な人型の鷲の姿をしている。顔も鳥そのものだ。詳細は後で良いだろう。

「ん……なんだ、あれ！？」

そんな彼女が指差したところには、何かが蠢いていたのである。良く目を凝らさないと分からないだろうが、確かに何かが川のように一方向に流れるように動いているのだ。

「……蛇だ。」

「ごくり、とガルダ族の彼女は言った。」

「巨大な大蛇です、擬態能力でもあるのでしょうか、こっちに向けて来ます！！」

「何だと!？」

「わ、私はこのことを領主様に伝えてきます。」

「ああ、頼んだぞ!!」

ガルーダ族の彼女にゲトリスクは力強く頷いてみせた。

彼女がばっさばっさと羽ばたきながら助走をつけて跳ぶと、そのまま滑空して風に乗って高く飛び上がった。

「あ、危ない!!」

しかし、それは魔獣の目を引く行動だったらしく、虎視眈々と潜伏していた巨大な大蛇は、その巨体に見合わない素早すぎる動きで彼女を丸呑みせんと飛び掛ったのだ。

「『ケラウノス』!!!」

俺はあらかじめベルトに刺して帯刀していた魔剣を抜いて、雷鳴を招来する。

ずがん、と稲妻が直撃し、何とか彼女を守ることが出来た。そして魔獣が地面に落下し、その全貌が明らかになった。

「は、はあ!？」

俺がその異形にビビッタのは誰も責められないだろう。

でかいにも程があるだろう。

顔は口を開いてすらいなのに俺の全長より大きい。長さまでは向こうの丘に尻尾の方が隠れているが、ここから丘の方までは長いと言っただけは分かった。

もう神話とかに出てくるようなサイズである。

これだけはハッキリと言える。  
こんな怪物に村二つと十数名の犠牲だけで捕獲できたなんて信じられない。

そして、かなりの破壊力を伴う雷が直撃したと言うのに、まるで屁でもないとも言うようにピンピンして起き上がり俺たちの方を睨んできやがった。

「こりゃあ近年稀に見る大物だな。野郎ども、退却するぞ!!!」  
しかし隊長の号令に従うまでもなく、同僚たちは悲鳴を挙げて退却・  
・と言うより逃亡を図った。今回ばかりは情けないとは言えない。  
俺だってあんな馬鹿げた大きさの化け物と正面から戦うのはごめんだ。

この場にはエクレシアもクラウンもない。  
なぜなら二人は村周辺の防備を固めているのだから。

ここから走れば十分も掛からず村に戻れるだろう距離だ。  
だから皆必死で逃げる逃げる。俺も逃げる逃げる。

「んぎゃー!!!」

しかし、途中で足を滑らしたのか、一匹のコボルトが転んでしまった。

「あッ!!!」

言い訳を許してもらえらるなら、助ける暇もなくそのコボルトは頭から足元までがっぷりと丸呑みにされてしまった。  
最後の最後まで諦めず、剣を抜いていたが一緒に飲み込まれてしまった。

「じょ……冗談じゃねえぞ、こんちくしょー!!」  
この場は罪悪感を覚えるより背後から迫り来る恐怖から逃げるだけで精一杯だった。  
後悔と反省は後からすればいい。今はたった一つしかない命が消えるかどうかの瀬戸際なのだから。

だが、俺はこのとき知らなかったのである。

シャアアアアアアアアア!!!

そして、今度の標的は俺らしく、俺に狙いを定めて大きな口を開けて迫ってきた。

「んがッ!？」

俺は何とか横に跳んで避けたのだが、妙に滑ってそのまま転倒してしまったのだ。

よく見れば、足元は何やらぬめぬめした液体が絡み付いていた。  
粘液か何からしく、どうやらいつの間にかこの辺にあの怪物が撒き散らしたようだ。

「メイ!!」  
向こうからゲトリスクの音が聞こえたが、そんなに気にする暇もなかった。

「うあああああ!!!!」  
俺は、なりふり構わず魔剣の切っ先を真上から丸呑みにしようと迫る巨大な大蛇の魔獣に向けた。

その後、血の雨が降り注いだ。

「え……?」  
当然、雷撃を主兵装とする俺には血を派手に撒き散らすような攻撃は出来ない。

だが、そいつはそこに居たのである。

「うひひひひひっひひひ、あひゃひゃひゃひゃひゃ、うえっへへへへへへへへへへへへへ、ぎゃはははははははは!! おっはよー  
ごぞいまーす!!!!」

魔獣の頭部が有ったはずの場所に、両手に剣を手にして狂ったように笑い声を挙げる、血塗れの人間の男が。





この真正正銘にイカレた男は、俺を殺しに来たのだ。

俺は知らなかったのである。ここを支配する魔術師という連中のことを。

人間よりずっと種族として優れているはずの魔族も、なぜ嫌々従っているのかを、本当に、理解すらしていなかった。

この魔窟で、何よりも恐ろしいのは、魔王や魔族や魔獣や魔物でもない。

ただ、己と同じ人間であると。俺はこのたった一つの偶然から生じた一件を通して嫌でも思い知ることになるのだった。

俺は、その日を境に理解する。ここは、確かに悪意に満ちた地獄である。



## 第十五話 クラウンの思惑（後書き）

感想をユーザーのみから無制限に直しました。ずっと無制限だと思  
ってましたww

どんな些細な感想でも作者の原動力になるので、気軽に感想を下さ  
ると嬉しいです。

## 第十六話 死に場所を求めて

数日も前の話である。

そこは、一言で言うなら、薄暗いはずのショットバーである。店の目的は当然グラス単位でのカクテルや水割りなどを提供する趣と雰囲気を大事にする酒場である。

店内も木造のカウンターや椅子などが置かれており、控えめな照明はいい感じに薄暗い。いかにも魔術師が好みそうな薄暗さだった。

しかしながら、店内に備え付けられている大型テレビからは白と黒のフリフリなゴスロリ衣装を纏った少女二人が巨大な化け物を蹴り倒し、爆発させている光景のアニメが大音量で流されていた。

「私の時代、到来！！」

「馬鹿かお前。」

そしてそれを見てドヤ顔を決めて力強く拳を握る女に、冷静に突っ込む男が居た。

男は真っ黒なローブで、目つきも悪く暗い雰囲気若い男である。はっきり言つとこの店内にもそのアニメにもまるつきり似合っていない。

「サイネリア、あれのどこが魔法少女だよ。変身ぐらいしか魔法っぽい使ってねーじゃねえか。」

「さすがアニメの国日本。十年前から一貫してこのスタイルを貫いていた私に時代が追いついた!!!」

「そうだよな、お前が話を聞くわけねーもんな。分かってたけどよ!!!」

男のうんざりした様子などなんのその、サイネリアと呼ばれた女は流れ出したエンディングに合わせて曲を熱唱し始めた。

男の名前はロイド。

このぶっ飛んだ女となんと五年もの間も組んで仕事をし続けている男である。

彼女は普段は気だるげで自堕落で自分の生活すらまともにも出来ない女なのに、こういう場合と戦闘時は人が変わったように熱狂する。

完璧に人間としても終わってるが、今アニメに出てきた少女達もビツクリするような戦いを繰り広げる。

魔法少女が変身して戦いを終えるくらいの時間で町ひとつくらいは軽く壊滅させるくらいには危ない魔術師である。だが、これでも天才であるので比較的優遇されている。

それで付いた二つ名が“暴虐の使徒”である。

ロイドはそんな彼女のストッパーであり、制御装置であると自覚している根っからのまともな組織人である。

彼と彼女の仕事は、一言で言えば殺し屋である。誰かに金で雇われて誰かを殺すのではなく、一組織に所属し邪魔者と逆逆者を始末する殺し屋である。

その組織というのが、魔族が“箱庭の園”と呼ぶ魔術師の組織の本部である。ここ人間は単純にこの場所を『本部』と呼ぶ。

で、彼らはそのトップである『盟主』直属の抹殺部隊。人呼んで“エクスキューション処刑人”。

千年に渡る魔術の秘匿に大きく貢献してきた現在二十人足らずの精鋭部隊である。

と、聞こえは良いが所詮は人を殺すしか能のない生産性の無い一代限りの問題児や、特に訳ありの魔術師がその英知を『盟主』に捧げる変わりにその庇護を受けた者など、はっきり言ってはみ出し者ばかりである。

当然性格はそのサイネリアのように捻じ曲がったりぶっ飛んだりとまともなものがあるのは極僅かなのが悲しいところだ。それでもちゃんと運用できている辺り、異常性の中にも規律は存在していたようだ。

「これのどこが面白いんだか・・・。」

今年で二十七になるロイドは残念ながらこの『本部』ではもういい感じの中年である。価値観はサイネリアに比べれば比較的まともとは言え、その面白さを理解するには少々年を取りすぎている。

「えー、ロイド君、おもしろいよー、あれー!!」  
そして、彼の隣にはいつのまにかまだ幼いだろう少女が楽しそうな表情をしながら笑っている。

「・・・ヴィクセンの旦那、こいつ邪魔だからちゃんと捕まえててください。」

「ああ・・・。ソニア、こっちに来なさい。」  
同じ店内の隅っこで一人飲んでいる渋い雰囲気四十台の男がいた。こちらは完全に雰囲気溶け込んで目立っていなかった。

「はい、パパー。」

そして、ソニアと呼ばれた少女は、その男の隣に座ってにこにこしている。

「ロイド、お前もそろそろいい年だ、少しは身を固めたらどうだ？」  
「呪い殺しますよ旦那。俺がどういう理由でここに来たか知っているでしょう？ 必死に媚売って命を繋いでるんです。そんな暇ないつすから。」

「お前ほどの男がもつたない。サイネリアとはいい雰囲気だと思っうがどうだ？」

「冗談やめてくださいよ、本気で殺しますからね。こいつと一緒になるくらいなら『盟主』を口説いたって良い。こいつとなんてベツトに行く前にぐちゃぐちゃになるって。」

真剣に、これ以上ないくらい真剣にロイドはヴィクセンと呼ばれた男にそう言った。

「じゃあソニアがロイド君のお嫁さんになるっかー？」

「それはパパが許さん。」

ロイドに純粋な瞳を向けてくるソニアを、しかし父親が即行で斬って捨てた。

「えー、なんでー？ ロイド君、その内きつと株上がるよー？」

「こんな見るからに根暗な男なんてパパが許しません。ダメツたらダメだ。」

「・・・・・・・・・・」

もうロイドはこの親子の会話を無視することに決めた。

そもそもなんでこんなバーで魔法少女のアニメなんか見させられているかというと、サイネリアの部屋のテレビが壊れたから、仕方ないので行きつけのここに来ている。バーのマスターはとっくに諦めている様子だ。

他に機械なんて使う知り合いはいない。

サイネリアも大概だが、ロイドは自分の交友関係も狭いなあ、と思っただ瞬間だった。

さて、そんな苦労性なロイドが諦めかけていたその時である、バーの入り口がバンと開かれたのである。

「おい、ここにあいつは来ていないか！！」

「ん？」

誰かと思えば、自分達やヴィクセンと同じ同僚の“処刑人”であった。



「<sup>ワン・リー</sup>王李。じゃないか。復帰したのか？」

「それどころじゃない、あいつ、ジャンキーの奴はどこか知らないか!？」

血相を変えて入ってきたのはまだ若い女だ。

アジア系であり、その服装から一目で中華圏の人間だと分かるだろう。

「ジャンキー？ いつも麻薬でラリってついに寿命がきたあいつの面倒みてたんじゃないのか？ 流石にもうくたばったと思ってたが。」

「同業者としては笑えんな。」

カクテルを煽ったヴィクセンが静かに呟いた。

「そうなのよ、もう動ける体じゃないって言うのに、あいつ、訳分かんないこと言い出してどっかに飛び出して言っちゃったのよ!！」

「あいつがまともなことを喋ったのを聞いたこと無いがな。」

王李の必死な言葉にも、ロイドは皮肉っぽいニヒルな言葉を紡ぐばかりだった。

「あいつなら、多分昇降魔方陣の方よ。」

すると、なぜかマスケット銃をゴルフクラブのように構えて素振りをしているサイネリアがそう言った。

「今朝、そっちの方に歩いていくの見た。あいつはいつも笑ってる

からよく目立つ。」

「そう、恩に着る!」

王季はそれだけ聞くと、すぐにその場を後にした。

「……………どうやら、死に場所を求めているのだろうな。奴も戦士だ。無様にベッドの上でただ死ぬことは出来んよ。」

「俺にはちつともそうは思えんがね。でも、面倒なる前に何とかしちまったほうがいいんじゃないかい？」

「黙って死なせてやりたいものだがね。……………行こうか、ソニア。」

「はい!」

ヴィクセンはカウンターに金を置き、元気に返事をしたソニアを伴ってバーを出た。

「つたく、ただ働きかよ。おい、サイネリア、いくぜ。」

ロイドがサイネリアの方を向くと、ヘッドホンを付けて大音量で何かのテーマ曲を聴きながらダンスをしていた。

ぶちっ、とロイドの中の何かが切れた。

「……………ここは旦那みたいにハードボイルドに決めるところだろうが!」

「イエーイ!」

「くそが、最低でも二十歳のくせに。」

決めポーズっぽい何かをしているサイネリアにそう吐き捨てたが、その直後、彼の頭上にマスキット銃が振り下ろされた。

「かちわりなうー!!」

「っぎ、けんなよ、てめー!!」

ロイドは咄嗟に避けたが、座っていた椅子は真ん中からぐちゃぐちゃである。

「私はまだ十二歳よ、ポケット!! 永遠に歳取らないの!!」

そこだけはしっかり聞こえていたのか、ピンポイントでサイネリアは怒鳴った。

その衝動でか、彼女は目の前の椅子を蹴り上げた。

「分かった、分かったから、俺が悪かったから、自主活動しような? な?」

最近『盟主』の評判も悪いし、これ以上下げないように俺らが頑張らないといけないだろう? そうだろう?」

無残に蹴散らされて木っ端微塵になった椅子の残骸を見下ろし、ロイドは取り繕うようにそう言った。この間合いで彼に勝ち目は無いのである。

「命令じゃなきや働きたくないでござる・・・。」

「・・・じゃあ、『盟主』に話を通してくるよ!!」

流石にサイネリアの態度にムカついたのか、ロイドはカウンターを叩いてそう言った。

サイネリアは、そんな彼の顔を気だるそうにじっと見つめると、何を思ったのか、懐から金貨を数枚カウンターの上に置いた。

「……………さつさと終わらせるぞ。お前の気が変わらないうちにな。」  
「……………」  
長い付き合いからそれを肯定と受け取ったロイドは、急に気力を失ったかのように脱力した彼女の手を引つ張ってバーを出た。

「義理で動くといつか死ぬよ。」

「お互い、まともな死に方できると思ってるのか？ 馬鹿馬鹿しい。」

「ぼそりと呟いたサイネリアに、ロイドは相変わらず捻くれたニヒルな言葉で返した。」

「だから良いじゃねえかよ、あいつを好きに死なせてやってもよ。」

「……………馬鹿みたい。」

「気だるげに言っつて、サイネリアはヘッドホンのポリウムを上げた。」

そして、数日後である。

「魔獣に食われて死亡、案外あつけないもんだつたね。」

サイネリアに顔を殴られて気絶している巨大な大蛇の魔獣は、戦傷であちこち血だらけだった。

ふらふらと歩くジャンキーをこの第十二層で発見したのだが、そのまましばらくすると魔獣が現れたらしく物々しい事態になったかと

思うと、彼はぱっくり頭から笑いながら食われたのだ。

「三十人がかりで手も足も出なかったのを……一撃で……。」

「ああ、俺たち“処刑人”ね。こいつを倒した手柄はやるから、『盟主』のお陰だと思って感謝しとけよ。」

ロイドはこの魔獣と戦っていた魔術師のリーダーにそう言った。

「さて、張り込みでソニアも疲れたようだ。先に帰らせてもらおう。」

ぐっすりと眠ったソニアを背負いながらヴィクセンはそう言った。

どちらかと言うと、彼はがっくりと膝を突いて呆然としている王季を一人にしてやりたかったのだろう。

「処分は任せるわ、俺たちがそこまでしちゃあんたらの面目も立たんでしょ。報告も出来ないだろうからな。」

「あ、ありがとうございます……！」

「礼はあの怪力バカに言えよ。」

ロイドはどうでも良さそうにそう言った。

「お前は どうするよ？」

向こうで戦闘の締めにはかのテーマソングを痛々しい魔法少女装束で熱唱しているサイネリアを尻目に、ロイドは王季に尋ねた。

「……この魔獣が処分されるのを見届けてから、復帰すると伝え

てください。」

「ああ、でも多分下に運ばれると思うぜ。そこじゃあ流石の俺たちも干渉だ。仮に行つたとしてもただじゃ済まないかもな。」

「ふふ、私がどんな魔術師か知っているでしょう？」

「ちゃんと見届けたら何もせずすぐに帰ってきますよ。」

王季は儂く笑つてそう言った。

「……俺たちじゃそこまで付き合えないからな。せいぜい、人間らしい死に方を出来るようにがんばつて帰つてこいよ。」

そう言つてロイドは夢中で踊っているサイネリアを引っ張つて行くとしたが、彼女はそれを不快の思つたのか彼を蹴り飛ばした。

「あなた方が羨ましいですよ、私は……。」

「……お前も、か。」

死に場所を求めている、サイネリアは王季を見てロイドを踏み潰しながらそう思った。

そして、今に至るのである。

「ジャンキー……そうですか、死に場所を見つけましたか。」  
魔獣の頭部を切り刻んで現れた男を遠くから見届けて、王季は目から流れる滴を指で静かに拭いた。



「ぱらりらぱらりらー！！！！」  
意味不明なことを言いながらそのジャンキーは両手の剣を振り下ろした。

「『アキレスの盾』よっ！！」

ガキン、と俺の前に現れた円形の障壁がその一撃を阻んだ。  
だが、どんな力で叩き付けたのか、攻撃したはずの剣が二本とも折れてしまっていた。

「うりゃあ、あはははははははははは！！！！」

しかし折れた剣を二本ともお構いなくそのジャンキーは障壁に何度も何度も何度も狂ったように叩き付ける。

俺は、正直言いたくないがビビッて一旦距離を取ろうと防護の魔術を使ったのだ。

と言うかこんな狂人を前にして引かない奴がいるなら俺の前に連れてきてほしいくらいだ。そいつに戦ってもらおうから。

そして、ジャンキーはバカみたいな腕力で『アキレスの盾』を突破して、根元から折れて完全に使い物にならなくなった二本の剣を俺に向けて振り下ろしてきた。

普通に反応するのも難しい早さだったが、正面に捉えている現状でそれはなかった。

「うっははははは、死ね死ね死ねええええ！！！！」

「こいつ……幻覚でも見てんのか？」



しかしそいつは無いはずの刃で俺に斬りかかる。狂ってまで染み付いた修練が仇となったのか、剣の間合いで斬りかかっているのが完全に空振りしている。

「いつひひひひひひ、相変わらず、うふふふふ、丈夫だなああああひゃひゃひゃひゃ!!」

こいつは、俺なんて見ていなかった。

偶々どこかの誰かと俺と勝手に重なわせて敵だと思い込んでいるのだ。

「なんでだよ・・・何でそこまでして戦うんだよ・・・」

こんな急な状況で、情なんて沸くはずも無い。

ただ、俺はここまで狂いながら何のために戦っているのか、俺には分からなかった。

352

「むかしからあ、あひあひ、こうして愛を語り合ってきたじゃねえかかか!!!!」

きつとこいつは俺の知らない誰かと剣戟を演じているのだろう。

最近剣の使い方エクレスシアに教えてもらってきているから分かる。こいつは多分達人だ。この剣戟は、素人に出せる太刀筋じゃない。

「さあ、もつと、内面を曝け出そうぜ!! はずかしー!!!!」  
ジャンキーが両手を広げて口から血を吐き出しながら咆哮する。

すると、ぐにゃり、と周囲の空間が捻じ曲がった。

「な・・・に!?!」

青と黒のマーブルが俺の視界を覆った。

周囲にはそんな奇妙な光景以外に何も見えず、誰もいない。

目の前に立っているイカレた男以外は。

「あ? なんだこれ、折れてんじゃねーかぎやははははは!!!  
おい、リー!!! リー!!! 俺の武器はどこだ!!! お前がいないと俺は踊れないじゃないか!!! ふひっひひっひひひひひひ!!!」  
漸くジャンキーは両手の剣が折れていることに気づいたのか、柄だけとなったそれを投げ捨てる。

「ああ、そうそう、これこれ。」

ありがとうな、リー。やっぱりお前がいないと俺はダメだ。」

そして、そのジャンキーは勝手に独り言を言いながら両手に青龍刀と槍をいつの間にか持っていたその感触を確かめるように振るった。

いつの間にか血まみれで顔も見れたもんじゃなかったジャンキーも、アジア系の黒髪を持っていることに気づけた。

そして、特徴的なのは熊っぽい毛皮のコートを纏っていることである。足元までコート裾は延びていて動きにくそうである。

「ッ!?!」

俺の背中に怖気が走った。

試しに振っただけなのに、俺は斬られたと思ってしまった。

技量が卓越している証拠であった。

「魔導書、俺の技量じゃ無理だ、サポート頼む。」

『了承』 記録されている戦闘経験を反映、適格化します。

それだけで俺は別人のように剣を扱える。

「昨日のことは何ですかああああああああああ！」  
奇声を発しながらジャンキーが斬りかかってくる。

ジャンキーの左手の槍で薙ぎ払いを繰り返してきたのを俺は左手に持ち替えた魔剣で受け流す。

そのまま踏み込んで槍の間合いを捨てて青龍刀で斬り込んで来たのを俺は最小限の動きで迎撃する。

「いーいーひゃひゃひゃひゃひゃ！ー！ エンジン掛かってきたねええええええええ！ー！」

そして、ジャンキーは流れるように自然な動きで槍の柄を短く持つて青龍刀と合わせて鬼のような突きと斬撃を次々と繰り返してきた。

俺は槍だけの間合いに入らないように絶妙にバックステップで足元を調整し、間合いを計りながらその連撃をいなしかわし、避けてい

く。  
到底俺の技量ではそんな芸当不可能だが、魔導書のサポートにより別の誰かの戦闘経験が俺に反映されてまるで達人のように振舞うことが出来るのだ。

それはまだ人間の常識の範疇にあるからか、水増しされる俺の技量の割りには効果は見ての通り劇的である。ぶっちゃけ、反則である。その“誰か”は誰だか知らないが、剣術だけなら試しに挑んできたエクレスシアを軽くあしらえるほど強い。

絶対どこかの英雄か達人だろうが、魔導書に誰だか聞いてもそれは記録されていないとの事だ。正直気になる。

「ああん？ 誰だお前？」

ふと、その挙動の変化にジャンキーは疑問を覚えたのか、狂っていたように笑っていたのに急に目を細めて俺を凝視した。

すると、その直後、俺の頭を満たしていた無数の経験が霧散した。

「んな！？」

『報告』 戦闘経験をキャンセルされました。高度な精神干渉が行われている可能性が高いです。

「精神干渉！？」

「ああ、ああ、なんだびっくりした、やっぱりお前じゃないか、ぎ



「いつツ!？」

だが、会話に気を取られた一瞬に俺は肩に一撃を貰ってしまった。  
咄嗟に後ろに飛んだが、その痛みは確かに本物であった。

「幻覚じゃなかったのかよ!？」

『あなたが斬られたと思っただら幻覚でもそれは現実となります!!  
今解説しますから、何とか持ちこたえてください!!!』

「そんなのありかよ!？」

『幻覚でも人は死ぬるよ。人間って思い込み激しいらしいじゃないか。思い込んだだけで妊娠できるんだって? 単一固体で繁殖できるんだから、人間もあそこまで増えるわけだよ。』

「ちげーよ!!」

エクレシアはともかくクラウンの奴は平常運転のようであんまり安心したよ  
!!

『それより、助けてあげようか?』

「ってか、なんとか出来るならしてくれよ!!!」

『何だか物々しい雰囲気だからね、魔族は決闘を邪魔しちゃいけない掟があるんだよ。何だか宿敵がどうのこうの叫んでたらしいじゃないか、誰も空気読んで加勢してないのはその所為だ。』

「妙なところで律儀な連中だな!!」

何だか知らないが勝手に巻き込まれている俺はいい迷惑だ。

「あああああうあああ!!!」

するとその時、ジャンキーが急に呂律が回らなくなって、足元がふらふらし始めた。

「リー！！　リー！！　どこだ！！　お前が居ないと俺は踊れないんだよ！！」

その直後、目の前がぐちゃぐちゃになった。

無数の毒蛾が視界を埋め尽くす。

「うああああ！！！！」

そして、俺の体には蛆虫や芋虫やとにかく生理的嫌悪を抱くようなものが大挙してまとわり付いていた。

『どうしましたか！！　しづほんも、もんv d d、。．．．おggあ：ん・な！！』

エクレシアの声に何か別の音が混じって聞き取れない。

幻覚の次は幻聴かよ！！

『推測』　恐らく、自分の見ている光景を投射しているのでしよう。マスターが見ている光景は幻覚でも、その中では彼が現実です。

魔導書は頭の知識にある文字を使うので幻聴の影響は受けないようだった。

「あいつはこんな光景を見てんのかよ！？」

俺まで狂ってしまいそうなくらいおぞましい現実が、彼の中にはあ

る。

俺はそれを理解することなんて出来やしない。

「…………ふう。」

すると、首筋に注射器を打っているジャンキーの姿が見えた。

俺にまわり付いていた蛆虫や視界を覆っていた毒蛾も消え、正常な幻覚の世界へ帰ってきたようだった。

正常な幻覚って何だよ。

そして有るはずもない注射器で持っても居ない麻薬を注入していたジャンキーは、やっぱりどこか焦点のあっていない視線を俺に向けてくる。

「もっとイチャイチャ殺しあおうぜえ、ぎひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ  
やひゃ……………」

「エクレシア！！ クラウンでもいい！！ 一生のお願いだからこいつ何とかしてくれ！！ ホントこいつマジでイカレてやがる！！」  
もうこいつ嫌だ。

俺がそう思った時、ぶわっ、とこの世界に光が戻った。



「はッ……」  
気づくと、俺は百人以上の魔族に一定の距離を保って囲まれながらあのジャンキー野郎と対峙していた。

「もう大丈夫なはずですが？」

「あ、ああ……」

後ろに居るだろうエクレスシアに声を掛けられ、俺は頷いていた。

「おれの、いひゃひゃひゃ、しゅく、てき、きひひひ、あはははは……!!」

「同業者かと思ったけど、違うわね。あれは薬を使ってリミッターを外してるだけ。それに酷似した加護を得るための魔術でしょうね。」

サイリスも憐れな物を見るような目でジャンキーを見ていた。

彼はまた見えない誰かと戦っている。もはや彼は血まみれの姿で見ても無残な姿でしかなく、幻覚で見た立派な武器も服装もなかった。

「あれが、魔術なのかよ!？」

「何を驚いているんだい。似たようなことを君はやっただろう。彼の場合極端に特化しているだけだよ。」

クラウンの言葉に愕然としている俺が居た。

確かに軽い幻覚を起こす香炉で魔力の知覚を促した。

しかし、これは度が過ぎていくというレベルじゃない。

「幻覚に何か特徴はありませんでしたか？」

「そう言えば、毛皮のコートとか着て、青龍刀と槍を持っていたな。」

格好だけでも分かることは多いらしく、エクレシアの質問に俺はジヤンキーをいなしながら答えた。

「毛皮のコート？ それが熊か狼のものなら十中八九彼はベルセルクでしょうね。英語読みでバーサーカー。日本でも有名な単語ですよ。」

北欧の戦神オーディンの加護を受けて狂気に身を墮とし、鬼のような戦闘力を発揮すると言います。ですが、彼は……」

「もう死に体ね、完璧に手遅れ。人間の耐久力なら、生きてるのがおかしいくらいよ。あんな状態じゃ万全の戦闘力なんて発揮できやしないわ。」

エクレシアの言葉をサイリスが引き継いでそう言った。

「くひゃひゃひゃ、しゅくてき、おれのしゅくてきひゃはははは、おれが、ひひひ、にくくないのかあははは！！ おまえをころした、俺がひゃはははは！！ いひひいひ、あひゃひゃひゃ！！」

ジヤンキーは、そう言って最後に俺に手を伸ばして、力尽きたように地面に倒れた。

地面に倒れる寸前に、血を吐いていた。明らかに、致死量の。

「……」

そんな無残な末路に、俺は何て言葉に表せばいいのか分からなかった。

「失礼、ご迷惑を掛けました。」

「ッ!？」

フツと倒れたジャンキーの横に、地味なチャイナドレスを纏った女がいた。黒髪だが、日本人ではないだろう。アジア系の顔をしている。

「我が名は王李<sup>ワン・リー</sup>。『盟主』直属の“処刑人”です。」

「わお、大物だね。ここで最精鋭の人殺しどもだ。」  
クラウンも驚いたようにそう言った。

『盟主』ってたしかこの一番偉い魔術師だっけ、そいつの直属って事は、かなりヤバイ連中だって事かよ。  
名前からして、処刑人だもんな。

「王李<sup>ワン・リー</sup>ですか。」

中国人らしい個性の無い名前ですね。分かりやすい呪術対策だ。  
ぼそりとエクレシアが呟いたのが聞こえた。

「そんな大物が何でこんなところにいるのかな、ここは魔族の領域だよ。」

「彼の死体を回収したら、すぐにでも帰りますよ。彼の体には機密がたくさんありますから。そう説明すれば、『盟主』も納得してくださる。」

「なんだ、つまんない。」

ちゃんと言い訳も考えているようである。完璧に悪いのはあつちだが、一番偉い奴に話が行くなら流石のクラウンもお手上げの様子だった。

「それより教えるよ、どうしてそいつを助けなかったんだ？」

「どうして襲ってきた、ではないのですか？」

「死んだ奴のことはどうだっていい。どうしてお前は助けなかった。」

俺がそういうと、王季は目を瞑ってこう答えた。

「もう戦えなくなる彼が不憫でした。」

せめて最後は、思う存分死ぬまで戦って戦場で死んで欲しかった。」

「イカしてるよ、お前も、こいつもな。」

「あなたに何が分かるのですか。まともな死に場所さえ選べない、楽な死に方なんて絶対に出来ない私たちの気持ちだ。」

目を見れば分かりますよ。あなたはずっと安寧に浸っていたような人間ですね。」

そして一人で生きている気になっている。笑わせないで欲しい。」

王季はそう吐き捨てて、振り返ってジャンキーの体を持って去っていった。

「リー……。」

去っていく、はずだった。

「ジャンキー……まだ、息が……。」

彼が、王季の足を掴んでいたのだ。

いったい如何なる執念か、もう生きているかどうかも危うい状態にいるジャンキーが、王季の足を掴んで彼女の顔を見上げていたのだ。

「お前がいないと、俺は踊れないんだよ。リーー！！ 武器を！！

魔術を！！ 俺たち、二人で一人の“処刑人”だろう！！」

「ああ……。」

血反吐を吐きながら叫ぶジャンキーの言葉に、王季は震えて彼の手を取った。

「ごめんなさい、私もあなたのことを何にも分かっていなかった。

……共に踊りましょう、ジャンキー。」

「そうだ、それでこそ俺たちだ！！ “笑う剣舞”と恐れられ、敵を皆殺しにしてきた俺たちだ！！！」

「ええ、踊りましょう、殺しましょう。心逝くままに。」

俺は、そんな二人のやり取りに思わず後退ってしまった。

「我が肉体に流れるは水銀の血なり。黄金の血は不死へ至る秘薬なり。」

王季の詠唱は淡々としていて、呪文の最中に彼女の手首や首筋から、何か銀色の何かが流れ出て、それがジャンキーの手首や首に流れ込んでいく。

そして、ふわりと浮かび上がったジャンキーの体と背中合わせになるように位置し、お互いの腕と腕を絡ませると、そこから更に腕が出てきたのだ。

そうやって現れ合計六本となった腕に、足元から長柄の武器が六本召還された。

阿修羅というには顔が一つ足りないが、それは確かに神へ挑む御業に違いなかった。

「煉丹術！？ それだけじゃない、仙道も！？」

サイリスが何を言っているのかは分からなかったが、瀕死の人間が再び立ち上がり、阿修羅のようになって立ち上がってきたのは、悪夢以外の何物でもなかった。

「ぎゃはははははは！！ これだ、これだよ！！ あひゃひゃひゃひゃ！！ 俺たちは、二人で一つだ！！ いひゃひゃひゃひゃひゃ！！！！」  
血反吐を吐いて立つことすらままならなかったジャンキーが、狂ったように笑い声を挙げる。死ぬほど、楽しそうに。

「すみません、もう一つ迷惑を掛けることになると思いますが、彼の為に死んでくれませんか？」

丁寧な口調で、狂気じみたことを言う王季は、多分もうこのジャンキーと同じなのだろう。なにせ、繋がっているんだから。心まで繋がっているに違いない。

「さあ！！ 踊ろっぜ、リー！！ 皆々殺しだあぜええ、宿敵いいー！！」

「ええ、観客もろとも殺しましょう。」

そして、共に舞台の幕を下ろしましょうか。ジャンキー。」

お互いの肩に顔を乗せて語り合う二人は愛でも語合っていた方が様になるのに、とても純粹で純真な殺意という悪意にて染まっていたのだ。

羨ましいくらいに、純愛に似ているのだそれは。

彼らは、もうどうしようもなく狂っている。

## 第十七話 狂戦士

「さあ、開幕だ！！ いひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！！！」

「踊りましょう。」

背中合わせのジャンキーと王季が地面を蹴った。

動脈のように脈打って二人の手首と首筋に水銀が繋がっている二人が、両腕と第五と第六の腕に長柄の武器を持って回り始めた。

本当に踊っているように見えるが、その回転速度は徐々に二人がどちらか判別するのも難しくなるほど高速で回転している。

「・・・これは、まずそうだね。」

クラウンは魔族たちに下がるように手で命じた。

しかしその瞬間、高速回転する二人の武器の軌跡から生じる瑠璃色の鋭利な刃が無数に飛来してきたのだ。

剣などの刃物を使う魔術師の基本的な攻撃方法である、所謂、斬撃である。

「うおッ!?!」



嵐のように次々と飛来する斬撃に、俺は咄嗟に『アキレスの盾』を展開して防いだ。

シュンシュンシュンシュンシュンシュンシュンシュン      ツ!!!

飛来する無数の斬撃に周囲を取り囲んでいた魔族もなぎ倒された。

「お前たちは可能ならば負傷者を連れて退避しろ、あの人間二人に近づくな。」  
クラウンの怒声が飛んだ。

「うぐぐぐぐ!?!?」  
俺にも飛来する無数の斬撃は、普通に斬られたのと同等の衝撃として『アキレスの盾』に押し掛かる。  
この障壁は本来そう簡単に破られるような耐久力ではないが、俺の技量では本来の効力の半分以下も発揮できない。

「いいいいいいいい、つやあああああああ!!!」  
斬撃の嵐が止んだと思ったら、二人は同時に跳躍して俺の目の前に降り立った。

「斬り斬り切り切りきり切り切りきりギーリギーリひゃひゃひゃ  
!!!」  
ジャンキーの奇声が響く。

「人生は危うい綱渡り、足が縄に絡まり死ぬまで宙釣り谷底へ。」  
狂人の言葉に意味不明な合いの手を王李が返した。

そして、高速で回りながら槍や蛇矛、薙刀、バルディッシュ、青龍  
偃月刀、戟、古今東西の長柄武器が斬撃と刺突を次々と竜巻のよう  
に繰り出してくる。

「くそッ!？」

『アキレスの盾』は三秒も持たず削られるように破壊された。

それを犠牲にして俺は後ろに跳んで追撃を避けようとしたが、回転  
しているはずの二人の速さは恐ろしいほど速かった。

「回転三角木馬へご招待!？ ひいーひやひやひやひや!?!」

「八つ裂き股裂き、五体バラバラ。」

ジャンキーの奇声に奇妙な王李の合いの手が加わり、混沌さと残酷  
さが増した死の旋風は縦横無尽の斬撃と刺突を使い分け、単純に回  
っているように見えてまるで隙が無い。

なんて殺意に満ちた円舞なのだろうか。

俺も黙ってやられるわけにはいかない。

慎重に受ける攻撃を選んで何とか後退していく。

反撃を許さない猛攻は斬り殺しに来ているより、むしろ削り殺そう  
としているようにすら思えるほどである。

「俺が丹精こめて人助け、いひやひやひやひや!!!」  
「今日は槍の雨が降る、みんなみんな死んじゃった。」  
「シユン、といきなり何かの武器で足払いを掛けられた。」

「うあッ!?!」  
完全に直線的な攻撃ばかりしていたから、もの見事に引っかかってしまった。

「させますか!!!」  
切り刻まれると思った瞬間、天から落雷が二人目掛けて落ちてきた。  
二人はあっさりと背中と背中を離して左右に分かれてしまい、落雷は空振りに終わった。

「いかに『盟主』の部下であると言えども、こんな非道が許せるものか!!!」  
エクレシアが激怒しながらそう言った。  
周囲は嵐のような斬撃で草原は土が掘り返され、負傷した魔族が無数に居り、攻撃を受けないように伏せている。  
中には致命傷を受けたらしい者もいるようだ。

「惨たらしい殺戮、それが貴方達の望みか!?!」  
エクレシアはそう言って、円舞を演じ始めた二人にそう言った。

「ぎゃはははははははは！！ 今日神様に会ったんだ！！ いったひひひひ！！」

「神は言いました、血が見たいと。真つ赤な雨を降らしましょう。まるで凄惨な戯曲の脚本を読み上げるように二人はそう言った。

それが、答えだった。

「……せめて、神の絶対公平の裁きに掛けられることを救いに思いなさい。」

彼女は俺の横に並んで二人を見据えて剣を構えた。

「あはは！！ そうだよ、こんな強い人間と一度で良いから戦ってみたかったんだ。僕も魔族だからね、強い奴と戦いたいのだ。メイ！！ 援護しよう！！」

後ろから楽しそうなクラウンの声も聞こえる。

「ああ、頼んだぜ。」

俺は魔剣を杖に立ち上がりながら、そう言った。

「あーはははははははははは！！ 楽しいなあ、リー！！ もっと踊ろう、もっと殺そう。もっと回ってもっとと狂狂と、夜明けまで踊り明かそうぜ！！ あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！！！」

「では、パートを変えましょうか。」

「いひゃひゃひゃひゃ！！ 賛成さんせーい、だいさんせー！！ うひひひひひ！！」

二人がそう言うと、今度は完全に一人が左右二手に跳び出したのである。

「ベルセルクは我が教会が社会的に駆逐した経歴があります。相性的に彼は私の方が有利です!!」

「じゃあ俺は女の方が!!」

「そうじゃねーだろ、俺の、しゅーくーてきー!!! いひゃひゃひゃー!!!」

大きく跳躍してジャンキーが俺に飛び掛って強襲を仕掛けてきた。

その手には十字槍と青龍偃月刀が握られている。どちらも長柄の武器だ。

「今度は俺がパートナーだぜ!!! 逝つちまうまでダンスダンス、シャルウィーダンス!!! きーひひひひひひひひ!!!」

「こつちに寄るんじゃねえよイカレ野郎!!!」

俺は魔剣から雷撃を発してジャンキーにぶち当てた。

流石に空中で、しかも光速の雷撃をかわせるはずもなく、ジャンキーに雷撃は直撃した。

「うっひょー!!! 肩こり直っちゃうぜべいべー!!! ぎゃははははは!!!」

しかし、全く無傷で二本の武器を振り下ろしてきた。

だが、流石に目くらましにはなっただけ、その隙を突いて俺はジャンキーを叩き斬った。

「いたくなーいでちゅよー。あつかんべー!! ひゃひゃはははははは!!」

手応えがあつたはずなのに、強引に柄でぶん殴られて俺は吹き飛ばされた。

「何で効かねんだよ!?!」

何とか地面に転ばずに体勢を立て直して、俺は魔剣を構えなおす。

「ベルセルクには、武器が効かないと言う伝承があります。

全く効果が無いにしろ、かなりの耐性があるはずですよ。」  
俺に追撃させまいとエクレスシアはフォローしようとジャンキーに斬りかかるが、脳天に彼女の剣が叩きつけられても平然としてやがる、あの野郎。

つていうか、俺に反応してエクレスシアには無反応だった。

まさか、あいつは俺以外見えてないのか……?

「雷撃も効かなかったぞ!?!」

「邪魔をしちやいけませんよ?」

「その雷も武器の延長ならば、それは耐性に引っかかる。そう言った属性を、魔術師は“概念”と呼ぶんですよ!?!」

背後から戟とバルディッシュを持った王季に襲われ、対応せざるを得ない状況ながらエクレスシアはそう言った。

「そんなの反則じゃねえか!?!」

自分のことを棚に上げていると気づいたのはずっと後である。後が在れば。

「じゃあ武器以外の魔術で攻撃すれば良いって話じゃないか。」

そしてその直後、地面が競り上がって鋭利な槍のようになってジャンキーを襲う。

クラウンの援護だ。

「ん、なんだあ？」

何の前触れも無く現れた大地の槍を飛び越えるようにジャンキーは躲した。

だが、・・・なるほど、そういうことらしい。

そして、再び空中にいる一瞬に、空気が一瞬だけ白くなって軌跡を描いた。

ザシユ、とジャンキーの腹から血飛沫が流れた。

「ち、あの態勢で躲すとか、ふざけてるね。」

クラウンの放った空気の刃の一閃も最小限で躲しやがったようだ。いったいどういう感性してたらあんな見えないもの躲せるんだよ！！

「おい、リー！！」

「ええ。」

煩わしそうなジャンキーの声に、それだけで何が言いたいのか感じ取ったらしい王李がエクレスシアと斬り合いを演じているにも関わら





ええ！！！！」

「一人でやつてるよ！！！」

両手の長柄抜きをドラムの撥みたいにガンガンと振り下ろしながらジャンキーは言う。

俺は魔剣を頭上に構えて何とか耐えるしかない。

「（魔導書！！ こいつに有効な魔術は無いか！！）」

『回答』 ギリシア魔術屈指の活用性を誇る呪術攻撃『ヘカテーの松明』を推奨します。ギリシア魔術で強力な呪術と言えば大抵がヘカテーの魔術と同系統の黒魔術です。

「（松明！？ 松明なら、武器じゃないな！！ それだ、それ！！）」  
「  
確か行軍用に携帯用松明を買っておいたはずだ。

しかしそれを取り出す暇をくれるほどこの狂人は優しい相手ではない。

「隙だらけですね。」  
そして、次の瞬間、俺の全身に鎖鎌の分銅が飛んできて地面に引きずり倒された。

「あぐあッ！！」

いつの間にか背後に回っていた王李が鎖鎌を持って微笑んでいた。

こいつ、ずっと前の方に居たのに、瞬間移動でもしやがったのか！？

「ひやははははは！！！ 回せ廻せ舞わせ！！！」

「それ、ぐるぐる。」

そのまま鎖を振り回され、ぐるぐると俺は宙を回転する。

そして、このままでは一本足打法みたいな感じ青龍偃月刀を構えているジャンキーが待ち構えている方向にぶん投げられるのは目に見えている。

「舐めるなよ、人間！！」

だが、クラウンの放った炎の一閃が俺の鎖を断ち切ると、俺はそのままあらぬ方向へ吹っ飛んで行ってしまった。

「……立ち直りが早い、優秀な精霊魔術の使い手はこれだから厄介だ。」

気だるそうな王季が呟いた。

後で聞いた話だが、精霊魔術は環境の変化に非常に弱いらしく、草原に満ちる精霊を先ほどの火炎弾で散らされてしまったのである。

自身が大きく移動しても精霊は付いてくるものではないので、防戦向きの魔術なのだ。

そこで熱気で生じた火属性の精霊を使うクラウンの機転は中々出来ないことらしい。

基本的に魔術の性能が万全に発揮できるのは、ちゃんと準備をすることを前提とされているのだから。ふざけた奴だが実力は本物だから性質が悪い。

「私も、聖堂騎士を舐めてもらっては困る!!!」  
エクレシアもあの程度でくたばるとは思っていなかったから、別にこのタイミングで王李に斬りかかったのは別に不思議ではない。

「サイリス、お前も手伝えよ!!　ああもう、やっぱり火は効き難いなあ!!」

オマケにもう一発爆発を発生させて二人を攻撃したクラウンは、ちやっかり彼の後ろで魔方阵を張って身を守りながら伏せているサイリスに怒鳴った。

「そりゃあ、火を使った魔術なんて普遍的すぎてどんな魔術師だって対策はしてるし、直接火をぶつけたところで効果は薄いわよ。それに槍についている飾りや彫刻とかの装飾は護符やアミュレットとして機能している、槍系の武器がやたら華美な物が有るのはそういう理由があつたりするのよ。

ああ見えて攻守一体の武器だもの。あいつら戦闘バカに見えてかなり構成を考えて戦ってる。普通の魔族なら百人束になっても勝てないわよ。」

サイリスの言うとおり、連中の持っている長柄の武器には一つ残らず何かしらのや彫刻などで装飾が施されている。あれが魔術的な攻撃を効きにくくしているようだ。

飾り房とか、何の為に付いているのかと思っていたがそういう意味があつたのか。

「だから君も手伝えて言ってるんだよ、面倒だね。武器で傷つけられない奴がいるんだから君も少しくらいバックアップしろって。」

「私、攻撃用の呪術なんてそこまで強力なのは無いわよ。戦闘に向いてないし。」

自虐的な言い方だったが、事実であった。

「それに狙うなら女の方が良いわよ、あれは煉丹術で男の方の体内の毒素を女の方が自分の体内で昇華しているのね。そういう器官が煉丹術の使い手にはあるから。」

だからヤバイ薬使ってもある程度は平気みただけど、今なら死活問題のはずよ。

さつき水銀で体内の毒素をやり取りしていたし、今のうちにそんな長時間は離れられないはず。もしくは女をどうにか引き離せばどうにでもなるはずよ。」

「はず、はず、はず、そればかり。断言しろよ。」

「だって〜、確証は無いもの。」

情けない声をあげるサイリスに、クラウンは溜息を吐いた。

「確かにそうだろうけれど、多分無理だよ。」

「は？」

「お前、分かってないな。あんな連中、どうやったって引き離せるかよ。」

「これだから夢魔のくせに処女はダメなんだよ。」

「はあ！？ それは関係ないでしょ！！」

この時ばかりは俺とクラウンも妙に息が合ってしまった。

そして俺も漸く鎖を全部取り外すことに成功した。何気に嚴重で苦労した。

「くッ、強い。」  
流石にクラウンの援護を受けてもエクレシアだけでは押し切れない  
ようだった。

「どうする、バカみたいな連中だが、連携の完成度はヤバイぞ。」  
「連携というよりは、ベルセルクの攻撃力と突破力を生かすよう、  
彼女が立ち回っているだけです。彼の行動には合理性が感じられ  
ない。」

「・・・エクレシアの言つとおりだろう。」

連携がすごいと言つより、王季のサポートが的確すぎるのだ。

「やっぱり女を先に潰さなきゃ無理だろうね。こっちは連携でき  
ると言うより防戦一方だから何とかできているって感じだし。」  
経験の差だろうね、とクラウンは言った。

実際俺たちは連携なんて組んだことも無いのだから当然ではあるが。

「サイリス、僕の盾になるか援護するかどちらか選べよ。」

「・・・うう、分かったわよ・・・。」

「じゃあ、僕らは何とか合わせるから、何とか頑張つてよ。」

「了解。」

「はい。」

現状そうするのが一番だろうから、俺もエクレシアもクラウンの言  
葉に頷いた。



「しゅーくーてーきーよー、そーろそろ、閉幕にしよっぜー…！  
わはははははははははは…！！ ぎやはははははははははは…！ いひゃひゃ  
ひゃ…！！」

ゆらゆらとゆっくりとした足取りでジャンキーが歩いてくる。  
どういうわけか、無手である。  
今までずっと武器にこだわっていたのに。

「いい加減にしるよなお前。」  
俺は、腰のベルトにあるホルダーの中に入っている松明をいつでも  
取り出せる位置に挿してそう言った。

「お前の剣、業物だなあ！！ ひゃひゃひゃひゃ！！  
じゃ、俺のもとっておきのを披露させてやるよあひゃひゃひゃひゃひゃ  
…！！」

そう喉元を大きく晒しながら笑い声を上げるジャンキーの手には、  
いつの間にか剣が握られていた。

いや、それを剣と称して良いのだろうか。  
持ち手の柄だけしか存在していなかったのだから。

それにしても無駄に意匠の凝らされた柄だった。刀身と柄の間にあ  
る剣格にはライオンとヤギ、グリップエンドに蛇の彫刻が彫られて

いる。そこに刀身さえあれば、さぞかし名剣だったことだろう。

また頭がおかしくなって、いや、おかしい頭が幻覚でも見ているの  
だろうか。

俺は、最初はそう思っていた。

「さあ、叫びを上げろ！！」

魔剣『キマイラヘッド』！！

！！

その柄だけの剣を頭上に上げたジャンキーが叫んだ。

なんと、次の瞬間、虚空から突如として無数の刃物といった武器が、  
百や二百ではきかない数が次々とその柄だけの剣の刀身となろうと  
ガンガンと集結していったのだ！！！！

日本刀は勿論、中国刀やサーベル、シミター、ファルシオン、グラ  
ディウス、グレートソード、クレイモア。刀剣だけでなく、トマホ  
ークや薙刀、バルディッシュに青龍偃月刀、トライデント、ハルバ  
ードなどの長柄の武器。刃が付いているなら矢や鎖鎌、果ては包丁  
や鋏にメスや、もう武器なんて関係が無い。

とにかく古今東西のありとあらゆる刃物が無数に連なり、塊のよう  
になって巨大な蛇のように蠢いているのだ！！

「……………はあ！？」



なんだよ、あれは。

不恰好な武器の集合体みたいなそれは、もはや剣とかそういうレベルではない。

それを一番近い言葉で表すなら、武器だけを寄せ集めて作った釘バツドみたいだ。

「・・・魔剣!？」

「あれのどこが剣なんだよ!！」

驚愕するエクレシアに突っ込む暇なんて無かった。

「死いいいいい、ねえええええええつ!!!!!」

そして、そんな馬鹿げた代物を振り下ろしてきたのだ。

しかし、そんな巨大な物体は振り下ろされる最中に空中分解を引き起こし、バラバラに崩れて無数の刃の雨となって落ちてきたのだ。

「くそツ!!!」

「ひゃあああーあーあーあーあははははははあは!!!」

武器が豪雨のように降る中、ジャンキーは十振り近く残った武器の塊を振りかぶって強襲を仕掛けてきた。

武器耐性のある奴は当然そんな刃物の豪雨なぞ気にすることなく、巨人の腕を思わせるような武器の固まりを携えて、正面から突っ切ってきた。

「くそッ、 あぐあ！！！」

『アキレスの盾』で武器の豪雨を防ぐ。正面に武器がじゃらじゃらと積み重なるが、それも一緒に巨大な武器の塊でぶん殴られた。

防壁なんてまるで機能していないような一撃だった。

全身に剥き出しの刃物の刃が食い込む。

「あああああああ！！！！」

そのまま地面に叩き付けられれば、更に刃が深く突き刺さって俺は悲鳴を挙げることしか出来ない。

武器の塊が離れば、追撃のように上空から刃物の豪雨が襲来する。

「メイさんッ！！」

「彼の邪魔をするな。」

助けに行こうとしたエクレシアが、突如として彼女の前に現れた王李が両手にグラデュウスと中国刀を携えて現れたのである。

「縮地か！？」

エクレシアが対応して剣を振った頃には間合いの外から槍の一撃が彼女を見舞った。

「ぐッ！！」

槍で腹を一突きされても怯まずエクレシアは王李に向かうが、イタチごっこなのは目に見えていた。

「邪魔だあ!!!」  
竜巻のような防壁を張って刃物の豪雨から身を守ったクラウンは、それをそのまま利用して一気に解き放ち、まだ振り終わっていない刃物を吹き飛ばした。

「ひーん、もういやー!!!」  
やっぱり魔方陣の防護の中で伏せていたサイリスは大量の刃物で埋まっていた。

「くそ、いてえ!!!」  
目の前に迫っていた分は何とか転がって躲し、残りはクラウンが吹き飛ばしてくれたから何とか耐えたが、不思議なことにジャンキーの追撃がなかった。

まだ動ける。  
服は血だらけだが、致命傷は運良く避けられたようだ。  
これくらいならまだいける。

「ぎゃはははは!!! 来いよ来いよ!!! ひゃははははははははは!!!」  
ジャンキーが武器の塊を頭上に掲げる。

すると、飛び散った無数の刃物がそこに吸い寄せられるように飛んでいく。



いかな大量の武器と言えども、『アイギス』の防壁を突破することは出来なかった。  
だが、今度はいつまで経っても大量の武器の塊は『アイギス』の防壁に張り付いたまま動かない。

「こいつ、まさか!?!」  
がながんがんと無数の武器が集約される音が周りから聞こえる。  
あの大量の武器が俺の周囲に一気に集まってきているのだ。

そうなったら、この『アイギス』の効果が切れると同時に、アイアンメイデンのように串刺しにされ、その質量から圧死することだろう。

勝利を確信しただろう、ジャンキーの哄笑が聞こえる。

今度こそマズイと俺は絶望しかけた、その時である。

「『地獄の26の軍団を統べる偉大なる君主、セーレよ!!  
我が召喚に応え、我が願いを聞き届けたまえ!!!!』」

あの武器を、全部向こうに飛ばしてええええ!!!!」  
悲鳴のようなサイリスの詠唱が聞こえた。

その次の瞬間、本当に一瞬で俺の周囲を埋め尽くしていた武器や刃物が消えうせ、かなり離れたところにどっさりと塊で落下したのである。

思わず振り返れば、半透明のペガサスみたいな馬に乗った男が消え  
うせる瞬間を目撃できた。その足元には、手の平に短剣を突き刺し  
て血を流して魔術を発動させたサイリスが居た。

そこからは、多分考えて行動はしていなかったと思う。

あの武器の集約はあのジャンキーの持っていた柄のような魔剣を基  
点にしている。

つまり、あいつが近くに居なければ大量の武器で押しつぶすなんて  
ことは出来ない筈である、とよくも知りもしないのに思った。

だが、その推論は的中していたらしく、十メートルの距離も無くジ  
ャンキーが居た。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」  
俺は、腰から松明を抜き去り、それをジャンキーに向けて思いつき  
り振りかぶって叩き付けるように向けた。

『追従』 攻撃呪術『ヘカテーの松明』を代理詠唱、術式の  
圧縮による超短縮発動を行います。負荷はキツイですよ。

俺の持つ松明から、爆発的な炎が吹き荒れる。

巨人を焼き殺したと言う伝承の炎は、たとえ多少の防護などあろう  
とも諸共焼き尽くしてしまうだろう。

ジャンキーは、笑っていた。  
まるで熊が叫び声を挙げるように、両手を挙げて咆哮するようだ。

「ッ！！！！！！！！」

それは、誰かの名前だったと思う。

寸前で、王季がジャンキーの真横に現れて突き飛ばし、身代わりとなって松明の炎を受けたのだ。

俺は、負荷と急激な大量の魔力の消費から疲労感と虚脱感が激増し、立っていられずに膝を突いて、何とかそれ以上は魔剣を杖にして踏みとどまった。  
しかし、それだけだった。

この状態でジャンキーから攻撃を受けたら、恐らく抵抗すらできなかっただろう。  
できなかつただろう、なのだ。それは限りなく事実に近い憶測ではない。

なぜなら、追撃は永遠に来なかったのだから。

「リー……」

呆然と、ジャンキーは立ち尽くしていた。

下半身が丸ごと消え失せた、王季を見下ろして。

「ごめ．．ん．．なさ．．い．．、もう、わたし、おどれ．．な．．

地面を這いながら、王季はジャンキーの足元にまで迫り、膝を突いた彼に手を伸ばした。

しかしそれは彼の胸にまでしか届かなかった。

「あ．．まさか．．あなた、本当は．．」

彼女が何を言いたかったのか、それを聞く術はその直後に永遠に失われた。

ぱたん、と王季は力尽きたように地面に完全に倒れたのだ。

「．．．．．おい。」

ジャンキーは、最後に俺を一瞥し、手に持っていた柄だけの魔剣を俺の足元に投げ捨てた。

「．．．．．おい。」

その意図を確かめる間も無く、彼は王季の懐にあったミセリコルデを手に取り、自身の首に突き刺した。

すぐに刃は彼自身の手で抜かれ、血飛沫が舞った。

彼には恐ろしいほどの武器に対する耐性があったはずなのに。



彼は、残り数分も無い寿命を全うするまでも無く、自ら死に至ったのである。

恐らく、王季が使うはずだったのだろう、致死の負傷に苦しむ仲間を救うための短剣を使って。

「……………」

訳が分からなかった。

こいつは、何がしたかったのか結局は分からなかったのだ。

「メイさん！！ 大丈夫ですか！！」

すぐにエクレシアが駆けつけて、治癒魔術を施してくれる。

俺の体内の魔力が消費されていて希薄故に効き目は悪いが、傷口は大方塞がった。

「ああ……………」

俺は呆けたようにそう返した。

死んだ二人は、お互いの手を重ね合わせてそのまま力尽きていた。

「全盛期の彼らなら、私たちに勝ち目はなかったでしょうね。」

「……………」

死に体の人間とは思えない戦いぶりだった。

多分、あいつがまともだったら、尊敬すらしていたかもしれない。

「……なんだ呆気ない。  
もつと最後までバーンってやってくると思ったのに。」  
俺たちは必死こいて戦ったのに、クラウンはまだまだ余裕そうである。地力が違うのは分かっていたが、あんな凄まじい状況であせりすらしないとか、こいつの精神構造を一度で良いから覗いてみたいものである。

「痛い、痛い、痛い。もういや、帰る、私。」

「あ、助かったぞ、サイリス。」

よろよろと怪我した手を押えて立ち上がるサイリスに、俺は声を掛けておいた。

あのタイミングで彼女の助けがなかったら多分俺は死んでいただろうから。

「セーレじゃなかったら成功しなかったわよ。地獄の君主を呼ぶなんて本当なら全然技量不足なんだから。運が良かったわね、あんた。」

「ああ、埋め合わせはちゃんとする。」

「約束だからね。」

そこだけ凄みのある声でサイリスはそう言った。

悪魔の約束は絶対である。破ったら多分殺されるかもしれない。

俺はこくこくと頷いた。

そして、飛び去って行く彼女を見送ることしかできなかった。

「どじする、こいつらっ。」

「うーん、とりあえず旦那に引き渡すかな。まあ、すぐに焼却だろ  
うけど。」

「そう、か。」

俺は何となく頷いた。

今、俺は何をどうすれば良いのか分からなかったのだ。

そんな時である。

ドカン、と上から爆音が響いて、ガラガラと瓦礫が落ちてきたので  
ある。

見上げれば、“天井”に穴が空いていたのである。

「ジャンキー、王季。兩名死亡確認、と。」

まったくこういう仕事は二度とやりたくないね。」

瓦礫の上には、なんと二人の男女が居た。

「魔法少女サイネリア、参上!!」

「バカやってないでさっさと運ぶぞ、こんなクソ淀んだ空気の場合  
に長居したくない。一秒でも早くクソみたいな仕事を終わらせんぞ。」

一方はどこかで見ることがあるポーズを決めた痛々しいゴスロリの  
装束の女で、もう一方はいかにも根暗そうなローブの男である。

「貴方たちは……“処刑人”ですね。」

「んー？ 人間っぽいのが居るが、これは魔族かね。連中には人間に似た奴が居るって聞くし。どうだろうな。どうでもいいが。」  
エクレシアにそう言われても、本当にどうでも良さそうにそう言っ  
て、その男はジャンキーと王季の死体を瓦礫の上に運び出した。

「おい、そいつらは」

「ああ、こいつら反逆者ね。」

ちようどたったさつき処刑命令がでたの。『盟主』権限で。だから  
殺しにきたんだけど、死んでいた。ラッキー。仕事終了。はい終わ  
り。」

ぱん、と手を叩いて男は説明する気もないのか、それだけ言って踵  
を返した。

「おい、ふざけるなよ！！ お前ら、仲間じゃないのか！！」

「魔族の領域に勝手に侵入した拳句、暴れた連中が仲間なんて始め  
て知ったな。」

「早く帰ろうよ。」

とぼけた態度の男と对象的に、ゴスロリ女はさつきと打って変わっ  
て気だるげでやる気が無さそうだった。

「そうだよ、ふざけないで欲しいな。こっちは被害を被ったんだか  
らね。」

「だから、関係ないんだって。こいつらは反逆者なんだから。それ  
を処理するはずの俺たちが処理する前にあんたたちが倒した、それ  
でいいじゃないか。」

どう見ても自分たちの失態をもみ消す気だ。その為にこの二人を反  
逆者に仕立て上げる気なのだろう。多分上司まで絡んで。

クラウンもその態度と対応にはカチンと来ているようである。

しかしすぐに殴りに行かないと言うことは、彼の天秤ではここで殴るより挑まない方が得策と出ているのだろう。

それにこの様子では、何を言っても無駄なのかもしれない。

「じゃ、こいつらの死体は持って帰るから。」

「・・・じゃあ、一つだけ教える。」

「まあ、事実を知るには勝者の権利だわな。真実とは限らんが。」

「・・・こいつの、宿敵ってのは強かったのか？」

「は？」

何を言っているのか分からない、と言った様子で男は首を傾げた。

「経歴から、こいつが恨みを抱くような対象は居ないな。因縁も有りそうな輩もない。多分、こいつの想像上の人物じゃないのか？」  
懐から取り出した紙の束を捲りながら男はそう言った。

「は？・・・じゃあ。」

「ふん、ヴィクセンの旦那は死に場所を探しているとか言ってたが、これはどちらかと言うと死ぬ理由を探してたってところじゃないかね。」

男は二人の死に様を見下ろしてそう言った。

「どづいうことだよ・・・」

「さて、ね。真意を語る口はもはや無い。

「・・・残り想像で補完するしかないんだろうな。」

男はそう言つて、瓦礫の上に乗った。

すると、ゴスロリの女がそれを蹴り上げると、それが飛び上がるより早くその上に乗つて“天井”に瓦礫が嵌った。文章にするとおかしいが、本当にそうやって上へ消えたのだからしょうがない。

輝だらけの“天井”も、どういう仕組みか勝手に修復されて元通りになった。

「……………訳が分からん。」

今回の一件は、それに尽きた。

何が起つたのかも、誰か俺に説明して欲しい。

「帰りましょう、世の中には、深入りしない方がいいこともある。今回の一件も、そういう事情が絡んでいるのかもしれない。」

「……………そう言うもんかね。」

「ええ、そうでなければ“処刑人”なんて出張ってきません。エクレシアがそう言うのならそうなのだろう。」

この事情は俺よりずっと詳しいのだから。

それでも、なんか納得いかない事態だった。

「もう僕も面倒くさくなつてきた、帰ろうよ。」

「……………ああ、そうだな。」

クラウンも疲れたようにそう言ったので、俺も頷いておいた。

そんな俺にも、一つだけ分かったことがある。

今回の一件の主人公はあの二人で、俺たちはその中心にすら居なかった。

殺し殺されるなんて関係にまで発展しながら、である。普通は主役級のイベントだと言うのに。全くふざけている。

そう、これはきつと、そんなふざけた話なのだろう。

だからきつと深層に辿り着いても、下らない内容に違いない。

俺は、そう納得することにした。

思考を放棄したと言ったって良い、言い訳はしない。

俺は、最後に足元に落ちていた柄だけの魔剣を拾い上げた。

すると、あれだけあった武器の塊が消え失せていることに気が付いた。

『蒐集』 魔剣『キマイラヘッド』を本書に収納しました。

特定個人専用のパーソナルウエポンながらマスターの魔力波長パターンと適合を確認。以後本書の武装として登録、マスターならば自由に使用可能となりますが、マスターの技量では使用はとも推奨できません。

魔導書がそう言うが、俺だってあんな魔剣を自分で使いこなせるとは思えない。

それがどれだけ凄い事だか知るのには後になるが、今はそれを聞いたとしても喜ぶ気には成れなかつただろう。

この後、ゴルゴガンの旦那への説明や負傷者の手当てその他諸々の仕事が続いているのだから。

そうして、酷く疲れたその日は幕を閉じたのである。



## 第十八話 魔術師再び。

「……………疲れた。」

あのジャンキーどもが死んでから二日はたっただろうか。

結果的に想定していた魔獣との戦いより被害は少なかったのだから面倒なことは忘れろとゴルゴガンの旦那にも言われた。

俺が思っている以上に、“処刑人”だなんて呼ばれている連中はヤバイらしい。

今日から俺の仕事も再開され、本格的に警邏が始まった。

今朝はエクレシアと鍛練をして、昼にはそのまま仕事である。

小さな村だと思っていたら結構広い村だった。

ここは“壁”に沿って三日月のような形で集落が出来ており、縦に長い。俺の行動範囲は中心の町に向かって横なので、予想以上に短く見えるだけだった。

その縦に長い村を五週ほど走れば、人間の体力では結構きつい。これくらい普通だと言わんばかりの魔族の連中には羨ましいばかりである。

しかしこれも俺の首に掛けられた借金を返すため、文句なんていってられない。」

そうやって帰って来れたのは、夕方になり日も落ちかけている頃であつた。

「ん？ サイリスか。」

すると、屋敷の前を箒で掃除をしているサイリスを見かけた。いつもこの時間に掃除をしているらしい。人間は朝方だが夢魔は夕方に掃除をするのだろうか。全くどうでもいい話であるが。

だがふと見てみると、いつものように淡々と箒を掃いているように見えて、どうもその動きがぎこちない。

そして、なぜか持ち方もどこか変である。

箒を左腕の脇に挟んで、体ごと捻って箒で掃いていたのだ。

よく見てみると、彼女の服の右腕が袖の部分から全く欠如していた。

「おい、サイリス・・・その腕・・・」

「ん？ ああ、これ。邪魔だから切り捨てた。」

「は？」

一瞬、俺はサイリスが何を言っているのか分からなかった。

「契約の代償に右腕を持っていかれたのよ。この程度で済んでよかったわ。本当はもっと段階を踏まないと話だって聞いてくれないの

に。」

「おい、右腕って・・・おい・・・」

「なによ、まさか負い目とか感じてるわけ？」

サイリスは仏頂面でどこか不機嫌そうにそう言った。

「私は私が助かるために行動しただけよ。あのままだったら私は殺されてた可能性は高いんだから。別にあなたには関係ない。」

「だけだよ・・・いや、なんでもない。」

俺は彼女に対して何を言うべきなのか分からなかったと言うのも有るが、何を言ったところでどうにもならないことを理解していた。

魔族とはこういった変なところでプライドが高い。

人間には理解できない何かがあるのだろう。

「その、魔術とかでどうにかならないのか・・・？」

「魔術はそこまで万能じゃないわよ。」

でも仮に私に腕が生えてきたとしても、多分私はそれを扱うことは出来ない。悪魔に取られた腕はね、決して元通りにはならないの。体が不自由な人は何かしらの補助で歩けるようになるかもしれないけれど、私の場合全く逆。体が健康でも、もっと根本の部分でダメなのよ。

人間は、悪魔に魂を売ると言う表現をするけど、まさにその通りね。才能は魂に依存しているのだから。では魂から腕を動かすと言う才能を食われたら、もうどんなに健康な体でも、恐らく来世だろうとも二度と私は腕を動かすことは出来ない。

「・・・悪魔に魂を売るとは、そういうことなのよ。」  
なんとも衝撃的な話だった。

俺は確かに後ろめたさを感じていたが、それは罪悪感すら覚える内容だった。

「それって、割に合っているのか？」

「たとえば砂漠で飢えて水を欲したときに悪魔が現れて、水を与える代わりに腕を一本寄こせと言われたら、あなたはどうするかって質問と同じだけど、あなたはそれに答えられるの？」

「それは……。」

「魔術ってね、極論を言えば自分のやりたいことの過程をある程度無視して実現することなのよ。普通なら不可能なこともそうやって可能とするの。」

でも、普通なら出来ないことは、普通じゃない対価を必要とするの分かる？ 普通なら出来ないことの代償は、命を差し出せといわれたって文句は言えない。だって、自分の人生全て費やしても不可能なことって、世の中にはあるでしょ？

それを叶えるんだから、悪魔に腕の一本差し出すくらいで文句を言うのは自分の願いを言っておいて身勝手とすら言える。ましてや同情されるのも筋違いなんてない。

私が言いたいことは、そういうことなのよ。」

俺は、本当に何も言えなかった。

あの、仲間にすらジャンキーと呼ばれていた魔術師を俺は思い出していた。

強力な薬物で死に瀕してはいたが、その代わり武器に対して鉄壁に近い防護の力を持っていたし、強力な加護を得て鬼のような強さを誇っていた。

あの二人組みと、サイリスもエクレスシアも、そして俺も同類なのだ。

何かを言えるはずなんてない。

そんな危ないことは止めよう、なんて偽善は口が裂けても言っ  
てはいけない。言ったら、多分俺は彼女に絞め殺されるだろう。  
それくらい、連中は自分たちの魔術に誇りを持っているのだ。

「あ……」

俺は、無言のうちにサイリスから箒を奪り取っていた。

「俺がやる。」

「……そんなことしても、この間の借りには釣り合わないわ  
よ。」

「俺がやりたいからやるんだよ。」  
多分、俺は何も言えない自分が嫌で苛立っていたのだろう。

ムシャクシャして、しかしどうすることも出来ず、だからこんなガ  
ラにもない行動を取ったのかもしれない。

クラウンにこんなことは愚痴っても仕方ないし、エクレシアにこの  
胸のうちを打ち明けても彼女は感謝していてもサイリスの自業自得  
としか言わないだろう。

このムカムカした気持ちは、自分で解消するしかないのだ。

「私、あなたを誤解していたかもしれない。」

「昨日エクレシアの奴もお前に対してそんなことを言ってたな。多  
分お前の前じゃ絶対に言えないだろうけれど。」

感謝していても表立って感謝できないとはどういう気分なのだろう  
か、俺にはエクレシアの気持ちなんて永遠に理解できないだろうが。

「いいえ、きつと人間って種族を誤解してたのかもね。

私の母親は私を捨てて人間と一緒にどこか行ってしまったの。だから人間なんて所詮甘い声と色っぽい仕草をするだけで簡単に騙されるような連中下らないだと思ってた。」

「否定しきれないのが悲しいところだな。」

夢魔は同種の異性同士では交配できない種族だ。

だから普通は種として生まれた子供を優先するのが当たり前なのだ。

夢魔は基本的に同性の子を産み産ませる、つまり、彼女の母親は同族のサイリスを捨てたことになる。一応確認の意味で、母親が捨てたと言うことならばそいうことになる。

夢魔が子供を捨てるなど、仲間意識が非常に強いらしい“夜の眷属”にはまず見られない事例であると、魔導書が言ってくる。

「でも、何となく人間のことがかかった気がするわ。

私は一度夢魔の集落に行ったことがあるけど、彼らに馴染めなかった。

族長は私を一族に迎え入れてやるからいつでも帰ってきて良いと言ってくれたけど、多分私の帰る場所はあそこじゃない。私を捨ててくれた師匠のところだけなのよ。

・・・私も、母親と同じなのかもしれないわね。仲間を仲間と思えなかつたんだから。こんな辺境に居るのは当然よね。」

「みんな辺境辺境って言うが、ここってそんな特殊な場所なのか？」  
話題を変えようと俺は彼女の話には触れずにそう言った。

「魔族は普通、同族同士が固まって生活するの。異種族同士が共生目的で一つの集落を形成するなんてここぐらいなものよ。」

最初は開拓の命令が送られて異種族同士住まいを作っていたら、いつの間にか、職にあぶれたり、何らかの理由で仲間と過ごせなくなった者たちが流れてくるようになって労働力として雇用して行っただらしいわ。」

時々魔獣とか、魔物とかがよく出てくるようだし、中々上手くいかない現状を思うと、かなり難航をしているのが窺える。

「ふーん。」

「終わったらその辺の立て掛けて置いてくれればいいから。」  
サイリスはそれだけ言うと、バランスが取れずに歩きにくそうにしながら屋敷に戻っていった。

「.....」

そして俺は、黙々と箒で埃を気が済むまで掃って行った。

.....  
.....  
.....

「サイリス、サイリス。呼ばれたらさっさと来んかい。」

「はあい、師匠。」

その夜、私が片腕で四苦八苦しなから調合用の薬品を整理していると、私は師匠に呼ばれた。

「何でしょうか、師匠。」

何の用か聞こうと敷居の布を潜って師匠の下に行くと、師匠はテーブルの前に座ってキセルを啜えて一服していた。

「師匠、煙草はお止めになってくださいとあれほど申し上げたじゃありませんか。それでは静養になりません。」

「うるさいねえこの弟子は。お前さんはこれが煙草だって言うのかい？」

顔を顰めて師匠はそう言った。

「そう言えば・・・タバコの臭いが・・・。」

「ただの水蒸気だよ。何だか物足りない気もするがねえ、口の寂しさを紛らわすにはうってつけだろうが。」

「・・・それで、何の御用でしょうか？」

私がそう言つと、ああそうそう、と師匠は思い出したかのように足元に置いてあつた皮袋から何かを取り出した。

「その腕じゃ不便だろう？ ちょっとこしらえたんだがどうかね？」  
そう言つて師匠が取り出したのは、右腕だった。



「・・・それは、腕ですか？」

「それ以外の何に見えるんだい？」

呆れたように師匠はそう言った。

「オートマティスム自動書記に使う霊媒を宿してある。お前が思った通りに、それこそ本来の腕のように動いてくれるはずさ。」

「しかし、師匠。私はもう二度と腕は動かせないはずですが・・・。

「

「だから別の者に動かしてもらおうってこうしてこしらえたんじゃないか。

お前さんはその辺の小狡さが足りない。魔術つてのは裏技抜け道卑怯上等の世界だと教えたらどう？」

にやりと笑って師匠はそう言った。

確かにその通りである。

教会と魔女の戦いも騙しあいの歴史だ。

相手の裏を掻くために考えを巡らし、策略を駆使する。

悪魔に体を差し出したって、平気な顔をするくらいの胆力が無ければ東欧の魔女術なんて修めることなんて出来やしないのだ。

そう、私自身が動かせないなら、別の何かにやってもらえばいい。代用と流用、魔術師の基本的な思考である。

「・・・何これ、感覚まであるの!？」

「ほう、精巧だとは思っていたが、くっ付けただけで神経まで通る

のかい。」

試しに服を捲って無くした右腕にその腕を付けてみると、まるで悪魔に取りられたのが嘘のように腕が自分の物のように動かせたのだ。

しかもである、左手と不揃いであったにも関わらず、仮初の右腕は長さも大きさも私に適したように伸縮して完全に左腕と見分けがつかなくなってしまうた。

ここまで来ると、常識が逸脱した魔術師でも君が悪いレベルだった。

「まるで、神の御業じゃないですか……。」

「あつはつはつは、私たちは悪魔崇拜者じゃないか。それが神の御業とは皮肉かね。では、差し詰めそれは“悪魔の腕”とでも称すればいいかね。」

可笑しそうに師匠は笑うが、私には一体どうやってこんなものを作ったのか到底理解が及ばなかった。

「これを、師匠が……?」

「動かす為の術式の方はあたしだが、腕の方は違うね。この煙草も同じ奴が作ったのさ。向こうは向こうで腕の性能を十分発揮できるような術式を褒めてはくれたが、あんなものは兎戯のようなものさね。」

「こんなもの、一体誰が……。」  
私には一度も褒められたことがないってくらい厳しい師匠がべた褒めである。

明日にでも天変地異が起こるんじゃないのかという気分になった。

「さて、ね。“代表”の紹介で私のところに来たとか言っていたが、胡散臭い女だったねえ。あれほど胡散臭い女は死ぬまでに二度と目に掛かれんだろうくらい胡散臭い女だった。」

他にも用事があるとか言っていたが、用事なんてあるものなのかね。お前を呼ぶすぐ前まで居たんだが、何やら急いでいるのか出て行っちゃまったよ。」

探せばその辺にいるんじゃないのかい、と師匠がそう言った時である。

パン、と外から渴いた音が聞こえたのである。

.....

.....

.....

「いやー、それにしても君が居るおかげで食費が浮いて楽だよ。」

やっぱり頭の弱いオークなんかじゃダメだね。」

クラウンの奴がそんな自分勝手なことをのたまったのは夕食の席のことである。

エクレシアが料理を出来ると知ったときには興味本位に任せ、出来が思いのほか良かったのかそれからこんな調子である。

個人的にはどうにも俺の口には魔族の料理は口に合わなかったので

嬉しいことではあるが、こいつはもう少し他人に対して感謝の気持ちとかを知るべきである。

と言うかこいつ、肉類とか味が濃いものなら大抵美味い美味い言って食ってるだろうが。後は量さえあればそれでいいみたいな奴である。

そう言えば最近オークのギンギに会っていないな。忙しいのもあるが、せっかく同僚になったのだし今度顔を出しに行くのも悪くないかもしれない。

「私としては、調味料が足りないことが少々惜しむべきことですが、

エクレシアはそう言ってテーブル一杯に大皿に盛られた料理を幾つも置いていく。九割がたクラウンの奴が食ってしまうが。

地上にはない食材ばかりの中で、これだけ人間用アレンジできるのは素直にすごいと思う。調味料が少ないから、味は単調なものばかりなのは彼女の悔やむとおりだがそれは仕方が無いことだ。

こんな場所で人間の食い物にありつけるのなら、神に感謝したっていい。

そしてエクレシアが料理を並べ終えようとしたその時である。

からーん、と玄関のベルが鳴った。

「なんだいこんな時に、ちょっとメイ、君が出てよ。」  
目の前の食事に目が眩んでいるクラウンはそう言った。

「はいはいっと。」

どうせクラウンの奴にしか尋ねてくるような輩は居ないから二度手間になるだろうが、という文句は言う方が手間になるので俺は素直に出ることにした。

「はい、どちらさまですかー。」

食事前でやる気が出なかったのは俺も同じだったのか、そんな適当な声で対応してしまった。ちょっと恥ずかしい。

そしてドアを開けると、見覚えのある奴が立っていた。

「ちやおー。」

と、同時に真っ黒な筒状の物体が突きつけられた。  
拳銃だった。

「おまッ」

「そしておやすみなさい。」  
パン、とそのまま発砲。

俺は驚いた拍子に思わず尻餅をついてそれを避けれたが完全な偶然であった。

むしろ、一発目はわざと外したに違いなかった。

「お前、クロムッ!!」

「なーに驚いているのよ、また逢いに来るって、言ったじゃない。」  
あの日、最後を看取ったはずのクロムが、本当に健康体のままの姿で俺の目の前に現れたのである。

「あなたはッ!?!」

「ぎゃあああ!! 僕の夕食がああ!!」

エクレシアが驚いて料理の盛りられた大皿を床に落としてしまっていた。クラウンの奴は敢えて無視する。

「あの時、本当に痛かったんだからね? ちょっとやり返しに来ましたー。」

明らかに感電ってレベルじゃない電光を放っているスタンガンを片手に、にこにこ笑っているクロムが拳銃の銃口をこちらに向けてきた。

「お前、本当にクロムなのか?」

「私が本当に私なのか?」

難しい質問ね。哲学的な問答は嫌いじゃないわよ?」

「そういうことじゃねーよ!!」

何となくもう一度化けて出てきそうな感じではあったが、本当にまさか生き返って会いに来るなんて思いも寄らないだろう。

「おい、お前。」

ふと振り向くと、明らかに怒っているだろうクラウンが立ち上がった。

「ッ」

「よくも僕の夕飯を台無しにしてくれたね。」  
何かクロムが言う前に、クラウンは軽く手を振るった。

次の瞬間、クロムは全身から冗談みたいな量の血を撒き散らして吹っ飛ばされた。

どうやら凄まじい力で全身を殴打されたらこうなるだろうと感じだつた。

「……………お、おいクラウン。」

「ちよつと、なにするのよ。代わりはいくらでもあるけど、無意味に壊さないで欲しいんだけど。もったいないじゃない。」

「うおッ!?!」

すると、俺がクラウンに何かを言う前にクロムは全くの健康体のまま現れたのである。

ちなみに足元には己の死体が転がっている。

「私にとって死なんて上辺だけのものに過ぎないのよ。別に驚くことじゃあないわ。」

クロムは自分の死体に何かの液体を振り掛けると、死体が砂漠の砂のように乾いて跡形もなくなった。

「精霊魔術は流石に想定外ね、うーん、相性最悪だけど今の私は無限の命がある。そっちの彼が落ち着くまで繰り返しても構わないけれど?」

「いや、僕は知的で通ってるんだ。流石にそんな物見せられたら僕も驚く。」  
俺はこのとき激しくクラウンに文句を言ってやりたかったが、俺は空気の読める日本人なのでそんな言葉を飲み込んでいた。

「……死が無意味だった？」

話半分で聞いていたが、エクレシアが言ったことはマジだったのかよ……。」

「理論上は可能でも、実質的に殺すのが不可能ならば、それは不死身と変わらないとは思わない？ でもこっちの“私”もあなたに会うことを楽しみにしていたのに、残念ね。」

お陰で私に来る羽目になった。」  
もはや砂の塊となった己を見下ろして、クロムは薄笑いを浮かべながらそう言った。

「まあ、仕切りなおしには丁度いいのかもね。」

さっきは挨拶代わりにぶっ放したけど、本来の目的はこっちこっち。ここに来たのは完全についての寄り道なのよ。」

クロムはそう言って、懐から丸められた紙を取り出してクラウンに放り投げた。

「……うそ、“代表”の紹介状だ。しかもラミアの婆様への。ありえない。」

「まさか、あの『マスターロード』が、人間に魔族の領域を歩かせることを許したのですか!？」

クラウンもエクレシアも、そこに書かれている内容に驚いている。



「素直に歩かせてくれるわけじゃない。所詮建前に過ぎないわ、そんなの。話の通る魔族なんて、そんなに多くないしね。」

「まあ、そうだろうね。」

クラウンは頷くと、その紹介状を丸めてクロムに投げ返した。

「でもお陰で、大手を振ってこういった場所では歩き回れる。」

「お前、自分のしたことを分かっているのか？」

「私？ 私が何かをしたかしら？」

そのとぼけたような態度に、俺の怒りのままに立ち上がってクロムの胸倉を掴んだ。

「この村で散々暴れやがったじゃねえか!!」

「ああ、そのことね。そんなつまらないこと、忘れてくれたっていいじゃない。そんなことをした個体は死滅しているんだし。」

「そういう問題じゃねえだろうが!!」

「止めてください、メイさん。」

ふとその時、エクレシアから制止するよう声が聞こえた。

「確かにあの非道を行った彼女は死んだのです。それは確かである以上、そこにいる彼女のにその責を問うことは出来ません。」

「エクレシア、お前はそれで良いのかよ!!」

「いいはずがないでしょう!! ですが、生と死を超えた人間を裁く法など、人間には無いのです。私だって、悔しい。」

両手を握り締めながら、エクレシアは憎憎しそうな表情でそう言った。

その表情を見ると、俺も思わず手をクロムから離していた。

「なるほど、師匠は胡散臭い女だって言ってたけど、確かにこれ以上無いくらい胡散臭い女だわ。」

すると、夜の暗がりからサイリスが現れた。

「あら、その腕・・・あのラミアの魔女の弟子ってあなただったの。どうかしら？　―センチ四方の紙で鶴だって折れちゃうくらい精密な動きが出来るように作ってるんだけど。」

「おかげさまで、気持ち悪いくらいぴったりだわ。」

サイリスは夕方までは無かったはずの右腕を左手で抑えながら、不快そうな表情でそう言った。

「何の用でここに来た、用が済んだならさっさと出てけ。」

「ふっふっふ、私も嫌われたものね。」

用は済んだといえば済んだし、済んでいないと言えば済んでいない。

「にやにやと笑いながらそんなことを言うクロム。」

「どっちだよ。」

「用は済んだけど、やりたいことは残っているのよ。しばらく採取や素材集めをするからこの辺を拠点にして活動する予定なのよね。」

「冗談じゃない。」

「ええ、身内が面倒を起こしたんだもの。ただで居させてくれなんて厚顔無恥な真似はしないわよ。誠意は見せると言う形で、この

領主にさつき言っておいたわ。

それなりの仕事を引き受けさせてもらうことになっているの。

私は魔族の領地を歩かせてもらっているんだから、それくらい当然でしょ？」

用意のいいことである。

文句を言われることなんて想定済みなのだろう。

彼女からすれば、旅の恥のかき捨てだっただろうに、クラウンたちからの反応からして人間が魔族の領域に踏み込むのは相当難しいらしい。

きつとクロムでさえ予想外の事態を経てここへ居るのかもしれない。

「なんと魔術師らしい用意周到さ……。」

これにはエクレシアも呆れ顔だった。

「自分の要求を突きつけるときは地盤を固めてからって言うのは教会の常套手段じゃない。まあ、連中が何十人も動員してやっとなこと、私は一人で軽く出来ることだけだ。

あんまり周囲との格が違うと言うのも考え物よねー。」

「浅ましい選民主義者の錬金術師が、よく言いますね。」

「黙れよ、浅ましいのはあんた達も同じでしょう？ 薄汚れたグノーシス主義者どもが。どちらが神の力を騙っているのか自分たちの方がよく知っているくせに。」

私がこの間知り合った聖職者の女も、それくらいは弁えていたわよ？」

多分俺はこの時、エクレシアが心の底からキレたのを表情から悟った。

それを必死に顔に出さないようにしているのが見て取れる。

「……こういう頭だけは良さそうな奴と口喧嘩はするもんじやないぜ？」

「分かってますよ！！」

何となくそんなことを言ってしまうと、必死に押し殺していただろう怒りがだいぶ出ていた。言ってから彼女もハツとなっていたが。

どうやらエクレシアとクロムの相性は最悪らしい。

「しかし、よくまあ“代表”が許可を出したものだ。

一体全体、どんな裏技を使ったんだい？」

エクレシアなんてどうでも良さそうにクラウンがそう口を開いた。

「ちょっと知り合いに掛け合ってもらったのよ。持つべきものは古い友人だとは思わない？ まさか冗談で頼んだら本当に許可が出るなんて驚きなのは私も同じだけど。」

「“代表”に口利きできる友人ねえ、そいつは人間かい？」

「多分、悪魔だと思うわ。」

多分クラウンは皮肉でそう言ったんだろうけど、クロムは真顔でそう返答した。

「まあ、冗談よ。」

そう言っただけでクロムは笑ったが、こいつが言っただけで冗談に聞こえないし、多分冗談じゃないのかもしれない。

「それより、師匠に何の用があつてここに来たのよ。まさかただ会

いにきたって訳じゃないでしょう？」

そこでサイリスが睨むような視線を向けたまま、クロムに問うた。

「当然よ、この辺でしか手に入らない素材の在り処や、有りそうな場所を聞いていたのよ。その代償にその腕を作らされたわけだけどまあ、向こうは教える気なんて無かったんだろうから腕なんて要求してきたんだろうけど、そこはほら、私って天才だから。

ちよちよいのちよいで腕の一つや肉体の一つくらい、軽く造って見せたわけ。すごいでしょ？」

「……すごいのか？」

「あなたは腕を作れって言われたらその場で作れるの？」  
言われるまでも無いことだった。

少なくともサイリスが悔しそうにするくらいにはすごいことなんだろう。

と言うか、こいつ。さっきから無駄話が多い気がする。自意識が高いようだし、そこから来るお喋りなだけだろうけど。

「で、その天才様がこんなところで無駄話をするからには、ちゃんと理由があるんだろうな？」

「そうそう、話が早いわね。」

てつきり自慢話が出来ただけかと思ったら、ちゃんと理由は有ったらしい。

「暇なときでいいから、素材集めを手伝ってもらおうかと思って。いやー、どうも私一人じゃ無理そうなところにあるのが多くて多くて。」

「どの面下げてそんなこといえるんだらうな……。」

「あれ？ お断りする感じ？」  
「当然だろうが、このボケ！！」  
まさか断られるとは思っていなかったのか、クロムは本当に意外そうな表情をしていた。自意識過剰にも程があるわ。

「え？ なんで？ 私の英知の一旦に触られるのよ？ とっても嬉しいことじゃないの。この私に協力を要請されるなんて、一生に一度あるか無いかだと思っのに。」  
俺は今、いったいどんな罵声を浴びせればこの女を追い返せるか必死に考えていたが、多分この女は俺のボキャブラリーの数倍をもつてして言い返してくるだろう事は簡単に予想できるのが悲しい。

「この辺にしかないような素材を使って、一体何を作る気だい？」  
「賢者の石。」  
それはあっさりど、とても簡単にさらりとクロムはとんでもないことを言った。

「………それこそ、冗談じゃないのか？」  
「あら、アレの価値が分かるなんて、現代の人間にしては分かっているじゃないの。」  
「日本じゃ錬金術はかなり有名だからな。」  
主にアニメやゲームでの話だが。その中でも賢者の石は最高難易度に設定されていることから、多分現実でも無理ゲーなくらい難しいんだろう。

「とりあえず年内完成を目標にしているわ。どんなものは大体頭

に出来ているから、材料さえあればすぐにでも作成に取り掛かれるんだけど、いかせん現代じゃ手に入らないようなものばかり。正直諦めていたんだけど、あのラミアに聞いた限りは不可能じゃ無さそうなのよ。」

「……マジかよ。」

「どう？ 協力する気になるでしょう？」

俺は思わずエクレシアの方を見てしまったが、彼女も碇を忘れるくらい驚いて俺の方を見ていた。

「確かに面白い話だけど、こっちにメリットがないじゃないか。」

「そう？ 完成したらあげてもいいわよ、賢者の石。」

まるでプラモデルでも作ってやるみたいな言い方であった。

「それを本気で言っているなら、君は正気じゃないよ。」

「え、だって他人が作れる程度代物に何の意味があるのよ。」

私はその更に発展したものを作りたいのよ。不老不死とか、尽きぬ黄金とか、そんなの今でも十分間に合っているのよ。私にとっては通過点に過ぎないわ。

それに、先人の教えは大事かもしれないけど、それにすぎるだけってのはねえ？」

多分こいつはすごいことを言っているんだろうけれど、こいつが言うとそのすごさも半減以下である。

「うーん、僕らにも目標があつてね、君がそれに付き合ってくれるなら僕は手伝ってあげてもいいと思うな。」

「おい、良いのかクラウン？」

「そんな偉大な研究に関われるなら僕としては喜んで手伝ってあげても良いよ。だけどそれだけじゃないからこう言ったのさ。」

俺が言いたいのはそういうことじゃないわボケ。

「まさか、本気にしてたの？ あの話。」  
サイリスはとたんに呆れたような表情になった。

「本気も本気さ、あれなら生まれて初めて本気になれる気がするんだ。だから出来る限りのことはやってみたいと思うよ。」

「なにになに？ どんなはなし？」

「人間と魔族の共存さ。力でねじ伏せるよりずっと我々魔族が地上へ進出するには現実的だと思うけれど？」

「あははははは、そんなの無理に決まってるわ！！」  
クロムは可笑しそうに笑ってそう言った。

確かに馬鹿馬鹿しい話だが、こいつにだけは笑われると非常にムカつくのは俺だけではないはずだ。

「でもまあ、面白い研究題材にはなるかもね。そういうの、嫌いじゃないわ、私。」

「……良いわ、契約は成立ということぞ。」

「おいおい、マジかよ。」  
クラウンの奴が勝手に物事を決めるのはいつものことだが、今回はかりは割りと承服しかねる。

「不満かい？」

「お前も節操無いとは思いますが、俺はこいつを仲間にするのは反対だ。」

「同感です。」

うんうん、とエクレスシアも俺の言葉に全面的に頷いている。



「あはははは、奴隷の君たちが僕に意見するなんていい度胸じゃないか。」

この瞬間、俺の胸の中に絶望が満ちたのは言うまでもない。多分エクレシアも同じ気分だったに違いない。

「じゃ、そういうことで。．．．奴隷って、ぶくく．．．。」「クロムは口元を押さえながら手をひらひらと振って去っていった。

「．．．あの女、いつか絶対泣かしてやる．．．。」「言ってるから、なんか自分の小ささに悲しくなってきた俺であった。

## 第十九話 救いようのない話

「なんだこれ……」

クロムがやってきた翌朝、とりあえずエクレシアが朝食を作る間に腹を空かせようと素振りでもしようかと思つて外に出たら、何かいっぱい家の前に積まれていた。多分、家か何かを使う石材だろう。

「……………」

そして、横に目を向ければ、がしゃんごしょん、となんか漏斗みたいな皿が上にくっ付いたヘンテコな四角い機械が駆動していた。その石材はこの機械が量産しているようだ。

皿の上には山盛りにされた土があり、その土を機械の内側を通して作成された石材が、機械の下側に設置されたベルトコンベアで外に運び出されている。

脇には得体の知れない紫色の液体みたいなのが入ったガラスのケースから延びたチューブが機械に繋がっている。

「なんだこの、一昔前のアニメに出てきそうな機械は。」

誰だこんなところにこんなものを置いたのは。

邪魔で邪魔で仕方が無い。文句の一言でも言つてやりたいところだ。

「私が開発した全自動錬金装置よ。この間派手にやった反省に、魔物避けの防壁を作ることになっているの。」

すると、石材の向こうからクロムが現れた。

「……なるほどねえ……あれッ。」

何となくその石材の一つを手にとって見ると、まるで中身が入っていないんじゃないかと思うくらい軽かった。

「これ軽いけど、強度は大丈夫なのか？」

俺がそういうと、クロムは無言で近づいてきて、懐から取り出した試験管に入っていた液体を俺が手にしていた石材にぶっ掛けた。

「うおッ、急に重く……」

一気にはりえないほど重くなったので、俺は思わずバランスを崩しかけた何とか持ち直せた。

「軽石みたいに多孔質になって、こっちの薬品をかけると全体に染み込んで結合すると別の物質に変化するように作ってあるの。」

「そんなことできるのか？」

「勿論普通の物質なわけじゃない。ちょっと分子構造を弄くって重さを変えているのよ。まあ、錬金術では質量の比重を調整するのは基本だけだね。」

「……お前、ホントに錬金術師なんだな。」

「何を当たり前の事言っているの?」

いきなり拳銃をぶっぱなすほど過激な奴だったから、知的なイメージがある錬金術師だとはイマイチ実感できなかったが。

「いや、本当に錬金術師なんだなって思ってたな・・・。」

「物質で私が自由に出来ないものは無いわ。黄金だって練成できるわよ。」

「え、マジかよ!？」

正直こいつにあんまり関わりたくないが、流石にそうまで言われて食いつかない人間は居ないだろう。いや俺が俗物なだけなのかもしれないが。

「あんまり意味の無い行為だけどね。面倒だし、疲れるし、危険だし。」

「え、金を作るって凄いいことじゃないのかよ。」

「まあ、技術的にはね。技量を測るための試金石には丁度いいかもしれないけれど。あれ、今私うまいこと言った？」

自分の言ったことでにやにやと笑えるクロムは楽しそうで何よりである。

「はつきり言つて、黄金の練成なんて労力と金銭の無駄でしかないのよ。」

理論的には、科学で金を作ることが可能なのは知ってる？ でもそれには莫大な時間とお金がかかるわけよ。

錬金術もそれと同じ。魔力でその過程を短縮できるけど、科学で金を作るのと同等の労力を魔力に換算する必要があるわけで、仮に100グラムの金の延べ棒一つ作ろうと仮定すると、失敗したらその矛盾が反動となって町ひとつ消し飛ばわよ。」

「え・・・・・・・・」  
金100グラムと町ひとつ、割りに合わねえ…………。

「勿論私は失敗なんかしないけど。それにそれは何の準備もしないで個人の技量だけで行った場合の話ね。万物融解液とか、アルカヘスト媒介になる鉱物とか、ちゃんと準備すれば安全に出来るけどそうなるとお金が大変なことになっちゃうのよ。」

「…………魔術って、そんなのばかりなのな。」

「人間じゃ出来ないことをする代償ってそんなものよ。」

そこに意味を見出すのが私たち魔術師。つまり、戦闘しかできないあなたみたいな魔術師って存在自体無意味ってことよ。」

「…………この野郎…………」

さらりと毒を吐きやがってこの女。

「それに、黄金の総量を増やすことは好ましいことじゃないしね。」

「なんでだよ、金なら多いほうがいいだろうが。」

「あなた、それでも世界のブランド品の七割を消費している日本人なの？」

付加価値と希少価値って分かる？ それは物質そのものよりずっと

高価なものなのよ。」

「はあ…………」

なんか変な方向にスイッチが入ってしまったらしい。聞いても居ないことを話し出したよこの女。めんどくせえ…………。

「たとえば有名どころの革のバック、その原価は一割から二割にも関わらず何十万もするか知ってる？」

「さあね。」

「信用があるからよ。それだけのお金を出してまで買う価値があるか、メーカーも自分の商品はこれだけの価値があると言ったためにそんな値段にしているのよ。安ければ良いっていうのは庶民の発想よ。人間は信用に価値を見出しているって訳なの。」

「そっぴや、今ではスーパーで野菜も製作者が分かるようになっていたり、信用は本当に大事なのだと分かる。」

誰だって得体の知れないものを口に入れたりしたくは無い。

「魔術だつてそう。たとえばこのナイフ、実はこのナイフは過去に古代竜を殺した超一級の業物だと言ったら信じるかしら？」

「まさか。」

クロムが懐から取り出した折り畳みナイフを見て、俺は肩を竦めてそう言った。

そんなナイフでお世辞にも竜を殺せるなんて思えない。鱗に刃を付きたてたところで逆に折れてしまいそうだ。

「だけどね、そういう話が伝承となつて何十年、何百年と経つて後世に伝わると、実際にこのナイフは竜に対する攻撃力を得るのよ。」

「はあ？　なんでだよ。」

「幻想の種族たる竜を傷つけるのは、同じく幻想だつてことよ。そう言った蓄積されたイメージを魔術師は“概念”って呼ぶのよね。まあ、そんな天然の魔術品は非常に稀で希少だけど、私たち魔術師はそう言った幻想の存在から力を借りるために形を真似たり、行動を真似たりする。」

そこに法則性を見出して、現実を持つてくる。それが魔術。少なくとも私はそう定義している。」

分かるかしら、とクロムは挑発的な視線を投げ掛けてくる。

何となくは分かるが、現代の人間に飲み込めと言っには少々突飛な内容である。

「神に祈るなんてその尤もたる例じゃない。

神という名のブランドに縋って、十字架なんて金属の塊が所有者を守ったりする加護を付与してモノとしての価値を高める。それこそ魔術よ。」

「あー、なるほど。」  
すつごく納得のいく説明であった。

クラウンとかエクレシアの説明ってどこか感覚的な内容が多かったから、ちゃんと理論的な説明なんてされたのは始めてである。  
なんと言っか、錬金術師ってそういうイメージだ。

「ただの鉄と黄金じゃ同じ金属でもまるつきりそれが持つ価値が違うでしょ？」

鉄はいつぱい有るから安くて、黄金は少ないから高い。その価値の差が魔術の難易度や強さに関わってきたりするわけ。

人間の持つ主観の総合体こそ私たち魔術師の力の根源なのよ。魔力は魔力のままじゃただの空気と同じ。そのイメージによって色を付けて、初めて力を得るのよ。」

「ちよつと俺、お前のこと見直したかも。」  
口ばかりの天才だとばかり思ってた。

どうも現代人には魔術ってよく分からない代物でしかないわけだったのだから。

「貴方がにわかただけよ。こんな感覚で理解するものよ。他人に

教わっているようじゃ三流以下よ。」  
前言撤回、こいついつか絶対泣かす。

「あれ？もしかして本当に素人だったり？ 師匠の名前は？」

「師匠って・・・剣の師匠ならエクレスシアだが・・・。」  
急に真剣な表情になってクロムが問うてくるもんだから、俺は思わず正直に答えてしまった。

「うっそ、冗談でしょ。」

油断してたとは言えこんなずぶのド素人に私が負けたって言うの！  
？」

「悪かったな、ずぶのド素人で。」

「許せない、許せないわね。こんなふざけた話って無いわ。こんな屈辱生まれて初めてかもしれないわね。」

「悪かったな！！」

いい加減俺の良心も限界である。

もういつそぶん殴ってやろうかこの女。

「だって私は完璧な人間なのよ！？」

それがあんたみたいだな人間の底辺みたいだな奴に負けるなんてあつてはならないのよ！？ そんなことを報告したら私は・・・！！？」  
その時のクロムは、ぶん殴ってやろうと思っただけを思わず忘れるくらい拳動不審だった。

「でもほらあれだ、俺が魔術を扱えるのなんて『黒の君』とかいうすんごい魔術師の遺した魔導書のお陰って部分も大きいし。」



なぜそんな風に弁明するように言ってしまったのかは分からない。多分俺の気が小さいからだろう。

と言うかこれはあんまり口外しない方がいいとエクレシアに言われていたことを完璧に忘れていた俺である。

クロムはそれを聞くと途端に落ち着いて、なるほどねと言った。

「大師匠の魔導書があるなら仕方がない。

あの人の力は人知を超えているもの。」

「大師匠って……会ったことがあるのか？ 生きてるって聞いたけど。」

「直接会ったことはないわ。大師匠って言うのは敬称よ。あの方の知識の恩恵を受けている人間はみんなそう呼ぶようにしているの。」

「そうなのか。」

この傲慢ちきなクロムが敬意を払うくらいなんだから、相当すごい人物なんだろうなあ。

「私の友人は死んだとか言っていたけど、まあ、あの方が死ぬなんてこの世の法則が捻じ曲がるようなことでもなければいけないと思うわ。噂によると何百通りかある弱点を一度に突かないと死なないとかないんとか。」

眉唾でしようけれど、とクロムは苦笑しながらそう言った。

「……ああ、忘れるところだった、お前なんでこんなところにこんなもの置くんた、邪魔じゃねえか。」

今更であるがすっかり忘れていたので、一応文句を言っておくことにした。

「ああ、ごめんなさいね。私あそこに工房を構えることにしたから、近くに物を置ける場所はここしかなくて。」  
「そう言つてクロムが指差したところには、昨日までは空き地であった場所に見事な一軒屋が建つていた。」  
「言つまでもなく、ご近所である。」

「良いのかよ、勝手に家なんか建てちまつて。」

「ここは開拓民の村だつて聞いたわよ。迷惑にならない場所ならどこにだつて家を建てて良いつて言われてるの。」  
「そこで、昨日は眠かつたし近くにあつた迷惑にならなそうなあそこにしたわけ。」

「こつちが迷惑だよ!!」  
それに微妙に本音が入り混じつていたぞこの野郎。

「なんでよ、協力者は近くに居た方が良いじゃない。  
それに私に協力するんだから色々な恩恵を受けられるのよ? こんな素晴らしいことつてなかなか無いじゃない。」

「俺は納得してねーし!!」  
「私だつて好きであなたのような凡人の力を借りるなんて真似はしたくなんかないわよ。でも魔族の領域つて都合上、こつちに回せる人員が私一人だけなんだから仕方ないじゃない。」

「てめーはナニサマだこの野郎!!」  
「これでも私は元貴族なのよ、あなたみたいな凡人とは血筋からして違うのよ。分かつたなら跪いてみたりする?」

「ふざけんな!!」  
俺は昔から少しばかり気が短くて手が早く、喧嘩っ早いと小学生の通信簿にも書かれていたが、流石にここまで人間としてバカにされ

たら殴りたくもなってくる。

「あの、口喧嘩はいいのですが、朝食が出来ましたよ・・・？」  
するとその時、エクレシアがドアから顔を出してそう言ってきた。

「一つ訂正するなら、口喧嘩ってのは同レベルの人間同士で起こるものよ。」

私とこいつが同レベルな人間のわけないじゃない。」

「あー、はい、そうですね。」

なんだか面倒くさそうなエクレシアの返答だった。

こんな奴の言葉になんて相手にしない、実に懸命で合理的な判断である。

「・・・・・・・・」

そう思うと、なんだか俺も冷静に成れた。

こんな下らないことでいちいち腹を立てるのもバカらしく思えたのだ。

「ねえ、私もご相伴にあずかって良いかしら？」

そしてこのずうずうしい女である。

「大量に作っているので別に構いませんが・・・・。」

「そう？　ありがとう。お礼にこれあげるわ。」

そう言っただけでクロムが懐から取り出したのは、粉末状の物質が入った小瓶が幾つか。

「この辺じゃ貴重でしょ？ 塩に胡椒に砂糖。インドや中国でも一般的な各種スパイスに、他にも幾つか調味料。必要なら、醤油や味噌だって作れるわよ？」

当然、錬金術に使う目的で持ち込んだハーブもたくさん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

傍目にもエクレシアが唾を飲んだのは一目瞭然だった。

そして俺も日本人である、醤油や味噌の味が無性に恋しくなるときがある。

「資本主義って、いい言葉よねー。」

俺たちの表情を見て、心底楽しそうにクロムは笑っていた。

なんと言うか・・・・・・・・完敗だった。

・・・・・・・・  
・・・・・・・・  
・・・・・・・・  
・・・・・・・・

さて、俺は今日も借金を返すための労働を行う。

ということだ。村の警備の為に巡回を行う訳だったが、今回は違

った。

「なあ、俺たちなんでこんなことをしているんだ？」

「俺に聞かないでくださいよ・・・。」

俺はリザードマンのゲトリスクこと隊長と共に、クロムの量産した石材を荷台に大量に積んで、郊外へ運び出していた。

俺とこの隊長はゴルゴガンの旦那からクロムが約束を守るように監視を命じられたわけだが、どう言う訳か石材運びの手伝いをさせられていた。

俺がクロムの監視役に選ばれた理由は簡単である。

一度彼女に勝利しているからだ。

基本的に一度使った戦法は二度と同じ魔術師に通用しないとこのことを前提にすべし、というエクレシアの言葉を信じるなら全くの無意味であるが。

隊長が居るのは自分でクロムの監視を志願したからである。

旦那も二人一組の方が良いと判断したのかそれを了承した。

なんだか隊長に俺は気に入られている様子だった。

「いやー、手伝ってもらって悪いわねー。この調子なら一週間で終わるかも。」

クロムが指をパチンと鳴らして突然出現した竜巻に石材が巻き上げられて荷台の上に次々と落下していく。なんと言うか、大雑把である。

布と縄で石材が落ちないように固定すると、彼女も荷台を引いて郊外へ歩き出した。

これで往復三度目である。

石材は軽いし、こつしていた方が普通に警邏するより圧倒的に楽な仕事ではあるが、なんだか釈然としない。

「ところで、これはいつ積み上げるんだ？」

「じゃらじゃらと荷台を斜めにして石材を郊外の一箇所に置くと、ふと俺はそのことに気づいてしまった。

「まさか建築作業まで俺たちに手伝わせるつもりじゃないよな？」

「まさか。城壁建築は私が言い出したことよ？ 出来ないことを出来ると言つのは愚か者だけよ。最初から作業開始から終了までの算段はついているわ。」

「それは心強いな……。」  
「当てになるんだかならないんだか……。」

縦に長いこの村の魔物避けの城壁となるので、かなり重労働になるだろう。

流石にそんなのはごめんである。

「ちなみにどれくらいの規模を想定しているのだ？」

「とりあえず村の最北の“壁”から最南端の“壁”までの村の東側を覆う形で建設するから、直線距離で五キロかしらね。

普通にやったら年単位は掛かると思うわ。」

「うえー。」

隊長とクロムの会話を聞いて何だかそれだけで疲れそうになった。

そんな距離を三人で、しかもクロムは一週間で終わるとか言いやがった。

一体どれだけこき使われるのかと想像すれば、そんな気分には陥ってしまっても仕方が無いだろう。

「これが完成すれば魔物の脅威は減るから、城壁の内側の開拓が一気に進むことになるわね。フロンティアの開拓、わくわくするわね  
！！」

「そっぴゃ、西側の奥にある森にも魔物は居るだろ、そっちはどうなんだ？」

ふと疑問に思ったので聞いてみた。

言ってみてから面倒が増えるだけだと思っただ後悔した。

西側は俺たちが住んでるところだし、魔物の住んでいる森は目と鼻の先だ。

気になるのは当然なのではあるが。

「基本的に森に住んでる魔物って縄張りを滅多に出ない。

逆に荒野とか草原に住んでる魔物って放浪して獲物を探すタイプが多い。だから優先順位はそっちの方が高いな。」

「あ、そっぴゃだ。」

隊長が解説してくれて俺も納得できた。

「だが流石に一週間で出来ると言っつのは法螺吹きだと言われても仕方が無いぞ魔術師。規定時間は監視の一環として手伝ってはやるが、それ以外は一切手伝わんぞ。それとも寝ずに作業をするのか？」

意外に隊長は厳しいことを言う。

「では疲れもせず、寝もせず、文句も言わない忠実な奴にやってもらいましょう。」

懐からクロムは三本の試験管を取り出してそう言った。

中にはそれぞれ粉末状の黄色い物体、白い物体、後はドロドロの銀色の奴は水銀か。

「《愚鈍な土くれに仮初の命を与えましょう。私の下僕となりなさい。全てが尽きるまで私の為に働きなさい。言われるがままに。》」  
ひでー、呪文だった。

ぶっちやけ呪文なんて魔術師にとって集中できるなら何でも良いと知ったときは何だか複雑な気分だったのを覚えている。

クロムが逆さまにした三本の試験管の中身は溶け込むように地面に消え去ってしまった。

すると、地面が盛り上がり、人の形となって出現したのである。

「これって、ゴーレムか・・・？」

「ええ、そうよ。」

さらさらと高級だろう羊皮紙に何かを書き込んで、ゴーレムの頭部にピンで留めた。

すると、オークほどの体格もある巨体が滑らかに動き出し、テキパキと石材を並べて建築し始めたのである。



「なんつーか、人間ってすげーのな。」

「あいつが特殊なだけだと信じたいな。」

「何をしているの、私はこれを増やすからさっさと石材を運んでちようだい。」

あ、ああ、と俺と隊長は頷くことしかできなかった。

石材運びもゴーレムにやらせれば良いと思うが、きっとそう言ったら建築するのとどっちが良いかと言われるんだろっとなあ……。

「うんしょ……っど。」

そして、俺たちは一度戻ると、石材を荷台に運び始めていた。全自動錬金装置とやらは今もがしゃんごしょん言いながら石材を量産していた。いつの間にか台数も増えていた。

「隊長はあいつにでかい顔されて文句一つないんですか？」

軽い状態でもそれなりに耐久力があるみたいなので荷台に石材を放り投げながら俺は隊長にそんなことを言った。

「文句を言う前に手を動かせ。」

すると、そんな風に言われて睨まれてしまった。

「いやだつて悔しくないんすか？ あいつのせいで俺たち酷い目にあつたんですけど。」

「終わった戦いの確執をグチグチ持ち出すなど恥ずかしくないのか？」

別に誰も死ななかつたのだ、誰を恨む必要も憎む必要もない、ましてや誰からも恨まれなかつた。戦場に身を置く者としてこれ以上素晴らしいことはあるか？」

「いや・・・その・・・。」  
「思わぬ正論に俺はなんかたじろいってしまった。」

「俺たち兵士は上司である旦那に従う、それに疑問を抱くようじゃお前もまだまだ戦士として半人前だよ、人間の兄さん。」

「いや、だつてさ・・・。」

「人間だつて、何百何千年と支配され続ければ分かるさ。」

俺はまだ幸せだよ。好きな相手を主人として仰げるんだからな。故郷の仲間たちは、それすら叶わずただ生かさず殺さず真綿の首輪で飼われ続けている。」

「・・・ッ」

俺は息を呑んだ。

リザードマンは俺がクラウンの奴に拾われるずっと前から、ドレイクの支配下に置かれていたらしい。

どれくらいそれが長いかは知らないが、少なくともドレイクの手下だと有名になるくらい長い間ずっとそうなのだろう。

「お前さんには妙な仲間意識を感じまうのはそういう理由があるのかもしれんな。」

別にお偉いさん方の為に戦うことに敵と疑問はねえが、あの方々は時々無意味に血を見たがる。それで同胞同士で何度剣を取ったかわからねえ。

いつ俺が仲間と戦えと命じられるかビクビクしていたさ。

こっちに出稼ぎにくるって名目で逃げ出してこなきや、俺は今日生

きているかどうかすらわからねえ。そうでなかったら仲間を裏切つても逃げ出したかもしれん。

同族殺しは魔族最大の禁忌だからな。少なくとも俺は死んでも嫌だった。」

「……同族殺しをした魔族はどうなるんだ？」

「同族同士は戦場で敵として出会っても、殺さずに見逃してお上に許される理由にすらなるんだぜ。同族を殺した魔族は、少なくとも仲間と同じ所には居られねえよ。良くて追放、最悪処刑だ。

運よく追放で済んでも、そいつはどの種族からも一生信用されねえ。昔から争い続けてきた俺たち魔族だが、同族の間で殺し合ったりはしなかった。」

それはどこか誇らしそうに、隊長はそう言った。

「……人間は同族同士で何千年と戦い続けてきたんだろ？」

俺にはそんな恥知らずな真似をしてのうのと生きていられる理由がわからんね。」

「ああ、本当にそうだよな。」

魔族の価値観は時々俺には分からないときがある。

人間の魔術師の価値観ですら理解できないんだから、俺如きが人間の何かを理解できる日なんて遠くずっと先なんだろう。

だが、一つだけ分かったことがある。

人間の犠牲を上に成り立っているとか、人は支えあって生きているとか、とんでもないきれいごとであると言うことだけだ。

自分たちの愚かな行いを、正当化するためだけの言葉なのだ。

人は同族と争って発展してきた。

肌の違い、言語の違い、習慣や宗教の違いを理由にしてきて。

それは魔族から見たら、どれだけ愚かなことなのだろうか。

彼らから見たら、人間は人間でしかない。

俺を含めた人間は、そうやって愚かしく種を存続させてきたのだ。

「（何を考えてるんだ俺は……）」  
人間がどうちやらこうちやら言ったとしても、自分の罪は消えやしないと言っているに。

俺はもしかしたら、自分を正当化したかったのかもしれない。

……エクレシアも、同じ気持ちなのだろうか。

俺の住んでいた国では、神様なんて鼻で笑われるような存在に成り果てていた。

今の科学の基盤だって百年先の人間にきつと同じように鼻で笑われているのだろうに。それを理解していない人間はとても多い。

それでもエクレシアの信じる神様は廃れなかった。

人間結局、神様無しでは生きられないのかもしれない。

・・・俺も随分と信心深くなったものである。あいつのお祈りに毎日つき合わされているうちに、感化されたのだろうか。

「隊長、あなたはそんな人間は馬鹿馬鹿しく思えるのか？」

「ああ。馬鹿馬鹿しいね。下らん連中だとは思うよ。だが・・・。」  
隊長は一度言葉を切って、俺を見やった。

「どんなに救いようのない種族だろうと、生き続けようとする事に理由はないだろう。崇高な目的やら理念やら理想やらを掲げるのは結構だが、結局はそれに尽きると俺は思うね。」

「ああ、そうだな。」  
今も昔も、それだけはどんな種族も絶対に変わらないのだろう。

魔族からしたら救いようのない恥知らずの俺だって、その辺で野垂れ死にたいとは思わない。

まあ、それこそが、救いようがないって事なんだろうけど。

あ、それは魔族も同じか。最終的にイコールにならない方程式みたいで、何だか笑える話であった。



## 第二十話 マイスター

「いやー、助かってるわ。お陰で本当に一週間で完成しそうよ。」  
クロムの奴は上機嫌そうにそう言った。

図々しく今日の夕食にまで割り込んでやがる。

「夕飯まーだー？」

「もうすぐ出来ますよ。村の人たちの危険が減るのは喜ばしいことですね。」

エクレシアはそう言って中華鍋に調味料を振りかけている。  
クラウンの奴はいつも通りである。

「城壁が完成したら今度は農地の作成の為に農具を鉄で補強をして、その次は肥料かしらね。個人的には要塞を建築して対空砲火でも充実させたいと思っているんだけど。」

「おい待てこら。何でそんなもんが必要なんだよ。」  
戦闘機でも飛んでくるっていうのかよ。

「えー、だって、こつ重厚とした要塞ってなんか格好良くない？  
こつ、なんか、圧倒的な弾幕でさ、こつ、敵の攻撃を寄せ付けけない

分厚い防壁って、なんかロマンじゃなーい？」  
少なくとも女の魔術師の発想ではない。

「ガトリング砲とか何門も設置してさ。あのくるくる回る砲身っていいわよねー。派手にじゃららー、って排莢するのも最高よねー。周囲の文化レベルに合わせるとか言われてるけど、ぜーったい申請で通して見せるわ。ひゃっほー!!」

時々こいつのテンションの高さについていけない。  
だがガトリング砲は素晴らしいな。うん。

「あー、そうそう。今日は頼まれてたこれを持ってきたんだけど。」  
「後でいいよ。後で。」

布でくるまれた棒状の物体を取り出したクロムだが、クラウンの奴の優先順位は晩飯の遙か下であるようである。

「触媒は魔術の生命線じゃない。・・・それを後でだ何て信じられないわね。あとで個人的に魔力パターンに合わせて調整しないと、杖に魔力の通りが遅いとか話にならないわよ。」

「一流の魔術師は触媒にこだわらないらしいけど？」

「一流を超えるにはそれに相応しい触媒が必要なのよ。当然じゃない。」

多分自分の数倍は生きてるだろうクラウンをまるで素人扱いであるこの女。

「錬金術は触媒が命だと聞きますからね。」

「悲しいことに触媒がなければ何も出来ないジャンルの魔術だからね。そりゃあ、こだわわるわよ。品質から産地は勿論、製造方法まで



詳しく知らないとまったく信用できないわ。  
もう面倒だから自分で使う物はだいたい自分で作ってるのよ。」  
もうそこまでいくとそのこだわりも異常な領域だと気づいているんだらうか。

「なあ、魔術師ってみんなこんな奴ばかりなのか？」  
「なにかしら偏執的になる傾向は多いらしいですが、詳しいことはなんとも。」

エクレシアはそう言った。確かに偏執的と言えばそうなのかもしれない。

「私なんてまだまだだよ、名前からして『パラノイア偏執狂』なんて呼ばれてる魔導師なんて居るんだから。一度会って話してみたけど、アレは酷かったわ。会話なんて成立しなかったもの。  
あんなのと交渉できたあの人の気が知れないわね、あはははは。」  
何が可笑しいのクロムはかケラケラと笑った。

「・・・あのおぞましい魔女と会ったのですか？」  
「ええ、他人の体に乗っ取ってどうやったら拒絶反応が出ないようになるとか色々聞こうとしたけど、まあ、結果は今言ったとおり。  
あれほどのネクロマンシーの使い手は他に・・・なんて言ったかしら、闇のなんちゃらって奴くらいだけじゃない？」  
何だかすごい会話である。

「他人の体に乗っ取って・・・やべーなそいつ。」  
「どちらでも聞くだけで穢れるような悪名高き邪悪な魔術師ですよ。」

エクレシアが邪悪とまでいうくらいだから、それはもう邪悪なんだろうな。

俺には全く想像ができないが。

「僕もおや・・“代表”から聞いたことがあるね。

事実上の不滅を体現した恐るべき魔術師だって。生きることに対して文字通り偏執的だって聞いたよ。その為に肉体を捨てて他人に乗り移って永遠に行き続けているとか。」

「事実上の不滅ねえ・・不死だとか不老不死だとか、こつちきてから何度聞いたか分らんね。そんなことまでして生きたいのかね。」

「と云うかそれはもう生きてるって言えるんだろうか。

俺はクラウンの語った魔術師に何だか疑問を覚えなくも無い。」

「死なない“だけ”なら魔術には色々と方法はあるのよ、一般的な才能でも到達できるものも多いわ。手段を選ばなければ、という前提があるけど。」

「聞くだけで反吐がでそうな方法なんだろうな、それ。」

不老不死は人類の夢だろうが、聞きたくも無かった。

「死に瀕すると人間なんでもするものよ。だから私たち魔術師が誤解されやすい。それも何だか悲しいわね。」

「進んで誤解されてもおかしくないようなことをしておいて、クロムの奴はどの口で言うのだろうかこの野郎。」

「食事の前にするような話じゃありませんよ。」

エクレシアは料理を盛り付けられた大皿をテーブルの上に置いてそ

う言った。

「何を今更、死体を前にして平気で食事が出来る面子じゃないか、僕は。」

クラウンが最後にそう言って、彼は何が可笑しいのかそのまま笑い声を上げた。

・・・そう、クラウンは最後にそう言ったのだ。  
誰も彼の言葉を否定しなかったのである。

エクレシアも、俺もである。

多分彼なりの冗談なのだろう。  
経験上、場を和ませようとそう言ったに違いない。俺も大体こいつのことが分かってきたのである。

ただ残念なことに、人間と魔族とのセンスの差は大きく、そして決定的にかけ離れていたわけであるが。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ぶくく、なにそれ。」

さて、食後の運動とばかりにエクレシアとの稽古が待っているわけだが、彼女の持つハルバードもどきを見てクロムは可笑しそうに笑った。

「一応、ハルバードのつもりですが。」

「重心も重さもバラバラじゃない。そんなの武器以前のただのオモチャよ。」

クロムはそう言うと、その辺に積み重ねていた運び出す予定の石材を幾つか手に取ると、指を鳴らした。

瑠璃色の淡い光が石材を包むと、ぐにやぐにやと形を変えて、それぞれどこか材質すらも変化させて長大なポールウエポンへと変形したのである。

「それ、あげる。」

「どういっつもりですか？」

「あら、聖職者が人の親切心を疑うの？」

投げ渡された鉄のハルバードに、訝しげな視線をクロムに向けたエクレシアは、軽くそうあしらわれてしまった。

エクレシアはともかく、俺は当然疑っている。

こいつは親切心なんて欠片も無さそうな女であるからして。

「人間は人間らしい武器を使うべきでしょう？」

即席で作ったお粗末なものだけど、まあ、武器として最低限の要点は踏まえてあるはずだから……うーん、やっぱり納得いかないわね。」

何が琴線に触れたのか知らないが、やっぱりエクレスシアからたった今作ったハルバードを取り上げた。

「やっぱり聖職者が使うんだし聖なる加護ぐらいは付けたいわよね。」

強度も不十分だし、装飾も付けてアミュレットにしたいし、重さも調節して……最低限切れ味は三倍にしたいわねえ。」

屈みこんでなにやら地面に数式っぽいものを書き連ねてぶつぶつ何かを呟いているクロム。

正直怖い。

「あの、別に私はそのまま結構ですので……」

「あまーい、私の作る武器は完璧じゃないとだめなーの。こんな凡人なんて千人切ったって平気なくらいにね!!」

凡人で悪かったなこの野郎。

と言うか、何だかクロムの目の色がさつきまでとまるで違う。

「私の趣味は武器作りなのよ。作るからにはとことんこだわるわよ。それはもう、ナイフだろうと銃器だろうと、なんだって大好きなの。あ、趣味だし当然御代とか別にいらさないわよ。ただ使ってくれて、可能なら使い心地とか感想とか教えてくれるだけでいいの。私はそれで幸せだから。」

クロムは思わず俺やエクレシアも後退りするくらいうっとり陶酔したような不気味な笑みを浮かべていた。

なんと言っか、心の底から楽しそうなのはわかった。うん。他人の趣味をとやかく言うつもりはないが、なんというか、うーん、怖い。

そう、怖いよこいつ。十分に偏執狂である。

「要望はある！？ 延びたり縮んだり、爆発したり、ドリルみたいに回転したり、ビィイイムが出たり、なんだって良いわよ！！」

「い、いえ、普通であればそれで……。」「なるほど、強度が欲しいわけね！！ 武器は何より信頼性が重要なものね！！」

オツケー、明日までには作っておくからね！！ ひゃっほーい！！」「……………」  
クロムの奴はそのまま自分の家に入って行ってしまった。

……………あいつが楽しそうで何によりである、とでも言えば良いのか、これは。

その日、クロムの奴は城壁の建築現場に現れなかった。

作業はゴーレムが行っているし、石材を量産する機械も向こうに移してあるから、今日俺と隊長はその残りを向こうに持っていく予定であった。

一夜でだいぶ建築作業は進んでおり、もう数百メートルは出来上が

っていた。

城壁の高さは三メートル、厚さは五十センチくらい。  
レンガ状のブロックである石材を並べる複数のゴーレムと、それを  
堅くする薬品を掛ける作業をするゴーレムが役割分担をちゃんと  
されて建築を行われている。

石材の継ぎ目は薬品が掛けられるのと同時に接合され、一つの塊に  
なるようだ。

確かにこの調子なら一週間で完成するかもしれない。

とりあえずその日は隊長と石材を全部郊外に運んで、クロムの様子  
を確認してすることになった。決してやることなく暇だからで  
はない。

命令されたことしか出来ないお役所仕事の性である。

仕事の結果を報告、通常業務へ戻ることを命じられない限り、俺た  
ちはクロムの監視という任務は解けないのだ。  
まあ、俺は楽だから良いのだが。

「おい、クロムー。」

ドアベルみたいなのは付いてなかったので、ドアをノックして俺は  
声を掛けてみる。

「うおお・・・!?!」

なんだか、ふにゃん、としたのである。ドアが。

つついて見ると、なんだかぶよぶよとゴムみたいにぐにぐにしてい

た。

よく見ると、家に継ぎ目なんて一つもなかった、全部一つの物体のようだ。きつとゴムかなんかで、空気で膨らまして出来ているのだろう。

「……………」

ディテールが凝っていたので気づかなかったが、一晩でこんな一軒家が出現したトリックはこれだったようだ。

ぶよぶよしているがそれなりに堅いので、一応壁として機能はしているようだ。

そんなことは、まあ、どうでも良いが、呼んでもちっとも出てこないぞアイツ。

「うっひひひひひひ、こんなもの付けたら最高よねー、あははははー！」

「今日は諦めようぜ。」  
耳をドアに付けたらそんな奇声が聞こえた。もう嫌だあの女。なんかガリガリガリガリって音も聞こえるし。こえーよ。

「そももいかんだろ。仕事は最後まで全うせねば、誰からも信用されなくなるぞ。」  
隊長は相も変わらず律儀な仕事の男である。

かといって、あんな状態のクロムがこっちに気づくかどうか微妙だし、なにより関わりたくない。



「ん？ 誰かと居るのかと思ったら、あんたたちなのね。」  
俺が途方に暮れていると、ドアが開いた。  
そこからなぜかサイリスが出てきた。

「あんたは、ラミアの婆さまのところの弟子じゃないか。」  
「何やってんだお前？」

隊長も俺も目を丸くして意外な人物が出てきたことに驚いていた。

「師匠がね、この辺りじゃ手に入らない素材の使い方を覚えてきなくて、マイスターの手伝いをさせられているのよ。」  
サイリスの表情には真に遺憾であると確りと刻まれていた。  
多分マイスターというのはクロムのことだろう。

「実際やらされてるのは鉾石を粒子状になるまで砕いて研磨剤を作る作業ばかり。まったく嫌になっちゃうわよ。」  
マイスターなら奥に居るわ、と言ってサイリスは戻っていった。

すぐにガリガリガリガリと耳障りな音が聞こえてくる。  
・・・アレは研磨剤を作ってる音だったのか。

「おいクロム、資材の運び出しが終わったから、一応任務の続きでお前の監視に戻るわけだが」  
「うるさい！！ 気が散るでしょうー！！」

「……………」  
どうしろっちゅうねん。

「俺だって好きでやってるんじゃないだよ!!」  
「うるさいって、言ってるでしょうがああ!!」  
二度目の怒鳴り声の後は、クロムがドアを蹴り破ってそう言った。

なんか手には軽機関銃を持っている。有名なM60だろうが、見る影もないほど改造が施され、重くて取り回せるのかと素人にも思うほどだ。

「わー!!　わー!!　分かった、分かった、俺が悪かったから撃つな!？」  
血走った目で銃口を突きつけてくるもんだから、俺は両手を挙げることしかできなかったのである。

「私の開発部が作成した最新兵器よ。地上のあらゆる銃火器の性能を凌駕している理論上最強の汎用機関銃だけど、試してみる?」  
「わーお。」  
突き付けられた銃身の側面に『Der Freischütz』と刻まれていた。

「ドラゴンだって削り殺せる火力に耐え切れる自信が無いのなら、私の楽しみの邪魔はしないことね!!」  
ボタン、とドアを閉めてクロムはそう言い捨てた。  
多分次はドア越しに撃ってくる。絶対に。

「……帰ろうぜ？」

「いやしかし……。」

「責任は俺が取るからって旦那に伝えてくれ……。」

「お、おう……。」

俺の切実な頼みに流石の隊長も頷いてくれた。

あいつがいう理論上最強の機関銃がどれほどの性能かは知らんが、リボルバー二丁分の銃撃ぐらいしか耐えられない俺の防護の魔術じや機関銃になんて太刀打ちできないだろう。それこそ、武器に対する耐性でもなければ。

どちらにせよ、魔術師とか言う連中は理不尽な奴らである。俺はもう、とにかく今日は帰って寝たい気分である。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「ねえ、見て見て！！　ちゃんとしておいたわよー！！」  
さて翌日の早朝、いつもの食後の稽古の時間である。

「いやー、早く渡したくてうずうずしてたんだけどね、色々と構想が浮かんじゃって結局徹夜しちゃったのよー。」

「はぁ……。」

いつもニヤニヤ笑ってる顔にクロムは満面の笑みを浮かべるもんだから、エクレシアも若干引き気味である。

「細かいチューニングして癖とかを調整をしたいから、とりあえず持ってみて。魔力流して調子を見せてよ。場合によっては作り直す必要があるし。」

「そこまでするのかよ……。」

「触媒としての機能も持たせているからね。スムーズに魔力が通せるように調整用の魔具を取り付ける場所によっては重心の位置とか変わっちゃうから、オーダーメイドって結構面倒なのよ。」

面倒とか言っている割にはとても楽しそうな表情はまったく消えていない。

「どんな感じ？ 変な圧迫感とか、抵抗感とか、そんなのなーい？」

「特には……。」

エクレシアがクロムから渡されたハルバードは昨日より一回りくらい大きくなっていた。

なんか真っ赤な布地に黒い糸で十字架の刺繍がされた飾り布も斧頭の下の辺りに追加されているし、反対側の突起にも短剣のように鋭い刃が付いている。

「シンプルなものでも十分だったのですが、これはまた難易度が高い・

「。。。」

剣だって使用には熟練が必要だが、ハルバードだって状況に合わせて的確に使用方法を切り替えるためにそれなりの熟練を要する。それに更に飾り布や突起には短剣まで付いている。

これを完璧に運用するには、まさしく達人と呼ばれるような技量が必要だろう。

エクレシアは手に取っただけで身の丈に合わない武器だと判断したようだ。

「こう、くるくるーって、バトンみたいに振り回すように使うことを想定しているから、軽さと取り回しの良さを重視したのよ。

強度と両立するためにキャパシティを全部使っちゃったから、ギミックを仕込んだりして遊べなかったけど。まあ、概ね満足な出来かしら。」

「遊べなかったってなんだよおい。」

確かに業物と言えるだろう完成度だろうが、所有者に要求される難易度がそれに比例して高い。

少なくとも十九歳の小娘には少々荷が思い武器だろう。

「とりあえず聖水とかに浸したり、古いアंकから聖なる成分を抽出して移植してみたりしたんだけど。強度はデュランダルと同じ術式を採用して組み込んでいるから、何を斬ったって刃こぼれしないはずよ。」

「一応あなたの実力に合わせて作ったから、そっちの分不相应な剣よりは使いやすいと思うけれど、どうかしら？」

「。。。。ええ、悔しいながら。」

二メートル以上の長柄のハルバードを軽々と振り回しながら、エク

レシアは頷いた。

「自分の実力に合わない武器を使うなんて三流よ。」

「シンプルな構造だから良いものの、緻密な魔術品なら術式が暴走して酷い目にあつたりするんだから。」

「どうやらクロムの奴が見ているのは魔術師としての技量だけで、武器の使い手としての技量はそっちのけのようである。」

「もしかして俺も実力にあつてなかつたりしてるのか？」

俺は思わず手に持っていた魔剣に目を落とした。

暴走して酷い目に遭うとまで言われると、なんだか急に不安になってきた。

「してるわね。でも調整がかなりの確に施されているみたいだから暴走したりしないわよ。でも、本来のスペックの九割くらい殺されてるわよ、それ。」

「きゅ、九割も・・・？」

「あんたの実力不足ってことよ。」

「・・・・・・」

この場で、ことマジックアイテムに関してこいつの右に出るものは居ないのだから、俺はショックを受けてしまった。

「魔術の触媒って本来、魔力に指向性を持たせるる過装置にして、概念を補強する増幅器なの。逆に持ち主に負荷を掛けるようじゃ、水の中を歩いて重しを持って戦うようなものよ。」

「重し・・・。」

「あの『黒の君』が電撃を出すだけの魔剣を作るわけがないじゃな

い。  
まあ、身の程を弁えろって事よね。うーん、なかなかうまく調整できないわね。吸い付くみたいなき感じで手に馴染むようにぴったりフィットしない？」  
シヨックを受けている俺を尻目に、クロムはエクレシアの手にあるハルバードに色々と何かを取り付けている。

「軽くて十分扱いやすいと思いますが。」  
「ああ、こういうオーダーメイドの武器って作ったこと無い感じ？持ち主の魔力の波長パターンと適合すると、自分の体の一部みたいに思えたりするのよ。そうなるとスペック以上の実力が発揮できたりするんだけど……。」  
「どうやらクロムはエクレシアに合わせて調整するのに四苦八苦しているようだ。」

「……ねえ、ちょっとこれを持ってみなさい。」  
「え……？」  
「ちよつとした計測器よ。バイタルサインとかを調べる装置を、生命エネルギーたる魔力を計れるように転用して小型化したものよ。」  
「そう言つてクロムは懐から取り出した小さなモニターから延びたコードをエクレシアに押し付けた。」

「うーん……これはダメね、魔力が不安定な状態じゃない。何かトラウマにでもなるような精神的なシヨックでも受けたりしたのかしら？」  
「それは……ッ」  
エクレシアの表情が傍目からでも引きつったのが分かった。

「はい凶星ね。神って言う絶対的な概念的支柱が存在する魔術の使い手には珍しい症状ね。それも精神攻撃とか呪術に耐性のある魔術体系のあなたが、皮肉なものね。普通なら魔術なんて使える状態じゃないわよ。」

「……ん、まさか、あなた……。」

「おい、いい加減にしろよ。」

俺は思わずそう言って、クロムを睨んだ。

なぜだか、この女にそれ以上を言わせてはいけない気がした。

しかし、クロムは子供のように純粹だった笑みから一転、悪意ある嫌みったらしそうなムカつく笑みを浮かべた。

「あなた、神が信じられなくなってるんじゃないか？」

「ッ……。」

自覚は、あったのだろうか。

エクレシアは、息を詰まらせたように何も言い返さなかった。



「道理で。あなたから感じる才気に対して変に実力が伴っていないとは思ってはいたけれど、そんな状態じゃあねえ。」

「おい、止めるよ。」

「あら、ここは彼女を庇うところじゃなくて、不信者として吊るし上げるところじゃないの？ こいつらはそんな些細な理由で何の罪のない人間を殺してきたんだから。」

それはもう、心底可笑しそうに笑いながらクロムはそう言った。

「誰だつて、あんなこと経験すればああなる！！」

「だーからー、そんな精神状態になるって事自体がダメなんだつてばー。」

言っておくけれど、彼女こんな状態じゃあなたより役に立たないわよ。」

それは、どこかで聞いたことがある台詞だった。

そう、確かエクレシアをクラウンが連れ去ったとき、あいつは俺よりも役に立たないとそう言った。

「（あの野郎、初めから気づいていやがったのか！！）」

エクレシアがそんな状態だつてことを分かっていて言わなかったことに憤りを感じるが、どうせあいつは人間と物事の価値観が違う。

いや、今はそんなことは後回しだ。

「人を役に立つか立たないかで見れねえのか、お前は！！」

「それが人間の社会つてものでしょうか？ 魔族だつてそうみただし、あなたがそれをどうこう言う権利はないと思うけれど？」

それとも何かしら、私が間違っていることでも言っていることでも？」「この野郎！！」

ム力つく話だが、こいつの言っていることは多分正しい。

世の中にはそういう風に物事を見ないといけない人間が必要な場合もある。

多分こいつが指摘しなかったら、俺なんかエクレシアの精神状態に気づかずずっと泥沼に陥っていた可能性すらあっただろう。

だけど、どこかの国のことわざにこうあったはずだ。

正論ほど人をイラつかせるものはない、と。

まさに今の俺はそれだった。

彼女は確かに正しいことを言っているのだろう。

だがこんな状況で、そんな言い方で言う必要性は全くない。

こいつは、楽しんでそんな風に言っているのだ。

「存外に甘い男なのね、あなた。実はそういうの、嫌いじゃないわよ。」

あなたみたいな格下が、私に対してそんな風に付け上がりたりしないと言う前提はあるけれど。」

こいつは多分、天才だ。

他人をイラつかせる天才に違いない。しかも自覚があると来てる。

「ほら、来なさいよ。男には勝てないと分かっているでも挑まないと

いけないときつてあるじゃない？ 多分あなたが人間の男ならここで一発殴りにきても当然だと思っただけれど？」

ここ数日間で分かったこいつの人となりから、こいつが大好きそうなシチュエーションである。

享乐的で、理論じみた完璧主義者のくせにロマン思考、それがクロムに対する俺の印象だ。

「誰がそんなお前の喜びそんなことをするか。」

「あら、残念。肝っ玉は意外に小さいのね。」

言わせておけばいい。個人的には殴ってやりたいが、どうせ大人しく殴られるような女ではない。

それに、今こいつと争って徳なんて何一つない。別に勝てないからじゃない。

「気にすんなよ、エクレシア……。」

「……。」

彼女は、何も答えなかった。

ただ何かに堪えるように、震えているだけだった。

「はぁ……つまらないわね。」

まるで見かねたとでも言うように、クロムの奴が溜息をはいた。

「これ、貸してあげるから一度騎士団の本拠地に帰って自分を見つ

めなおしたほうが良いと思うわよ。」  
クロムが取り出したのは、こいつが魔族の領地を歩いても言いとされる『マスターロード』直々の許可証である。

「これがあれば、上層から人間でも昇降魔方阵で第十層以下までいくことが出来るようになるわ。逆に下層から十層からそれ以上の階層に行くこともね。」

「・・・どういっつもりですか？」

「私はそいつが言ったとおり、他人を役に立つか立たないかで見れないの。」

私に協力してくれそうで、なおかつ魔族の領域を歩ける人間は限られている。そんなあなたがそんな状態でいられても困るのよ。」  
本当に自分勝手な理由だった。

「それに何よりね、せつかくあなたに合わせて作ったのに万全の力を発揮されないなんて、この子が可哀想じゃない。ねえ？」

そしてクロムは自分が作ったハルバードの柄に手を艶かしく這わせてそう言った。

「それが本音かよ。」

更にどうでもいい理由だった。

「それが一番重要なことじゃない!？」

武器に対して何がこいつを駆り立てるのは知らないが、逆に俺を睨みつけてそう言ってきた。

なんと言っつか、こいつのキャラの濃さには生涯勝てる気がしない。

「……わかりました、一度、大聖堂へ帰ろうと思います。」  
「おい、良いのか？ エクレシア。あいつらは……」  
俺は彼女の選択がどうしても正しいとは思えなかった。  
なにせ、連中は彼女を見捨てるも同然の任務でこんな地獄みたいなところに派遣したんだから。

「それも含めて、聞いてこようと思います。」

恐らく、『カーディナル』は全てを知っているはずです。『黒の君』を除けば、魔術で全知全能に限りなく近い領域へ辿り着いたのは彼女だけですから。」

「……」  
「それに今行かないと、多分私は帰る場所を無くしてしまいます。」  
帰る場所、か……。

「……分かった。クラウンの奴には俺から言っておく。どうせアイツもお前のことは察しているだろうから気にすんな。」

「私が逃げたりするとは思わないのですか？」

「お前が俺を見捨てて逃げるような奴なら、そもそもそんな状態になるわけがないだろうが。」

バカ正直なくせに、エクレシアはバカではいられない。

現代の社会やこんな場所では、それほど辛いことなんてないのかもしれない。

「それとも、逃げてても良いって言ってほしいのか？」

「まさか。」

それは嘘だろう。

こいつが背負った十字架は、あまりにも重い。

重くて、重すぎて、歩くことすら出来ないはずだ。

だから聖職者として、絶対にありえないようなことを考えてしまうようになった。

そういう時こそ、神に縋るべきだろうに。

こいつは、バカみたいに真面目で、正直だから……。

「………逃げても、良いんだぜ？」

「まさか。」

俺は神様のことなんてよく分からないが、少なくとも、エクレシアがこんなところに居るべきだと思えない。

こいつは、もつと違うところでちゃんとした方法で人を助けることが出来るはずだろうから。

そうすれば、いつか、きっとありえないだろうけれど、十字架が軽くなる日が来るかもしれない。

「良い事教えてあげましょうか？」

にやにや、とクロムが笑いながら言った。

「“賢者の石”が完成すれば、どんな悪いことをしたって天国へ行けるわ。」

「はあ？」

「不老不死だとか、黄金だとか、そんなの俗物なものは所詮錬金術の表面的なことではしかないってことよ。」

私は“賢者の石”を究極のろ過装置にして、投影機だと考えているの。

どんな穢れた魂だって浄化してしまえるでしょうね、魂の再構成や本来存在していなかった才能の付与だって可能になる。

それこそ、神にだって、成れる。」

神様になる。

それは、クラウンがいつか言っていた、ほぼ全ての魔術師の最終目的。

魔術の究極であると。

「それって、たとえば悪魔に魂を食われていたとしても大丈夫なのか？」

「無から有すら生み出す奇跡くらい、簡単よ。多分ね。」

いいえ、人の考える大よその奇跡は可能となるでしょう。

まあ、更にその上となる物を作りたいなんて先人を冒瀆するようなものだけど、向上心の無い人間なんて、生きる価値はないもの。」

クロムが言っていることが、どこまで本当かは分からない。

こいつこそ悪魔にだって匹敵するような奴なのだから。

「あら、疑っている目ね。でも優秀な魔術師は基本的に嘘はつかないわ。  
だって魂の価値とかが下がっちゃうもの。嘘なんてつかなくても騙すのが一流の魔術師って物よ。そうでしょう?」  
「どうだか。」

「別に、お前がエクレシアに肩入れするようなことを言うなんて思えなくてな。」

「しょうがないじゃない。ユニコーンの角とかエリクシールを作るときにどうしても欠かせないんだから。それが無いと“賢者の石”が作れないもの。」

「私みたいな女がユニコーンに触れられると思う?」

「ごもつともである。」

「しかし、自覚しているようだからなお性質が悪いのだ、こいつの場合。」

「だから、俺のところには必ず帰って来いとか言えないそのうだつの上がない男に代わって私が言うわけ。」

「そんな見返りがあるわけだから、私を裏切ったら、殺すわよ。必ずね。」

「おいてめーふざけんなよ。」

「誰がうだつの上がない男だって、この野郎。」

「話は聞かせてもらったよ。」

「すると、家の中からクラウンの奴まで出てきた。」

「こいつ耳はいいからな。普通に聞こえてたんだろっとなあ。」



「じゃあ、ごうしよう。君が帰ってこないようなら、メイの待遇を百倍くらい悪くしよう。毎日酷い目に遭わせよう。」

「え、ちょ、お前ふざけんなよ!?!」  
何でそうなるんだよこの野郎!!

「だってペナルティがなきゃつまらないじゃないか。期限は一週間くらいでいいかな。僕は気が短いから、それを過ぎたら僕は君を逃げたとみなして変わりにメイに罰を受けてもらうことにするよ。」

人間が想像できるような甘っちょろいことはしないからね?」  
ぞくつと、背筋に冷たいものが走った気がした。

「そうですか、では逃げることは出来ませんね。」  
そう言ったエクレスシアは、何だかどこか安心したようにすら見えた。

「必ず帰ってきますよ。あなたを見捨てるようなことがあったら、私はそれこそ生きていく価値なんてないでしょうから。その時は、己の信仰を証明して見せますよ。」  
「そんなのは別にいいから、ちゃんと戻って来いよな、な?」  
俺はこのとき必死にエクレスシアにそう頼んだが、その時は知らなかったのである。

己の信仰を証明するとは、彼女の所属する騎士団の連中の隠語なのだ。

「ええ、必ず。」

ここは、地獄。この地上のある、悪魔に属するものが住まう本物の地獄。

そこに帰ってくるのが、自分の罰だとも言うように、エクレシ  
アは頷いた。

## 第二十一話 マスター・ジュリアス

「そろそろ、戻ってくるだろうとは思っていたよ。」  
私が大聖堂の騎士団本部に戻り、マスター・ジュリアスの執務室を訪ねると、開口一番に彼はそう言いました。

「騎士エクレスシア、貴殿の報告を聞かせてもらおうか。」

「無期限の任務からの勝手な撤退、これは任務放棄にはならないのですか？」

「お前は真面目だな。ではお前を指揮していたのは誰だ？ その場  
の上官の命令に逆らったわけでもないお前を罰することは出来んよ。」

現場は現場だ、とマスター・ジュリアスは語りました。  
当然ながら、詭弁です。

「お前は特務を遂行していたと言う自覚が足りないようだな。」

超法規的措置とでも言うのか？ 後ろ暗い任務をさせているのだから、それを表沙汰にするようなことはできないのだよ。」

「やはり、マスター・ジュリアス……。あなたは魔族がどうい  
う存在か理解なさっていたのですね？」

「当然だろう。私は第二十九層にある“大図書館”の閲覧を許されている。」

そこには我々がこの地球に来る以前の歴史が全て保管されている。当然、魔族と呼ばれている連中のことについても知っている。」

「まるで、私がテロリストのような物言いだ。」  
超法規的措置とは、基本的に国民的を人質に取られた国家が理不尽な要求に屈して法律を無視する行いをする事だ。

それは、教義に逆らう行いをした私への皮肉のつもりなのでしょうか。

「お前の人権を守るためだと言えば聞こえは良いか？」

魔族に与する任務など、正気の沙汰ではないからな。私も出来る限りのことはしてやるつもりだ。」

まるで初めから用意してあったかのような応答でした。

いや、彼にとって予想できる程度の質問ばかりだったに過ぎないのでしょう。

彼にとって、本当に折込済みなのでしょう。

私がここに帰って来ようが、魔族の地にて屍になろうが。

「では、『カーディナル』に会わせてください。」

「なに？」

「出来る限りのことは、しでくださるのですよね？」

私ができるように言うと、彼は一瞬驚いたような顔をしました。すぐにニヤリと笑ってみせました。

「ああ、直接の報告を『カーディナル』は求めている。

ただ、彼女は今、無粋で急な来客に対応を追われ、取り込んでいる最中だ。それが終わればすぐにも会わせてやる。」

彼にとってはそれすらも想定済みだったのでしよう。ただ、私からそんなことを言い出すとは思っていなかった、そういうことらしい。

基本的に『カーディナル』への取次ぎは誰にでも可能であるが、彼女は多忙なため優先順位の関係で会えるのが数年先というのもざらです。

私も何かの行事などでしか会ったことはない。

「詳しいことは『カーディナル』に聞くべきだろう。

名目上は騎士団の長は“グランドマスター騎士総長”だが、騎士団の運営方針を決めるのが彼女であるのは周知の事実だからな。」

「はい。」

「だがそれとは別に、私も個人的興味がある。『カーディナル』への報告とは別に、お前から見て魔族はどんな連中だったか教えて欲しい。」

「マスター・ジュリアス、私は……。」

「ちなみにこれは全く関係の無い話だが。」

すると、突然彼は私の言葉を遮ってそう言った。

「私がまだ若い頃の話だ。

信仰の篤いとても若く将来性もある真面目な司祭上がりの異端審問官が居た。

彼は管区長となるべく従士としての過程を消化し、騎士としての位階を得た後、司祭として働き、見事その働きが認められいよいよ異端審問官へとなれた。

後はその過程を消化し、総長から叙階を受けるだけであった。

彼は貧困に喘ぐ家系を苦に育ち、そのまま出世して家族を楽にした

いとよく言っていた。……私の、無二の友でもあった。どこか懐かしむように、マスター・ジュリアスは語りだした。

「管区長に選ばれるには、従士として教えを請う騎士に位階を貰い、司祭として五年以上働き、異端審問官として三年以上……でしたか？」

「その通りだ。更にその中から選出されるパラディンから更に成績が良いものにだけなれるのが、管区長だ。」

私は一応確認までにそう問うた。

出世には興味がなかったのだ、その辺りがあやふやだったのです。

そう一口で言うのは簡単ではありませんが、それは非常に難関とも言える過程だ。

まず従士から騎士に格上げされるかどうかは、師とした騎士の裁量次第であるから、十年経っても騎士になれない者も居る。

司祭になるにもまず助祭にならなければいけないし、その為にはかなり勉強する必要があるらしい。

そして、異端審問官は騎士の位階を持つ中でも更に司教の位階を持つ者にしか成れない超が付くほどのエリートだ。

時には死刑すら執行する彼らが簡単になれるはずもないのは当然の話ですが。

更に、我々の通称は“パラディン聖堂騎士団”ですが、その中でも特に優秀とされる部隊には“近衛侍従聖堂騎士団”と書いてパラディンという本体正しい意味で最高位の称号が与えられる。

その中から選ばれる管区長は、文武共に最高のものが求められるエリートの中のエリート、更にエリートと呼べる方々です。

幼い頃から従士として勉強を両立させながらやるとしても、人生の半分は必要になるくらいの時間は必要になるでしょう。

まあ、軍隊で言えば將軍みたいな地位に当たりますので、簡単になれるわけないのは当たり前なのですが。

なぜこれほどまでにややこしいかというと、『カーディナル』の方針で「現場を知らない人間が上に立つ資格は無い。」とのこと。まあ、中間管理職なのでそれくらいの経験を積んでくれた方が良いでしょう。

ちなみに、彼ことマスター・ジュリアスはそういう意味で伝説となっています。

彼は十五歳の頃に師から三年で従士から騎士へとなり、同時に助祭としての位階を叙階され、三年後には司祭となって五年間で中東地域を大体三地域ほど改宗させ、その間（事務でも良いのに）イスラムの過激派と戦い、その過程を終えると翌年には司教の資格を得て叙階。

その翌年には異端審問官となって（これも事務でも良いのに）最前線で異端者の摘発と処断に務めたという。

当然その途中に彼は近衛侍従聖堂騎士団・・・まあ、略して“近衛”で構わないのですが、既に近衛の一員であったそうです。

そして二十九歳という驚異的な若さで管区長に就任したそうです。この記録は恐らくこれからも絶対に破られないだろうと言われています。

それで実家は代々続く魔術師の家系で、所謂貴族型の家系ゆえに財産も豊富だというのに家を出て騎士団に入団。その上、人格者で多くの部下に慕われている……。

私などには想像がつかないほど優秀な人で、完璧な騎士、騎士になるために生まれた、とまで謳われている人なのです。

そして、数々の同僚を差し置き、騎士団本部に管区長として配属。管区長に序列は無いが事実上の、騎士団ナンバースリーである。

正直、私が最初に呼び出されたときは嘘かと思ったほど雲の上の方なのです。

「私と彼とは十歳も年は離れていたがね、欠員が出たのでほぼ同時に異端審問官として配属された。彼は優秀な男だったよ。」

十歳も上で優秀なのだから、十歳下で同じ領域にいた彼は前人未到としか言いようが無いのでしょうか。

「異端審問官がどれほど過酷な職務をするかは語るまでもないが、彼は少々真面目過ぎていてな。」

神に縋って罪人を処断するのは間違っている、と精神防護の魔術を施さずにその職務を全うしていた。」

「え……?」

「正義感も強い奴だった。書類仕事でもしていれば良いものの、騎士としての力が有るのだから神の為に尽くし、一人でも多くの人間を救おうとしていたよ。」

私は彼と多くを語った。年も離れていると言うのに、幼い頃からの友だと思わんばかりに意気投合し、多くの理想を語り合い、幾多の仇敵を屠り、可能な限りの罪人を裁いてきた。

しかし、異端審問官として配属されて二年目の夏だった。彼は心を病んでしまった。」



私は、ごくり、と口の中に溜まっていた唾を飲み込んだ。

「人は精神を魔術で保護せねば、いずれ磨耗して朽ち果てる。ただ過ごすだけでも、人の心は二百年も耐えられない。

敵の恐るべき呪詛から心を守るためにも、魔術師として当然の防護策だ。

しかし彼は、どこまでも正しく愚かしい人間であり、最後まで聖職者だった。

私は生涯前線で戦うつもりであったが、彼の意を汲んで管区長に成ることを選んだ。本当は自分がどこまでいけるか試す為に上を目指したのだがな。」

「……………」

「お前がどのような決断を迫られたか、一部始終を聞いている。神を恨むなどはお前の気持ちを推察することしか出来ない私には言う権利は無い。

……………だが、お前の口からその先を言わないでほしい。

私はこれ以外の生き方は知らないのだ。もし、神への翻意を見せるようなら、私はいつでもギロチンを振り下ろせる立場に居るのだからな。」

「……………なぜ、そこまで分かっている、そのようなことを仰るのですか？」

「今は人権に訴えたほうが周囲の受けがいい、『カーディナル』の方針だからだ。」

マスター・ジュリアスはおどけるように笑ってそう仰った。

「正直、彼女のやり方は気に食わないがな。彼女のやり方は少々神を蔑ろにしすぎる傾向にある。

人を信じられないのだよ、彼女は。誰よりも人類を愛し、献身して

いる彼女がな。

そして全ての十字架を己で背負おうとしている。私には到底真似できない。彼女の経歴を聞けば、我が友も同じような道を辿ろうとしていたことは想像に難くない。

だから私は、彼女を変えることが出来なかったことを今も悔やんでいる。

お前も、心を病んでしまった友と良く似ているよ。心の揺れが体内の魔力をぶれさせているのが良く見える。」

「あ……」

「自分の魔力の隠蔽は基本だ。実力を悟らせない意味でもな。

それが出来ていないようでは、自分の心理状況を垂れ流しにしているのと同義だ。真つ先で戦場で死ぬタイプだ。」

「……あはは……」

自分で全く気づきませんでした。指摘されると急に気恥ずかしくなってきました。

勘の良いクラウンさんが気づいていたわけです。

「我々の魔術は信仰心を拠り所にしている。その根源が揺らいでいるようでは、然もありませんと言っべきだが、実を言うと私は今すぐ怒っている。」

「……はい？」

「当然だ、お前のような人間を出してしまったことは我々管理職の不始末だ。

しかし、神を信じられぬ人間は犬畜生以下だ。私が騎士団に求めているのは、日常生活の片手間程度の信仰ではなく、戦いで殉じるのを良しとする絶対的な信仰なのだ。

お前も騎士に成る時にそう誓ったはずだ。」

「は、はい……」

何だか、急に彼の雰囲気物が物々しくなつたような気がした。

「神の為とは言え戦って人を殺し、浅ましくも罪人を裁こうとする我々が天国に行く権利はない。」

だから我々は自ら進んで地獄へ行くことで神への信仰心を示すのだ。だと言うのに、信仰心が揺らいでいる？ それは冒涇というのだよ、騎士エクレシア。仲間を銀貨数枚で売り渡すに等しい裏切りだ。

こういう言い方は酷だと承知の上でお前の上司として言わせて貰おう、お前が信徒として、騎士として確りしていればこの場に今お前は居なかった筈だ。」

「お、仰るとおりです……。」「  
そう、私が未熟だったから、私はここに居るのだ。」

マスター・ジュリアスのお怒りは尤もだし、傍から見れば理不尽な物言いも心を鬼にして仰ってくれているのだと分かる。

「お前に問おう。お前は人間か？ それとも犬や家畜と同レベルの不信者か？」

「わ、私は、身も心も神の為に戦うことを誓った騎士ですッ!!」「  
いい返事だ。今回は魔族に毒された故にそのような考えに至ったのだと思ってるが、二度とそのような思考に陥らないように心の底から鍛えなおしてやろう。」

丁度『カーディナル』からお前を呼んでくるよう言われた時間にはまだ猶予がある。

実は私もこれから従士の訓練を直接指導することになっている。丁度いい機会だから、お前も参加するといい。」

そう言ったマスター・ジュリアスは口では笑っているのに目が笑っていないかった。

どうやら、初めからその積もりだったらしい。

マスター・ジュリアス。

騎士団で最も厳格で、容赦のない御方だと言われています。

私は訓練場に付くまで、生きた心地がしませんでした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「なあ、ジュリアス様すんごく気合は入っていないか？」

「ああ。この間は三人くらい医務室に送られただろ、あいつらまだベッドから出られてないみたいだぞ。それなのに今回はあれだ、どうしよう・・・。」

びくびくしている従士たちがそんな会話をこそそそとしているのが聞こえる。

正直、申し訳ない気持ちで一杯だった。

彼は木刀で軽く素振りをしているが、その一振り一振りが空間を揺るがしているように見えるのは気のせいであって欲しいところです。

集まった従士たちは三十数名ほどで、年も性別バラバラだ。二十台半ばにもなる者も居れば、十代にまだ入ったばかりのような少年もいる。

ジュリアス付きの従士が多いが、他の騎士に師事する従士でも時間が空いていれば自主的に訓練に参加して少しでも研鑽を積めるようになっていく。

従士の仕事は雑用もいいところで、日々は訓練に費やされる。時には師に付き添って実戦に連れて行かれることもあるそうですが、少しでも早く騎士に叙されたいと思うのは人の情と言うものでしょう。

ちなみに騎士団お得意の本格的な集団戦法は、騎士になり配属が決まってからであるから、従士の段階では効率と自主性を重視しているのです。

流石騎士団ナンバーズリー。彼の教えを請おうと訓練に参加したのも多く、私が混じっていても特に気にする人も居ないようでした。しかし、突き付けられたのは実戦に近い模擬戦の訓練……。

今現在、作戦を立てて良いと彼に言われて三十数名の面々は親しい者同士だったり、とにかく周囲の者たちと組んで対抗しようと話合っている。

この様な形式はポピュラーなので、みんな慣れているでしょう。

定期的に行われるこういった形式の訓練は、とにかく分かりやすい形で実力を示すことを熟練し教官を務める騎士は求めているのですから。

「ん・・・？」

ふと、一人だけ異彩を放っている少年が居たのが気になりました。少年と称したのは、十台半ばくらいにしか見えなかったからなのです。

最年少と思しき少年も年上の従士の方々と一緒に作戦を立てているのに、彼だけは一人でジツと素振りをするマスター・ジュリアスを見ていたのです。

何だか気になつて私は彼に声を掛けようと思いましたが、その時、彼が武器を構えたのを見て、反射的に私もジュリアスの方を向いて模擬戦用の刃抜きされた剣を構えました。

経験上、作戦を考える時間を与えて奇襲すると言つのはどんな教官も一度はするのです。不意を突かれて文句を言つようなら、それは騎士になつても無駄死にするだけです。

「いつまで考えているッ、邪悪な異教徒が目の前に迫っていたらどうする！！」

案の定、不運にも一番近くに居た従士の二人が蹴散らされた。

十数メートルくらい距離があつたのに、一瞬でマスター・ジュリアスは詰めてきたのです。かなり、本気のようにです。

「どうした、何を呆けている。」

仲間が蹴散らされたのに、反応すら出来なかつた者を、彼は蹴り飛

ばした。こうやって隙を作ったものから容赦なく蹴落とされていくのである。

「いつまで固まっているつもりだ、虫かお前たちは!!」  
ある程度手加減されたと思える衝撃波が、その場にいる全員を襲った。

私を含めて例外なく誰もがその衝撃で吹き飛ばされ、集団だった私たちは訓練場の広範囲にバラバラに引き離されてしまったのです。

ここで、吹き飛ばされても運よく仲間が近くに居た者、咄嗟に防護の魔術を使わずに立て直せた者、偶然何とかできた者、それすらどうしようも出来ずに気絶した者に分かれた。

この時点で三十数名居た従士の内、十人は脱落していた。

それを見たマスター・ジュリアスは嘆息していた。

集団戦が機能できない場合の状況を想定させようとしているのか、三分の一の脱落者を見て呆れ果てていた。

「我々が異教徒や邪教徒に屈することは有り得ないし、有ってはならない。貴様らの信仰心はその程度か、可能な限り連中を殺して死ぬ気で戦え!!」

その体たらくに、マスター・ジュリアスも怒鳴り声を上げた。

その気迫に圧倒されて身じろぎした者の腹に、どこから取り出したのか彼は円形の何かを投擲して脱落させた。

それは、車輪であった。

木製の厚みのある代物ではなく、中世の馬車に使われるような金属

製の薄い物だ。

つまり、当たったらかなり痛い。

当然ながら、本気で彼が投擲したら人の体など真つ二つになるだろう。

「次は、誰だ？」

脱落者に当たってから上空で弧を描いて戻ってきた車輪を掴んで、マスター・ジュリアスは品定めするように従士の面々を見渡した。

「あ、あああああッ！！」

「気合だけは一人前だな、冷静さを知ってから出直して来い！！」  
恐怖から蛮勇に駆られた一人の従士が、車輪を顔面から受けて昏倒した。

当然、気絶している。この辺りから一定以上の実力は有ると、マスター・ジュリアスも容赦が無くなってきているようだった。

「これから五分、耐え切った者には私から次の騎士候補に推薦してやる。」

今度の管区長の叙階に合わせて、一部隊ほど増設を考えている。世界は広い、人手はいくらあっても足りないからな。」

それは彼が言うとは信憑性が高いし、嘘ではないはずだ。

しかし、この局面でそれを言うのはズルイというものだった。

思わず顔を見合わせた従士二人の頭上に、突如として落雷が落ちた。



「敵から目を離すとは何事だ。」  
感電して真っ黒焦げになった二人を見下ろしてマスター・ジュリアスはそう言った。  
一応手加減はされているようだったが、怪我を負うことは前提にしているのが窺えた。それを防いで身を守ることは、できて当然なのだと思っっているに違いありません。

「ああ、言い忘れていた騎士エクレシア。

貴様は当然五分耐えられるよな、出来なければ位階を取り下げるからその積りで。」

「え・・・」

名指しでそう言われ、私は表情を強張らせてしまった。

「危ないッ!!」

従士の誰かがそう言った。

直後に飛んでくる、鋼鉄の車輪。

しかも、死角からだった。

「ッ           !!」

多分、言われなかったら対応できなかっただろう。

割と本気で投擲されただろう車輪の一撃は、咄嗟に剣を振り上げて防いだにも関わらず、ちっとも威力が減衰されなかった。

右肩に車輪が直撃し、当然のように吹っ飛ばされる私。

綺麗に磨かれた訓練場の床を滑って、止まる。

「い・・・たた・・・」

流石に一撃で昏倒させられるようなら、私は騎士に成れては居ない。それなり実戦経験も積んでいるし、何とか常に私の身を守る防護の加護が衝撃を和らげてくれているので、戦闘続行に支障が出るほどではなかった。

「はあッ!!」

私に気を取られている隙でも突こうとしたのか、先ほど気になった少年が自分の背丈の倍はあるハルバードを振り上げてマスター・ジュリアスに強襲を仕掛けた。

しかし、完璧な騎士と称される男は、重量のあるハルバードを小枝のようにいなしてしまった。

そして反撃に遭う。流れるような動作で木刀が少年の体を捉えた。

「うぐう!!」

クリーンヒットだった。

しかしながら、少年はそれで吹っ飛ばされても、地面に足をつけて踏みとどまった。

まだ闘志は消えていない。立つのがやっとだろうに、凄まじい執念だった。

だが、それだけだ。

その程度では、決してマスター・ジュリアスには届かない。

というより、このままでは五分と言わず、三分で全滅は必至でしょう。

それは不味かった。

メイさんの約束で、一週間で帰らなければ、彼は酷い目にあってしまう。

騎士の位階を剥奪されるような事が有れば、恐らく最低でも一年は帰って来れないでしょう。それだけは本当に避けたい。

「なんだ、従士の質も落ちたな。本当に、この程度か。」

そう、マスター・ジュリアスは言った。

挑発ではなく、本当にそう思っているようであった。

しかしながら、騎士団の戦法は基本的に集団であり、バラバラに引き離された状況ではどうにもならず、そして隙を見せれば即座に叩き潰される。

こんな状況で様子を窺う以上、どうしろと言うのがここに居る彼らの心境でしょう。

「はぁ……。まさかとは思いが、お前たち。」

見かねたマスター・ジュリアスは車輪を投擲した。

武器を構えている誰かにではない、既に倒れ伏し、気絶した従士の一人でした。

「私が無力化した相手に、攻撃を加えないとでも思ったのか？ 敵は暢気に気絶した相手にトドメも刺さず、安全に戦況を進めようとするとは思わないのか？」

車輪がその従士に至る頃には、車輪は投擲するに適した大きさではなく、その従士の身長と同じくらいの大さになり、彼の両手足が車輪に固定されて転がって戻っていく。

「私が邪悪な異教徒なら、この様に膠着した場面に直面したとするならば、とりあえずこの様にするだろうな。」  
マスター・ジュリアスは車輪に固定された従士の腹に木刀を振り下ろした。

「うあッ!!」

気絶している従士の生々しい悲鳴が響いた。

その残虐な振る舞いに、誰もが目を見張ったり表情を引きつらせていた。

「車裂き……人のすることじゃない……。」  
震えた声で誰かがそう言った。

そう、マスター・ジュリアスが行おうとしているのは、中国やフランス、中世ヨーロッパで行われた、車輪に括り付けた罪人の手や足、そして腰などを砕き拷問または処刑する残虐なものです。

異端審問官を経験した彼なら、当然平気でそのようなことも出来る

でしょう。

それは、ここに居る誰もが知るところ。

「そして、この残虐な行いに耐え切れなくなり、飛び出してきたバ力を叩き殺す。それで、お前たちはどうする？」

試すように、マスター・ジュリアスは問いかけてくる。

その間にも彼は木刀を従士の右足に振り下ろす。

またもや、苦痛に呻く悲鳴が響く。

「私は約束を守るぞ。もし五分、お前たちが手を出さずに見ているだけなら、私は手を出さないことにしよう。勿論、騎士に推薦もしてやる。」

凄まじい発破の掛け方だった。

ここに居る人間に、そう言われて怒りを覚えない者はまず居ない。

みなそれぞれ理由はあれど、聖職者になる為にここに来ているのだから。

「あ、あ・・・ぼくは、ば、バカで良いッ!!」

そうして最初に飛び出したのは、運よく生き残っていた最年少だろう少年だった。

しかし彼が技量も伴っていないだろうのは、火を見るよりも明らかだった。

「あ、バカ、くそッ!!」

釣られて仲間と思わしき年上の従士が追従した。

私も、自然と体が動いていた。無謀な突撃を刊行しようとしていた少年の前に出て、右手で制した。

「え……。」

「貴方は負傷者の救出を。相手の技量を見極めるのも騎士として重要なことです。」

「でも……。」

「早くなさいッ!!」

思わず怒鳴ってしまって、彼はビクンと身を竦ませたが、仲間が彼を引っ張って後ろに下がっていった。

「自分の得意する分野で各々戦いなさい。前出るものは前へ、支援を得意とするならばそれに徹し、実力が不足だと思うなら負傷者を守りなさい!!」

そう指示を飛ばしながら、私は従士だった頃を思い出していた。

がむしゃらに教官に挑み、なぎ倒されては立ち上がる毎日でした。そして諭され、教訓を学び、研鑽する毎日。

ひどく懐かしく、私が一番楽しかった時期だった。

「ふん、そうではなくてはな。」

私以外にも一斉に出た十名近い面々を見て、マスター・ジュリアスも楽しそうに笑った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

なんと言うか、ひどい戦いだっただ。

「そろそろ五分経つな。訓練は一旦中断だ。」  
そう言ったマスター・ジュリアスは、汗の一粒すら流していなかった。

あれから私を含めた十数名の猛攻、後方からの魔術支援を含めても一撃入れることすら敵わなかった。

それどころか、数として有利だった私たちは誰一人例外なくボロボロです。

なんと言うか次元が違うとかそういうレベルの強さでした。

それでもあれから脱落者を二名に留め、何とか五分耐え切ったのです。

「や、やった、ぼ、ぼく、騎士になれる!!」

「バカ、騎士には最低でも十四歳なってるからだ。」

「えーッ!!」

そんな最年少の少年とその仲間の従士の声に、力尽きて床に転がるみんなが笑った。

「お前の担当官には私から話を通しておく。年齢と実力が十分になればいつでも騎士に慣れるようになる。」

「え、本当ですか!!」

「ああ、私は嘘と化け物と異教徒が大嫌いだ。」

マスター・ジュリアスは確かにそう言って頷いた。

「それより、彼は大丈夫ですか?」

私は車輪に固定された従士の安否を確かめようと、体に鞭を打って立ち上がるうとしたとき、彼はあんなに叩かれたのが嘘のように立ち上がった。

「あ、自分は平気なんで大丈夫ですよ。」

「え……。」

「マスター・ジュリアスに一芝居するように頼まれてたんですよ。」

それに自分は一端の騎士なのであれくらい平気ですし。」  
流石にちよつと痛かったですけどね、と彼ははにかみながらそう答えた。

彼が騎士だと分かると、なんだよー、みたいな雰囲気包まれて、誰もがぐったりと床に突っ伏した。



「私が邪悪な異教徒みたいな真似をするわけがないだろう。なんだ、お前たち、本気にしていたのか？」

冗談にしては笑えない部類だと言うのに、マスター・ジュリアスは真顔でそう言った。

それはもう、誰もが抗議をしたところだろうが、それを言う気力がある者は誰一人としていなかった。

「ふむ、そろそろいい時間だな。

騎士エクレシア、お前は『カーディナル』の執務室に向かえ。」

「は、はい。」

私は頷いて、立ち上がった。

何だか急に緊張感がこみ上げてきた。

「残りは定時まで訓練を行う。気絶した連中を医務室に運んだら訓練続行だ。

貴様らに集団戦法のイロハを今のうちに叩き込んでおいてやろう。

あんな中途半端な連携で騎士になることは私が許さん。」

そのマスター・ジュリアスの一言で、ぐったりとしていた面々の表情が凍り付いた。

私はそんな彼らに同情しながら、訓練場を後にした。



## 幕間 相容れない二人の会談

時間はエクレシアがマスター・ジュリアスを訪ねる十五分前である。

大聖堂にある礼拝堂の横には、ここの顔に当たる大聖堂の次に大きな建物がある。

経理などを初めとする事務仕事の殆どが行われるこの大聖堂の中核たる、事務所だ。

真横のここで一番大きな礼拝施設である。荘厳な大聖堂とは違い、こざっぱりとした何も無いビルディングである。

ところどころにとって付けたような十字架や祭具などで魔術的な要素を取り入れてはいるが、なんと言うか不恰好な施設であった。

ここに何百人もの事務員が勤め、この大聖堂にある複数の礼拝堂や騎士団、付属施設などに指示を飛ばす。

この近くに騎士団の本部もあり、事実上この三つの施設を統べる『カーディナル』の本拠地として“大聖堂”と一般的に呼ばれている。

その周辺には一万人以上がここに住んでおり、他の階層から人の出入りはその何倍もある。

もはやこの大聖堂周辺の一帯は一つの宗教都市として機能しているといっても過言ではなく、この事務所の役割は役所にも等しい。

流石に大聖堂などの主要施設は本拠地というだけ有って周囲からは

簡単に入れなくなっているが、その周辺の礼拝施設は基本的に出入り自由だ。

「失礼、『カーディナル』。こちらにいましたか。」  
なぜそんな説明をしたかというところ、騎士団本部と事務所の二つに『カーディナル』は執務室を構えているからだ。

基本的に事務所にいる彼女はよく本部の方に移動しているので、留守も多い。

出入り自由と刻まれたプレートのあるドアを開け、事務員は『カーディナル』の姿を認めた。

「ええと、お届け物なのですが……。早急にとのことなので……」  
困ったような表情の事務員は、両手で抱えるほど大きな段ボール箱を持っていた。

「ああ、そこに置いておいてくれ。」

「差出人は不明なのですが、よろしいでしょうか？」

「いんや、誰からかは分かっている。良いからお前は仕事に戻りな」

「は、はい。」

一瞬邪教徒のテロとも考えていた事務員は、彼女からそう言われてドアの横にその段ボール箱を置き、失礼します、と退室した。

「・・・・・・・・・・はあ。」

そして、『カーディナル』はあからさまに溜息を吐いた。

彼女は机の引き出しから羊皮紙を取り出すと、さらさらと文章を書き殴った。

そこにはこう書かれていた。

『ジュリアス、急で無粋な来客が来た。恐らく彼女はお前さんを尋ねてくるだろうから、適当に予定を遅らせておいておくれ。』

「火をおくれよ。」

すると、彼女はそう言った。

その時、事務員が持ってきた段ボール箱の蓋が盛り上がってガムテープを破って中身が出てきた。

それは白衣の女だった。

二十台半ば程度の栗毛の女が、外れていた体の関節を曲げて段ボール箱の中に入っていたのだ。

「偉大なる『プロメテウス』が最高傑作、アビゲイルと申します。」  
「ふん、あいつらしい悪趣味な命名だ。しかもそれを私に差し向けてくるとはねえ。」

アビゲイルと名乗った女はそんな辛辣な言葉と視線を投げ掛けてくる『カーディナル』になどちつとも気にした風もなく、段ボール箱

からノートパソコンを取り出して、電源を入れた。

「博士、目標を確認しました。座標を送信します。」

「ごくろう、アビゲイル君。」

彼女の言葉とほぼ同時に、一人の男が室内に現れた。

その現れ方は幽霊のようというよりは、テレビの電源を付けたかのような感じであると言えば分かりやすいだろうか。

アビゲイルと同様に白衣を纏う茶髪の若い男であった。

当然ながら、そう見えるだけである。

「いきなり何の用だい、『プロメテウス』。」

私はこの後にも色々と用事が詰まっていたねえ、せめてアポぐらいはとってもらいたいものだよ。」

「別に構わぬではないか。」

「人間としての最低限のマナーは守れて言ってるんだよ。」

不遜な態度を隠そうともしない『プロメテウス』と呼ばれた男に、

『カーディナル』は強い口調でそう言い放った。

「お互い、“魔導師”に数えられた同士だろう。なぜ会うのに遠慮する必要がある。」

「そうだったな、お前はそういう奴だよ。」

これ以上の論議は無駄だと、『カーディナル』はさっさとその話を切り上げた。

「それで、いったい何の用なんだい？ 何も無いと言ったら流石に怒るからね。」

「用ならある。ちょっとした世間話だ。」

そう言つて、『プロメテウス』は執務机に腰掛け、彼女の指を突きつけた。

「ほれ。」

その指先には、ライターのような火が灯っている。

「ふん。」

彼の言葉にどういう意図があるのか図るように、『カーディナル』はその火にさつき文章をかけた羊皮紙を晒した。

瞬く間に燃え広がり、焼切れる羊皮紙。

「文字を別の場所に移す魔術か。火を使うからには狼煙の一種だろうが、随分と文化的だな。ああ、それに、あの鐘を経由しているのだな。」

その時丁度、外にある鐘が鳴った。

「時報用ではない小さく高い音の鐘、あれと連動し情報を飛ばすといったところか。時報の鐘と混同しないように音も違う。手も込んでいるな。」

なるほど、中世の頃で既にお前たちの情報網は現代と変わらぬほどだと言われているが、そういった方法を使っていたのだな。」

「逆を言えば、昔からちつとも進歩してないって事だけだね。」  
自嘲するように、『カーディナル』は笑った。

「しかし、一目で見破るとはお前の目は一応節穴ではないようだねえ。」

「火を使った魔術は専門分野だからな。」

貴様こそ念話で済ませれば良いものをわざわざこんな手順を踏まえるんだ、噂に違わず腹の探り合いが好きなのかな。」

皮肉をたっぷりと乗せた口調で『プロメテウス』は挑発的に言うてのけた。

「魔術師は地上の人間の科学に耽溺することはないだろうけれどね。」

「私は自分を魔術師だとは思ってはいない。科学など所詮魔術から派生した学問の一つに過ぎないからな。」

当然私は学会に発表して地位やら名声やらなどには興味もない。だから最近では化学者と呼ばれることにも疑問を抱いている。」

あと私はどちらかと言うと化け学、つまり化学と自然科学について研究しているわけだ。技術の方はほぼ委託だ。そこは間違えるな。」

「興味は無いね。というか、さつさと机から降りろ、行儀が悪い。」  
そう言うて『カーディナル』は『プロメテウス』を机から押し出した。

彼はやれやれ、といった様子で、来客用のソファーにどっぷりと座り込んだ。

「さて、我々がこうして直接二人で話し合うのは初めてとなるわけだが。」

「お前さん、一体誰と話しているのか分かっているのかい？」



「おやおや。」  
急激に高圧的な態度が増した『カーディナル』に、『プロメテウス』は両手を挙げてオーバーに驚いてみせた。

「是非とも高説願おうか。説法は得意だろうか？」

「説法は仏教用語だ。いやそんなことはどうでもいい。」

私はこれでも中世暗黒時代のカトリックで異端審問を努めていたこともある。当時の連中のやり方に迎合していたわけではないが、こちらとしても目的があつたからねえ。

当然、異教徒は当たり前として邪教徒を許すわけにはいかないのだよ。」

「ほうほう、貴様は科学を異教と呼ぶのか。」

「そうだろうよ、これほどまでに地上に蔓延した邪悪な思考は見たことも無い。」

今なら昔の連中の気持ち分かるさ。あんなおぞましい文化に染まった人間を見るくらいなら、手当たり次第弾圧なりすればよかったと思っっているよ。

科学万能と謳われるこの時代、人々の生活には光は刺したが心の闇は濃くなる一方だ。

人は愚かにも賢しくなりすぎた。無知は神から与えられた唯一の慈悲だというのに。」

今の人間には神の威光が必要だと、彼女は呟いた。

「さすが、本物の確信犯は言うことが違う。」

まあ、確かに。技術は独占されるべきだからな。魔術と同じく。

そうすればそこに“神秘”が生じる。“概念”が生まれる。法則ルールの力も増す。ついでに原住民はバカでいてくれた方が我々としても助かる。」

「お前は地上出身だろうが。」

「そういう貴様こそ、地上の出ではないか。」

第三者がいれば胃が痛くなるような陰険なやり取りだった。

一応当事者に含まれるアビゲイルは、機械のように無表情で『プロメテウス』の背後に控えてはいるが。

「本当の意味で、地上の人間を“原住民”と蔑めるのはもはやこの世に数人だけになってしまった。悲しいことだ。」

「『盟主』その弟子、あの『魔道老』くらいか。」

「ああ、千年もの昔。この地上に滅び行く異世界から逃げ延びてきた生き残りの“人間”はそのくらいしか居なくなってしまった。」  
嫌に含みのある言い方で、彼女はそう言った。

505

「まあ、そんなことなど今は関係のない話だ。

私が言いたいの科学の話ではなく、貴様が組んでいるアイツのことだ。」

「アイツ、とは？ 明確に誰かを指してくれないと分からないではないか。」

「とぼけるな。分かっているのだろう確信犯が。」

「それは正しい意味ではないぞ。私は特定の思想などは持っていない。」

「そうかい。だが言いたいことは同じだよ。」

『カーディナル』はどこかイラついたようにそう言った。

「あの『<sup>パラノイア</sup>偏執狂』のことさ。」

こつこつ、と手に持っていた万年筆を机に叩きながら彼女は答えを提示した。

「ああ、彼女か。」

それで『プロメテウス』の方も納得したように頷いた。

どうやら本当に分かっていたいなかったと取れる態度に、『カーディナル』は心底イラついていた。

「およそ四百年もの昔、魔女狩りの最盛期まで生き延びた最悪の魔女の一人さ。」

奴は人海戦術で異端を狩る私たちに對抗して、当時流行っていたペストに症状が酷似した毒を撒き散らして對抗してきた。

それを隠れ蓑に奴はヨーロッパ各地を転々と逃げ延び、最終的に我々は勝利を収めたが、奴がいなければ無辜の民の死者はもっと少なかった。

『盟主』の意向により肉体を滅ぼし、名前を奪うだけで済ませてやったが、未だに私たちは相容れない。奴は私を憎んでいるし、私は何人もの愛すべき部下達をあいつに殺された。」

「なるほどな。所謂“魔女”の称号を得るに相応しい魔術師だったのだな。」

「他に相当する言葉がないとは言え、女性魔術師に送る最高位の称号に“魔女”はないだろう、“魔女”は。いくら『盟主』に抗議しても聞きやしない。」

そんな愚痴を零す『カーディナル』のイライラは先ほどより三割り増しである。

「彼女の魔術は凄まじいものだったよ。」

彼女の協力により私は魔術師を量産する計画を実用化できた。

おかげでそれなりの数の魔術師を量産することができたこのアビゲイル君もその一人だよ。なかなかいい出来だろう?」

「ふん、相変わらず腐っているな。奴も、貴様も。」

そんなあいつと組んでいる貴様と、どう仲良くしようと。参考までに聞いてやるよ。」

「別に私は貴様と仲良くしたいなどは欠片も思っていないが?」  
ぴきり、と両者の間に有った“何か”が決定的なまでに崩壊した。

「では、一体何の用で来たのかい?」

三度、『カーディナル』は低い声で問うた。

これ以上の冗談やごまかしを言うものなら、即座に叩き出すとでも言いたげである。

「実はな、ふふふふふ。」

面白い情報を手手したのでギブアンドテイクを持ちかけようと思っていたのだよ。」

「今さつき仲良くする気は無いとほざいたのはどの口だ?」

「それとこれとは話は別だろう。」

それに私は貴様を有益な取引を相手に気に入らないからという個人的な理由で断るような人間ではないと分析している。」

「なるほど、正解だ。胸糞悪くなるほど正解だよ、『プロメテウス』」

「聖職者がそんな汚い言葉を使っているのかね?」

「天罰が怖くて魔術師をやっていると思おうかい?」

その返答に『プロメテウス』は肩を竦めるだけで応じた。

「で、いったいどんな話を持ってきたんだ。」

「貴様は先ほどどういったよな、本当の意味で地上の人間を“原住民”と罵れるのは数人であると、私はその中に『魔道老』を挙げ、それに貴様は同意した。」

「もったいぶるな。」

「では言おう。実は、『魔道老』が己の並列性同一人物を確保したと情報が入った。」

「なんだと・・・？」

それは、『カーディナル』にとって聞き捨てなら無い話だった。

「それは、『黒の君』の提唱した理論だったな。」

並列に連なる鏡あわせの世界には、同じ系列である無しに自分と全く同一の魂の保有者がいる、と。そんな理論だったな。」

「そうだ。つまり異世界から来た『魔道老』には、この世界に彼と全く同じ魂を持つ人間が居るわけだ。」

魂の重要性は語るまでも無い。魂は魔力の源であり、才能の根源だ。『世界』は矛盾を拒む、たとえば全く同じ魂が二つある、という現象に手を加えて意図的に同時消滅するように誘発すれば・・・ふふふ。」

その結果は、『プロメテウス』の不気味な笑みを見れば明らかだった。

「いくら不死身の『魔道老』とて、魂を破壊されてはどうにもならない。これは『黒の君』とて同じだろう。」

だから奴の邸宅を襲撃してその並列性同一人物を奪取しようと考えている。」

「……流石は“魔導師”二人殺してその地位に納まった男だ。不死の裏技や抜け道をよく知っている。」

自分の半分も生きていないような男に、流石の『カーディナル』も戦慄を禁じえない様子だった。

単純な戦闘力なら、このいかにも理系の学者といった風体の『プロメテウス』は、“魔導師”の中でも三番以内に入るほどだ。

彼が科学という魔術と相反する技術に入り浸っていて潰されないのは、その英雄的とまで言われる実力のおかげでもある。

「それで、だ。流石に『魔道老』相手に喧嘩を売るとなると、一人では心許無い。『パラノイア』は今や戦闘力はほぼ皆無に近いのは貴様が一番知るところだろう。」

それで今は賛同者を募っているところなのだ。貴様は一応『魔道老』とは敵対しているのだろうか？」

「ああ、だが『魔道老』の相手はかなり厳しいぞ。恐らくあの『女帝』<sup>プレス</sup>も黙っていないだろうし、魔族と繋がっていると話す話も聞く。」

「その通りなのだよ。実は今まで誰も賛同してくれなかった。」

「……貴様がダメなら後はギリアぐらいしかない。」

「ああ、あの新参者か、奴は止めておけ。あれの野心と魔術はお前の天敵だ。」

「それは理解しているのだよ。だからどうにか貴様の協力を取り付けたいところなのだ。つまり、私には後がない。」

「それでその態度なのだから恐れ入るよ。」

『カーディナル』はそう言っ腕を組み、椅子の背もたれに体を預

けた。

「悪いが断らせてもらう。

魂とは神が人に与えた生きる権利だと私は解釈している。それをむやみやたらに奪うことは私には出来んよ。」

「なるほど、やはりな。」

『プロメテウス』は、全く当然のようにその答えを受け入れた。

「想定どおりの回答だ。驚きも悔しさも無い。

ただこの計画は頓挫したというだけだ。事實はそれだけだろうか？」  
あるいは、彼にとってそれはどうでもいい計画だったのかもしれない。

いくら駆け引きに海千山千の『カーディナル』でも、情報の少ない現状で彼の意図を読むことは出来なかった。

「物は試しだろう、一人でもやってみようとは思わないのかい？」

「私は物事を憶測で語るのは大嫌いだね、実際に確かめるまでは空想は勿論思考実験など持つての外だ。」

「その言葉、六十年前の貴様に教えてやりたいよ。お前はあの時なんと言ったか覚えているか、人間は核の力で自らを滅ぼすと言ったのだ。」

それどころか、科学の根本を否定する言葉である。

「人間のいいところはな、矛盾した言葉をいくらでも言うことができることだ。そう思わないかね、『カーディナル』。」

「はん、確かに。」

同意が得られる事を確信していたのか、彼の問いは疑問系にすらなっていないかった。

「だが事実だと、私が開発した未来演算プログラムがはじき出した。確率にして百年以内に91.8%という結果が出た。

欠点はバグだらけでまともに機能してはいないことだがね。」

「つまり冗談だな。」

「仕方が無いだろう。人間の精神まで予測は出来ない。それを加味すると日夜バグが増えるのだよ。」

「ふん、貴様が言うると実に白々しい。白々しいよ。」

そもそも、産業革命に火を付けたのは貴様だと聞いている。おかげで千年は必要だった文明の進歩がたった百年に短縮されてしまった。

『魔道老』もたいそうご立腹だったよ、あの人は嘗て星が滅びる光景を目の当たりにしたと言っていた。今の地上の現状を見れば然もありませんと言ったところか。」

そう、それこそが彼が『プロメテウス』と称される所以なのだ。

神々から火を盗み人に与えたプロメテウスのように、文明という“火”を地上の人間に与えた彼はそう呼ばれた。

火は全ての文明の根源である。

それゆえに、火は文明の象徴なのだ。

火に関する魔術を一通り羅列するだけで、軽く一つの文明に出来るほどである。

そいう意味では、彼が科学に入り浸るのはある意味不自然なことではない。



「ちょっと待て。」

すると、心外だと言わんばかりに『プロメテウス』は立ち上がった。

「おいおい、私を悪者みたいに言わないで貰いたい。

確かに後押しはしたが、僅かな時間で地上の人間がここまで進展するとは私にも予想外だったのだ。このままではまずいと私はちゃんと考えていると六十年も前に私が“魔導師”就任の際に『盟主』の前で明言したではないか。」

「ああ、それも覚えているとも。忌々しい年だったからな。」

「そう言えば日本敗戦直後だったな。アメリカを利用して日本を教化する予定だったそうだが、『盟主』にインターセプトされて頓挫したとか。」

「ああ、後一步だった。その結果が神を信じぬ若者で溢れた不信者どもの巢窟だ。いくら文明を守るためとは言え、クソが……。彼女の口汚さから相当裏で手回しをしたに違いない、と彼は思った。」

「日本国に多大な恩を着せただけマシと考えればいいだろう。」

おかげである国は事実上こちらの言いなりではないか。」

「納得はいかないがね。」

『盟主』も所詮は魔術師さね、戦争のやり方をわかっていない。」

「お前たちは戦っていないではないか。」

「そりゃあ、いまだき宗教戦争なんて流行らないからね。とりあえず人権やら平等やら叫んでいれば外面は良いだろう?」

胸元のロザリオを弄びながら、『カーディナル』は言った。

それは嘘だと『プロメテウス』は確信している。

なぜなら、彼女が騎士団を結成して一度も人間相手に継続的に軍事

作戦をしたことは無いと言う情報を手に入れていたのだから。

「聖職者とは思えん言葉だな。」

平気で嘘を言う彼女に対して暗喩をこめて彼はそう言った。

「聖職者だから言うのさ。戦争の悲劇や物悲しさを演出するのは中東に丁度いい連中が居るからね、そういうのはそいつらにやってもらえば良い。」

二千年の戦いの歴史で、我々も戦う相手とやり方を覚えたってことさ。

だから、大嫌いなお前や遂には魔族とでも取引もするし話し合いもする。」

「流石だ、金勘定の速さはスパコンを凌駕しているかもな。では、私のやりたいことをまとめてある、アビゲイル君。」

彼の呼びかけに、はい、とアビゲイルは頷いてどこからともなくホチキスで留められた数枚の資料を取り出した。

「これは……。」

アビゲイルから受け取った資料の内容に、少なからず『カーディナル』も驚いたようにそう呟いた。

「貧困に悩む国々へ教育的支援を行う、……最終的には識字率の向上、教育水準の底上げを目標とする。」

驚異の速読で『カーディナル』は資料の一枚目を捲る。

「体の不自由な者への義肢の提供。最新の義肢のモニターを兼ねて低コストで志願者に配布を計画中・・・これをお前が？ 信じられないね。」

「慈善活動なわけがないだろう。私は自分で見返りを想定している。徳を積む、という概念を私は魔術的証明をしている。それつまり魔術的な概念の蓄積に他ならない。魔術の才能は魂の価値により決定される。」

それを証明することは出来ないが、魔術的限界に到達した魔術師の実力を底上げする効果を確認している。

聖人君子といった連中でもそれは全体から見れば5%程度だが、その5%は全体よりむしろ価値がある場合もある。」

「なるほどね。」

『カーディナル』はそれを聞いて安心したと言わんばかりの聖職者にあるまじき態度で頷いた。

「それに義肢のモニターは当然こちらの研究にフィードバックさせてもらう。」

こう見えてアビゲイル君は昔、下半身麻痺で足の指一つ動かせない体だったのだよ。

魔術師を量産する計画において、その被験者は何の魔術も関わりのない原住民を対象にしていた。連中、数だけは一丁前だからな。

当然、魔力の動かし方も分からぬ連中に魔術を使えば反動でお陀仏になるのは常識だ。

そこで私は全身を魔力の運用に適した物質を利用した機械化を施し、肉体的な強化を思いついた。サイバネティック・オーガニズムと言う奴だな。

結果は見ての通り、平均以上の水準の魔術師を作成することに成功した。その際に『パラノイア』は精神面を担当し、私は肉体面を担当したわけだ。」

「狂っているな。」  
おぞましい計画の一端を聞かされ、吐き捨てるように彼女はそう言った。

「これでも私は人類のためを思っただけで行動しているのだよ。

貴様に協力を依頼したのは当然効率的に運用を図るためだ。貴様のコネは地上では絶大だからな。」

「ふん、気に食わないが、こちらにとっても悪い話ではない。いい返事を出せるだろう。後で詳細を煮詰める必要が有るな。」

「交渉成立だな。しかし、貴様は地上の文明の否定的ではなかったかね？」

「人間なのだ、機会はある限り平等であるべきだろう。」

「ほう、貴様は地上の人間を信じているのか。」

それはとても意外そうに、『プロメテウス』は言った。

「でなければ宗教家なんて商ば・仕事なんて出来やしないからね。」

「そうか、勿論私は信じていない。道具以上の価値を見出していない。」

両者はどこか対称的で、それゆえにどこか似ていた。

「道具、か。そこまでハッキリしているとむしろ清々しいよ。」

この業界に居ると、もっと酷い言い方をする奴はごまんといる。「くだらない、とでも『カーディナル』は言いたげだった。」

「先ほど私は百年以内に91・8%の確率といったが、実はほぼ1

00%で人類は核の力で滅びると私自身は思っている。どうしても分かるか？」  
彼は、『プロメテウス』は、ニヤニヤと貼り付けたような笑みでこう言った。

「私が滅ぼすからだ。増えすぎた地上の人間を、な。」

「調子に乗るなよ、若造が。」  
『カーディナル』は、壁に立て掛けられていた槍を手にとって彼に突きつけた。

彼女は胡乱げに彼を見やる。彼は全く動じていない。

「思想がないだと、戯言も体外にしるよ。」  
「これでも責任を感じているのだよ、私はな。だからいずれ、管理しやすい人数にまで減らそうと思っている。  
だが、今日ここに来て考えが変わった。私は決めたよ。  
私は貴様が地上人類に失望した日に、この世を核の炎と灰で埋め尽くすことにする。」  
「まるでそうなることが当然のように彼はそう言った。」

「これは、私と貴様の賭けだよ。幸いお互いに、時間は永遠に等しい。ゆっくりと、地上の末路を見ようではないか。」

「残念ながら、その日は永遠に來ないさ。ああ來ないとも。この悪魔<sup>ルシファー</sup>が。」

「それは笑えない話だな。」

彼は槍の切っ先から逃げるようにソファーに座り込んだ。

「ルシファーは確かに人間に火や文明を与えたとされている。

核の冬が訪れるのならばコキユートスに叩き落されたルシファーとも符合するな。」

しかし、私がルシファーと言うならば、この世界が地獄だと言っているようなものではないか。それでいいのか、聖職者よ。ええ?」

「つまらない言葉を弄するな。」

「そうだな、結果はおのずと出ることだろう。一体どれだけ先になるだろうな。」

人類の種族的寿命が尽きて自然衰退するのが先か、貴様が絶望して地上が焼き払われるのが先か。どっちにしろ、興味深いことになりそうだ。」

「或いは、私の理想が実現するのが先か、だな。」

その時初めて、不敵に『カーディナル』は笑った。

ほう、と興味深そうに『プロメテウス』が反応を示したその時。

「失礼します、『カーディナル』。  
任務の途中経過を報告に参りました、元アジア担当第三隊所属の工  
クレシアです。」

## 第二十二話 一方その頃・・・

「いやあ、本当に困ってたところだよ。

最近の食糧不足は深刻らしくてね、上の階層のほうじゃひどい有様らしいよ。」

そう言つて、クラウンはずずつとカップ麺を啜った。

「何が悲しくてこんなところでカップ麺なんて食わんといけないんだよ・・・。」

俺は二口目には自分で木を削つて作った箸を置いた。

ここ最近濃い味の食べ物をあんまり食べなかつたせいか、俺の胃はそれを受け付けなくなっているようだった。

・・・クラウンの奴はバカバカと何杯も食っているが。

「それでね、ヴィーヴルの瞳がほしいのよ。できればエンシェントドラゴンのツノもね。特に後者が無ければ目的の達成は不可能なのよねえ。」

そして、そのカップ麺を持ってきた張本人はそう言つて難しそうな表情をしていた。

「ヴィーヴルならその辺の山脈に生息してるはずだよ。リンドレイクの領域に入る可能性があるからお勧めできないけれどね。」



でも、さすがにエンシェントドラゴンは無理だよ。」  
やっぱり濃い味の大好きらしいクラウンは飲み物のようにカップ麺を食べながら首を振った。

「フーか、この世にエンシェントドラゴンなんているのかよ。」  
代名詞にエンシェントなんて付くくらいなんだから、相当古いドラゴンなんだろう。

「いるさ、地上にも数多くドラゴンの伝承は残っているだろう？  
その多くは数百年から千年って年月で起きたり寝たりを繰り返している。そいつらは生物としてはもう一段階上のレベルに達しているから、生物的な営みなんてしない。だから地上の人間には彼らを忘れてしまったのさ。」  
そして、彼らが起きた時こそ、天変地異として現れるって言われている。  
と、言っても暴れまわったりしない。せいぜい身じろぎするくらいだろうね。それでも、自然災害クラスの災厄が引き起こされるんだ。」  
それくらい、古いドラゴンは強大だという。

「もうそのクラスになったら、精霊の一種ね。」  
幻想を忘れた地上の原住民には観測することすらできないわね。」  
「ふーん、じゃあ、日本に地震が多いのはプレートの下辺りにエンシェントドラゴンが眠ってたりするからとかか？」  
冗談交じりに俺がそう言ったら、ええ、とクロムは真顔で頷いた。

「え、マジかよ……。」

「マジよ。しかも調べたところによると、周期的にそろそろ起きるかもしれない。時々起こる小さな地震はそのドラゴンのいびきだつて話よ。」

「え、ええ……よりもよつて、いびきかよ。」  
「すごいのがすぐくわないのかよくわからない話である。」

「実は太平洋に一匹住み着いているらしいのよ、現状一番簡単で、若いし楽にとつ捕まえられそうなんだけれど。」

他のは大気圏とか地下深くとか、山に偽装しているとかで遭遇することすら不可能。

ホント、どうにかできないかしら。」

「その海に住み着いているのでいいんじゃないのかい？」

さすがに僕らの聖地に居られる神の化身のツノを持ってくる訳にはいかないし。」

そんなことしたら殺されちゃうよ、とクラウンは可笑しそうに言った。

「海に、ねえ……つて、おい、まさか、その海に住んでるっていうドラゴンと戦わせるつもりじゃないだろうな？」

「え、何を今更。」

まるでそれが当たり前のように、クロムはきよとした表情でそういった。

「ちょっと待てよ、いびきで地震を起こせるような化け物なんだろう？  
そんなの普通に無理に決まってるだろ！？」

「それは大丈夫よ、古代竜レベルに昇格したのはごく最近よ。居場所がわかったのも、かつてこの魔術師達が輸送に失敗して海に取

り逃してしまったのが発端だもの。

その情報が無かったら、エンシェントドラゴンの所在なんて普通わからないわ。

伝承としてもドラゴンとしては微妙だから質はあれかもしれないけれど。」

自信満々にそう言うてのけるクロムだが、こいつはたぶん何もわかっていないに違いない。

「恐るべきそのエンシェントシーサーペントドラゴンは、バミューダの悪魔って呼ばれているのよね。あの辺で発生する嵐は大体あいつのせいらしいわ。」

「バミューダの悪魔って、なんじゃそりゃ。」

バミューダトライアングルで船や航空機が行方不明になった事件は全部そいつのせいってか？」

「全部じゃないけど、あの周辺はそいつの影響で周囲の生物が凶暴化してるみたい。」

攻略は難しいわね、とクロムはため息を吐いた。

「それより、彼女が使い物になって戻ってきたなら、第五層の吸血鬼を手中に収めないかい？ 吸血鬼相手なら彼女ほど心強い者はいないからね。」

「それは賛成ね。外にいる吸血鬼の真祖は話にならないくらい強いつて聞いたわ。」

吸血鬼の血ならもう再現不可能な秘薬の代用になるでしょうから。」  
もうすでに二人の利害は一致しているようだ。

「“夜の眷属”の領域の案内役としてサイリスを徴集するつもりだ

よ。あそこは特殊な場所だからね、部外者が入るなんて論外だろうし。」

「魔族の領域こそ、そもそも特殊だと思うんだけどね。」

「つーか、サイリスで大丈夫なのか？」

個人的にはあいつが案内役とか不安なんだけれど。」

俺が口を挟むと、二人は呆れたようにため息を吐いた。

「あいつはへたれだけど、魔術の腕では僕より上だよ。」

所詮僕のは見よう見まねで独学でやってるだけだし。あと単純に地力が違うだけ。」

「正直、私としては貴方のほうが不安よ。今のままじゃスタミナ切れで役立たずになりそうだし。戦いの場じゃ一回戦うことにヒットポイントやマジックポイントが全快したりしないのよ。」

せめて魔力の運用効率を倍にしてくれないと、戦力にも数えられない。」

「うぐ……。」

クラウンとクロムにそう言われ、ぐうの音も出なかった。

「なぜ現代の魔術に呪文が簡略化されたかわかる？」

銃社会に対抗すべく、自然と呪文が削られ、より凶化されているわけ。」

魔術は数式のように表されるようになり、すばやく幻想を現実に出現させるようになったのよ。術式の構成と出現までにタイムラグがあるなんて話にならないわ。」

ねえ、道具に扱われるってどんな気持ち？ 人間としての尊厳ってないの？」

「……うっせえよ。」

人の気にしてることをぐちぐちぐちと、嫌味ったらしいクロムの台詞がむかむかと俺の心臓を刺激する。

「まあ、油断してたとは言え、油断してたとは言え、油断してたとは言え、仮にも、仮にも、仮にも、私を倒せたんだから、もっと強くなってもらわなくちゃ。私の目的にも支障が出るしね。」  
「どうやら俺たちに負けたこと相当根に持っているようだ。だからこんなになちねちとしてんのかよ、こいつ。」

「という訳で、今夜寝るときにこのカードを枕元に置いて置いてね。」

「は？」

クロムが差し出してきたのは銀色で一色のカード状の物体だった。

「なにそれ、僕も欲しい。」

「うーん、いいわよ。記録は多いほうがいいしね。」

何やら意味有りげにクロムはそう言っつて、同じ銀のカードをクラウドにも差し出した。

「なあ……これなんだ？」

「それは、使ってみてからのお楽しみね。」

言いたくて言いたくてうずうずしているのが傍目でもわかるが、クロムは楽しそうにニコニコしている。

それが非常に胡散臭い。

「イラネ。」

「え、なんでよー。」

俺がそれをつき返すと、不満そうにクロムはむくれた表情をした。

「とにかく、これを持って今日は寝ること。いいわね。」

そうしなかったら、うーん・・・どうしようかしら？」

すると、こいつは懐から見るからに怪しげな毒々しい液体の入った試験管を取り出した。

「わ、わかった、わかったから、それしまえ。」

「あら、それはよかった。」

にっこりと、満面の笑みを浮かべながら彼女は懐のブツを押し戻した。

この野郎、いつか絶対泣かすと心に再度誓いながら俺はテーブルの下を握り締めた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

目を開けると、そこは知らない場所であった。

「え．．．？」

本当にそこは知らない場所だった。

上も下も真っ白で、距離感が掴めないほど広大で何も存在しない場所だった。

「これは．．．夢だよな。明晰夢って、やつか．．．？」  
ちゃんと言われたとおりクロムに渡された銀色のカードを枕元に置いて寝たら、こんな夢を見たのだ。おそらくこれは奴の仕業に違いない。

「ようこそ、私の世界へ。」

そして、その当人はどっかーん、と派手なステージと火薬を使って登場しやがった。

「それより、なんだよここ．．．．。」

「なによ、相変わらず淡泊な男ね。」

ぱちん、とクロムが指を鳴らすと、馬鹿みたいなステージも火薬の匂いも嘘のように消えうせた。

「へえ・・・これは大掛かりだね、どうなってるんだい？」  
振り返ると、クラウンの奴もそこに居た。

いつものボロ切れみたいな目立たない格好ではなく、黒を基調としたいかにも魔術師然とした風貌だった。

「ここは夢の中よ。ご兩人。  
あのカードには睡眠時の精神をトレースして転写する機能があるわけ。

意識が閉じた状態の二つの精神の中でトレースされた擬似的な精神を強制的に覚醒し、一種の幽体離脱状態を作るの。

魂と精神に肉体との物理的な距離は関係ないという法則に従い、あなた達は眠りながらにして別の場所に意識を確立することができるってわけよ。

つまるところ、あなた達はいま精神だけの状態なのよ。体は普通に寝てるわ。」

「は、はあ・・・」  
半分も理解できなかつた。

「名付けて“ルシッド・シミュレーター”。  
精神世界では時間がゆっくり流れるってやつは聞いたことがあるでしょう？」

それにより、一晩にして人間の精神に負荷を掛けない限界の七日間を過ごすことができる。この中での経験は実体に反映されるわ。肉体は精神に引っ張られるものだもの。」

「えーと、三行で頼む。」



「コンピューターのシミュレーターを思い浮かべればいいわ。短い時間でさまざまなことを想定し、実行することができる。

それを実際に体験し、経験を肉体に反映できる。精神体だから死んでも大丈夫。」

「おお、すげーな。」

最後の最後になにやら不穏な言葉を聞いたような気もするが、普通にすごいので素直に褒めておくことにした。

「夢といっても、かなり高度な物理演算エンジンを根底においているわ。

魔術も普通に使えるし、核爆発の実験だってできちゃうわ。こうやってコンソールを呼び出して空間の設定を変更することもできるわ。」

クロムが虚空をカタカタとキーボードを打つような音を立てて叩くと、周囲の世界が一変して新緑が溢れた草原へと変貌した。

「へえ、空間制御は非常に高度な魔術だと聞いたけれど、範囲を限定すればこんなことも可能なのか。」

「全体より、難しい一箇所をランクダウンさせて連鎖的に運用すれば、こんな大魔術も案外簡単にできるわけよ。頭の固い魔術師には思いつかないでしょうけれど。」

「うん、思いつかない。魔族にもこんな発想は出来ないよ。さすが人間だね。」

クラウンはしきりに感心したように頷いている。

ちなみにちつとも俺は何を言っているのか理解できない。

「ま、なにより私が天才、ちょーー大天才だから出来る御業なんだけれどね!!」

そして自画自賛を忘れないクロムである。最近なんとなく感じてるが、こいつ絶対そういうキャラを作ってる気がしている。

普通、魔術師は自己主張が激しくなんてないらしい。

特に錬金術師は、昔から隠れ潜むように別の職業に身をやつしてひっそりと研究やら実験やらを行うらしい。エクレシアがそう言っていた。

「そう言う訳で、私はあなたを個人的に鍛えようと思います。」

「は？ 何だよ。」

「当然じゃない。」

にっこりと笑ってクロムは指を鳴らすと、いきなり目の前に現れて俺の両肩を掴んだのだ。

「おい、お、お前!!」

ぎりぎり、と俺の肩を掴む手が異様に強く、俺は思わず振り払った。

「あなたみたいな能天気な顔を見てるとね、いらいらするのよ。」

いつ命を奪われるかもわからない状況にいるって言うのに、あなたはまだどこか自分が平和の中にいるなんて思ってる。

あなた、自分より劣っている相手に足蹴にされてなんとも思わないなんて人間じゃないでしょ？ 少なくとも私は違うわ。仮にもね、私を一度殺したんだから。

ちょうど才能もあるみたいだし、あなたには私を倒したと誇れる人間になってもらうわ。ええ、私が納得するまで、絶対に、許さないわ。」

そこまで言って、クロムは妖艶とは程遠いどす黒い笑みを浮かべた。

「本当なら、殺し返して清算するんだけど。あなたは、特別よ。今すぐ全身に銃弾を浴びせかけて風穴だらけの蜂の巣にしてやってもいいんだけど、私は理性的な人間だもの。」

そう、この女は、理性的に自分で人を殺せるのだ。

殺されそうになったから、とか受動的な理由ではなく、自分の利益の障害になったと当然のように銃口を向けて引き金を引くのだ。

俺なんかより、こいつのほうがよっぽど魔族にふさわしい。

「ははあ、どうも人間にしては普通と雰囲気が違うと思ったら。

君、百人単位で殺してるでしょ？ 血の臭いがしないからどうかと思っただけ。」

「さて、ね。」

「そうじゃなくても、君の家系は代々人を殺しているはずだ。おびただしい数をね。」

君ほどの才能を得るほどには、いったいどれだけの年月と代を重ねればいいのか、僕にも想像すらつかない。僕には見えるよ、君が無数の屍と血溜まりの上に立っているのがね。」

クラウンは、それはとても愉快なことのように言った。

クロムも、否定はしなかった。

俺は、産まれて初めてたった一人の人間に寒気を覚えていた。

「……ホント、あの甘ちゃん騎士が居なくてよかったわ。

私は世界でトップセブンの屑に認定されたこともあるわ。本当に昔の話だけだね。」

「やっぱり、お前も見た目と実年齢は違うみたいなのかな？」

「失礼ね。私は見た目どおり今年で23歳、肉体の稼働年齢はまだ二週間だけだ。」

でも、昔はやんちゃをしたわ。私が生まれたのは、この世界じゃないの。」

「え……?」

それはどうということなのだろうか。

「ほしいものがあつたら平気で町を焼いたし、エルフに喧嘩を売って逆襲されもしたわ。でも、やんちゃが過ぎて、妹弟子には射殺されかけ、師匠には氷の牢獄に放り込まれ。かれこれ千年以上眠ってたみたいよ。」

その間には故郷の世界は荒廃して別の世界に移り住んでいるとか、私が起こされたのは、つい最近。この世界の文明もかなり進んでたし、浦島太郎ってこんな気分だったのかしらね。

でもだからこそ、師匠は私が必要になつたのじゃないか。

私は研究さえできればそれでいい。他には何もいらぬし、師匠の手伝いをするのもやぶさかではなかった。利害は一致し、契約は成立した。」

「もしかして、その師匠って言うのは……。」  
クラウンの疑念に、クロムは頷いた。

「師匠の名前は、リュミス・ジエノウィーグ。四代目魔王を討伐した英雄の末裔にして、同じ魔王を討伐に参加した『黒の君』の唯一にして一番の弟子。」

そして、『盟主』と呼ばれるこの巨大な建造物の支配者。」

俺は、違う意味で手に汗がにじみ出るのが感じた。

目の前にいるのは、奴の正体は予想をはるかに超える人物だということ、嫌でもわかる。

「そして、私の本名はメリス・フォン・エルリーバ・“パラケルス”。」

同じ四代目魔王を倒した偉大なるご先祖様の縁から、師匠の弟子になったわけよ。」

クロム、そう名乗っていた女はそう語った。

「じゃあ、お前はこの“箱庭の園”で二番目に偉いのか？」

「まさか。私みたいな屑に師匠が権力を与えるわけがないじゃない。そもそも、私が師匠の弟子だったって事実もなかったことになっているし。」

師匠に・・・いいえ、『盟主』に許しをもらってそれなりに好き勝手させてもらっているから、まあ別に私はいいんだけどね。」

しかし、そういった彼女はどこか不満そうな表情をしていた。

「因果なものだね。君は『黒の君』の直系の弟子ってことじゃないか。」

彼は血族で代を重ねない珍しいタイプだけど、その弟子の弟子が彼

の作った魔導書の持ち主が居合わせるなんて。運命って奴かな？」

「運命とか、大師匠一番嫌いな言葉ね。」

何か一連の共通点がある場合、何かしら意図が働いてるものよ。或いは、それを運命というのかもしれないけれど。」

そして、おしゃべりはここまでにしましよう、と彼女はそう言った。

「あなたが魔族の領域に行き着いた経緯は聞いたわ。」

そして、英雄の資質もある、と。大師匠が好きそうな話じゃない。

そしてあや取りのようにあなたを中心に物事が絡まってきている。

なら、私も乗ろうと思うわ。あの方の思惑にね。だから、試させてもらう。」

クロムは、そう言って拳銃を虚空から取り出した。

それをあげようとした瞬間、それをさえぎる手があった。

「ちよつといいかな。」

クラウンだった。

「僕にやらせてよ、彼が僕相手にどれまで出来るか、興味があるんだ。」

わざわざ、クロムと俺との間に出てきて言ったのはそんなことだった。

「それに、殺しても大丈夫って素晴らしいじゃないか。」

飽きるまで強い奴と戦えるってのは、実に面白いじゃないか。」  
こいつの頭の中を一度切って中身を見てみたいものである。

「前々から思ってたんだけどね、君には恐怖が足りない。

目の前にいるのは絶対的な強者であることをまるで分かっていない。どれだけ雑多な人間や下級魔族とも、このドレイクたる僕とは歴然とした種族としての優位というものがあるのさ。

僕も君と同じでね、これが自分は奴隷だという自覚が足りないとちよつと最近疑問を感じてね。　ちよつと頭でも潰してやろう

かと思つてたんだ。」

ごき、ごき、とクラウンは両手の五指を組んで揉みほぐした。

この野郎、つまり何がいたいかと言うと、偉そうにしたい、ってことじゃねえか。

「……じゃあ、貴方に任せるわ。」

そして、サディズムに満ちた笑みを浮かべて、まったくしょうがないといった風にクロムは一步下がった。

「僕に勝てたら、奴隷契約は免除してあげるよ。勝てたら、の話だけれど。」

チュニツクみたいな上着をはだけさして上半身を晒すと、いかにもやる気満々であると主張するようにクラウンは笑みを浮かべた。

「じよ、上等だ……俺も前からお前が気に入らなかつたんだ。」

俺は魔剣を呼び出すと、いつも通りに魔剣の重みが手に押し掛かった。

はつきり言っつて、クラウンの自信も当然ながら俺がこいつに勝てるなんてこれっぽっちも思っていない。

俺は自惚れ屋ではないから、自分の実力というか、分というものをちゃんと理解している。

正直、クロムの経歴はよく分からなかったから半分聞き流していたが、やっぱりこう言う荒事が一番俺には性に合っている。

「ああ、あんた馬鹿なのね。」  
虚空にモニターみたいなのを出したクロムは呆れたようにそう言った。

「ああ、言い忘れてたけど思考やら内面も観察させてもらうから。それにしても基礎がなっていないのによくもまあ……。」  
「おい、聞いてないぞ!!」  
さすがに精神だけの世界である。内面を覗くなんて造作もないのかもしれないが、正直そんなのはとても納得できない。

「我慢しなさいよ。別に精神操作の類まで出来るほど“ここ”は万能じゃないわけだから。それより、私なんかより自分の心配したら？」

彼女がこちらを流し見てそう言うのと同時に、クラウンが殴りかか



ってきた。

「うおうツ!?!」

変な声が出た。しかし、それ以上の無様は晒さなかった。

半ば付け焼刃でも、ちゃんとエクレシアに鍛えられているのだ。むやみに踏ん張らずクラウンの馬鹿力を魔剣で受けて後ろに跳んだ。

「なるほど、直感に頼るタイプ、と。」

・・・ああ、思考ログ漁ってみて分かったけど、貴方ってあまり深く物事を考えないタイプなのね。扱いやすそうで助かるわ。」

「はあ!?!」

なにやら聞き捨てならないことを言っている気がするが、今はクラウンの奴に集中しないといけないからそんな声を出すくらいで精一杯だった。

「ああ、お邪魔みたいね。それじゃ、がんばってね。」

クロムはそう言つと、パツと煙のように消えうせた。

というか、あいつの場合、目の届く場所に居てもらった方がいいよ  
うな気もしないでもない。

「ねえ、メイ。僕は一度でいいから殺した相手に今どんな気分か  
つて聞いたりしたりしたかったんだ。だからとりあえず、一回さっく  
り死んでおくれよ。」

目の前ではクラウンの奴が珍しく本性を表して楽しそうに笑ってい

る。

最近こいつの表情がわかるようになってきた。ちっともうれしくないが。

『ああ、言い忘れていたけれど、殺されても死にはしないけれど、当然痛覚も普通にあるから死ぬほど痛いわよ。一応の注意で精神死させるような魔術は禁止ね。』

多分は擬似精神が消滅するだけだろうけれど、まだ調整段階だから連動して本体の精神に影響が出るとも限らないから。』

クロムの声が空間に響く。

残念ながらそんな高等そんな魔術は知りもしない。

「じゃあ、遠慮なくいけるね。」

そんなまどろっこしいまねはしないでとも言つように、クラウンは腕を振りかぶる。

その手には瞬間的に真っ赤に炎で出来た剣が構築され、振り下ろされるのと同時に爆発した。

そうして、俺はクラウンとガチでやり合う羽目になったのである。



第二十二話 一方その頃・・・（後書き）

ここ最近あんまり更新できなかったんでちょっと本気出す。  
今週中にもう一話くらい上げる、と宣言します。

## 第二十三話 奇妙な報告

「構いません、入りなさい。」  
返事はすぐに返ってきました。

はい、と私は答えて『カーディナル』の執務室のドアを開けた。

そこには、緋色より濃い血のように紅い枢機卿装束を纏った女性が居ました。

彼女こそまさしく『カーディナル』。

この騎士団の創設者です。

行事でしか見たことのない彼女の姿に、私の緊張は最高潮に達していた。

彼女は温かい笑顔で私を向かい入れてくれましたが、すぐにその表情は険しくなって横に逸れた。

そこには、二人一組の白衣の男女が居た。

緊張してて一瞬気づかなかった。

「ここは遠慮して立ち去る場面ではないのかい？」

「おや、これからが本番ではないのかね。」

『カーディナル』の発した刺々しい言葉を、ソファアーにどっぴりと座り込んでいる男が打てば響くような速さで返答した。

「貴様があの蛮族どもに探りを入れているという話は聞いている。

あのトカゲの大将がケダモノを人間に化けさせ地上や『本部』の人間の領域にも踏み入っているのは暗黙にして周知の事実だが、当然こちらを受身の姿勢を取るだけのはずもない。

こちらにも忠実な部下を潜入させている。私の配下には、ちゃんとした魔術師の部下も居るのでね。」

「なるほど、連中の情報を横から掠め取りに来たのが本来の目的か。私も貴様ほど図々しくいられたら幸せだっただろうねえ。」

そう言つて『カーディナル』はため息を吐いた。

「いいだろう、報告を聞かせてもらおうか、騎士エクレシア。」

「エクレシア？・・・ギリシャ語とは、珍しい洗礼名だな。」

「あの、この方は・・・？」

私は気になつて思わずこの白衣の男について伺うことにしました。

「おや、申し遅れた。私はレオナルド。人は私を『プロメテウス』と呼ぶ。

とりあえず私は博士という呼称を気に入っているので、貴様もそうするよつに。」

「・・・え!？」

確認するまでもなく、当人から名乗ってくれた。

そして、『プロメテウス』と言えば、十一人しか居ない“魔導師”の一角である。

こうして彼と『カーディナル』が話し合っているのは別に不思議ではない。

ただ、意外な組み合わせだと思いました。

「博士の助手を勤めさせていただく、アビゲイルと申します。」

「あ、はい。どうも。」

そして彼の背後に控えていた白衣の女性も慇懃に完璧な一礼をした。

「しかし、『カーディナル』。いったい何を報告すれば……その、私は……」

私はなんとやっていいのか分からず、口ごもってしまった。

普通は報告書にまとめて任務の内容や結果を報告するのはどこの組織でも同じでしょう。

ですが、私はいきなり『カーディナル』に会って口頭で報告しろと言われたのです。

かなり戸惑ったのは言うまでもありません。今もまさに戸惑っています。

「ではひとまず、魔族の領域への潜入任務はご苦労と言っておこつかねえ。

それじゃあ、近状を話してもらおうか。派手にやったようだからねえ……ある程度は聞いているが、やはり貴殿の口で聞かせてもらいたい。

ありのままに答えてほしい。連中……魔族に対してどう感じたかい？」

「はい、し、しかし、潜入任務だというのに独断で……その、目立った行動をしてしまい……その……。」

「貴殿は聞かれたことを答えれば良い。具体的な行動や方針は貴殿の規範によって決められる。貴殿は百余名の人間の名誉を守った。

それは騎士として誇るべきことではないのかい？」

そう言った『カーディナル』の目は、綺麗なまでに冷めていた。

私はこの目を知っている。

命を数えることに慣れてしまった目だ。

それも個々の命を尊ぶことに疲れ、割り切ってしまった目だ。

結果的に良かった。その過程に目を向けることに涙し、枯れ果ててしまった目だ。

「……『カーディナル』……貴方は……。」

「いいから早く答えないかい。時間は有限なのさ。分かっているだろっ？」

「……はい。」

彼女の催促に、私は意を決して頷いた。



「もう一度訊こうか。貴殿は魔族に対してどう感じたかい？  
連中に対して具体的な印象について答えてくれれば良い。」

「はい……。」  
いきなりそう言われても、私は半ば混乱状態にあるため、どう答えれば良いのか分かりませんでした。

彼女の一言で、明日にでも教会は魔族との全面戦争、なんてことにもなりうるからです。

歴代の法王の信任を得、こと魔術関連について限定するならば、『  
カーディナル』はローマの教皇以上の強権を發揮できるのです。

そういう意味では、今まで人類と魔族との血みどろの殺し合いが起  
こっていないのは、彼女のお陰とも言えます。

544

「低俗にして野蛮、愚劣にして蒙昧、悪辣にして邪悪。  
あらゆる意味で人類の敵であり、滅ぼすべき害悪。」  
すると、『プロメテウス』ことレオナルド博士がそう言いました。

「私の認識としてはこんなものだな。  
君の意見に付け足すことはあるかね？」

まるで自分の言っていることが正しいというような物言いでしたが、  
私は返す言葉がありませんでした。

「……その性質は、悪逆にして非道なものだと私は感じました。」

「  
「だろっ?」  
レオナルド博士は『カーディナル』に睨まれているにも構わずにニヤついた笑みを貼り付けてそう言った。

「貴様には聞いていない。・・・それで、それがお前の認識かい?」  
「はい、ですが、その、私にはそのようなことを口にする資格は無いと・・・。」

「何度も言わせるな。そのようなことは聞いていない。質問にだけ答える。」

ピツと彼女は手に持っている万年筆の先を向けてそう仰りました。

「はい、それでその、思ったのです。彼らの意識は、かつて我々人類も通った道と思うのです。彼らの文明の進展は実に緩やかで、我々が彼らを見下す理由にはならないかと・・・。」  
「ほう?」

私が彼を一瞥すると、彼は興味深そうに目を細めた。

「ある魔族は、自分たちを人間に模されて作られたのかもしれない、と言ったのです。」

彼らを人類に近しいとまでは言いませんが、その知性を馬鹿に出来るものではありません。それに、彼らには心がありました。その、同族を思いやる気持ちがありました。

私は、それを否定することが出来ません。  
「ふふっ。」

何が可笑しいのか、レオナルド博士は一瞬蔑むように嗤った。

「聞いたかアビゲイル君。弾圧と異端審問がお家芸のこいつらが、心だとか思いやりだとか、くくく……。」

「はい、博士。公平公正がモットーのスポーツの世界でさえ差別問題が蔓延っています。聖書の解釈の違いで戦争を起こしたり、博士は首元に刃を突きつけて正義を説くあなた方に嘲笑しています。」  
そして、すさまじい酷評を受けました。

しかし、私はその言葉に対して怒りを覚えるどころか、不気味さすら感じたのです。

彼らの言葉は、人間的なようでどこか機械が喋っているような、少なくとも、レオナルド博士が本気で嘲笑っているようには見えなかったのです。

その実際との行動のギャップに、私は違和感を覚えました。

「ふん、心の無い人間がよく言う。私には分かる。貴様の言葉には悪意すらない。それともそこまで至るまでに本当に心を捨てたのかい?」

「捨てたさ。人間らしい感情もな。」

私は過去の自分の感情表現を出力し反射的に言動をしているだけに過ぎない。ここまで自己を削ぎ落とすことに意味があるからな。」  
その彼の言葉に、“魔導師”の恐ろしさの一端を垣間見た気がしました。

レオナルド博士の仕草はどう見ても人間そのものです。  
私が違和感を覚えたのはそこでしょうか。

「……ふん。心を捨てて何が人間か。」

騎士エクレシア、合理性で出来た頭でつかちなぞ気にする必要はないよ。」

「……はい。」

私は『カーディナル』に頷きました。

そして、私は彼女の揶揄するような言葉を受けても、ニヤニヤと仮面のような笑みを浮かべているレオナルド博士に背筋に冷たいものを感じました。

感情が無いのなら、その笑みはむしろ不気味ささえ湛える。

「では、次の質問だ。彼らに我らの主の言葉を伝えることは可能だつたい？」

「……そして、或いは伝えることは可能だと思ukai？」

「おい、『カーディナル』、貴様は頭がイカレたのか？」

私が何かを言うよりも早く、彼は『カーディナル』にそう言った。

「何が、だい？」

大方何を言われるのか予想はしているのか、『カーディナル』は怪しげな笑みを浮かべてレオナルド博士を見やった。

「馬の耳に念仏を唱え、石ころに説法をするようなものではないか。これでもかなり控えめな表現であることは理解しているだろうな。」  
「分かったから仏教で例えるな。それと石ころにも意思はあるだろ。」

うさ。精霊信仰を肯定するわけではないがねえ。」  
魔族に対して非常に否定的らしいレオナルド博士の言葉に、『カー  
ディナル』は面倒そうにそう答えた。

時々二人は私を置いてきぼりにして話をしますが、どうせならずつ  
とこのままにして欲しいのが本音です。

それは私なんか『カーディナル』に相對するのはどれほど恐れ多  
いのか思い知ったような気がしたからです。

この途方も無く遙か彼方に居る二人は、私の言葉など届かないよう  
に思うのです。

「レオナルド博士の思っておられる通り、私が語るよりご自身がず  
っと承知の上ではないのですか、『カーディナル』？」  
私は少し強い口調でそう言った。

戦地に向かう戦闘員に対して現地の情報を制限するなど、あつては  
ならないことだ。

そこに明確な理由が存在するなら納得も出来ませんが、その説明は一  
切されていない。

情報の大切さは、『カーディナル』が誰よりも良く知っていると言  
うのに。

「ああ、承知だとも。だが、私は連中の中まで入って行って何かを  
したりしたわけではない。故にそんな人間が偉そうに語れるかい？

経験に勝る説得力は無い。そういう意味では、私なんかより貴殿の方が魔族に対して詳しいとすら言える。

少々悩んだが、貴殿には出来る限り偏見を持たずに連中に接してもらうべく、敢えて多くの情報を渡すことはしなかった。」

実に『カーディナル』らしい答えでした。

しかし、私は納得していない。

「それが、任務に達成に致命的な障害となるだろう事実を隠す理由ですか？」

「はははは、かわいい顔をして辛辣だねえ。」

私はね、自分で言うのもなんだが慈悲深い人間だ。

それがたとえ小さなアリだろうとも、目にしたなら足を下ろすことに躊躇いはするが、それが家を食いつぶすシロアリなら話は別だ。」

『カーディナル』は執務机の引き出しを開けて、中から古めかしいキセルを取り出してそう言った。

「別に私は連中に対してどうこう思っているわけではない。

ただの、慈悲だよ。ただそれだけだよ。我々は殺すべき相手を選ぶ理性ある種族だ。」

どこか哀愁の漂う雰囲気でキセルの煙を吹かしながら、彼女はそう仰った。

「命奪うことを理性あると仰るのですか？」

「ああ、少なくとも、我々はそうじゃないかい？」

我々の正気は神が保障してくださる。言い訳は一切通用しない。

地獄に墜ちるその日まで、主のために戦い続ける。これが私たちの信仰だろう？」

その通りです。  
そこに疑問を挟む余地はあっては……いけない。信仰とはそういうものです。

「やはり狂っているではないか。」

ぼそり、とレオナルド博士が呟いた。

それに対して『カーディナル』は何も言いませんでした。

しかし、すぐに彼女は頭を掻き毟るようにガシガシと掻いた。

「悪いが、勘弁してくれないかい。」

「……私にも言いたくないことはあるのさ。」

「ッ!？」

私は今初めて、私は目の前に居る女性を、騎士団の創設者ではなく、ただ一人の人間として見れた気がした。

それほどまでに、今の彼女は隙だらけで辛そうな表情をしていたのだ。

「おいおい、まさか私情で一人の部下の命を死地へ追いやったのか？　これはこれはひどい上司だ。」

若干の間を持ってレオナルド博士がそう言った。

嫌みったらしい口調でしたが、どこか私は物悲しく思ってしまう。

「……『カーディナル』。本当に私情なのですか？

別に私は私情で任務に就かせられることに疑問を持ってはいません。

しかし、『カーディナル』。このままでは私は貴女を信じられなくなる。」

それは、とても悲しいことだ。

なにより、私は彼女が私情で動くということが信じられなかった。

彼女は常に教会のために尽くしていた。

私情で任務を課せられること自体に思うことない。そもそも人間はそういう物です。私情の絡まない意思決定など存在しない。

今回はその割合が多かっただけです。

私はただ、彼女の本当の事実を知りたかったのです。

彼女の口から、魔族に対する一連の行動の理由を。

私が無言で真摯に訴えると、彼女はやがてため息を吐いておもむろに口を開いた。

「私がまだただの人間だった頃の話だよ。

私は貧しさが酷い国に生まれてね、戦禍で貧困が日増しする時代だったさ。

まだただの修道女だった私はある日、パンを子供たちに配っていた。私は昔から達観してたのか、パンが足りずに食事にありつけない小さな子供がどうかできないかと縋って来たりしたら、必ずこう言っていた。

可能な限り苦しんで飢えて祈りながら死になさい、そうすれば神が助けてくださる。そうでなければ祈るに値しない神であったと魂を突き返せば良い、とね。」



「しかし、『カーディナル』。そんな時代にそんなことを言えば・・・」

「当然、異端審問間が来ている拷問された上にギロチンだったよ。」

私は決して自分の言葉を曲げなかったし、最後まで主を信じていた。そしていざ処刑台に乗せられたとき、私はある人物・・・というのには語弊があるかねえ。

まあ、とにかく、私はある人物に助けられた。」  
それは、信じられない話である。

それは即ち当時の教会権力に楯突く行為である。

『カーディナル』が生まれただろう十一世紀から十二世紀の教会圏の国々での教会の権力は絶大だ。

それは自ら首を絞めるのと同義である。

ですが、私は次にもっと信じられない言葉を聞くことになった。

「その人物は、今では“伯爵”と呼ばれている。」  
「え・・・」

一瞬何を言われたか分からなくなるほど、想像だにできない人物だった。

「ああ、“ノーブルブラッド”・・・吸血鬼集団の首領か。」  
レオナルド博士がそう呟いた。

そう、我々が長年敵対し、殺し合いをしてきた宿敵そのものである。

「ああ、当時はまだ集団とは言えない程だったがねえ。

それからというものの、私は彼女と行動を共にした。しばらくして袂を分かったがね。理由は、言うまでもないだろう。

その後、私は祈りをささげるだけの自分に疑問を抱いてね。彼女から聞いたこの『本部』へとやって来た訳だ。

私は学んだのだよ、人を救うにはもつと実質的で分かりやすい力が必要だと、ね。」

「だから、魔術を？」

「そうとも、それから私は一通り魔術を会得し、地上に降りて再びしばらく個人で各地を回った。

苦難の連続だったよ。それまでは何度も酷い目に会ったし、敵に捕まって口には出来ないようなこともされた。

そして十四世紀初頭にはついに私は逃げ延びたテンプル騎士団のメンバーを掻き集め、今の騎士団の雛形となる組織を完成させた。

しかし、それからも大して変わらなかった。

殺し殺され、時の権力者に取り入って汚れ仕事を請けたりもしたし、袂を分かった彼女とも何度も何度も殺しあった。

だが、それが私と彼女の友情なのさ。」

そこまで語った『カーディナル』には、いつもの不敵な笑みが戻っていた。

「吸血鬼との、友情・・・ですか？」

「ああ、友情だとも。今でも彼女は私の友であり、宿敵であり、神敵だ。

お互いに搾取し、抑制し、殺しあつて成長してきた。

だから私は考えたわけさね、もしかしたら他の魔族とも睨み合いの現状以上の関係に至れると、ね。その方が生産的だと思わないかい？」

「・・・・・・・・・・」

私は、なんと答えればいいか分からなかった。

「……貴女と、“伯爵”の友情はこれからも続くのですか？」  
「続くさ、永遠にね。それが私と彼女の私情だよ。」

当然、散っていった同胞たちに顔向けできるように、彼女に手心を加えたり主義主張を曲げたことは一度たりとも無いと主に誓って宣言しよう。」

「それさえ聞ければ、私は十分です。我らが偉大なる『カーディナル』。」

彼女は私たちの旗印。

それが揺らぐような話でなければ、私や同胞の騎士たちも文句はない筈だ。

たとえそれが吸血鬼との歪んだ友情があろうとも。

我らの行いは最終的に神のために帰結すれば、まったく問題ないのです。

「これは他言無用で頼むよ。ジュリアスの奴にも話してないんだからね。」

「私は聞いてしまっただけなのかな？」

「つまらん私の身の上話なんぞ言いふらすガラでもないだろう？」

この程度の話で貴様の反応を伺えばいい程度だと思っているよ。」

「そうだな。まったく私にとってはどうでもいい話だったよ。」

もうすでに終わってしまったことに興味はないからな。……と  
いうのは言いすぎかな。面白かったとだけ言っておこうか。」

どこまで本当か分からない口調で、レオナルド博士は言った。

「だが、貴殿を魔族の領域に強行偵察に赴かせた理由はそれが全てではない。」

そう、……神託があったのさ。これはその頭でつかちにも聞いてもらわねばならないことだ。そうでなければとっくにでも追いついている。」

「神託か。神は否定しては居ないつもりだよ。それに類する概念、またはそれ以上の存在の意思がなければ地球に生命が誕生することに奇跡などという言葉ですら説明が出来ないからな。」

「ふん、説教ならいつでもしてやるさ。それはともかく、これは重大なことだ。」

重々しい口調で『カーディナル』はそう言って、引き出しからスクロールを取り出した。

「内容はここにまとめてある。」

彼女は巻物状のそれをレオナルド博士に無造作に投げ渡した。

「……これは!?!」

そのスクロールを広げてその内容を見たレオナルド博士は、顔を顰めた。

「魔王復活の予言だと……馬鹿な、物理法則が基盤のこの世界で、あのような馬鹿げた存在が自然発生するなどありえない。」

「ああ、そうだろうねえ。」

誕生ではなく、復活だからね。自然発生なわけじゃないか。」  
彼の言葉に『カーディナル』も頷いた。

「魔王の、復活……!!」  
それは想像するのも恐ろしい事実だった。

「そこに書かれているのは近い将来に魔王の復活を示唆する内容だ。問題はその過程だよ。誰が、いつ、どこで、なぜ、どのように、魔王が復活するかが不明瞭なのさ。現段階で、我々騎士団は混乱を避けるため極秘にその内容を伏せて搜索している。

貴殿の任務もその一環でさ。」

私は、彼女の言葉を聞きながら寒気を覚えて震えているのが分かった。

これは、明らかに聞いてはいけないことである。

「一番怪しいのが、あの『マスターロード』率いる魔族連中、或いはそれに与しない魔族集団。時点で邪悪な悪魔崇拝者に寄るもの。貴殿を送り込んだのも、奴の反応を見るためでもあるが、これは結果的な話でそうなれば良いとは思っては居なかったよ？

連中が混乱すると神託に出た以上、切り崩しを行うにもこれ以上の好機はない。

我々人間と戦うことをしないと誓う魔族を同族から守ってやる意味でも、私は彼らの受け入れを決意した。当然、それは貴殿が布教に成功した場合の話ではあるが。」

「は、はい……。」  
自分でも、どんどんと引き返せない泥沼にはまり込んでいるのが分かるほど、彼女の話は所謂ヤバイものであったのです。

「だが、これは当然として魔王復活の阻止を前提としている。どんなに彼らを改心させたとしても、魔王が復活すれば全てが水泡に帰すだろう。」

「魔王が魔族をまとめ、大進行を開始するからですか？」

「いいや、連中にとって魔王とは神に等しい。所詮魔王という呼称は便宜上のものに過ぎず、あの存在を正確に言葉にして表現するのは不可能だ。」

もし仮に我々の神が地上に降臨するとどうなる？

そこに主義主張、信仰の有無や強弱に関係なく、我々人類はその面前に無条件で平伏し、己の罪深さに悔い改めることだろう。

連中にとっての魔王も同じだ。無条件で眷属を支配し、一種の洗脳状態になる。そうなったら、もはや和解の余地はない。」

「記録にもあるな。魔王に率いられた軍勢は不気味なほど統率が取れて、一個の軍団のように襲い掛かってくる。」

あのトカゲの大将ほどのカリスマ的魔族のトップが居ながら、統率が取れていない現状を見ると、その異常性が垣間見られるな。」

レオナルド博士も相槌を打ってそう答えた。

そこに先ほどまでのようなふざけた雰囲気は皆無でした。

「さて、騎士エクレシア、それ踏まえて、だ。」

貴殿は我らの主の言葉を連中に伝えられると思うかい？」

「た、例えどのような困難が待ち受けていようと、私の任務は何も変わらないと存じますガッ。」

多少どもりながらも、私は何とかそう答えました。

正直なところ、私には重過ぎる任務だと思わなくもありません。

……だめだ、まだ頭がこんがらがってます……。

「ですが、私見を言わせてもらうならば、真摯に奉仕の心で訴えていけば、いずれ彼らにも主の言葉が届くかとツ。」

「ああ、だが貴殿のような小娘が伝える言葉なぞ所詮誰も聞きはしないだろう。」

しかし我々は、頑なに耳を閉ざす異民族に無理やり言葉を伝える方法を知っている。

・・・それでは、改めて貴殿に任務を伝えよう。」

そして、『カーディナル』は改まったように立ち上がり、真剣な眼差しで私を見ました。

「復活が予言される魔王に対抗すべく、その復活を目論む人類の敵を捜索することである。これは最優先事項であり、何よりも優先される事柄だ。」

そして、人類との衝突の放棄を確約した魔族の可能な限りの保護。これは本当に貴殿の出来る限りで構わない。こちらとしても危険な行為なのは承知だからね。」

『マスターロード』に知れて肅清なんて巻き起こったら目も当てられない。」

「内部からの切り崩し工作を行っている時点でもうすでにこちらに攻撃する理由になっっているだろうに。」

「私が二番目に恐れているのは、戦いになったときの泥沼化なんだよ。」

魔族の連中は下手に強い分、民衆まで徴収され凄惨な状況になる。それは避けたいんだよ。こちらは戦争の終わらせ方を計画的に決めるが、連中はそうじゃないからね。」

「ずいぶんと効率の悪いやり方だ。」

「良心は効率だけで行うものじゃないってことさね。」

まあ、それ以外の方法もないのも事実なわけだけれど。」

「ふむ、ではこちらでも対策を考えておくとするか。魔王なぞに復活されたらこちらの進めている計画も台無しだ。」

「貴様の下らん計画など、さつさと頓挫すればいいさ。」

そこまで言つて、『カーディナル』は区切りを付けた。

「では騎士エクレシア。汝に主に代わり、神命を授ける。」

「はい、神の御名の下に、謹んで拝命いたします。」

私は跪いて厳かにそう答えた。

特務ゆえに略式どころか、二人あわせてたった二言での任命。

私も戦地で急な命令の変更の際に一度経験しているから戸惑いはない。

「ふむ、騎士<sup>デイク</sup>エクレシア。私にはそこまで連中にしてやる理由は見当たらないな。いやいや、別に何も答えなくて構わない。私は連中を理解してやる義理も積もりもありはしないのだからね。」

「博士は理解不能だと仰っています。」

わざとらしく婉曲な表現で言つたレオナルド博士だったが、背後に控えていたアビゲイルさんが非常に簡潔にそう言つた。

「そんなこと、私にも分かりませんよ。」

ふと思ひ浮かんだのは、一人の青年の姿だった。

「きつと、運命なのでしょう。主の導きなのでしょう。」

「運命、か。下らないな。それはつまり、限界があるということだ。そんな人生に何の意味があるというのだ。これだから宗教家どもは



嫌いなのだよ。」

「神の試練を乗り越えることは、自らの限界を超えることだと思いますが。」

「お前も魔術師の端くれなら分かるだろう。それは他人に勝手に限界に決められているということだろう?」

これは一般論だがね、とレオナルド博士は最後にそう付け足した。

運命、それは大多数の人間には受け入れがたい事実でもあるのです。特に魔術の才能は魂に依存するため、当然どうしても超えられない限界がある。

だから、魔術師は運命という言葉が大嫌いだ。自分たちには限界がないと信じているから、それすらも利用しようともがくのだ。私とて、それを言い訳にするつもりはない。

「私は」

「 会談中、失礼します!!!」

私が口を開こうとしたとき、ドアがバタンと開いて、一人の従士が駆け込んできた。

見るからにただならぬ様子だった。

「西の空に、多数の・・・悪魔が・・・!!!」

「えっ。」

ちよつどこの執務室の窓には西の空が見える。

思わず窓の方を見ると、かなた遠くに真っ黒な何か蠢いていた。

「そんな、いったい何が……。」  
それは、無数の悪魔の大集団だった。

この時代、普通に悪魔を見ることがなんて滅多にない。  
それが徒党を組んで、それがよりにもよって騎士団の総本部に攻め込んでくるなど、前代未聞である。魔術師の業界でも超常現象レベルだ。

だからそれを意味することは、たった一つの事柄である。

「ほう……今の時代に我々に喧嘩を売る輩が居るとは。驚きだな。」

ゆえにそれを示す事実は、人為的な悪魔の召還である。

「全騎士に通達しろ、即座戦闘準備を開始し、部隊単位で命令を待てと。」

各従士は教導の指示に従い、非戦闘員の非難を最優先させる。

あと、私が最前線に出よう。今の騎士達は戦争のやり方を知らないからねえ。」

「ハッ!!」  
息を乱していた従士も、それを聞いて敬礼した。

「あの、『カーディナル』。まさか……」

「どこの誰かは知らないが、まあ魔族の筋ではないだろうねえ。もし仕掛けてくるならもつと狡猾に大胆にやってくるだろう。それがあの『マスターロード』のやり口さ。相手は悪魔、地獄に還す必要もない。完璧に殺してその魂を神へ御返しするのだ。」

そう言った『カーディナル』は、いつになく壮絶な笑みを浮かべていた。

「まあ、とりあえず、」

皆殺しだ。」

そう、狩る側なのはこちらなのだ。

第二十三話 奇妙な報告（後書き）

ちよつと本気出してがんばった。

来週は忙しいので一話上げられるかわかんない。

## 第二十四話 英雄の素質

「本当はこんなことを言うのは気が引けますが、メイさん。彼に決して気を許してはいけませんよ。」  
「苦渋に満ちた表情で、エクレシアがそう語ったのを俺は鮮明に覚えている。」

その彼というのは、もちろんながらクラウンの奴のことである。

彼女の属する教会では、蛇は悪魔の象徴である。それに翼が付いているドラゴンは即ち、墮天使という意味が加わり、悪魔そのものになる。

そしてその化身たるドレイクに命を助けられたエクレシアの心中察するものがある。

多少の例外はあれど、ドラゴンは圧倒的に人類の描く物語や英雄譚では悪役敵役やられ役である。  
クラウンの奴もそれに違わない嫌な奴である。

人間にとっての悪とは、こっぴつ奴なのだとも思う。

だが、ひねくれた現代人はこう夢想したりしないだろうか？

たとえば地上にでっかいドラゴンが現れたとしよう。

現代の兵器をふんだんに使えば、まあ、たぶん何とか倒せるだろう。怪獣映画だと怪獣は基本的に現代兵器に耐性を持っていて、日本では当然のように自衛隊が返り討ちに遭うのがもはや“お約束”ですらある。

たとえば中世を舞台とした物語で、ドラゴンが現れたとしよう。

奴には鉄で出来た剣も矢も効かない。これは不味いとは思っただろうが、まあ一国レベルで一致団結して軍隊やら何やらで対処すれば何とかなるかもしれない。

常識に凝り固まった人間は、そう思うだろう。

しかし、残念無念。連中は、さっき言った“お約束”を踏襲し、物量では絶対に勝てないような絶妙かつ絶対的な化け物なのだ。

まあ、勝てないだろう、とは思っていたが、ここまで圧倒的だと笑えてくる。

これがその一部始終である。

「  
ッ」

不意打ち気味に放たれた爆炎が巨大な刃のようになって襲い掛かっ

てきたのを、俺はとっさに魔剣を振り払って迎撃した。

魔力による活性化に慣れた俺の体は、即座に人間の生理的限界の領域にまで達する。

つまり、俺の体は魔力を通すだけで限界まで鍛え上げられたスポーツマンのような身体能力を獲得するまでに至ったのである。

これもエクレシアとの日々の訓練の賜物である。

しかし、身体能力が地で違う魔族とは、これでやっとなら対等かそれ以下だ。

何せ連中にとって、その状態が基本であり、さらに魔力によって上乗せできる。

それに、魔族の中には魔力の運用を前提とした進化を遂げているものもいる。

ドラゴンなんてその最もたる例だろう。想定される空想上のドラゴンは己の翼でその体を浮かすことは出来ないのだから。

そういう意味では、地上にいる人間は魔力を使うことを忘れ、それに関して退化していると言っても良い。

俺の用に短期間の訓練で適応できるのは、稀であるらしい。

そういう才能があるからだと言う。

たとえ人間が退化しようが、魔力はそれを補って退化の過程を無視する。

そうして魔力に馴染んだ俺の肉体は、たった一瞬でただのガキから極限の身体能力を得た人間へと変貌させる。

これはただ単に俺がそういう魔術に適正があっただけで、魔術師の

誰もがそんな超人的な能力を獲得するわけではないようだ。強靱な肉体を得たり出来るのはギリシア系の魔術の傾向らしい。

本格的になれば、これの上に更なる身体能力強化系の魔術を付与するらしい。

一応一通り使えそうな魔術はピックアップしてもらったが、地力がなっていないのに上位の魔術を使わせられるか、という話でエクレシアはこれ以上の強化魔術の使用を禁止されている。

当たり前である。強化された自分の身体能力に自分がついていけなくなるなんて、馬鹿らしいと俺も納得して鍛錬にいそしんでいる。

さて、余談はここまでだ。

その爆炎の凶刃は質量で叩ききるといふより、熱量をぶつけるといふ感じの一撃だった。

当然、迎撃した俺の魔剣の刃を素通りして俺の体に真っ赤な火炎が叩きつけられた。

俺は咄嗟に簡易障壁で身を守った。

簡易障壁と言っても、柔道で言う受身のようなものだ。致命傷を避けるために緊急避難用に一瞬で張れる極薄の全身を覆う球状のバリアである。

エクレシアの教会での通称は、“首の皮一枚”。

主な用途は相手の刃を逸らすためであり、強度はガラスの灰皿とかの適当な鈍器であっさり破れる程だ。



しかしながら、有ると無いとではまったく生存率が違うらしい。

基本的な動きをエクレシアから学んだ後、俺はこの魔術を条件反射で出せるように、彼女に“刷り込み”をされた。

そして、それを自分でも違和感を覚えないようになるまで繰り返し練習させられた。

………スパルタだった。

だが、それが功を奏した。

簡易障壁は一瞬で燃え尽きたが、その一瞬で俺は爆炎の効果範囲から飛び退ることが出来た。

まさに首の皮一枚である。

そして、目の前のバーチャルで出来た草原が爆炎の刃で真っ黒に焼け焦げている。

これが質量で叩き切る攻撃だったら、たぶん即死だっただろう。

火に対する魔術は基本中の基本らしいし、くるとわかっているなら俺もちゃんと対応できる。

だが不意打ちだ。

魔術師として素人の俺がそこまで対応できるはずもない。

「思想なき力ほど、意味の無いものは無いと思わないかい？」  
クラウンが五指を広げた右手を大きく振りかぶって振り下ろした。

その鉤爪のように鋭い彼の爪から五条の真空の刃が繰り出された。  
それが放射状に伸びて、散弾のように広がる。

この近距離で回避は困難で、俺は『アキレスの盾』を展開して凌いだ。

その強力な一撃は、地面をめくり上げるほどである。

「くそッ」

魔剣を持ち直して、雷撃を放ちながら突進を試みる。

「君には、何かを成そうという志が足りない。」  
バシシィィ、と進む雷撃はクラウンには届かず、彼の身を守る球状の力に沿って逸れただけだった。

「僕は別に君に何かを期待しているわけじゃないんだよ。  
たださ、僕と君には主人と奴隷って関係があるわけなのを最近忘れてるよね？」

クラウンは余裕綽々の抑揚のある口調でそう言った。  
接近しようとする俺には地面から無数の鋭利な棘が飛び出して思うように進めない。

「君の力は、当然ながら僕のものなわけさ。だから別に君に思想信

条その他諸々が無くたって構わない。なにせ、僕力だからね。ただどそれは、具合が悪い。なぜなら、君には僕の為に強くなってもらわないと困るからだ。分かるよね？」

「知るかッ!！」

「知るか、じゃないんだよ。」

がつん、と何の予備動作の無く真横から衝撃を受けた。

「(えッ。)」

何をされたのかわからず、ボールのように俺は地面を跳ね飛ばされた。

「その為の向上心が君には足りない。死ぬ物狂いで戦おうって気概が無い。」

君はまだ心のどこかでぬるま湯に甘んじている気ている。僕と君は主人と奴隷。

別に僕は君を保護しているわけじゃないんだよ、使えなかったら、いらんないんだよ。」

思いつきり、蹴り飛ばされた。

放物線を描きながら俺は地面に叩きつけられた。

痛い。

すごく痛い。

死ぬほど痛いし、骨が何本も折れているだろう。普通に重症だ。

たとえ人間がどれほど限界まで丈夫になろうとも、トラックなどに衝突したら無事ではいられない。

そういう類の一撃だった。

ましてや、今回は簡易障壁すら張る暇すらなかった。

「強くなることに、理由は要らない。

それがオスであるなら強くなることは当然のことだ。そこに疑問を持つ余地は無い。

だったら素直に、僕のために、生きるために、強くなればいい。ひたすらにね。」

クラウンが、俺に声を投げかけてくる。

「僕には僕の理想や野望があつてね。こんな辺境でくすぶるつもりは無いんだよ。

僕は、外に行つてみたいんだ。だけど僕ら魔族が外部に行くことがどれほど難しいかわかるよね。ほら立ち上がれよ、僕のために立ち上がれつて言つてるんだよ。ん？ ご主人様の言うことが聞けないのかい？」

理不尽な言葉が聞こえる。

「（おい、魔導書。）」

『肯定』 本書は完璧です。術式『ファーストエイド』にて各破損部位を接合、修復します。しかし、あくまで<sup>ファーストエイド</sup>応急処置であるので、無理は出来ません。

頭の中からその知識を引つ張り出すと、一時的に肉体を修繕する治癒魔術らしい。

しかし、これは自然回復までの時間を魔力で代用して無視した結果であり、補填された細胞が現実に着にまで数日の時間が必要あるらしい。

簡単に言えば、傷ついたと言う現実を魔力で誤魔化し、傷を無かったことにするのだ。

当然、これは後から本格的な治癒魔術を受けることを前提にしている。

誤魔化しによる一時しのぎにしか過ぎないのだ。

『確認』 本書は魔族に対抗するべく存在します。我がマスターが魔族に敗北するようならば、我が存在意義が揺らぎます。

「（分かっているさ・・・。）」  
俺に力を貸してくれるこの魔導書は、戦えないのなら見限るとまで言ったこともある。

クラウンは言った、強くなることに理由は要らないと。

だが、俺にはある。

あいつと違って、俺は強くならなければ魔物の餌になるだけなのだ。

俺は、強くならなければならない。生きるために、死にたくないから。

そうじゃなきゃ、エクレスシアの提案を蹴って魔族の領域に残った自

分が嘘になる。

それを否定してしまつたら、俺は俺が分からなくなる。  
それが、俺の根幹。魔術師としての、アイデンティティー。

「分かっているさ……。」  
俺が今いるのは、生存競争が普通に行われている世界だ。

日本ならどんなに獣が出たとしても、熊がせいぜいである。  
しかし、ここは見上げるほどの巨大な怪物も、獰猛な魔物も日常的に存在する。

一寸先は闇、生きているのが当たり前ではない場所なのだ。

「わかってんだよ、そんなことツ!!!」  
まるで、頭から這い出るような感覚が溢れ出す。  
無数の蛆虫が肌の下を這いずり回るように、全身にルーン文字が  
き渡って行く。

北欧を代表する魔術体系のひとつであるルーン魔術による刻印だ。  
いまどきの魔術師は複数の体系の魔術を組み合わせたりするのは普  
通らしい。

その汎用性からルーン魔術はさまざまな形で派生しているという。

俺は、魔剣を杖にして立ち上がる。

俺ではない誰かの経験が頭から体全体に染み渡り、自然に利き手ではないはずの左手に魔剣の柄を持ち替え、右手を添える。

この瞬間、一月前にはまともに刃物を持ったことも無い俺が、達人へと変貌する。

以前この状態でコボルトと戦ったら、まともに動くことすら出来なかったが、今では前提が違う。

魔力による強化に慣れた肉体は、人間の限界を超えることすらも許容する。

「面白い。じゃあ、僕もちょっと本気出そうかな。」

クラウンが指を鳴らした。

彼の足元に俺には理解不能な紋様の魔方陣が浮かび上がる。

「本当ならば、人間如きに使うには惜しいけれど、これは強者なりの礼儀だと思ってくれればいい。見るがいい。我が一族の秘術をね。」

「  
魔方陣の魔力が紫電となつて弾ける。」

その直後、クラウンの全身の筋肉が、膨れ上がった。

「!?」

正直、ギョツとした。





弾道ミサイルでも持ってこない限り、強大な竜族を前にして中世レベルの軍隊や村民がどんなに結託し、どんなに優秀な人間に率いられていようとも、勝ち目など皆無なのだ。

彼らにとって、勇気や愛と言ったものは嘲笑の対象なのだ。

それを語る人間どもは、千や万単位でその威の前にひれ伏すのだから。

ありとあらゆる生物のヒエラルキーで、最強。

それが、竜種、竜族。ドラゴンと呼ばれる最“悪”の化け物なのだ。

がくん、と立ち上がったはずの俺の膝から力が抜けて、ぺたんと崩れ落ちた。

強く握っていたはずの魔剣の柄も、弛緩してしまって動かない。

心が、震えない。

その代わりに、全身が本能にてがくと震えている。

どんなに立派な主義主張をならべたところで、正義や善を語ったところで、この絶対的な暴力の前にそんなものは無力だ。

「君ガ、僕ニ服従スル 理由ハ、別ニ命を 助ケテヤツタカラジヤ  
ナイ。

君ガ、僕ノチカラニ、屈服シテイルカラダトイウコトヲ、 忘レテ  
ハイケナイ。」  
がらからで途切れ途切れの聞き取り辛い言葉で、クラウンだったモ  
ノは言った。

爬虫類の鳴き声を無理やり言葉にしたらこんな風になるのだろうか。  
息をするたびに、高温で目の前が蜃気楼のように歪む。

「僕ラハ、生レタトキカラ全テニオイテ、君ヲ、ニンゲンヨリ 優  
レテイル。

知能、チカラ、精神。偉大ナル魔王陛下ハ、我々ヲ ソノヨウニ御  
作りニナツタ。

ダカラネ、僕ガ ソモソモ、キミニ負ケル要素ナンテ、皆無ナンダ  
ヨ。」

支配欲、征服欲、それらが満たされて大いに満足しているだろうク  
ラウンが、にやにやと笑いながらこちらに余裕たっぷり近づきな  
がらそう言った。

『だけれど。』

しかしその時、俺たちをモニタリングしているだろうクロムがこん  
な呟きをもらした。

『それでも、どんなに巨体を誇る化け物が相手だろうと、絶望的な  
力の差があろうとも、それでも立ち向かって戦うことが出来る人間  
を、私たちは“英雄”と呼ぶのよ。』

なぜ、クロムがクラウンにこの場を譲ったのか、俺は理解した。

「貴方には英雄の資質がある、のかもしれない。」  
いつか、いつだか、エクレシアが言った言葉だ。

残念ながら、そんなものは俺には無かった。

現に、今俺は無力な村人のように、目の前の圧倒的な恐怖に慄いている。

『哀れな村人は、生け贄を要求する悪い竜に平伏し、ただその矛先が自分に向かぬことをただただ、祈るだけでした。』

俺の心など筒抜けなクロムには、おどけたようにそう語った。

それが、普通の結末だ。

都合よく、聖ゲオルギウスのような英雄が通りかかったりしないのだ。

そう簡単にいけるなら、ドラゴンスレイヤーの称号は至上の名誉になつたりしない。

「君八、目ノ前デー一人、娘ガ食ワレテイクサマヲ、指ヲ啞エテ、見テイルノガ、オ似合イダヨ。」

低く引き伸ばしたようなながら声は、ただでさえ嘲りに込められている悪意が何倍にもなつて聞こえる。

竜種が悪そのもの、悪魔の化身と言われたって仕方が無いような気がした。

クラウンは、ただ一息。

軽く深呼吸するように息を吸って、軽く息を吐いた。

ただ、それは普通の息ではなく、真つ赤な灼熱の火炎であった。どう少なく見積もっても火炎放射器並みの火力のあるそれは、人間一人を軽く火達磨にするなんて容易いものだろう。

だが、俺は火達磨にはならなかった。

「オヤア？」

ごろん、と真横に転がって俺が炎を避けたからである。

もう一息、灼熱の炎が吹きかけられる。

しかし、俺はやっぱりごろん、と転がって炎を避けた。

「ギャハハハハハハ、オモシロイヨ、ギャハハハハハ！！！」  
獲物の鼠をいたぶる猫のように、クラウンは下品に笑った。  
嗜虐心の塊みたいないつにとって、それは至極の遊びなのだろう。

「ウツトオシイ！！！」

だが、地面ごと抉るようにクラウンは蹴りを放った。

土と一緒に、俺が空中に舞い上がる。

「飽キタ。」

それは、今まで聴いたこと無いほど乾いたクラウンの声だった。

鉄すら引き裂けそうな鋭利な鉤爪を、振り上げる。

「うあああああああああああああつあああつあああ！……！」  
全身に力が入らない。恐怖に体が屈服している。  
だが、本能は動いた。

魔剣を持った手が動いた。  
窮鼠猫を噛むとか言うやつだった。

「バカガ。」  
だが、本物の実力者にはそんなものは通用しない。  
空気が爆発したみたいに炸裂し、俺は何度目かわからない地面への  
ダイブをやらされた。

たとえ猫を鼠が噛み付こうが、何倍もの体格を誇る猫を倒せるはず  
も無い。  
どちらかと言えば、いたちの最後っ屁だっただろうか。

「ま……どうしょ……」

『肯定』 はい、本書は完璧です。術者のメンタル状態が如何なる物だろうと、マスターが望むなら強制的に戦わせることは可能です。

頼む、とだけ思った。

『肯定』 受理しました。術式、『哀れな栄華』を発動、発  
言まで三秒前。

そこで、魔導書は一言だけ、マスター、と俺を呼んだ。

『苦言』 それだから、あなたは私の道具でしかないのです  
よ。

いやに、人間味のある口調だった。

俺が何かを思っより先に、俺の意識が完全にブラックアウトした。



## 第二十五話 騒乱の第二十八層

「警邏第五隊、隊長以下十四名、ただいま到着しました！」

「ああ。これで全員だな。」

マスター・ジュリアスは到着の報告に来た部隊の隊長を見送ると、そう呟いた。

大聖堂前の騎士団本部には、常駐戦力である聖堂騎士その数凡そ五百余名。

各階層を警備や、ここ“本部”の外から戦力を呼び戻せばその数はずっと膨れ上がるが、援軍は期待できない。

無いものを数に入れるほど、楽観的ではなかった。

「（騎士総長と最精鋭のパラディンが不在なのは痛いな。いや、敵はそれを狙っていたのか。」

それにしても、敵の意図が見えない。」

大量の悪魔を呼び出してけしかけるなんて、常軌を逸している。

ここは教会系の魔術師の総本山。奇襲をかけるにも真昼間である。

悪魔たちは途中の町にも目もくれず、一直線でこちらに向かっていくという。

それはおかしいと断言できる。

悪魔がわざわざ現世に現れるのは、人間の恐怖や絶望などの負の感情を連中が主食としているからだ。

それが徒党を組んで天敵である自分たちに突撃しようとしている



のは、狂言じみた言動をする中にも合理性がある悪魔らしくない。

これは明らかに背後に連中を操っている誰かがいるということだ。それもそのことを隠そうともせず、堂々と公言するような態度が悪魔たちの行動の異常性から垣間見れる。

だが、それにしてもあまりにも非効率すぎる。

悪魔は基本的に人間より強く、ずる賢く、邪悪だが、この地上ではその能力の大幅が制限される。

その制限を軽減するために、召喚主は悪魔に魔力を与えて本来の力を発揮させようとする。

直接彼らの住む魔界から呼び出したってそうなるのだから、人間の負の精神エネルギーを欲するずる賢い悪魔たちは分身を使って世界の法則を騙し、分身体をこの地上に送りこんでくる。

悪魔を呼び出す際には、その分身体を呼び出すのが魔力のコストや難易度から見ても現実的だし、何らかの物品や生け贄に憑依させた方が無駄が少ないし、悪魔も能力を発揮しやすい。

そういったセオリーが、完全に無視されている。意図が見えないのは、悪魔ではなくそれを裏から操る黒幕のことである。

悪魔を使うような魔術師なら、もっと狡猾で卑怯な手段を使わずである。

悪魔召喚の性質上、そうせざるをえないのだ。それが堂々と正面から殴りこんでくる。

日本であれば、これはヤクザが警察庁に殴り込みを掛けるような異常な事態なのだ。

準備さえ整えばこれくらいできるだろう組織はジュリアスは思い浮かぶが、そういった連中は当然監視しており、こんな大規模な活動をする動きも見えなかった。

下級悪魔ぐらいなら一匹二匹は見逃すが、この規模になるとそうもいかない。

まるで狙ったかのような、厭味ったらしさすら感じる行動なのだ。

「（よほどの実力者が、よほどの狂人だろうな。こんなことをするのは……）」

そう思考を締めくくって、ジュリアスは次の行動に移ることにした。

「整列、完了しました。」

「ああ。」

付き添いの侍従長の言葉に頷き、ジュリアスは階段を上るように空中へ三步上った。

ちょうど、網目のように整列した甲冑姿の騎士たちが見渡せる位置だった。

「諸君、我々はどうかやら、異世界へ迷いこんでしまったようだ。」

そして、空気の読めない笑えぬジョークを言い放った。  
音量は普通だが、それはいかなる術か、最後尾の騎士たちまで十分  
伝わった。

「……失礼、騎士団長や、『カーディナル』ならもつと気が利  
いた言葉が出るのだろうか、生憎と私は詰まらない着飾った言葉を  
好まない。」  
誰一人くすりともしなかったからか、ジュリアスはそんな風に言い  
直した。

「聞いての通り、現在は我々は未曾有の異常事態に直面している。  
なんと悪魔が徒党を組み、恐れ多くも『カーディナル』のひざ元で  
あるこの騎士団本部と大聖堂に向かって一直線に向かってきている  
のだ。」  
現状を確認するようにそう語るジュリアスは、いつものように淡々  
と語っていた。

「かつて、最初の第一次十字軍は凄惨で残虐な殺戮と非道にて道を  
血に染め屍を築き上げてきた。  
信仰心の欠片もない馬鹿な傭兵を起用するからそのようなことにな  
るのだ。」

聖地回復こそ成功したが、所詮はそれだけだ。神はその為だけに血  
を流すことを望まれまい。  
我々騎士団の誓約にもあるな、神を理由に剣を振るうことはするな  
と。どう言い繕うが我々の行いは神の教えに背く行為だ。」  
一息でそう言葉を紡ぎ、一呼吸を置いて、だが、と彼は前置きをし  
た。

「我々が今から戦うのは、悪魔である。

性質として連中を理解することは可能だろう。私も弱肉強食という自然の摂理、神の敷いた原理を否定するつもりもない。

しかし、しかし、だ。連中は悪魔なのだ。根源的に我々の害を成すモノと記されている。

騎士の本来の存在理由は、任人や領民の財産と生命を守ることだ。ここにいる連中はほとんどが魔術師故に守るに値するような輩かどうかは疑問ではあるが、敬虔な信徒も大勢いることもまた事実である。

それ以前に我々は、誇りを持って、命を賭して悪魔を駆逐しなければならぬ。なぜなら

そこで一度ジユリアスは言葉を切って、再び一呼吸をした。

「悪魔は、人類の敵であるからだ。そしてこれは、我々の矜持を守るための戦いでもある。

私は人を斬ることに抵抗を覚えるが、奴らは、人ではない。

これは、無益な戦いではないのだ。我々は、連中に対してなんら遠慮することはない。

連中は敵である。命を賭けるべき理由ある宿敵であり、神敵である。

今こそ、この来たるべき戦いに私は諸君に非道な言葉を告げよう。

死ぬまで戦え、と。敵を殺し尽くすまで戦え、と。神の為に死ぬまで戦え、と。

戦いの中の死のみが荣誉である、と。ただそれだけが我々の唯一の救いであると。」

どこまでも淡々とした、熱の籠らない演説だった。

しかし、宗教的結束により始めから士気など頂点である彼らに無駄な熱気など必要無かった。

その上に、集団心理を利用する対群衆用の魔術を彼は使用している。故に、ジュリアスが語った全てを疑問の余地なく実行するだろう。ここに集った五百余名の騎士たちに、もはやそれぞれの個性など存在してはいない。

戦闘が終わるまで、敵を殺し尽くだけの正義と神罰の機械と成り果てたのだ。

これで悪魔に惑わされることはあるまい、とジュリアスは複雑な気分になりながらもそう思った。

「勇敢なる神兵たちよ。私に続け。地上の悪そのものを、一匹残らず根絶やしにするのだ。」

「……………神の御心のままに!!」「……………騎士たちは一斉に剣を掲げてそう宣誓した。」

「 出撃ッ!!!」  
そして、戦いは始まった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「『カーディナル』！！ 私も戦います！！」  
「お前さんはすぐに己の任務に戻りな。これは命令だ。」  
槍を担いで廊下に行こうとする『カーディナル』に、エクレシアは  
追従しようとしていた。

「ですが！！」  
食い下がるエクレシアに、『カーディナル』は睨みの効いた一瞥を  
送った。

「本来なら、実体化した悪魔はよほどの状況でなければ異端審問の  
執行官クラスでなければ対応を禁じている。

地上では連中の能力の九割が制限されてはいるが、実体化している  
悪魔はその制限を自力で覆せる。」

あれを見る、という言葉共に『カーディナル』の指先が持ち上がる。  
釣られるように窓越しに見えたのは、錆のような色の風が辺り一帯  
を覆っていた。

「魔界の瘴気だよ。連中の世界では空気のように存在するが、人間  
にとっては毒でしかない。

あの中では文字通りこの世の条理は通用しない魔界と化している。  
下級悪魔ですら、その中では一個小隊で掛かっても厳しい。しかも  
あの数では個々の戦闘力では無意味なのさ。」

「それは・・・」

それでもエクレシアは何かを言いかけて口籠った。悪魔の総数は傍目から見て百や二百では利かないのは明らかだったからだ。

「なに。こちらも無策ではない。勿論対抗する術は存在する。

これほどの事態にもなれば、“処刑人”も動くだろう。それにここには何人“魔導師”が居ると思う？ 決して大事には至らんよ。」

「他の“魔導師”に救援を求めますか？」

「それまでの事態になれば、ね。人命よりプライドを優先するほど愚かではないさ。

「……おい、その。まさかただでこのまま帰ろうなんてむしのいい話はないよねえ？」

急に口数の少なくなった男へ『カーディナル』は目を向けた。

「うち。そのまま行ってしまえばいいものを。」

「貴様みたいな自己主張の大きい奴のことを忘れるかい。」

「……まあ、よからう。手伝ってやろう。」

無駄に大仰で尊大な態度で、しかし妙にから寒く『プロメテウス』はそう言った。

それがエクレシアにはちぐはぐに見えて、何だか奇妙に感じた。

「アビゲイル君、あの悪魔の軍勢を突破するまで彼女の護衛をしてあげたまえ。

私の戦闘に君が耐えきれないのもあるが、個人的に彼女のことは気に入っているからね。」

「はい、了解しました博士。」

人形のように彼の背後に控えている助手のアビゲイルが小さく頷い

た。

「別にあの悪魔たちを突破する必要はないがね。不要な気遣いだよ。敵勢の掃討が終わってからでも構わないわけだが。」

「それもそうだな。それまで待機していると良いだろう。」

二人は妙な連携を見せてそう言った。

エクレシアにはどう考えても勝手な行動をしないように見張る監視にしか思えなかった。

『カーディナル』が赤の他人にそれを許したのは、戦力に余裕がないからだろう。

「分かりました……」

歯がゆい思いを覚えながらも、私は頷くしか出来なかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「おい、これはどういことだ？」



「老よ、いきなり呼び出しておいてそれはないだろう。せめて何が言いたいかハッキリと・・・おや？」  
場所は変わって、“精霊宮”。

庭に面したテラスのテーブルに横にある椅子に腰かけているのは、『魔導老』。

一陣の風と共に突如として現れたのは『マスターロード』だった。

彼は『魔導老』に睨まれて困惑していたが、異様な魔力の臭いを見つけて見てみれば、錆のような色をした風が渦巻いているのを認めて、納得した。

「なるほど・・・しかし、あれは私ではない。」

「貴様の態度を見るまでそうは思わなかったがな。こんなバカなことをするのはパツと考えて貴様しかいないからな。」

「それはこの私がまるで考えなしに喧嘩を売る馬鹿だと言っているのか？」

それは心外だ、というように首を振って、『マスターロード』は彼の対面に座った。

「だったら、普段から思慮深さをみせることだな。」

「わからんかな、韜晦しているのだよ。己を低く見せ、侮らせる。他の同胞にはなかなかできぬことだぞ。」

「だったら傍目から丸分かりな野心を隠した方がいいぞ。」

「その方が間抜けに見えるだろう？」

「・・・ああ、そうだな。」

この辺りは種族の違いなのだろうな、と納得することにした『魔導老』だった。

「しかし、魔界の悪魔も魔族に違いないだろう。お前が疑われるのは当然だ。」

「全く違うな。全然違う。人間と精霊くらい違うぞ。これは貴様がどうしても言うから全ての種族の人数を調べてやった時に話してやっただろうが。」

そこまで言って『マスターロード』は、屋敷へ行く『魔導老』を見送る。

数分も待たずして、彼はマロンタルトを1ホール持ってきた。

「自信作だ、味わって食べるよ。」

「うむ。」

『マスターロード』は大きくうなずいた。

「我々魔族にも、悪魔族と分類される種族がいるにはいるが、それは魔界の悪魔とは容姿や能力が似ていると言っただけで別物だ。

無論、魔界の悪魔の方が断然強い力を持っている。それに支配系統も違う。

獣の特性を強く受け継ぎし“獣の眷属”は私が多く支配し、没して城に閉じこもっているヴァンパイアロードの支配する人に近い形を持った“夜の眷属”。

そして、初代魔王陛下が君臨し支配する魔界の“悪魔”。我々魔族は大きく分けてその三種類に分けられる。」

「それは前にも聞いたな。我々人間は知性の強弱で上級魔族と下級魔族と分類しているが。」

「まあ、種族単位で序列があるがな。上位種<sup>グレート</sup>と頭に着く種族も居れ

ば、下位種<sup>レッセー</sup>と頭に着き肩身の狭い種族も居る。  
しかし我々魔族は個々の強さの方が優先される。種族など単なる目安でしかないわけだ。」  
言いながらも、彼の視線は『魔導老』が切り分けているマロントルトに釘付けだった。

「最強クラスの種族の奴がそうは言っても説得力はないぞ。」

「まあ、ほとんどが私に比べれば虫けらみたいな連中ばかりだがな。たまに使える奴が居ると言う認識だ。」

「相変わらずの傲岸不遜の傍若無人ぶりだな。まあ、貴様にとっては他人など無いも等しいのだろうが。」

「この私に並び立てるのはせいぜい貴様くらいなものだよ。」

そう言つて、『マスターロード』はマロントルトを一切れ丸ごと口に入れて咀嚼する。

「親父。」

するとその時、屋敷からギターケースを背にしたちゃらちゃらした青年が出てきた。

わざとらしく着崩したテカテカしている革ジャンとジーンズ、穴あきグローブに色白の化粧。

いかにもビジュアル系バンドでも組んでいそうな風体だった。

「ヒュー、何だいこのイカス御仁は。」

「いいからさっさと要件を言え。」

『マスターロード』を見ておどける青年に、すさまじく煩わしそうな態度で『魔導老』はそう言った。

『これはお前の養子か？』  
『いや、弟子の一人だよ。偽装訓練の為に地上で研修させて帰ってきたらこの有り様だ。』  
念話でそんな返事が返ってくると、なるほど、と『マスターロード』も微妙な心境になった。

「あのファンキーな連中のことだよ。  
一応、非常時つてことでうちの領地の連中を招集しておいたぜ。」  
「御苦労。ではすぐに集まるって来るだろうな。」  
「では私はお暇するか？」  
「それを食つてからで別に構わんよ。誰かさんのせいで身内にはちやんと説明をする必要に迫られたからな。」  
『魔導老』の嫌味にも、そうか、と『マスターロード』は頷いた。

そう言っている間にも、次々とローブ姿の魔術師が現れ、ちやらちやらした青年の横に並んでいく。  
その数、約十名。

「転移系の術をほぼ全員か。かなり賤けられてるな。」  
約一名酷く浮いているのを無視して彼らを一瞥した『マスターロード』は、素直にそう評した。  
そのほとんどが彼を見て渋い表情をしていたが。

それも当然だろう、と『マスターロード』は思った。  
尊敬しているだろう人物が人類の天敵とつるんでいるのを見れば、渋顔の一つも浮かべたくもなるだろう。

「我らが偉大なる導師、御指示を。」  
それでも文句ひとつなくトップの指示を仰ぐ辺り、流石プロの魔術師と言えた。

「見たところ、連中が屯しているのは教会区画だけだ。

戦線が拡大して、この精霊区画に入っていないよう、警戒だけはしておけばそれでいいだろう。」

『魔導老』の対応は冷静であった。

そして優雅に紅茶の入ったカップを持ちあげ、口を付けようとしたその時だった。

彼の指が、突如としてぴくりと止った。

すぐに『魔導老』は、戦場となっている方を見やった。

錆色の風が渦巻いている場所から、無数の悪魔がちょうど四方八方へ飛び散りだしたのだ。

「なにが、起こっているのだ……。」

そのまさに悪夢のような光景に、集った魔術師の一人がうめくように言った。

「思うに、略奪が目的だろう。」

むしゃむしゃ、と三切れ目になるマロントルトをゆっくりと咀嚼している『マスターロード』が言った。

「魔界と言う世界は、無限に広がる不毛な大地と錆の味のする塵の風が延々と舞う世界。」

当然、連中の食糧たる精神のエネルギーは他の世界から奪うしかない。

普段は分身体や交霊などでしかちまちまとこの地上に現れることしかできない悪魔が、集団になって強硬な手段に移ったと言ったところだろうな。」

それは、実に分かりやすい構図であった。

「貴様ツ！！ 魔族の親玉がなにを！！」

それは『マスターロード』が言えば、とても身勝手な台詞に聞こえただろう。

魔術師のうち、若い一人が声を荒げてそう怒鳴った。

よく見れば、彼は先日『マスターロード』に引きずられた青年だった。

「まあまあ、落ち着けよ。」

と、ちらちらとした青年がその青年を諷めようとしたその時、錆色の風がこちらまで広がってきた。

「つく、魔界の瘴気がここまで……」

砂漠の砂嵐ほどではないが、埃が舞っているような空気に咳き込む者もいた。

錆の臭いに、錆の味のするおぞましい風が更に拡大していく。日の光も遮られ、薄暗い空間へと変貌していく。



それを至近距離で受けた約十名の魔術師のうち、二人は失神して倒れた。

更に五名は金縛りにあったかのように硬直し、残り三人はなんとか耐えたが青い表情をしている。

そんな弟子たちを見て、未熟者どもめ、と溜息を吐く『魔導老』。

「いきなり騒ぐな。」

普通の人間なら心臓が止まるだろう上級竜族の咆哮を騒いだの一言で済ませる『魔導老』も大物だった。

「ゆるぎざん!!! あいづらああああ!!!」

狂ったように突然叫びだす『マスターロード』。

その原因を探ろうとして、視線を落とした『魔導老』はすぐに理解した。

まだ食べられていない半分ほどのマロンタルトが、錆色の塵まみれになっていたので。

「うがああああああああ!!!」

そしてその錆色に染まったマロンタルトを見て、『マスターロード』は半狂乱に至っていた。

「………そんなにうまかったか？」

「美味かった!!!」



両手をテーブルに叩きつけて破壊しながらそう言う彼に、『魔導老』はそうか、としか呆れて言えなかった。

「私の獲物デザートを汚した罪は万死に値するうつつうつつ!!!

ぶつ殺す、あいつら、ぶつ殺す、ぶち殺す。ぶち殺すぶち殺すぶち殺すうつつうつつ!!!」

「ガキか貴様。」

溜息を吐く『魔導老』の横で、『マスターロード』は手短な所にいた下級悪魔（軽く百メートル先を飛んでた）を引っ掴み、頭をがぶりと噛み砕いた。

「ぺっ!!! 私は、食事を邪魔されるのが殺したくなるほど嫌いなのだああ!!!

貴様らなぞ、貴様らなぞお、このマロントルトの一切れにも劣るわ!!!」

そして、彼は噛み砕いた悪魔を吐きだすと、地面に転がっている錆色の塵まみれのマロントルトを口直しとばかりに全部呑みこんだ。

「腹壊すぞ。」

「生まれてこの方、病気になることすらないわ!!!」

冷静な『魔導老』の一言に、『マスターロード』は執拗に悪魔の体を踏みにじって溜飲を下していた。

「だったら庭を汚すな。・・・お前たち、何をしている。さっさと言われたことをやらんか。」

『魔導老』の弟子たちは、気絶した二人を介抱していた。

『マスターロード』の咆哮に当てられて金縛りだった面々も、何とか回復していた。

「冗談きついで、親父い……竜の叫び声には強烈な精神ショックを与える作用があるって教えてくれたのはあんただろうがよお。

俺も頭がおかしくなりそうだぜえ……」

エクレールがぼん、と倒れた仲間の頭を叩くだけで目を覚ましていた。

そんな状態で魔術を使えるだけで十分凄腕である。

「精神の防護は魔術師の基本だ、馬鹿者。

基本を極めること即ちそれが奥義。だから未熟だと言ったのだ。・

・貴様も落ち着かんか。」

苛立つ『マスターロード』があまりにも見苦しかったからか、『魔導老』は軽く風の精霊を操って彼の頭もぶん殴った。

「だがなあ……だがなあ……!!」

「これ以上騒いでもいいが、先ほど焼けたスフレがしぼんでしまっがそれでも構わないならな。」

「……ふん、我ながら大人げない。ふっはっはっは。」

ぐちゃぐちゃになった悪魔の死体を蹴り飛ばして、急に態度を改める『マスターロード』。

「貴様の食い意地もいい加減ホトホト嫌気がさしてきたぞ。」

それを見て呆れ顔がますます深まる『魔導老』だった。

「……………ああ、なるほど。」

「何をしているかエクレール、貴様もさっさと行け。」  
もうすでに彼以外の弟子たちは忠実にさっさと命令に従ってどこかに行っている。

「いやね、長年の疑問が一つ氷解したなあ……と。」  
「なに？」

「だって親父も俺らも甘いもんなんて食わねえじゃん？  
それなのにわざわざ高いスイーツの食材やら調理器具買ってくるし……  
親父もボケたのかなあ、って俺ら皆で遺産分配の相談を」  
最後まで言い切る前にエクレールは直接「魔導老」にぶん殴られた。

「いいからさっさと仕事しろ！！」

「いえっさー、ひー！！」  
殴られた頭を押さえながらエクレールは跳躍すると、そのまま風に乗って飛んで行った。

「なんだ、騒がしい奴だな。」

「奴はエクレール。あれでも妖精から声が掛かるくらいの逸材だ。  
子供心が残っていると言えれば聞こえはいいが、所詮はただの未熟者だ。」

「なんだ美味そうな名前だな、それより早くスフレ寄越せ。」  
「……………こんな場所ですか？ とりあえず、中に入るぞ。」

そうして二人は、錆の塵が舞う外から屋敷の中に入って行った。



## 第二十五話 騒乱の第二十八層（後書き）

更新が安定しないうですみません。

使っていたパソコンが調子悪くて今まで書くのが遅れました。

とりあえず、来週を乗り切れば多少の時間的余裕があるので、もう少し次は早く更新したいと思います。

## 幕間 ある男の受難

魔術連合本部、魔族が“箱庭の園”と呼ぶその第二十八層。

その隅っこに、専用の転送魔方陣を備えた施設があった。祭壇のような四角い石が一枚あり、その中央に巨大な魔方陣が存在するだけのシンプルな場所だった。

そこに、陽炎のように一人の人影が現れた。

「任務、ご苦労様です!!!」

その施設の守衛が声を張り上げてその人影にそう言った。

「ご苦労さん。」

そこに現れた人影の名は、ロイド。

“処刑人”ロイドだった。

そう、ここは“処刑人”専用の長距離転送魔方陣だった。

「サイネリアの奴はいつもどおり遅れてくる。例の趣味だ。」

「はあ、了解です。」

いつもどおりのやりとりなのか、守衛は何の疑問も挟まず頷いた。

この魔術師は地上との行き来を神経質なまでに管理されているが、彼らのような特別な魔術師はそれも曖昧であった。当然だ、彼らの主な任務は、暗殺や反逆者の始末。

本来なら事細かに地上に行く理由を聞かれるものだが、“処刑人”の仕事は聞けば寿命が無くなるようなものばかりなので、守衛もそのあたりは心得ている。だからわざわざ辺境にこんな専用の特別な施設を建てているのだ。

当然、ここにこんな施設があるなんて公開されてすらいない。

そのまま彼は“処刑人”専用の宿舎に入り込んで、儀礼用のロープを纏って外に出た。

そこから“カーディナル”の領地である教会区を黒魔術師である彼は、その格好から白い目で見られながら横切る。がらりと、静謐とした町並みが変わる。

“魔導老”の支配する精霊区の隅っこに、彼は用事があった。

空き地に見えるその中央にある鉄の板に取っ手の付いただけの扉を開けると、地下へ続く階段があった。

そこを降りると、ひんやりとした冷たいと、得体の知れない暗闇が広がっていた。

申し訳程度の灯りが見えてくると、そこには数人の先客がいた。

どいつもこいつも黒一色の服装は、ある種のサバトの様相すら呈してきた。

それも、その中心に二体分の死体があるのだから、これからカニバリズムでも始まるのか、といったような誤解を受けても仕方が無いだろう。

「ロイドか、遅かったな。もう終わったぞ。」

そう彼に声を掛けてきたのは、同僚のヴィクセンだった。

いつもはびったりとくっついて離れない彼の娘も、ここには来ていなかった。

「ジャンキーと王李ワシ・リーの反逆容疑が晴れてよかったな。

憤ましいが、葬儀を上げることが出来て幸いだ。」

「ああ、そうだな。」

ロイドは淡白に頷いたが、そもそも彼は二人が反逆したという事実がでっ上げであることを知っていたので、喜びは無かった。

そう、これは葬儀だ。

そして、ここはモルグ。死体置き場から二人はそのまま灰となる。

神父なら上に腐るほど居るが、その誰もがこの二人の死を悲しんだりはしない。

ここは、そういう場所だ。そういう業界だ。

「気にするな、お前が二人を救ったんだ。」



恐らく、大半の事情を察しているだろうヴィクセンはそう言っただけで去った。

集まっていた他の同僚たちも、次々と帰って行った。

ロイドは、二人の死体のある台座に近づいた。

二人は礼服を着ており、下半身が焼失していた王李の体も嘘のように復元されていた。

「きれいな体でしょ？ 復元するのは苦労したよー。」  
そう言っただけで暗がりから彼に声を掛けてきたのは、この地下モルグの主。

東洋系をしている顔が不気味なほど青白いその男だった。

彼は死人を一週間なら生きてるようにすら見せることが可能だという、腕利きの死霊魔術師である。ネクロマンサー

既存の医療とは違う独自の医術を体得しており、それを買われて“隔離”されている。

そうして、この地下に住んでいることから、彼の所業と合わせて、畏怖と侮蔑をこめて“ドクトル・グール”と呼ばれている。

当然、本名は誰も知らない。知ろうとも思わない。

好ましい人間ではないので、ロイドは彼が苦手だった。

それでも何かと彼には世話になっているので、頭が上がらない一人

だった。

正直、仲良くしたいとは誰も思わない類の人物だが。

「本当なら、無傷で手に入れてほしかったなあ。

特に王李の肉体って整ってて美しかったし。ジャンキーは薬物で穢れてなければなあ。」

などと言うこの男は、死体に偏愛を注いでいる。

死んだ人間を人形のように愛し、喰っていたという噂すらある。

故に、ドクトル・食屍鬼<sup>グール</sup>なのだ。

「……相変わらず、悪趣味だな、ドクトル……」  
本来なら、ロイドたち“処刑人”が始末すべき人間だ。

彼が切り開いた人間は、百や二百では利かない。  
神秘の秘匿を旨とする“本部”が、その脅威が地上の人間に知られてはいけないからからだ。

しかし、『盟主』は彼の存在を許した。

その技術の全てをこの“本部”のために使うことを条件に、彼の欲望は肯定された。

その結果、この薄暗いモルグに監視付きで閉じ込められてはいるが、ロイドはこの悪魔の如き医師が不満そうにしている姿を一度も見た

ことも無かった。

魔術師は気の長い人種だ。

自分ではできないことでも、次の世代にでも出来れば良いと考えたりする。

何百年と生きているらしいこの男は、何十年地下にこもるくらいな  
んとも無いのだろう。

ロイドの彼の何が嫌かというと、これで何気に面倒見が良いから始  
末が悪いのだ。

今日も二人の葬儀のために格安で肉体の復元までしてくれたのであ  
る。

「そうかい？ 高貴な趣味だとまでは言わないが、なかなか崇高  
だとは思っているよ。人間の肉体ほど芸術的なものはない。実際、  
人間の肉体は芸術として現在に無数に伝わっているのだからね。」  
「ああそうかい、これならまだサイネリアの趣味のほうはまだまし  
だ。」

ロイドが憎まれ口を叩くも、ドクトルはにやにやと笑みを浮かべる  
だけだった。

「それはどうかな。彼女と私の趣味は根本的に違うと思うよ。」  
「そりゃあ、あいつの人形遊びと、お前の死体好きは違うだろ。」  
毎回毎回サイネリアの魔法少女趣味に付き合っつて、フィギュアを買  
いに無理やり付き合わされるロイドは、肩の力を落としてそういつ  
た。

「いやいや、そういう意味じゃない。

彼女のあの性格は一種の仮面ヘルメスナだと思うよ。戦闘用と生活用の性格を切り替えてメリハリを付けているんだ。

彼女の奇行はそれに付随する行為に説得力を持たせるためのポーズであり、……まあ、その辺は君の専門か。」

「あれが呪術の一種だとも？」

ロイドは黒魔術師であり、その中でも特に呪術、所謂呪詛を得意としている。

「理想の自分になるうとしていいるのかもね。自己暗示って奴さ。

それはそれで効果はあるよ。集中力が増すからね。その分魔術の精度も上昇する。実際に戦闘中の彼女に迷いは無いだろう？」

「多少迷いがあったらこつちもやりやすいんだけどな。」

サイネリアのじゃじゃ馬ぶりに毎回振り回されているロイドとしては、もう少し思慮深く行動してほしいと思っている。

今日もその仕事帰りで、見事に振り回されて帰ってきたのだ。

「それはともかく、彼女の体は実に魅力的だ。いったい幾つの世代を重ねればあんなに鮮麗された魔力運用が出来るようになるんだろうね。」

きつと名門の魔術師の家の出身なんだろうねえ。ぜひともコレクシヨンに加えたいよ。」

「おい……」

「ああ、ああ。分かっているさ。

詮索はしないよ。君ら“処刑人”はみんな訳有りだからねえ。」  
「にやにや笑いながらドクトルは言った。」

そう、訳有りだ。  
倫理の薄い黒魔術師だって、訳も無かったら人殺しを生業にしたりなどしない。

人を殺すということは、とてもリスクの高い行為だ。

“処刑人”になる前から殺し屋まがいの仕事をしていたロイドにはそれを良く分かっていた。

相方のサイネリアだって、何の理由も無くコスプレをしてアニメソングを熱唱したりしながら“本部”の反逆者の粛清をしたりはしない。

少なくとも、共通しているのは『盟主』の恩にて働いているということだ。

“処刑人”になるような、魔術師の中でも更に社会不適合な人間は、『盟主』のような偉大な御方によって保護されなければ爆弾のように爆発するだけである。

「そつえば、彼女はどこにいるんだい？」

「知るか、あんなアホ。今頃太平洋あたりでも走ってるんじゃないか？」

「それはうらやましい。彼女のように地力が優れていれば多少の無茶なものもしないだろうからねえ。」

「はん、どうせ俺は市井の出の元一般人だよ。」

「でも“フウセン”のような例もある。必ずしも魔術的に高性能な肉体に高い素養の魂が宿るってわけじゃないからね。」

「結局は運任せってことじゃねえか。」

ロイドはどうでも良さそうに悪態づいた。

魔術師には、代を重ねて優秀な血を残し、魔術的に強い肉体を求め  
る。

そんな肉体には高い魔術の才能を備えた魂が宿り生まれてくると信  
じられている。

・・・たとえば、それがいずれうち捨ててしまう“器”に過ぎない  
としてもだ。

人間を構成する三要素は、魂と精神と肉体があるとされる。

その順番で魔術的に重要とされており、高位の魔術師になると肉体  
を捨てることを厭わないという連中もいるくらいだ。

そのレベルの魔術師になると、肉体はあると便利だが足枷にしか  
ならないからだ。

魔術師の世界とは、そういう狂った領域なのだ。

「でも実際、統計的に見て、強い魔術師の家系には強力な魔術師が  
生まれやすい。」

間違っているわけじゃないさ、とドクトルは言った。

「生まれつき魔力との親和性の高い素体は、魔術を扱い始めるのに  
適した年齢である十六歳ぐらいという常識を覆してしまう。」

たった三歳で難しい哲学書を理解したりするほどの知能を魔術で与  
えられていても、その年齢から魔術を運用できると言う訳だ。それ  
は凄まじいアドバンテージだよ。」

「狂ってるな。」

「魔術師にとって全ては真理の探求だよ。君のようなぼつと出の魔術師には分からないだろうけれど、それが存在意義なんだよ。そういう風に、この世に生まれるからね。」

「俺はせめて人間として正気で居たいだけだよ。」

「正気かどうか、それを決めるのが自分だと思っている時点で君にそれを知る術は無いと思うけれどねえ。」

そう言ってドクトルは暗がりに戻るように踵を返した。

「ああ、そうそう、まだ残留思念が残ってるから、君も話すと良いよ。残念ながらジャンキーの方は無理だったけれど。」  
「そのための葬儀だからね、とドクトルは言う。」

「意識を呼べたのか？」

「ああ、昼間からだから、もう時間的余裕は幾ばくもないよ。」  
死者の魂の招来、消滅しただろう精神の修復。会話可能なまでにそれを行えるネクロマンサーを、ロイドは他に知らない。

肉体を欠いた“死んでいる”、という状態は思いの他、人間の精神に多大な負担を齎すという。

幽霊や亡霊の言葉を聞こうと耳を傾ければ、支離滅裂で知性や理性を感じられない。

そのまま時間が経てば死者の魂は、他人の生を憎み、肉体を欲し、他者を害するだけの悪霊と化する。

高位のネクロマンサーはその状態ですら魔術を行使するという。

強力な精神防護の魔術で自らを保護し、肉体の束縛から逃れ限界を超える魔術すら扱える。ロイドには信じがたい話であるが、彼は昔、実例を一度目の当たりにしたことがあった。

ロイドたちの早急な処置により、二人は悪霊になる気配はなかったが、ちゃんとした葬儀は本来そう言った悪霊化を防ぐ目的もある。ネクロマンサーでなくとも、魔術師の悪霊は性質が悪いからだ。

そういう意味では、ロイドは連中が嫌いだった。

魔術師が神域、神を目指す究極の理由が、悪霊になった魔術師が厄介なのと同じ理由だからだ。

神に成る、と聞こえは大仰だが、詰まるところ肉体の限界に達してそれ以上の魔術の術式を組めても行使できない。ならより高位の存在へと移り変わり、さらなる真理を探求する。

極論を言えば、死んで魂と精神だけの状態、つまり“霊体”ならば条件は大して変わらないのだ。

ただ、魂の器は所詮人間レベル、だが暴走するとヤバイ。文字通り、際限が無いからだ。

神に成る、とは際限の無い力を、無条件でいつでもどこでも自由に使える状態であると魔術師は定義している。

魔術師にとって、“神”とは所詮無限の力の源泉でしかないのである。

ただ誰もその先に行ったことがないだけで、通過点でしかないのがある。

だが、あらゆる魔術師が神域に達するという通過点の到達を悲願とする。



自分の想像できるすべての力を、際限なく、無条件で、いつでもどこでも、自分の意のままに。  
それが“神”である。人間が定義した神秘の最上位の概念であり、最強の幻想だ。

「よう、<sup>ワン・リー</sup>王李。」

ロイドは綺麗に修復された体を黒いドレスで着飾った彼女に話しかけた。

中国人らしい、陳腐な偽名である。王も李も、中国人の最も多い名字の一番と二番だ。十人の中国人に石を投げれば数人は王さんか李さんだ。

無駄に偉大な歴史を誇っているのだ、どうせなら古代中国の英雄たちの異名を拝借すれば良いものを、ロイドは思っていた。  
だが偽名にしては良い名だろう。

万が一、呪詛を掛けられた時に他の王さんや李さんに上手く逸れるような名前である。

自分ならそんな失態は演じないが、と内心ほくそ笑む。  
他にも、女ならアンジュ、アリス、アリア等々、そう言ったどこにでも居そうな名前を魔術師は好んで名乗る。ロイドの知り合いの女魔術師の半分は頭に“あ”が付く。

ロイドが言葉を発してから、遅れること数秒。

「その声……ロイド……か……」

死んだはずの王季が、死体の体を借りて口を開いたのである。  
ロイドにぎよろりとした見開き、その視線を向ける。

「おまえ・・・と、サイネリアが・・・我らを・・・回収したと、  
聞いた・・・。」

感謝する、と彼女は言った。

「精神の修復は完璧のようだな。」

にんまりと、気味の悪い笑みを浮かべてロイドは呟いた。

彼もまた、魔術の“魔”に魅せられた一人なのだ。降霊魔術の完成  
度に興奮していた。

先も言った通り、死者の精神は劣化し、摩耗する。

ロイドは仏なり冥府なりを信じてはいないが、魂がそれら所に行つ  
て、魂が輪廻転生して初期化される前の記憶を走査し、精神を呼び  
起こしたのだという。

詳しい方法は知らないが、すさまじい魔術である。

しかし、当然それをされる方は堪ったものではない。

魂や精神を覗かれるのは、魔術師業界では最大の屈辱であり、タブ  
ーである。

なぜなら、一族が探究した知識の全てを奪われるということだから  
だ。

それはつまり、自分の全てを奪われることである。

自分の祖先たちが築き上げてきた物すべてを否定されるのと同義で  
ある。

そんな仕打ちは、どんな偉大な魔術師も泣いて嫌だと懇願するだろ

う。

ロイドだって嫌だ。でも自分じゃないから笑っていられる。

「あのおぞましき魔導師、人呼んで『読愛蔵書狂』ビブリアオマニアがお前の全てを記録なさるそうだ。

腐っても仙人上がり、お前は本部の大図書館で永遠になるんだよ。」  
まるで素晴らしいことのように、十人が十人激昂するだろう言葉をロイドは告げた。

しかし彼女は、そうか、としか言わなかった。

まるで本当に俗世との全てを隔絶された所にいる仙人のように、死した彼女は超然としていた。

傍から見れば呆けているようにしか見えないが、ロイドには分かった。

これは真理を悟ったと、あの世のこの世の狭間に、生者には見えぬモノを見てきたと、直感で悟った。

「地獄を見てきた……。」

そして、ふと、彼女はそう言った。

「無間地獄には……落ちるまで……二千年掛かる……と言つが、そこには時間の……概念すらなかった。」

ロイドは、ごくりと唾を呑んだ。

「“虚無の闇”……。」

ああ、と彼女は頷いた。

魔術師に信じられている最も罪深い罪人が墮とされる空間だとわ  
れている。

現世の下に地獄があるのなら、その“虚無の闇”があるのが地獄の  
下だ。

もはや地獄ですらない。そこでは閻魔に罪科を問われることもない  
し、永遠にも似た責め苦を味わわされることもない。

ただ、何も無い。

たったそれだけの、そうとしか表現できない場所だと言う。場所と  
すら言えないとも。

いうなれば、そこは産業廃棄物を地面に埋めて処理する場所、と言  
った所と言うのが最も適切である。

転生の余地なし、贖罪の余地なし、更生の余地すらなし、外道の中  
のクソ外道、人間のゴミクズのような奴が追放される魂の処理地。

教会の信ずる神にすら見捨てられた人間の最後に追いやれる場所だ。

「実在していたのか……。」

半信半疑だが、ロイドは戦慄していた。

いずれ自分も、そこに行くのだろうか。

自分の末路を見せつけられて、誰が笑っていられようか。

「お前、そこまで邪悪な人間だったのか？」

そして思わず問うてしまった。

数秒遅れて返ってきたのは、くつくつく、と死体故にぎこちない笑みだった。

それから、王季はぽつぽつと自分のことを話し始めた。

仙人の末席にいた彼女は、仙人が住んでいるという位相世界からなぜ地上へ追放され“処刑人”なぞに身をやつしたか、詰るところはそういう話だった。

ジャンキーとの馴れ初め、仙人としての修行、なぜジャンキーの奴がああなったのか、なぜ二人は地上へ追放されたのか、どういう経緯で『盟主』に拾われ処刑人になったのか。

ロイドは一时间余り、彼女の話に聞き入っていた。

総括すると。

「ただののろけ話じゃねえか。」

「けっ、とロイドは思わず悪態づいた。

「周りに言いふらしてやっても良いが、これでも俺はハードボイルドな男でね、その話は俺の胸にだけしまっておいてやるよ。」

と彼は大真面目に言うと、ははははは、と棒読み気味に彼女は笑った。

死体では感情を表現できないようだった。

「お前は思いのほか・・・良い男だったようだ。まあ、こいつには・・・敵わないが。」

「言ってる、ボケが。」

あまりにも癩に障ったので、ロイドは思わず二人の寝ている台座を蹴った。

「だが……これで、よかった……。」

少しずつしか動かない手で、彼女は横に横たわっているジャンキーの死体の手に自らの指をからめた。

「私は……最後まで、……こいつを……理解できて、居なかった……。」

「理解できるか、こんな狂人。」

ロイドは王季からジャンキーがああなった一部始終を聞いていたにもかかわらずそう言った。

「だが……もう、一緒だ。ずっと、一緒だ……ずっと何て概念が無い場所で、一緒だ……。」

「一緒だなんて概念も無いんじゃないのか？」  
意地悪くロイドはそう言った。

「考えようによっては……我らの愛は、神にも邪魔できなかった……そういうことだろう？」

我らは、来世も無く……来世で異なる人物を愛することもない……。永遠だよ。仙道の究極だ。」

「あきれ果てたよ……永遠にやってる。」

ロイドは思った。果たして、永遠の概念すらないその場所に、矛盾は存在しているのだろうか。

「。。」  
最後に、一言何かを呟いて、王李は永遠に目を閉じた。  
それは恐らく、ジャンキーの本当の名前だろう、とロイドは思った。  
無粋なので、ロイドはそれ以上死者について考えるのは止めること  
にした。

その辺の机に座って、懐から取り出した煙草の箱から一本取り出し  
て口にくわえた。

「タバコは勘弁してくれよ、ここにはタバコの煙で変質するほど繊  
細な代物もいっぱいあるんだから。」  
奥からドクトルの苦情が来た。

「俺はタバコ吸えねえよ。形だけだ。」

「ああ、真似ごとか。類感呪術の原理だものね。」

「うっせえ！！」

カッコつけのために持ち歩いているとも言えない、大して酒に強く  
もないくせにバーボンを愛酒している張りぼて男であった。

「それにしてもこれで一度に二人も“処刑人”が失われたわけか。  
手痛いな。」

「その上あの“虚飾”も潰えたらしいじゃないか。『盟主』の権威  
もこれまででなければいいのだけれど。」

「あ？ なんだって？」

ロイドは信じられないことを聞いたような顔をして、思わずタバコ  
を口から落としてしまった。

「おい、ドクトル、もう一度言ってみる。」  
「ん？ だから、“虚飾”が死んだって話だよ。」  
「んな！？」  
だん、と立ちあがって、ロイドはドクトルに詰め寄った。

「ふざけんな、あの“虚飾”が・・・イルイツトさんが死ぬわけあるか！！！」

ロイドの怒声にびっくりしたように、ドクトルは振り向いた。

「だって事実なんだからしょうがないじゃないか。『盟主』御本人がそう仰ってたんだから。」

「な・・・に・・・？」

「『盟主』は偉大な御方だけど、私は『盟主』を疑った。なにせ、彼女の体は前々から私が狙っていたからね。度重なる変身魔術メタモルフォーゼで変異し尽くしたあの体・・・じゅるり。」

うっとりとはやくドクトルに、ロイドは更に声を張り上げて言った。

「誰だ！！ どの誰がイルイツトさんを殺ったんだ！？」

「さあ？ 『盟主』の話によると、吸血鬼とやりあったらしいよ。」

過去視を担当した奴によると、アジアの日本って国で任務中に連中三体と遭遇、運悪く戦死って訳。

流石に吸血鬼相手じゃ、魂は残って無いだろうねえ。死体も処理されたっばいし。残念むねーんって感じだよ。」

腕利きのネクロマンサーも、呼ぶ靈魂が無ければお手上げのようだった。

だが、ロイドはそんな彼の軽い態度に激怒した。



「ふざけんな！！ 俺は昔、あの人とやりあつたんだ。俺はその日を戦場で付け入る隙を一分たりとも見つけられなかった。

あの人は教会から名誉聖堂騎士の位を貰ってるんだぞ！！ 傲慢ちきな教会連中が身内じゃないのにあそこまで評価しているのはあの人だけだ！！

俺が“処刑人”になった時も、殺されるんじゃないかって怖くてあの人を調べ挙げた！！ 六十年前、“魔導師”の候補にも挙げたあの人が、まさか、まさか！！！！

「少し落ち着きなよ。」

「これが落ち着いていられるか！！ あんなまともな人が！！ あんな珍しくまともな人が！！ なんて死んじまうんだよ！！！！」

ロイドは、泣いていた。ジヤンキーと王李の死体を運んできた時も割り切っていた彼が泣いていた。

「だから私も残念だと思ってるって言ったじゃないか。気持ち分かるよ。“処刑人”の古参の中で、君たち若い連中に慕われているのはあの人だけだったもんねえ。」

うんうん、と同情するようにドクトルは頷いた。

「おい、サイネリア！！ 今すぐ戻ってこい！！ ああ！？ んな場合じゃねえよ！！ 今すぐ地上の吸血鬼どもを根絶やしに行くぞ！！！！」

「とりあえず、ハーブティでも持ってこようか。」

興奮して携帯電話の向こうの相方に怒鳴りこんでいるロイドに、ドクトルは肩を竦めた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「落ち着いたかい？」

「ああ、自分でもとり乱したと思ってる。みっともない……。」

「自覚があるようで結構、君なんて下級の吸血鬼にも相手にならないよ、連中はよく訓練されていると聞いているからねえ。」

「分かってる。」

ぶすつとした表情で、ロイドは湯気がたっぷり立っているハーブティを飲み干した。

「そんな馬鹿な真似はしねえよ。身の程は誰よりも弁えている。」

「結構。サイネリアは何て？」

「とりあえず、すぐに帰ってくるそうさ。あいつも流石に今の状況で“本部”を長く空けるのはまずいと思ったんだろ。」

「彼女はあれでも君をよく見ているよ。奇人変人だと思って甘く見ると痛い目を見るよ。」

その言葉が気に入らなかったのか、ロイドはふんと鼻を鳴らすだけだった。

「セージを中心に心身が落ち着く効能のハーブでブレンドしてみた

けれどどうかかな？」

「俺にお茶の味が分かんと思うか？　というか、あんたに茶とか似あわんな。」

怪しげな奴の出したお茶だというのに、ロイドは躊躇い無く口に運ぶ。

こいつが趣味を他人に強要しないのは知っている。魔術師は普通、自分の研究などは独占をしたがるものだ。

「ハーブや漢方を操るのも立派な黒魔術さ。」

「ふん。」

黒魔術、と一口に形容されたりするが、黒魔術は複数の体系全般の魔術系統である。

そこから死霊魔術なり、魔女術なり、悪魔崇拜なりと専門的な体系に枝分かれしている。

かの有名な“黒の君”も、専門が黒魔術全般で更に他の殆どの魔術を極めているとかで有名で大いに恐れられている。どこまで本当かは知らないが。

ふと、密室のはずのモルグの中に微風が撫で回った。

「ありやりや、こりやあ出遅れましたね、フウセン。」

ロイドが振り向くと、そこには穴が開いていた。

三次元で構築されているこの世界に、二次元的な虫食いがそこにはあった。

丁度、人が一人潜り抜けられるくらいのその穴を潜って、一人の青年が入ってきた。

「仕方ないやん、フウリン。うち、あんたほど頭あようないもん。」  
青年がまるで騎士のように恭しく穴の向こうにいた少女をエスコートするように迎え入れた。

「なんだ、お前らか。」

ロイドは内心さっさと帰ればよかったと後悔した。

フウリンと呼ばれた青年とフウセンと少女呼ばれた少女、どちらも日本人だった。

どっちも学ランにブレザーという出で立ちで、奇妙な方法でこのモルグに立ち入った魔術師には見えなかった。

それもそのはずである。厳密に言えば、この二人は魔術師ですらない。

ロイドは、この二人が嫌いとはまでは言わないが、苦手だった。

「俺ら“処刑人”期待のエースタッグがのんきに学生ごっこことは、お気楽だねえ。」

「なんやロイド君、ただでさえシケた面あしてんやから、そうぐちぐち言うてんよりもっと景気の良い話でもしいやあ。」

「やははは、と猫のように笑ってびしばしとロイドの背中を叩きながらフウセンは言った。」

「や、やめ……。」

無意識のうちに魔力で肉体強化しているのか、じゃれ合いで叩かれているのに大人の本気の蹴りみたいな威力である。

「フウセン！！ ちよつと！！ ロイドさんが！！」

「あ、しもうた。あははは、堪忍してやー。」

ごほごほ、と咳き込むロイドの背中をさすって、ごめんなーと謝るフウセン。

「ったく・・・てめーはこの怪力バカ女だよ。」

「あー、ロイド君、またサイネリアちゃんのこと悪く言ゆてー。男ならもつとでつかい器を持たんかい、男やる！！」

「ごふう！？」

フウセンが喝を入れるようにバシんと、ロイドの背中を叩いた。一瞬意識が向こう側へ行った。

「わ、悪かった・・・」

「ったく、こんなヘタレがサイネリアちゃんの相方やと思うと不憫でしゃあないわー。」

「だ、大丈夫ですか？ ロイドさん・・・？」

心配そうにフウリンがロイドを労わるような声を掛けた。

ロイドは二人が苦手だった。正確には、このフウセンと言う関西女が大の苦手だった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「なあ、ロイド君。あんたが二人を看取ったんやろ？ 誰が殺ったんや？」

数分前まで底抜けに明るかった少女は、歴戦の魔術師にさえ寒気を思わせるような冷たい声で言った。

二人は当然ジャンキーと王李の葬儀に来ていた。

二人に黙祷を捧げて、カバンの中に入れていた花をかたく結ばれた二人の手の上に置いた。

「まさか、やと思っただけお、この二人を殺った野郎をみすみす取り逃がしたー、とか言わんよね？」

「この件について、『盟主』から口止めを受けている。おめーらに話すか、ボケ。」

「あん？」

五本の指だけで地元のヤクザを壊滅させた武勇伝を持つらしい（当人が自慢していた）フウセンは、そんな連中より遥かに凄味が利いていた。

「うちがけじめ付けたる。」

そう言ったのは、フウセンではなく、フウリンだった。

「きつとフウセンはそう言いますが、俺が運びませんから安心してくださいよロイドさん。」

「んな!? フウリン、そりゃあ酷いわー。」

相方の協力が得られなさそうなので、フウセンは詰まらなそうにロイドに食ってかかるのを止めた。

「少し考えればわかることだろう。王季さんはともかく、ジャンキ一の奴が『盟主』に反旗を翻す思慮があると思うかい？」

その二人が反逆なんて。どこで死んだのかも知らされないなんて、おかしいと思わないかい？」

線の細い優男のフウリンが、仰々しく言うとなかなか様になった。

「それに反逆者なら、僕らの仲間であるロイドさん達が仕留めなかつたのがおかしい。」

勝手に死んだに於ては、死因に随分と疑問が残る。これは『盟主』が表沙汰にしたいくないことなんだよ。僕らもそろそろこの業界が長いんだ、察しようよ。」

「っハ、へどが出るわ。くそ食らえやね。」

フウセンは諭すようなフウリンの言葉を、真つ二つに切って捨てた。

「止める、この二人を殺した奴をこの二人は勝者と認めた。もう決着はついてんだよ。」

「なんや、やっぱり知っとるんやないか。」

「こいつらの決着に泥を塗んじゃねーって言ってんだよ、俺は!!」  
「せやかて」

「じゃあ聞くが。」

言い返そうとしたフウセンを精いっぱい睨んで、ロイドは言った。

「俺もさっき聞いた話だが、イルイットさんが死んだ。」  
その瞬間、息巻いていたフウセンが、ひっ、とショックを受けたように後退った。  
フウセンは顔面蒼白だった。

「そんな・・・信じられません・・・」  
フウリンは冷静だったが、唇が震えていた。

「こつちもかなりきな臭せーが、犯人はハッキリしている。地上の吸血鬼どもだ。」

「まさか・・・“ノーブルブラッド”？」  
地上で吸血鬼と言ったらそいつらしかいない。  
ロイドはフウリンに、多分な、と言って頷いて見せた。

「おいフウセン、やってみろよ。あの吸血鬼どもに、けじめ付けさせられんのか？ ああ？」  
ロイドは、小悪党みたいなこれ以上なく意地悪い笑みを浮かべた。

「・・・」  
だが、フウセンは知り合いの訃報にショックを受けて、ロイドの言葉なんてほとんど聞いていなかった。

「・・・嘘、やる？」  
そして、彼女はそう言った。



この魔術師業界、死は真横にある。  
軽いロイドの一言でも、そんな冗談を口にする奴はいない。  
そういう意味では、ロイドは彼女に信頼されているのかもしれない。  
った。

「俺だって信じたくねーよ。冗談でしたー、って言って、てめえに殴られるならどれほど良かったか。」

「あの“蓮華”の奴も彼女の訃報が信じられなくて、探しに行くほどだよ。いやー、彼女は幸せだねー。まあ、彼女には死後すらいけれど。」

ドクトルが余計なひと言を言って、フウセンが本格的に泣き始めてしまった。

「うそや、嘘や、嘘やああああ!!!」

フウセンが蹲って、泣き叫ぶ。

その悲痛な叫び声に、流石のロイドも気分が悪くなった。

まるで自分が泣かせた見たいだったからだ、と彼は自分のせいだと全く認めていなかった。

「ロイド君も大人げないねえ……。」

と、拳句ドクトルにそう言われる始末である。

果てはフウリンにも睨まれて、なんで俺が悪モノなんだよ、と内心逆切れ状態だった。

フウセンが泣き止むまで、十五分の時間を要した。

「あの人は、うちにとっておかんみたいな人やったのに……くそつたれ!!」

何に向かつて吐き捨てているのか、フウセンにも分からない。だがそうせずには居られなかった。

「ロイドさん、今は本当に軽率でした。洒落になりませんよ。」  
先ほどとは別の意味で、フウリンがロイドを睨んだ。

「下手したら、この第二十八層が木端微塵になるところでした。」

「あ、あ……ああ……。」  
その時、ロイドは彼女の力を思い出して盛大に冷や汗を掻いた。

「す、すまない、本当にすまなかった。」  
今頃になって、ロイドは大人げなかったかなーと反省していた。なにせ、ロイドは十歳近くも年上なのだ。

「もうええわ。うちがアホやった。バカな真似は止めるわ。」  
フウセンは両手を広げて肩を竦めた。

「その代わりに、どないな最期だったか、教えてくれん？」  
「それは分からない。ただ、俺は生命反応が消えた所を回収しただけだからな。ただ……。」

ロイドは先ほどの負い目からか、口止めの機密違反に接触しないようにこう言った。

「こいつらを殺しただろう奴は、妙な所に居たんだよなあ……。」  
「妙？ 妙ってどこや？」  
「いや、それは言えないって。」  
「……うう……。」  
「ああ、分かった、言う、言う。」  
「ホンマか!？」  
「泣き真似かよ!！」  
気を使って損した、というあからさまな態度のロイド。

しかし、フウセンは右手にすさまじい波動すら感じる魔力を集束させていた。

「おい、……なんだよそれ。」  
「なにつて、呪詛やで。」  
「俺の知ってる呪詛と違う。」  
「そりゃあ、うちは術式知らんもん。ただ、言う言ったロイド君の約束を履行させよと思てな。」  
うち、今考えたんやけど、嘘付くと針千本やなくて体が分子レベルまで木端微塵になる呪詛。勿論、ロイド君が約束破らなあこんな不本意なことをはせえへんでもええわけやけどー。」  
「にやにや、と笑いながらフウセンはバカみたいな密度の魔力球を振りかぶる。」

「ロイド君、君の負けだよ。言葉は呪い……有名な魔術師の格言じゃないか。」  
というか、ここでそんなものぶっ放されたらここが半壊どころじゃ

済まないんだけど。」

「ふざけんなよお!! 俺がどうして“処刑人”なんてやってるか知ってるだろお!!」

涙目だった、ロイド君涙目だった。

「そんなん、調子こいて金に目え眩んで『盟主』呪い殺そうしたんやからやろ？」

「やははははは!! ヴイクセンの旦那が教えてくれたわ!! にやははは!! やーい、へたれ、へたれー!!」

「なあフウセン、それくらいにしとこうよ? なあ?」

フウリンどうにか止めさせようと頑張っているが、全くフウセンには効果が無いようだ。

「ち、畜生。な、なら、お、俺は『盟主』の忠義を守って死んでやら!!」

ぜ、絶対『盟主』は殺してくんないもん、俺にこれ以上ないってくらい責め苦を味わわせるに違いない!!」

「ほほー、ちったあマシになったなあ、ロイド君。ほな、塵になれや。」

まるで砂の城を崩すようにフウセンは言った。事実こいつは砂の城を蹴り壊すように無邪気に人を殺してきた。

「わ、わ、わー!! 分かった言うからあ、もう言うからあ!! 許して、許して!!」

ついにロイドは恐怖に負けてしまった。

「うわ、だっさあ……。」

「いや……流石に酷いと思うぜ、フウセン……。」

「せやかて、ロイド君、絶対最後の最後は自分の命を優先するん分かってたもん。こういうしょーもない男は。」  
冷めた表情で凝縮された魔力の塊を解いていくフウセン。  
言われ放題だった。

「くそ、くつそ……いつかこのアマ絶対に呪い殺してやる。」  
呪術師ロイド。陰湿さには定評がある。  
自爆覚悟で『盟主』にちくつてやると、小さな事を考えていた。

「おやあ？」

その時、ドクトルが指を鳴らした。

すると、闇夜に紛れて置かれていた薄型テレビに光が灯った。  
そこには外の様子が映し出されていた。

「わあ、どないして水晶じゃなくてテレビなん？」  
「別の場所を映し出す、という用途は同じではないですか、呪術としては何の問題もありませんよ。」  
なるほどなー、と納得したように頷いたフウセンだったが、すぐにその表情は引き締まった。

「悪魔ですか……。」  
フウリンが顔を顰めて、右手で胸を抑えた。  
あるうことか、テレビには外に悪魔が跋扈している様子が映し出さ

れていた。

悪魔の軍勢は一度、教会の領域に突撃すると、まるで蜘蛛の子を散らすように散り散りに飛び去ってしまった。それから、まるで軍勢とすら呼べない有様。

悪魔たちのやりたい放題。

拷問、誘拐、脅迫などの想像を可能な限り残虐にしたような光景が地上で広がり、阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

「人様の縄張りで、なに調子こいてんのや、こいつら。」

「なんとかいうか、下級悪魔と言うのは下品ですね。」

我ら“処刑人”は“本部”の秩序の為に居る。これは『盟主』の命令を待つまでもなく、自主的に駆除しないといけませんね。」

「当然や。フウリンはうちを送ってから、他の面子を集めなあ。こいつらの好きにさせんのはめっちゃ胸糞悪いわあ。」

「はい。」

フウリンはすべて承知しているように頷いた。

「ほら、出番だよ。」

フウリンが胸を叩くと右手を突きだした。

すると、ごぼごぼ、とフウリンの心臓辺りが蠢いた。

“何か”が、そこには居た。

それは、ごぼごぼ、と皮膚の下を這いずり回り、右腕を這いずって

右手の掌を食い破って、顔を出した。

顔を出した“それ”は、この世の物とは思えない醜悪なイモムシだった。

紫色を主体としたグロテスクな文様を帯びたその生物は、正しこの世の物ではなかった。

「へえ・・・上級悪魔か。」

ドクトルが物珍しそうにそう言った。

フウリンに寄生し、心臓としてその血肉を食らいながら共生する邪悪な悪魔の化身だった。

彼は生まれながらこの悪魔に魅せられ、“悪魔憑き”の忌み子として無数のイモムシと共に母親の胎内から生まれ堕ちたと言う。

悪魔に祝福された、生まれながらにして邪悪な忌み子である。

悪魔の化身はフウリンから飛び出ると、テレビの端を食み始め、瞬く間に縁を食い破った。

すると、テレビの中に写っていただけのはずが、虫に食われた枠内の立体感が格段に向上したのである。

それもそのはず、テレビに映っているはずの場所と、この場が繋がってしまったのだから。

錆色の塵が突風のごとく室内に入り込んでくる。

これが、“蟲食い”と称される“処刑人”フウリンの能力であり、

彼に寄生する上級悪魔ローゼンブリッジの力だった。本来ならただの一般人に過ぎなかった人間を冥府魔導に突き落とすた力だ。

「じゃあ。空いている連中に声を掛けてくるね。」  
そう言つて、フウリンは無数に這い出てきた悪魔の化身に己の周囲を肩抜きのように食わせると、くるりと体を回した時には彼はもうこの場に存在していなかった。

「ほな、始めよか。」  
つかつか、テレビに歩み寄りながらフウセンはそう言つた。そして、彼女はブレザーの内ポケットから手のひらサイズのケースを取り出すと、それを開けた。中には普通の眼鏡が入っていた。

彼女は、慣れた手つきでそれを掛ける。度は入っていないようだった。

「おい。あんたあ。」  
テレビの上に左腕の肘を置いて、まるでヤクザのようにテレビの中に顔を突っ込んでそう言つた。

すると、テレビの向こうで女性の首をじわじわと締め上げて楽しそうに笑っていた悪魔がこちらに振り向いた。



「死ねや。」  
「ばーん、とそんな陳腐な表現で済むような些細な出来事のように、悪魔の体が木端微塵に砕け散った。なぜか残った両手と両足だけが、ぼとり、と地面に転がった。」

悪魔の体が砕け散ると、そこにはどす黒い炎のような物体が浮かんでいた。

それが、悪魔の魂だ。悪魔の本体と言うべき物で、これを潰さなければ（時間を掛けて）連中は何度も復活する。

フウセンは、それをいつの間にか手にしていた瑠璃色の剣で悪魔の魂を縦に切り裂いた。

切り裂かれた悪魔の魂は、完全に消滅した。

ロイドは見ていた。その瑠璃色の剣が、一瞬にしてバトルハンマーに変化して、悪魔を頭蓋から股まで一気に砕き潰したのを。

それは魔力の性質そのものの能力を持った、魔力の色と名を持った魔剣“ヴァイデューリヤ”。

ラピスラズリの原石を削って作ったようなその魔剣は、持ち主の最適な形に変化し、最適な運用できる形に変化する魔力の魔剣である。

彼女は胎児の頃、相当な難産でそれを持って母親の胎内を突き破って産まれたと言う。

生まれながらに魔剣を手に入っていた少女。

そんな桁外れの、化け物じみた才能を持ちながら、あまりにも平凡すぎる貧弱な肉体のせいで己の力を完全に制御しきれていない。否、人間にはまず制御しきれはるはずもない力を与えられて、産まれたのがフウセンだった。

神の悪戯によつて誕生したような彼女を、人呼んで“瑠璃色の寵児”と称す。

そして、全く同時期にフウセンと言う悪魔の子が何かの間違いのようになんか国に産まれた。

二人は『盟主』に拾われた後、ペアを組んで学生生活をしながら世界中の“本部”邪魔者を断罪しまくっている。

そんな二人と一度サイネリアと共に模擬試合をしたことがあるロイドは、その日のことをハルマゲドンだったと語る。

その日のことを思い出して、ロイドは気分が悪くなった。

模擬試合の後、君死んでたよ、と戦いの最中に倒れ運び込まれたドクトルの下で彼に笑いながら言われたからだ。

彼の下に運び込まれたのはフウリンも同じだったが。

「どないしたん？ おんどれも早よあ、行けつちゅうねん。」

「ちょ、待てよ。相手は悪魔だぞ。例外なく使える魔術のレベルは俺らより上だ。」

そんな中、対人専門の俺が乱戦に参加できるわけねーだろー！！」

「つべこべ言わんとさっさとよせい！！」

「くそ！！ 分かったよ！！ てめえみたいな天才に俺の非凡さがわかんねえんだろうな、こんちくしょう！！！！」

やけくそ気味のロイドの叫びを、フウセンは鼻で笑うとテレビを潜ってどこかへ行ってしまった。

「君も十分天才だろうけれどね、まあ、得意不得意・相互相克のこの世で強弱を論じるのは愚かだがね。」

ドクトルの慰めはあまり効果を及ぼさなかったのか、ロイドは不機嫌そうな態度でその辺にあった椅子に座りこんだ。

「おや、行かないのかい？」

「誰が死ぬと分かっている所に行くか。バカバカしい。『盟主』だって出来ない仕事は割り振らねえよ。」

「おやおや、まあなんとも君らしい。」

ドクトルは苦笑したが、彼を咎めるつもりはないらしい。なんとも魔術師らしい態度だと、賞賛してやっても良いくらいだとも思っていた。

だが、ドクトルは思う。彼はかわいそうな奴だなあ、と。なぜなら……。

「ほげ!！」

突如として、ロイドはモルグの床の冷たい床に突っ伏した。

背後に、何の脈絡も無くサイネリアが立っていたからだ。

「外が大変……『盟主』の為に……」

サイネリアは億劫そうな態度でそう告げた。

こんな態度でもやる気はあるらしかった。

「お・・・お前、転移系の魔術なんて使えたか・・・？」  
思いつきり顔を打つたらしく、顔を抑えているロイドがぶるぶると震えながら立ちあがった。

「フウリンが、来て・・・」

「あー、そう言えばあいつ、悪魔の力で人探し得意だったな！！」  
伝承などに登場したことのない全く無名の悪魔だが、悪魔は悪魔。その力は人智を超えているのである。

悪魔の力をほぼ無条件で借りられるなんて反則である。世の悪魔崇拜者たちが涎垂らすだろう。

「着替え・・・用意して・・・」

「てめツ・・・戦つにしてもあの格好は止めるよ、止めるよ！！」  
ロイドもいい加減腹をくくつたらしかった。彼が彼女に勝てた試しが無いからである。

だが、例の魔法少女のコスプレである。

サイネリアはあの恰好じゃないとやる気が出ないと言う。  
でもあれだけはどうしても止めてくれとロイドは懇願していた。

「別に良いけど・・・」

「だったらいつもそうしろよ。」

「でもやる気で無い・・・もしかしたら、お前が襲われた時、・・・」

・やる気でないかもしれない。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

理不尽な沈黙が流れた。

「あー！！ くそ、分かったよ、分かりました、分かりましたよ、ちつくしよー！！」

もうロイドは殆ど半狂乱状態だった。

「バーボン、用意しておこうか？」

ドクトルは笑いを堪えながら言った。

「今日はいつもの店で飲むからいらん・・・・・・・・。」

半狂乱状態もつかの間、どっちがグールか分からないような意気消沈ぶり、ロイドはサイネリアに引きずられてモルグを後にした。

## 第二十六話 行動開始

「くそ、埒が明かないな。」  
そう呟いた『カーディナル』は、民家の屋上にて槍一本で立っていた。

周囲には背中から翼を持つ漆黒の肢体、刺々しい鎧のような肉体を持つ邪悪な生物。

魔界に最も多い、デーモン種の悪魔であった。それが数十と居る。

「神は幾度このような試練を下されば気が済むのだろうか・・・。」

「己の悲運を呪っている場合か？」

背中合わせに立っていた『プロメテウス』が、面倒くさそうにそう言った。

もうすでに三時間はぶっ通しで戦い続けである。

しかしそれでも一向に悪魔の数が減る気配が無い。

「“処刑人”が複数参戦しているし、ここにいるのは殆どが魔術師だ。抵抗もしている。」

下層から魔術師ギルドの依頼を受けてくるだろう傭兵どももそろそろ掛け付けているだろうが・・・。」

疑念を確認するように『プロメテウス』が呟いた。

「どこからか増援が沸き出ているか。道理で数が減らない訳だ。」  
彼女の槍の一閃で、ばたばたと悪魔が墜落して消滅している。

しかし、消えた悪魔を穴埋めするように新たな悪魔が登場し、包囲を固める。

「指揮官クラスの上級悪魔まで動員されたか・・・無秩序だった悪魔どもが組織的に行動しているな。」

ダン、ダン、と断続的に『プロメテウス』の両手にあるデザートイーグルが火を噴く。

機械のように正確に悪魔の頭蓋や心臓を撃ち抜き、次々と殺害していく。

当然ながら、悪魔たちもただ黙ってやられているわけではない。  
多数の魔法陣を幾つも操り、高等な魔術を展開して一人簡単に即死するだろう一撃を連発している。

「ところで。」

『カーディナル』は悪魔たちの魔術の一斉射撃を、障壁を展開して防御しながら返す刃で槍を一闪、一步も動かず悪魔たちを撃墜していく。

「そんなおもちゃでよく悪魔と戦う気になれるな。」  
戦闘の真っ最中だと言うのに、彼女はそんな無駄口を叩いた。

「なに、手の内を見せたくないのはお互い様だろう。言わせるな恥ずかしい。」  
「淡々と機械的に『プロメテウス』は銃撃で一体ずつ悪魔と撃墜していく。」

「ふん。ただの拳銃で悪魔が墜とせるか。一体どんな小細工をしているのか、参考までに聞こうと思つてな。」

「あの『カーディナル』がわざわざ魔術のカラクリを訪ねるか。」

お前たちには恥というものを知らんと見える。古臭い魔術しか知らないお前たちには理解できまいよなあ。」

「勘違いするなよ。私は聞かせてほしいと言っているのではない、聞かせて見せる、と言っているのだよ。」

「はん。嗤わせるな。」

お互い一歩も譲らぬ傲慢さで言い合いながらも、周囲では激戦が繰り広げられている。

地面には悪魔の死体が山のように築き上げられていた。

「そちらこそ、その槍はロンギヌスのレプリカだろう？ 取り落とすなよ。」

「私をシャルルマーニュ帝やフリードリヒ帝と一緒にするな。」

「そちらこそ、模造品で悪魔とやりあうとは、随分とお気楽なものだ。貴様らの秘蔵の聖遺物を開帳して見せたらどうだ。私がお前たちの起源を知らぬわけあるまい。」

「必要なら、今から神の下に赴いてこの槍を父の血に染めて帰ってくるが？」

「……ふん。自ら奇跡を勝ち取るうとする気概だけは好ましいとだけ言っておこうか。」



「そうとも、祈るだけの生活なぞ百年もすれば飽きる。」  
そう呟いた『カーディナル』は、懐から聖書を取り出した。

「ローマ人への手紙、第六章二十三節　　罪の報いは死なり。」  
彼女は聖句を詠みあげる。

すると、彼女たちを取り囲んでいた数十の悪魔たちが突如として悶え苦しんで、息絶えたのである。  
それはまさしく神罰の如く。

「神にその命を返せ、くそつたれども。」  
普段なら口にしないような暴言も、相手が悪魔だからオーケーなのである。

「・・・やれやれ。」  
なんとも言えないという態度で、『プロメテウス』は白衣のポケットから乾燥した植物の茎が詰まったガラス瓶を取り出した。

その中身を悪魔の死骸に撒くと、激しく燃え上がる。

「ギリシヤに伝わる神の火だ、悪魔祓いにはもってこいだろう。」  
「伊達にプロメテウスと名乗っては居ないな。」  
「本業ではないゆえに個人的興味での研鑽だがね。それにくだいだろうが私は自らそう名乗ったことはない。」  
彼が撒いたのはウイキョウの茎を乾燥させ砕いたものである。

ギリシヤ神話の伝承によると、プロメテウスは神々から盗んだ火を

ウイキヨウの茎に隠したという。  
それを魔術として運用したのが今の形である。

「 失礼仕る。」

ふと、屋根の上に悪魔とは違う新たな人影が出現した。

「これはこれは、ギリア殿ではないですか。」

不満たらたら不機嫌全開だった『カーディナル』の表情が、一瞬にして営業用の慈悲深い笑みにすり替わった。

現れたのは、赤銅のような赤毛を持つセンスの良いローブを纏った三十代半ばほどに見える男であった。

魔導師ギリア。

千年続く魔術師の名門ハーベングルング家から誕生した、“魔導師”の一人である。

典型的な貴族型の魔術師であり、“魔導師”になったのがごく最近の為、権力の掌握に執心しているとの噂である。

「第二十八層が悪魔の襲撃に遭っていると聞き、居ても立っても居られずはせ参じた次第です。

偉大なる『カーディナル』よ。もしよろしければ、わたくしめも神の戦列に加えさせてはいただけないでしょうか？」

「これはこれは、なんと心強いことでしょうか。貴方のような勇猛にして精強な魔術師が参戦するとなれば、もはや敗北など万が一に

もありませんまい。」  
まともな神経の人間が聞いていれば、じんましんでも出るような浮ついた会話だった。

魔導師ギリアは北欧系の魔術師である。当然、ヤハウエもキリストも信仰していない。

ただ単に筋を通しに来ただけだ。『カーディナル』の覚え良くしようと、勝手に来たのである。

彼女の心境としては、自分の領地である第二十六層に帰れ、私の土地に土足で入り込んでくるな、であろう。

『プロメテウス』にはそんな『カーディナル』の内心が透けて見えるようだった。

「それでは『プロメテウス』殿も、御武運を。」

ちゃんと彼に声を掛けることを忘れないギリア。彼は鼻で笑うだけだった。

ギリアは仮面のような笑みを湛えたまま、虚空に同化するように消え去った。

彼とほぼ同時期に“魔導師”になった『プロメテウス』は、彼のことを気にしていない。

そして彼が今まで居た場所に、『カーディナル』は唾を吐きかけた。彼女も同じようだった。

「仮面紳士が。お前が誰にでも良い顔をしているのは承知の上だと言っのに。」

「あれでも実力は本物だ。我ら“魔導師”の中でも分かりやすい武闘派だからな。存分に利用してやればいいではないか。」

「腹の中に混沌を飼っている男だぞ、あ奴は。その場にに応じて十以上の人格を使い分け、時には専門以外の魔術すら繰る曲者だぞ。突如として豹変するあいつの態度を見て誰が信用できようか。」

不機嫌全開のしかめっ面に戻った『カーディナル』は言葉も吐き捨てるようにそう言った。

「きつと性根はその辺にある悪魔のように腐っているに違いない。」

「聖職者の言葉とは思えんな。」

「私が聖職者なのは改宗する気がある奴と可能性がある奴、そして同じ神を信ずる者の間だけだ。それ以外は靴の裏の土以下だ。だから貴様に説教などするつもりもない。」

「おやおや、あまりにも悪魔どもの相手が退屈なので説法の一つでも聞いてやって気を紛らわそうと思っていたのだが。」

「説法は仏教用語だ、たわけ。わざとやってるだろう。」  
「そうこうくだらないことを言っている間にも、悪魔たちはぞくぞくと集結してきている。」

『カーディナル』は、おもむろに虚空を見上げると、槍で一閃した。すると、その軌跡に沿って瘴気が切り裂かれた。

その先に、巨大な魔法陣が存在していた。

第二十八層の“天井”に展開され、三層からなる大規模な巨大な儀式魔法陣だった。

その魔法陣を、彼女は知っていた。

「禁術、<sup>デモンズゲート</sup>“魔界門”……まさか『盟主』まで敵に回すつもりか。」

それは、無差別に魔界の悪魔を召喚せしめる、かなりフリーダムなこの“本部”ですら使用を禁じられている禁忌の大魔術であった。

道理で次から次へと悪魔が湧いてくるわけである。

「クソ外道がぁ……。」  
あまりにも人類に多くの被害と災厄をもたらす魔術として、術式すら封印されている。

どこで知ったか知らないが、これを躊躇い無く使う術者を、彼女は赦すわけにはいかない。

「神の裁定に委ねることすらおこがましい。この私が直接地獄に叩き落としてやる。」

怒りがこもった呟きと共に、『カーディナル』は悪魔を叩き斬った。

そして、彼女は一枚の呪符を取り出して額に当てた。

「教皇。私です。前々から頼まれていた聖遺物をお譲りしようと思ひまして……はい。当然ながら、教皇にはお願いしたいことがあります……。」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「マズイ……」  
エクレシアは非常に焦っていた。

悪魔との戦闘が外で開始されてから丸三日が経っている。  
予想以上に長期戦の様相を呈している。

噂によれば強大な魔術師、“処刑人”、“魔導師”が何人も投入されているらしい。  
それでもかたが付かない。先日暴動が起こった日には数こそ凄まじかったが、たった半日で鎮圧せしめたというのに。

これは悪魔の駆逐かなり手古摺っていると見える。  
軟禁状態のエクレシアに食事を持ってきてくれるアビゲイルが劣勢ではないと言うが、状況は泥沼化しているようだった。

しかしながら、今のエクレシアは悪魔のことより気になることがあった。

それは、騎士団の本拠地に来る前に、第二層でクラウン達とした約

束である。

一週間で帰らなければ、彼は　　。

「ない、そんなことになるはずがない！」

嫌な想像を振り切るように首を横に振っても、エクレシアは気が気でなかった。

ここに来るまでに要した時間は二日。

そしてもう三日ここで過ごしてしまった。時間的余裕はもう殆ど無い。

「　　。」

エクレシアの決意は早かった。

今日までずっと磨いていた愛用のプレートアーマーをベッドの上に置いて、対魔術処理の施されたケブラー繊維で出来た防刃ベストとスラックスを着こんだ。

これだけでちよつとした鎧くらいの防御力はある。その上に更に鎖帷子を着込む。

足から太ももまで装甲と取り付け、広げられた鎧を自分で装着、肩の装甲を通して両腕に装着、腕まで保護する籠手を両手に装備する。視界が僅かしかない首まで覆うヘルムを装着して、うっとおしいまでの完全武装を施した。

久々に鎧を着たので、その感触を確かめるように動いてみる・・・問題無い。

試しに腰に帯びた剣を抜いて素振りをするが、動きは平時と全く遜

色ない。

最初は嫌だった全身を締め付けられるようなギチギチの感触も今は懐かしい。

これでも軽量化されてはいるがその総重量はエクレスシアの体重の半分はある。

鎧の全てのキャパシティを防護に費やすため、魔術による軽量化は行われていない。

その甲斐あつてか、戦闘機の機関砲くらいなら正面から耐えきれし、大規模な魔力爆発の後でも生きていられる。

更にこの上から装備者の魔術による防護などを加えるため、その防護力は鉄壁である。

あらゆる魔術の体系で生存率がダントツな理由もその辺りにある。

しかし、ここまで重装備なのだから、普通は自身の防護に魔術を割く必要はない。

戦闘中に使える魔術はせいぜい五つまでだと言われているし、エクレスシアもその辺りは実戦経験で理解している。その内の一つを割くのは利口ではない。

荷物はポケットに突っ込んだ財布の中の有り金だけである。

余計な荷物は持ってきていないし、どうしても持っていききたい物はないからだ。

そして、エクレスシアは鎧と一緒に立てかけてあったハルバードを担



いだ。  
クロムに貰った奴は残念ながら第二層のクラウンの家に置いてきてしまった。

こんなことになるなら持つてくればよかったと、エクレシアは溜息を吐いた。

この鎧も、布教活動だと言うので持つて行かなかったが、あの場所はそんな甘い所では無かった。

気を引き締めて、エクレシアは長年過ごした宿舍の自室を後にした。

「行くのですか？」

自室のドアの横に立っていたアビゲイルが彼女に問う。

「止めないでください。」

エクレシアはヘルムのスリットを上げて顔を露わにしてそう言った。

「なぜ止める必要があるのですか？ 私は博士より貴女を悪魔の存在する領域の突破までを護衛することを命令されています。」

「待機しろと言われていませんでしたか？」

「命令は撤回されてはおりませんし、それは作戦を博士により提示されたにすぎません。」

「すぐへ理屈だと、エクレシアは思った。

「……始めから、突破させるつもりだったんですか。」

「博士は遅かれ早かれこうなるだろうと予見していました。」

現在戦況は膠着し、掃討戦から散発的で小規模な遭遇戦へと移行しました。教会は悪魔の掃討より、包囲しての拡散を防ぐ消極的な戦術を取っています。」

アビゲイルは手にしているノートパソコンを開くと、そう言った。

「まさか、あり得ません。我々が悪魔に対して後手に出るような戦術に出るなんて。」

「実は悪魔の大規模な召喚を行っているのは上級悪魔だと判明しました。当然、我らは総力を挙げてそれを破壊しました。」

これは包囲が完了し、後援として参加した『魔導老』配下の精霊魔術師の瘴気の浄化が行われ、瘴気が薄くなったことで判明したことです。悪魔が戦力を結集させてはいるようですが、敵増援は完全に断たれたようなのです。しかしそれでも悪魔の総数は一向に減ってはいないように思えます。」

「なぜですか？」

「恐らく敵首謀者が複数の使い魔を経由しての超遠距離召喚魔術を行っている」と予測されています。」

「犯人は、上級悪魔ですか・・・？」

「彼らは頭が良い。直接人間とことを構えることはしないとの結論が出ています。」

「では単独犯では？」

「悪魔はリターンが高くてモリスクが高い行動はまず行いません。との結論が出ています。」

「まさか・・・。」

思わずエクレシアは呟いた。

悪魔との召喚魔術は感度と精度が最重要だとエクレシアは書物で読んだことがある。

悪魔の召喚には契約が必要不可欠であり、その為に対話をする必要

があるからだ。  
それを複数の使い魔を経由して遠くの遠くへ直接召喚するなんて、あり得ない。

向こうで召喚してからこちらへ転移させたとも考えられるが、それはコストの面で現実的ではない。

少なくとも誰も感知できない遠距離から召喚魔術を行使するなんて、そんな馬鹿げた神業が出来る人間が反旗を翻していることになる。むしろそれは悪魔がやったと言われた方が納得できるくらいである。

そして、そんなことが出来る人間は、エクレシアは一人しか知らない。

「まさか……『黒の君』の逆鱗に触れたということですか？」  
まず誰もが考えるだろう、結論だった。

黒魔術専門の人類史上最高の魔術師、人呼んで『黒の君』。  
その伝説は、エクレシアも聞き知るところだった。

数千年生きてなお存命する彼は、数百年の間に時々天災のように現れ、天災のように去っていくと聞いたことがある。

現れる度にその時代の魔術師を恐怖に陥れ、気に入らない相手は容赦なく地獄の底に引きずり落とすとか。

「それはまず考えられることですが、それはまずあり得ない、と盟主から回答があったようです。」

「なぜですか？」

エクレシアは『盟主』が世にも恐ろしき『黒の君』の唯一の弟子である、と言われているのは知っている。

『盟主』はあまりにも無能だという話で、それは眉唾だろうと陰口を叩かれているのは聞いたことあるのだが。

「あの御方はこんな回りくどいことはしないとのことですよ。

あの御方なら派手に現れて自己主張し、自ら災厄の如き魔術で破壊を繰り広げるとか。

“魔導師”の方々にもかの御方と直接面識がある方も多かったので、概ねその通りだろうと結論が出ています。」

「な、なるほど・・・。」

彼の伝説を聞きかじった程度のエクレシアにも、納得がいく理由だった。

伊達に『黒の君』、即ち“黒魔術の暴君”と呼ばれているに違わない話である。

「では、一体どこの誰が・・・。」

「現在、貴女が気にするべきは犯人の特定ではないでしょう？」

「・・・ええ。」

エクレシアはあからさまな話題の逸らし方に疑念を覚えずには居られなかったが、その通りなので頷いた。

「なるべく悪魔との遭遇を避けるようなルートで進みます。ナビゲートは任せてください。」

悪魔との戦闘が避けられない場合は、私の魔術では悪魔相手では不足でしょうから、支援に徹しますのでよろしく願います。」

「分かりました。」  
淡々と丁寧に述べられるアビゲイルの説明に、エクレシアも頷く。

「行きましょう。」  
もう一度、エクレシアは深くうなずいた。

「……くそっ」  
宿舎の外に出ると、エクレシアは外の光景に齒噛みした。

遠目から見て、悪魔が何体が徘徊していた。  
少しばかり遠くが見渡せるほど瘴気は薄くなったが、その中でも悪魔は健在だった。

エクレシアにとってこの場所は第二の故郷、美しかった街並みを穢されるのは、我慢ならないことだった。

「術式を索引、……ヒット。  
現状に最も適していると思われる、術式“プラトンの洞窟”をダウンロード……解凍……。」  
一方、その後ろでカタカタとエクレシアがうっとおしく感じるほど激しくアビゲイルはタイピングをしていた。

「術式を展開……抵抗はしないでください。」  
「え？」

なにを、と問う前に、エクレシアの感覚がぐるんと反転した。

「ここは・・・?」

感覚が平常に戻り、エクレシアが見た物はこの世の物ではなかった。

この世界がペンキで真っ黒に塗りつぶされたような、現世とは思えない光景が広がっていた。

彼女の呟きが、異様なほど響いた。

「ここは我々の影の裏側、それを視覚化した異相空間です。」

「こんな場所・・・いつの間になつたんですか。」

「ここは影の世界ですよ。この世に光が差したその日に構築されたはずです。」

「はぁ・・・。」

自分の知らない世界観の魔術なのでエクレシアには全くその原理は理解できなかったが、とりあえず頷くことにした。

先の一瞬で理解したが、彼女は自分よりかなり格上の魔術師だと分かったからだ。

術の展開から発動までがまるで分からなかった。エクレシアには本当にただパソコンをカタカタと弄っているようにしか見えなかった。

『プロメテウス』は、科学技術の中に巧みに魔術を紛れ込ませるのが得意だと聞いたことがある。

彼は近年統合された物理現象を操る物理魔術の権威であり、第一人者だと言う。その助手を務めているだけはある、とエクレシアは思

った。

「しかしながら、現実があつての影の世界。肉体がこの世界に居ようと、完全に我々の痕跡を隠せたわけではありません。

ですので、一度悪魔の駆逐が完了している精霊区から、昇降魔法陣まで最短距離で移動します。」

アビゲイルはノートパソコンの画面をこちらに向けて、そこに表示されている地図の大まかなルートを示して見せた。

「なるほど・・・では、万が一悪魔に遭遇したら手筈通りと言うわけですね。」

「はい。地上の悪魔に接近すれば恐らく気付かれるでしょう。ただ、こちらから向こうの状況を確認するのは難しいので、こちらから接近してもギリギリまで発見は遅れるでしょう。

・・・最悪、不意打ちを受けることは覚悟していただきます。」

「私たちは常に魔術師の陣地に突撃しています。不意打ちを受けるなんて日常茶飯事ですよ。」

「流石ですね。では移動を開始しましょう。」

打合せもそこそこ、二人は走り出した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

魔術により底上げされた身体能力により、風のように走ること十分。

アビゲイルの提案で危険性は増すが、建物などの上を通り直線的に駆ける。

その結果、何物にも邪魔されず『魔導老』が治める精霊区画に差し掛かった時だった。

「前方注意、敵反応。数は一。」  
アビゲイルが注意を促してくる。

こちらが悪魔に接近しているようだった。同じようなことはもう三度もあった。

「迂回しましょう。現状の戦力では交戦はなるべく避けたいですか  
ら。」

「はい。そうしたいのですが……。」  
最後まで言われるまでも無く、エクレシアは気配で察した。

「ミツケタ。」

ずいぶん、と真下から巨大な漆黒の腕が伸びてきて、エクレシアを握りつぶさんと飛び出してきた。

「ハアッ!!!」

空中からの不安定な姿勢からだと言いつのに、エクレシアはハルバー



ドをぶんと回して巨大な腕に叩きつけた。

それで魔力で出来ていたらしい巨大な腕は、ばん、と漆黒の粒子と  
なつて霧散した。

「シネ。」

しかしそれは囷だつたらしく、真正面前方に魔法陣を展開して魔術  
を発動寸前にしているデーモン種の悪魔が居た。

「やあああああああ!!!」

だが、エクレシアは臆することなく突撃する。

重装甲に任せた突撃による各個撃破は聖堂騎士団の基本戦術である。

漆黒の炎が悪魔から放たれる。

邪悪に染まった暗黒の炎は、十の人間を一瞬で消し炭にして余りあ  
る威力である。

始めから避ける気も無いエクレシアに、当然ながら直撃を受けた。

だが、彼女は怯まなかった。臆することなく、速度を維持して悪魔  
に突撃する。

悪魔とエクレシアの距離が肉薄した。

エクレシアがハルバードを振りかぶる。

悪魔は当然彼女ら騎士団の戦い方を知っているし、その場から距離  
を取ろうと翼をはためかせた。

「術式“サンライトレーザー”を展開。」  
アビゲイルの指先が悪魔を狙う。

「照射。」  
極限まで凝縮された太陽光が、彼女の指ほどしかない細さのレーザー  
― 光線が悪魔の右目を穿った。

太陽の光が持つ神聖な力が弱点な悪魔は、エクレシアが迫っている  
のに金切り声のような悲鳴を挙げた。

その隙を見逃すまでも無く、ぱつさりと悪魔の体をハルバードが捉  
える。

ばしゃ、とごっそりと抉り切られた悪魔の下半身から溢れ出たおび  
ただし量の血が、地面に撒き散らされる。

「終わりだ。」  
振り下ろしたハルバードを捨て、帯刀して剣を抜刀したまま悪魔を  
斬り捨てた。

右肩からバツサリと肉体を無くした悪魔はそのまま虚空へ消え去っ  
た。

「逃げた・・・が、あの様子では長くはないな。」  
悪魔の血糊を振り払って鞘に剣を戻すと、エクレシアは呟いた。

「先を急ぎましょう。」

「ええ。」

アビゲイルに頷いて、エクレシアはハルバードを拾ってすぐに駆けだした。

「・・・・・・・・・・ターゲット・・確認・・グヘヘ。」

現実世界に逃げ延びた悪魔は、残った腕を使って第二十八層の“天井”に向かって漆黒の光を放った。  
すると、“天井”に人間には理解できない文字が刻まれた。

それを見届けると、悪魔は下卑た笑みを浮かべて息絶え、魂を残して消滅した。

「お手柄ですね。」

間も無く、その悪魔の魂を手取る者が現れた。

人間の手だった。

「　　楽しくなってきましたね。」  
ぐしゃり、と悪魔の魂を握り潰し、ぱっぱと埃を払うように両手を叩いた。

女の、声だった。

「さて、と。次はどうしましょうか。」

彼女の目の前を、騎士団の小隊が駆けて行った。  
誰も、彼女に気づかない。

「そっだ、あいつらにしましょう。生け贄は、新鮮な悲鳴を奏でてくれないと。」  
彼女が指を鳴らす。

突如として地面から出現した五体の悪魔たちの強襲を受けて、騎士団との乱戦状態になった。

「・・・駄目ですねえ。」  
彼女はそう呟くと、戦況なんかに興味はないのか、隊列を乱された騎士団が持ち直して悪魔の一体を撃破したことに目もくれない。

「やっぱり、友人の頼みごとを先に済ませましょう。暇してる奴は全員行きなさい。早く。」  
彼女がそう呟くだけで、地上に現れた悪魔の行動が一斉に変化した。

「私って、何て友達思いなんでしょうね。・・・ねえ、メリス？」  
彼女の手には、“ターゲット”と裏に書かれた写真があった。

表には、エクレシアの胸部から顔までが写されていた。

## 第二十六話 行動開始（後書き）

また大きく時間が空くと思われていただろうが、そんなことはなかった。

モチベーションが一定でなくてすみません。

## 第二十七話 最悪の女

ズバシユ、とエクレシアのハルバードの一撃が悪魔の体を捉え、真つ二つに引き裂かれる。

「これで、三体目……。」

「マズイですね。」

圧倒的に悪魔と遭遇する頻度が激増した。

精霊区画に入ってから、殆ど移動出来ていない。

「明らかに悪魔に目を付けられたようです。」

地上で“デーモンサイン悪魔の刻印”が確認されたようです。

解析班によると、影の裏側に獲物が居る、といった内容で。」

ちらほら悪魔の姿が見えてきた。

今までは瘴気が無かったから悪魔を倒せてきたが、見晴らしのいいこの場所では孤立無援である故に地上より状況は不味かった。

「まさか、我々を狙ってきているのですか？ どうして……」  
そんな問答をしている暇は無かった。

エクレシアの疑念をよそに、遠方から悪魔が二体飛来してきた！！



「まだ来ます！……！」  
臨戦態勢を取るエクレシアの前に、更に三体のデーモンが立ちはだ  
かった。

「瘴気が無ければ倒せなくもありません、先手必勝です！……！」  
瘴気が濃ければ濃いほど、悪魔の力は増す。

正確には発揮できないと言うのが正しい。“世界”が悪魔と言う異  
物を認めないからだ。

瘴気の有無で、最大十倍は発揮できる力が違う。  
瘴気は悪魔と言う“世界”の異物を誤認させる力があると考えられ  
ているのだ。

とはいえ、相手は五体である。  
問題は前列と後列、壁役と後方支援役が居ることだ。

如何なエクレシアとて、悪魔の魔術の集中砲火を受ければ一溜まり  
もないだろう。  
それどころか、後衛は二人が前衛を倒している間に一網打尽に出来  
るだろう。“大技”を使う余裕があるはずだ。

状況は、最悪だった。  
アビゲイルは、この場から逃走を図るため、この世界からの離脱を  
試みようとした。

その時である。

からん、と悪魔三体とエクレスシアの間に、というより明らかに悪魔に向かつて投じられた物体があった。

それは、カセットボンベだった。中身はプロパンガスなどが入っている市販の物だ。

それが手榴弾のように爆発した。

「く、わッ!？」

至近距離で爆発を受けたのに、エクレスシアにはなぜか衝撃はやってこなかった。

不意打ちを受けた悪魔三体が吹き飛ばされ、トドメとばかりにカセットボンベが無数に降り注ぎ爆撃が襲う。

「主任助手長、任務中ですが、援護します!!」

ふと、アビゲイルにそう呼びかけられた。

「シンシア!!」

援護したのは近くの民家の影に隠れていた女性だった。

真っ黒な首から足首まで覆う際どいボディスーツに白衣と言う格好だった。

「私だけではありません。」

彼女がそう言うと、同様の格好をした女性四名が周囲の民家から現れたのだ。

「術式“プロメテウスの火”を展開!!」

「魔力装填オーケー、術式の制御安定ッ!!」

「座標確定、終息領域を確定。」

「術式“プロメテウスの火”を発動ッ!! 消し飛ばします!!」  
突然後衛の悪魔に奇襲を仕掛ける。

四方から一つの大型の魔法陣を展開して、巨大な光が収束する。

そして、目も眩むような大爆発が起こり、二体の悪魔は木端微塵に吹き飛ばし、瞬く間に撃破してしまった。

「す・じゅ・じゅ」

完全に制御し尽くされた大爆発は、余計な余波など出さずに綺麗な球体を描くだけで消滅した。

エクレシアは絶句するしかなかった。

「超小規模な疑似的な核融合を発生させる魔術。

古来より神として崇められてきた太陽を極小で再現し、顕現させるこの大魔術に燃やし尽くせぬものはありません。」

シンシアは誇らしげにそう語った。

どんなに火に対する対策をしようが、そんなものはこの圧倒的な超火力の前には無意味であると言わんばかりである。

概念的にも最強クラス、単純ゆえに対策が出来ない火力だけなら地上最強レベルの大魔術であった。

ちなみにカセットボンベを投じたのは、プロメテウスはウイキョウウに火を隠したという伝承ともう一つ、作業場の炉の中にウイキョウ

(この場合、トウシンソウと描写されている場合が多い)を入れて火を点火して地上に持って行ったという伝承がある。

この魔術は炉〓焔炉〓カセットボンベ〓火種のカセットコンロと言  
う、連想ゲームみたいなじ付けである。  
だが、案外魔術なんてこんなもんである。

「太陽崇拜主体の術式ですか・・・。」

「ギリシア系も少々入っていますが、概ねその通りです。」

「なるほど・・・ん？」

すると、エクレシアは地面や周囲の民家がふにやふにやと“たるん  
で”いるのだ。

ここは影の世界なので、影だけの世界なのに疑似的とはいえ太陽の  
光があることに矛盾が生じ、“世界”を構築する要素が不安定にな  
っているのだ。

それも太陽の光が完全に消え失せると、元の形に何事も無かったか  
のように戻った。

「(というか、あの格好・・・あの人の趣味でしょうか・・・。)」  
エクレシアはアビゲイルの下に集まってきた五人の格好を思った。

「ご無沙汰です、主任助手長。」

そう言ってアビゲイルに傳くシンシア以下四人。

感情が希薄なアビゲイルより、彼女らの方が人らしく見える。

「はい。それは特殊任務用ステルススーツですね。極秘任務でしょうか？」

「ええ、作戦番号22564356、秘匿コード88956523です。」

「なるほど。しかし、その作戦は博士が決行しないと『カーディナル』の目の前で仰っていましたか？」

「それは主任助手長が補佐している博士とは別の博士です。」

「なるほど、博士らしいですね。」

「アビゲイルが頷くと、彼女を含めた六名が一斉にエクレスシアの方を向いた。」

「ひッ!？」

そんな機械じみた動きに、彼女は一瞬たじろいだ。

「ここで彼女たちに出会わなかった。貴女は何も聞かなかったし、何も見なかった。オーケー？」

「オーケー?」「オーケー?」

「.....」

どうやら、聞いてはいけない類の話だった。

一斉に彼女たちの指先がエクレスシアに向けられている。

断ったらレーザーで蜂の巣にすると言わんばかりだった。

「.....神は真摯な私の祈りに耳を貸しておられたので、御方はきつと余所見をしてください。」

遠まわしに、私は何も見て居なかったし聞いても居なかったし神もそうだろう、と自己完結する為の定型文だった。

今のような小事より大事を優先する場合、協力者の悪事とかを例外的に見逃す場合に使う。

魔術師の業界、こんな利害一致での共闘は、案外多かったりするの  
でエクレシアは割り切ることにした。

「では、この世界にこれ以上留まるのは得策ではないので、地上か  
ら進路を取りましょう。

精霊区なら悪魔の駆逐は終えているので、中央の昇降魔法陣まで最  
短距離で行ける場所まで移動しましょう。」

「・・・わかりました。」

危険なのは貴女でしょう、とまで言うほどエクレシアは豪胆な性格  
ではなかった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ぐわん、と漆黒の世界から見慣れた地上の風景へと戻る。

歪んだ平衡感覚が戻ると、教会区画に比べて植物などの緑が多いこ  
とが目につく。

間違いなく、精霊区画のようだった。

教会区画の方には、区画すべてを覆うように瘴気が渦巻いている。

瘴気の内部から脱出するのは成功したようだった。

「もたもたしてられません。行きましょう。」

「はい。」

アビゲイルはこくりと頷いた。

だが、次の瞬間、だっただっだ、と瘴気の中から無数の悪魔が出現した。

十体、二十体、まだまだ増える……！！！！

「マズイ、逃げましょう。」

緊急事態にも関わらず、アビゲイルは淡々とそう言った。

「くッ、タイミングが悪い……！」

愚痴を言う暇もない。

エクレシアはそう思いながら駆け出した。

しかし、悪魔の軍勢が放つ魔弾が豪雨のような密度で降り注ぐ！！その弾幕は、もはや壁としか言いようが無いだろう。

「術式、“電磁障壁”を展開、効力規模最大。領域計算……完了。」

全速力で走っているにも関わらず、カタカタとノートパソコンのキーボードを弄っていたアビゲイルが指を鳴らすと、無数の魔弾が一

音に火花を散らして爆発した。

強烈な電磁気が空間を振動させ壁を作り、そこを通った魔力は電磁気の影響を受けて変質し、不安定になり自壊するのである。

しかし続く第二射の魔弾が無数に放たれる。

今度は牽制の弾丸だけでなく、砲撃クラスの魔術攻撃が次々と飛来する。

魔術砲撃が電磁障壁を突破して突き進むが、電磁波の影響で照準が逸れて二人の周囲に着弾する。

まるでハリウッド映画の爆破シーンさながらの中を、二人は駆け抜ける。

「うっ!？」

だが、不意にアビゲイルが足を止めて地面に両手を突いた。

「どうしました、・・・かッ!？」

エクレシアが振り向くと、彼女は目を見張った。

アビゲイルは黒い靄みみたいなモノに纏わり付かれ、今までピクリともしなかった顔に苦悶の表情を浮かべていた。

「呪詛ッ!？」

エクレシアは自分の甘さに齒噛みした。

相手は悪魔なのだから当然のように遠隔間接攻撃をしてくるのだ。



エクレシアは神の僕なのでその加護を受け、邪悪な呪いや呪術に対して強い抵抗力を持っている。  
彼女の運命は神が握っているからだ。

だが、アビゲイルはどこかの神を信じているようには見えない。  
神の力を基にしていない系統の魔術師は、そう言った抵抗力を得るのは難しい。

だからあっさり呪詛攻撃を受けたのだ。最悪、ただの一般人並みの防護しかない場合もある。

ただの一般人並みの防護力なら悪魔の呪詛を受けた直後に即死するだろうが、流石に彼女ほどの魔術師は自身の魔力で外部からの魔力干渉に抵抗に集中しているので、瞬く間に生命力を奪われて即死には至らなかった。

しかし、多数の悪魔が迫ってきているこの事態では、何が違うというのか。

エクレシアなら時間を掛ければ解呪デイスベルできるが、そんな暇など無いことは誰よりも知っている。

「行ってください……。」

「いいえ、呪詛を行っている悪魔を倒します。」

もはや彼女を助ける方法はそれしかない。

「行けえええッ！！ 私に、任務失敗の汚名を着せる気が……！」

「で、ですが……。」

呪われて今にも激しく消耗していると言うのに、アビゲイルは凄まじい形相でエクレシアを怒鳴りつけてきた。



「これより先はー、このエクレール様がエスコートするからー、でめーらみたいいな不細工ツラの野郎は帰ってくねーかな？」

きつと本人は格好いいと思ってるだろうポーズを決めて、エクレールと名乗った男は言った。

ドヤ顔だった。エクレーシアが一番嫌いな軽薄な手合いだったので、段々半眼になっている。

「やあやあ、騎士のお嬢さんと知的なお姉さん、俺と一緒に“精霊宮”の庭でお茶しないかい？」

「御断りです！！」

エクレーシアは声を張り上げてそう言った。

馬鹿の登場に悪魔たちも呆気にとられているようだった。

しかし、それも束の間で、悪魔たちはエクレールに先ほどの返答を無数の魔術で返した。

「邪魔すんじゃねーよ。」

エクレールはスピーカーカーを置いて、背負っていたギターケースを開けた。

その中に入っていたのは、意外にも普通にエレキギターだった。

この業界、ギターケースに入れるのは剣を始めとした得物や表に持ち歩けない物ばかりだからだ。

手慣れた様子で稲妻を模したエレキギターのアンプをスピーカーカーに接続すると、じゃーん、弦を鳴らした。

その直後、色とりどりの光源が無数に現れたのである。

「可視化された、精霊!？」

精霊と言うのは本来目に見えないほど希薄な存在である。

それを見るには特別な才能が必要であり、エクレシアはそれには恵まれなかった。

だが、そんな彼女にでも普通に見えるほど活性化した精霊が周囲に夥しいほど出現したのだ。

「俺の歌を聴けー!!」

エクレールが激しくエレキギターをかき鳴らす。

それに呼応するように、周囲の精霊が一斉に明滅し、

半径数十メートルが、雷撃で埋め尽くされた。

「!!」

轟音で、耳がおかしくなりそうだった。

かろうじて強烈な光から右腕で目を守ったが、あまりにも凄まじい光に視力がまだ戻らない。

数秒ほど目をぱちぱちさせると、ようやくエクレシアの視界が戻った。

精霊魔術の利点は、精霊を介して自分の限界より大きな力を発揮できる点である。

今のように多数の精霊と契約できる自分の陣地における防衛戦闘では、特筆すべき戦闘力を発揮することができるのである。

ただでさえ、自分の人知で周到に準備すれば魔術師は実力の三倍までの相手と戦えると言われているのに、彼ら精霊魔術師は更に防衛戦が得意なのである。

悪魔を教会区画から一匹も撃ち漏らしていないのは、この防衛力の賜物だろう。

「大丈夫かい、お嬢さん方？」

エクレールがアビゲイルに手を差し伸べてそう言った。

「大丈夫、です……。」

「オーケーオーケー、お嬢さん方が無事で何よりだ。」

自力で立ち上がったアビゲイルを見て、エクレールは軽薄そうな態度とは別に子供のように笑った。

とても、この辺り一帯をぐちゃぐちゃにした男には見えなかった。

「俺は『魔導老』が配下、エクレール。」

まあ、そのうちあの爺には隠居してもらうんで、覚えて置いて損はない名前だぜ？」

そんな冗談を言ってエクレールは場を和めようとしたのかもしれない。

しかし、なごんでいる暇はなかった。  
ばっばっば、と更に悪魔が瘴気から飛び出してきたのである。

「ったく、これだからヤンキーどもは。」

マジで空気が読めねえんだから。      おい、皆。」

きゅいーん、とエクレールはエレキギターを鳴らした。

すると、精霊が活性化して可視化され、すぐに消失した。

「精霊の加護を付与したぜ、これでしばらく呪詛を弾ける。」

「……急いでいるんだろっ、お嬢さん？」

「私を手助けする義理も筋合いも無いでしょうが？」

助けられた上に饞別までくれたと言うのに、アビゲイルの態度は冷たかった。

二人の上司というか、『魔導老』と『プロメテウス』の不仲は末端のエクレシアも知るところである。

「俺も魔術を研究する身でね、それで一つ真理を見つけたのさ。」

困っている女性に手を差し伸べない理由なんて存在しないってね。」

気障ったらしい台詞回しで、彼はそう言った。

「さあ、行きな。俺をヒーローにさせてくれ。」

お姫様を追う無粋な悪者は、俺が焼き殺してやるよ。」

「礼を言います。」

エクレシアはそれだけ言うと、アビゲイルと共に走り出した。

エクレールはというと、

「俺様、かつくいー。」  
自分に酔っていた。

「んじゃ、まあ、仕事を続けますかねえ。」  
轟音が止む気配は、まだまだない。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

対魔術戦闘に置いて、基礎の基礎の戦略として土地を使わせない、  
というものがある。

分かりやすく言えば、地脈霊脈の類の地下エネルギー資源を使用し  
た大魔術を相手に使わせてはいけない、と言うことである。

悪い魔術師が堂々と悪い面をふんぞり返らせて居られるのも、これ

に先ほど説明した三倍の法則が適用されるからなのだ。  
だから騎士団の工房攻めは、陣地取りゲームみたいなものである。  
場合によっては、何年も掛けて、最悪そこに町があっても土地を枯  
らしてから攻める。

当然、町は滅びる。

地脈の中心は土地が肥えており、人はその上に町を作る傾向が多い  
からだ。

いずれ魔力が枯渇し、廃れるのだ。

何が言いたいかというと、戦術的戦略的にも悪魔がこうやって瘴気  
を使い、地上を無理やり奪い取るという方法を使うのは、当然なの  
である。

「うっ!？」

二人の前に、熱い瘴気が発生して、爆発的に周囲に拡散した。

足を止めた二人の前に、ゆっくりと三体の悪魔がケケケと笑いなが  
ら下りてくる。

エクレシアはとっさにアビゲイルの前に出て彼女を庇った。

悪魔の一体が人間の反応速度よりずっと早く弾幕を形成して射出し  
てきたのだ。

だがそれは飽くまで牽制に過ぎず、本命は残り二体が僅かに遅れて  
使用してきた束縛弾だった。

両手の握りこぶしを合わせたくらいの大きさの悪魔の言語がびっし



り刻まれた魔術弾が二人の足元に着弾すると、効果範囲に居た二人は呪詛が刻まれたロープみたいな魔力の縄で一瞬にしてぐるぐる巻きにされていた。

鮮やかな手口だった。

嫌らしいほど堅実で、確実性の高い方法である。

世に言う悪魔のイメージとは違うかもしれないが、悪魔とはこういう連中なのだ。

「ククク、我ラ、悪行成就セリ・・・」

「速ク契約主二届ケネバ・・・」

淡々と、悪魔は言う。

きっとそこには人間には計り知れない感情があるのだろう。

口も防がれて地面に転がされているエクレシアに、それを斟酌するつもりはなかったが。

「クククク、才前ハ我々ヲ悪魔ト蔑ムガ、ワタシハ哀レデナラナイ。覚悟スルガイイ。アノ女ハ、オマエヲ所望ダ。奴ハ貴様ヲ言ウ悪魔ヨリズツト残虐ダ。我々ノ悪行ハ生キル為ダガ、アノ女ハソウデハナイカラナ。」

ぐぐぐ、っと悪魔はエクレシアの顔に近付いてきて、耳元でそう言う。

それは恐怖や悲しみと言った負の感情を煽り、食らう為の言葉である。

エクレシアは屈しなかった。

「イイ目ダ。希望ガコノ世ニ存在シテイルト、本気デ思ツテイル目ダ。」

オマエノソノ美シイ心ヲ挫キ、無残ニ碎クノガ私デナイノガ、残念デナラナイ。」

「無駄口ヲ叩クナ。」

「アア、コンナ強制労働ナド早く終ラセルニ限ル。アンナ、人間ガ言ウ悪魔ミタイナ女ノ元デ働クノハ割リニ合ワナイ。」

「ダガ、楽シイデハナイカ。」

「アア、マツタクダ。」

クケケケケ、と、悪魔たちは表情を変えずに笑い声を挙げる。

恐怖を煽るためだと分かっているにもかかわらず、エクレシアは戦慄するほかなかった。

悪魔の一点において、極大の信用が置けることがある。

そう、悪魔は決して嘘を吐かないのだ。

と言うより、嘘を吐く、という概念が無い。

存在そのものが人間より高位な彼らは、人間に対して何かを偽るということを理解できない。

知識で知っていても、それを実行する理由が無いし、長期的に見て不利益にしかないからだ。

この世の伝承のありとあらゆるものがすべて正しく伝えられていないように、それは揺るぎ無い事実なのだ。

しかし、今は事実よりこの状況の打破だった。

必死に束縛術式の解呪をしているが、スパコンで作った暗号文に古

いPCで挑むようなものだった。  
スペックそのものから違いがあり、何よりこの状況が不味かった。  
捕らわれの身でなければ、対策はいくらでもあるのだが……。

「はい。」

絶対絶命の危機的状況で、妙に軽い声が聞こえた。  
エクレシアには、聞き覚えのある声だった。

「第二十八層がヤバいつて聞いて、助けにきたわよー。」  
全く探したわー、とその人物は悠々と姿を現した。

人生全てを楽しんでいそうな笑みを浮かべた女だった。  
左手にバタフライナイフと、左腕に軽機関銃を抱え、古めかしい仕  
立ての黒衣を纏っている。

彼女は、

「(クロムさん!?)」

なんでここに、とエクレシアは目を見開いた。  
彼女のあまりの神出鬼没ぶりに驚いたのだ。

「ちなみに、ここではアイマ・イミーメインと名乗ってるわ。  
千の偽名を持つ女……ミステリアスで素敵でしょ？」  
まるでエクレシアの心を読んだようなタイミングでクロムは言った。  
しかし、絶対何も考えてないだろうなあ、とエクレシアは思った。

「んー!! んー!!」

そんなことより、エクレシアは悪魔が目の前に居るので必死に彼女に危機感を訴えようとした。

この後に及んで助けを求めようとしないうあたり、彼女は実に真面目な人間だった。

「あつはつは!! なにそれ、海老の真似!? おかしー!!」

動画取っちゃおう、とか言ってバタフライナイフを持っている手で器用に携帯電話を取り出してエクレシアに向けるクロム。

緊張感なんて彼女には無かった。

「(なんで逃げないんですか!!)」

錬金術師の彼女に、悪魔の相手は荷が重い。

というより、相性が悪い。錬金術師なんて自分は神様より三倍すごいとか頭悪いこと平気で言っちゃう選民主義に凝り固まった連中である、と言つのがエクレシアの認識だ。失礼である。

実際クロムもそんな人間だし、神様の加護が無ければ悪魔の呪詛を防ぎようがないのだ。

とにかく必死で、エクレシアは悪魔たちを盗み見る。

すると、なぜか彼らは不思議そうな、どこか困ったように小首を傾げて、小声で何かを話し合っていた。

「どうしたの? やらないのかしら、悪魔さん?」

「許可ガ下リタ、殺ス。」

「そつでなくちゃね!!」

クロムは楽しそうに笑って、バタフライナイフを投擲した。



だから木端微塵、胴体が原型を留めず、悪魔の体が地面に撒き散らされた。

銃自体だけでなく、弾丸一発一発にも明らかに呪術が施されていた。丁寧にも、今ので撃った軽く百発近いだろう弾丸全てに。それだけで札束を相手に投げているようなものだった。

「ごめんねー、ここじゃ上から使う銃器の制限をされてないの。」

手加減もできる相手じゃないし、私も痛い嫌だから。一方的にやられて死んで欲しいの。」

「粹ガルナ!!!」

クロムの態度に悪魔も相当ご立腹の様子だった。

一瞬で牽制の魔弾が無数に放たれる。

クロムは惜しみなく軽機関銃で弾丸をばら撒いて、次々と魔弾を撃ち落としていく。

コストの面でまともな神経をしているならこの時点で発狂している。しかも、位置取りを調節してちゃんと弾丸が悪魔に向かうようしているのだから、彼女はまともな神経はしていないようだった。

それで、悪魔は防戦一方だった。

魔弾で牽制しているが、クロムの軽機関銃の威力が馬鹿げているため障壁を張って守りに徹している。

多分本気で張っているだろう悪魔の障壁が、がりがり削られているのが目に見える。

無理に防いでいるので、悪魔本人に多大な負荷が掛かっているのが丸分かりだった。

悪魔はオペラ『魔弾の射手』でもあるように、人間の銃器を知っているはずなので、彼は弾切れを狙っているはずである。

しかし、それはいくら待ってもこない。

もう軽く二千発は撃っているだろうに、一向に弾切れは来ない。

彼女の足元には、うず高く空薬莖が積み重なっていく。その質量はすでに銃の本体を上回っていた。

クロムは暇になった左腕でクロスボウを装填した。

具体的には、わざわざ左足の足首の上にベルトでフラスコが何本かセットされており、左足だけで左腕のクロスボウの装填を出来るようになっていた。

そう、軽機関銃で銃撃しながら、左足を上げて左腕のクロスボウを装填したのである。

随分と器用なマネである。

クロスボウに装填されているフラスコが、射出される。

対象は、今銃撃している悪魔ではなく、最初に聖水を浴びた悪魔である。

分身体ならまだしも、聖水を浴びたくらいで本物の悪魔が怯み苦しみはしても倒すことなんて簡単ではない。

一時的に無力化したにすぎないのだ。

とは言っても、いかな聖水と言えども、正しい聖職者が正しい使い方しなければ、その効力はガタ落ちする。

悪魔の復帰は早かった。今度はあっさりと聖水入りフラスコは魔弾

で撃墜された。

そこからその悪魔は驚異の身体能力を發揮して跳躍、殆どクロムの真上から強襲を仕掛けたのだ。

「あ……。」

難なく回避してみせたクロムだったが、悪魔の一撃が地面をたたき割り、その衝撃で地面が揺れ、バランスが崩れて、彼女は尻もちを突いてしまったのだ。

必殺のタイミングだった。

尻もちを突いたことでクロムの持つ軽機関銃の銃口が明後日の方を向いていた。

それを悪魔に向けるまでの取り回しは、どんなに銃器を改造しようと覆らない“間合い”の問題であった。

悪魔の剛腕が、クロムの首をへし折らんと振るわれる。

そんな状況でも、彼女は、

「実はこれ、魔剣なのよね。」

悪魔より悪魔らしい笑みを浮かべていたのだ。

悪魔が殴りつけたのは、クロムの頭ではなかった。

彼女を守るように出現した、十本束になって剣山のようになったバタフライナイフだった。



「これ、一本に見えるでしょ？ 実はね、これ、“百万本”なの。」  
次の瞬間、悪魔は銀の洪水に押しつぶされた。

その全てが、彼女の左手にあったバタフライナイフ。  
全身串刺しとは、このことだった。しかし、その圧倒的な質量の  
前に、その惨状を目にすることはできなかった。

ただ、夥しいナイフの山の下から流れ出る悪魔の血が、彼の状況を  
物語っていた。

「あつははははは、これ分かる？ ヘルメスの靴のレプリカ。これ  
履いているのに、転ぶ訳ないじゃない、悪魔の癖にどつという目をし  
てるのよ！！ あははははは！！！」  
くるん、と体に力を入れた様子のも無いのに、立ち上がって腹を抱  
えて悪魔をあざ笑う女がそこに居た。

エクレシアはその惨状を見て理解した。  
妙にプライドが高い彼女が、下層である彼と自分によく手を貸すの  
か。

それは簡単な話だ、彼女は本気を出したら強い。かなり強い。  
手加減していたとはいえ、負けたのが許せないし、ましてやその相  
手の片割れが殆ど素人だったのだ。彼女のプライドは、痛く傷付い  
たことだろう。

超が付くほどの完璧主義者、珠に瑕が許せない彼女は、自分が雑魚  
の雑魚に負けたことを許せないのだ。自分が誰かに劣ることが、文  
字通り死んでも許せなかったのだ。

だから、彼女はあの『マスターロード』から許可を取ってまで、あの地獄の底までやってきたのだ。

「これだから下級悪魔は、くっふふふふふ……」

クロムは、軽機関銃の銃口を残った最後の悪魔へ向けた。

悪魔は状況不利と悟ったのか、翼をはためかせて飛び去って行った。

「ざーんねーんでしたー」。

このコスト度外視の我が最高傑作、『魔弾の射手（Der Freischütz）』の精密射撃モードの最大射程は、二キロです。

「かちやり、と銃身にある小さなレバーを回して、悪魔が消え去った瘴気の向こうへ銃口を向ける。」

一秒足らずのマズルフラッシュ、それだけでクロムは銃口を下した。結果は、聞くまでもなかった。

「だいじょうぶー？」

クロムがバタフライナイフ型の魔剣で束縛魔術の縄を引き裂いていく。

「あ、ありがとうございます。」

口が自由になったので、とりあえずエクレシアは礼を言った。

気に食わない相手ではあるが、助けられたのは事実だったのだから。

「いいのよー、貴女には期待しているんだから。借りは体で支払ってもらいわ。」

クロムはちっとも変わらない笑みで言う。

「……エクレシアは心の底から後悔しかけた。」

「不覚を取りました、すみません。」

「いえ、こちらこそ……危なかつたです。」

クロムが縄を引き裂き、エクレシアがアビゲイルを助け起こした。

その時、エクレシアは二人が一瞬目配りしたのを、見逃さなかつた。だが彼女は純粹な人間だつたので、知り合ひだつたのかな、と思うだけだつた。

「それより、行きましょう。」

「ちよつと待つて、実は昇降魔法陣なんだけど、悪魔が拡散しないように封鎖されちゃつたらしいのよ。」

「なんですつて……。」

「大丈夫大丈夫、実は今日、あと五時間後に避難民の最後の転移が行われるらしいのよ。現在防衛線の真つ最中だけど、当然行くわよね?」

「勿論。」

エクレシアは即答した。

クロムも満足そうにうなずいた。

だがしかし、それを許さない存在が居た。

ばっばっば、と悪魔が再び現れたのである。  
もう何度目か、エクレシアも忘れてしまった。

「私が殿を務めるわ、先に行つて。こいつら、撃ち殺してから合流  
しましょう。」

「では、この地点で。」  
アビゲイルがパソコンを開いて、表示された地図のある地点を指さ  
して見せた。

「オツケー、さっきこの辺に悪魔がいつぱい居るって精霊魔術師の  
連中が騒いでたから、結構楽に行けると思つわ。」

「分かりました、御武運を。」  
エクレシアがそう言つと、彼女はアビゲイルと共に瘴気の向こうへ  
走り去つて行つた。

「ふう………」  
クロムは二人が見えなくなると、深く溜息を吐いた。

「ちよつとお……聞いているんでしょ？ 話が違つじやない。」  
そして、両手を無防備に垂れ下げて、先ほどの笑みが嘘のよう  
に曇つた。

すると、悪魔の一体が彼女の目の前に下りてきて、「こつ言つたのだ。

『え、だって、叩きのめしてやってって言ったの、メリスじゃない。』  
『どちらかと言うと男性的な顔立ちのデーモン種の悪魔から、若い女の声が発せられた。』

「ちーがーうーわーよー!!」  
クロム・・・否、メリスは眉を顰めて否定した。

「私はね、何だか元気無さそうだったから、喝を入れるために悪魔をバサーっと倒さしてね、自信を付けさせてあげようと思っただけよ。」

それがどうしたらこんなバイオハザードみたいになってるのよ!!」

『あれ？ そうでしたっけ?』

悪魔の口からどこかとぼけたような声が聞こえた。

きつと素で言っているのだろう、とメリスは思った。

悪魔を介して話をしている相手は、長年の付き合いがあるのだった。

『私に聖職者をどうこうしろって言われたら、最終的には廃人にするに決まってるじゃないですか。あははは、だって私、悪魔崇拝者ですよ?』

何を当たり前のことを言っているのだ、という態度だった。

「完全に人選ミスだわ。もうちょっとドラマチックな演出できる相手にすればよかった。」

メリスは額に手を当てて首を横に振った。

「でも、だからと言ってここまですること無いじゃない。

私、師匠に殴られたわよ。どんだけ損失だしたと思ってるのよ。誰が貴女の身分を保障してあげてるか、理解してるの？ 恩を仇で返された気分だわ。」

『あー、『盟主』に・・・それは気の毒な事をしましたね。

ごめんなさい、メリス。貴女には言うべきでしたね。でも、これは個人的なことで、貴女を巻き込むと迷惑を被ると思ったので黙ってたのです。

だから、貴女の頼みとは全く関係ないですから、貴女が責められる言われが無いので安心してください。』

実に理知的で、まともな対応である。

理知的に、まともでありながら、彼女は狂っているのである。

「あら、そうなの。だったらさあー。」

メリスはふと、どこか怒ったようにそう言つと、

「　　なんで、私も誘ってくれなかったのよ。」

ゾツとするような狂気を湛えた笑みを浮かべていた。

「ねえ、私と貴女が居て、出来なかったことは今まで何か一つでもあったかしら？」

ねえ、リネン。私と貴女は、親友じゃない。そんな私が、貴女の相談に乗らないはずが無いわ。なんで一言も言ってくれないのよ、悲しいじゃない。」

『貴女のそういう情が厚くて義理堅い所は大好きですよ。』

「私も、今の私が居るのは貴女のお陰だもの。」

貴女の力は本当に助かってるわ、下層の魔族の領域に堂々と歩けるように『マスターロード』に話を付けてくれたの、貴女だもの。

この銃だって、貴女が紹介してくれた上級悪魔の技師の力を借りなかったら出来なかったわ。」

『悪魔の技術を再現してしまう貴女の方がどうかしてますよ。』  
それより、と悪魔の向こう側の彼女は言った。

『さっきの女の子、やっぱり私に任せてくれませんか？』

「駄目よ、貴女絶対に壊しちゃうもの。」

私が居れば肉体が駄目になるうと大丈夫だけれど、貴女が壊すの心だもの。悪いけど、それに関しては貴女の趣味の悪さには付いていけないわ。」

『あはははは、理解してもらわなくて結構ですから。』

大丈夫ですよ大丈夫、ちゃんと手加減しますって。だいたいこんな場所くらい、本気になればすぐに制圧させるのは簡単なんですよ？ただ、本気にさせたくない相手がいっぱい居るので無理ですが、と彼女は付け加えた。

「じゃあ、いざとなれば私が横やり入れるけれど、良いわね？」

『貴女の邪魔をしてまで、私は自分の楽しみを優先したいとは思いませんよ。』

「なら、良いわ。」

メリスは頷いた。向こう側に居るのは、この世で最も信頼してはいけない人種たる、悪魔崇拜者。

しかしながら、彼女が絶対に嘘を吐かないのは、メリスは知っている。

なぜなら彼女は、嘘を吐くと言うことを、悪魔に差し出してしまう

たのだから。

「ちゃんと、喝を入れて、自信を付けさせてよね。リネン。」  
と、厳命するメリス。

「分かってますよ、メリス。」  
だけど、悪魔を介して彼女に話しかける女は、言わなかった。

「メリス、貴女ってば空気読めないから、誰かの気を使うといつも失敗するんですよ。」  
と。

彼女は、悪魔崇拝者。

嘘なんて吐けなくても、人間は幾らでも人を欺けるのである。

その名は、リネン・サンセット。

趣味、聖職者を生かさず殺さず鬪って楽しむこと。

最高最悪の錬金術師の親友らしく、人類に牙を向いたこともある最悪の魔術師である。

人間の苦しめる方法なんて、誰よりも熟知しているのだ。

「それじゃ、どうしてこんなことをしたの？」  
そして、メリスは今回の一件の核心を問いただす質問をした。



『実はですねえ……。』

子供が悪だくみを伝えるように、どこか楽しそうに小声になって、リネンは親友に今回の一件の原因を伝えた。

第二十七話 最悪の女（後書き）

ちなみに、私の書く作品は主人公が空気になるのはよくあることです。

## 第二十八話 エクスキューション

「やっとここまで来れましたね。」

エクレシアとアビゲイルは、中央の昇降魔法陣に直線で最短距離の地点までたどり着くことに成功した。

エクレールが引き受けてくれているからか、予想以上に悪魔に遭遇せずに済んだ。

途中先回りして来る悪魔に遭遇しても、『魔導老』配下の精霊魔術師が瞬く間に駆けつけて対応してくれたことも大きい。恐らく、彼が話を付けてくれたのだろう。

「後は彼女を待つだけですな。」

「はい。」

エクレシアは頷いた。

しかし、待つてるだけでは間が持たない。

アビゲイルは必要が無ければ何も言わないだろうが、それではエクレシアは居心地が悪かった。

適当に話題を探し、そう言えばクロムさんと知り合いなんですか、と声を掛けようとした。

「うーん。」  
すると、向こうから歩いてくる人影があった。

「あの、ここは危険ですよ。どうかしましたか？」  
悪魔が化けているという風でもないし、なにやら困った風に唸っているので、エクレシアは声を掛けることにした。

「あ、ああ、騎士さんじゃないか。いやあー、助かったよ。  
実はこの辺りに人が居なくなっただけで困っていたところなんだよ、どこか人が居る所はわかるかな？」

「これから昇降魔法陣へ向かって下層へ行く所なのですが、そこに避難してください。どうやら最後の転移が行われるそうですから。」  
エクレシアがそう言うと、彼女はにっこりと笑ってそう言った。

「あ、ありがとうございます。」  
思わず照れるエクレシア、彼女が照れるくらい、その女性は美人だった。

しかしながら、その美人さが台無しになるくらいの絵の具だらけダボダボの作業着姿で、これはこれで良いと言う人もいるかもしれない、とぼんやり考えるエクレシアだった。  
だが、彼女は終始気付かなかった。

彼女のどこがどう美人で、何が美しいのか。全く分からなかったのだ。  
それに気付いたのは、後ろから見ていたアビゲイルだけだった。

「私たちも行くので、よろしければ一緒に行きましょうか？」

「いやいや、それには及ばないよ。」

あはははは、君たちの戦いを邪魔するわけにはいかないからね。」  
そう言つて頭上のベレー帽を抑えて一礼し、彼女は持っていたカンバスを抱え直して、瘴気の中に歩いて行った。

「あ……え？」

危ない、とエクレシアが追いかけてよつとしたが、後ろからアビゲイルが彼女の手を掴んだ。

「彼女は、大丈夫でしょう……。」

「え？ は……はあ……。」

アビゲイルはなぜか視線をそらして躊躇いがちにそう言った。

エクレシアは彼女の意図が分からなくて戸惑ったが、クロムとの待ち合わせもあるし、ここまで中央までそう遠くないので大丈夫かと納得することにした。

「いやー、待たせてごめん。」

ホント、途中で精霊魔術師の連中が来なかったら手古摺ったわー。」  
そして、ほどなくしてクロムが軽機関銃を抱えたまま走ってきた。

「無事で何よりです。」

「じゃあ、いきましょか。私のことなら気を遣わなくて良いわ。下級悪魔なんて欠伸が出るほどぬるい連中だったわ。」  
言うだけあって、クロムは汗の一粒も掻いて居なかった。

「分かりました。行きましょう。」

「はい。」

アビゲイルに促されるまでも無く、エクレシアが歩みだそうとした。

「うあーう、あーーー。」

しかし、その時、近くの木の下の方から呻き声のようなものが聞こえてきた。

茂みがあるので姿は見えないが。

「怪我人ですか!？」

治癒魔術が得意なエクレシアは戦闘後には救護係に混じって負傷者の治療を手伝っていた。

性分なのか職業病なのか、思わず彼女はそう言って振り向いた。

「あ、お構いなく。疲れて愚図ってるだけなんで。」

「そうですか、分かりました。」

「早く生きましょう。」

茂みの向こうからそんな明るい声が聞こえて来たので、クロムに急かされたこともありエクレシアはあっさりと頷いて待たせていたアビゲイルと共に瘴気の中に踏み行った。

一方、茂みの向こう側では……。

「あー、あー、うあー。」

「はしたないですよフウセン。ちょっと静かにしてください。」

そこには、寝転がっている“処刑人”フウセンと、下敷きで彼女に風を送っているフウリンが居た。

どちらも近くに学生カバンが置いてあり、いかにも学校帰りの学生である。

「だってフウリン！！ あいつらのせいで、ウチ、補修サボってきたんやで？」

中間試験で赤点取ったら魔界に行つてあいつら皆殺しに行くで。つか、それよか、担任に補修サボった言い訳考えるんの手伝ってくれへん？」

「普段から居眠りしているのが悪いんですよ。」

何のために『盟主』がわざわざ学校に通つても良いと言ってくれたと思つているんですか。フウセンは彼女の恩を仇で返すつもりですか？

「せやかてえ、勉強つて将来就職する為にするもんやろ？」

せやったら、ウチらはもう就職先決まつてるようなもんやろ、勝ち組や、勝ち組。」

「いや、そうではなくてですね。魔術を学ぶためには基礎的な学力を、と『盟主』はわざわざ……。」

「あーもう、わかっとなるがな！！」

あまりにもうっとおしいと感じたのか、フウセンは大声でフウリンを怒鳴りつけた。

「ウチかて、ぎょーさんやることあるんよ。ウチの魔力、制御するのにどれだけ苦労しと思うてんねん。」

ウチだって友達と遊び回りたいし、買い物もしたいんや。狭苦しい所でじつとしてるなんて、耐えられるかアホ。」

「友達……居るんですか？」

「黙つときい！！　しかたないやろ、こっちの仕事も忙しいんやから。」

「……………」

フウリンは、複雑そうな表情で彼女を見つめた。

「あーもう、この世の全部木端微塵にぶっ壊してやりたいわ。」  
「洒落になりませんよ……………」  
フウリンは苦笑いで返すことしかできなかった。

すると、その時、フウリンの学ランの内ポケットから軽快な音楽が鳴り響いた。

携帯電話の着信音だった。最近、ある錬金術師がこの“本部”に基地局を作ったとかで、普通に通話もメールもできる。テレビも普通に見られるらしい。  
魔術的なジャミングの効力がある瘴気の影響を受けずに連絡する最上の手段だった。

フウリンはすぐに携帯電話を取り出して、画面を見た。

「おや、ロイドさんからだ……………はい、もしもし。」

『助けてくれ！！　殺される！？』

「ロイドさん！？　大丈夫ですか？　今すぐ助けに行きますから、状況と場所を教えてください！！」  
「何やら切迫した空気に、フウリンは動揺して声を荒げた。

『サイネリアの奴、ムチャクチャだ！！』

あのアマ、呪詛の盾代わりに俺を使っただ！！　死ぬ、死ぬうっうう！！！！！！」



電話から、ぶんぶん、と風を切るような音が絶え間なく聞こえてくる。

彼の声に重なるようにフウリンも聞いたことが有るアニメの主題歌が聞こえてくる。熱唱しているのはサイネリアだった。

「流石、人呼んで“暴虐の使徒”。。。

余所から拝見するのは初めてですが、これは凄まじい。。。。」  
すでにフウリンは二人の場所を、携帯電話を通して捉えており、その場所を遠見することに成功していた。

「大丈夫そうですね。。。。助けに行きますか、フウセン？」

「どんな感じなん？」

「ええと、そうですね。」

フウリンはその辺の道端を選んで、カバンの中からペットボトルに入ったミネラルウォーターをぶちまけた。

それで出来た水たまりの円周をなぞる様に、醜悪なイモムシの姿をした悪魔の化身が喰らい進む。

そして、一周するように虫食いが出来上がると、そこに有った水たまりが別の場所を映し出したのだ。

「あー、これはたしかにキツツイわあ。。。。」

のっそりと起き上がってフウセンはその虫食い穴を見下ろした。

文字通り、ロイドが盾にされていた。

ひらひらフリフリ魔法少女のコスプレをしたサイネリアが彼を左

手に掴んで、縦横無尽に飛んだり跳ねたり、獅子奮迅の圧倒的な戦闘力で何体もの悪魔を物ともしていない。

ただ、ロイドからしたら急加速と急停止が何度も行われてシェイクされているような状態だった。

「そか、サイネリアちゃんって物理魔術が専門やったな。ほなら、呪詛に対する抵抗力はペラッペラの障子紙やもんない。」

「だからロイドさんと組まれているんですよ、彼女は。

彼女もフウリンのように持ち前の魔力で弾き返せるなら苦労はしないでしょうが。」

「ウチは魔力よりサイネリアちゃんの頭がええわ。

あの娘、物理演算めっちゃヤバいんよ。未来予知並みやで。こないだ数学の宿題手伝つてもろたら、見ただけでゼーんぶ……。」  
ふと、長い付き合いのフウリンは、フウセンの頭の上にピカーンと電球が光ったような幻視をした。

相棒が余計な浅知恵を絞り出したのが目に見えたのだ。

「あー、ロイドくん？ サイネリアちゃんに代わってーな。」

フウセンは今だに何かロイドの声が聞こえてくる携帯電話をフウリンからひったくると、耳に当てた。

『……はい フウリンちゃん元気ー？

私の魔法で貴女のハートに（、、）（、、）……

…ズッキューン！！

今日は悪魔なんかと戦っています、魔法少女サイネリアちゃんです

よー」

やたらきゃぴきゃぴした声色のサイネリアの声が電話越しに聞こえて来た。

普段は暗くてぼそぼそしか話さない彼女から想像もつかない。

「相変わらずスゴイキャラしてんなあ・・・。」

それよか、ウチにええ考えがあるんやけど。乗るかいな？」

『いいよー！！ フウセンちゃんには素質が有ると思うな』

今度、私のお古・・・ごほん、この間妖精さんから貰った変身アイテムがあるから、一緒に変身してこの世の悪と戦いましょう」

「いやあ、それは堪忍してほしいわあ・・・。」

フウセンがそう呟くと、向こうで肉が潰れるような音が聞こえて思わず携帯電話から耳を離れた。

虫食い穴にはしっかりとサイネリアが悪魔を片手で捻り潰した姿が映っていた。

水風船が破裂したように悪魔の返り血が彼女に降りかかるが、彼女は一切汚れていなかった。

『うげえ！！』

ただ、首根っこを掴まれているロイドは彼女の力の恩恵を全く受けておらず、頭から返り血を浴びてむせたようだった。

「なんや・・・これ以上はロイド君が可哀そうになってくるわ。」

・・・おい、フウリン、なんやその人のこと棚に挙げてなに言うてるのやって顔は。」

「それより妙案があるのでしょ？ 早く教えてください。」

「あからさまに話題逸らすなや、・・・うーん、まあええか。」

涼しい顔で顔まで逸らすフウリンにフウセンはジト目を向けるが、

言葉で敵わないのは分かってるのですぐに本題に入ることにした。

フウセンは電話の向こうのサイネリア達とフウリンに作戦を伝えた。

「つまり、合体魔法ね、フウセンちゃん！！ 流石私が見込んだ娘ね。」

「いや、そういうんやなくて・・・はあ、もうそれでええわ。

・・・そんなじゃ、いっくでー。フウリン、方角の方をよろしくなあ。」

「分かりました。」

フウリンが頷くのを見届けると、フウセンは虚空から魔剣を顕現させた。

すぐに、瑠璃色の魔剣“ヴァイデューリヤ”が変形する。

それは筒状の物体だった。具体的には、60mmバズーカ砲だった。

「レトロですね・・・。」

「あんなフウリン、バズーカから出るんわ弾やない、ロマンや。」

「はあ・・・。」

それは創作と混同しているのでは、とまで言うほどフウリンは空気を読めなくはなかった。

「魔力チャージ、最ッ大ッ、火力ううう！！

いっくでー、大艦巨砲主義やあああ！！！！」

フウセンは普通にバズーカ砲を構えないで抱えて持って、トリガーを水平にして魔力を注ぎ始めた。

桁外れに圧倒的な魔力が、たった一本の魔剣に注ぎ込まれる。普通ならキャパシティがオーバーして壊れて砕け散るのが落ちだが、彼女と共鳴して呼応するように相乗的に魔力の力が増幅されている。その姿は、傍から見れば寒気がするような光景だった。

「全力全壊ですね、わかります。」

「（意味は分かってないんだろうなあ・・・。）」  
と、思いつつも魔剣が収束している魔力の密度と量に内心ひやひやしているフウリンだった。

どごん、と一条の瑠璃色のレーザー砲がバズーカから放たれた。それは真っ直ぐ直進し、あらかじめ開けてあった虫食い穴の中を通って、サイネリアの目の前にまでやってきた。

「ちょ!?!」

あらかじめ作戦を聞いていたロイドだったが、こんなイカレた量の魔力を撃ってくるなんて思ってもみなかった。

「ちょいやあああ!?!」

そして、あるうことがサイネリアは、そんな魔力のレーザーを右手拳で迎撃したのである。

「（あ、俺死んだわ。）」

その時、ロイドはそう確信したらしい。

彼女の周囲一帯が瑠璃色の光で満ちた。

無秩序だった魔力の奔流が、凄まじい速度で規則性を帯びて行く。

サイネリアがくるくると踊る様に回る。

彼女の周囲に滞留した魔力の粒子が共に踊る様にくるくる回る。

そのままではただの爆発として大惨事を引き起こすだけだった魔力の光が統制され、理性ある暴虐へと変わったのである。

妖精のような彼女の舞いが、周囲を薙ぎ払う力へ無駄なく変換されたのだ。

それはまさしく魔法のように、地上の瘴気を押しつけて、悪魔を消し飛ばしていく。

この時、彼女達は今回の一件で最大の戦果と……最大の被害を齎した。

彼女の魔術で民家百棟以上、木端微塵のクレーターの中に一部になっってしまったからだ。

爆心地だった。グラウンドゼロだった。

「……悪は滅びた（キリッ）」

ドヤ顔のサイネリアに、突っ込みをいれる人間は居なかった。

彼に首根っこ掴まれていたロイドは完全に気絶していた。

フウセンとフウリンの二人も、あまりの魔力の暴虐に退避していた

のもある。  
二人と連絡を取るうにも、生憎携帯電話は今のショックで電源が落ちて再起動する羽目になった。

サイネリアが再起動を待っていると……。

「やあ、元気でやっているようだね。安心したよサイネリア!」  
まるでそこに居るのが当たり前のように、一人の男が現れた。

「……父上。」

驚いて、彼女はロイドを地面に落してしまった。  
同時に別人のようだったテンションの声色が、すっかり冷えて元に戻ってしまった。

彼の名は、ギリア・シェロ・ハーベンルング。

“魔導師”ギリア。

「何年振りだっけなあ、“処刑人”として働いているとは聞いては居たけど、いやあ、随分と大きくなって、見違えたじゃないか!」  
本当に嬉しそうな表情で、彼はサイネリアを抱きしめた。  
地面に落ちているロイドなんて目にも入っていないようだった。

「父上こそ、お元気そうで……。」

「ああ、何も言わなくて良いんだ、お前は昔から無口な子だったからね。」

さて、私もこれから“議会”が開かれると言うことで時間が無いし、お前も忙しいだろう。たまには家に帰ってきて妹を安心させてやるんだよ。」  
ぼんぼん、と優しく彼女の背中を叩いてそう言うと、“魔導師”ギリアは振り返ると同時に消え失せた。

「……あの妹が、心配なんてするものか……。そもそも父上だつて……」

すると、ぼそぼそと呟くサイネリアの携帯電話に、最近お気に入りアニメの主題歌が鳴った。

『サイネリアちゃん、ロイド君生きとるかー？』

「生きてるよー　これくらいで気絶するなんて、なっさけないよねー」

フウセンの声が聞こえた瞬間、サイネリアは“変わって”いた。

『いやー、さすがにあれはビビるって。』

ロイド君もダウンしてるようやし、いっぺんこっち戻ってきーや。」

「うん　そうするよ」

サイネリアは頷いて携帯電話を切ると、目の前に虫食い穴が現れた。

彼女はロイドを引きずりながらその中に入っていくと、すぐに虫食い穴は何も無かったかのように消失した。



「うわッ!？」

地面が揺れて、思わずしゃがみこんで伏せるエクレスシア。

「何が起こったのですか？」

直後に凄まじい突風が吹き、瘴気が一気に薄くなった。

ただ、彼女は起こるはずの無いこの場所で地震が起こったことに混乱していた。

「どうやら、戦略級の魔術が発動したみたいね。

私は派手な魔術は得意じゃないから、羨ましいわ。」

「……一応街中ですよ、非常識極まりないです。」

クロムとエクレスシアは体勢を立て直して、走り続ける。

だが、その時、エクレスシアの前に民家の壁を背にしてうずくまって泣いている修道女の姿があった。

「その貴女ッ、大丈夫ですかッ!？」

エクレスシアは同胞を助けることに躊躇いは無かった。

しかしながら、無情にもその修道女の頭上から悪魔が飛来してきたのである。

その数は、五体である。

マズイ、とエクレシアは思った。

教会の関係者と言えども、普通に悪魔と戦える人間など全体からみれば少数でしかない。

彼女がその少数だと期待できるほど、エクレシアは楽観的な性格はしていなかった。

だが、結果的に彼女の心配は徒勞どころか、最悪の形で裏切られてしまった。

「ふんぐるい むぐるうなふ」

それは、カメレオンの捕食に似ていた。

地面から水たまりが出現し、そこから凄まじい速度で上空を飛んでいた悪魔を“何か”が出てきて、悪魔を蠅のように水たまりに引きずり込んだ。

「.....」

「うわ、始めて見た。あれって邪神崇拝者ってやつ？」

呆然としていたエクレシアだが、クロムが気味悪そうに呟いてそう言ったことでハツとした。



エクレシアは怒りと悔しさで歯を食いしばりながら、ハルバードの切っ先を向けてそう言い放った。

「あれ、なにそれ、私を斬ろうって言うの？ あははは、良いよ、やって良いけど、後悔しちゃうよ、しちゃうよ？ きゃはははははははははは。」  
「言っていることはただの言葉だが、彼女の言葉は心を抉り削っていく。」

彼女の得ている邪悪な異界の神の加護は、この世のありとあらゆる精神防護を無視する特性を備え、相手の心を汚染する。

クトゥルフ系邪神崇拝者、それがこの女の正体だった。

この系統の魔術を使う連中には、地上の宗教だのなんだのは全てこ託に成り下がる。

自身に対しても相手に対しても、最も危険で最も邪悪で、凶悪な魔術体系なのだ。

性質の悪さならその辺の悪魔崇拝者なんか足元にも及ばないほどである。

「手を出してはいけません、彼女は“処刑人”ジェリー。  
手を出せば、『盟主』に反逆したとの口実で逆襲に遭います。

彼女はその手のトラブルを何度も起こしていますが、その実力は折り紙つきなので誰も文句を言えないのが現状です。」

「か、彼女が、“処刑人”ッ!? 『盟主』はこんな外道を飼っているのですか!?!」



いた。  
だが彼女の理性的な部分は、彼女に手を出せば『カーディナル』に  
迷惑がかかることと、彼女のバックにある『盟主』の力の強さを訴  
えている。

だが、それでもエクレスシアはハルバードの柄を振り上げずには居ら  
れなかった。  
分かっている、それが彼女の策略なのだとしても。

「およ？ どうしたのー？ なにがしたいのー？」

「先に、・・・進み、ましよう・・・。」  
かろうじて、理性が己を守ることに成功した。

エクレスシアはハルバードを振り下ろすことなく、その切っ先を地面  
に下ろした。

「なーんだ、つまんなーい。まあいいや、今は味方だし見逃してあ  
げるー。」

うーん、かわいい女の子の悪魔とかいないかなー？」

ジェリーは急につまらなさそうに呟くと、懐から何やら本を取りだ  
した。

そして、彼女はスカートの下から伸びている触手を操って、民家の  
屋根に上って触手で海中を泳ぐように飛び去って行った。

「っはああああああ。」

ガクツ、とエクレスシアは崩れ落ちるように両膝が地面に付いた。

かちゃかちゃ、と鎧の音が何とか自分の精神を安定させてくれるも

のであると彼女は初めて気づいた。

「いやー、今のはよく頑張ったと思うわ……。  
多分だけど、誘惑系の催眠使ってたわねあの女。精神防護が意味無  
いって話だけれど、ホントなのねー。私だったらあの顔に銃弾を喰  
らわすわ、ホントに。」  
クロムも脂汗を掻いていた。  
彼女はそれを隠すように饒舌に口を開く。

「世の中には敵より恐ろしい味方が居ると言いますが、彼女はその  
中でも最上の部類でしょう。」

流石のアビゲイルも、そんな無駄口を叩くくらいには疲れたようだ。

「そう言うレベルじゃないと思うけれど……。」

案外居るものねえ、ああいう悪魔より悪魔じみてる女って……。

それにあいつの持ってた本、魔導書よ。

ちらっと見たけど、大師匠の著書よ。手を出してたら悲惨なことに  
成ってたわね。」

私はノーマルだからああいう性癖には付いていけないわー、と溜息  
を吐くクロム。

「でもまあ、あれに耐えられるならリネンも大丈夫かも。」

「え？ 何か言いました？」

「い、いいえ、何でもないわ。」

思わずぼそつと呟いたクロムの言葉に、ようやく息を整えたエクレ  
シアが反応した。

「先に進みましょう、こんなことをしている場合ではないですから。」  
「貴女つてタフねえ……。少し位は休んでもいいけれど？」  
「我々の取り柄はタフさですから。」  
そう言つて、エクレシアは立ち上がった。

「それに、瘴気がある場所で休むなんて言語道断ですよ。」  
「まあ、確かにね。引き返せる距離だけれど、こんなに瘴気が薄い状態がいつまで続くか分からないものね。先に進みましょう、目的地はすぐそこだわ。」  
「はい。」  
エクレシアは頷いた。

三人は、すぐに行動を開始し、走り出した。

そして、

「待ち侘びましたよ。」



目的の建物が見えたその時、希望を摘み取る悪魔の聲が放たれた。  
最悪の女が、現れたのだ。

## 第二十八話 エクスキューショナー（後書き）

最近、某所で投稿してるこの『魔族の掟』のスピンオフ元である“三人の魔女”シリーズの第一作、“夢の射影”編の改定版をこっちで投稿することにしました。

ここの目次のタイトルの上にシリーズモノとして表示されているので、よかったら見てください。合わせてみると詳しい設定がよく分かります。

あと、詳しい更新情報は我がブログで。

『873デスの作業室』と検索すると出てきますので。

それでは、以上です。

## 幕間 “議会” 招集

「苦言を呈するようですが教皇、貴女は私の頼みにオーケーと言うのに一体どれだけ時間がかかったのですか？

いいえ、分かっていますとも。これほどの決定ですものね。百何十人も居る他の枢機卿と話をまとめる必要もあつたでしょう。

ええ、分かります。普通に考えれば多忙な貴方にしては異例の早さでしょう。

ですがことは一大事ですよ？ 分かりますか？ 悪魔です、悪魔。奴らが徒党を組んで襲つて来たのです。こんな事態、聖書以来ですよ。

貴方はただ一言、最初に連絡した時に、オーケー、と言えば良かったのです。事後承諾でも十分な話でしょう。

貴方の判断の遅れが、勇敢な神の僕達や敬虔な信者たちが、悪魔に辱められて命を落としてしまうのです。そう、ただ一言、オーケー、です。

その一言だけで、教皇。貴方は人類の先頭に立って悪魔と戦つたとして歴史に残ることができのですよ？

ええ……ええ、全て私に任せてもらつて結構です。では教皇、貴方に神の加護があらんことを。」

長々と呪符を当てて話をしていた『カーディナル』は、慈愛の笑みを浮かべたまま通信用の呪符を地面に叩きつけた。

「全く、一体誰のお陰で選挙に勝てたと思っているんでしょうか。」  
「我らが『カーディナル』、御指示を。」  
彼女は傍らに控えていた従士が言った。

「ええ、我々の影響下にある教会全てに実行を伝達してください。」  
彼女の言葉を受け取ると、従士はすぐに走り去った。

「まあ、こちら三日と言う時間が必要だったわけですが。」  
でも少し言いすぎましたかね、と少々『カーディナル』は反省している。

「さて、いつまで待たせる気だ？」  
「ああ・・・失礼しました。」  
不機嫌そうに彼女に声を掛けたのは、『魔導老』だった。

ここは第二十九層にある、“議会”の会場。

白亜で出来た壁と床や天井がある殺風景な広い場所で、中央に同じく白亜で出来た円卓が置かれている。  
下の階層でエクレシアは昇降魔法陣のところまで行くのに四苦八苦しているが、“魔導師”なんて肩書きを持っている連中からすれば、空間転移やら瞬間移動やらはお手の物なのだ。

“議会”とは、『盟主』と十一人の“魔導師”によって行われる会議であり、“魔術連合本部”最高の政策決定機関である。

各“魔導師”は、既に『盟主』により各々の能力に適した事を依頼されているので、部下や下請けをするギルドに依頼を提示し実行させ、その報告や新たな依頼の追加などがある。（命令ではなく、依頼なのがミソである。）

更には新たに生じた問題やその対策や解決について会議したり、下級魔術師で構成される治安維持を始めとする様々な任務を請け負う“執行部隊”を派遣したり、と招集に応じて色々と内容は変わったりする。

一言で言えば、強い権力と力を持った魔術師が色々と決める場所という感じである。

あらかじめ議題を提示して招集を掛けるのは基本、参加を許された人間なら誰でもできるが、参加を強制できるのは『盟主』だけである。

それ以外にも、年に一度は定期的に全員参加の招集が義務付けられている。

「今回は、『盟主』は不参加ですか。」

「事態を重く見ておられないのではないか？」

“魔導師”ギリアと、『魔導師』が言った。

集まったのは、招集した本人が驚くほど多かった。

まず、招集を掛けた教会系魔術の権威であり、その名の通りカトリック系の枢機卿として叙されている、唯一戦力の保持を『盟主』から認められている存在。

魔導師『カーディナル』。

精霊魔術を極め、魔導師の中でも特に強大な権力を持ち、政治下手の無能と罵られる『盟主』に代わって“本部”を実質取り仕切っていると呼ばれている男。

魔導師『魔導老』。

地上に住む原住民の技術の監視と調整を担当し、核技術の脅威を訴えながらも自身もそれに魅せられ科学を探究する野心高き物理魔術の第一人者。

魔導師『プロメテウス』。

死霊魔術と魔女術を極め、肉体を無くした今も魔術を伝道することに執着を見せる、不滅と謳われるほどの不死性を持つ中世魔女狩り時代の亡霊。

魔導師『パラノイア』。

数多の民族学から魔術を捻出し、北アジアの部族の呪術師を取り纏める稀代のシャーマンであり、転生し子孫の代まで何百年と生きながらえる女帝。

魔導師『エンプレス』。

“本部”の全てがある大図書館の管理者であり、『黒の君』を最も知りつくしていると言わしめる魔導書と魔具の解析を任せれば右を

出る者は居ない、悪名高き人喰い女司書。

魔導師『ピブリオマニア』。

近年、ルーン魔術の大家である名門ハーベンルング家が輩出した、北欧系魔術を礎にして数多の魔術を駆使する武闘派の強大な貴族型魔術師。

魔導師ギリア。

下層に住む亜人や魔族を自らの実力で取り纏め、実質的に支配し、管理する魔族の代表にして魔族文明の魔術を極めたと言う最強のドレイクロード。

魔導師『マスターロード』。

そうそうたる面子である。

『盟主』が招集しなければ、普段はこんなに集まらないだろう連中まで来ていることに、『カーディナル』は驚きを隠せなかったものだ。

「“本部”の一大事と聞いたらねえ……。と言うか、無様な『カーディナル』を拝めて清々したわ。」  
『カーディナル』が教皇と話している間の、『パラノイア』の発言である。

彼女に負けて肉体と名前を奪われたと言う『パラノイア』の言い草

は、負け犬の遠吠えにしか聞こえず周囲からは失笑を買っただけだったが。

亡霊の彼女は代理の若い女の肉体を用意して現れた。

「これだけ集まったのに、後の三人はどうした？」

魔族を監視する為だけに“魔導師”に祭り上げられて地上での実質的な権力は皆無が『マスターロード』が、暇を持って余して発現した。

「うつむ、同志『奇術師<sup>マジシャン</sup>』は多忙だから仕方ないとして、他はお家騒動が片付かず、あと一人は普段から行方知らず、会おうとしても会える輩ではないからな。」

「と言っか、自由参加だからどうこう言えやしないがね。」  
顔を顰める『魔導師』に、いかにもシャーマンらしい派手でゴテゴテな民族衣装を纏った十代半ばに見える褐色肌の少女『エンプレス』が言葉を重ねた。

『エンプレス』の専門は祖霊信仰を始めとするアニミズムや世界の民俗学と言ったもの。

それらは『魔導師』と同じ精霊魔術の系統な為か、提携して色々お互いに融通しあったりしているので仲が良い。

「ところで、私はいつも発言もせずに様々な問題も知らんぷり、『盟主』に意見を求められてやっと口を開くあの同志『ピリオマニア』が出張ってきたことに驚いているのだが。」

『プロメテウス』が嫌みつたらしい口調で、大きな本を広げている人形のようなに可愛らしいふわふわした長い金髪のごズロリ幼女に言い放った。



傍から見れば全くもって大人げないが、ぶつちやけこの幼女の方が『プロメテウス』より年上である。

「確かに、俗世の事など知ったことではない、己の世界は本と知識だけと言わんばかりのお前が、どうしてここに来たのであるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」  
腹黒くて様子見してる連中や人間性社交性皆無な他の奴らとは別に、普通に社交的な『エンプレス』が問うたが、当の『ピブリオマニア』は無言で本に目を落としている。

「つまらん・・・・・・・・。」

こんな機会でもなければこの面子と一同に会して雑談も出来ないと言うのに、『エンプレス』はがっくりとした様子だった。

彼女は今の事態をあんまり重く見ていないようだった。

「しかし、同志『ピブリオマニア』はこの中でも随一の知識人。その知識を借りられればこれ以上頼もしいことは無いでしょう。」  
と、ギリアはにこにここと笑いながら言った。あからさまなおべっかである。

新参の彼はそれらしい功績も無い故に、らしい二つ名も無い。

ほぼ同時期に『プロメテウス』と魔導師に成った彼なのだが、あつちが自己アピールが上手く行ってすぐに『盟主』から仕事を請け負い、その実力を知らしめている。

彼が権力を集めるのに腐心しない方がおかしいというものだった。

一応、“魔導師”に序列は明確になされてはいない。

だからみんな同志と呼び合っている。

しかし、魔術師の世界は年功序列の実力主義であり、年上や先任が精神的に上になる。

そう言う意味では実質的な権利が皆無な『マスターロード』より、目立った功績の無いギリアは格下の扱いである。

『プロメテウス』がやたら発言し騒がしいのも、そう言う理由から来ていたりもする。

「しかし同志ギリアよ、彼女は貝のように口を閉ざし、いや本のよ  
うに何も言わない。」

そんな本を読もうにも彼女は逆にこちらが“読まれて”しまうほどの  
リーディングの達人だ。いかんとして彼女の知恵を借りようとい  
うのかね？」

「ははは、なるほど、確かに。」

これほどまでに、ほぼ同僚の『プロメテウス』に馬鹿にされて皺の  
一つも増えないギリアは、相当に面の皮が厚かった。

「では、先見の明を持つ者の名を持つ貴方に伺いたい、今起こって  
いる騒動に対してどう思うでしょうか？」

そしてそう言い返すくらいなのだから、ギリアも食えない男である。

「それは同志『カーディナル』のお手並み拝見と言ったところだ。  
なにやら準備をしているのに、横やりを入れるのは無粋と言つもの  
だろう。」

「おやおや、魔術の他に無粋まで極めた貴殿がそう言うのであれば、

相当な無粋なのだろうな。」

そして、横から『魔導老』が口を挟んできた。  
言うまでも無く、あからさまに喧嘩を売っていた。

この二人の不仲は有名である。

「……ふん。」

しかし、やたら普段から口数が多く喧しい『プロメテウス』は、鼻で笑うだけで相手にしなかった。

「お、今までにない反応だぞ、普段なら言い返して険悪になるのにな。」

『エンプレス』がぼそつと呟いたからではないだろうが、喧嘩を吹っ掛けた『魔導老』も無言だった。

「なんだ、醜い人間の争いが見れると思っていたのだが。」  
果てには『マスターロード』にそう言われる始末である。

「悪魔と言ったら魔女だが、同志『パラノイア』。  
黒魔術に詳しい貴女には何か言えることが有るのではないか？」  
そこで新たに話題を切り換えて『エンプレス』は、何となく『パラノイア』に話題を振った。

「降霊はむしろそつちが専門でしょうが。  
だいたい、私たちが魔女なんて言われるようになったのはその女の所為なんだから。」

「おい、貴様。それを含めた上での黒魔術の体系を扱っているくせに、よくそんな口を聞けたものだ。・・・ああ、こつちの話です。」  
あまりにも『パラノイア』の発言がムカついたのか、わざわざ呪符での会話を中断してまで『カーディナル』はそう言った。

「今は歴史的事実の口論は後にすべきだ、今現在、問題は第二十八層を襲っている悪魔の脅威をどうするか、だ。」  
語句を強めて、『魔導老』はそう言った。

「ねえ、同志『エンプレス』。貴女が悪魔の声を聞いたらどうかしら？」

魂ならその辺に転がってるし、そこから意識を読み取れば良いし。」  
「悪魔と交信しろと？ 我まで同志『カーディナル』に睨まれるのは勘弁願いたい。」

もう既に現在進行形で睨まれているので、『エンプレス』は肩を竦めるしかできなかった。

「こつちの場合、占星術師辺りに搜索を依頼するのですが、どうでしょう？」

「残念ながら相手が一枚上手のようだ。一切手掛かりも掴めない。」  
ギリアの言葉に、『魔導老』は首を横に振る。

「有名どころの悪魔は占星術とかが得意だつて伝承が多いからねえ、格下の悪魔を扱っただけでも裏を搔くのも隠れ潜むのも簡単でしょう。」

「どこかの誰かも隠れ潜むのが得意で探すのに苦労したかね。」

「・・・ああ、いえ、何でも有りませんよ。失礼しました。」  
「うふふふ・・・いつまでも高みに居られると思うなよ。」  
「ふん、『盟主』の温情が無ければ、その辺の低級霊と同じ有象無象になっていた分際で・・・ああ、すみません教皇。あっちもこっちも忙しいので。」  
「じりじり、と『パラノイア』と『カーディナル』の視線がぶつかっている。」

「“本部”の一大事だと言うのに、この二人はなに私情を持ちこんでいるのかね？」  
馬鹿馬鹿しい、と言いたげな『プロメテウス』。  
周囲から、お前が言うな、と言う視線が多数寄せられた。

「それより、悪魔と言ったら魔族。  
同志『マスターロード』の方が詳しいじゃないの？」  
話題を逸らすように、『パラノイア』が発言する。

「またその質問に答えねばならんのか？」  
「なぜ私を見る。」  
「ああ、そうだったな。」  
『魔導老』の反応で、『マスターロード』は納得したように頷いた。  
二人の同盟は秘密裏なのである。  
と言うか普通に暗黙の了解だったので、誰もそのことには空気を讀んで突っ込まなかった。

仕方なく『マスターロード』は彼に一度説明したことをもう一度繰

り返した。

「まあ、現世と魔界は環境が違うから、全く同一種族でも能力やその性質が違うのは理解できるな。」  
そう、『プロメテウス』は頷いて言った。

「その辺りの差異について興味深くはあるが……。」  
「私は同胞を貴様になど売ったりはせんぞ。念のために言っておくが。」

『マスターロード』が睨みながら言うと、彼はおどけるように肩を竦めた。

「それにしても、こんなことができる魔術師がまったく誰にも浮かばないと言うのはどういうことだ？ 多少なりとも名が知れたりするものではないのかね？」

『プロメテウス』の発言はうっとおしく自己主張が強いが、的を射てはいた。

正論だけに、誰も文句を言えないのである。

「誰もが思っていることをわざわざ口にするのか、貴様は。」

「現状を把握し確認する為に口に出してまとめることは有効な手段だ。それが無駄だと言うのかね、老よ。」

「いいや。ただ、このままでは何の解決策も浮かばぬと思ってな。」  
『プロメテウス』の正論を華麗にかわして嫌味を言う『魔導老』は、なかなかいい性格をしていた。

だが、ここに居る“魔導師”の中でも最も発言力のある彼の言葉で、

皆が黙りこくってしまった。

彼の言うとおり、何の解決策も出なくなってしまったのである。

そんな時、ふと、金髪ゴスロリ少女もとい『ピプリオマニア』が満を持して口を開いたのである。

「私は、『盟主』に言われて、ここに来た。」

彼女はコトンと広げていた本を円卓の上に預けると、僅かに顔を上げて実に小さな声で言ったのだ。

「どういうことだね？ 『盟主』の名代として来たということか？ いち早く発言した『プロメテウス』の言葉がここに居る面々の代表となった。」

彼女が『盟主』の言うことしか聞かないのはここに居る誰もがよく知っている。

「こんなこと、できる人間、私は、知ってる。」

「なんだとツ！？」

こう着状態を軽くひっくり返す『ピプリオマニア』の言葉に、ざわめきが広がった。

「人は、迷ったら、答えは、過去に、問うべき。」

「同志よ、もったいぶらないで貰おうか。」

『プロメテウス』の言葉に、苛立ちが僅かに混じった。

「答えはいずれ、今へ追いつく。今は、迷うしか、ない。」  
そう、意味深な言葉を残して、彼女は本に目を落とした。  
もう自分の世界に入った、と言うポーズだった。

こうなつては、誰も彼女の口を開かせることはできない。

「……『盟主』は、この一件について何かを知っておられるのかもしれない。」  
そして、『魔導老』がそう呟いた。

「なにせ、過去を一番よく知っておられる御方ですからね。  
若輩者の私めにはどうすればいいのやら……。」  
とりあえず、話の流れに置いて行かれないように発言したのはギリアだった。

「我らが『盟主』の言動が理解に苦しむのは今に始まったことではないが……。」  
首を傾げ、苦々しい表情で、『エンプレス』は呟く。

「せめて名代がカノン殿だったのなら良かったのだが……。」  
「何を血迷ったのか、『盟主』は先日己の手駒を世界中に分散させてしまったからな。」

あの『盟主』を暗殺できる輩が居るとは思えんが、懐刀のカノン殿



を少しでも遠くに行かせるのは避けたいのだろう。

空間転移の名手である彼女を、何とも宝の持ち腐れなことだが。今では邸宅に引きこもり、何をやっているのか分からない有様だ。」

「憶測で物を言うな、なんなら直接訪ねてくればいい。丁度すぐ近くだからな。」

『魔導老』は『プロメテウス』を睨みながらそう言った。

そう、第二十九層は『盟主』の自宅があるのだ。

それ以外にも、『ピブリオマニア』が管理する“魔術連合”の叡智が詰まった大図書館や、この“本部”最強の牢獄もこの第二十九層に存在する。

“議会”の会場と言い、ここには一番重要な施設が集まっている。

「面倒な。いつそ、訪ねてくればいいではないか。」

人間の機微など全く理解していない『マスターロード』がそう言った。

「そんな空気の読めない不敬をできるのは、あんた・・・同志『マスターロード』くらいでしょうねえ。」

欠伸をしながら『パラノイア』は言った。もう完全に他人事である。

「はん、私が直接『盟主』に会えるものか。首を取りに来たと言われかねん。」

『マスターロード』は自嘲するかのように笑ってそう言った。

彼は自分がちつとも信用されていないことくらい理解しているのだ。

「それができたら、ここに居る我らも苦勞はせんがな。」

そう言う冗談が言えるのは、『魔導老』だけだった。

周りからは同意とも取れない微妙な苦笑いが聞こえてくる。

「聞けば。」

「ガタツ、と『魔導老』は自らに注目を集めるように立ち上がった。

「最近、『盟主』の邸宅に怪しげで見るからに胡散臭そうな女が入りしていると聞いている。」

「なんだ老よ、お主は『盟主』を信用しておらぬのか？」

「飽くまで、聞いた話だ。」

横から『エンプレス』口を挟まれて、『魔導老』は少々不機嫌そうになってそう強調した。

なぜ彼女が口を挟んだかと言うと、『盟主』の邸宅の有るこの第二十九層は基本的に関係者以外立ち入り禁止なのだ。

だから、なぜそんなことを知っているのか、と疑問が生まれ、まさかお前『盟主』の屋敷を四六時中監視しているのか、と言う疑念に変わる。

しかし『盟主』に次ぐ権力を持つ彼にそんな事を言えるのは、空気を読まない『プロメテウス』か、彼と気さくに話せる『エンプレス』ぐらいだった。

この場に於いては、『マスターロード』は除外されるが。

「だがまあ、あり得ぬ話ではあるが、政治下手な『盟主』が馬鹿な人間の言葉によって惑わされ、良くない提案をこの場で出されても

困る。

しかし、万が一のことを考え、私は第二十九層の出入りを調べたのだ。

そこで同志『プロメテウス』よ、貴殿は何か心当たりは無いかね？」  
急に『魔導老』が天敵にそう振った。

「なぜそこで私に尋ねるかね、同志『魔導老』よ。『盟主』がどの誰といつ会おうが、我々が知ったことではあるまい。」

「出入りを監視した所、私の部下がその怪しくて胡散臭そうな女を発見し、追跡したところ貴様の部下と会っていたのを目撃したらしいからだよ。」

「全く、私の部下だという証拠は？」

「白衣を着ていたらしいな。」

「なら私の部下で間違いない。」  
即答だった。何か白衣に『プロメテウス』は並々ならぬこだわりが有るらしい。

「ちよつと待て……あ、彼女か。」

腕のある錬金術師らしいな。私の部下のアメリカ君が彼女に現在開発中の新型魔導デバイスの部品を発注したという記録が有る。詳しいことは私にも分からない。」

彼は額に手を当てると、すぐにそう答えた。

「名は？」

「知らんな。」

「これは驚いた。名前も知らぬ魔術師と取引をするとは。少々不用心ではないのかね？」

「私が聞いていないだけで、アメリカ君なら知っているだろう。私

は部下を信用し、仕事を任せているのだからね。」

「そうかそうか。それは素晴らしいことだな。」

ところで、私の知らぬうちに言葉の意味が変わったらしいな。部下を使い捨て同然にすることを、巷では信用すると称するらしい。

そうそう、全く関係の無い話なのだが、第二十八層の混乱に乗じて我が“精霊宮”に侵入してくる賊が居たのだ。一匹ほど取り逃がしてしまつたが、そちらに逃げたので気を付けることをお勧めする。」

「ほうほう、御忠告痛み入る。そんな下種は見つけ次第、そちらに首を塩漬けにしてお届けしよう。」

二人の間にぎすぎすとした空気が立ち込めている。

「これが今日のメインイベントかのう、相変わらず仲の悪いことで。」

「くっかかか、もつとやれやれ!! ぎやははは、乱闘しろ、乱闘

!!!」

呆れ顔の『エンプレス』と、何が可笑しいのか大笑いしている『マスターロード』。

「毎度のことだけど、よくお互いに“戦争”とかしないわねえ。」

どこまでも他人事といった様子の『パラノイア』が、物騒なことを言った。

お互い、一つの文化を極めるに至った魔術師が争えば、たとえ一対一の戦いであろうとそれは最早“戦争”なのだ。

「そんな愚はどちらも犯すまい。老は言つに及ばず、同志『プロメテウス』は十年もバカスカと戦っていた前任の阿呆どもを肅清して今の地位にいるのだからな。」

「お陰で、私の、知識が、いっぱい……ふふふ……」  
いきなり『ピプリオマニア』が喋ったので、『エンプレス』もギョ  
ツとした。

「あー、あれは酷かったなあ。思い出したくもないわ。」

「おやおや、出来れば後学のために教えて頂けないでしょうか？」

『パラノイア』まで渋い表情をしているので、気になってギリアが  
問うた。

「うむうむ、実はギリア殿が“魔導師”に着任する数年前ほど、突  
如『盟主』に“議会”の招集が掛けられてな。」

集まってみれば二人の空席と、あの男が居たわけだ。……動か  
なくなった二人を連れてな。」

「まあ、いい加減被害を撒き散らすだけだから止めろって『盟主』  
にも言われてたのに、無視して戦い続けている方が悪いのよね。」

戦争って刺激にはなるけど、生き過ぎて泥沼化すると文字通り毒沼  
でしかないから。」

「であるなあ。で、その場で改めて、あの男こと同志『プロメテウ  
ス』の着任が発表された訳だ。そこで『盟主』は死体となった二人  
を我々の前で辱めた。……彼女に“喰わせた”のだよ。」

「それは……何とも……。」

二人の話に、本当に何とも言え無さそうになったギリアだった。

その視線は、じっと本に目を落として笑みを浮かべている女児に向  
いていた。

彼女がどうして『読愛蔵書狂』ヒプリオマニアなんて呼ばれているか、知っている

かは、この場に居る誰もが知っている。  
人間を本に見立て、その知識を読みつくして略奪する、魔術師にとつて悪魔のような存在なのだ、彼女は。

魔術師にとつて、それ以上最悪な死に方は無い。

「今思えば、見せしめだったのだろうなあ。

我々に代わりが幾らでも居るとは言わないが、『盟主』に時間は幾らでもある。手痛い、許容できぬ損失では無かったのだろうよ。」

「知識はちゃんと、“蔵書”出来たわけだしね。」

苦々しい表情をしている『エンプレス』に、笑えない冗談を重ねる『パラノイア』。

「始めから信じてはいませんでした、『盟主』を含め我々全員は対等だと言うのは幻想だったのですね……。」  
そんな言葉がギリシアから出るくらい、彼にとつても衝撃的は話のようだった。

基本的に“議会”で何かを決める時、多数決を用いる。

ただ、十二席では偶数なので、『盟主』は二票、他の“魔導師”達は一票となっている。

その事実と、“魔導師”の過半数以上が『盟主』に与している面々なので、『盟主』が何か議題を持ちだした時は半ば茶番となるのだ。

「それはこの“魔術連合”がまだ“魔術同盟”だった頃の、更には

貴殿のご先祖がこの世界に入植する以前の話だ。

如何ないたいけな乙女も、酸いも甘いも噛みしめ、千も齡を重ねれば、悪鬼羅刹の魑魅魍魎に成り果てると言うものだ。」

「おいおい人間・ごほん、同志『エンプレス』よ、そんなこと言っつてしまつていいのか？」

あまりにも口が過ぎるので思わず『マスターロード』が口を挟んだ。

「我らが『盟主』は昔の話で怒るほど器は小さくは無かるう。

ただ『黒の君』の弟子、と言う肩書きだけで盟主と言うお飾りに甘んじていたのはあの御方の命令だと言うのも大きい。

素晴らしい師弟愛だとは思わぬか？ ただ一言、己の師に言われただけだと言われているのに、今もこんな大きな組織の首領の座に収まっているのだ。」

そう語る『エンプレス』の表情は、皮肉げだった。

あの『盟主』がひとえに恐れているのは、己の師たる『黒の君』の怒りだけだと分かっているからだ。

「うむうむ、私も是非ともそのようにしたいものですね。

苦難苦節を乗り越え、いずれこの私さえも超越してほしいと、我が娘には期待したいものです。」

しかし、ギリアは真面目に何度も頷いてそう言った。  
そして、

「『盟主』の性格分析に役に立ちそうです。」

と、続けて彼が言ったことで『エンプレス』は、ああ失敗した、と言う表情になった。

「しかし、『盟主』も分からんな。あの『黒の君』が恐ろしいのはよくよく知っている、私も語り部のじい様から何度もガキの頃に聞かされた。

だが我ら魔族なら、幾ら恐ろしくても反抗を止めることは無い。虎視眈眈と牙と爪を研ぎ、憎き奴をくびり殺さんと狙うだろう。今も我が首を狙わんとする叛逆者の芽を潰すことに苦心しているよ。」

「魔族の視点からどのような御方が語られているか、ものすごく興味深い。今は置いておこう。

人間社会はそうなかなか行きやしないのだよ、同志『マスターロード』。

私もいろいろな部族を取りまとめているが、そのひとつひとつがやれ風習だのやれ伝統だのと、折り合わせるだけで一苦労だ。」

「しかし、部族の呪術師を取り込むのは上手い方法だな。それは私もやっている。

シャーマンや祈祷師、それに呪術を扱う特別な人間の一言は大勢のヒトを動かす。昔から変わらぬし、これからも変わらない良い方法だ。」

「たしかに。お互い多くの部族をまとめているだけあって話が合うな、同志よ。これは意外だった、後で酒でも飲みながら語り合おう。」

「それは良いなあ、甘いものが有るとなお良いな。お前は分かる人間のようだ、同志『エンプレス』。」

何やら二人は意気投合していた。

「それは後日打ち合わせるとして、魔術師同士の師弟関係と言うのは何かと一筋縄では行かんだよ。昔は基本一子相伝だったが今は違うだろうか？」

老も、同志『カーディナル』も効率重視、この“本部”や地上の人



間から資質を持つ人間を集めては教育していたりもする。

そうなると、人間とは恩を感じる生物でな、己の師を尊敬し、悪くすれば師を超えるなんてことを考えなくなる。

それは駄目なのだ、駄目なのだよ。貴殿の言うように、くびり殺してでも上を目指し越えねば、魔術の究極には到達できない。その考えを我は部下に押し付けるつもりはないが、我自身は違う。

まだまだ上を目指したい、その為ならあと何代も使い潰しても構わない所存だ。」

「それは素晴らしいな。私も魔術の究極たる“創世”に至りたいな。ちなみに、私は師を辺境に追い出し、老衰死させようと目論んでいるがね。」

「うむ。しかし何だろうなあ。話はすっかり噛み合っているはずなのにどこか微妙にズレているような・・・これは種族の違いなのか？」

「おおッ、それはよく老・・・ごほん、知り合いの人間によく言われる。

やはり言葉の壁は魔術で取り払われても、如何ともしがたい問題はあるのだな。」

「あ、ああ・・・。」

「やっぱり何かズレてる、そう思わずには居られない『エンプレス』だった。」

「弟子探しは苦勞するわよねえ、私は身の程を知っているから上は諦めたけど。」

でも、世界中に目を広げても、なかなか自分の秘術を伝えられる逸材は居なくてねえ。」

「貴殿の弟子探しは有名だからなあ、同志『パラノイア』。」

有名どころか悪名高いほどだ、と『カーディナル』は横から聞いて

いて突っ込みたかったが、現在話し合いがようやくまとまってきた所なので我慢した。

「死んで見えてくるものもあるってことよ。ああ、もう何度も死を経験している同志『エンプレス』には釈迦に説法かしら。」

「いや、そうでもない。精神を消耗する為、“死んだ”状態で居ることは無いからなあ。肉体が有ると無いとでは違和感は凄まじいのでな。」

「そうそう、肉体が無いと、自分がだんだん消えていく感じがするのよねえ。」

ホントはただの喪失感でしかないし、精神が消えるわけじゃないんだけど生きてた頃との齟齬が半端じゃない。

そこに矛盾が生じて、自己がすり減ると私は解釈しているわ。この“世界”の存在を認めていないからね。」

「では認められていない存在である霊は、なぜ現世に居る？」

『エンプレス』がニヤリと笑いながらそう問うた。

「はあ、シャーマンのあなたにはそれも釈迦に説法でしょう？」

伝説の英雄の亡霊ならまだしも、ただの幽霊じゃ影響力が少ないから、“見逃されてる”だけでしょ？でも自然法則として気が狂うほどの違和感があるのは逃れられない。

こんなの基本だわ、馬鹿にするのも大概にして欲しいわね。」

「いやいや、それも解釈が多数あってな。貴重な魔女殿の意見を聞けて嬉しいよ。」

「多数の解釈を知っていながら魔術師で有るんだから、真実にたどり着けていないなんて言ったらあなたの精神ぐちゃぐちゃにするわよ。」

「おお、怖い怖い。お主も魔女術を修めているのだから分かるだろ

うが、民俗学は奥が深くてな……。」「  
と、何やら語り始めた『エンプレス』に、早くも『パラノイア』は  
辟易し始めているようだった。

「普段は北アジアに居られるのでなかなか雑談する機会はないので  
すが、『エンプレス』のような御方は魔術師の世界には貴重ですな  
」  
「探りを入れているだけで、本質は様子見している我らと変わらん  
よ。」

と、ギリアの言葉にようやく『プロメテウス』との舌戦に決着が付  
いたらしい『魔導老』がそう言った。

「さて、いつまで待たせる気だ？」

そして、不機嫌さを引き継いだままの『魔導老』が、呪符での会話  
を終えた『カーディナル』にそう言った。

「ああ・・・失礼しました。」

で、彼女が軽く非礼を詫びて、話は冒頭に戻る訳である。

「準備は終わったのかね？」

こちらも不機嫌そうにしているがどこまで本当かは不明な『プロメ  
テウス』が問う。

「あと二時間もすれば一掃できるでしょう。」

その時には犯人に目に物を見せてやろうと……。」「ふと、不自然な所で『カーディナル』の言葉が切れた。」

その視線の先に、全員の目も集中する。

「あ、初めまして“魔導師”方。私、リネン・サンセットと申します。」

一人の女が、“議会”の会議場の入り口である両開きの扉を開いてやってきた。

隣に、見るからに禍々しい雰囲気のエモを連れ、

「犯人です、出頭しに来ました。」

波紋を投げかけるように、やってきた。

話は、時間はエクレスシアが彼女に遭遇した時にまで遡る。



## 幕間 “ 議会 ” 招集（後書き）

本編までワンクッション。会話が中心なので少し見づらかったらごめんなさい。

私が作る話の欠点は、同じ技はなるべく使わないようにしたいがために、キャラの数が多くなってしまふことです。

さらには設定が多く、キャラ付けも苦手ということです。

主人公の視点に戻ると当分出てこないというのに……。

というわけで、要望があれば軽い人物紹介ぐらい追加するので、遠慮なく言うてください。

## 第二十九話 悪魔召喚士

「ねえ、パパ、助けて、怖いよ。どうしてそんな顔をするの？」  
剣を振り上げた騎士は容赦なく少女に振り下ろす。

「痛い、痛いよ！！ どうしてそんなことするの！！  
こんなの、パパじゃない、優しいパパが、こんなことするはず無い  
もの！！」

袈裟掛けにバツサリ腹まで裂かれた少女は、泣きながらそう言った。  
返り血が全身をプレートアーマーで身を包んだ騎士に飛び散る。  
当然、フルフェイスのヘルムにも。彼の表情など、確認しようにも  
無かった。

騎士は少女を蹴り倒す。その裂かれた幼い少女の腹を踏みつけ、剣  
で滅多刺しにする。

剣の切っ先で穿たれた数が二十を超えても、少女の声は止まない。

「やめて、痛いよ、やだあ！！ 助けて、ママ、ママああ！！」  
少女は助けを求める声を止めない。それが誰よりも、何よりも正義

や慈愛に満ちた人間の心を抉ると知っているからだ。

「悪魔が……。」

何度斬り捨てても、何度刺し貫いても、少女は泣き喚き、助けを求めただけ。

「俺がこの程度で手を緩めると思ったか？」

我々は神に仕える代行者。その為ならば、親も子も手に掛けよう。今さら何に化けようが我々は躊躇いをしないのだ。」

「そうだよ、だからパパは私が痛いって、助けてって、言っても来てくれなかつたんだよ。」

少女は笑った。騎士が、父親が見たことも無いような邪悪に満ちた笑顔で。

「そんなんだからママはおかしくなっちゃったんだよ。」

ママ、私が病気になってからずっと付いていてくれたのよ。私がパパはどこって聞いても、正義の為に戦っているって言って。あはは、可笑しいよね。パパはどう言い繕っても人殺しなのに。」

ママは最後までパパが来るって信じてたのよ？ でも裏切られて、可哀そう。」

「悪魔風情が、何が分かる。」

「分かるよ。記憶は鎖みたいに繋がってるもの。パパの後悔も、悲しみも、全部知ってるもの。」

少女は、悪魔は嗤う。

「それなのに、酷いわ、パパ。私は死んじゃった貴女の娘を代弁し



てるだけなのに。

こんなひどい仕打ちをするなんて、きゃはははは。天国とやらにいる私も悲しんでるわ!!」

「黙れ。」

騎士の剣が一閃する。

ぼとり、と少女の首が落ちてても少女は口を開くのを止めない。

「私には分かっているわ、本当に黙らせたいなら、なんで私の顔を潰さないの？

骸に成った私の表情を忘れられないからよね!!　なんて、哀れで、可哀そうなパパ!!　あはははは!!」

少女の首は、それだけ言い残して消え失せた。

「隊長ッ!!!」

「ッはあ!?!」

部下の声に、騎士はがっくりと膝を突いた。

「……はあ……あ……ここは、現実か？」

周囲に満ちる瘴気、空も見えない地獄のような現世に、返答を確認するまでも無く騎士は立ち上がった。

「はい、元凶となる悪魔は、退治されました……。」

「なに？」

部下の妙な物言いに、彼は顔を顰めた。

「戻ったか。悪魔の誘惑に、よくぞ耐えた。」  
だが、その疑念はすぐに晴れた。

「・・・マスター・ジュリアス!？」

体に染みついた敬礼の姿勢で傳く騎士。

見れば、彼の後ろには自分の部下である十二名が同じように傳っている。

「今は急場だ。それに騎士としての経歴は貴方の方が長い。

面倒な形式は全て後回しだ。今は可及的速やかに、一匹でも多くの悪魔を屠る事を考えるのだ。もうすぐ総長も戻られる。苦しいのは今だけだ。」

彼は鎧も着けず、儀礼用の騎士服まま剣を一本持っただけの格好だった。

他の小隊と遭遇した時に情報交換で聞いた話では、彼はこの三日間一睡もせず悪魔を狩り続けているという。

「はい。」

「よく、頑張ってくれた。」

マスター・ジュリアスは膝を突いて騎士の首に腕を回して方で抱くと、静かにそう言った。

「全ては、神の御心のままにございます。」  
「ああ、『カーディナル』ももうすぐ手を打ってください。」  
マスター・ジュリアスは立ち上がってそう言っていると、行け、と短く命じた。

騎士と部下の十数名は、それだけで一斉に立ち上がって敬礼をする  
と、隊列を組んで走り出した。

「いい加減、出てくるがいい。」  
そして、彼は身を翻すと、一人の男が立っていた。  
何の前触れも無く、立っていた。

「久しぶりだな、友よ。」  
マスター・ジュリアスは一言も発せず、斬り捨てた。

「これは独り言だが、私は悪魔と利く口は無い。」  
「なんだ、気が狂って自ら首を吊った男は、もはや友に値しないと  
?」  
「これも独り言だが、我が友ならこう言うだろう。私が悪魔に操ら  
れるようなことがあれば、私ごと斬れと。」  
そう言つて、マスター・ジュリアスは嘗ての友の姿をした悪魔の頭  
蓋を踏みつぶした。

「はははは、相変わらず容赦が無いなあ……。」「  
しかし、悪魔は霧のように掻き消えて、再び姿を現した。

「当然これも独り言だが、随分と懐かしい気分だ。まるであいつが  
生きている頃に会っているようだ。これはきつと上級悪魔だな。」「  
彼は思う、化けて出て来たのが死人でなければ本人と間違えるだろ  
う精度の化け方だった。

正体は掴めないが、きつと有名どころで姿を化けると言う伝承を持  
った怪異型の悪魔だろう、とジュリアスは思った。

「ではこちらも勝手に答えよう。然りである、と。そして、我が主  
が御呼びだよ。」「

「独り言だが、上級悪魔をお使いか、随分と贅沢な輩だ。」「

「おいおい、友よ。今のは口に出しては駄目だろう。言葉と行動に  
矛盾が生じている。」「

「ふん。」「

悪魔は本当に知己のように気安く振る舞う。

もはやジュリアスの記憶の中にしかない姿だった。

「場所は、この階層の昇降魔法陣前だ。避難民約千名が人質になっ  
ている。早く行け。」「  
それと、と悪魔は続けた。

「最後に、私を斬って行け。悪魔の体に、俺の心が有るこの状態・  
耐えられないんだ。」「

「……………」

「この悪魔は狡猾だ。心や姿を、完璧に映し出す。

分かるか？ 何が恐ろしいかと言うと、自我というものを人間を喰らう寸前まで自ら捨てるのだ、この悪魔は。今の私は間違いなくお前の知っている私だ。

相手を苦しめ喰らう為には、自らの犠牲を惜しまないのだ。なあ、我が友ジュリアス。お前の言うとおりだ、速く、私を、斬れ。」  
悪魔は両手を広げて言った。

ジュリアスは、斬った。眉ひとつ動かさず、斬り捨てた。

「相変わらず、お前は完璧な騎士だなあ。」  
私はお前を誇りに思うよ、と言って、彼はこの世から消え失せた。

「時に、悪魔は人間に理解できず常識では考えられない行動をする  
と聞いたことをすると聞いたことが有るが……。」  
本当に無抵抗で斬り捨てられ、どす黒く燃える邪悪な魂が出現した。

ジュリアスは聖句を唱え、悪魔の魂が浄化されて消失する。

「それにしても、相変わらず心の弱い奴だったな、お前は。  
時に純粹さこそが、人の心を傷つけるものなのだよ。」  
ジュリアスはそれだけ呟くと、さっさとその場を後にした。

「貴女、は・・・？」

「私の下にたどり着けたのは、貴女が初めてですよ。」

ぱちぱち、と怪鳥のような姿をした悪魔の背に跨っている女は手を叩きながら言った。

「初めましてお嬢さん。私はリネン・サンセットと言います。まあ、この騒動の犯人ですよ。」

何を馬鹿な、とはエクレシアは言えなかった。

こんなにあっさりと犯人が自分だと名乗り出て来たのはハツキリ言うて馬鹿馬鹿しい話だ。

魔術師と言うのは狡猾な人種だ。普通姿を現さない時は最後まで姿を現さない。

それなのに舞台の役者のように現れて、自分が犯人だと名乗り出る。わざわざ悪魔を大勢送り込んできた人間だとは思えなかった。

だが、そんなエクレシアの理性的な部分を全否定するほど、彼女の直感はその女が犯人だと理解してしまった。

遠目から見ても、目が違った。

魔女の釜で悪意をぐつぐつと煮詰めたような、どす黒く、粘りつくような、邪悪に満ちた視線だった。

エクレシアは、この目を知っている。

三年に及ぶ実戦経験で、何度も目にしてきた、冥府魔道に堕ちた人間の目だった。

そんな連中の中でも、取り分け頭のネジが外れている魔術師の目だ。

そう、丁度、先ほど出会った“処刑人”ジェリーのような……。

「知りませんかね、私のこと。これでも昔は結構名前が売れた召喚士だったんですけれど。」

空高くを飛ばたく怪鳥がゆっくりと地面に降りてくる。

その背から下りてくるのは、漆黒のローブを纏った栗色のセミロングの女だった。

格好だけならありふれている。

顔に特徴が有るわけでもない。整ってはいるが美人と言うほどでもない、地味さがある若い大人の女性だった。

「リネン・サンセット……ここ百年の本部からの離反魔術師のどこにも名前が載っていません。貴女は、何者ですか。」

開いたノートパソコンに向きあっているアビゲイルが、そんな彼女を睨みながら言った。

「その情報は新し過ぎますよ。まあ、私のことなんてどうでもいいじゃないですか。」

今日の前で起こっていることが全て、そうでしょう？」「  
そう言うと、リネンは指を鳴らした。

すると、今まで濃かった瘴気が波を引くように晴れて行く。  
見えなかった瘴気の奥が、見えるほどには瘴気が薄くなった。

「あッ」

エクレシアは、辛うじて悲鳴を呑み込んだ。

そこには、逆さにされた大きな十字架に、同じく逆さに張り付けられた人間が、合計十三組も存在していた。

そして磔にされているのは、教会所属の騎士や修道女、神父ばかりだった。

そこにいる誰もが憔悴しきって、生気がまるでない。

生かしているのはただ苦しめるだけだと言わんばかりの残虐さが、そこにはあった。

「貴女たちもやってみますか？　まず最初にありったけの精神防護の術を自分で掛けさせるんですよ。」

そこから一枚一枚、それを剥ぎ取りながら、自分の心を犯される恐



怖に震える姿を楽しむわけです。

そこに十体くらいの悪魔をけしかけて色々させるのです。……最終的には己の信ずる神に恨み辛みを吐くようになる……。あははは、最高の玩具ですよ。」

「ふ、ふざけるな!!」

リネンの嘲笑が、エクレシアの怒声に掻き消された。

「ああ、やっぱり貴女たち聖職者にとってそれは許せませんよね。

最短で一時間しか持たなかった人も居ますねえ。くふふ、それが誰かは彼らの名誉のために言わないでおきましょうか?」

「貴女は、人を何だと思っっているんですか!!」

「生憎と私は哲学で言葉を弄したりしない分かりやすい性質なので、質問ならもつとストレートにどうぞ?」

「……なぜ、こんなことをしたッ」

エクレシアは、声を押し殺して問うた。

仲間をこんな目に遭わせた相手でも、真面目な彼女は職務としての自分を優先させた。

つまり、罪人の更生の余地を問うことである。

こういう場合は基本的に相手の生死問わずとっ捕まえてからなのだが、人質が居る手前そんなことはできなかった。

それに、エクレシアの本能が告げている。

彼女はあまりにも危険すぎる相手だ、と。

「なぜこんなことをしたか、そう問いましたね?」

理由は目的が有ったからです。流石に私も理由も無くこんなことす

るほど頭おかしくありませんねえ。でも、もうそれも終わりました。後はもう、いつでも撤収に移っても大丈夫って感じですかね。」

「だったら、今すぐにも悪魔たちを魔界に還しなさい!!」

「え、なんで?」

彼女は実に不思議そうに首を傾げた。

「まあ、やらざるを得ないきっかけはありましたが、私は貴女たちの苦しむ姿を見るのが極上の楽しみでしてね。こんな楽しいこと、止めると言われて誰が止めますか。」

ほら、今日はこれを聞きながらお風呂に入って寝るんですよ。」  
リネンがエクレシアを見下しながらそう言つと、リネンの隣に飛んで下りて来た悪魔が手に持った蓄音器みたいな物体を操作した。

そこに記録されていたのは、阿鼻叫喚の悲鳴だった。

泣き叫ぶ女の声、絶望に満ちた叫び声をあげる男の声、苦悶に満ちた老人の声、母親を求める少女の声、必死に聖句を呟く聖職者の声。

そこには、あらゆる人間の絶望が記録されていた。

エクレシアは、怒りを通り越して何が何だか分からなくなってしまっていた。

「これぜんぶ、貴女の御仲間か同類ばかりです。」

ああそつだ、そこに磔られてる彼らの声も当然記録してますよ、聞きますか?」

嗜虐に満ちたりネンの声とは裏腹に、表情は優美な音楽を聴いてい

るような笑顔だった。

「ホント、悪趣味ね。」

クロムの呆れたような呟きに、エクレシアは我に返った。

「要はただの変態ってことでしょう。」

アビゲイルの言葉を背に、エクレシアもハルバードを構えた。

「貴女の所業はやはり赦しがたい。叩き斬る。」

「さっさとそうしてくれた方が可愛げがあると思っんですけれどねえ。」

リネンは、嗤って答えるだけだった。

彼女は脇に控えていた怪鳥が飛び乗って、上空に飛び上がる。

「ちゃっっちゃらっっちゃらーっと、貴女に丁度いい遊び相手を紹介しましょう。」

地面に、魔法陣が出現する。

それには魔法円に秘文字、大きな六芒星と小さな五芒星が幾つも

悪魔召喚術！！

「させるかッ！！」

エクレシアが踏み込む。

しかし、彼女に立ちはだかる様にリネンの脇に居た悪魔が突っ込んできた。

あまりにも愚直な突進に、エクレシアは一撃で悪魔を真っ二つに斬り捨てた。

「召喚ッ」

だが、時はすでに遅かった。

リネンの宣言と共に、魔法陣から漆黒の人影が陽炎のように揺らめき、顕現した。

凄まじく濃い瘴気が烈風のように吹き荒れる。

「馬鹿な、実戦レベルの召喚魔術ですって・・・!？」

今まで出て来た悪魔とは違う、圧倒的な瘴気を纏うそれは、上級悪魔だ。

魔界から現れたのは、異形だった。

右手が蠢くツタのような触手であり、それ以外は形だけなら人間にそっくりではある。

しかし、全身が真っ黒でなだらかな起伏がなく、途中途中根っこのようなものが無数に枝分れしており、人間らしさなど欠片もない。頭には巨大な葉っぱが放射状に四枚ほど生えている。

そして、左手には、カンテラにも見えるが、アルミの網で刀身を作ったような剣があった。

「彼はアルラウネが長い年月を経て悪魔化した存在です。」

その性質から、魔界では拷問官をしているそうです。「上空から余裕の表情で解説をする、リネン。」

「私は固有伝承のある有名どころの悪魔をあまり使わない主義なんですよ、吹っ掛けられませんし。」

それに、伝承が無くても掘り出し物の悪魔はいっぱい居ますからね。あ、そうそう。」

ふと、彼女は何かを思い出したかのように、指を鳴らした。

すると、ある場所の瘴気が再び晴れたのだ。

「ギャラリ」と言うか、人質ですかね？」

リネンは肩を竦めて笑った。

霧が晴れたそこには、正四角形の巨大な石畳の上に、千人ばかりの人間が押し込まれていたのである。

彼らの足場には、巨大な魔法陣が描かれている。

そう、これこそ昇降魔法陣なのだ。

一度に何千人もの人間を上層や下層へと転移させる、大型の儀式場だった。

しかしその上空には、優に百体は超えるだろう悪魔が飛び交っていたのである。

「まさか、自分から敵の手中に足を踏み入れる、バ、カ、が居るとは思いませんでしたよ。」

リネンの嘲笑が木霊する。

「うわー、まさかこんなことになってるなんてねえ……。」

「貴女の所為ではありませんよ。」

「あ、うん、まあ、そうなんだけれど……。」

そんなフォローをエクレスシアからされて、これはリネンの奴マジだわ、と思ってたクロムは若干後ろめたかった。

「彼に勝てたら、人質を全員解放してあげても良いですよ。」

それが出来なかったら……そうですね、ざっと千人は居ますから、今度こそ伝承に出てくるような爵位級の悪魔とか呼んじゃいまいしょうか？」

「それがどういいうことが、理解しているのですか？」

この極限すぎる状況下、エクレスシアは嫌になるほど冷静だった。

「言ったでしょう、目的はもう果たしていると。」

だから、ここら先は全部遊びなんですよ。ほらだから、別に利益だとか、道理だとか、そう言う面倒臭いのはいらぬ訳です。

出来る限り悶えて苦しみながら、私を楽しませて死んでいって下さってお願いしているんですよ……！」

リネンの声と共に、じっと待機していた上級悪魔が、触手の腕を薙ぎ払った。

びゅん、と鞭のように振るわれたそれは、数倍に伸びて三人が立っている場所にまで到達した。

「このッ！！」  
不意打ちを警戒していたエクレシアが、目にも止らぬ速さで振られる触手を迎撃する。  
見事に叩き斬った手応えと共に、触手がハルバードに引き千切られる。

「んなッ！？」  
だが、ハルバードを振り切った態勢の状態で、エクレシアの足元から地面を突き破って無数のツタが現れて、彼女の全身を絡め捕られてしまった。

「口ほどにもありませんねえ！！ あはははは！！」  
「あ、ああ、あ、ああ。。。」  
そのまま空中に持ち上げられながら、エクレシアはツタに全身を締め上げられる。

神の加護は衝撃や呪詛から身を守ってくれはるが、こつ言つ全身を締め上げられる状態になってはまるで無意味なのである。  
リネンは、そう言った攻撃を熟知していた。

「私が本体を、貴女はフォローとバックアップを。」  
「まあ、妥当ね。」  
アビゲイルとクロムが頷き合うと、二手に分かれた。  
丁度その直後、二人の足元から無数のツタが地面を突き破って現れた。

「術式“サンライトレーザー”を展開。」  
地面から出て来た無数のツタは、二人を追って迫りくる。

「照射!!」  
極限に凝縮された太陽光線がアビゲイルの指先から発せられ、焼き切られる。

「えーと、有った有った、焼夷手榴弾つと。」  
クロムは黒衣の裾から取り出した焼夷手榴弾を取り出してピンを抜くと、追ってくるツタの中に投げ入れた。  
その直後には、無数のツタが爆発的に燃え上がった。

「ハロー、元気そう・・・じゃないわね。」  
アビゲイルが囿になっている間に、クロムはエクレシアの下に戻ってきた。

「えーと、これが良いかしら、ひとつふたつみつつ、と。」  
ぽんぽんと両手を叩くと、どういう原理かクロムの手から一本の剣が出て来たのだ。

「じゃーん、これこの間作ったの、中に渦電流を発生させる強力なコイルが入っててね、超高温のジュール熱でスパシャーって焼き斬るの。」

「う、ぐあ・・・あ  
「・・・あ、ごめんごめん、いま何とかするから。あッ、そう言えばこの剣って高熱になるまで二十秒かかるんだった。えーと・・・。」



結局、クロムは一瞬悩んだ末に、抱えていた軽機関銃を乱射した。無数のツタが束に成ってエクレシアを拘束していたものの、彼女の銃撃で木端微塵に吹き飛んだ。

「大丈夫かなツつと。」  
漸く温まってきた超高熱剣で邪魔なツタを斬り払う。

「……………」  
「あれえ…………？」  
まるつきり無反応のエクレシアに、クロムは脈を確認したり瞳孔を確認したり鎧の中に手を入れて胸ををまさぐったり余計なことをしている。

「ヤバい、意識が無い。」  
そう結論付けられた。  
相当強く締め上げられたのだろう、生きてはいるが生身の人間なら潰れてもおかしくない力でやられたのだろう。

「えーと、気付け薬・…気付け薬・…ああ、そう言えばキツツイの有ったわね。  
ちよつと材料足りなくてアルコール濃度ヤバいけれど……………」  
クロムは黒衣の中から空っぽの試験管を取り出すと。

「ひとつ、ふたつ、みつつ、と」  
呪文と言うにはあまりにも簡単な呟きだけで、こぼこぼと試験管の中身が満たされた。

その中身をクロムはエクレシアの口の中をこじ開けて無理やり注ぎ込んだ。

「ぎゃあ!？」

その直後、ブハツとエクレシアが飛び上がる様に息を吹き返した。ただ、彼女の吐きだした液体を真正面からクロムは顔面に受けてしまったが。

「げぼツ、げぼ、ごぼごぼ・・・何飲ませたんですか・・・。」

「うえ、汚い・・・。吞ませたのは霊薬としてのネクターだから。次作る時はちゃんとした材料でやるから、勘弁してほしいわ。」

手品のようにハンカチを取り出して顔を拭くクロムは言った。

「うう・・・なんだか体が熱いです・・・。」

「お酒なんだから、ちよつとした副作用よ、副作用。」

速攻性重視の為に体内吸収が早く成る様に調合しているからそりゃあ酒気が回るのは早いわよ、何て本音をクロムは言わなかった。

「早く立ちなさい、この隙を突いてこないほど舐められてるのよ。」  
「わかって、います・・・。」

若干ふら付きながらも、エクレシアは立ち上がった。

「彼女は、私を蹴って楽しんでいる・・・そこに、隙は有ります。」

「あん、うん、まあ、そうね・・・。」

クロムはどこか遠い目になった。

「うーん、せっかく呼び出したのですから、少しは本気を出したらどうです?」

「……………」

上空から見下ろしながら言葉を投げかけるリネンに、上級悪魔は無言を通した。

「ああ、もしかして、私みたいな小娘に顎で使われるのが嫌だったりします?」

「……………気に入らない。」

「おや? やっぱりですか?」

「違う。」

アビゲイルの投じたカセットボンベを触手の腕で弾き返しながら、上級悪魔は言う。

「ただの苦痛で生じる感情と精神エネルギー、そんなものは低級の悪魔どもが群がる質の悪い餌に過ぎない。

純然たる恐怖こそ、我が求めるもの。苦痛から生じる恐怖など、不純物が多く混じった水と同じだ。喉を潤す気にもなれない。」

「ああ、つまり自分のポリシーがあるってことですか?  
好きにしたらいいんじゃないですか? 私は後ろで見てるだけで満足なので。」

「……………話の分かる召喚主だ。」

上級悪魔が、にたりと笑った。

すると、ずっと佇んでいるだけだった上級悪魔が初めて一歩踏み出した。  
そして爆発的に加速する。

狙われたのは、一番近くにいたアビゲイルだった。  
鞭のように撓る触手の腕が彼女を襲う。

「術式“対衝撃物理障壁”を展開。」  
だが寸前で、防御が間に合った。

彼女の発生させた魔力の壁が、全ての衝撃を相殺させて無力化させたのだ。

「閉ざせ、牢獄剣“ソウルレスケージ”よ。」  
上級悪魔が初めて左腕の手にした奇妙な剣の切っ先を、逆十字に張り付けられた騎士に向けられた。

その直後、まだ身じろいでいた騎士の動きが完全に停止した。  
ぐったりと、死んでしまったように。

代わりに、上級悪魔の持つカンテラにも見える網目の刀身の魔剣の中に、火が灯った。

次の瞬間、アビゲイルを襲ったのは正体不明の発疹だった。  
顔から、手の甲まで、露出している全ての部分に真っ赤な皮疹が生

じたのである。

「これ、は・・・」

それらはまるで、染み出る血のように彼女の衣服や持っていた手にしていたノートパソコンにも広がる。

そして、がたん、とアビゲイルは崩れ落ちるように地面に倒れた。

「末梢神経系に異常を確認・・・激痛のため痛覚遮断。

・・・運動機能障害を確認・・・。ハンセン病の症状と酷似。状況の悪化を阻止するため、機能を、遮断。」

それっきり、彼女は人形のように動かなくなった。

「精神を機械に制御されるか、詰まらないな。」

アビゲイルをほぼ一瞬で完封した上級悪魔は、本当につまらないそうにそう呟いた。

「うわ、エグイ・・・。あれって聖書に記述されるらい病よね。」

その頃、漸くエクレシアを助け終えたクロムが引きつったような表情になった。

今でこそそらい病、つまりハンセン病のことであるが、それは感染症と判明されている。

しかし、聖書にはらい病は汚れであるとされ、家や衣服、持ち物にも感染されるとされている。

つまり、その伝承に基づいた呪詛だ。

「なぜ、悪魔がうちの魔術を……。」  
エクレシアは、その現象に瞠目している。

「うちの魔術って、それ言っちゃだめじゃない？」  
聖書には奇跡として多くのらい病の治療が挙げられる。  
普通のらい病がただの感染症でしかないのだから、どうして家や衣服に感染するのかと言つと……まあ、そう言っわけである。

「と、とにかく、呪詛は簡単です。」  
「そうよね、毒薬と解毒剤は基本的にセットなもの。呪詛返しされたら危険なものね。」  
「何を言っているのか分かりませんね。」  
エクレシアは白々しく流して、改めて上級悪魔と対峙する。

「ねえ、なんで悪魔があんたらの魔術を使えたか心当たりが有るんだけれど。」  
「何の事だか分かりませんね。」  
悪魔め、人間に汚れを移すとはなんと度し難いことなのでしょうか。」

「ああそう。でも残酷な事実。あの魔剣に中にあるの、貴女のお仲間魂じゃない？」

「え……まさか!？」  
そこまでクロムに言われて、思い当たらないほどエクレシアも愚かではない。

魔術の才能は、基本的に全てが魂に依存する。

言ってしまうえば、保有する自らの魂に適さない魔術はどんなに頑張っても使えないと言いうことである。

だからこそ、使用したい魔術に適性のある魂を奪い取って、触媒として使用すれば、その問題は解決するのである。

だがそれは魂の乱獲を招くと、魔術師でも禁忌とされる所業である。

「次はお前の魂を捕え、お前の身が居た魔術をお前の仲間に向けてやろう。」

上級悪魔はそう言っただけでエクレスシアに魔剣の切っ先を向けた。

それだけで、エクレスシアは冷や水を頭からぶっかけられた気分になった。

背中に冷たい氷の棒を差し込まれたような、恐怖だ。

「さすが悪魔……やる事なす事が容赦ないわねえ……。」

流石にやり過ぎだろ、と言っただけと非難の目をリネンに向けるクロムだが、そっぽ向かれた。

クロムはムカついたので、軽機関銃を空飛ぶ怪鳥に跨るリネンに向けて銃撃を開始した。

「おやー」





び声だった。

対処法を心得ているクロムの行動は一瞬である。  
とにかく、直接その声を聞かないことである。

とっさに耳栓代わり成る物を練成して、彼女は両耳に突っ込んだ。

「うええ、最悪。リネンの奴、覚えてなさいよ……。」

耳栓代わりにしたのは、水分を多分に含んだ粘土だった。

とっさの出来事だから背に腹は代えられないが、ねちよねちよした  
感触が不快感を催し最悪の気分にも苛まれるクロムだった。

「う、あ、あああ!!！」

だが、その悲鳴を直接聞いてしまった者の末路を見てしまえば、そ  
んなことは言えないだろう。

エクレシアは両手で両耳を押さえながら、ふらふらと平衡感覚を失  
って地面に膝を突いてしまった。

悪酔いした時のように気分が悪く、思考がぐるぐると廻って何も考  
えられない。

「え……?」

いつしか、エクレシアは知らない部屋の椅子に座っていた。



のっぺりとした、上級悪魔の顔がずいっとエクレスシアの眼前にまで迫って、悪魔は言う。

「お前が痛いと感じることは一切行わない。

女だからということを利用して辱めるようなことも一切しない。

これは男を拷問する場合も同様に、男としてのプライドを折るようなことは一切せずに、私は拷問をする。羞恥や屈辱を好む同胞も居るが、私はそんな不純物は好まない。

召喚主はポリシーと言ったが、人間に例えるなら食べ物の好き嫌いと同じだよ。」

「……………」

「良い目だ、素直で正義感に満ち溢れた慈愛に満ちた心を持っている。

だからこそ、極上の餌なのだよ。くくくく。」

悪魔などには負けないと向けるエクレスシアの視線は、悪魔だけを見ていた。

「では、初級編と行こう。これが何だか分かるか？」

そう言って、悪魔が取り出したのは、金属の長い棒だった。

悪魔はわざわざエクレスシアの両手の拘束具を外して、彼女の両手にその長い金属の棒を持たせた。

「く、腕が動けばこの棒でぶん殴ってやるのですが……………」  
冷たい金属の感触が、エクレスシアの手に伝わってくる。その上から手を拘束される。

当然ながら、腕にもベルトで拘束されているのだから、棒なんて持つても手を上下に動かすぐらいしかできない。

そんなエクレシアの心の内を分かっているのだろう悪魔は、くくくと笑いながらその辺りに有る拷問具に座る上級悪魔は。それ以降、彼は一言どころか、一切のアプローチを行わなかった。

「（一体何を考えているんですか・・・。）」  
五分が経過して、悪魔が何も行動を示さないことにエクレシアは不信感と若干の不安を覚えた。

十分が経過した。  
悪魔は石像のように微動だにしない。

十五分が経過した。  
そこで、エクレシアは初めて異変に気付いた。

悪魔の動向に気を向けて集中していた所為で全く気付かなかったが、エクレシアの持たされた金属の棒が、いまだに冷たいままだったのだ。

十五分も握り続けていれば、体温で温まりそうなものなのに。  
まるで、彼女から体温を吸い取っているかのように、もう指先が冷たくなって僅かしか動かない。

「気付いたか。」

悪魔が嗤う。

「お前が味わう恐怖は、自分の体が冷たくなる恐怖だ。たとえ意識が有ろうとも、いや意識が有るからこそ、自らの肉体が冷たくなるのは己の死を連想する純粋な恐怖の一つ。

人間の体温は30 以下に成れば幻覚みたり、20 以下に成ればもはや手遅れだが・・・この拷問ではお前の体が凍りつくまで行われる。」

ゆっくりと丁寧に説明をすると、悪魔は彼女の見える位置に体温計を置いた。

「くくくく、どうした？」

寒さを感じて筋肉や血管が収縮し、身震いするにはまだ早いぞ。「悪魔が嗜虐的な笑みを浮かべてそう言った。

「（わ、わたしは、負けない。」

エクレシアの体は、今も迫りくる寒さとは別に震えていた。

「安心するがいい。私は召喚主のように、心を壊したりなどはしない。」

そんな無駄なことは、しないさ。くくくくくくくくくく。」

拷問は、まだ始まったばかりだ。

## 第二十九話 悪魔召喚士（後書き）

エクレシアはいつも酷い目にあったりしますが、私はサディストではありません。

だって英雄譚とかじゃ、敵につかまって拷問とかセオリーじゃないですか？

### 第三十話 理を制する者

「ガキのくせに、粹がるからこうなるんですよ。」  
まんまと上級悪魔の術中にはまり、ツタの触手に再び捕らわれたエクレシアを見下だすリネンは薄く笑っていた。

「適当に鬨ったら魂を引っこ抜いて、他の連中の相手もしてあげてくださいね。」

ふっふふふ、自分たちの神の力を悪魔に使われなんて知ったら連中どんな顔をしますかねえ。」

「ねえねえちよっと、リネンリネン。」

「なんですか。」

リネンは急に鬱陶しそうな表情に成って、クロムに向き直った。

「やりすぎよ、やりすぎ。」

「えー、別に良いじゃないですか。私の数少ない生きがいなんですから、偶には我がままくらい良いじゃないですか。」

「さつきは手加減してくれるって言ったじゃない。」

「ええ、確かに手加減するつもりでしたよ。」

ですけれど、なんかやってる内に楽しくなっちゃってますよ、ついで……。」

えへへ、とおどけたようにリネンは笑って肩を竦めた。



「冗談じゃないわ。全く、冗談じゃない。まあ、半分どうせこうなるだろうとは思ってたけど、私と貴女との友情を信じたのに。」

「あれ、聞いていませんでしたか？」

リネンはなぜか不思議そうに首を傾げた。

「てつきり、私は“本体”から話を伺ってると思っていましたのですけれど。」

「本体とか無いから、私は、“一人”しかいないんだから。」

当然じゃない、この世界に同じ人間は二人として存在できないんだから。でも、たとえ同じ人間が数百人や何千人と居ようとも、その全てが“同一人物”なら、それは矛盾してはいないわ。」

「前に得意げに教えてくれましたね。」

でも今に成って疑問に思いましたけれど、別に全員が全員同じ食事も生活を送れているわけじゃないんですよ？

そこにやっぱり細かな差異とか生じるんじゃないんですか？」

尤もな話ね、とクロムはリネンに頷いた。

「この世で最強の観測者は、人間よりネン。今この世界に存在する六十億を超える人間の認識は、物理法則を絶対のものとしているわけ。」

じゃあ、その六十億以上の人間が全く同じ顔で、全く同じ背丈、全く同じ声、全く仕草や記憶。そんな人間を、何十人が存在しているなら、誰かがそれを認識した時にその全てを“同一人物”と定義することができる。

世界を騙すって、簡単なことよ、リネン。

所詮は騙されやすい人間の認識でしかないんだから。故に、“私”はここに居ながら第二層にも存在できるし、世界中のどこにでも居

られるわけ。」

だから私は不死じゃなくて不滅の魔術師なの、と彼女は嘯く。

私を殺すには、“私”を全滅させる他にないのだから、と。

「私は、百二十七人目だから。」

そう言ったクロムの首に掛かっていた小さなプレートを胸元から取り出した。

そこに刻まれた文字は、こうだった。

『メリス？127 戦闘用』

百二十七人目の、メリスの同一人物だと言うことを示す。

ただそれだけの認識票ドックタグだった。

「ドツペルゲンガーの怪異も型無しですね。」

「でもね、だからと言って、全員の“私”の意識を共有しているわけじゃないのよ。」

私と同じ戦闘用に調整された個体だけでも今は四百人も居るのよ、そんなの全員の“一人”を統括しているオリジナルの“私”の脳が処理できなくなる。」

だから全体の思考を上から見下ろすくらいしかできないのよ。」

「……というか、なんでこんな状況でこんな説明させるのよ。」

「ああ、こういうことですよ。」

次の瞬間。

ぶすり、とクロムの腹から真っ赤な手が生えた。

「え………？」

振り返ったクロムの後ろには、何も居ない、が存在していた。

「ステルスウオーカーって、上級悪魔ですよ。ほら、人間って家に一人でいると、誰も居ないのに暗がりには誰か居る気がして怖くなったりするじゃないですか。それが具現化した存在ですよ。」

この間、その能力を模すとか言って、研究開発担当の“貴女”に一体引き渡したんですけれど、知りませんでしたか？  
リネンは、笑いながら言う。

「なん、で……？」

クロムは血を口から零しながら、問うた。

「貴女のオリジナルから、私との関係性を疑われないようにするために、目の前の貴女を殺して下さいって、言われたんですよ。聞いていませんでしたか？」

「うわぁ……私でも、そうするわぁ、流石、“私”だわ。」  
ぶす、と彼女の血で真っ赤に染まった手がクロムの腹から引き抜かれる。

ばたっ、と倒れた彼女の下に、血だまりが出来る。

「私の為に貴女の命の一つを犠牲にしてくれるなんて、本当にメリスは私の親友ですよ。」

「それでも・・・わたしは、恨むわ、よ。私の、記憶は、バックアップが、あるんだから。」

同じ・・・番号の私が、再び補充、された・・・その日、私は貴女に、対する・・・恨みを抱いたまま・・・地上に蘇るわ。覚えて、おきなさい・・・。」

「そんな私もありなんじゃないかって、メリスが言っていましたよ。」  
余人には意味不明な言葉を持って、リネンはこちらを見つめるクロムに優しい笑みを浮かべた。

「人間にはあらゆる可能性があるからどうのこうの、人生の局面がどうちやらこうちやら、無限に生じる選択肢は普通一つか選べないから総当たりしてなんちゃかんちゃら。」

そうしているうちに、窮極の極致に辿り着く自分がいずれ生まれるんでしたっけ？

正直今の説明の十倍くらいの長話だったんで、あんまり覚えていませんが。

だから、一人くらいリネンと敵対する“私”が居ても良いと思うわ、とか言われました。」

正直私には理解できませんが、とりネンは肩を竦めた。

「あははははは、流石私よね!!! 私最高ッ!!! 我ながら、狂ってる・・・。」

一頻り壊れたように笑うと、クロムは己の血だまりに顔をうずめて

動かなくなつた。

「親友に裏切られても絶望しないとは、確かに狂っているのだろうな。」

つまらなそうに、上級悪魔が呟いた。

「それだけ私が信用されていないってことでしょうかね。だって、メリスは自分大好き人間ですから。有益無益でしか人を判断できない可哀そうな、そのくせ惚れっぽくて割と純情なところもあるんですよ。」

いつか駄目な男に誑かされないか心配ですよ。」

「召喚主よ、貴殿は親友殿を愚かしいと思っているのか、それとも親愛を抱いているのか？」

何か人の心に関心が有るのか、上級悪魔が問うてきた。

「あんまり信じてくれる人が居ないんですけれど、実は私、結構情が深いんですよ。」

貴方も役に立つてくれたら、正式に契約を結んでも良いですよ。待遇は応相談ですが。」

「それは断ろう、貴殿と私は合わない。」

「それは残念ですね。」

リネンは、ただ笑うだけだった。

「おい、リネン。」

するとその時、リネンの背中から両腕を肩の上に置いて彼女の顔を掻き抱くように、一人の男が現れた。

その男は、金糸で意匠がされた真つ赤な服装に、悪趣味な首飾り、両手のどの指にも色とりどりの指輪がはめられている。

更には純金製のブレスレットや、ブランド物の最高級腕時計、そして両耳にはこれまた悪趣味で高そうな水晶のドクロのイヤリングまで付いていた。

まるで持ち物に金を掛けることに何か意味を見出しているような格好である。

だが、その成り金のチンピラみたいな男の瞳は、紅く瞳孔は縦に割れている。

傍から見れば悪い男に引つかかった町娘の二人組と言う風体だが、例えば悪魔たちに二人の内どちらが恐いかと問われればこのチンピラみたいな男の方だと答えるだろう。

本物の悪魔から悪魔呼ばわりされるリネンより、その男は純粹に邪悪で恐ろしいのだ。

「おや、どうしましたか、ファニー。」

リネンは問うていながら、くるりと首を回して抱きついてきた男の唇に口づけをした。

男はそのまま顔を抱きしめる力を強くすると、お互いの舌と舌を絡め合う濃厚なキスに発展した。

「召喚主よ、次の命令は如何に？」

このままではこんな所で情事にまで発展しそうな雰囲気だったので、上級悪魔は事務的に問うた。

実はこの中で一番真面目なのは彼だったりする。  
悪魔は無駄な事をしないし、必要なら無駄を省く連中なのである。

「っち、邪魔しやがって。まあいい、

リネン、そろそろ潮時だ。調子のってへまするのはいつものパターンだろ。」

「そう……ですね。どうせ目的は達成していますし。

これで保険が取れれば儲け物だったという感じでしたし、そろそろ引き上げますかね。」

リネンはエクレシアを前にした狂ったような態度は鳴りを潜め、熟考し冷静な判断を下した。

「それで、予想通り“魔導師”たちは集合していますか?」

「ああばっちりよ、今この階層に、邪魔者はいねーよ。」

「そうですね、私はこれから上に行って彼らに顔を出していきますから、これでファニーも大暴れできますね。」

「おう、欲求不満でしかたなかったぜ。」

「もっツ……。」

リネンはファニーに頬を舐められて、いじらしく身を振った。

先ほどの悪行っぷりからは想像できない姿である。

「じゃ、行きましょうか。」

「……いや、待て、どうやらお前に客のようだが、リネン。」

「おやおや。仕方ありませんね。」

「次の予定までへましないように俺が見張ってやるよ、好きにやりな。」

ファニーはリネンの髪の毛を手で梳きながらそう言った。

「ええ。」  
リネンが頷くのを確認すると、ファニーはどっかりその場に座りこんでこれから起こる茶番を想像して、にやにやと笑い始めた。

「貴様が、黒幕か……。」

「おや、これはまた可愛らしいお客さんですね。」  
濃い瘴気の中から現れたのは、精悍な顔立ちの中にも幼さが隠しきれない、少年だった。

リネンは一目で年齢が十代半ばも達していないと見破った。  
教会の騎士としては若すぎるな、と言うリネンの思考を裏付けるように、その少年はハルバードで武装はしているものの着ているのは礼服だけだった。

リネンは、努めて挑発的に言った。

「ここは子供の遊び場じゃありませんよ、お姉さんの邪魔をするとあそこの人たちみたいになっちゃいますよ。」  
リネンは後ろに設置してある逆十字とそこに張り付けられている連中を示しながら言った。

しかし少年は、それを見ても眉ひとつ動かさなかった。

「悪魔は、皆殺しだ。それを使役する、貴様らもな。」



その言葉は嘘ではないと示すように、彼の持つハルバードは悪魔の血で濡れていた。

「舐めるなよ、これでも先日イタリアの事変で異教徒を三人斬り殺した。」

この歳で、恐らく見習いの身でありながらその実力、将来は有望だろう。

ただ相対する悪い魔術師はその芽を刈り取る気満々であったが。

「ああ、なるほど。」

だが、リネンはそれよりも、その短いやり取りだけで全てを理解した。

「貴方、もしかしてもっと小さい頃、親を悪魔に殺されましたか？少年は答えない。リネンの揺さぶりに動揺した素振りも見せなかった。

だが、一瞬、確かに一瞬、目蓋が動いたのを彼女は見逃さなかった。

「そうですね、それはさぞや憎いことでしょうねえ。ですが、愚かだ。」

少年はもはやリネンの言葉を聞いていなかった。

彼はすぐさま疾走し、こちらに向かって斬りかかってきたのである。正しい判断である。

このような遭遇戦に於いて、リネンのような魔術師には魔術の準備

をさせる時間を与えないのが常道である。

だが、あまりにも正し過ぎた。

リネンは上級悪魔に目配りした。

上級悪魔は即座に動いた。

否、動くまでも無かった。

少年の周囲一帯の地面から、間欠泉のようにツタが爆発したように現れたのである。

ハルバード一本で、幾ら実力が有ろうと見習いで火力の低い魔術体系の人間の子供など、まな板の上の鯉も同然だった。

801

「ぎゃはははははは、あつさり返り討ちにあつてやんの!!! だつせえなあ!!!」

ファニーが可笑しそうに手を叩いて笑った。

べちゃり、と少年は二人の目の前に叩き落とされた。

「おの、れ……。」

「あれー、今さつき悪魔を皆殺しにするとか言ってた奴が地べたを這いつくばってますねえ、聖職者が嘘を吐いちゃ、だめじゃあないですか。」

ぐりぐり、と少年の頭を踏み躪りながらリネンは満面の笑みを浮か

べながら言った。

「おいおい、リネン。許してやれよ、まだまだガキじゃねえか。それに相手がお前じゃどんな奴が相手でも結果は同じだろ。」

「そうですかねえ？」

とぼけたようにフアニーに聞き返す、リネン。

こう言う相手には人質を取るより、徹底的に侮られ、あまつさえ敵に同情されることが何よりも屈辱なのだ。

「じゃあ、助けてくださいお願いしますって言えたら、見逃して上げますよ？」

「ふざけるツー!!」

「うーん、じゃあ、こうしましょう。」

まるで名案が思い付いたと言わんばかりの表情で、リネンは両手を合わせた。

「今から上空百メートルの高さから貴方を頭から落としましょう。貴方は神に祈るだけで良いんです、貴方の祈りが通じれば助かるんですからね。それとも、自分の信仰心に自信がありませんか？」

「あ、悪魔め……。」

騎士クラスの魔術師なら、実際百メートルくらいから落下しても別に平気では有る。

だが、頭から落ちた場合、最悪自重で首の骨が折れてしまう可能性が高い。

まさしく、神に祈れと言わんばかりの、意趣返しに近い逆異端審問であった。

「貴方は自分が人間め、と言われて怒りを感じたりするんですか？」  
「この、魔女がああッ！！」  
少年は渾身の力を込めて、辛うじて手にしていたハルバードを振り上げた。

「相手の隙を窺うならもうちょーっと、殺気を隠したほうが良いと思いますよ？」  
絶妙なタイミングで、少年は振り上げた手をリネンは蹴り上げた。  
がらん、と少年の手から落ちたハルバードの音が、死神の足音だった。

「はいじゃあ、お楽しみのお自由落下ゲーム、始めましょうか。」  
「ひゅーひゅー。」  
ファニーが横から適当に合の手を入れる。

「ちよつとストップ。」  
「ん？」

「やっぱり全身の神経を霊媒手術でズタズタにして二度と体も魔力も動かせなくして、一生笑い物にされる呪いとか掛けるなんてなんてどうです？」

「ひゃあ、イカすう！！！」

「でしょうー？ でも、その前に。」

これ以上何も言わせる気も無いと言わんばかりに少年の頭を踏みつ

けていたリネンは、彼の片足を掴みあげた。

「これ、やっぱり要らないんで返します。」

「ぼい、っとリネンは前方に少年を投げ捨てた。

「私が担当の従士が世話になったな。」

現れたのは、マスター・ジュリアスだった。

濃い瘴気で見えないが、少なく見積もっても騎士が五十人以上は随伴しているだろう。

「救護班。誰か、この馬鹿を連れて行け。」

「ハッ。」

すぐに背後に控えていた女性騎士の一人が少年に肩を貸して濃い瘴気の向こうへと消えて行った。

「ほーら、調子のおつて遊んでっから取り囲まれちゃったぞ。」

「やーですね。こんなの取り囲まれた内に入りませんよ。」

「空間を遮断する結界張られちゃったぜ、すげえ手際だな。」

「想定範囲内です。」

リネンはにやりと笑ってファニーにドヤ顔を見せた。

「貴方達、あそこにいる人質がみえませんか？」

「あそこに何が居るのかね？」

「あれですよ、あーれ、……あるえ？」  
リネンが振り返ると、そこに有るはずだった十三の逆十字が倒壊していた。  
しかもご丁寧にも人質も全員居ない。

「な、なんで教えてくれなかったんですか？」  
「だってこっちはばっか有利じゃつまんねーだろ？」  
「それはそうですが……。」  
けらけらと笑うファニーを、リネンは少し恨めしそうに見詰めた。

昇降魔法陣の上に居る人質を監視させている悪魔を動かすわけにはいかない。  
かといって、呼び戻せば人質には逃げられる。  
ジュリアスたちがわざわざ仕掛けずに待っているのは、リネンにその選択のどちらかを選ばせるためだろう。

「（随分とお優しいこつたなあ。）」  
内心そんなことを呟きながら、ファニーは笑みを深めた。

ちなみに今、上級悪魔が捕えているエクレシアは人質に入らない。  
彼らは彼女一人くらいなら、尊い犠牲で済ませるくらいは覚悟しているはずだ。

「うーん、参りましたねえ。どうします？」  
「もう乳臭えガキじゃねえんだから自分で考えろよ。」  
「うわあ、酷い。酷いですね。愛する私に対してその仕打ち、酷いとは思いませんか？」

リネンのあからさまに時間稼ぎな問い掛けに、ジュリアスは鼻で笑っただけだった。

しかし、その下で彼は二人の間抜けなやり取りのどこまでがブラフが見極めようとしていた。

この世で、彼女のような魔術師ほど信用していい人間は居ない。

「うーん、うーん、……よし、良いでしょう。」

先ほど捕えた騎士殿の魂を解放して差し上げなさい。異端審問でも何でも受けて上げましょう。」

「良いのか？」

「交渉の余地がある事を示したいだけですよ。」

「なるほど。」

上級悪魔は、静かに頷いて魔剣を掲げた。

すると、そこに灯っていた炎が消え失せたのだ。

「でも、私も自分が大事ですから。」

彼女はその為の人質にしましょうか、私の話を聞かないと彼女の魂は悪魔に喰われますよ。」

「勝手に話を進めないで貰おうか。」

冷淡な口調で、ジュリアスが口を開いた。

「では参考までに、私の罪状を訊いておきましょうか。」

「そこまで言うなら聞かせてやろう。まずは神への背徳から語ろう。」

か？

それとも現実的に、今回の一件で生じた損害や傷害についての話からするか？」

「やっぱり長くなりそうだからパスで、そう言うのひっくりかえして全部でいいんじゃないんですかね、私ってば被告席で長々と罪状を読み上げられるのとか嫌なんで。」

リネンの物言いはもはや罪科は確定しているのは分かっている人間の物だった。

歴戦の異端審問官だったジュリアスは、なぜかそこに違和感を覚えた。

悪魔の使役。

そんなの発覚し、異端審問に掛けられるなら例外無く火炙りだ。

それは使役する側は当然理解しているはずだ。

それなのに、わざわざ罪状を確認する、そこに意味など有るはずもない。

「（何を考えている、この女……。）」  
ジュリアスは警戒を一段階挙げる。

「それにしても、一人や二人くらい襲いかかってくるとは思ったのですが、規律が徹底しているんですね。私も昔、教会とことを構えたことが有るのですが、その時はちょっと挑発するだけで、ふふふ、入れ食いでしたよ。」



「なぜ、このようなことをした。場合によっては釈明の機会もあるだろう。」  
ジュリアスはリネンの言葉を無視して、自分の聞きたいことだけを問うた。

「ああ、それは貴方達の親玉に直接言いますから、貴方達の知る必要の無い話です。」

「……まさか、本気で話し合うつもりか？」

「さつきからそう言ってるじゃありませんか。何を聞いていたのですか？」

心外だ、と言わんばかりに両手を挙げてリネンは溜息を吐いた。

なに暢気に話してんだ、と思う人間も居るかもしれないが、魔術師の戦いはただ魔術をぶつけるだけではない。  
言葉の裏一つに、策略があるのである。

例えば相手から言質を引き出し、それを頼りに制約を掛けるとか、言葉からどこの出身か割り出しどんな文化圏の魔術を使うのか、外見や仕草などでも分かる事は数多にあるのだ。

「うーん、でもやっぱり、ただで異端審問を受けるのつても嫌です。絶対痛いですよ、あれ。それに私って、結構負けず嫌いにしてね。」

「だから……」  
リネンは指を鳴らした。

「精いっぱい、抵抗しまーす。」

上空に、巨大な魔法陣が展開された。

そこから、黒い悪魔が無数に舞い降りて来た。

「儀式が必要な魔術を、この速度だと!？」

現代の魔術師の大多数が悪魔と交信し、その一部の力を降霊させる  
のでも入念な準備が必要とされる。

それなのに、本体をこんなに大量に召喚せしめるその実力は、常識  
はずれも甚だしい。

仮にジュリアスに気付かれずに魔術を構築していたとしても、寸前  
まで気付けないほど彼も耄碌しては居ない。

「別に私は召喚はしても、契約はしていませんからね。」

私はただ彼らにこう言っているだけです、好きなだけ暴れていいか  
ら、ちよつとだけ私の言うことを聞いてくださってね。」

「おのれ、そのような言い逃れができると思うかッ!？」

「それは貴方がたの神に聞けばよろしいのでは？ それでは、私は  
忙しいので。」

リネンの奇襲で、騎士たちは一気に隊列を乱され、乱戦状態に突入  
した。

彼女は余裕の表情で結界の解除に取りかかる。

「逃がすかッ」

「おい待てよ色男。」

邪魔が入らなければ確実にリネンを捉えていただろうジュリアスの

神速の一閃が、阻まれた。

ファニーが、片手でジュリアスの剣を掴んだのだ。

「貴様、やはり人間ではないなッ。」

「ああ・・・人間だったぜ。」

そうして対峙した二人はそのまま、ファニーにより無理やりこう着状態に陥ってしまった。

「隊列を立て直せ！！ 冷静に対処して防御を固めろッ！！！！」  
ジュリアスの怒号が、今の状況を物語っていた。

寒い。

エクレシアの思考を支配しているのは、そんな言葉だった。

金属の棒から伝わる冷たさは手から伝わり、腕から肩、首から胸元にまで浸食し、今は頭の天辺から足の親指まで冷え切っている。

極寒の冬山で遭難し、山小屋で一人寒さに震えるのはこんな気分なのだろうか。

既に体温は、零度を下回っている。

体が凍りつくのは時間の問題だった。

だが、エクレシアは漠然とした寒さに心を閉じ、恐怖に抵抗することでは自分の身を守る事が出来なかった。

「くくくくくく。」

悪魔が嗤っている。

エクレシアは、反応する気力も無かった。

「お前は、それで耐えているつもりなのか？」

「・・・・・・・・・・」

本来なら死んでいて当然の体温のエクレシアには、口を開くことなんてできるはずも無かった。

「お前はただ、屈し続けているだけだよ。」

ただ心を閉ざし、私はまだ負けていないと自分に言い聞かせている、ただそれだけだ。」

それは、エクレシアの心を抉る言葉だった。

「本来なら、お前の性格ならそれはあり得ないよな。」

確かに今は極限の状態だろうが、お前はそれを許さないだろう。お前は、今の自らの状態を恥じるだろう。お前はお前を許さないだろう。

う。」

悪魔はエクレシアが言葉を出せないのを良いことに、好き勝手言う。

「立派だが、さぞ生きにくいだろう。」

お前はいずれ、自分自身に押しつぶされて死ぬのだろうな。」

そして、悪魔はそんな言葉を残した

その時、エクレシアの意識の牢獄であるこの部屋に、声が響いた。

「これは、さっきの貸しよ。一度だけ、助けてあげる。」

それは、“処刑人” ジェリーの声だった。

「　　ッああ!?!」

ぶつツ、とエクレシアの意識は一瞬にして現実へと引き戻された。

精神干渉の魔術を無理やり断絶されたショックで、一瞬凄まじい頭痛がエクレシアを襲う。

精神攻撃に耐性の有るはずのエクレシアをあっさり拘束する悪魔の技量も凄まじいが、それを無理やり解呪するあのジェリーと言う“処刑人”の魔術も悪魔じみていた。

「こ、これは……。」

頭痛の痛みが後引く頭で、エクレシアは状況を確認する。

数十人の騎士と悪魔が入り乱れての大乱戦。

陣形を組み直し組織的に対抗がなんとか出来て優勢な騎士たちと、地力と数に任せて各個の騎士を圧倒する悪魔たちが周囲に点在している。

現状ではどちらが優勢とも言えないが、状況がこのまま続けば悪魔の方が有利だろう。

「（私は……）」  
エクレシアは、今現在全身をツタで拘束され、空中に持ち上げられている。

「（私は、何もできないのですかッ!?!）」  
せっかくジェリーに助けってもらったと言うのに、これでは全くの無駄になる。

悔しい、悔しかった。

歯を食いしばって、何もできない自分を憎んだ。

だが、そんな彼女の祈りが通じたのか、エクレシアにチャンスが訪れた。

ひゅん、と彼女の目の前に何かが飛んできて、一瞬にして炸裂した。それは、無数のバタフライナイフ。

「いけ、増殖剣『ミリオン・バタフライ・インフィニティ』。」  
それを投じたのは、血だまりの中で笑っている、クロムだった。

たった一本にして、百万本のバタフライナイフ。

一本の質量の中に百万本のナイフが同時に存在しており、最大値である百万本に達するまで無限に増殖し続ける古代錬金術の粹を集めた魔剣だった。

しかし、その最大値に達するまで無限に増殖すると言う特性は、そこまで重要ではない。

武器としての性能はただのナイフ以上の物ではないから、魔剣としてのランクは下から数えた方が早い。

そもそも、百万本のナイフを操ることなどどんな魔術師にだって不可能だし、一本にして百万本という特性が分裂した後も一つへと戻ろうと言う作用が働いてしまう。

正直、魔術品としての価値しか持たない、骨董品なのだ。

だが、クロムは・・・メリスはその最大の特徴である、一本にして百万本という特性を最大に生かす事が出来る。

一本が、百万本。

百万本が、一本なのだ。

その中でも、たった一つだけある本体の材質を、練成し直し、魔剣

の余剰キャパシティに術式を付与することが出来る。  
そしてそれは、百万本全てに影響を及ぼす。

例えば、百万本のナイフを爆薬にすることだって、出来る。

一瞬で一本から銀色の濁流と見まごうばかりの大量の銀のナイフが、  
エクレシアの全身を拘束していたツタに突き刺さり、その材質が一  
斉に変化する。

変化した後に、出来たのは液体だった。

物質の元素や構成を大幅に組み替え、足りなければ魔力で代用し、  
全く別の物質へと変化させる高等な練成の果てに出来たのは、

ニトログリセリンの原液である。

そして、爆発。

展開されたナイフ数百分の質量の爆薬が、起爆した。

エクレシアは、その爆発の中から生還した。

彼女も全身を守っている鎧が無かったら流石にできない芸当だった  
が。

「はあああああああ！！！！！」



手元にハルバードは無かった、だから腰に帯刀している剣を抜いて、  
今まで自分を苦しめていた上級悪魔へと向けた。

だが、精神干渉を切断されたのをエクレシアが目を覚ましていた時  
から知っている上級悪魔が、彼女の攻撃を許すはずも無かった。

間に合わない、本来なら、エクレシアはこの局面で負けていた。

悪魔による拷問を受けての極限の状態での生還、そんな異常状態で  
エクレシアの精神は研ぎ澄まされていた。

過剰なストレスと恐怖、そして重く押し掛かった彼女の責任感。

それらが、あの時と同じように、あの重く苦しい選択をした、あの  
時のように。

「 術式、『聖ヒルデガルドの幻視空間』を発動。」

彼女に、限界を超えさせる。

十三世紀に活躍した中世ヨーロッパ最大の賢女の名を冠したその魔術は、彼女が体験したと言う幻視体験を魔術的に分析し、説明しようとした時に生まれた副産物である。

ヒルデガルドは幼少の時から所謂トランス状態ではない状態で、「生ける光」と呼ばれる宗教的幻視を何度も体験したと言う。

この魔術ただ名前を冠しているだけで、殆ど伝承の神秘は継承してはいないが、奇跡に遭遇した人間の極限の精神状態で、魔術を行使することが出来る。

幻覚を応用した、精神制御の一種である。

一言で言えば、一瞬だけ明鏡止水の境地に自身の精神を高める事が出来る魔術なのだ。

魔術を行使する上で最大の障害は、自分自身のイメージである。

あらゆる感情によって生じる雑念や邪念は、円滑な魔術の運用を阻害する。

イメージが崩れれば魔術としての強度や神秘性も落ちるし、そもそも発動すらしないこともある。

魔術師は常に平静でなければならぬ、と言われているのはこの為だ。

しかしこの魔術は、その一切合財を取り払う。

余計な思考は完全に取り除かれ、澄み切った静止した水面のような精神状態で、魔術を構築、行使することが可能となる。

更に、それは肉体にも影響し、一瞬と言う時間を自身が体感する時

間にまで引き延ばしてしまい、結果的に超人的な身体的能力を発揮したように見える。

そう、ただの一撃のみ、エクレスシアの剣は達人の物へと昇華される。その上に、彼女は魔術を乗せる。

自身を教会と定義し、そこには神が存在しているとする。この状態で、更に自身をトランス状態に移行させるそれは、一種の神降ろしに近い。

そしてこの時、彼女の能力はまさしく、  
神域に達する。

ただの一振り。

彼女はジュリアスから受け継いだ聖剣を振るった。それだけで、幻視空間の射程範囲内に居る悪魔全てを引き裂いた。

「わあお。」

召喚した悪魔の半数を撃滅せしめた一撃を受けたはずのリネンは、ただただ感心していた。

「凄いですよ、ファニー、大ピンチです。

手持ちのストックが全滅してしまいました。今の私の耐久力って地上の一般人くらいしかありません。」

「そりゃあ、不味いな。撤退するぞ。」

ずっとジュリアスと睨みあいをしていたファニーが、リネンの真横に出現した。

ほぼ同時に、騎士たちが張ったこの周囲一帯を覆っていた結界が消滅した。

二人は騎士たちから逃げるように、背を向けた。

「逃がすかッ!!」

そして、騎士たちの中から一人の男が躍り出て来た。

手には切っ先の無い幅広の剣を持ち、鎧を付けずに黒い礼服を纏ったその姿は、死刑執行人。

処刑を前提とした、戦闘を行う異端審問官に他ならない。

「これより異端審問を開始する。」

異端を狩ることに特権を与えられた即興の裁判は、被告と死刑を言い渡す裁判官しかない。

「貴殿が数多の悪魔をを使役し、人類に混乱と災厄を齎したのは明確である。」

「それで？」

あるうことが、状況を不利と見たリネンが、振り返ってそう言った。

「待てッー!!」

その瞬間、急に嫌な予感が過ったジュリアスが、走りながら声を挙げた。

しかし、それは間に合わなかった。

「邪悪な異端者に、もはや弁明も釈明の機会すら不要ッ、即刻、火炙りの刑に処する!!!」

「あはははははははは。」

リネンは、その判決を嘲るように嗤っていた。

彼女の足元から、人間が一瞬で炭化するだろう灼熱の炎が噴きあがった。

それはただの炎ではない。

異端審問系の魔術は、相手の宗教的敵対者であることを定義し、神の代行として罰を与える処刑の魔術である。

中世暗黒時代のヨーロッパに発展し、異教徒を震えあがらせた他宗教弾圧の異端審問を戦闘用に縮尺されている。

これこそ、彼らの神聖魔術体系の他系統魔術に対する圧倒的アドバンテージである。

この魔術で異端と定義される宗教的背徳行為を行った場合、問答無用で即死させる攻撃が飛んでくるのだ。

ギロチン、火炙り、絞首、石打ち等々と、人間を即死させる威力と状況が出現するのだ。

何が出てくるかは罪の度合いによるが、リネンに当時最大の酷刑と言われ、死体を埋葬する彼らの宗教としても、彼女を焼き尽くす火炙りが出てくるのは当然の話だったのかもしれない。

殆ど火柱としか言いよつた無残な火力だが、これはいちいち磔にして足元に火を焚いて何時間も放置するなんてことが出来ないからである。

魔術で重要なのは、結果なのだから。

誰もが、そこに掛け付け、悪魔と戦っていた騎士たち全員が、終わった、と思った。

悪魔たちも、呆然とリネンが火刑に処されるのを見ているしかできなかった。

だが、だが、ただ一人、足を止めたジュリアスは別の物に視線が行っていた。

嘲るように嗤う、ファニーに。

そして、

「わあ、派手に燃えましたね。」  
自分が処刑される様を、可笑しそうに笑って見ているリネンがファニーの横にまで当然のようにどこからか歩いてきたのだ。

「馬鹿、な……」  
死刑を執行した異端審問官が呆然と呟いた。  
絶対不可避の魔術が炸裂したにも関わらず平然としているのは、不可能なのだ。

しかもこの異端審問魔術は、対象が変わった場合、発動すらしない。確実に殺す為に、殺す相手によってその都度調整が必要だからだ。

だから外しもしないし、避けることもできない。

「いやあ、みなさん、ご迷惑を掛けました。  
わたくし、リネン・サンセットは、神の裁きによって真人間へとなりました。」

そして、彼女はそんな馬鹿げたことを口にした。

「貴方のお陰ですよ、ありがとうございます。」

「馬鹿な、もう一度だ、もう一度ッ!!」

しかし、幾ら異端審問官が先ほどと同じように処刑を言い渡しても、今度は火の粉一つ巻き起こる事はなかった。

「もう一度って、おかしいことを言うんですね。」

一度裁かれた罪をもう一度裁くなんてあははははは、自らの無能をさらけ出すようなものじゃありませんか。」

何を冗談を言っているのか、トリネンは満面の笑みで言った。

「それが、それが狙いかッ!!」

ジュリアスには、リネンがわざわざ何をしたかったのか、理解してしまっただ。

「一事不再理、って言うんですっけ？」

これを含んだ大陸法がヨーロッパに普及したのは中世末期、いやあ、残念でしたねえ。あと四百年早かったら、私をちゃんとして殺せましたのに。」

一度裁いた罪は、決してもう一度裁いてはいけない。

それは被告人に無限に処罰を受けるリスクがあるのは不公平であると言う事から来ている。

だが、彼らの神は絶対で、その名代として裁いた罪は、神の名を汚す行為に当たる。



「いったい、どうやって……。」  
異端審問官が、己の失態の重さに崩れ落ちた。

「ドッペルゲンガーって、知ってます？

所謂“成り代わり”の怪異が具現化した存在ですよ。この手の話は色々ありますが、この悪魔は襲う相手に完全に成り切り、魂すらも模倣して存在を奪い取る。」

ドッペルゲンガーに遭ったら死ぬってそういう事ですよ、とりネンは講釈した。

「まあ、偉そうに言ったものの、これは私の友人の受け入りなのでドッペルゲンガーと契約して、私の二重存在とてこの場で躍らせ、こうやって処刑されて罪を裁かれるのを待っていたわけです。

同一人物な訳ですから、私の罪も裁かれたも同然って訳です。いやあ、メリス、世界を騙すつても簡単ですね。」

リネンはまだ辛うじて息をしているクロムを見下ろしてそう言った。刺された腹部を抑えたクロムは口だけで、そんなの出来るのはあんなだけよ、と言った。

「貴方達の神も、大したこと有りませんね。」  
リネンの哄笑が響き渡る。

それは騎士団の、完全なる敗北だった。

「じゃ、今度こそ本当に貴方たちは用無しですね。これから私は、真人間になった私は、『カーディナル』の所へ行って今回の一件の全てを伝えに行くつもりです。」  
「それは、『カーディナル』はこのような失敗をしないから、弱みを消すためにわざわざこんな茶番をしたのかッ」  
怒りに満ちたジュリアスの言葉に、ええ、とリネンは頷いた。

「流石に彼女の程の聖職者は私も初めてなので万全を期したかったですよ。」  
「いやあ、貴方達は本当に、バカみたいに踊って、バカみたいに役に立ってくれました。」  
神に代わって罪を裁くとか、本当に笑わせてくれますよね。楽しかったですよ。」  
「……少しは身の程を弁えたんじゃないんですか？」  
誰も、リネンの言葉に言い返せない。

だが、ふと。

「仕方ないな……。」  
ジュリアスが、どこか達観したように笑った。

「この場でお前を斬り捨てよう。お前を『カーディナル』の下へ行かせる訳にはいかない。」  
「あれえ、そんなことして良いんですか？  
なんならこの足で洗礼でも受けに行っても良いんですよ？」  
「だからこの首を代償にと言っている。」

まあ、私は騎士団から追放されるだろうが、その辺りはどうにでもなる。」

その言葉に周囲から、ジュリアスを止めるような声が沸きあがる。

それだけの人望が彼にはあった。

「この宗教バカどもが。」

リネンは心底呆れたようにそう呟いた。

彼らは、今すぐにもどうにでもしそうであったのだ。

「ホント、どっちが罪深いのか分かりませぬね。」

まあいいですけど、とリネンは笑みを深くする。

「ところで、真人間の私は悪魔を操るなんて怖いことはとてもできません。」

「なに？」

「本当は悪魔なんて私の一言で帰還を命令できるんですが、悪魔に命令なんて、そんな邪悪なことではできませんよねー。」

「貴様ツー！！ 総員、構えろー！！」

リネンの意図を悟ったジュリアスが号令を掛けた。

「お前ら、さっさと働けよ。」

リネンの代わりに、ファニーが言った。

その瞬間、黙っていた悪魔たちが一斉に騎士たちに襲いかかった。

「貴女は……。」

「んん？」

再び乱戦状態寸前の戦況の中、全力を使い果たして膝を突いているエクレシアにリネンが振り返った。

「まだ居たんですか、約束通り人質は全員解放しますよ。」

まあ、それはあっちにいる悪魔が全員こっちになだれ込んでくるってことですが。」

「なぜ」

「ん？」

「なぜ、このような無情な事をなさるのですか……？」

この時エクレシアは、リネンを敵対者ではなく魔術師として問うていた。

だからかもしれない。

リネンは答えた。

「同情を誘う訳じゃありませんからそう言っておきますが、こう見えて私って小さい頃に魔女狩りに遭ったんです。訳も分からず住んでいた町は火の海、私の両親は理由も無く殺されました。」

そんな言葉を聞いたエクレシアは、なぜか背中に冷たいものが流れた気がした。

それは、今の状況で彼女にはとんでもない皮肉でしか聞こえなかったからだ。

「両親も魔術師でしたし、私は才能が有りましたから、何とか生き

延びようと両親の内臓を抉りだして、血で魔法陣を書いて、何とか偶々ファニーを召喚できて生き残ることができました。」  
そして、そう語ったりネンの肩を、ファニーが抱き寄せた。

「始めのうちは復讐だったんですけれどね、そのうちだんだん楽しくなってきたやいまして。」

止められなくなっちゃいまして、何度も痛い目に遭ったりしましたが、それでもそれでも、貴方達みたいな聖職者をいたぶってぐちゃぐちゃにするのが、楽しくて仕方が無くなっちゃったんですよ。」

「まあ、そうなる様に仕向けたのは俺だけだなッ！！！」  
ぎゃははははは、とファニーが笑った。

「だから、壊すんですよ。自分が正しいとか思いあがってるバカどもを。」

確かに憎しみはまだありますが、何が憎いのか、もう分からないんですよ。」

「貴女は、悲しい人ですね。」

「哀れまれる筋合いは有りませんよ、好きでやってることですから。……貴女とはまた会える気がしますね。その時も、敵だと思えますが。」

今度こそリネンは踵を返して、用が無くなったこの階層を後にする。

「では、ファニー。後は好きにきなさい。」

「おう。やあぁッと出番だな。」

その瞬間、ファニーの体が膨張する。

圧倒的なその膨らみは、質量保存の法則など完全に無視し、まるで際限なく膨らむ肉の爆発に見えただろう。



ゆらと空気が揺れる。

存在そのものが、災厄。

古来より自然災害の象徴にして、彼らにとっては悪魔そのもの。

「エンシエント・・・ドラゴン。」

誰かが、呆然と言った。

『これでこそ、二度も死んだ甲斐があるってもんだぜ。

リネン、お前やっぱ最高だよぉ！！ もっともっと、殺して壊して奪おうぜえ！！！！』

史上最悪の幻想にして化け物が、咆哮する。

「これが、本当の絶望ってやつですよ。」

そんなリネンの言葉を聞ける状態の人間は、もはや誰も居なかった。





第三十話 理を制する者（後書き）

細かなところを修正・加筆しました。

### 第三十一話 悪行の果て

「なんや、あれは。ゴジラの親戚なんかか？」

その本性を現したフアーニーを遠目から見ていたフウセンがボケっと呟いた。

「おいおい、古代竜とか反則にもほどがあるだろ……。」

対してロイドは開いた口がふさがらないという様子だった。

「とんでもない大玉が出てきましたね……。」

「つち、くそ。ああいう化け物は専門の武器を持ってこないと傷一つ付けられないぞ。」

竜殺しの魔剣とか現存してねーだろ、と忌々しげにロイドはぼやく。

「なんや、ロイド君。己が伝説作る気にはならへんのか？」

「お前、伝説に語られる勇者英雄英傑がどうしてそう語られるのか分かって言ってるのか？」

「知らへんのかいな、いまあいう化け物を狩るゲームがウチの国じゃ流行ってんねん。」

「バツサリ殺って剥ぎ取ればええやん、きつとうはうはやで。」

「話に成らん。」

邪な笑みを浮かべるフウセンをそう斬って捨て、ロイドは溜息を吐いた。

「まあ、こつから先は俺らの領分を越えてるな。」

「フウリン、騎士の連中はどうだ？ 連中、あの化け物の近くに居た  
だろ？」

「はい。どうやら向こうのミスで黒幕を逃がしたみたいですね。」

「なにやってんだよ。使えねえ連中だな。」

「偵察をしていたフウリンの報告を聞いて、ロイドは更に溜息を重ねた。」

「せつかく花を持たせてあげるつもりだったのにね。」

「そりゃあ、実質連中に喧嘩売られた訳だからな。メンツぐらい保たせてやるうと思つて親切心だした結果がこれだよ。」

「この有り様じゃ、言い訳が出来んほど完敗しているだろうな。」

「そう言つたロイドの言葉と裏腹に、随分と楽しそうに表情だつた。」

「黒魔術師の彼は天敵がボロ負けしたのが可笑しくて仕方が無いらしい。」

「教会の面子の為に余計な手出しをしないように提案したのは彼だが、  
実際としては連中に目を付けられるのをロイドが嫌がっていたのは  
明白だつた。」

「やはり、助けに行くべきでしょうか？」

「教会の魔術の対象にされるかもしれないと彼の提案に賛成したフウ  
リンは、後ろめたさからそう言つた。」

「連中に恩を売るつてのは、ありかもしれねえな。」

「言つても、ロイド君が出来ることあらへんやん。」

「うぐ。」

「フウセンの鋭いツッコミは、ロイドの心をかなり深く抉つた。」

「それでは？」

フウリンは彼女が余計な事を更に言う前に、この中で一番経験豊富なロイドに意見を求める。

「とりあえず、邪魔な悪魔を掃討するのが先だな。

騎士団の連中をいったん退かせ、ちゃんと機能するように立て直させる。そうすりゃ、あの化け物相手でも多少は相手に成っても持つだろうさ。」

「ちよい待ちい、それまであのゴジラもどきは放置かいな？」

「しゃあねえだろ。むしろこの状況であの場に居る半分が生きてりや奇跡だろ。」

「はあ？」

ロイドのそんな皮肉るような言葉は、何やらフウセンの癩に障ったようだ。

「そりゃあ、あらへんやろ。」

ロイド君は何もできへんから押し付けてるだけやんか。アホらし。」

「舐めんなよ小娘、てめえみたいに正面からやり合うだけが戦いじやねえのさ。」

「ですが、足止めが必要なのは確かです。

彼らが幾ら優秀でも立て直すまでには幾ばくか時間が必要です。」  
確かに、とロイドはフウリンの言葉に頷いた。

「それはサイネリアにやらせりゃ良いだろ、とりあえず決定打を受けないように纏わり付くようにして時間を稼げば何とかなるはずだ。

「待ちな、それウチがやる。」  
「なに？」

「聞こえへんかったのか、ウチがやる言ゆてんのや。」

「それは止めとけ、お前はああいう化け物と相性が悪い。」

「やる、言うてんのや。って言うか、なんでロイド君が指図すんねん。」

「フウセンツッ!!」

流石にその言葉は看過できなかつたのか、フウリンが声を挙げた。

「いや、いい。このガキに身の程を弁えさせてやりゃあいい。」

「ためえには悪魔の方をやってもらいたかったが、そいつはサイネリアに変更だ。」

「おい、サイネリア、お前はそれでいいか？」

「悪魔たちに愛と正義の鉄槌をかますのねッ」

「ああ・・・うん、好きにしてくれ。」

ぶんぶん、とデフォルメされた星のロッドを振り回しているサイネリアに、ロイドは何だかどうでもよくなってきた。

「俺はここからサイネリアをバックアップする。」

「フウリンは向こうとここを繋げて、退路を作ってやれ。空間が繋がったら、作戦開始だ。」

「はい。・・・そうだ、繋げたら周囲の仲間にも声を掛けて見ますね。」

「名案だ。旦那辺りが来てくれれば最高だ。」

「探してみます。」

「よし、やるぞ。」

「それ、私も手伝おうかしらあ？」

その声に、ロイドだけでなく他の三人もびくりと震えた。

「じえ、ジェリーの姐御じゃないですか……。」

ロイドが振り返ると、何も無い場所が揺らめいて触手に包まれていた黒髪の女が現れた。

「ねえフウセンちゃん、お姉さんとねちよねちよと良い事しな〜い？」

「じゃウチは忙しいんで。ほなさいならッ!!」

フウセンはビューンと足元に跡を残して跳んでいった。

「もう、フウセンちゃんのいけず。」

「お、お久しぶりです、ジェリーさん。」

そう言ったフウリンの表情は真っ青だった。

イモムシの姿をした悪魔を操る彼でこれなのだから、彼女に対して何かしらのトラウマが有るようだった。

「おい、サイネリア。お前も姐御に挨拶しないか。」

「あ、そっちは別に良いわよ、あたしの守備範囲カワイイ十九歳以下の処女だけだから。」

「そうっすか……。」

ロイドが言おうものならぶん殴られるだろう台詞だが、サイネリアはロイドの後ろに隠れて無言を貫いている。彼の方が背は低いのでシユールな光景だった。

彼らにとって、ジェリーは所謂部活の恐い先輩みたいなものだ。



けらけらと笑う狂人の気まぐれが自分に向かないように何とか己の処世術で対処しながら、ロイドはフウリンにさっさとやる事やれと視線で訴えた。

「息子よ、なぜ顔を隠すのだ。お父さん、お父さん、聞こえないの、魔王が居るよ。王冠と被って尻尾が垂れた、恐ろしい魔王が居るよ。落ち着きなさい、あれは風に揺れる木の葉と夜霧の影だよ。」

するとジェリーは一人二役で高音と低音を使い分けて何かを歌うように演じ始めた。

アカペラでの歌のセンスは壊滅的だが、逆にそれが狂気を醸し出していた。

「ゲートの、魔王ですか・・・。」

空間に大きな虫食い穴を作り上げたフウリンが呟いた。

こんな状況で歌う曲でなかった。

そんな内心を知っている訳ではないだろうが、彼女はそれだけしか歌いも演じもしなかった。

『可愛い坊や、ボクの所においで。ボクと一緒に遊ぼうよ、楽しいよ。楽しいよ。』

岸には綺麗なお花が咲いて、ボクの母は黄金の衣装をいっぱい持っているから、ボクが君に上げるように言ってあげよう！...！』



「え？」  
フウリンが振り向くと、ジェリーは全身を触手で包んで空気に溶け込むように消えて行った。  
飽きたのか、それとも帰ったのか。狂気に満ちた彼女の意味を汲み取れる人間は居ない。

「サイネリア、お前も早く行けよ。」

「……うん。」

サイネリアはジェリーの所為で大分意気消沈したらしく、いつものキャラ作りも無くとぼとぼと虫食い穴の中に歩いて行った。

「ロイドさん、今何か聞こえませんでしたか？」

「は？ 何言ってるんだお前。」

「いえ、この場に居ない誰かの声が聞こえたような気が……。」

「お前、あの姐御でもいくらなんでもただの歌だぜ。それで頭がおかしくなったなんて言うんじゃないやねえだろうな。流石に姐御に失礼だぜ。」

「いいえ、そうではなく……。」

そこまで言っつて、フウリンは言うのを止めた。

彼の心臓が、悪魔が、異様なまでに脈動し訴えてきたのだ。  
これまでに無いほどの力を貸そう、とそう言っている。

「この身に眠る大いなる悪魔よ、そこまで言うならその力を示して見せる……！」



「リネンは空前絶後の召喚魔術の使い手だ。それこそ、世界樹の種まで遡らなければ、アレに匹敵する召喚士は居ないだろう。」

あいつを殺すなんて、てめーら凡人には到底無理なんだよ。」  
だが、と人外の顔つきであるにも拘らず、竜頭の表情は分かりやすく変わった。

嫌悪の表情だった。

「アレは俺の女だ。指一本でも触れたら俺が殺す。」

そう、てめーらはただ蹂躪されていればよかったのさ。てめーらは部屋の片隅でぶるぶる神様に祈って経でも何でも唱えてりや良かったのさ。それが人間ってもんだろ？」

無造作に、長大な尻尾が彼の背後を薙ぎ払う。

木の葉のように家屋や木々が宙に舞い、放射状に空き地が出来てしまった。

「言わせておけば。」

その中で、一人かの邪竜に立ち向かおう人間がいた。

マスター・ジュリアスだった。

「マスターッ!!!」

「マスター・ジュリアス!!!」

彼は背後から彼の指示を仰ぐ部下たちの声を受け、静かにこう言った。

「退却だ。お前たちは気絶した仲間を可能な限り連れて撤退し、後続と合流しろ。この場はこの私が喰いとめる。」

「ですがッ!？」

「いいから退け、貴様らの死に場所はここではない。」

もつと神の為にその身をすり減らし、血を流し、敵を斬り捨ててから死ね。

いいか、こんな所で死ぬことは許さん。そんな物は原罪に等しい冒涇と知れ。」

それ以上何も返ってはこなかった。

ジュリアスの背後で、ただ鎧が打ち鳴らす音が聞こえるばかりだった。

『愚かしい人間よ、俺様を前にしてなぜ他人を庇う。』

幾重の魔術で心を鎧おうとも、人である限りお前の恐怖は隠しきれない。幾千の戦いを重ねているからこそ、圧倒的な力の差を前にお前の絶望は隠しきれない。

これからこの俺様が、お前たちを皆殺しにするというのに、何故に他者に気を配る余裕がある。何故に戦おうとする。愛を誓った者が居るのか？ それとも浅ましき名誉の為か？

我が力と暴虐を前にして、そんな物は無に等しい。いったい、何のために俺様が吹けば吹き飛ぶようなちっぽけな勇気を振るう? 『

巨大な古代竜は、まるで劇場の役者のような口調でそんなことを言った。

その巨体の十分の一にも満たないジュリアスは答えた。

「貴様には分かるまい。人であることを止め、人の心を捨てた貴様には分かるまい。」

問われて答える理由などありはしない。いちいち理由など求めて生きていられるほど人間は賢くは無い。私が貴様に刃を向ける理由など、それ以上の意味など無い。」

『なるほど、なるほどな。』

認めよう、貴様はこの俺様の鱗に刃を突き立てるにふさわしい英雄だ。

存分に殺し合おう。お前は俺様を否定しろ、俺様は俺様自身を肯定する。

お前は神話のページに、俺様に向かって行って死んでいった凡庸な幾多の戦士の一人と記されるか、俺様を殺した英雄豪傑として名を刻むか、決めようではないか。』

「そんなことに興味は無い。私が貴様を殺すか、神が私を見捨てるか。その二択だ。」

『気に入った、気に入ったよお前！！ だから、死ぬ。』

巨体からすれば小枝のように細い邪竜の右腕が振り下ろされる。

しかし体重の乗った腕の先の手には鎌のような鋭い爪が生え揃っている。

ごぎん、ともはや金属音に聞こえない音が、その一撃を受け止めたジュリアスの剣から鳴り響いた。

ミスリル銀製の魔性を退ける聖なる加護を受けた剣が、そのたった一撃でひしゃげてしまった。

それどころか、あまりにも重いその一撃は、ジュリアスを膝まで地

面にめり込ませる。

『いくら貴様が英傑だろうと、お前の剣は主と違ったようだな。』

「たかが一本、剣をへし折ったくらいで良い気になるな。」  
彼の腰には、まだ抜いていない剣が一本残っていた。

『お前のその減らず口がどこまで続くか、俺様はとても楽しみだよ。』

直後、巨体に見合わぬ目にも止らぬ両腕の連撃が次々と繰り出される。

地面に直撃すれば火薬が爆発しているようにしか聞こえない邪竜の一撃が、矢継ぎ早にジュリアスを挽き肉にせんと襲いかかる。

比較にならないが、彼の巨体は常にマウントポジションを維持しているのも同然なのだ。

845

「獣が、図体ばかりデカイだけかッ!!」

しかしジュリアスはその一撃一撃を巧みに紙一重で避け続けている。手にしている剣でその暴虐を受け流しているのだ。

ひしゃげた剣でしかないそれが、魔獣を操る鞭のようにすら見える。余波だけでも人体はぐちゃぐちゃになりそうなものの、ジュリアスはダメージを最小に抑えている。

これが直撃だったのならば話は違う。

ドラゴンの持つ“竜”の概念は、神の奇跡に匹敵する最上位クラスの概念だ。

たとえ何重もの魔術防護で固めていても、薄紙同然に押しつぶされてしまう。

だが、ジュリアスが受けているのは余波でしかない。

「遊びが過ぎたな。」

幾ら早くても、単調すぎる連打はジュリアスにとって力任せの獣に過ぎなかった。

ひしゃげた剣を延ばされたファニーの腕の関節に向けて、投擲した。

「なにッ!?!」

腕の内側の鱗の柔らかい部分を狙われ、剣が関節に突き刺さりファニーの腕は曲がらなくなってしまったのだ。

ファニーにとって小枝に等しくても、人間にとっては大人が両手を広げた長さより太い彼の腕を、あるうことがジュリアスは駆け昇つて、疾風のように走る。

ジュリアスは腰だめの姿勢で居合抜きでもするかのように鞘に手を当て、腰に帯びている剣の柄を握っている。

ファニーが空いている片手でジュリアスを振り払おうとするが、空振りに終わった。

そして、ジュリアスがファニーの顔に肉薄して剣を抜いた。

次の瞬間、純白の光が、その刀身から発したのだ。その強烈な閃光は、一瞬だけとは言え夜ならば周囲の闇を振り払うほどの光だった。

『……そんなナマクラで、俺様の鱗を一枚でも削ぎ落せると思っただのか？』

そして、光が消え失せると、光る剣の刃をファニーの首筋に突き立てているジュリアスの姿があった。

「これでもクラウソラスのレプリカなのだがな……。」  
ファニーの鱗に瑕どころか、ジュリアスの手にする光剣の切っ先が逆に欠けていた。

剣の格が、ファニーの有する“竜”の概念の格に負けた結果だった。

『俺様を殺したいのなら、俺様の肉を引き裂いた魔剣を持ってくることだな。』

切れ味の問題じゃない。俺様の物語にふさわしい剣でしか、もはや傷付けられることは許さん。』

そんな骨董品が現存しているのならな、と邪竜は嘲笑する。

『つーか、いつまでも乗ってんじゃねーよ。』  
その直後、ジュリアスは空中に放り出された。



フアニーの巨体が、そのまま後ろに存在していた。  
それは紛れも無く瞬間移動だった。

そこからの、テイルスリング。

鞭のように撓る大質量の尻尾が空中に居るジュリアスを捉えたのだ。  
バシン、とハエや蚊でも叩き落とすように、ジュリアスは付近の家  
屋の中に消え失せた。

『直撃は、避けたか？　じゃあまだまだ元気だよなあ。』

しかし、てめーらのしぐとさはいつの時代も変わらねえよなあ。

顔も見たこともねえ自分らの神様の為に働けるなんざ、仕事熱心な  
こったなあ。』

ぎゃはははははははははは、と邪竜が嗤う。

『早くこちらへ！！』

彼の足元では、ジュリアスが時間を稼いでいる間に既に騎士たちは  
半数以上が撤退をしていた。

それもこれも、フウリンが数か所の虫食い穴を作成して退路を作り  
上げたからだ。

『おい。』

巨大な古代竜の明確な殺意が、ただ一点に注がれた。

「え・・・？」

それは血まみれのクロムに肩を貸し、アビゲイルの呪詛を解呪し終えた所だったエクレシアだった。

『お前、リネンがまた会うかもしれないって言ってたな。』

あいつは少し間抜けと言うか、ぬるくてな。そうやって見逃してやった相手に足元掬われたことがもう何度もあったんだよなあ。

あいつの第六感は凄くてな、お前が敵として再び出会うと言つならば、そうなんだろう。

もしかしたら、お前はリネンを殺せるかも知れない。運命がお前を選ぶかもしれない。』

ずしん、ずしん、とファニーは言いながら彼女のとの距離を段々と詰めて行く。

その圧倒的な歩幅は、緩慢な動作であるがすぐに敵の前に辿り着いた。

『リネンはその運命とやらに何度も苦渋を舐めさせられ、仕舞には殺された。』

そりゃあ、天に向かって唾吐いてんだ。俺様も神様って連中がどれだけくそつたれな連中かよく知っている。

この世は天秤で釣り合うようになってるんだよ。

強大な力は、それと必ず釣り合う、対抗できる勢力や敵が必ず出現させる。

因果応報って奴だ。あの『黒の君』は最強の盾と矛の法則と言っているそうだが。

だから俺みたいな強大な存在が暴れ続ければ、必ず俺を殺せるだけ



だ！？

俺様は知っているぞ、お前たちが慈愛の笑みの裏側で嘲笑っていることを！！

俺様は知っているぞ！！ 救いなどチラつかせ、何食わぬ顔で気に入らぬ輩を破滅へ追いやってしていることを！！ ぎゃははははははははははは！！！！！！

お前たちの手口など、全てお見通しだ。しかしどうにも出来ない。そういう風になっている。全く、生きるってのはホント下らなく、楽しいことだよなあ！？

邪竜が咆哮する。

まるで、破壊することで自らの存在を訴えるように。

「なに訳のわからんこと言ってるんや。」

「あーん？」

「結局、己らが暴れる理由を正当化しただけとちゃうんか？

どんだけ大仰に言っても、所詮は自業自得やんけ。カッコ付けんのも大概にしいや。いまだきそんな厨二くさった台詞なんざ流行らんのや。」

“処刑人” フウセンが、空から邪竜の前に降り立ち、魔剣の切っ先を向ける。

『ぎゃははははははははは！！ まさしくその通りだよな！！！！ 笑えるぜ！！！！』

そつとも！！ 俺たちは、暴れる理由が欲しいのさ。何でも良いからこの内の衝動を吐きだせる、理由が必要なんだよ！！

細けえことなんざ、どうでもいい。死ぬ、壊れる、喰われる！！！！』

「おう、シンプルでええんや。ウチが殺す。おのれは死ぬ。それが全てや！！！！」

瑠璃色の魔剣が、淡く輝く。  
それが彼女の闘志を現していた。

『教えてくれよ、その魔剣がこの俺様の心臓に刃を突き立てるに相応しいか。』

お前がこの時代のシグルズなのか、俺様に教えてくれよおおッ！  
『！！』

邪竜の口から、鉄をも溶かす灼熱の炎が吹き荒れた。

「空間、転移・・・？」  
エクレシアは自分に起こったことを再確認していた。

空間転移。

高度な空間把握能力と認識力が無ければ使用できない、空間系魔術の奥義だ。

知名度は高く原理が公開されているのもあるが、瞬間移動の秘術は

未だ人類科学で実現できない秘儀である故に神秘性を保っている。

とは言え、移動距離は術者に依存する為、隣同士の部屋から地球の裏側までと結構ピンキリである。

「空間転移の儀式を瞬間的に発動させる、転移呪符よ。」

最大移動距離は五キロ、四人分使ってここまで逃げて来たわ。」

周囲には、退却を行っていた騎士たちが忙しなく動き回っている。

負傷者の救護や仲間との連絡、悪魔から虫食い穴の防衛、仲間の誘導と、現状の人数では対応しきれっていない様子だった。

「四人分？」

重症で傷口を抑えて地面に横たわっているクロムは、顎をしゃくつて示した。

そこには呪詛が解けてなお未だピクリとも動かないアビゲイルの他に、ジュリアスが光る剣を杖に立ち上がるうとしていた。

すぐに彼の存在に気付いた騎士たち駆けよるが、ジュリアスは仕事に戻る様に一喝した。

「ドラゴンの一撃喰らって生きてるなんて、人間じゃないわね。」

「お腹に穴が空いて生きている貴女が言いますか……。」

「残念ながら、魔力で延命してるだけ。血が流れ過ぎてる。そう長くは無いわね。」

トリアージじゃ黒色ね、とクロムはどこか達観したように呟いた。

「そんな……。」

「貴女は下の階層に行くことだけを考えなさい。

どうせ私にとって死なんて一時的なものでしかないもの。」

「で、ですが、死に近づくことには違いません。

貴女は分かっているはずですが、死に近すぎると、人はいずれ人間としての感覚を失っていつてしまうことを。今の貴女は、死の向こう側に一歩足を踏み入れている。

……今、司祭の資格を持っている人を連れてきます。」

「貴女は真面目ね。でも良いの。私の魂は、所詮“私”に帰るだけ。人のことを心配する暇が有るなら、自分のやる事をやりなさい。」

「……。」

エクレシアは、クロムに何も言えなかった。

「これ、あげる。私が生きた証。」

クロムはぶちりと服の中から小さなプレートの鎖を引き千切って、地面に置いた。

「これ、は……ッ」

そこに書いてある文字を見て、エクレシアは絶句した。

聡明な彼女は、それが何を意味するのか理解してしまった。

そして、そのおぞましさに吐き気すら込み上げて来た。

「あな、たは……死を何だと思っているのですかッ!!」

「ただの現象よ。貴方達にとっては神の下へ召されるだけかもしれないけれど、地上の人間は未だにそれを定義することすらできていない。“死”なんてね、曖昧な概念なのよ。」

だからこそ、誤魔化せることができる。騙す事が出来る。

だからこそ、無限の命すらも、作り出す事が出来る。」  
クロムは、この上なく邪悪な笑みを湛えた。

「私は、ここに居る私の他に何百人と存在している。

その全てが同一であるがゆえに、私は一個人にして軍隊アリの如き軍団なの。」

私一個体の死なんて、全体から見れば髪の毛が一本抜けたくらいの意味合いしかないの。」

「そんな馬鹿な、人間の魂は一つだけです。」

そんなにたくさんのお嬢が存在するなら、無数のお嬢が同じ魔術を扱えるはずが無い。」

それを可能にするにはそれこそ賢者の石でも無ければ、不可能な所業だった。

「人間の魂なんて希薄なものを認識できる人間がどれだけいると思っっているの。」

人に魂が宿るのも、物に魂が宿るのも同じ。同一と定義した全てのモノに同じ魂が偏在しているにすぎない。そこに矛盾は存在しない。故に私はからっぽ。人から物に変わった瞬間、仮初めの魂は霧散する。」

その内新しい体が作られて、その中に心をインプットされる。オリジナルの私と同一と定義される、そしてそこに魂が生じる。」

だから、私は無限に存在する。死なんて無意味。」

オリジナルは自分の死を、別の個体に押し付けることすらできる。」

私はただの身代わり人形、分担作業の一工程を担っているにすぎないの。」

「そんな人生、貴女は許容できるのですか？」



「私の頭には反逆防止用のチップが埋め込まれてるわ。」

専用の周波数の電波で脳内に信号が発せられ、アポトーシスが誘発されて、全身の細胞が死滅するの。だから死ねと言われた私にこれ以上生きる意味は無い。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

エクレシアの心に満ちていたのは、言いようのない怒りだった。

「貴女は、愚かですよ。」

「無知を許容出来ない時点で、私は愚かよ。」

私は自分が誰かに劣るのが許せないの。」

「もう、いいです。」

それ以上、エクレシアは彼女のやり方につべこべ言うのを止めることにした。

お互いに分かりあうつもりも無く、やり方を変えるつもりもない。その果てにある物を、エクレシアは知っている。だからこれ以上は無意味だった。

「最後に教えてください。彼女は、何者ですか。」

彼女は貴女を親友だと言っていました。」

エクレシアは、それだけは聞かなければならなかった。

「・・・・シークレットセブンって、知ってる？」

「いえ、知りません。」

クロムの口にした単語は、エクレシアの知識には無い言葉だった。

「約千年前、異世界から魔術師たちがこの世界にやってきたのは知っているな？」

すると、エクレシアの背後からジュリアスが答えた。

「え、ええ……。」

「魔術師たちの住んでいた世界が終焉に差し掛かる、更に五百年も年月は遡る。」

その世界の我々と同系統の教会が長年に渡り発布しつづけていた制度だ。」

「流石マスタークラスの魔術師は知っているわよね。」

「私は大図書館の観覧を許されている、他世界とは言え同じ信仰を礎とする教会の歴史に興味を持たぬ道理はないからな。」

惘然とした表情で、ジュリアスは言った。

恐らく彼女が気に入らないのだろう。

「一言で言えば、賞金首みたいなものよ。」

当時の教会の連中が、凶悪な犯罪者に頭を悩ませていたの。

そこで取り分け強力な実態の掴めない凶悪な事件の七つ選んで、その首謀者に莫大な懸賞金を掛けて生死問わず捕まえさせようとしたわけ。

勿論教会側に懸賞金なんて払うつもりもない。何せ実体が無いんだから、証明の使用が無い。それがいつしか形骸化し、凶悪な犯罪者を七人選別するだけになってしまった。

言わば、人間のクズ代表七人よ。中には魔剣“ソウルイーター”の所有者も居たわ。」

「あの、悪名高き原初の魔剣ですか……。」

エクレシアもその恐るべき魔剣の力は聞いたことが有る。

その恐るべき魔剣の力はもはやお伽噺の、核兵器が玩具になるレベ

ルであるらしい。

近年、その魔剣が新たな所有者を選んで次元の彼方から出現したとして大騒ぎになったのを覚えている。

「選別された凶悪な犯罪者は名前で呼ばれることは無く、その所業から通称で呼ばれたわ。そのセンスはちよつと壊滅的で笑えるレベルよ。」

「百万人斬り殺したらしい魔剣“ソウルイーター”の所有者は通称“キラブレイド”。閃光と共に幾多の教会の軍勢を薙ぎ払ったと言う剣士には“黒き流星”などなど。」

そして、彼女はこう呼ばれた、“マスター・デビルサモナー”と。「安直でしょう、とクロムは笑う。」

「だけど、誰も彼女の所業を笑える者は居なかった。」

その才能は『盟主』にも買われて、勧誘を受けた程よ。その時に『<sup>マスター</sup>最高位』の称号を貰ったらしいわ。陳腐な通称はここから来てたりもするわ。」

でも彼女は一人で悪魔を率いて教会に喧嘩を売り続けた。

そんな彼女だけど、一人意気投合した魔術師が居た。彼女は“ブラックトリガー”と呼ばれた、当時“魔術同盟”だったここを反逆罪で追放されたそれはもう凶悪な魔術師でした。

手を組んだ二人は、もはや例外を除いて敵無しで、それはもう痛快な日々だったわ。」

残念ながら、“ブラックトリガー”の方は後で『盟主』の肅清を受けてしまったけれど。」

「千五百年も前の人間が・・・どうして・・・。」

そのエクレシアの呟きは、当然あのリネンに対するものだけではな

かった。

「肅清を受けたはずの“ブラックトリガー”はその知識を失うには惜しいと、実は第二十九層の氷の牢獄の中に閉じ込められて氷漬けになっていたのです。」

そして彼女は、千五百年もの時を経て、世界を超えて、『盟主』によって助力を乞われたのです。彼女は快諾しました。

なぜ『盟主』は彼女を蘇らせたかと言うと、刻々と変化する地上での人間や情勢の変動に対して、その魔術師は適応し、特に有効な魔術や技術を無数に持っていたからです。

彼女は戦艦を鉄くずにした戦闘機のように、空母を玩具箱にした核兵器のように、核兵器を産業廃棄物にするほどの力を持っているのです。」

「なぜ『盟主』はそのように・・・？」

「さあ、地上の侵略でも企ててるんじゃないの？」

そのくだらない冗談は、彼女にに回答する気が無いからだろう。

「そして彼女は思い付いたのです。かつて意気投合し共に猛威を揮った恐るべき召喚士を現世に呼び戻せないか、と。

悪魔を自在に操れるその召喚士は、悪魔から自在に知識を引き出し、魔術を執り行わせられる恐るべき物です。

彼女はその力を借りようと、体を用意し、“虚無の闇”より転生も出来ずにいた召喚士の魂を呼び寄せたのです。

恐るべきは、彼女との交感状態だけで現世との繋がりを得た召喚士は自身の霊体を逆召喚して、見事現世に生還を果たしたのです。」

「・・・常識はずれにも程があるだろうに・・・。」

もはや天才と言つ言葉すら霞むほどの才能に、ジュリアスも信じられない様子だった。

それは事実上の死者の蘇生、現代において魔術の最終目的の一つだ。

「彼女の名前はリネン・サンセット。」

そして盟友である“ブラックトリガー”ことメリス・フォン・エルリーバを失った彼女は、ある暴拳に出て『黒の君』により肅清を受けたと本人から聞いたわ。」

「暴拳……？」

嫌な予感がひしひしと、伝わってくる。

それでもエクレシアは問わずには居られなかった。

「魔王の召喚。」

魔術師の、タブー中のタブー。

魔王、即ちそれに関わる全てのことである。

「え、ちょっと待って下さい、たしかエルリーバって、かつて魔王を討伐した英雄の……」

「そう、そうなのよ。話が早くて助かるわ。」

魔王を討伐した英雄の子孫が、あるうことか叡智を求めるあまりに、ある都市に封印されていると言う魔王の血を奪いに、リネンと共に襲撃を掛けてしまったの！！

三十万人は居ただろう都市は火の海にして、見事封印されていた魔王の血を奪うことに成功したわ。

でもその研究をする前に肅清を受けて、彼女は氷の牢獄に封印されたけど、リネンは盟友の意思を汲んで、魔王の魂を現世に蘇らせってしまったの。」

「……」

それはもう罪深いと言つ言葉すら、安つぱく聞こえる悪行だった。エクレシアはもう何かのお伽噺を聞いている気分にならなってきた。

「だけど、『黒の君』はそれを許さなかった。

と言つても、彼は魔王を撃退しただけらしいのよ。」

彼女はその後にもいつも通り教会勢力を襲いに行つて、その先で死亡した。どう死んだかまでは教えてくれなかったけれどね。」

だいたい想像つくけどね、とけらけら笑いながらクロムはそう言った。

「貴女は、後悔していませんか？」

「悪いと思つてやる犯罪なんて無いのよ。仮に思つていても、必ず心のどこかで自分を正当化しているものよ。」

「・・・悔しいですが、至言ですね。」

「それに言つたのは貴女じゃない、正と死を超えた人間を裁く法は無いつて。」

私は二重存在どころじゃないわよ。無限の命を持つているの。裁きたければ裁けば良いわ、リネンの二の舞になるだけだけれど。」

「その裁可はもはや神に委ねるしかあるまい。」

あの女についても、人で裁けぬなら神の裁きを待つのみ。これ以上の論は必要ない。」

無駄な論争に成る前に、聞きたいことは聞き終えたジュリアスがそう締めくくつた。

「お前はお前の成す事を成せ。」

「はい。」

エクレシアは、部下たち指示を出すべく歩いていくジュリアスに礼

を捧げた。

「あ、そう言えば……。」  
ふとエクレシアは思い出した事が有った。

リネンは言っていた。  
目的は既に達成した、と。

彼女の経歴からすれば、襲撃そのものであってもおかしくは無い。  
だが、それでは彼女の言動が一致しないことに、彼女は気付いてしまった。

「……彼女、リネン・サンセットの目的は、何なんですか？」  
「何って、何が？」

「とぼけないでください、なぜ彼女は我々を襲撃したのですか？」  
「ふふふふ。」  
一体何を聞いていたのか、と言わんばかりのクロムの表情に、しかしエクレシアは惑わされるつもりはなかった。

「答えてください。」  
「あなた、本当に何を聞いていたの。  
彼女に悪魔の召喚に特化した魔術師なのよ。  
だったらすることは一つだけに決まってるじゃない。」  
言われてみれば当然のことに、エクレシアは嫌な予感を感じて生唾を飲み込んだ。

だけど、それは聞かなければならない。  
それが己の使命だと言い聞かせて。

「リネンの目的はね、当時教会勢力から追い回され続けてなお五百年もの間存在し続けて来た、伝説の『悪魔』の召喚よ。」  
そして、彼女の口からそれが語られた。

「……五百年。」  
悪魔にとっては瞬きに等しい時間だろうが、それが自身の住む魔界とは違う世界であるならば、意味合いがまるで違う。

「まさかその、伝説の悪魔を使役しようか……。」  
「あはははははは、無理無理無理。」

あの『悪魔』が、誰かに使役されるなんてありえない。  
事実リネンはいつに何度も煮え湯を飲まされたか……。それにリネンを殺したのはきつとあいつかその従僕に違いないわ。蛇蝎の如く嫌っていてもおかしくもない。」

彼女の口ぶりからして、クロムもその悪魔のことをよく知っている様子だった。

笑いながら血を吐いている彼女を見てしまっているので、エクレスシアにそれを尋ねることは出来なかったが。

「では、どうして……。」



「それ以上は契約があるとかで教えてはくれなかったわ。でも想像はつく。」

「ごぼごぼと溢れ出てくる血が邪魔して聞き取りづらいがそれでも、クロムは話すのを止めなかった。」

「これを持って行きなさい。転移呪符よ。」

「使い方は場所を指定し、魔力を込めるだけ。ここからなら昇降魔法陣までなら十分に届く。」

「これ、使い勝手良かったら貴女の騎士団で購入してみてね。一枚約五千ドルだけど。」

「……五キロの瞬間移動で、ちょっとした航空費の十倍近いですぬ。」

「エクレシアには眩暈のしそうな金額である。」

「十枚あるだけで、下で必死に奴隷生活している某主人公が借金を返せてしまうくらい高額だ。」

「それだけ魔術は効率悪いってことよ。これでも大量生産でコストダウンしてるのよ。」

「これが普及すれば、本当の意味で移動の時間を金で買える時代に成るってことよ。」

「……」

「うぬぼれでもなく彼女は本当に地上を変えてしまえるだけの力を持っているのだから、本当の意味で知ったような気がしたエクレシアだった。」

「覚えておきなさい。……これが、私の、“私”達のやり方。」  
クロムは血まみれの服のポケットの中から、拳銃を取り出した。

震える手で、彼女はそれをこめかみに当てた。  
エクレシアが止める間も無かった。

「私は自身の死を持って完成する。私は、モノじゃない。」

彼女は言う。私は人間である、と。

一発の銃声が、騎士たちが打ち鳴らす鎧の喧噪の中に消えた。

### 第三十一話 悪行の果て（後書き）

なぜ今までずっと魔族に関係の無い話が続いていたかというところ、リネンという存在の布石を完全なものとする為です。

魔王の誕生が不可能であると『プロメテウス』が断じられたこの世界でのイレギュラーが必要だったわけです。

メリスの通称は“ブラックトリガー”。

つまり、黒い引き金です。事件などを後ろから糸を引く人物を黒幕って言いますよね。

事件の引き金を引く黒幕。だからメリスは“ブラックトリガー”なのです。

ちなみに、クロムが名乗った偽名。

アイマ・イミーマインですが、ばらすとアイ、マイ、ミー、マイン、英語の人称代名詞になります。

私は、私の、私を、私のものを・・・“私”がいっぱい、つまり自らが多数の同一人物のうちの一、ということを示していたのです。

## 第三十二話 復活の『悪魔』

「協力感謝する、悪名高き“死神”ロイド。」

黒魔術の使い手とは言え、この行いは確かに神に届くことだろう。」

「それは皮肉で言ってるのかい、管区<sup>マスター</sup>長さん。」

顰めた表情を隠そうとしないまま、“処刑人”ロイドはジュリアスと遭遇した。

「地上では同胞が何人も世話になったと聞く。

状況が状況でなければそつ首叩き落としてやりたいところだが、今この部隊の全権を預かるこの私が身勝手な振る舞いをするわけにはいかないからな。」

「魔術での戦闘は、その相性が勝因の大半を占めるが、実践はそれだけではないことを学んでくれたようで結構だ。」

言わずもがな、両者の空気は凄まじく険悪だった。

「初めて知りました。ロイドさん、そのように呼ばれていたのですか。」

「フウセンの奴が聞いたら笑うだろうからお前らには言わないようにしてただよ。」

意外そうなフウリンの態度にも、ロイドは苦々しそうな表情になるだけだった。

「知らなかったのか、フウリン。彼はパツと出の一代成り上がりであるにも関わらず、呪殺や呪詛などの呪術に突出した才能を持ちながら十代前半でこの“本部”から離反し、対人戦闘では未だ無敗を貫いている天才だ。」

ジュリアスの言葉には賞賛の中に隠そうともしない刺々しさがありありとあった。

「お前ら、知り合いか？」

「ええ、まあ。自分は生まれてすぐ教会に預けられたので、名前は親ではなく担当になった神父様から貰ったものなのです。」

お陰で本名は日本人らしくありませんが、と悪魔憑きであるフウリンは躊躇い無く事実を口にした。

当然ながら、フウリンは偽名というか、魔術師としての名である。そこに日本語を持つてくる辺り、彼のコンプレックスが窺い知れるというものだった。

「ああ、一応教会所属なのかお前。」

「はい。私のような人間が教会の庇護を受けなくて生きるなんて、虐待してくださいと言っているようなものですから。」

それでも堂々と教会の身内であるとは公言できませんから、『盟主』の下に。」

「なるほどなあ。」

十近く離れているのに彼は壮絶な人生を送っているようだ。フウリンの悪魔は心臓と一体化してるのだから無理にも被えないだろうし、茹で釜に入れられなかっただけ良心的だなとロイドは思っていた。

「午後には総長が最精鋭のパラディンを連れてこちらに到着なさるだろう。」

そうすればこちらが一気に攻勢を掛けられる。

唯一の懸念は『カーディナル』だが、あの方に限って万が一のことは無いだろうが、それでも相手が相手だ。最悪は想定するか。」

「つーか、こんな事態になってるのにあんたらの総長は何してんだよ。」

多分地上に行ってるんだろつとは思うが、主力引きつれて何するつもりだったんだ？」

騎士団の扱う神聖魔術の体系は、長所がはっきりしている分、弱点もかなりはっきりしている。

まず、探查能力が壊滅的。それは中世の暗黒時代に蔓延った魔女狩りの歴史が物語っている。

彼らの搜索と言えば、人海戦術や聞き込みと言った、そう言うレベルなのだ。

故に主力をつぎ込んで叩くとなれば、もう既に敵を発見していると  
言う事に成る。

次に機動力が無い。これは重装備だからではなく、集団で行動しているのだから、どうしても個人で動くことの多い黒魔術師にフィットワークで劣る。

他には個人の火力が低いこともあるが、それは集団戦でカバーできる。

あとは使える魔術は間接攻撃が無くは無いが、効率が悪いし重装甲に任せた打撃戦の方が手っ取り早いし、安上がりなのだ。

組織を運用するのに金が掛かるとか、欠点を挙げたら切りがない。

つまり何が言いたいかと言うと、防衛戦力が最低限の数しかいなくなるまで主力に戦力を割く何かがあったのか、とロイドは問うているのだ。

それだけ騎士団に戦略的重要な局面があったのだろ、と彼は考えている。

「極秘任務だ。詳しいことは知らないが、何でも総長曰く、伝統だとか。」

「伝統？」

「ここ六十年もの間、動きを見せない“連中”の強行偵察だとか。」  
十分知ってるじゃないか、とロイドは思わず突っ込みそうになった。

「連中・・・ああ、“連中”か。」

聖堂騎士団が敵対できる存在など、限られている。

その中でも伝統と言えるだけ特に因縁深い連中と有名なのは、一つしかない。

「まさか、あの吸血鬼集団“ノーブルブラッド”ですか？」

フウリンが回答を口にした。

彼らは、恐るべき吸血鬼殺しの魔剣を携えた真祖の吸血鬼こと通称“伯爵”が率いる五十余りの吸血鬼の軍団である。

その全てが首領の直系で、誰もが強力な力を受け継いでいると言う。

具体的に言えば、ドレイクのような上級魔族が五十人近くいるよう

なものである。

そんな事態はそれこそ魔王が復活でもして最終決戦でも起きない限りは起こらないのであるが、彼らは千年近く、それこそ騎士団創設の時より昔から存在し、お互いに殺し合いを続けている。

聖堂騎士団が主力の全てを注ぎ込むのも分からなくはない話だった。

「総長の話によれば、それまでは十年に一度は剣を交えてそうだが、この所ヨーロッパ各支部での小競り合いの一つも起こっていないらしい。」

それどころか、普段はヨーロッパ各地に分散している連中が、ここ十数年間もずっとひと塊りになって行動しているらしいのだ。」

「それは・・・怪しいな。」

自分にそんな時間があるんだったら大規模儀式魔術でも準備するな、とロイドは言った。

吸血鬼の集団、と聞けば禍々しい印象を受けるだろう。

しかし、“ノーブルブラッド”は少々毛色が違う。

彼らは、その首領リリスは元人間であるらしく、その事に誇りを持つて生きており、魔性に満ちた行いを否定している。

自然発生した低級の吸血鬼を狩り、邪悪な魔術師が居れば殴り込み、通りがかった村が窮地に陥ろうものならその脅威を排除する。

自分たちの吸血行為すら厳格に管理し、果てには善行を旨としているらしい。

“吸血鬼”の概念を覆す、何ともチグハグで矛盾した連中なのだ。

しかし、そこはアンデッドを赦さぬ聖堂騎士団。



吸血鬼が善行とか笑わせんな、といった具合に両者の仲は先ほど語った通り。

「まさか、・・・幹部クラスの誰かが、己の衝動に負けたとか、か？」

「そのような報告は無いが、それを想定しての行動だ。」

「なるほどな。」

ロイドは漸く合点がいったようだった。

例えば首領のリリス、通称“伯爵”だが、文字通り伯爵級悪魔ほどの実力を持っているらしい。

リネンが召喚した無階級の名無し上級悪魔でさえ、人間からすれば笑えない強さなのに、それが爵位持ちの悪魔となれば伝説に成るレベルである。

そんなのが己の本能のままに暴れたら、国単位で地図を書き変えなければならぬだろう。

なるほど、昔から彼女と戦い続けている騎士総長が出向くのが最適ではある。

あわよくば、それを口実に殲滅をしようと思っているのだろう。

だが、今回はその隙を突かれた形となる。

この一件は聖堂騎士団にとって非常に苦い教訓となるだろう。

「（）とは言え、劣勢とは言えことう着状態が続くなんて他の魔術体系

じやありえないけれどな。この結束力が宗教系の魔術体系の恐ろしさだよな。」  
合理的判断をするなら、一か所に立て籠もって籠城するのが最も賢いだろう。

援軍は期待できるこの状況なら、自分たちの神殿に引きこもって防戦をすればここまで完敗はしなかっただろう。  
むしろ、相性差で巻き返せたかもしれない。

だが、その際に巻き起こる被害は今のものとは比較に成らなかっただろう。

犠牲者など、きっと目も当てられない数に成っただろう。

魔術師そして指揮官として間違っていたと断ずるか、宗教家そして人間として正しかったかと称えられるか。

ロイドの興味はそこに有った。

「それにしても、フウセンは大丈夫でしょうか。」

「立派に足止めを果たしてるだろ。勝ち目はないだろうけれどな。」  
もう既に向こうに戻ったジュリアスが騎士団を指揮しているおかげでロイドはサイネリアを悪魔の呪詛から守る役割を任せられている。  
手が空いた彼は何もしていないかと思われるが、実際その通りだった。

だからわざわざジュリアスが嫌味を言いに来たのである。

それでも学生ゆえに“処刑人”の中では経験の少ないフウリンには

精神的に支えになっているようだった。

「本来ならサイネリアの方が適任だったけどな。

悪魔を単体で安全に蹴散らせるフウセンは殲滅に回したかったが、  
今となつては詮無いことだな。」

「やはり、無理でしょうか……。」

「くどいぜフウリン。釈迦の掌で踊る孫悟空と同じだよ、ありゃあ。  
世の中、才能だけで上手くいけるなんことなんざ、限界が有るんだ  
よ。」

古代竜の相手なんて、まさにそれだ。あれは“人間”と言う格の才  
能がカンストしても無理な相手だ。前提から間違ってる。フウリン、  
お前なら奴をどうやって倒す？」

「さあ、皆目見当が付きません。」

神代から生きている古代竜なんて遭遇するシチュエーションが先ず  
無い。

想定できないリスクに、人間はあまりにも無力だ。

「そうか、じゃあ分かりやすく表現しよう。」

お前、チエスの世界的プロに勝つにはどうすればいいと思う？」

「え？ 私のチエスの腕なんて駒の動かし方を知っているくらいで  
すよ。」

「はあ、お前はバカだな。こんなの簡単だろ。」

ロイドは呆れたように溜息を吐いた。

「そうだな、ベースボール……いや、あれは人数が居るからフッ  
トボール、いや、これも人数が必要か。まあ、とにかく、相手の得  
意な種目で戦わなけりゃ良いんだよ。」

「それって、卑怯じゃないですか？」  
問題にすらなっていない、とフウリンは不満げに言った。

「お前、戦争はスポーツと同じだと思うか？」

「いいえ。」

「そう言う事だよ、相手の敷いているルールに従うようじゃ、愚の骨頂だ。そいつは魔術師なんて言わねーんだよ。」

自分の有利な法則<sup>ルル</sup>で、可能な限り一方的に戦い、出来る事なら即死させる魔術を持って一撃で仕留める。黒魔術師の骨子となる戦いだ。

だから俺は敵の魔術師の工房に踏み込んだことなんて一度もない。その為にターゲットを呪い殺す時は、一か月以上入念に準備するくらいに心構えだ。

敵の前に姿を出す時は、必ず殺し合いのチェックメイトを宣言した後だけだ。」

だからすぐに殴りに行くサイネリアとは全然合わない、と愚痴るロイド。

物理魔術を得意とするサイネリアと、呪術が得意なロイド。

二人の相性は良いようで、実は全く噛み合っていない。

弱点を補っている、と聞こえはいいが、実際二人が『盟主』に組まされた理由は、サイネリアがその二つ名にふさわしい破壊を撒き散らすから、可能な限り被害を抑えるため一撃必殺で相手を仕留めるロイドに白羽の矢が立ったと言うのが真相だ。

その結果、石橋を叩いて安全かどうか専門書を買って熟読した後には渡るような慎重すぎるロイドに痺れを切らし、サイネリアが独断専行するパターンがよくあるという状況だ。

それで毎回ロイドは彼女のフォローの回るはめになるのである。

所詮魔術師なんて集団になっても個人主義でしかないのである。

「つまり、こちらの土俵で勝負しろ、と？」

「相手に全力を出させないことを前提にするなら、これで大抵の相手には勝てる。」

奴の常識で戦う必要なんてねーのさ、こっちの“常識”で戦わせてもらう。」

ロイドはフウリンに頷き返しながら答えた。

「フーか、お前はフウセンの運搬係で満足してんのかよ。」

「彼女は荒事が得意ですから。」

「魔術の世界は才能が殆ど全てと言っても過言じゃないが、才能のゴリ押しが通用するのは上級の魔術師ぐらいまでだけ。魔術師の戦いってのは知的なんだよ。」

“処刑人”の仕事は無茶な裏仕事が専門であるが、仕事の振り分けは適材適所である。

『盟主』は為政者としての政治力は皆無だが、逆に軍師や参謀としてのセンスが凄まじく、裏から物事を操る知将タイプの魔術師なのだ。

だから大事な手駒である“処刑人”たちが絶対に無理と判断される任務には就かされないし、相性の悪いだろうと思われる敵に鉢会う事はまずない。

つまり、フウセンもフウリンも未だ勝てる戦いしかしたことが無い

のだ。

そしてロイドも思春期の少年少女が、人よりちよつと特別な力が有るとそれを過信しすぎてしまつのはよく知っている。

彼もその口で“本部”から離反したのだから。  
その結果、大いに痛い目を見たわけである。

魔術師なら自分の実力と相手の力量に天秤を掛けて、どう挑むのか決めるのは当たり前なのだ。  
サイネリアだつてその辺りは弁えて、相性が悪い相手にはロイドのやり方に口一つ挟まない。

電波に見えてかなり合理主義で現実主義者なのだ、彼女は。

そのような事を語っていると、ロイドはジュリアスの指揮の下、後方支援している騎士たちの合間から当の本人が出て来たのが見えた。中世の騎士に混じるとバカみたいに浮いているから一目で見わけが付いた。

「あのバカは一度痛い目見ればいいさ。・・・ん、サイネリア、掃討は終わったのか？」

「ううん、でももう騎士団の連中で大丈夫そうだからいったん戻る事にしたの」

「そりゃあ懸命だ。」

どうやら、余計な危険が自分に降りかかる前に退散してきたようだ。

「ところでサイネリアさん、鏡の国から現れたあのジャバウォックに挑む気はないかい？」

「それにはヴォーパルソードが必要ね」

「（なぜルイス・キャロル？）」

なぜか妙にノリノリなロイドといつも通りのサイネリアに、フウリンは首を傾げた。

「やれるか？」

「ちよつと妖精の国に取りに行ってくる。」

「オーケー。フウリン、出番だ。」

「はい、座標は？」

その妖精の国とやらの場所を尋ねたフウリンは、その答えを聞いて思わず、へっ、と驚いた。

その場所が、丁度この真下。

位置的に第二十六層だったのだ。

「妖精の国よ、よ、う、せ、い。」

彼女にデフォルメされた星のステッキを突きつけられて、フウリンはごくごくと頷いた。

## 魔劍。

劍は古来より権威や王位を象徴し、直接劍を抜いて斬り合う時代が過ぎ去った今も儀礼用としてこの世に存在している。

アーサー王伝説のエクスカリバー、日本では皇位を示す神器として天叢雲劍など、中には歴史を変えうる超高次元の一振りがそれに当たるところ。

では魔劍とは、一般的に持ち主に不幸を齎し、中には邪悪な力を持つ物もある。

ところで、想像したことは無いだろうか？

伝説に登場する数々の魔劍妖刀聖劍、それらの出自が発揮している物があまりにも少ない、と。

大抵が、ドワーフなど妖精が鍛えた、天使が授けた等等など、そういった現実的に曖昧な表現をされているものである。

それどころか、調べれば英雄たちがそれらの劍を、何の説明もなく所持していた、と片付けられることも多くない。

ここで、かの『黒の君』はこう唱えた。

「物には魂が宿る。もしかしたら、我々が観測できないだけでそこ



に精神が介在しているかもしれない。昔から考えられてきた命題だ。ではそれを是として、こういう考え方もありなのではないだろうか。魔剣と呼ばれたり、曰くが付いたりして、魂が宿るに至った物品と“並列するどこかの世界”に存在する人間の魂の一つが同一である可能性。

私は人間にも地獄や冥府が有る様に、意思や魂を持った物品にもそれに相当する場所が存在するのを知っている。

意思が有り、魂が有るのなら、そこに物理的な距離は関係ない。

つまり、窮地に陥った別の世界の“自分”の下へと駆け付けてくる、そう言いたいのだ。

流石に“世界”と“世界”の境界は別の枝と枝だから不可能だが、この世、或いは別世界でのこの世から消えさり、その“物の墓場”と呼べるどこの次元とも属さない場所に送られ魂と意思だけに成った物品なら、それは可能だと断言する。

危機的状況下で、極限状態の精神の上で、なお且つそれらの物品が所有者として相応しいと認められた時、その魂にふさわしい形を得て新たな持ち主の下へ顕現する。

それは考えようによっては、妖精や天使に授かったと勘違いするのではなからうか。

異世界の同一の魂が所有者として認めたのなら、彼らは歴史を変えうるチャンスを持っているとも考えられる。

故に、僕はこれを王位や権威とは違う、新たな歴史を刻む力の象徴として“魔剣”と定義することにした。」

それを受け、魔術師はそれに更なる定義を付け加えた。

それは神代の、或いは異世界のオーパーツとしての側面である。

そう言った過去や既存の文明では説明できない存在が、滅びた世界

から流れてくることが往々にして稀にあるからだ。

故に、魔剣は“剣”と称されても、その形が『剣』である必要はない。

それらには、太古より失われた魔術は数知れず、現在では再現できない性質、能力を兼ね備えている者も多い。（大抵が実用的ではないらしいが。）

“本部”はその強弱と性質を、最低Eから、最高SSSランクまで表記し、管理しようとした。

現在、この世界で確認されているだけで三百本余り。

それが多いか、少ないかは、意見が分かれるところである。

だが、こう言う見方もある。

“魔剣”を手にする事が出来る人間は、ある種の“資質”を持っている、と。

それは即ち、英雄の資格であり、世界を変えうる資質である、と。六十何億の人間から、選ばれた存在であると。

「彼女はどっちになるのかなあ。」

遠目から、古代竜に挑むフウセンを見ていた彼はそう呟いた。

『小娘が、興醒めだぜ。』

古代竜はまるで欠伸をするかのように口に鋭い爪の備わる手を口に

当てた。

『なんだ、その安っぽい殺意は。』

『何が安っぽいんやあ!!!』

『それはなあ、お前が手にしている魔剣が全てを語ってやがるぜえ  
!!!』

両者は激闘を繰り広げているように見える。

だが、少しは戦闘の経験が有る者なら分かるだろう、一方的である  
と。

「勝ち目はゼロかと。」

彼の背後に控える女が言った。

「だよねえ。」

こくこく、と彼は頷いた。

彼は、黒髪に真っ黒なローブ。顔立ちは日系より西洋よりだ。

年齢の程は十代前半。小学生くらいで、身長は百四十に達するかど  
うか辺りだった。

しかしその双眸は紅く、見た目に似合わない貫禄や鋭さが有った。

その背後に影のように控えるのは、同じく黒づくめのローブ姿の女  
である。

ただ、こちらはまるで物乞いのように擦り切れており、つぎはぎだ  
らけでボロ布のようにしか見えない。

芳紀と言えるほどの年頃の女性であるのに、ロングの赤毛の髪がボ  
サボサで台無しである。

夜の道端で遭遇すれば、まるで幽鬼のように思えるだろう。

それでも黒ずくめの目立たない格好は周囲には呆れるほど多く、赤毛で目立つだろう女もローブに備え付けられているフードを深く被って怪しげに顔を隠している。

その二人組が居るのは、昇降魔法陣であり、悪魔から解放されて魔法陣の術式を作動させようと四苦八苦している魔術師が何人か居るのが見て取れる。

「見なよ、オリビア。こいつらざっと千人は居るのに、積極的に動こうとしてるのは十人くらいだ。」  
「可笑しいね、と少年は笑った。」

「術式を起動させる呪文が分からない為かと。」  
オリビアと呼ばれた赤毛の女が答えた。  
「そうでなければ、古代竜が出現したと言うバカげた状況でこんなところに立ち往生する理由が無いのである。」

「それでも足掻いてみるのが人間じゃない？  
諦めが良いことと何もしないのはまるで意味が違うよ。」  
「現実に絶望してパニックに陥るよりは良いかと。」  
と言うより、ここにいる千人近い魔術師の多くは古代竜の出現でパニックを通り越してどうしたらいいか分からなくなっている様子だった。

古代竜と言う絶対的な化け物は、恐怖映画のように大衆に逃げることすら許しはしないようだった。

「君って可愛げなくなったよね。つまんない。」

「我が主よ、我が悲願を成就するには必要だったのです。」

「まずその喋り方戻してよ、何か君がどこぞの騎士みたいに話すと背筋がかゆくなるんだけれど。」

「・・・努力いたします。昔のことはあまり覚えておりませんので。」

「はあ、つまんない。つまんない。つまんない。つまんないよお！」

！  
「！」  
終いには少年はオリビアに駄々をこね始めた。

「僕もあんな風にどかーんと目立ちたいなあ。」

リネンのやつばーっかり目立つちゃて、自分が悪の権化みたいな口ぶりです。

面白くない。面白くないね。余りにも面白くないから、世界征服でもしてやろうかな。」

「今は雌伏の時です、我が主。どうかご自重下さい。」

見た目相応に不平不満を垂れる少年を嗜めるオリビア。傍から見たら仲の良い姉と弟にしか見えない。

「あ、でも良くないかな、世界征服。僕も久しぶりの現世シヤバだし。この世界を満喫するには丁度良いかもしれないね。それよりエリーシユには連絡取った？ まだあいつ生きてるんでしょ？」

「はい、我が主の復活に大変喜んだご様子でした。」

今頃大至急こちらに向かっています、あと二十七分もすれば合流できるかと。」

「はあ・・・。」

「どうかいたしましたか？」

なぜか疲れように溜息を吐く少年に、彼を主と仰ぐオリビアは怪訝

そうに尋ねた。

「君はダメダメでどうしようもなくグズでバカっぽいところが良かったのに。」

そんな出来る子になっちゃって……。面白くない、面白くない。」

「理解しかねます。」

「分からないかなあ、観賞用に熱帯魚買ったら人喰いサメになった感じ？」

君は君のままできてほしかったと言っか何というか……。」「

「ところで、我が主。」

「なにさ。」

不毛な論争などするつもりも無いと言わんばかりのオリビアの態度に、不機嫌そうな少年が眉を顰めて先を促す。

「なぜ、こんなところに居る必要があるのでしょうか。」

戦いの余波に巻き込まれる危険性が有ります。それに時間の無駄です。空間を割いてさっさとこの場を離れることを提案しますが。」

「はあ、君さ。僕の何を見て来たわけ。」

ほんつとに昔の事全然覚えてないよねえ。その忠誠心は評価に値するけどさあ、ぶっちゃけ幾ら優秀でも今の君なら要らない。口答えするならポイって捨てちゃうよ。」

「すみません。出過ぎた真似をしました。」

それまで表情一つ動かなかったオリビアが、急にしゅんと大人しくなった。

「ま、その辺りはおいおい調整すれば良いとして。」

それでさ、なんで僕が敵の戦場のど真ん中、しかも教会勢力の本拠

地の目の前でばやーっと突っ立つてるか聞きたい訳だよね？」

「……はい。」

彼女の諫言に対する嫌味の籠った少年の言葉に、オリビアは恥居るように頷いた。

「真面目な理由としては敵情視察。この時代の連中がどれくらいか見定めなかったから。」

まあ、それはだいたい完了したってところだね。リネンなんかの手玉に取られるようじゃまだまだだね。」

「ですが、彼らは最低限の防衛戦力に過ぎません。彼女はそれを突いて事を起こしたにすぎません。」

「リネンの奴、この一件の全部の責任を僕らに押し付ける気だよ。僕の召喚をさせるだけだったら、僕の提示した条件を呑ませるだけでよかった。でもそれだけなら、適当に生け贄を攫うだけで良かったんだ。」

だって言うのに、この大騒ぎさ。君はその辺りの爪が甘い。」

「すみません。」

「いいや、いいさ。逆に僕が存在が強調される。」

リネンの奴はそれを口実に好き勝手暴れる、僕の力は当然増す。相変わらずいい性格してるよね、あいつ。」

少年は、楽しそうにけらけら笑う。

「でも、公表はされないでしょう。」

せいぜい、召喚魔術の暴走か、その辺りとして片付けられるでしょう。」

「わーお。そいつは良かったね、それなら教会連中の面子は保たれるし、悪魔の魔手から皆を守った連中はヒーローだ!!!」

それがあまりにも滑稽だったと思ったのか、少年は腹を抱えて笑い

だした。

「では、真面目で無い理由はなんでしようか？」

「うーん、せつかく部下を揃えてくれたって言うエリーシユの目を疑うわけじゃないんだけど、やっぱさー、従者は自分で選びたいよね。」

なんかこう、いい感じに心が歪んでる奴とか良いよね。」

「はぁ……。」

そう言えば我が主はこういう人だったなあ、とオリビアは思った。

その直後、少年は自分のローブについているフードを深く被った。向こうから全身に鎧を纏った騎士が現れたからだ。

「まだ皆さんこんな所に、どうしたのですか!？」

「術式が起動できないんだよッ!!」

解析を試みていた魔術師の一人が、怒鳴る様に騎士に言った。

騎士は声からして女性、言わずもがなエクレスシアだった。

「ああ、この手の公共の大型魔法陣の起動にはパスワードが必要でしたね。」

「それを知ってる役人は悪魔に攫われちゃったんだよ!!」

一般人に分かりやすく言えば、この昇降魔法陣は電車で、その役人が運転手なのである。

定刻になったら術式を起動させ、上層や下層へと転移を発動させるようになっている。



「リネンの奴が使役する悪魔は下品で嫌だ。

僕みたいにさ、もっと優雅に、スマートじゃないとね。まあ、魔界の環境考えれば形振り構わないうって姿勢も分かる気がするけれど。」

「まさか魔界に居らっしやるとは思いませんでした。次元の狭間に落ちたのですから、どこぞの異空間を彷徨っていると思っていましたので。随分と手間が掛かりました。」

「……まあね、悪魔なんだから、魔界に居るのは当たり前だよ。」

灯台下暗しって奴さ、と少年は淡々と言った。

「それよりさ、オリビア。頼みが有るんだけど。」

「はい、如何様にも。」

「暇だからここは一発芸でもやってみてよ。」

「……」

オリビアは黙り込んだ。

「如何様にもするんでしょ？ 暇だから一発芸してよ。」

にやにやと笑う少年。

周囲にざっと千人の魔術師の衆人環視の中でやれと言う。

「……」

具体的に言えば、人を困らすのが大好きなのだ。

「みなさーん、今からこの人が一発芸しますよー!!!」

そして少年は両手でメガホンを形作って周囲に大声で言い放った。

そうして退路を断って行く。

当然、周囲は何事かと二人を見てくる。

「……………ジャグリングします。」

そう言つて苦肉の策として、オリビアは懐から取り出したナイフを何本も上に投げ始めた。

「もつともつとー!!」

少年は無遠慮にオリビアのロープの中に手を突っ込んで残りのナイフを全部引っ張り出すと、次々と彼女に向かって投げつけた。

ざつと二十本はあるナイフが宙に舞う。

「うーん、じゃあ次は目隠しで。あ、君にはあんまり意味無いね。じゃあ逆立ちとかしてやってみてよ。」

「無理です。」

あまりにも呆気なくやり遂げてしまった為か、少年は不満そうだった。

ギャラリーの反応もいまいちである。

反射神経辺りを強化してるんだろ、という視線がありありと見て取れる。

実際その通りだから反論なぞ出来もしない。

結局、こんな状況で何やってんだこいつら、みたいな白けた視線だ

けが残った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「悪魔仲間から聞いたんだけど、これがいわゆる羞恥プレイって奴？」

ガクツとオリビアは膝と手を突いた。文字にするとorzだった。

「やあやあ、リトルボーイ。」

すると、少年に話しかける人物がいた。

「あ、これはこれは・・・・ご機嫌麗しゅう。」

「今はアバンって名乗っているんだ。君がこっちに來たって言うから、顔を見せに來ようと思ってね。本当ならゆっくり話をしたかったんだけど。」

現れたのは、カンバスを携えた絵の具だらけのだぼだぼの作業着を着た女である。

むしろ魔術師の集団から浮いているその姿は、更に別の意味で浮いていた。

その完璧すぎる美しさを持つ美女は、どこの誰だと周りざわめき出すほどだった。

「オーリービアー！。頭は高くないけど、誰の御前だと思ってるの。」

「・・・・・・・・はい、我が主。」

オリビアは手にしたナイフを軽く薙いだ。

たったそれだけで、一点に注がれていた周囲が一斉にバラバラになった。

三人はそこに居る誰からも認識できなくなったのだ。

「こいつらうつとおしいな。こんな窮屈な場所では何ですから、そちらに行きましょう。」

「排除しましょうか？」

「敵意を向けられたわけでもないのに、なんで殺す必要があるのさ。」

「オリビアの提案をさらりと流し、少年はアバンと名乗った美女をエスコートするように片手で促した。」

「下層に居る魔族も君みたいに優雅で気品が有ったら良いのにね。連中は何と言うか、独創性が無いと言うか、センスが無いと言うか。」

「そんなアバンの愚痴っぽい言葉を聞きながら、魔術師の合間を潜りぬけて、昇降魔法陣の入口である階段を下りる。」

「すぐそこでエクレシアや魔術師がパスワードを解析しようと四苦八苦しているが、誰にもこの三人が目に入らない。」

「では改めて、我が敬愛する『魔王』“アバンギャルド”陛下に会えて、光栄でございます。」

少年が、彼女の前に傳いた。

オリビアも彼に続いて膝を折って、それに追従する。

更には、向こうでフウセンと戦っているはずのファニーすらも、片手を地面に付けて姿勢を低くし彼女に向かって頭を下げた。

「敬愛か、良い言葉だね。でも忠誠じゃないんだ。」

その姿からただの芸術家にしか見えない彼女こそ、たった一言で人類と魔族の全面戦争を起こせる強大にして、絶対なる『魔王』。

嘗て十三柱も存在していた『魔王』の中でも、その余りにも強大な力ゆえに殺せないし殺しても意味が無いから文化財として“保護”されている、『盟主』が全人類に秘匿している“無害”な魔王。

二番目にして“美学”と称される『魔王』、その名は“アバンギャルド”。

芸術を愛し、普段は人間に扮して地上で活動している隠者<sup>ハーミット</sup>。

「陛下の御力を前にすれば、我が忠誠など塵に等しきかと。そんなもの、捧げるに値しないと存じます。」

「あはははははは、本当に君は面白い奴だよ。」

ぱちぱちと可笑しそうに手を叩く、美女の皮を被った魔王。

少年は、そんな魔王から一目置かれていた。

「良い絵は描けたでしょうか？」

「うん、描けたよ。ここしばらく、どこに行っても微妙だったから

ね。

彼女、リネンって言ったっけ？ 実に素敵だね。前の世界でも唾付けとけばよかったよ。彼女お陰でボクの次の作品の構想が出来上がった所さ。」

子供のように笑いながら魔王は言った。

魔族の頂点で有りながら、どこまでも人間らしい笑みだった。

「失礼ながら、精神防護で心を守る騎士どもなんて、陛下のお気に召すとは思いませんが。」

「そうでもないよ。貝のように身を鎧で固めていると言う事は、その中には暴かれたくない本音が混じっていることもある。

君もまだまだだねリトルボーイ。芸術は感性さ。イマジネーションだよ。」

「精進いたします。」

先ほど、オリビアにあれほどまで傍若無人だった少年ですら、魔王の威光を前にしては借りて来た猫のようだった。

「久々に筆が踊るようだったよ。」

最近の戦争はシステマチックで機械的だ。それじゃあ、駄目なんだよなあ。もっと魂を燃やして命を掛けて戦ってくれないと、良い絵が描けない。

子供が戦火に巻き込まれて死ぬ？ 飢餓が生じて罪もない人々が飢え死ぬ？ そんな“当たり前”の悲劇に魂は宿らない。」

芸術を愛し、それ故にかの魔王は自ら筆を執る。

彼女が特に得意としている作風は、戦争画。

「もつと、ドラマチックに、ファンタスティックに、スペクタクル命と命、魂と魂が衝突し、燃え尽きる美しさ・・・それを絵にしたい。」  
彼女の描く作品は、魂を奪う（飽くまで比喩的表現である）と評判である。

作品の中には、一枚で国を傾けさせたことすらあると言う。  
魔性の芸術家なのだ。

「その為には『マスターロード』には頑張っしてほしい所なんだけれど。」

やっぱり誰かを立てないとダメみたいだね。」

「失礼ですが、やはり陛下が玉座に座るつもりは無いのですね。」

「そんなことしたら、リユミスに追いかけてまわされるじゃないか。」

ボクは当事者になっちゃいけない。それじゃあ絵が描けないし、集中もできない。」

そんなこと言うまでもない、と魔王は言外に示していた。

“魔王”は人類の根源的な敵対者ではあるが、人に近い感性を持つ彼らは時に人類との衝突を避ける事が有る。

その時に応じて、“有害”か“無害”かが決定され、人類は不干涉を決め込む。

魔王の実力は、本気を出せば人類の九割を犠牲に漸く滅ぼせると言われている。

だから無理に倒そうなんて、誰も思わないのだ。

ちなみに、“魔王”は魔族の誰かが頂点になって名乗る物ではない。

種族が、“魔王”なのだ。

根本的に魔王は魔族と違う。

魔術師の嘗ての世界では、ある日ポロつと球体状で出現し、半年に及ぶ待機期間を地上で過ごし、ある日突然“誕生”する。

その周期はおよそ五百年から六百年に一度。

人類はその周期に合わせ、なるべく早くその魔王の卵と言える物体を誕生するまでに発見しなければいけない。

“魔王”の必勝法は、誕生したばかりの無知で無力な状態を狙う事だ。

それが適わない場合、魔王はどこか転移し周囲から知識を吸収し、人格を確立する。

そして、人間の成長スピードをフカヒレ料理だとすると、魔王はカツプめんのような早さで成長し、人類の脅威となる。

ちなみに少年の目の前に彼女は、魔王の中でも最古参の一人だ。

もはや滅び魔術師たちが捨てた世界の歴史そのものと言っても良い。

あの『黒の君』ですら、相手にしたくない、と言わしめるほどの強大な力を誇る。

彼曰く、バカみたいに強いし殺し難いし殺しても徒労に終わる、との事だ。



「いや、別に僕としても人類が減ると困るのでそれで結構なんですけれど。」

「うんうん、長い間祈ってもらってるのに悪いとは思ってるけれどねえ。」

と言いながらも、魔王にはちっとも悪びれた様子は無い。

「まあ、今度第一層でお祭りがあるみたいだから、偶には顔を出そうと思うんだ。君たちも暇だったら来ると良いよ。ついでにお城借りて展覧会するつもりだし。」

明らかについでのの方が目的で有るうことが見え透いていたが、空気を読んで少年は何も言わなかった。

「行かせてもらいます。陛下の精魂籠った絵なら、是非とも拝見したいですから。」

「待ってるよ。」

魔王はそう言うと、指を鳴らした。

「な、何が起こった！？ 急に術式が作動して・・・」  
すると、術式を解析していた魔術師の一人が声を挙げた。

「じゃあね、と言って魔王は手を振った。」

魔王の体が風化し、カラカラに水分の抜けた木の葉の塊になった。  
転移魔術の一種だ。

「さて、僕らも魔法陣の上に戻るのか。」

「いやあ、僕も陛下みたいにならな男になりたいね。」

貫禄が違うよね、などと少年が言っていると、その横をエクレシアが駆け抜けて行った。

ただし、昇降魔法陣とは逆方向である。

振り返ると、なぜか小さな女の子が離れたところに歩いていて、暢気に古代竜を見て歓声を挙げています。

ほんの一瞬まで、彼女はそこに存在しなかった。どこからともなく現れたのである。

エクレシアはその少女の身を案じて、助けに行っただろう。

このままではこんな所に一人取り残される羽目になる。

「馬鹿だね、術式はもう作動し掛けてるじゃないか。

どのみち二人とも間に合わない。無駄な事をするよね。」

少年はそんな彼女を嘲笑いながら、オリビア、と従者の名を呼んだ。

彼女は、ナイフを一閃した。

すると、空間が不自然に捻じれて、少女を抱えて戻ってきたエクレシアと昇降魔法陣との距離が異様に縮まった。

ぎりぎり、二人は転移発動に間に合った。

「へえ、そう言う選択をするんだ。」

悪魔の下僕なのに親切だね、と少年は笑った。

「私の行動は全て我が主の意に沿うものだけです。」

「なるほど、彼女とは近いうちまた会う事になるのね。君の未来視は当てになるからねえ。じゃあとりあえず、その眼を使って資金稼ぎしようか。ギャンブルくらいこの世界にもあるでしょ？」

「……………」

オリビアは何とも言えない面持ちになった。

場所は第二十七層へ転移された。

周囲では生還できた喜びから、歓声が上がった。

「ところでオリビア。君って昔の事はもう殆ど忘れちゃったんだろ？  
じゃあ、僕の名前は覚えてるかい？ 君にのみ言う事を許した僕の名だ。」

「残念ながら、隔てた世界は数知れず、狂った次元にこの身を晒し、  
流れた時間は万年を超えるでしょう。」

「そんなだけ探して僕を見つけられないなんて、君も探し物が下手糞  
だよな。」

「それだけの時を経ても、貴方の名を忘れることはできま  
せんでした。」

少年は、沈黙した。

やがて、周囲の魔術師たちが次の転移の時間まで時間を潰そうとバ  
ラバラに解散して行った。

そのうち昇降魔法陣の上には、二人だけになった。

「まったく、君もつくづくダメな奴だね。」

「はい、私は貴方に付いていくと決めましたので。ユピテルさん。」

「やっぱり君なんか僕の小間使いで十分だよ。」

少年は、そう言って階段の下を見下ろした。

「久しぶり、随分と待たせたけど・・・イメチエン？」

「過去とは決別したので。」

そう返ってきたのは、階段の下に彼と同じフード付きのローブを纏った人物が居たからだ。

「そう、あれくらい歪んでた方が面白かったんだけど。」

「それは残念ね、マイマスター。」

そちらこそ、詰らなかつた石ころにするから覚悟してほしいわ。」

「それは怖いね。」

彼はけらけらと笑った。

階段の下で二人を待っていたのは、褐色肌に銀色の髪を持つ女。

そして、何より特徴的なのは、人間ではありえない異様に尖がった耳。

この世に、ただ一人しか現存しない、ダークエルフの生き残り。

人呼んで“砂漠の魔女”。

数少ない、“魔女”の称号を持った札付きに邪悪な魔術師だった。

「さて、漸く悪魔と魔女が揃い踏みと言ったところかな。

んじゃあ、さっそく地上に降りてみて、悪行三昧を始めようか。」

「御意のままに。」

「イエス、マイマスター。」

二人の従者を従えて、嘗て五百年もの間地上で恐れられた伝説の『悪魔』が。

今、復活した。

### 第三十二話 復活の『悪魔』（後書き）

今回はどちらかというとは別の物語の話の話を補完する回です。

初見の人には分からない事も多いでしょうが、要点さえ押さえれば大丈夫です。

彼らは悪魔とその従者。魔族です。今後、主人公たちの前で現れるでしょうから。

今年の更新は最後かもしれませんが、遅ればせながら私の拙作を読んでくださっている皆さんに、メリークリスマス。皆さんよいお年を。来年も宜しく願います。

## 幕間 “議会” は踊る（前書き）

『黒の君』は語る。

「あくまで魔術師として個人的な見解という前提だけど、“宗教の自由”なんて言う法律より愚かな法を僕は知らない。

例えば地獄の概念で言えば、人は死後にどの地獄に属するかわからなくなるだろう？ 六道地獄や奈落、聖書の地獄、北欧神話なんかのヘルヘイム。

それぞれの神話から派生した“直系の世界”ならまだしも、僕の弟子がいる世界はそう言うのから外れているタイプだからねえ。

この世界では人間が信ずる神の下へ召されるって事になってるなら、宗教を自由に選べるってことは、地獄を自由に選べるってことだよ。そんなの馬鹿げた話だろう？

そんなの都合の良い救いを求めるのと同義だって話さ。

え？ それって結局、思想を縛っているってことじゃないかって？

じゃあ君は思想に縛られていないと？ 何事にも囚われず、自由な発想で、自由な選択を行い、自由気ままに過ごしているとでも？

そんなの赤ん坊と同じじゃないか、知己も知恵もない獣と同じだよ。格好付けた詩人でもあるまいし、ある程度の束縛の下での自由でなければ、社会の“人間”とは言えないのさ。

“自由”だなんて、それひとつの思想だよ。愛やら恋やらと同じで浮かれた言葉だから、それに誰も気付こうなんて思いもしないけれど。

それが思想であれ、時の権力者であれ、周囲の環境であれ、人が何かに隷属するなんて、当たり前のことなんだよ。それに逆らうなん

てバカか狂人のそれだよ。

人間は群れる生物なんだから、群れから外れた奴が人間扱いされないのは極々当然の話さ。差別や区別はあって当然だし、無くなったらそれは人間の社会じゃないだろうね。

そう、明確な“差”や“違い”にこそ、魔術には重要でね。あれ、なんか関係ない話になっていないかい？

・・・え、オチ？ そんなの有るわけじゃないか。真面目な話なんだから。雑談だから別に構わないじゃないかって言われてもねえ・・・」

いつかどこかでのある少女との会話

より抜粋。



## 幕間 “ 議会 ” は踊る

「知ってるかねえ？ 普通、あまり考えられないことだが、無罪を立証するのと同じくらい、犯人と断定する事は同じくらい難しい。」  
「なるほど、第三者や協力者が進んで自ら真犯人を庇おうとしてボロが出る推理小説みたいなシチュエーションと同じですね。」  
たとえ犯人だと分かっているにしても、証拠が無いから憎たらしくも捕まえる事が出来ない。そういうことですか？」  
然り、と『カーディナル』は頷いた。

場所は戻って第二十九層の“ 議会 ” の会議場。  
時はたった今、リネンが登場して自らが犯人だと名乗り出たところである。

「犯人だと言っているのだ、とりあえず拘束なり尋問なりするべきではないのか？」

「貴様はブラックホールや恒星とかが突然出現して被害が出て、これをやったのは私ですと名乗り出て来た奴を犯人として終わりにするの？ 馬鹿馬鹿しい。」

半ば答えを予想していたのかにやにやと笑いながらの『プロメテウス』の提案を、彼女は律儀にもちゃんと言い返した。

実際そんな事が起こったら被害どころの話ではないが、例え話故に誰も『カーディナル』の言葉に突っ込む事はなかった。

だが、話の内容としては間違っていない。

この一件が複雑化しているのは、現代の魔術師が苦勞して実体の下級悪魔を召喚してもせいぜい一体が関の山だと言う事だ。

千体を超える悪魔の軍勢を従えて襲ってきました、私が犯人だと言う奴が出ました、はい逮捕、と言うわけにはいかないのである。

「それは困りましたね。わざわざ名乗り出たのに、このままではただの目立ちたがり屋になってしまいます。」

「では、確か証拠を提示すればよろしいのでは？」  
そう例え、リネンが真横に悪魔を侍らせていたとしても。

「それ以前に、私を前にして悪魔を連れているとは、いい度胸だと言っほか無いな。」

「ええ、彼って親切なんですよ。困っている私を“善意”で助けて下さるって言うっているんですからね。」

ここでこの悪魔と契約してるから当然だ、何て言えば即刻首を落とされるだろうが、狡猾なりネンは悪魔に憑かれている人間に強硬な手段をとれない事を良く分かっていたのだ。

人間に憑いた悪魔は厄介で、聖水や聖書の文言であっさり退治するなんて宿主の命を握っている悪魔には出来ないのだ。

だから悪魔被い、エクソシズムとは本来腰を据えたネゴシエートが

主になっている。

ジュリアスのように端から悪魔と交渉しないしそれに憑かれた輩は人間じゃない何ていう態度とは、方向性がまるで違うのである。

「ああ、なるほど、確かに貴様は犯人らしいな。」  
「たったそれだけのやり取りで、『カーディナル』はリネンが犯人だと確信した。」

その要因は経験則だったり、第六感だったりする。  
魔術師なんて言うイマジネーションが大事な業界では、往々にして理論より感覚の方が信用に値する局面があるのである。

何より、『カーディナル』は彼女の目を見て確信した。

人間とは思えない、汚れに満ちた瞳。  
幾ら雪ごうとも洗い流しきれない業が、魂にこびり付いているのだ。  
具体的に表現するなら、禍々しい雰囲気があると、人間にしては邪悪な威圧感があるとか、そう言う類の話になる。

この場に居る誰もが、己の霊的感覚が彼女を犯人だと告げている。  
それくらい見抜けないようでは“魔導師”は務まらない。

だからと言って、人間の世界は感覚ではなく理論の世界。  
彼女が真っ黒だからと言って証拠もなく犯人だと決めつけることはできないのだ。

とは言え、

「証拠など後から幾らでも出るだろう。」  
面倒くさそうに、『魔導老』が呟いた。捕まえた後に調べれば証拠など出るなどと言う意味ではない、証拠なんてものは後から幾らでも作れば良いと言ったのだ。  
例えなくてもでっち上げることなぞ、ここにいる面々には造作もない。

本当の意味で“事実”を捻じ曲げるなんて芸当が出来る者も居る。

世間が求めているのは、分かりやすい理由だ。

難解な数学の問題の答えの過程など殆ど誰も知りたいとは思わないのと同じように、重要なのは犯人を捕まえたと言う結果なのだ。

それで面子は保たれる。それで十分なのだ。

「とりあえず、茹で釜にすればよからう。」

「うわあ、酷い。」

そう結論にした『カーディナル』に、非難めいた呟きを洩らす『パラノイア』

茹で釜とは、所謂異端審問で使われるあの茹で釜である。  
熱したお湯に手を突っ込んで平気ならそれは魔女で、そうでなかったら大火傷のどっち転んでもごめん願いたい代物だ。

本来なら、尻尾の出さない黒魔術師に対して異端審問官が使う手口である。  
尻尾も角も翼も丸出しにしていたリネンには unnecessary 工程だが、こう言う場合にも使われるのだ。

「なんと言うか、予想はしていましたが、予想通り過ぎて逆に引くと言うか。」

そうそう、自首したのですから自己弁護の機会くらい頂けませんか？」

「そうだ、茶番じみた裁可なぞどうでもいい。それより、汝は何者ぞ？」

一応神聖と言う事になっている審判を茶番扱いされた『カーディナル』は眉を顰めたが、好奇心が顔に出ている『エンプレス』はどうでも良さそうだった。

「先ほど名乗りましたが？」

「違う違う、出自を訊いておるのだ。どこの誰か、家名或いはこれだけの事を起こしたのなら自ら誇れる師くらいはいるだろう？」

内心このままスルーされるとひやひやしていたリネンだが、彼女に一つ問いが投げかけられた。

「私は思想犯ではありませんよ、脅されてやらされたのです。」

「ほう？」

それは『エンプレス』の求めていた答えではなかったが、その場にいる“魔導師”全員の興味を引いた。

「脅された、これは可笑しなことを聞いたぞ、今回の一件を起こせるほどの魔術師が、よりにもよって脅されたからだ?!?」  
「……もつとまじな言い訳は無かったのか?」  
凄味を利かせて『カーディナル』はリネンを睨んだ。

「事実ですから仕方ありません。無理やりやらされたからこそ、こうして解放された今、弁明と釈明に参った次第なのです。」

「ぬけぬけと、どの口が……」

「これでも私は、『盟主』から身分を保障された身なのですが。それでも話を聞いてくれませんか?」

「なに? では貴様は彼女から庇護を受けていながら、裏切るような真似をしたと言っのか?」

『魔導老』の目が鋭くなる。

「それが本当なら、『盟主』から何も返答が無いことと辻褃は合いませんね。」

一考の価値はあるのでは、とギリアが口を開いた。

「それが戯言ではないという証拠は?」

「それを証明してくれる方を連れてくればよろしいのですね?」

「信じてやりたいのは仕事でもあるが、こちらも大事な部下の命が掛かっているからねえ。」

しかしながら、『カーディナル』の表情は明らかに言葉と裏腹に、と言っ感じだった。

「では、『マスターロード』。貴方は『盟主』からこの私を紹介さ

れたはず。

私が『盟主』の庇護下にいることを証明してくださいますか？」

「ん？ ああ、そう言う事もあったな。」

不意打ち気味に声を掛けられ、今にも眠りそうになっていた『マスターロード』は何度も頷いた。

「それは本当か？」

「ああ、人間ながら素晴らしい実績が有ると紹介を受けた。此度執り行う祭りに於いて誕生復活の祈願の際には是非とも巫女をしてもらおうとなっている。」

『魔導老』の問いに、『マスターロード』は眠たそうに目を擦りながら答えた。

「では彼女の素性くらい知っておろうな？」

「知ってはいるが、この私から言う必要性も筋合いも感じられんな。」

半ば話の蚊帳の外に置かれている意趣返しか、『マスターロード』は薄笑い浮かべてそう言い放った。

「これから事実を曲げるのだ、それならば真実を知ることにはどれほどの意味が有る。偽りの歴史が刻まれるのに、なぜ真実が必要か。偽る方が真実を知りたがる、・・・それは驕りだよ。そうは思わんか？」

「つまり、言う気はないと。」

つまらなそうに『エンプレス』が彼の言葉を総括した。

「聞くに、人間は我らが魔王陛下に関わるのはタブーの中のタブー

なのだろうか？

私はそのタブーに貴殿らが触れないよう、気配りをしているだけだ。

「そしてその『マスターロード』の言葉は、当然誰もが無視でき得ないものだった。」

空気が凍りつくとは、このような場合を言つのだろう。

確かに彼が口にしたのは、禁忌の中の禁忌だった。

「魔王？ よりもよって、魔王に関わっているだと!?!」

「おっと、これは失言だったかな。」

爆弾を投下した『マスターロード』は意地悪く笑った。

ふと、その時、その場の空気中の魔力が動いた。

それは誰かが隠すことなく魔術を行使した証拠でもある。

そして、何らかの魔術を行使したのは、今まで殆ど会話に入ってこなかった『ピブリオマニア』だった。

「ここに、真実はある。」

彼女が行使したのは、転送の一種だったらしい。

彼女の手には新たに一冊の本が有ったからだ。



題名『シークレットセブン黙示録』 著者：W・H

「それは、かつて魔術師の捨てた世界の資料本の原本ではないか？」  
『カーディナル』がそのタイトルを見てそう口にした。  
しかも、『黒の君』の著作である。

「この第十期の、彼女の記述が有る。」

そして、『ピブリオマニア』はあるページを手さえ使わず開くと、  
やたら大きい白亜の円卓に映像として投射した。

拡大され、投射されたページの映像には、見出しに『マスター・デ  
ビルサモナー』と描かれている。  
写真並みに精巧な似顔絵も付いて。

そして、そこにはリネンの行ってきた所業が詳しく挙げ連ねられて  
いた。

「大した、経歴だ。」

興味本位だった『エンプレス』が引くくらい、リネン・サンセット  
と言う女の二十二年余りの人生の非道がそこには記述されていた。  
血で血を染め、築いた骸は一山どころではない。  
悪逆非道にして、死と退廃こそが人生そのものと言っても過言では  
なかった。

「同じ人間とは思えないと言ってくださっても結構ですよ。  
とは言え、よくここまで調べましたね。あの人をここまで敵視

してくれたことは、名誉に思うべきでしょうか？」

「確かに人間の所業とは思えんな。」

だからと言って『魔導老』は何かしらの感情を表には出さなかった。

「では、どうやってこんな昔の人間がこの時代、この世界にやってきて、あまつさえ肉体を取り戻して現世に舞い戻っているのだ？」  
呆氣にとられていた『プロメテウス』が真っ先にそう問うた。

死者の蘇生は魔術の到達点の一つだ。

魔術の理論上は可能であるとされているが、現実では成功例が数少ないことから、それがほぼ不可能であることを示している。

あの『黒の君』でさえ、“完全”な死者蘇生は出来ないとされている。

「肉体の方は友人が用意してくれていたんですよ。

肝心な私の魂と精神は、“虚無の闇”に行っていたので。交信があったので、手探りで現世と繋がりを見つけて肉体に逆召喚したわけです。」

まるで悪魔みたいなやり方ですけどね、トリネンはどこか可笑しそうに笑った。

「裏技だな。死者蘇生の多くの障害は、魂と精神の消失にある。

まさかその保管場所が“虚無の闇”とは。かなり限定的ではあるが、確かにそれは死者の蘇生だろう。偉業だな。『盟主』が保護する訳だ。」

「でも言うのは簡単だけど、それってかなり現実味は無いわ。完全な虚無の空間、そんなところに放り込まれた人間の魂や精神が、異常を示さない訳ないじゃない。もしそれが本当なら、本当に人間じゃないわよ。」

納得しかけている『魔導老』に、『パラノイア』は首を振って否定する。

「言うなれば、人間をカプセルかなんかに閉じ込めて暗い海底に投げ捨てられたようなもの。普通なら、気が狂うのが当たり前よ。」

「私は精神防護にそれなりの自信がありますから。」

それに、一人で虚無に墜ちたわけじゃありませんからね。」

「悪魔を従えるくらい面の皮が厚いようだからな。」

そんな『プロメテウス』の皮肉に、リネンは意に介した様子は見せなかった。

「とは言え、あの場所は地獄の更に下と言うにふさわしい場所でした。」

永遠とも一瞬とも分からない、膨大な孤独と虚無感・・・確かにただの人間なら一瞬で廃人になるでしょうね。この私とて、あれから未だ夜は一人で眠れません。」

あれほどの所業を重ねてきたリネンがそう言うほど、“虚無の闇”は壮絶な場所だったらしかった。

「とりあえず、死者蘇生の定義は難しい。それこそ魂の在り処と同じようにな。それをこの魔術を極めた我々で語らうのも有意義だろうが、話を一度戻そう。」

問題は彼女がどうしてこのような事態を引き起こしたか、その決

着をどう付けるか、だ。そうだろう?」

そして話が余計な方向に行かないよう『プロメテウス』は舵取りした。

これは彼の言う定義の話をすると、余裕で丸一日を消費してしまうからだ。そして結局話はまとまらない。そんな無駄は彼の嫌う所だ。

「あ、やっと聞いてくれますか、良かったです。」

昔のことなんてどうだっていいんですよ、大事なのは今とこれからなんですから。」

「脅されたと言ったな、では貴様を脅したのは一体どのような目的で貴様を脅し、このような真似をさせたのだ?」

「よくぞ聞いてくれました。」

その為に来たんですよ、とリネンは溜息を吐いてそう言った。

「皆さんは、“緋色の魔女”についてご存じですか?」

「なに!?!」

リネンの言葉に反応したのは、『魔導老』だけだった。

「誰だ? 私の知る限り、今まで“魔女”の称号を得たのは三人だけのはずだが。」

「私も彼女がそう呼ばれているなんて知ったのはつい先日です。」

彼女を知っている人間は数少なく、しかしその影響力はまさしく魔女にふさわしいと『盟主』に伺いました。」

「聞いたこともないな。」

『プロメテウス』も、『エンプレス』も知っていないと言う。

やはり知名度は皆無のようだった。

“魔女”の称号はその時代に魔術の威光を知らしめた最高の女性魔術師に与えられる。

地上の人間に神秘を隠匿している我々にはもはやその称号を得る者は二度と出なくなるだろう、と誰もが思われている。

その称号を得たのは今までで三人。

その中に、今のリネンが言った魔女は存在しないのだ。

「老には、心当たりがあるようだが……」

「うむ、まさか彼女が……いや、そう言う事なら有りうるか。」  
知っている事がるらしい『魔導老』は顔を顰めていた。

「誰なのだ、老よ？」

言つのを躊躇っている『魔導老』に、畳みかけるように『カーディナル』は言った。

「彼女は次元の旅人。かの『黒の君』に並びうる唯一の魔術師。並列する世界どころか、別の軸にまで移動する事が出来ると言つその力は、ある種の究極に達しているらしい。

彼女は“世界”の例外である特異点そのものだ。知っているはずもない。」

「信じられないな。」

そう呟いた『エンプレス』は、疑っていると云つより信じたくないと言つ様子だった。

「私も一度しか会ったことは無い。亡霊みたいな女だったよ。いや、亡霊なのだろうな。一つの目的に執着し、その為にいかなる手段をも用いると言うのならばな。」

「ええ、彼女の目的は自分が従属し忠誠を捧げていた『悪魔』の復活。」

彼女は私にあの『悪魔』の召喚をしないと殺す、と脅してきたのですよ。」

本当に迷惑な話です、トリネンは心底嫌そうにそう言った。

「その際に、こんなものを手土産にね。」

これで従わない魔術師がいるなら、是非とも教えてくださいな。」

そう言つて、彼女が白亜の円卓の上に放り投げたのは、帽子だった。

それは所謂、とんがり帽子と言う奴だった。

黒塗りだが古い品物のようで大分くたびれており、張りが無く三角形の天辺がペタンと半ばから後ろに折れている。

いかにも魔女や黒魔術師が持っていたりしそうな代物だった。

それもそのはず、これはかなり古臭い黒魔術師の正装の一つだ。

すると、この場に居る殆どの“魔導師”がガタツと立ち上がってそれを凝視した。

「馬鹿な!？」

その声を荒げて言ったのは、『カーディナル』だった。

立ち上がった“魔導師”の誰もが、絶句している。

「どうしたのだ？」  
反応が無かったのは、『プロメテウス』と『マスターロード』だけだった。  
ただ、『ピブリオマニア』だけは、我関せずと本を広げたままだった。

「知らないのか？ 同志『プロメテウス』。  
それは己の師から受け継いだと自慢していた『黒の君』の一張羅の一部だ。」  
「なに!？」  
それを『魔導老』から聞いて、『プロメテウス』もその事態を把握した。

「少し前に遭遇し、殺し合いになった際に討ち倒し、奪ったのだとこれが、私が情状酌量を求める理由ですよ。こんなもの突付けられてどうしろっていうんですか。」  
「信じられん、信じられんな。」  
「ええ、・・・冗談でしょう・・・」  
何度も確認するように、『エンプレス』も『パラノイア』もただ呆然としている。

「まさか、そんな・・・あの『黒の君』が、死んだと言つのですか？」  
そして、ギリアが誰もが認められない事実を口にした。

「そしてあの『悪魔』は召喚に際し、神に信仰を捧げた敬虔な十三人の生け贄を要求されました。」

その為には、どうしても“調達”が必要でした。」

「……なるほどな。そう言う理由か。」

かたん、と脱力したように椅子に体を落として、『カーディナル』は納得したと言うように頷いた。

「私が憎いですか？」

「人を憎むのはもう飽きたよ。」

私の部下たちは、悪魔と戦って死んで行ったのだろうか？ だったらなぜ悲しむ必要がある。同じ人間と殺し合って死んで行くより、ずっと良い事だと思わないかねえ？

それに、ここ最近の“連中”はなぜか活動していないからな。化け物との実戦を知らない若い連中には良い機会だっただろう。」

「今初めて、万全の準備をして貴女に挑んで良かったと思いましたよ。」

慈愛すら浮かんでいる『カーディナル』に、リネンは薄ら寒いものを感じていた。

「道理で、最近の『盟主』の動きがおかしいと思った。」

「ああ、あの御方が本当に死んだかどうかはともかく、あの御方が仮に死んだと信じて『盟主』が何か動くこうとしているのなら、厄介だな。」

「『盟主』は抑圧されるとその反動で何かしでかすからなあ。」

そして、“魔導師”たちは口々にそんなことを言いだした。

それはどちらかと言うとダメな意味で優秀な味方に動かれて何が起



こるか分からないから困ると言った状態に近いようだった。

「私は彼が死んだなどとは思ってはいない。

彼の不死に対する執着心は異常だ。自らの死を否定し続けて来た彼が、今さら楽に死ねるなどとは私は思っではないぞ。」

顔を顰めて憮然とそう言い放ったのは『プロメテウス』だった。

「だが、それでもあの御方の帽子がここにある以上、確かに敗北したと言う事実は受け止めなければなるまい。」

「確かにあの御方が死ぬなんてことは無いでしょうが……。」

『エンプレス』やギリリアも、そうは言っても表情は硬い。

「あの『盟主』の権威はほぼ全てがかの『黒の君』の威光だ、その張本人が詳細不明の人物に少なくとも敗北したのだと、下層の魔術師どもにどう言える。こんなこと、どう説明しろと言うのだ。

とにかく、一つずつ問題を処理しよう。あの御方については『盟主』の指示を仰がなければなるまい。扱いの難しい問題だからな。」  
そう言った『魔導老』の言葉に、殆どの“魔導師”が頷いた。

「で、私の処遇はどうなるんですか？」

このままではめぐるしい状況に忘れ去られるかもしれないとリネンはそう問わずには居られなかった。

「まず、貴様が『盟主』の下に居るのなら、この一件について他言無用にすることだ。これは貴様自身の為でもある。」

なぜなら今回の騒動は一番の被害を受けた『カーディナル』から訴状が『盟主』に届くだろう。そこで内々に処罰を受けることになるのだからな。

それで手を打つことにするのが妥当だと思うが如何に？」

「それでよろしいかと。」

いつの間にか仲裁役になっている『魔導老』の言葉に、『カーディナル』は頷いた。

「言っておくが、これは特例だ。我々は“魔導師”の役目は魔術の保全と伝道。

貴様の魔術を失うのは惜しいとも思っている故の判断でもある。」

「多少の人命より私の力の方が重いと？」

「地上で幾ら原住民同士での戦争が起きようとも、誰かが魔術の真理の果てに辿り着くものは居ると思うか？」

「命にはな、それぞれ価値が有るのだよ。等価ではないのだ。」

それは実に魔術師らしい現実を見据えた言葉だった。

「神職を前にしてそう言う事は言わんでほしいね、老よ。」

「では聞かなかった事にしておけばよかるう。」

ここは盟約を結んだ魔術の叡智を極めた者どもが集まり、協議する場所だ。関係の無い事は後にしていただきたい。」

ここにいるのは人である前に、魔術師である連中ばかり。

『魔導老』にも、『カーディナル』にも、自らの秘術を守り伝える為なら、どのような非道にだって手を染めるだろう。

「では、『盟主』の回答がでるまで一時解散としよう。私も部下た

ちを助けねばならないからな。」

「一応ですが、契約の下にある悪魔は強制帰還させることもできませんが？」

雑多な下級悪魔は流石に勝手に呼び出して好きにやらせているだけですけれど、それだけで大分違うと思いますか？」

試すように、リネンは『カーディナル』に言った。

「余計な御世話だねえ、『盟主』との盟約が有るとはいえ、お前さんとは思想相容れない敵同士だ。

それに自分たちの戦いは、自分で決着させるさ。それが人間の義務だよ。」

『カーディナル』は揺らがない。

絶対なる神の御名の下に。

より完全に近づく為に、魔術師として。

幕間 “議会”は踊る(後書き)

皆さん、今年もよろしくお願ひします。(うちは現在喪中なんであ  
けおめ言えないのです。)

今月はちょっと忙しいので、更新は少ないと思います。

### 第三十三話 妖精少女（前書き）

『黒の君』は語る。

「え？ 不老不死に興味無いって？ そりゃあとても健全で結構だね。

昔から不老不死を求める逸話なんて大抵が失敗談ばかりだからね。そんな幻想を追い求めるバカを戒める教訓でもあるのは知つての通り。

始皇帝が不老不死を求めて水銀を材料にした薬を呑み続けて死んだなんて有名な話だ。方法は間違つてないんだけどねえ、それで不死性を得るには人間辞めなきゃならない。

当然、僕もガキの頃はそんなモノも追い求めたりしたさ。結局完全な不老不死は無理だったけれど。限りなく完全に近づく事は成功したね。

今でこそ『黒の君』何て言われているけど、最初は白魔術とか錬金術とか研究しててね、十七の時には不老に至つたものだよ。

それから他人の“死”に触れているうちに怖くねってね、それから二百年は狂つたように“死”を拒絶し続けたさ。

だけど人間っていうのはね、中国の思想やタロットのアルカナのように死ぬ事を含めて完成されているんだよ。死なない人間っていうのはね、人間じゃないのさ。

だから僕は完全の迫及を止めてしまったのさ。惨めだし、愚かだからね。

でもね、それまでに追求してきた不死があまりにも“完全”に近づきすぎて、僕自身死ぬ方法が分からなくなってしまったんだよ。滑稽だろうか？

僕は目を付けられてしまったのさ。人の言葉で言う所の『神様』にね。より正しく表現するなら、『抑止力』だとか『監視者』だとか、そう言う概念にね。

異様な力を持った人間ってのは必ず邪魔が入ったり、途中で不慮の事後によつて死んだりするけれど、僕はそれを跳ね除けて存在し続けた。

つまり、『世界』と言うシステムの一部に組み込まれてしまつたわけだ。

要はこの世界に何らかのアクセシブントが有つた場合、高確率で僕にお鉢が回ってくる。無理やり僕が解決せざるを得ないような状況がめぐつてくるって事だよ。

舞台装置の都合の良い神様じゃあるまいし。そう言う意味じゃ、僕はよりにも寄つて完全な不死を手に入れてしまったのかもしれないね。

笑えるだろう？ 僕は神様の真似ごとをさせられてたんだよ。その点はその緋色に感謝してやってもいいかもしれない。次会つたらぶつ殺すけど。

もしこの世に全能の神が居るとして、魂に才能を振り分けた張本人が居るとしたら、『それ』は決して才能を無駄にしないだろうね。僕だつてそうする。

何が言いたいかと言うと、目立つ才能は決して埋もれさせないってことだよ。

歌や踊りの天才は、歌や踊りの天才として宿命づけられるだろうし、射撃の天才は射撃の天才として人生を全うすることになるのさ。

だから、自分の秘めた力から逃げることなんてできないのさ。それは結局自分を否定することになる。

え？ 君も自分の運命から逃げたりしないって？

それは結構だ。君ぐらいいになると自分の運命に逆らうことが格好良いか勘違いしてる輩が多く見受けられるからね。そう言う連中は失敗してから気付くのさ。自分の愚かさだね。

僕は思うんだ。ある程度の才能は前提だけど、魔術を使えば比較的簡単に不死には至れる。理論だけならこの地上の人間にも出回ってるからね。

でもだからこそ、そこには理性が必要なのだ。死を恐れる本能の恐怖からではなく、人間として人間を辞める理性がね。

・・・え？ 話し長いしつまらないから違う話題にしたいって？

ちよつと、君は僕のありがたーい話を何だとッ

「

いつかどこかでのある少女の会話より抜

粋。

### 第三十三話 妖精少女

時間はエクレシアがクロムと合流したぐらいである。  
場所は精霊宮の本殿。

その赤い絨毯が敷き詰められた中世の宮殿に、その場にそぐわない  
白衣とボディースーツの五人の人間が存在していた。

かの『プロメテウス』の助手である、シンシア以下四名である。

そんな目立つ集団だが、使用人と思われる人物と何人もすれ違っ  
ても誰も彼らには気付かないようだった。

しかしここは精霊魔術の総本山でもある。  
使用人と言えども、精霊魔術を当然のように体得している。彼らは  
警護兼ねているし、そんな魔術師の巣窟で自由に動き回るのは並大  
抵ではない。

なにせ、精霊魔術の使い手は空間でモノを見る。  
視覚的に見えないとか、気配を遮断したとかではその目を誤魔化せ  
ない。とにかく感知能力が優れているのである。

そんな魔術師相手にどうやって隠れて動き回っているかと言つと、  
それは彼女達の装備のお陰である。



「 F地点到達。作戦経過は予定より遅延が6秒。上々の首尾です。」

「やはり、新型のステルススーツの性能は精霊魔術の使い手をも誤魔化せるようですね。マイスターメリスの実験部隊の報告の通りです。」

「飽くまで試作品の量産品・・・完全ではない事を留意との事ですが、私には死角が思い当たりません。」

凡そ空気の対流での相対的な発見でないとまず不可能と言う、恐るべき性能を誇るステルススーツは視覚聴覚に止まらず、電子的魔術的な手段を持つてしても見つけることは出来ない。

飽くまでカタログスペックだ、と言って売りつけたメリスだが、その悪魔的な技術はまさしく驚異だった。

なにせ、背後に本物の悪魔が協賛しているのだから、当然とも言えるが。

「ですが、カタログスペックが無駄に高いマイスターの作品は注意が必要だと聞いています。性能が高すぎて使えない事がままあるそうですね、これはそれが無い傑作のようですね。」

「逆に性能が尖った奇抜な作品が妙に扱いやすいと評判ですからね。」

「実験部隊の方々も大変な苦勞をしていそうですね。」

こんな無駄話をしていても、全く気付かれない。気味が悪いくらい高性能な逸品であった。

欠点はコストがアホみたいに高く材料が極めて貴重である事ぐらいだ。あと防御力は当然皆無である事か。

他には地味にポケットが無いから何も仕込めない。だから彼女達は

機能性重視の仕込み可能な改造白衣を纏っている。

メリスと『プロメテウス』は裏で手を組んでいる。

当然、彼はその伝手でこの一件より先にリネンの存在を知っていた。

彼はこの騒動の犯人がどこの誰か始めから知っていたのである。

それどころか、『プロメテウス』と通じている『パラノイア』や、その『パラノイア』に彼女に恩が有るギリシアにまで手を回していた。そうして、仮にリネンをどうするか決議を取る時に有利になるようにあらかじめしていたのである。

だから不自然にギリシアが登場したり、『カーディナル』に敵対して居るはずの『パラノイア』が“議会”に現れたのである。

『マスターロード』は当然リネンの味方をするだろうし、メリスは『盟主』から『ヒブリオマニア』を代役に抜擢しているので、始めから出来レースだったと言える。

それくらい、あの場はどろっ泥だったのである。

「ターゲット“コードF”の前に到着しました、これより突入します。」

そして、侵入者たちはある一室の前に到着した。

人間には読めない言語がみっちり壁に刻まれ、封印されている一室だった。

シンシアはその言語をノートパソコンに備え付けられている小型カメラでスキャンすると、妖精の国で使われていると言う妖精言語だと検索の結果がでた。

力ある文字の代表であるルーンのように、文字そのものが神秘を秘めている。

「さすが『魔導老』。妖精言語を完璧に解読しているようですね。そこには確かに理解している者にしかできない規則性があった。妖精のような気まぐれな連中が、ここまでできっちり封印をしないだろうから、それは間違いないだろうと推測される。」

「博士からメッセージです。気に入らないから爆破しろとのことです。」

「了解、爆破して突破します。」  
そう言つて、顔色一つ変えることなくシンシアたちはC4爆弾を壁に設置していく。  
傍から見てかなりシニールな光景だった。

「演算完了しました。準備オーケーです。」  
「了解、爆破します。」  
ノートパソコンでタイピングしていた部下の報告を受けて、シンシアがスイッチを押した。

どかん、と爆音と共に壁が崩れた……りはしなかった。

爆発はした。しかし、振動も閃光も爆音も爆炎も、完璧に制御され  
消去された。

ただ、壁を破壊すると言う目的だけを達成させて。

そして、嚴重に封印されていた壁の中は、  
子供部屋だった。

少なくとも、子供部屋と称するに必要なものは殆ど揃っていた。  
絵本にぬいぐるみ、カラフルなボール等などの無数のオモチャ。子  
供の感受性を高め、育む為の無数の品々が無秩序に散らばっていた。

「おねえさんたち、だあれ？」

そしてその中心に、まだ十にも満たないだろう幼い少女が居た。

鈴を転がしたように響く可愛らしい涼やかな声は、将来の美声を約  
束している。

まるで日の光を一度も浴びた事など無いような絹のように色白でマ  
シユマロのように柔らかさそうな肌には、白い肌着が一枚だけだった。  
部屋の隅には豪華で煌びやかな衣服が有るにも拘らずである。

日の光に当たれば輝くだろう色素が薄めのプラチナブロンドが腰ま  
で伸びている。

全体的に少女は浮世離れた儂さを持っていた。一枚の絵画に収め  
ても良いほど、少女は愛らしく、この年で魔性の近い魅力を兼ね備  
えていた。

ほぼ完全に機械で精神を制御されているはずのシンシアたちが、突入を一瞬ためらったほどである。

その姿はまるで妖精のようで、妖精が自分たちの仲間だと勘違いして攫ってしまわれても可笑しくないほど、彼女は存在が儂く美しく希薄だった。

逆に言えば、同じ人間とは思えないほどの美しさだった。

「・・・間違いない、彼女です。」

確認するまでもなくシンシアは確信した。

彼女こそ、『魔導老』と同じ魂を持つ少女だと。

『恐らく、資質としては老より上だろうな。』

勝手にシンシアのノートパソコンの通信を使って『プロメテウス』が口出ししてきた。

『老が生まれ育ったのは自然環境が壊滅し、荒廃した星だ。

彼ほどの才能を持ってしても、そんな環境では妖精や精霊の祝福を受けられまい。その点、彼女は生まれながらにして妖精の祝福を受けて誕生したようだ。この差は大きい。

彼女は恐らく、いや必ず老を超える精霊魔術の使い手になるだろう。なるほど、道理ですぐに殺さぬ訳だ。この才能を摘み取るには惜しいと見たか。生かしておけばいずれ自らを脅かすだろうに、見上げた『盟主』への忠誠心だ。すぐにでも確保しろ。』

「了解しました。」

シンシアが了承の意を返すと、通信は途切れた。

「あれ、いまおとこのひとの声がしたよね!! どこにいるの!?!  
ねえねえかくれてないで、お話ししようよ!!」

深海のように無垢なグレーの瞳がきよろきよろと周りに散らばる。

ギリシアの女神アテネが持っていたとされる海のような輝くグレーの瞳にはただ無垢なだけではなく確固たる知性すら感じられる。  
事実、ほぼ完ぺきなはずのステルススーツを身につけている彼女達の姿が、この幼い少女には見えているようだった。

正面から見詰められたら、自分たちの行おうとしている所業を見透かされるようで、シンシアは顔を逸らしながら彼女に近づいた。

「ちょっと待って下さい、彼女の近くに多数の高次自然情報思念体の反応が!?!」

詰まるところ、妖精が彼女の近くにいっぱい居ると言っている。

この部下の報告を聞いて、シンシアは足を止めた。

妖精なんて、今時絵本とかで可愛らしく表現されているが、日本や中国での言い方は妖怪や魔物である。妖魔と言いつても良い。

昨今の自然環境の数を減らしているが、その多くがこの“本部”に保護されていると言う。

当然、その担当は『魔導老』である。

その性質は気まぐれで、人間に味方する事があるがその伝承の多くは人間に害をなしている。彼女達は悪戯程度にしか思っていないだろうが、その大抵が洒落にならない危険が伴っている。

彼女達は誤って人間を殺しても、人が蟻を一匹踏み潰してしまった程度にしか思わないのだろう。故に人間にそれを責める資格は無い。

「シャンテ、児童保育プログラムのダウンロードを……。」

「は？」

「こちらから踏み込むのは危険です。少女の方からこちらに来てもらうのです。」

「……了解。」

若干躊躇ったものの、部下はシンシアの指示に従った。

「ねえねえ、おねーさんたち、どこからきたのー？」

しかし、そんな余計な手間を掛けることなく、少女は立ち上がってシンシアの方に歩いて来た。

「………」

何と言いつ返せば良いのかわからないシンシアは思わず思考の為に全身の動きが停止してしまった。

こんな状況に対応するマニュアルなんて彼女の知識に無いのである。

「あー、それより、ちゃんとドアかはいらないとだめなんだよー。」

もうだめなんだからー、おじちゃんにおこられてもしらないんだからねー。」

唯一の出入り口であるドアを指差しながら、少女はそう言った。

ただ、壁以上のガチガチに封印が施されており、そう簡単に開くはずもない。

「お、お嬢ちゃんのお名前はなになかな・・・？」  
シンシアはしばらく動かしていない顔の筋肉を動かして何とか作り笑いを浮かべて、そう少女に問うた。

「うーん、わかなんない。きがついたら、ここにいたから。なんにも知らない」

そこには明らかに記憶消去がされた人間特有の返答があった。

魔術で記憶を消された人間が自分の事を尋ねられると、自分に残っている一番古い途切れた記憶に関することを口にする傾向が有るのだ。

容姿からしてロシア系だろうが、その真偽は永遠に不明だろう。

この少女に、もはや過去は無いのだろう。

『魔導老』が妖精を介してチェンジリングを行われているだろうし、そうなれば地上でこの少女を覚えている人間は居なくなる。

そこまで徹底されているだろう。

しかし、そんなことに同情する暇は無い。

シンシアは近づいてきたのを良い事に、ゆっくりと隙を窺って彼女を捕まえようと手を広げた。

「うーん、なまえなまえ、そう言えば、きにしたことなかったなあ。ねえねえ、みんな。わたしのおなまえ、いつたいなにがいいとおもっ？」

すると、少女は振り返ってピョンと延ばされたシンシアの手からすり抜けるようにジャンプした。



「うんうん、うんうん、・・・うーん、じゃあ、それ、ミネルヴァがいい。なんかいちばんカワイイからそれにするー。」  
魔術的にはこれ以上無くの確だが、ミネルヴァが一番可愛いという時点で妖精のセンスが窺い知れるというものだったが、妖精の観測が出来ないシンシアにはどうでもいい話だった。

「ねえ、それより、わたしお外いきたい。」

「え?」

「おじちゃんって、ときどきわたしをお外にだしてくれるけど、それがいずーっと、おへやのなかにいないとダメだっていうんだよ。みんなはそんなことしなくてもいいんだっていうから、わたしもお外でいっぱいみんなであそびたい。」  
どうやら長らく軟禁されているらしく、ミネルヴァと名乗る事にしたらしい少女はぶんすかと頬を膨らませて不満を口にした。

「じゃあ、お姉さんと一緒にお外に遊びに行こうか?」  
精一杯明るく振る舞って、シンシアはそう言った。

「うん、でも・・・。」

「でも・・・?」

「でも、おじちゃんが言ったの。おじちゃんいがかきても、だれのいうこともきいちゃダメだって。どうしようかなあ・・・。」

「私じゃなくて、お嬢ちゃんが言いだしただから良いんじゃないかしら?」

「あ、そうだね。そうだったね!」

子供は単純で助かる、とシンシアは安堵の息を漏らした。

すると、少女ミネルヴァは目を急に輝かせて床に落ちている絵本を開いた。

「すごい、すごい！ おっきなドラゴンさんだあ！！」

その意図がその場にいた誰かに伝わる前に、ぐしゃりという音が響いた。

鮮血が飛び散る。

振り返ると、シンシアの部下の一人の頭をスイカのように掌で粉砕した『マスターロード』が居た。

「菓子の駄賃代わりにネズミの駆除をしてやろうと思ったら、老の屋敷にはとんだネズミも居たものだなあ。」

彼は人差し指を立てて無造作に腕を振るっただけで、もう一人の部下が真っ二つに切断された。

「本当の強者は弱者相手に滅多に力を振るったりしないものだが、どうしてか分かるか？ 安易に力を見せびらかすのは子供だからだ。子供はいかな強大な力を持っていても、弱く見える。」  
二人の部下の犠牲を経て、残った三人は意思疎通を終えた。  
終えて、三人目の部下の胸部に穴が開いた。

「おや、ネズミがこの私に挑むか。」

四人目の部下が、シンシアの盾になるべく『マスターロード』の前

に出た。

直後に、一番無残に彼女は死んだ。上半身が木端微塵になり、血の噴水となった。

あまりに一方的過ぎて、どうしてそうなったか誰も理解できなかった。

「わあ、まつかだね！！ でも、このあかい水のおいヤダ。」  
幼い少女には人の死を理解できないようだった。

無邪気に、笑う。だが血しぶきで汚れた顔には、僅かに不快そうな表情が浮かんだ。

「作戦、失敗……無念です。」

もはやこれまでと、シンシアは白衣の胸ポケットの中に入れてあった転移呪符を使用した。

一瞬で転移呪符が燃え尽き、シンシアの体が掻き消えた。

「ふん、ネズミの親玉よろしく伝える。」

その一瞬だけでシンシアを余裕で殺害できたという態度で『マスターロード』は、鼻を鳴らしてそう言った。

事実、振り上げた彼の手は邪魔が入って振り下ろせなかった。

心臓をぶち抜かれて即死したはずの、シャンテと呼ばれていたシンシアの部下の一人が『マスターロード』に触れずに彼の手を遮っていた。

それは彼女達の使う物理魔術とは原理そのものが違う、呪術の類だった。

「まさかこんなところでお目に掛かるとはな。」

「うひひひひ……」

先ほどまでの一切感情が浮かんでいなかったのが嘘のように、彼女は不気味でおぞましいとすら思える笑みを湛えていた。

それこそ、男を誑かす為に本性を隠していた毒婦のように。

次の瞬間、景観が色褪せる。

世界が二人だけを切り離れたかのように、止った。

「東欧最悪と謳われた魔女『パラノイア』。貴様も老に牙向くか。」

「まさか……。『プロメテウス』には借りがあるからねえ。あれのお陰で面白いものが作る事が出来た。」

「ほう？　なんだそれは。」

探りを入れることなく、『マスターロード』は問うた。

「地上最強の劇毒だよ。」

「最強の毒だと？　ヒュドラの毒でも再現できたのか？」

「あんたは知らないだろうけれど、地上の人間は資産を情報に変えるのさ。それを壊す情報の海に垂らす一滴の毒が齎す被害は、前に作ったペストの比ではないでしょうからねえ。」

何が可笑しいのか、そんな悪魔のような事を口にして笑う『パラノイア』。

死人を動かすのも、赤の他人に自分の魔術を使わせるのも、彼女にとっては造作もない。むしろ得意分野なのだ。

彼女曰く、本当の死は肉体的や精神的な死ではなく、誰の記憶にも残らない事である、と語る。

悪名高き『パラノイア』のもう一つの二つ名でもある秘術、スプリット『精神感染』は、自身の精神の鏡像を作り、それを他人の精神に刷り込ませる魔術。

魔術の制御は精神で行うのだから、それはただの一般人をある日突然に魔術の達人にさせることも可能である。

それはあたかも自身の心の中にもう一人の自分として現れ、“二重人格”として人知れず地上で蔓延している。

そうやって、彼女は己の叡智を受け継ぐに相応しい弟子を探している。同時に、彼女は人間の心の中に永遠に存在し続け、ある種の不死を体得していた。

そこに彼女自身の人格は考慮されてはいない。感染した人間の精神と一体化する為、残るのは魔導師としての最高位の技術だけなのだ。そこまでして、彼女は彼女の言う死から逃れている。

この世界に亡霊として存在し続けている。

そしてこの秘術は、最近魔導師となったギリシアにも影響を受けていると言いつつ。

『プロメテウス』はその力を利用し、優秀な魔術師を量産する計画を思い付き、彼女がそれに乗った。

だからやるうと思えば、今逃げたシンシアだって、今はエクレシアの隣に居るだろっアビゲイルだろっ、一瞬で自分の支配下に置ける。

そんな危険性を承知の上で『プロメテウス』は彼女達を運用しているのだから、何を考えているのか分からないと言われても仕方が無い男である。

「ふん、舐めるなよ。知っているぞ。こんぴゅーたういるす、とか言う奴だろっ。地上に放った間諜から聞いて、我々も一部こんぴゅーたを導入しているのだ。」

「くひひひ。まあ、お互い利用しあっているだけだがね。それでも良い研究は出来た。色々と面白い結果も得られたしねえ。」  
むしろそれ以外の関係が想像できない両者だが、そんな無粋は言うまい。

「まあ、今日の所はお前さんと話が出来て良かったということにしておこうか。なるほど、魔族か。その手が有ったなあ……くく。」

そうして、不吉な言葉を残して、『パラノイア』は去った。

ばかり、ただの死体だけがその場に転がった。

色褪せていた世界も、すぐに色彩を帯びて時間が動き出す。

「きゃー!!! すごい、ほんものだ、ほんもののドラゴンさんだあ  
!!!!」  
目の前で惨劇が繰り広げられたと言うのに、少女ミネルヴァはぴよ  
んぴよんと跳び跳ねて『マスターロード』の方に駆けよっていく。  
周囲の妖精が「危ないからやめた方がよいよ」とか言っているのに、  
まるで意に介した様子が無い。

「なんだ、このガキは。老の隠し子か？」

「ドラゴンさんドラゴンさん、でもこのまっかなお水、くさいから  
お風呂にはいらないとだめだよ」。でも、よくみるとこのドラゴン  
さん、ごほんのよりちっちゃいかも。あしで立ってるし」

「誰がちっちゃいだと!? 我こそは由緒あるドレイクの、って、  
角に触るな!!!」

百二十センチくらい少女がぴよんぴよんとジャンプして、身長二  
メートルを軽く超えている『マスターロード』の額にある角に触る  
のは並大抵ではないのだが、彼は煩わしそうに少女を振り払う。

しかし、『マスターロード』の腕で視界が一瞬少女の姿が遮られる  
と、その刹那に少女は壊れた壁から羽根でも生えているかのような  
身軽さでぴよんぴよんとスキップしながら消え去った。

「なんだ、あのガキ……。」

『魔導老』の失敗は、『マスターロード』にあの少女の事を伝えて  
いなかった、ただその一言に尽きた。

流石の彼も、他人に自らの急所を教えることはしなかったのである。

そして、なぜか『魔導老』はその急所がどこかに行っても探す事などせずに静観の構えを取ったのである。

「そんなに大事なものなら、事前に私に言っておけば良いものを。」  
事情を聞いた『マスターロード』はそう不満そうに語った。

「例えば貴様は魔剣グラムを隠していて、それをこの私に教えたりするのか？」

「ないな。絶対にないな。」

「だろう？」

そう言う事であった。

「ではなぜ追わない？ 自らの心臓が独り歩きしているのだぞ。追うのが当然ではないか。」

「いつも思うが、貴様はいつも当たり前のことを当たり前のように言うのだな、その性格、少し羨ましいぞ。」

「私は生まれながらの強者だ。弱者と違って何一つ偽る必要が無いのだ。弱者の策を堂々と粉碎し、姦計を踏みつぶす。それに、私は自身の頭脳を駆使してまで殺したいと言う敵についぞ会っていない。慢心していて当然なのだよ。」

『マスターロード』は堂々とそう言い放った。右手にスフレが乗ったスプーンが無ければ格好よさ二倍になっていたかもしれない。



「では私が敵になったらどうする？」

「それはそれは楽しい戦争が出来るだろうな。老と心行くまで殺し合いに興じるのも実に面白いだろうな。その際は部下総勢でお相手させてもらおうか。」

それより話を逸らすな。私の質問に答える。」

「うむ、では答えるか。」

わざわざ勿体ぶるような態度でハーブティを口に運んでから、たっぷり時間を掛けて『魔導老』は答えを口にした。

「実はな。」

「うむ。」

「まだ何も考えていないだけなのだ。」

「ううむ、・・・なに？」

驚いたように『マスターロード』は『魔導老』を見た。

「聡明な老がまだ何一つ手を打っていないと言うのか？」

「逆だな、捕まえる手立てが無いから手を打つ意味が無いのだ。」

「なぜだ？ 相手は所詮ガキだろう。」

「ここに来るまではな。彼女はここ来て十以上妖精と無意識に契約を交わしている。いや、妖精が勝手に将来有望な子供に唾を付けたと言った方が良いか。」

もはや彼女は妖精の仲間だ。そんな存在をどうやって捕えろと言うのだ。彼女はひとつの“森”として機能し、周囲の精霊が無条件で手を貸すだろう。」

そして周囲の妖精はそんな都合のいい存在が連れ戻されることに許すはずもない。

なぜなら、多くの森の妖精とは森が無いと存在できないからだ。

そこで妖精たちは、人間と契約して森として機能させることで、森の無い都会での行動をも可能とする事が出来る。ある種の寄生である。

その為には十分な資質が必要だ。そして、十以上の妖精を受け入れるキャパシティは異常であり、もはや森と言うよりアマゾンの樹海というレベルである。

今の彼女の捉えると言う事は、アマゾンの樹海に足を踏み言ってそこに住む過酷な環境に一人立ち向かうのと同義になる。

それに自然を操る妖精が十以上も味方しているのだから、手に負えない。

「幾ら老とて、妖精を縛る事は出来ないか。」

「彼女らと友好を築くには、ある程度の悪戯には目を瞑るしかないのだよ。彼女らにはここに居てもらっているのだから。」

連中と付き合っていれば菩薩のようにどこまでも寛容になれるぞ。はあ、と『魔導老』の表情には一種の諦めさえ浮かんでいる。

精霊宮での損害の収支の九割が彼女らの悪戯なのだから、諦念の一つや二つも浮かんでくると言うものだろう。

「では、結局何もしないのか？」

「私にでさえどうにもできないのだ、誰にもあれをどうこう出来るはずもあるまい。それに私は思うのだよ。彼女は必ずここに帰ってくるよね。」

「ほう、老の直感は予知レベルだからな。老がそう言うのならそうなのだろう。」

「彼女がいずれ己の力を自覚した時、頼るのは私以外あるまい。その為の楔は既に打ち込んである。逃れられぬよ。彼女は自らを縛る運命からはな。」

「魔術師は運命という言葉を嫌うのではなかったか？」

「彼女は凡庸で雑多な有象無象とは訳が違う。自らの意思で運命に影響を与えられる才能を持っている。それなのに運命を嫌う理由がどこにあるというのだ？」

「なるほどな。」

納得したと言う風に『マスターロード』は頷いた。

「つくづく、魔術とは人間如きには荷が勝ちすぎる代物だと言う事だな。」

「そう。人は人以上の力を得てはいけないのだよ。それ以上を望む事を本来は許されない。だが、そこから逸脱する術を知ってしまったばかりに、愚かな人間が増えてしまったのだよ。」

哀れだよ、と『魔導老』は嗤った。

「この世には、自分たちが踏みつぶされる蟻だと分かっている人間ばかりだ。」

自分たちがヒエラルキーから逸脱した存在だと過信している。その三角錐は、人の序列としても存在していると言うのにな。」

千年もの間、この世界を見て来た男はそう呟いて目を閉じた。

その逡巡の間に彼の頭で一体何がめぐっているのか、計り知れる人間は居ない。

「さて、そろそろ“議会”の時間だ。行くでしょうか。」

「うむ。茶番を始めに行くでしょう。」

そして場面は移る。

「きゃああああー！！　すごいすごい！！　ドラゴンさんだ、本物のドラゴンさんだッ!？」

まんまと精霊宮から逃げ出した少女は、きゃぴきゃぴと大はしゃぎで騒いでいた。

なぜかと言うと、先ほどファニーが現れたからである。

まさに己は大怪獣だと言わんばかりに破壊を巻き散らかしているファニーに、まるで物怖じしない少女はやはり将来は大物になるだろう。

間近で竜の咆哮を聞いているはずなのに、けろりとしている。

普通なら大の大人でも震えあがって足がすくみ、立っていることから困難なはずである。至近距離で咆哮を受けた騎士団たちは精神防護が有るはずなのに大半が気絶していたというのに。

楽しそうに歓声すら挙げている。

彼女の周囲は魔界の瘴気を寄せ付けず、完全な清浄に保たれている。無垢もここまで行くと思かさえ備えているものだが、彼女は悪魔には一切関わろうとはしなかった。それどころか、清浄な空気を纏っている故に目立つはずなのだが、悪魔に遭遇すらしめない。無知蒙昧でも害意には敏感な様子だった。

「ねえねえ、マジでヤバいから逃げようよ。ホントシャレにならないから。」

「そうだよそうだよ、あれはヤバいから、逃げよ、逃げよ!!!」  
その奔放さは、本来自由気ままな彼女に憑いている妖精が涙目になって逆に翻弄されているほどである。

「えー、でも、ドラゴンさんだよ？ もうごほんのなかにしかないないんでしょ？」

「そうだけどー。そう言う場合じゃないって。」  
一般的にフェアリーと称される分かりやすいイメージが普及している妖精が、何とか思いとどまらせようと説得を試みる。

このままではエンシエントドラゴンに突撃してしまいそうな勢いだっただけだ。

「うんうん、外がこんなになってるなんて部屋の中に居るんじゃないからなかったけれど、これは本気でマズイって、こちらで守れるのも限度が有るんだからね？」

比較的に真面目らしいフェアリーが不服そうにしている少女に言い聞かせるようにそう言った。

身長三十センチくらいしかないフェアリーが四倍は大きい少女にそ

んな風に言う光景はなかなかファンシーで微笑ましい光景だった。

「でも、ぶつちやけあたしには関係なくね？」

「だよねー。巻き添えにならないくらいに離れてりや大丈夫っしょ、最悪あの人に頼んで見逃してもらえば良いし。」

パツクやピクシーなどと称される妖精が、あるうことかそんな事を言った。

妖精に掛ければ天下の邪竜もあの人扱いである。

「さんせー、さんせー、あたし、あの人の肩に乗って遊びたいですー！」

説得していないもう一人のフェアリーが手を挙げて大声で言った。

「あ、それたのしそー!!」

そんな彼女の提案に、少女は目を輝かせた。

少女はファニーが高い建物ぐらいにしか思っていないのか、彼の肩の高さから地上を見下ろす面白さに思い馳せている様子だった。

「えー、ヤダよ、あそこ絶対熱いじゃん。あたし燃えるのとか勘弁だよ。」

そこに草花を起源とするフェアリーが顔を顰めた。

「どーかん。つーか、なんか目が逝っちゃってる人間と戦ってるじゃない、あの人。そんなのに巻き込まれるの嫌だよ、わたし。」

更にもう一体のフェアリーが文句を言いだした。

こんな感じで妖精たちは全くまとまりが無い連中だった。

「ねえねえ、いっぱい人が固まってるところ見つけたよ。なんか悪戯したら面白そうな感じ。」  
そんな感じでわいわいやっていると、一匹のフェアリーが向こうから跳んできた。

とても子供らしく純粹に悪い笑みを浮かべていた。

すると、たった今までごちゃごちゃと論争していた妖精たちが、一斉に嫌らしい不敵な笑みを浮かべた。

もう彼らの頭にはファニーで遊ぶことなんてどっかに言っつて、バカみたいに集まってる人間達にどう悪戯を仕掛けるか知能の全てを費やしていることだろう。

「うーん、みんなやりたいこときまったならそれにしようか。」  
自由奔放に見えて少女は皆の意見を聞くようだった。自分より小さいからお姉さんぶってるのかもしれない。  
しかしここに居る妖精たちは殆どが有史以前から存在して居たりする。

彼女らは森と共に生き、森と共に消えて行く。

「じゃ、れつつらー!!」

妖精スプライトが巻き起こした風が、吹き荒ぶ。

釣られるように砂塵が巻き起こった頃には、そこには誰も居なくなつた。

「きゃー！！　ここあのひとの近くじゃない！！」  
騙された、と言わんばかりにぶるぶる震える花の妖精がいた。  
時折風が吹いて火の粉が飛んでくるくらい、ファニーに近い場所だった。

「だからあの人と遊ぶのと、人間で遊ぶの、どっちもできる場所に来たのよ。」

へへん、としたり顔のSpriteがそう言った。

彼女の言うとおり、丁度すぐそこに昇降魔法陣があり、魔術師たちがなんとか動かそうと四苦八苦している様子が見て取れる。

「とりあえず、あの魔法陣を動かして超スピードで天井にどっかーんでぶついたりするのなんて面白そうじゃない？」

「それ前やったじゃない。地面をずーんと地盤ごと引き下げて斜めにして転がり落とすのが良いと思うわ。」

「いやいや、ここはあの人を呼んできて人間達が慌てふためき驚く姿をね・・・」

他人が聞けば涙が出るほど鬼畜な悪だくみを提案しながら、妖精たちは論議を重ねて行く。

「ねえねえ、それよりあの子・・・」

「ん？」

「ん？」

「んんう？」

ふと気付くと、少女ミネルヴァが居なくなっていた。



と言うより、妖精たちはどんな悪戯をするか熱中しすぎていて、彼女が「こんな所に居るのは危険です！！」とわざわざ大声で警告してきた自らのリスクに省みず保護しに跳んできたエクレスシアに連れ行かれたことなど全く気付いていなかっただけである。

「……………ええ〜」

「……………私らからあいつを攫うとか、いい度胸じゃん。」

そんな一部始終を聞かされた妖精たちは十人十色の反応を見せていた。

「つーか、いつの間にか人間達居なくなってるし。」

やる気が萎えたと言わんばかりに地面にへたり込むフェアリーが一匹。

「それより、私たちの大事なあいつが居なくなっちゃったじゃない！！ 取り戻さないと！！」

「そうよねえ、あんな逸材、もう出会えないかもだしー。」

「んじゃ、取り戻しに行こうか。」

そればかりはまとまりのない妖精たちもあっさりと決まった。

そして、妖精たちは輪になってくると飛び回り始めた。

くるくると、くるくると、古来より様々な伝承を持って言い伝えられてきた妖精の輪が、魔力の円環となって集束していく。

彼女達は、そうしているうちにフツと消えた。

一説には妖精の国へと通じると言われる魔力の痕跡だけが残り、明日には菌の輪となりキノコが生えてくることだろう。

### 第三十三話 妖精少女（後書き）

忙しいんですが、はかどらないので書いた。反省はしてない。

思いのほか長くなってしまいました。なるべく短くまとめそろそろ主人公の方に視点移動したいところでしたけれど。

それにしても、前書きが長すぎたかなとちょっと反省。あの人の台詞は書いてると次々でちゃうのですよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6851t/>

---

魔族の掟

2012年1月12日02時47分発行